PL
755
.35
S5
v.10

Shin gunsho ruiju

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

河内枚方高氏湘園架蔵之印

新群書類従

第十

PL
755
.35
S5
v.10

UNIVERSITY OF TORONTO
JAN 27 1964
East Asiatic Studies Library

狂歌は我邦文學の一大分科にして、古くは和歌の一體なりしが、足利氏末葉の頃よりして漸く別立せんとするの勢を示し、徳川氏の時に至りては、終に和歌俳諧と共に詞壇を三分して其の一を有つの狀をなせり。卜養未得の徒、信海貞柳の輩の起るに及んで、枝葉漸く茂盛し、蜀山菅江橘洲飯盛金埒岡持等の出づるに至つて、瑛花瑤葩一時に煥發するの觀あり。眞顏菅根等以下、風體また變じ、懸泉の下流、竟に波恬瀾靜に歸し、而して後狂歌復振はず。然りと雖も曉月坊雄長老等より、降つて明治に至るまで、其間數百年滔々として流れて盡きざる狂歌の一派、また長遠なりと云ふ可し。本卷收むるところ部を分つ三。曰く總集、曰く別集、曰く雜。總集先づ古今夷曲集を採る。古今夷曲集は生白堂行風の撰するところにかゝり、寛文五年に成る。狂歌の撰、蓋し此を以て嚆矢とす。次に後撰夷曲集を採る。此

亦行風の撰するところ、古今夷曲集と共に、當時狂歌の馬群を空しうするものなり。次に天明三年四方赤良等撰するところの萬載狂歌集、天明四年朱樂菅江四方赤良等撰するところの狂言鶯蛙集、即ち故混馬鹿集、天明五年四方赤良等撰するところ德和歌後萬載集、天明七年四方赤良等撰するところの才藏集、及びやゝ降りて文化七年完成するところの宿屋飯盛が撰にかゝる萬代狂歌集を收めんと欲す。たゞ萬載集及び才藏集は近者名著文庫の收錄する所となり、萬代集は卷帙過豐なるを以て之を省く。此等皆京阪の狂歌と系統を異にせる江戶狂歌の高潮たる所謂天明調の代表たるべきものなり。別集は慶安年中石田未得が著すところの吾吟我集、寛文年中半井卜養著はすところの卜養狂歌集、元祿元年を以て死したる寶藏坊信海詠ずるところの鳩杖集、信海の弟子永田貞柳の貞柳家土產、享和二年に成れる小島橘洲の醉竹集、石川雅望即ち宿屋飯

盛が六樹園家集、山崎景貫即ち朱樂菅江が朱樂館家集、大坂屋甚兵衞即ち馬塲金埒が滄洲樓家集を收む。此等の中、六樹園、朱樂館、滄洲樓三家の集は世に成書有るにあらず、實に友人野崎左文子が手錄にかゝり、猶未だ人に示すに足らずとして子の固辭するを强ひて公にせるなり。天明各家の集を收むるに當りて太田覃即ち蜀山人の集を收めざるは、其の愚なること唐詩を錄して李杜を遺るゝに同じけれども、千紫萬紅及び萬紅千紫は、流布周洽、家藏戸夌に近きを以て特に之を省けり。文化十一年に成れる平澤平角即ち手柄岡持が家集我おもしろも亦流布甚だ廣きを以て取らず。北川嘉兵衞即ち狂歌堂眞顔の蘆荻集は之を收むるを欲せざるにあらざるも卷數多きに過ぐるを以て收むる能はずして省けり。雜部收むるところ曉月坊詠ずるところころころとして傳ふる酒百首、蜀山人のめでた百首、金埒の仙臺百首、蔦唐丸が催せる百鬼夜狂、飯盛が判せる飲食狂

歌合等六種を併せて三部通計十七種、未だ必らずしも狂歌の鱗羽を網羅し盡さずと雖も、蓋し既に龍鳳を逸せざるに近し。此卷希覯の書を刊せずして、敢て鳴世の著を輯むるものは明治以降古籍の新刻甚だ多しと雖も、未だ嘗て狂歌の書を輯刊せるものあるを聞かざれば、先づ其の殘山剩水を顧みずして五嶽四瀆を談ぜんと欲するが爲のみ。

戊申暮春　　幸田露伴識

新群書類從第十目次

狂歌

古今夷曲集……一
後撰夷曲集……七七
狂言鶯蛙集……一八九
德和歌後萬載集……二六一
吾吟我集……三一九
卜養狂歌集……三五八
狂歌鳩杖集……三八四
家土產……三九六
狂歌醉竹集……四一一

六樹園家集……四四四

朱樂館家集……四六一

滄洲樓家集……四七三

狂歌酒百首……四八一

めでた百首夷歌……四八六

仙臺百首……四九三

夷歌百鬼夜狂……五〇一

飲食狂歌合……五一四

目次終

新群書類從第十

狂歌

古今夷曲集序

四角柱やかどらしや角のないこそそゝひよけれむかし〳〵いふにいへぬ物の中より丸きもの丶一つおいて二つになり三ッになりし時より夷曲歌は始れりけり今狂歌といふなるべし歌は人の心を種としてことの葉しげりそふものなれば只情の丸いがよいとなり先天照太神の御宮居は丸木をもて造れり諸々の御社にも鏡をかけらるゝは丸うて空うてよろづ直に移るを見せしめたまふなるべし我國は國津神の御國なれば春の神をむかふるにも鏡餅とて第一丸きをぞ用ふなる草のもち粽などいふは有爲の色相を顯はすならん任地花の香に馴し衣を返し單も袷のうら盆になればおのこ童は山寺の御兒縮折から攝待の茶筅髮にゆひなしどもどちこよとて小手招くしかも明衣の廣袖を着未通女らは髮の髮の短ぬの嶋田わげ夕風の吹返しにゆひていざおどろといふより手拍子とり足どりする十五夜の月の輪の如くにこそはをどれ小夜風に行かふ袖の移り香は浮たる戀のしるべにてしのゝ小篠のしのび〳〵にいひよりいつしか睦しき中となり末の松山さゝら波はこすともと誓ひ戯るゝあまりに一本方一本めあの御のさへ女がゆく〳〵一本らおめもとの入はしやうやうれをそちが報ふてなにせうぞなど左禮が實になりあは緒も今は片糸の此方彼方に引別るゝを妹背山の中に芳野の川のよしやといへど印南野のいなといふ諫むるに猶口舌たら〳〵なりければそちも斷りこちも然なりと蠟虎の皮のやうにもてなすを諸共にそこほゝゑめはさればこそ思ふ中の小闘諍詞の花をちらすのみ根葉はあらじ先盃をさすが石木にあられ酒心よはくもの跡をばえ申まいしやんとさゝせられよと女かたへ戻させこれより五百八十年さ祝ふを丸うなつたといひ一國一家のわれて齋ふるも又々かくいふべしまいて佛の道には丸の中に心といふ文字を書て身の一大事を觀し知るとなれどこちやしらぬ生死山の蚣か知た生死抑心を丸うするには和歌にしくはなしときけどその

様優ならんとすれば心たらずゑんなるは獺のたはれおのたはれ過つよきは片田舍の者の物いふに似てなつかしげなく鑽ば石より堅く頭をふりあふぎみれば須彌の山より高しとなればくれだる後等の學ばんには水の月を望める獣にことならざるべしさらば鉋をもてやまはさん小刀にてや削りなさんあらす形なき心なればさは徒なるべしいなかにも狂歌をもてあそびね此歌久堅の天にしては下照姫に始れりしゞ荒鐵の地にしてはすさのおの尊三十文字あまり一もじによみたまひてぞ和歌となれりけるしかはあれども人の代となりても聖徳太子此様を捨給はざりけらしいはく釋氏に西方の教をのべ聖の道に不屑のいさめあるがごとくなるべしそれより後は文字の數和歌を移す物から猶しれたることのみもてつづくるとはいへど折にふれ事に望てまれ〳〵よめりしをきぶき數寄者ら出來て近き代よりぞ百首二百首百首に及びてはよみけるそれが中其外こゝらの人のよめるにもあまたの病を除かず上下かけあはざるおほかり狂歌とて詞こそまけてもいはめ心は正しう身を修め國を治め爰を得彼所をしる業なればいかで妄がはしきをよしとせん思ふに心正しからぬは他を損ひ身を亡なふ佞人にひとしく病あり上下かけあはざるは盲ひ聾ひ腰曲み足たたずなどやうの片輪者に同じかるべけれと和歌の例をもて四病八病を禁る中に一際いひかなへたらん歌に輕き病はゆるす方もぞ有ける又昔し今に落書といふには勝れたる作もあれどかれは世を諷し人を誹りあるまじを物なれば是に載る事なし古くきゝ今みる歌にも事の情癖り笑種ならんを撰びあつむとはすれど末の巻にいたりては尺八竹の一よのみならず三世の佛の理もあれば巫のすゞろごとならねど詞こはく和歌にはいかにぞきこゆるをまじうる事になりぬ是おとなびたる人の爲にはあらず童べの殿のお尻からぎよの口遊を狂歌にいひかふるたよりにもとて千歌十巻なづけて古今夷曲集といふ物みな其本に還るわざなればむかしをたてる名なりけらしかくてよい春や若うならせられたと詞に花を飾りいふより本尊かけたかの鳥の聲をまち紅葉を折て簪にもし酒の燗をもし雪女ふらいふらいふる妻いとしなど戯れ春夏秋冬にいらぬ草木のえもえしらぬたは

こといひてあそぶもかしこき君の御恵み八嶋の外までの家々の諺或は頤臍の下にさがり肩は頂の上にのぼりたるやうの唐の大和の異様なる詞おさあいをあひや手打川水の阿諂いな舟の棹頭々々土佐の手手甲大和の元興寺に隠期などやうの事をもてつらねかいぢらするを見る人聞人刳ぐるよりも可笑がり咄と笑ふに罪をうしなへば自づから情の丸うなるべきよすがなるべし荘周がいへる菓三つ四つの跡先を諍ひ猿のをそろしき頬をなし羊のあゆみの近づくをもしらぬたぐひの人は己が迷ひに情を奪はれ求むとも笑ふによしなかるべしあめにます大黒の能をきくに一に俵をふまへ二ににつこと笑ひ三に三界の福珠を袋いつぱいにいれお顔の色のくろうなるまでもてありき笑ふ家には必ず來りて福をあたへ給ふ是にも三郎恵美須殿お前の海の鹽のめをし常にめでたいを抱ひて信ある者には給んとなり是を見彼をきくに機嫌よう笑ふが即ち福徳なり菩提なる事をしれと寛文五年十月一日にしるし終りぬる行風が身のをろかなるをもわすれ後の嘲りを顧みずといへどもこれを好まんものゝ爲にはいさゝかのたつきともなるべければなにはのよしあしのふし／＼眞薦草のかりにも翫び猶形にそへる影法師の如く身をはなたずなれゆかばをかしき色の情にぞみつゝ夷歌ときくに笑ふなかたちともなれとなり梅といへば口に酢たまり若參の咄しには顔をしかむるなれば十王の口澄だ貌天狗のはなたかう慢するものも此歌をきゝもしよみもせば阿々々とこそあらずとも屈々とは云べし現在の果にてきしかたゆくするをしるといへば此わざを忘れず今より終の夕べまでも腹たてずの正直坊笑ふのみならば情の角菱の病ひひしひしと癒え眞丸になりなん後人仁といふこゝろを持薬に用ゐば彼笑ひ佛とやらんにならざらめかも

古今夷曲集巻第一

春歌

ふる年に春立ける日詠る　源重秀朝臣
本歌アリ
年の内の春の小袖は一しほの
　淺黄とやせんこ染とやせん

春たちける日よみ侍りし　行風
山眉にかすみをひきて腰すそも
　優なる春の立ちすがたかな

義綱
立そむる霞の衣のはつれ雪
　春のきにける紋所かも

正長
たばこのむ内より春は來にけらし
　烟もかすむはなのさきかな

春のはしめの歌　哥慶
本歌
春たつといふばかりにや大ぶくの
　水氣も霞て今朝は見ゆらん

滿永
ちはやふる茶筅もけさは改まり
　たつ大ふくの神のはるかな

入安
春くれば色も花香も別儀にて
　宿の大ふくたつかすみかな

春房
釣棹のたけ高からん一節を
　こゝろにねがふ和歌夷振り

一休和尚
餅つかずしめかざりせず松たてず
　かゝる家にも正月はきつ

行安
きのふ迄以の外にさぶ六の
　十八公の門のはるけさ

由貞
去年までの貧報かみこぬき捨て
　春きにけりなふくの上下

宜齋
目出度といへばめでたいと言こそ
　口眞似こまね正月のれい

次良
臘太に雑煮をくらふ人はたゞ
　腹のはるにや春をしるらん

燕石
もろ人もけふ赤子にやなりぬらん
　むつきをしきの始と祝へば

保友
本歌
年こえて花のかゞみとなる餅は
　黴かゝるをや曇るといふらん

賴智
本歌
誰をかも仕手脇にせん高砂の
　松囃子する友あまたなり

元日の霞をよめる　如風尼
九重もはるの霞のあみの目に
　風たまりてやけふ長閑なり

酉年の元日によめる　行景
水は本へ返辨申し酒の字の

作りをこりの年ぞきにける

百首歌の中に子日　玄　康

女松をば子日の友にひかれなば
陰嚢なしとて笑はれやせん

霞　貞　德

膩(なま)そうで奇麗なものは歌人の
口にかゝれる山のは霞

題しらす　法心上人

足なくて雲のはしるもあやしきに
何をふまへてかすみ立らん

百首歌の中に鶯　玄　康

法華經ぞ小鳥の中でうぐひすは
最第一のはつ音なりけり

貞　德

錢かねでねをさすならば鶯の
ほう法華經も一ぶ八くわん

行　安

ほそ〴〵と鳴鶯の初音には
朝とうまるも及ばざりけり

宗　俊

梅かえはそなたのえてむ樂そうに
口笛なるかやようくひす

若菜のうた　來　焉

籠を手に提つかゝへつ名にめてゝ
鶯菜をやつみて入らん

百首歌の中に　入　安

よもすから叩くは唐土の鳥ならで
日本の人のくひななりけり

懸想文をよめる　貞　德

いふ事をきけば腹いたむく〴〵と
臍の下までけさう文かな

万歳をよめる　不　白

万歳の祝ひとならば錢の數
八百八十四文やれかし

百首歌の中に殘雪　貞　德

年男あふて日數もたゝざるに
はやくもとける雪女かな

宣　相

いたゞきに尾にまた雪のむら消は
綾毛(ざらげ)のやうな生駒山かな

來　焉

ちよこ〴〵と澤邊に殘る雪はたゝ
まつしら鷺がすくんだと見る

滿　永

本歌
春日野はけふもなやきそ嫁がはぎ
まだ雪しるの妻にこもれる

題しらず　忠　精

春の日にかしらの雪げ落はてゝ
只はげ山となるうたてさよ

梅花をよみ侍りし　行　風

色に出て見ゆる女の智恵のみか
梅も諸木のはなのさきなり

百首歌の中に梅をよめる　雄長老

しう殿の秘藏の梅をかいたらば
氣條(すはえ)の先ではなやつくべき

宗　恒

秘藏せし花を一枝こうばいの
色にあか手の皮もするなり

柳のもとに梅の咲けるを見て

行風
春の日のたきものらしう梅か香を
柳の髪にとむる風の手
百首歌の中に柳　雄長老
本歌 櫻にはあらぬはるべをこきませて
枝をたれたるはこ柳かな
満永
俄にもあち東風と吹く風の手に
ひきとつらるゝ柳髪かな
題しらす　久清
春の日に蔓る木々の枝ごとに
めはなはあれど耳なしの山
百首歌の中に早蕨　淡路守宗増
山際に左義長をせし跡とめて
わらびそろ／＼もえ出にけり
春月　一圓
朧なは猶もあぢよきもち月と
おもひつかするうす霞かな
久清
照影も朧ばろ／＼ふるあめに
笠をめしぬる春のつきかな
百首歌の中に春雨　入安
なになりとこのめ春雨つれ／＼と
振舞はたゞとにもかくにも
雄長老
春雨の風にしたがふかいだうの
しるくなれ共早かはきけり
足にあかがりといふ物ありて
春もいへざりければよめる
あかがりも春は越路へかへれかし
冬こそ足のうらにありとも
或人のいはく猿丸太夫が歌なり
春草　行順
たむぽゝの花のちゝつと咲頃の
野山はやしはおもしろいなふ
小米花　未得
それは杵是は木の根にこぼれけり
小米の花の風にくだけて
沉丁花
竹垣を霞のきぬのふせごにて
匂ひをとむる沉丁花かな
花見の袖のつとふを見て　保友
本歌 見渡せば柳櫻にみやこ衆
だてこきませて行く東やま
題しらす　敎二
立よらば大木のかげの花見せん
咲ちるほどに余計ありやと
見花　春清
兒櫻や立て見居てみねて見ても
猶愛らしきはなのかほばせ
一圓
をだ巻のくるり／＼とくりかへし
みめぐりめぐる花車かな
本願寺二所の庭の花を見てよめる　宗恒
六條の染物ならぬさくらにも
おもてうらある花のいろ／＼
芳野の花見に出たつ道にてよ

める
晝食はくはずとゆかんみ吉野の　教二
花のしたにてうえ死ぬるとも

名所花　保友
櫻はな見るめについてはなれぬは
芳野うるしのあれば也けり

行風
こつきよし色は猶よし匂ひよし
已上みよしの丶花の勘定

道明
葛城や天狗のはなのそれならで
によつと高間の嶺に見えたり

行安
いつとてもよう來たとだに仰ぬは
をしほのはなで人やあしらふ

糸櫻　一圓
わけもなく只わく／＼と結ぼれし
氣も打とくるいとさくら哉

姥櫻
見ほれてはたちもえさらす花故に
腰ぬけとなる姥さくらかな

貞德
白壁をつけたる宿の庭にさく
花は豆腐のうば櫻かな

揚貴妃の名ある櫻を見て
貞淸親王
揚貴妃の花のかほよしさそな／＼
天のなしたるさくら色なり

滿永
一面に咲つゞきしは春の日の
長屋つくりの家さくらなり
せわしくも小枝かさなる軒口は
めとはなつきな家さくら哉

花下の酒宴によめる
三哲
鹽竈の花見の酒のさかなには
櫻鯛をや濱やきにせん

ちいさき花の木の枝を折れる
を見てよめる　古生
兒櫻のよろひはあれと頬當を
もたでやはなのさきを切る丶

依花恨風　行風
ともすれば花の顔さへ打ちらす
風の手くせをなほしてし哉

題しらす　宗恒
さかな舞の扇子の風もいやで候
今をさかりの花見酒には

落花をよめる　忠精
櫻はな散しく庭をはきありく
雪踏の皮に波そか丶れる

題しらす　よみ人しらす
櫃川のはたに生ひたるかば櫻
ちるもそ花のとぢめ也ける

岡部氏内膳正舘にて鯛の料理
ありけるに　重賴
本歌
雁の汁きくの酒のむ秋はあれと
春の海邊に濱やきの鯛

櫻鯛　藤原言總卿
上下にもてはやしつゝあちはふや
花も賓もあるさくら鯛とて

近江鮒　正繼
さゝ波やしがからし酢でくふ時は
たれが口にもあふみ鮒かな　淨久

題しらす
本歌
丹波山毬栗にじる秋はあれど
住吉うらの春のはまくり

帰雁　宗朋
たはけとも中〳〵いはじ明る夜の
花を見捨てかへるがんかり　行安
名殘をしく思ひまひらせ候可くを
かなに書ても歸るかりがね　致二
歸るまに古郷の花のちりたらは
あちらこちらですつかりぞせん

百首歌の中に春駒　玄康
乘とめてすそもしてまし春駒の
へうたんからや井手の玉川

苗代　貞徳
みな口をよく〳〵まつれ秋くれば
人の命をつなく苗代

蛙　滿永
水にすむ蛙かうたをよくきけば
とかく卑下なり愚意〳〵と言
　未得
くちなはの追手からめて取まけば
かはつ軍のにげ道もなし
　遠江守源經行
苗代をおとせる水に落ゆくは
軍に下手のかはつなるへし

百首歌の中に杜若　雄長老
水てとくにかはのあやめ杜若
にたりや似たりにためきにけり

躑躅　未得
咲く花の顔は上戸の色なから
名は下戸のすくもちつゝじ哉

欵冬　藤原秀直朝臣
咲出し八重山吹のまつ黄なる
色も甲州一歩なりけり

題しらす　重安
やかすとも草の餅をは春日野の
春なくさみにもたせたらなん

三月三日　行榮
臼に粉も蓬も入て杵をとり
つく音も先がたひしの餅　行風
御祝ひによりき家の子あつまりて
つくやくふ也ごさくさの餅　一圃
酌人のこぼるゝはかりもるにこそ
はや置たまへもゝ桃の酒　宗恒

題しらす
本歌
鮎の子のわきてなかるゝ泉川
いつみ酢にての料理床しき

百首歌の中に藤花　入安
大臣のゆかりの色かむらさきの
藤浪なかき花のふさゝき　雄長老
まとひつゝ藤にしたゝか締られて
難儀そうなる松ふぐりかな

紫のふどしに似たりふちのはな　貞徳
松のふくりを咲てつゝめは

見るに日は西へねぢれど藤の花　浄久
じきになるやらひたるさもなし

池邊の藤を月出るまてなかめ　友以
をりて
池水にひかめく月はしら藤の
棚から落てぬれ鼠かな

暮春　重故
春は猶ゆるりくわんすの煎じ茶の
にへ花をのみあそび暮らせり

百首歌の中に三月盡　玄康
三春の約束よとて來りしも
けふつきてこそ歸る也けれ　雄長老
春の日は長鑓なからさゝのはの
一よばかりになれる石築

くさ〳〵とするまに春はつき弓の　淡路守宗増
矢をいるやうに日は立にけり

古今夷曲集巻第二

夏歌

百首歌の中に更衣　入安
ぬぎて今日かへす〳〵も耻かしや
花みるほどの借衣のそで　雄長老
めをと中に只二つもつころもをは
かへあひて今日着やあはせん

卯花　貞徳
月出るその方角も卯の花の
東しらみに夜は明にけり
卯の花はどこからふれる白雪と
空に不審の雲や立つらん

葵
ふか〴〵と葵の上に置く露や
御息所のなみだなるらん

待郭公

こなたより御本尊かけて申へし
うそにはまたぬやよ時鳥　淡路守宗増

明暮やあらをそしとてまつの戸に
ほとゝきすにてすねてこぬかも　保友

郭公えきかでやあらうの花の
しらりと夜をそ待あかしぬる　休和

時鳥口なしはらの名におひて
なかぬやじやうのこわた山邊　浄久

聞子規

ひとり居によつぼとゝきす音信の
聲聞くときぞ氣は散じける　宗鋪

狂言詞
やるまいそやるまいものを時鳥
きいたか〳〵か今のひと聲　浄治

時鳥箆根うつぎになく聲を
聞てわすれぬ地獄耳かな

愛宕の坂にて馬の沓を見れは福なるよし人の語る折しも時鳥の鳴けれは　一幸

耳のびくよきはあたごのひと聲を
きゝぬる馬の沓手鳥かな

梢に蟬の鳴折しも時鳥を聞て　滿永

蜀魂空に本尊をかけたれは
蟬の經をもなほたかうよめ

百首歌の中に盧橘　雄長老

禁庭の花さへ木さへみえねとも
風薫り來るたちはなの圖司

貞德

陳皮にはならぬさきより立花の
にほひをきくそ氣の藥なる

早苗　宗増

早乙久の骨を折つゝうへ〳〵の
地頭へ米はとるさなへかな

五月五日珍客來れるに粽を出して挨拶に　行安

今日ことに聞食れよ御壽命の
數もやちたひもゝちまきをば　久清

印地にし深入しつゝ深手をは
負ふはふかくな深草の者

五月五日雨降けれは　左衞門督藤原義景

風の手の礫のやうにうち散らす
雨こそ今日のそら印地なれ

筝をよめる　久清

竹の子や疱瘡するとかろからん
絶えず雀の羽風あつれば

五月雨　滿永

五月雨に降こめられてきがくさり
かしらいたやの煩ひとなる

照射　貞德

的よりもともしの影にとんで行く
鹿の子の星やゐにくかるらん

百首の歌の中に螢　玄康

童口遊詞
猿の尻はまつかいなれは螢火も

昔よりかう有ぞしつらん
入安

若衆を思ひのたまかほたる火の
むねはこかれて尻ぞこかるゝ
宗増

白露の玉藻の前が亡魂か
螢も身よりひかりはなてり
法橋由巳

やごをかさいはぬばかりそ飛螢
よるにしなれは是も火尻は

高野にてよめる
成安

火て候かいや火にあらず高野山
谷三つこえて螢とぶなり

蟬
春房

帆柱にこれも見よとや船岡の
山の梢にせみがとりつく

鮎膾
滿永

つくりしも河の瀬ごしの鮎なれば
生酢をもまたあさらにぞもる

鮎料理の座にてかゝる鮨もか
なといふ人のあるを聞て
是急

本歌 鮎くての後の心にくらふれは
むかしは鮨もおもはざりけり

題しらす
救二

蒔人もはこびし人もつく人も
ふとしのみなるはたか麥かな

夏草花

結句そちに人くさいとや嗅ぬらん
香をかぎよりし鬼百合の花
淨治

本歌 名にめてゝ折ぬはかりそ鬼あざみ
我おちにきと人にかたるな
行風

野にたてり夜風ひきてや撫子の
はなたれたりと見ゆる朝露
正信

枯さうな富士なてし子を育てんと
水汲かくるたごのうらが身

下野國奈須野にてよめる
知度

風の手もさえなおそろし處がら
あたをなすのゝ石の竹にや

題しらす
西行上人

撫子のませにぞはへるあこだふり
同しつらなる名をしたひつゝ

瓜作れる人の挨拶に
高壽

名をしたひこむせつぶりの雨露か
梵天瓜ぞようそたつなる

姫瓜
未得

ねちつけていざや契らん己れとは
またおちそうもなき小姫瓜

題しらす
宗鋪

あさ瓜をはやしてくへば喉笛も
ひやり／＼となりにける哉

茄子
みとく

をのつから茄子の色を紫の
ふくさにつゝむ茶入とぞ見る
讀人しらす

本歌
なとて角はや年よりになりにけん
水なすびぞとむしりしものを　玖也

長らへて何をなすびの畑に生ふる
若きをこそは人もちきらめ

津國今宮わたりに干瓢といへるものを老若わかたすこしらへけるを見て　利忠

本歌
春植て夏むきけらし白妙の
かんへう干なり尼もかゝらも

蚤　道明

身の皮もほりぬくやうに痛むるは
是や大苦ののみの虫なる

題しらす　宗恒

本歌
蚤よりも蚊こそうたてく思ほゆれ
たれか破りし此紙帳ぞも

蚊　宗朋

罪あるもあらぬ人をもいきなから
鬼はかほどによもや喰べき

題しらす　一根

本歌
我きても久しく破れぬ惟子は
姫がよみをやおほくいれけん　久清

本歌
こい捨う我惟子の水いろは
ひさしほとこそ思ひそめしに

津國福島に雀鮨といふ其處の名物なりけるをよめる　親之

數おほふ江鮒のうろこ福しまの
人は仕馴ていすゞめ鮨　宗鋪

靑たてもそへてはなさん羽なくて
飛ほどうまき雀すしとは

祇園會　未得

精舍には諸行無常となるかねの
しやぎりしきりに替る祇園會　行風

ひいてくるとみれば過行く山鉾よ
是や祇園の會者定離なる

炎天　是急

寒よりも百倍あつき炎天は
身にきるものゝわたくしで無　みさく

泉

夏の日の暑氣をはらふいづみこそ
手にむすぶてふ水の印なれ　貞德

賣ためて錢口おほく結ぶべし
是ほと酒がいつみなりせば

題しらず　淡路守宗增

座頭衆すゞみとなれば酒盛の
てうしを請て平家かたれり

百首の歌の中に　前大僧正慈圓

しつの女も大路井筒に夕涼み
ふるかたびらの汗洗ひして

蓮　むねます

花瓶にもさすてふ花と聞しより
はちすを見れは嘘ぞふかるゝ

種好

雨かへる蓮華にひよつと乘たれは

生佛とや是もいはまし

荒和祓　未得

貧報の神もなこむや借錢は
今日みな月の晦日ばらへに

淡路守宗增

來る秋と夏は過き行きさかひめの
まん中臣のはらひするなり

古今夷曲集巻第三

秋歌

百首歌の中に秋たつ心を　貞德

涼しさを巻籠て來る文づきは
一葉の風のちらし書なり

本歌

入安

秋きぬとめには見へねとひく風の
しはぶく聲におどろかれぬる

七夕　雄長老

盆またで聖靈まつるたなはたに
むくる時宗の尼の川水

初秋月　行風

御簾こしになかめまゐらせ候は
只文月の透うつしなり

猫のため盂蘭盆會まうけゝる
人を見てよめる　休甫

猫脚のぼんたてにする功德茶の
哀れになぐるくび玉まつり

踊　久清

兩の手をふりつゝ拍子打つ時は
あふきを腰にさしをどり哉

行風

出たちはとれもあさ衣あさ〳〵と
淺黄にそめてきそ踊りかな

源雅純朝臣

見るに聞くに程拍子よや振のよや
うたも上手や小町をどりの

未得

かけられてあふむ返しに來るこそ
小町をどりの歌のさまなれ

近吉

はやしぬる踊の庭に燈籠を
ともして持もこきり子ぞかし

をどりの拍子揃はずして見る
人わろ口いふによめる　ていとく

わる口を惡きをどりにいふことは

先笛吹におひやひつこめ

津國福嶋といふ處にて踊にをのこも女も群集する　見て

行　安

秋風のふく島人のをごるとて
すゞめ鮨ほどあつまりにけり

器　音

相撲

本歌

笑種ことはにかゝるまけ相撲
たま〳〵出ては手をもえ取らず

相撲にまけぬる方いなひけるを見てよめる　みつなか

かつにのり手とるに足を取れつゝ
負けぬる方ややすまふといふ

百首歌の中に女郎花

入　安

秋の野に露おもくさの女郎花
色はにきびか粟のむせるか

休　甫

色をみなへしてとはねど仮にむす
粟つぶほども替らざりけり

百首歌のなかに薄　雄長老

招きよせて化さんとてや秋の野に
ふれる狐の尾花なるらん

ていとく

落武者のをつるも道理薄の穂
いり日を招く鉾に似たれは

薄を吃詞にてよめる

よみ人しらす

秋の野にかゝ風ふけるたゝたびに
たゝたれまねくはゝ初尾花

百首歌の中に蘭　貞徳

くさきほと匂へば是や中らん
しまにんにくの蘭とも

雄長老

藤袴もゝたち活とりもせで
裾野をくたり露にぬれつゝ

槿

花の露も日影うつれは蛭に鹽
ひるはしほ〳〵となれる朝貌

玄　康

朝酒をおほく呑ばくるゝまで
只是槿花一日の醉

色鳥　少將藤原秀宗

渡り來る數も限らず一つれに
二十三十四十からかな

題しらす　保　友

よりあひて山から日から四十から
から〳〵〳〵と笑ふみゝづく

夜更て鶏の鳴けをきゝてよめる　權大僧都心敬

秋の夜のくわいと更つゝ更りしは
夢かうつゝかうつらにて候

鳴　未　得

羽かきの數を所作にやむば鳴の
看經をするあかつきの聲

百首歌の中に松虫　法橋由巳

本歌

萱原に人まつ虫のこゑすなり
我かと行てとふこともいや

ていとく

たぎらする茶の湯のみちの下草に
りん／＼と鳴く松むしの聲　浄治

草むらにむさとな鳴そくつわ虫
野飼の馬のはむこともあり　やすとも

鷹犬の鈴虫馬のくつわむし
鳴野や殿の狩場なるらん　行風

月

月にあそべ五尺にあまる身也とも
一寸先はやみのうき世ぞ　よみ人しらず

腰もとへ似たり金銹さし出して
山のはすはに見ゆる月かな　友知

大空を夜ありきしつゝあかせるは
月のかつらの男さかりか　未得

まばらなる軒の穴より詠むれは
月の鼠も桁はしるなり
長尊

三味線の音をおもへとや風の手に
くもはちりてれてれる月影

月のもとの酒宴　三政

世捨人かいや夜は捨ず月の本の
酒にこゝろがうき藏司なり

對月明莫往事思といふ詩のこころをよめる　藤原氏成卿

なかむれば顔のゑくほぞ皺となる
月の鼠がしほを引くかよ

月の夜目醫師のもとにてよめる　元安

ねふたけも道にさめてよしみねや
只目くすりはあきのよの月

月を奴子詞にてよめる
よみ人しらず

片腸へつとそびけろうみたく無に
邪魔入り申す月のむらくも

名所芋　貞清親王

本歌
山城の美豆野の里の芋をほりて
いくたび淀に賣りありくらん

あまたともなひて或寺にまかりけるに手作なりとて山芋料理せられけるによめる
宗順法師

本歌
くてのみや人にかたらん山のいも
手毎にほりて家土産にせん　未得

駒迎

信濃より本曾踊して引く駒の
まきぬる髮も茶筅やこのさ
參議大江秀元

本歌
相坂の關の清水をかいすぎは
風をやひかむ望月の駒

題しらず　貞因

そひあきし妹とはかはり見る度に
ものくさからぬこもち月かな　浄久

望月を汝か箸にかけんとや
ほつかり口をあきの夜の空

八月十五夜　元安

村雲のたちまちきれてさやかなる
秋の中ごのめいよなる月
行　安
詠めやる三五の月の光りには
二千里欲も忘れ果たり
名月の夜畑なる芋ぬすめるを
とらへけれは盗人のよめる
月見よといもか子供のねいりたを
起しにきたは何かくるしき
河内國壺井といふ處にて月を
詠めをりてよめる　元　安
唐臼や壺井の中へかきいれて
たれ水さりの望月の影
八月十七夜八宮御所にて當座
に月の和歌よまさせ給ひみき
たまふ折から今霄の月を題に
えひすうたをとおほせければ
よみて奉りし　行　風
望月の鼠がわれとかぶるやら
よべからちゝとはたのへり行

廿日月　未　得
詠むれは廿日鼠のをのづから
今宵の月のなりぞちいさき
百首歌の中に霧　雄長老
朝霧のきりの籬のかきのもとを
とをり行人まるぬれにして
本歌　秋田　利　忠
秋の田をかるこにてもつ稲を重み
我きるものは汗にぬれつゝ
久　清
苅稲を菩薩といへばそれを負ふ
牛も大日如來なるべし
一　幸
本歌　百姓の稲こなすとてする臼の
音聞く時そ秋はかしまし
百首歌の中に擣衣　入　安
露木の葉きぬたの音もはら〳〵と
誰秋風におびえうつらん
貞　徳
槌の柄をしさゝ握りてふるさとに

うつは男をこひころもかな
玄　康
寺のうちにきぬたの音の聞ゆるは
彼の大黒のうつ槌やらん
百首歌の中に菊
淡路守宗増
壁に耳岩の物いふ事あれば
なにをかきかん我もはつかし
入　安
翁草花咲ころは露はらひ
たえずとふたり常にとふたり
菊を愛する人のもとにて
元　安
家主のよはひの程はちとせとの
菊の籬をゆいて見まらせよ
九月九日に　種　好
君か代にすんでとくりの菊の酒
くめば珍重陽てうれしき
正　定
本歌　いにしへのならのみやけの菊の酒

けふ九日のいはひにぞのむ　二笑

ひらかざる菊のこゝろも節供ぞと
いはんしたばのつぼみ口かな

十三夜　白譽上人

めのさやも大豆の莢をも外しつゝ
見くふぞ月を賞翫のかげ

同じ夜曇りければ　玄貞

揃大豆のさやけき月のかけをとて
人の口べにかゝるむら雲

紅葉　三政

立田山横すちかへもおしなべて
只一しきにもみちしてけり

東福寺にて　保友

通天のもみちの色を兆殿司
書移しぬる繪の具さやみん

みとく

本歌
やよ時雨猶うはぬりをたのむぞや
また色薄きうるしもみちに

百首歌の中に　雄長老

朱をませて漆ぬるての紅葉ばも
先あき風にまけて散るらん

菓　未得

けあけたる鞠の如くにぶらめきて
庭の梢にありやありのみ

梢の柿人のとり喰を見て　元安

ほの〳〵とあかみのついた筆柿を
もつ人丸でかふりこそすれ

九月盡　未得

長月もつまり〳〵て一寸の
光陰おしき今日の晦日

百首歌中に潤九月盡　淡路守宗增

花をみて他念なければ積善の
餘慶な秋もつくる菊月

古今夷曲集巻第四

冬歌

百首歌の中に初冬　淡路守宗增

昨日今日あら寒むやとて重ね着る
小袖そ冬の始めなりける

貞徳

冬籠る垣ゆいつけん高塀の
蛛手かくなは十月になる

題しらず　雄長老

貧報の神も出雲へ行ならば
十月ごとに我は福人

常林

本歌
村雨も時雨もいたくもるやねは
したや殘らす水つきにけり

口切の茶の湯をよめる　久清

霰釜しかくる爐にはをのつから

置ぬる炭も冬のいろかな

題しらず

名において數寄する人は無地ならぬ
かたつきの茶の小袖きにけり

亥の子餅に砂糖かけたるを見
て詠る　勝可

ゐのこにし鹿子またらのあかの餅
白きをみれは砂糖也けり

冬柳　浄治

朽葉さへちつとも見へぬ姥柳
楊枝にせずと杖にきれかし

寒蘆　未得

人ならば脚氣といはん霜枯に
おれふすあしの節もかなはす

題しらず　入安

身をつくし浪花の事もはたらけは
足もとさむくひゞにあれ行

寒夜によめる　宗也

寒き夜はいかなる歌もよみかへし
あまりかゝめはに丸になる

氷　忠昌

今朝最早とつ坂本のあつこほり
山のひえたる夜風ゆゑかも

河氷　久清

わすれては白き氷を砂糖かと
思ひて口になめり川かな

百首歌の中に　入安

水うみの上こと／＼く張りにけり
是や近江の二十四こほり

千鳥　ていとく

風次第あなたこなたに立さはぎ
波の音さへちとりかけかな

雄長老

餅さしめがちやくとさすへき棹河の
不用心にもなくちとりかな

むねます

ちり／＼やちり／＼にもや飛て行
はんま千鳥の友をよぶ聲

鷹狩　雄長老

攝家まて供奉する君か御狩場に
すへて出たる鷹司殿　一頼

鷹の鈴からりともいふ音きかは
鷺のみの毛もよたつなるらん

みとく

名のみして膳にはすゑぬ箸鷹の
とりえぬるよりはや摑み喰ひ

或舘にて鷹の鳥の料理給ひけ
るによめる　正信

鷹にとられ殿の御汁になる時は
たうべる人の身もぬくめ鳥

百首歌の中に夜霰　入安

さら／＼にあられん物か霰ふる
さゝのひとよもさゝを呑ずば

山雪　淡路守宗增

雪になる雲をほうしに打かふり
かしらもさぞな大ひえの山

尊純法親王

北山のかしらにかぶる雪綿や
寒もて寒をふせぐなるべし

藤原親綱卿
草木も成佛せんとふすまゆき
かぶる座禪の床の山かな

奈良にて雪の降ける日よめる　行　風
舍利ならぬ雪佛もぞはくしきに
むからかすがの御作なるべし

法印玄以
春日野の惟子雪はところから
ならざりしとも言へかりけり

松雪を見て　智仁親王
松かえのかたひら雪のましろさは
十八かうのさらしなりけり

百首歌の中に　玄　康
天神の御自愛なれは松にふる
雪のしら太夫と是も言へし

題しらす　來　焉
三密の月くらきよは十丈も
つもれ九識の窓の白雪

百首歌の中に炭竈　入　安
小野の奥雪ふみわけてかまもとの
すみをねぎれは結句これたか

百姓の身におはざるおこりをなし公納米不足してけるを見てよめる　中納言大江輝元
秋の田のかり米をなし奢りなし
年貢にわらや出す百姓

圍爐裏ぬりを見てよめる　貞　德
田樂をあふらん爲のいろりとて
先なまかべを附にけるかな

火桶　未　得
抱て寐て寒さをふせく火桶こそ
かさねぬ夜着の妻とそふらめ

光　知
あたるまの久しき程に炭の火も
どうとなりてや足のひゆらん

冬梅　みとく
雪の中にまつぬけ出て咲くはなは
梅のこたちや鞘はしるらん

西京八宮御所にて年のうちに春立て又の日大雪降けれは當座の和歌詠て奉りしに四方を詞に雪の狂歌を（一本よめ）もとおほせけれはかく申上侍し　行　風
東より春はきたのに西の京
奥ある今日のゆきぞみなみよ

元　行
東より春きたのちも西の京
狂歌に今日の雪の色そふ

百首歌の中に歳暮　入　安
借らす木葉にあらぬ錢米の
味進も今日はくるゝ年かな

歳暮　恒　貞
臆病と人はいふとも求めたし
おいくる年に迯げん脇道

讀人しらす
酒のまず餅をもつかぬみともには
年の一つも御免あれかし

長嘯子

いにさまに置みやけさて眉の霜
かしらの雪をくる丶年かな
尊朝法親王

年の矢のかぶらもたけて春はた丶
障子一重のへたてなりけり
南　歌

今日毎に嘉例はづさで一つ宛
老をもてきてくる丶年かな

坂東の俗除夜に（一本節分）いり大豆こし
らへる時やらくさやふんさい
へる言葉をもてよめる
ト　養

鬼は外福は内へとうつ大豆の
當りてひるかやらくさやふん

百首歌の中に除夜　雄長老

鬼は内へ福をば外へいたすとも
年のひとつもよらせずもかな

古今夷曲集巻第五

賀付神祇

元日祝　行　風

二本つ丶日本の門のまつたけは
千年を千代の證據にやたつ
應其上人

書初をすゝりの水に鳰のうみは
つかひほすとも君か代の春

正月三日祝の心をよめる　貞　德

三日月の影ますやうに明日よりは
猶よからふさいはふ春かな

祝ひのうた　利　清

幾秋もかさね土器手にとりて
汲ともつきし菊の酒壺

節分によめる　道　信

君か代に上下万民もてはやす
大豆や千年の數に節分

祝歌　來　焉

須彌ほどに積おく芥子を君か代の
千代に一つの數取にせん
器　音

（本歌）君か代はいく千代鶴の羽は丶きて
なつともつきぬ茶臼なるらん
雲居和尚

道にいる末繁昌のかゝみには
藤氏源氏の家を見てしれ

神祇

此集あみ侍るなかはにいつく
よりともしらす白衣のおのこ
のきて此歌も集にくはへたま
ひねといふいつかたよりと問
ひ侍るに我は鹿嶋のものなり
この御歌は明神の頃の御神詫
也といひすて丶さり侍りぬ

霜柱氷のはりの雪の（一本にさす）
雨のたる木の露の草ぶき

夢想の發句をひらくへき心侍
りける折柄によめる　宗　恒

本歌
願くは花のもとにて連歌せん
其二月の天神の日に

一本八幡の
神子化粧して神樂にたちまふ
を見て　　　久　清

山崎やせんけんたりし兩鬢を
油にひたす八幡の神子

月次の會にて　　來　焉

祈る也苦衆にはあらす和歌の道に
冥加のからせ玉津島姫

題しらす　　　一　圃

めでたいに酒くむ人のにこ〳〵と
笑ふ家には利をゑひす講

丹波杵の宮にて　　元　理

つく事を守らせたまへきねの宮
米はもたすと連歌なりとも

ひちう吉備津宮にてよめる
法印玄旨

神はきねがならはしなれは先搗て
團子にしたききびつ宮哉

題しらす　　　器　音

本歌
あふみなるつくま祭の夜宮には
物うりさへやかづく鍋錢

筑紫安樂寺にてよめる
友　知

おほしめす處へひよつと飛梅は
まことに自由自在天神

題しらす　　　路　春

善光寺それにはあらすめくる日の
牛にひかれてまゐる天神

百首歌の中に　　入　安

烏帽子きて神の御前にひだりをり
右をりしつゝ見ゆるはふりこ

題しらす　　　德　元

千早振神につかへてあらよねの
こぼれを拾ふつゝをねき哉

心あきらかならん事を神に祈
りて詠る　　　正　定

正直の神のちかひのかの字にし
濁をさいた身をいのるなり

氏神の祭りの日みきいたゝく
とてよめる　　　滿　永

信あれは德利にいるゝこのみきを
いたゝく度に手もあらひよね

題しらす

なまくさき戀をもいのる神なれば
御前でとるもみくじらぞかし

百首歌の中に　　平時雍朝臣

神まゐりするとも心あくならば
利生はなくて罰やあたらん

古今夷曲集卷第六

離別付羇旅

本けこなりし者今は宮の御方につかへ侍るか御所の御供して江戸へまるかとゝいふむまのはなむけに　信海

さる間下らせたまふお江戸にて仕合もよくのぼれ助四郎

小濱氏なにかし一本時江戸へまかれけるに足袋五足おくるにそへて　言當

東路へくたらせらるゝ此たびはこそくさいにはやがて御上り

うとからぬ人の他國にまかるに詠る　休甫

鐵炮の玉きはるまで悲しきははなしゝ人をはなしやる旅

出雲と讃岐へ使價つかはす門出に　信海

機嫌よく旅にいづもの門出にさすがに祝ふ酒のさんしう

芳野の者今年之方なれはとて安藝の宮島へ賣買にまかりける餞別　恒貞

出たらばさぞな仕合よしのより今年は方もあきの宮じま

羇旅

題しらす　西行上人

七瀨川やせたる馬に水かへばくせになるとてとをせとぞ言

本歌
山城の木幡の里に馬はあれど駄賃なき身はかちにてぞゆく　未得

題しらす　行重

家もなき山路もてこしやき飯にきるゝ命をむすびとめずや　近吉

本歌
相坂の關の清水で茶屋のかゝ今やかすらん餅につく米

松本にてよめる　徳元

旅人の足手かけをしまつもとの茶屋も千年とちぎる餅かな

石邊にてよめる　友以

里の名の石べをひるはくさつなる姥がもちゐの過し人かも

熱田にて　正成

舟の上ゑはぬほどしものむ酒のかんもあつたの浦に着ぬる

尾張のさかゐはしにて　藤原光廣卿

打わたす尾張の國のさかゐ橋是やにかはのつぎめなるらん

赤坂にて　保友

出女か紅まへだれの赤坂のあかぬ姿にとまる旅人

故鄕の者文使に通るに途中にて行きあひてよめる　正成

東より文箱もちて通る身に
逢ふて嬉しきふた河の宿
荒井舞坂にて
波のあらい船路なんなくこす上は
只何ごとも思ふまひざか
袋井の宿にて大雨降けれは　信　海
さゆ合羽ひつはるさめの籠なれば
番袋店のこゝちこそすれ　保　友
行末も遠江路（一本ナシ）の旅がたな
す（一本ん）袋井をやかけ川の宿
佐夜の中山にて　讀人しらす
旅衣たちぬる寺に茶はなうて
のみてこそ行けさゆの中山
宇津の山にて　未　得
乗かけのつゞらをりして疲れたる
馬には沓をうつの山越え
飛鳥井殿鞠子の宿通りたまひ
ける跡よりゆく折しも馬の沓
もとむるにねの高きなど不都
ごものいふを聞て　法印玄旨
鞠子川くつ音たかく聞ゆるに
あすかいたまへ先にありく〳〵
同し河に大水出しを越るとて
よめる　歌　慶
大水に渡るかゝりはのべあしや
ゑもんながしの鞠子河かな
みとく
（一本此歌ナシ）馬のあし四本かゝりによるなみの
沓音たかく越す鞠子川
百首歌の中に　玄　康
暮かゝり（一本る）鞠子のやどのありければ
早く留りてくつろぎやせん
題しらす（一本江尻にて）　讀人しらす
あなきたな江尻を出て行く人の
足からくだりかゝるはこねぢ　宗　易
親しらず子知ずなれどこゝにても
留守する妹が事をのみこそ
由井蒲原にてよめる　正　成
のる駒ののがみをゆひて行々も
なつきてぞよきかん原の道
山中にてよめる　徳　元
（本歌）どちこちのたつ木もしらぬ山中に
おぼつかなくも呼茶屋が（一本の）かゝ
かたびらの宿にて雨の降る日
よめる　讀人しらす
しるき道ゆきゝの人のすそみれば
みなどろぞめの肩衝の宿
江戸に着てよめる　徳　元
京と江戸兩道かくる武藏あぶみ
さすが駄賃はのるもうるさし
熊谷宿にて彼旅籠くふとてよ
める　讀人しらす
たきたつるはたごの飯のあつ盛を
手にかけてくふ熊谷の宿

片瀬こしごへ懐島といふ處を
通るとてよめる

かたせより腰越とをる旅虱
ふところ島やとまりなるらん

或座頭關東より上り（一本京へのぼるさて）に上戸が
原といふ所にとまりしをいた
はれる大名より酒にそへ給へ
る歌

行暮て上戸が原を宿とせば
酒やこよひのあるじならまし

木曾路はつは坂といふ所にて
客僧にあひ暫くかたりて年は
いくつと尋ねけるに六十四と
いへりければ　宗　也

客僧の年はと問へば六十四
はつば坂とは九々にあひたり

伊勢路（一本の）のつゞら町といふ所に
て　ちかよし

しんこ馬に附たる荷さへ名におふや
ねぢたる藤のつゞら町とは

へそ村といふ所にて

賤の女がつむげる糸によりて問ば
所の名さへへそ村といふ

久保田（一本村）といふ所にて雨のふる（一本ふりければ）
によめる

雨ふりの夜道をゆかば旅人の
ふみかぶるへきくぼたまり水

沓掛にて

茂りたる庭の柳もかゝりよしと
立とまりける沓掛の茶屋

伊勢桑名の邊ほし川あさけ日
なかといふ三ヶ村をよめる
西行上人

桑名よりくはで來たれはほし川の
朝げはすぎて日ながにぞ思ふ

旅の歌　宣　相

足引の山こへかぬるひるとばに
しんこ馬こそ床しかりけれ

百首の歌の中に（一本ら）　雄長老

草枕飯をはもたで椎の葉を
すくひ物にぞしたる麥の粉

世のことはざにより思はすひ
なに年をへけるに故郷を思ひ
て　行　安

赤子もぞ今はかぶりをふるさとに
あはれあはゝや手打するらん

百首歌の中に　入　安

今はたゞ腿もこぶらもはりまがた
しかまのかちの旅の苦勞さ

西國へ罷り立日難波堀江をこ
ぎ出るよりまほにてとも船の
ならび行折によみ侍りし
行　風

帆をかけてひいふうみつの浦風に
走りこくらや足はやき舟

海路旅のこゝろを
淡路守宗増

雲霧もはれものなればうみわたる
時分をみてぞをし出す船

舟中にて雨にあひて　宗也

宗　也

あめざやの刀の小尻ぬらさんと
　筥をくゞりて舟よばひする

　西國にまかり下りけるによこ波しきりにて人々舟にゑゝりしによめる

皆人の舟にゑひたといふ事は
　さかしほ風のふけば也けり

　室の湊につきてよめる　宗　因

一々にをしならへたる友舟の
　十艘室のとまりにぞつく

　但馬と因幡との境ゐくみといふ所に雨ごまりしけりいと狹き家なりければよめる

主從者たびにしあれば里の名の
　居くみにしたるかりの宿哉

　香椎の浦よりかへるさに舟を遥なる干潟のさきをまはさせて多々良濱をあゆみ行とてよめる

いにしへは爰にいもしの跡とめて
　今も踏みるたゝらはま哉

　題しらす　貞　徳

思ふ子に旅をさせよといふことは
　我かしてしらぬ親のことばか

古今夷曲集巻第七

戀歌

　題しらす　民部少輔嘉隆

思ふ人の心つよきは重籐の
　弓や八幡ひくにひかれす

　百首歌の中に初戀　貞　徳

戀に人腎虚するこそ道理なれ
　見そめしにだに腰がぬくれば

　職人歌合の中に鞘師によせて忍戀を　民部少輔嘉隆

忍ぶ夜の太刀やかたなの柄の間は
　さやの中にも身をかくしてむ

　百首歌の中に聞戀　入　安

垣ごしにしゝする音のきこゆるは（一本にゐる人かも）
　彼十六になる人やらん

　玄　康

音にきく耳の比丘尼にえあはぬは
　熊野に祈る甲斐やなぎの葉

見戀　元安

菩薩よりたうとき君の姿見る
目には佛もなかりける哉

百首歌の中に戀歌　入安

古への貴妃かあらぬか我目には
そよや霓裳羽衣の小姫子

玄康

海で水あぶる若衆の鹽尻を
見るに思ひはふじの山ほど

不見戀　貞德

若衆もたゞ我しりの如くにて
みんとすれども見られざりけり

見不逢戀　元安

見る度にいとゞ心氣の花むしろ
しく／＼なきて獨ねぞうき

百首歌の中に戀歌　入安

若衆の面影にたつ空見れば
折あはれなるすばり星かな

戀の歌合の中に馬士の戀
民部少輔嘉隆

我思ふ君をのらせて東路の
果しなきまでおふて行かばや

尾張國笠寺によき兒ありと聞てすきもの見むとて行けるにかくれてけければよめる
讀人しらす

兒みむとさしてきたれば笠寺の
眠藏の隅にひつすへて置

本歌　題しらす

思ひより身うちの皺のいやましに
君に年をもよらせけるかな

三年戀ても難面かりければ　宗朋

桃栗のみにやならへる戀の道
三年してもならぬつらさよ

立名戀　見こく

布ならぬ我名を白くいひさらす
あくたれものゝ口のさがなさ

戀の歌合の中に立夕戀
久清

鋸のめよりも名をばたてらるゝ
櫛のはもじな戀や君ゆゑ

同し中に船頭の戀

君とわれ情をかけつ帆をかけつ
波も名さかもたつ舟の上

大坂に助三といふもの虎助といへる少女を戀煩へをる見て
保友

祐成も助三も虎を思ふ人
それは大磯これは大坂

戀病をいやしてよと藥師に祈る人を見て

本歌
こぬ人を松原通いなば堂
やくし參りに身もこがれつゝ

百首歌の中に不逢戀　雄長老

我戀は拍子もきかぬ下手皷
あふことなしに味のわるさよ

不逢還戀　宗朋

わか戀はまだ初心なる下手連歌

さしあひ有てもどるのみ哉

題しらす　　貞　因

夢になりと見るか〳〵と思ひねの
目さへまじくりあはぬ戀かな

橘諸光

たらしつゝといひ角いひ云なびけ
君にちとのま逢よしもかな

職人歌合の中に

民部少輔嘉隆

わが戀はひとつもあはぬ足拍子
木履かた〳〵草履かた〳〵

双六よせて不逢戀　　未　得

一本此歌ナシ
よきめをとこひねがへども双六の
さいはひなくてあはぬ獨りね

職人戀歌合に桶工によせて

よしたか

君が顔うつしてほしや水桶の
わがおもふその心いつぱい

馬士戀をよめる　　久　淸

心にはおもひますれど馬士の身で
君をちよとは得まをさず候

椀によせて戀の歌

よしたか

一本此歌ナシ
つれなくもさこそ思はんと思召
めしよせらるゝ夕ぐれもがな

博奕によせて行末を賴戀を

ひさきよ

同上
さいともにふりぬる君が靡きなば
かるた結びの帶ときてねん

若衆によせて戀の歌

みとく

同上
若衆にかひなをひくもあづさ弓
はずちかへじの約束の爲め

題しらす　　淨　久

同上
かたべにのこいと仰の文みれば
ぞく〳〵してぞ嬉しかりける

待夜蠟燭　　空　存

蠟燭のしんきり〳〵と來ぬ人の
あひづ待間に夜は更にけり

未　得

一本此ヨリ以下九首ナシ
來ぬ人を待夜にともす蠟そくの
おもひこがるゝしんの苦しさ

寄松待戀を

住吉のきしませぶりにねばふして
やにこき人はまつに氣の毒

難波わたりに尻無川といふに
よせて不來戀を　　保　友

尻なしの川とぞつゐにながれ出る
若衆こぬ夜の人のなみだは

來て不逢戀　　みとく

鐵砲のたま〳〵きてもはなさぬは
結句おもひのたねか鳥かな

逢不解戀　　よしたか

みす越におめにかゝるはゆがけして
かゆき所をかくこゝちかな

百首歌の中に初逢戀　　雄長老

暫くはむなさわぎしてじは〳〵と
ふるひ聲なる新まくら哉

入　安

おそれてはじり〳〵汗ぞ流れける

逢ふ夜はひえのお見なれども

逢戀　　正信
思ふ人をうるしの名にしあふ時は
満足せしめふたりぬるなり　　行安

あふた夜に鳥よないたら元興寺の
鬼にかませよなれもひよこも

稀逢戀　　正信
たまさかの君の御出をうれしかり
先いねころびさしまくらかな

烏帽子折の戀を　　久清
折々にきてあふ君がおなさけは
一しほおんにきんの烏帽子や

題しらす　　宗朋
終夜ないつ笑ひつかたるをぞ
うかれ烏と人のいふべき

別戀　　弘重
本歌 合せものはなれ物とはしりながら
猶うらいやな今朝のきぬ／＼
片みにとあはせをときて一重にし
あちらこちらにとり別れぬる

題戀
つゝむかひ涙にくれて目がくさり
藥で終にあらはれそする　　來焉

おもひ内にあれは色にや出なんと
ふてこゝろより忍ぶともせす　　末得

つゝめとも外にもるゝは饅頭の
あんに相違の我ちぎりかな

懇切戀　　伊貞
下女と下部味噌をする／＼する痴話を
いはゞれん木の語らいならん

寄草紙戀　　玄康
おもひきや日向の人にあひなれて
伊勢もの語りいねてせんとは

寄文戀　　満永
世の中はかくこそよけれ痴話文を
よみえぬ人もしんきなりけり　　久清

墨色のうすきなさけは出なしと
讀む度ごとに腹をたて文

かきおくり君をなびけし玉章も
緣をむすぶのかみてこそあれ

職人歌合の中に鍛冶の戀のこころを　　よしたか
おゆかしとさつと一筆我職の
ふいごの風のたよりもとめて

題しらす　　正定
難面(つれな)しとかきくときたる腰張の
うらみこと葉の花もじが部屋

君か方へゆかん門出にのむたばこ
烟よりなほたつはそゞがみ　　正信

寄貝戀　　みとく
あふ中も今ははなれてはまくりの
むきみより猶うき身なりけり

積戀　　安明
本歌 つくはねの空より落る數よりも
戀そつもりておもふ小姫子

今は只心もほれつ身もなへつ　行風
中風に似たり戀のやまひは

本歌
今は只おもゆもたべぬこばかりを　重頼
おめにかゝりていふよしもがな

職人歌合の中に矢師戀
よしたか
かりそめに思ひそめはの矢の竹の
よゝにし君をためつすかめつ

同し歌合に秤師戀　久清
我よりもうはめな君にそふことの
慮外はさてもはかりかたしな

片思　休甫
君とわか中をあかさば挑灯に
釣鐘になふおもひ也けり

弘玊
何の因果めくり車のわがかゝる
かたおもひめをするは物うし

變戀　玄康
手のうらをかへすことくな約束は
爪糞ほどもたのむかひなき

みさく
契り置くこと薬質をやながすらん
あふうけこひの日切のばすは

題しらす
思ひしみて思切るにもきられぬは
身より出せるさびかたなかも

百首歌の中に恨戀　入安
たのめ置く他力にだにも叶はぬは
南むあみたぶりと身をや投なん

題しらす　義綱
思ひ佗うちぬるうでのたるきまて
戀の重荷におこる痃癖（けんぺき）

依戀恨貧　菅原盛長卿
忍ふ夜の松風のみか颯々と
やぶれ紙子のうらめしの身や

題しらす　休甫
きぬ／＼の束しらみにかく耻は
我ふる夜着のうらみ也けり

隔戀　未得
ねやのうちにひきてなくして只獨
ふすま障子ぞうき隔なる

彦七といふ田夫か留守をうかかひて女のもとへ忍ひ行けるに其人しはふきけれは女のよめる

本歌
彦七か顔をすることも痰氣（たんき）故
かくれぬせきを今はやめてよ

障戀　淡路守宗增
更る夜に忍ひてかよふ部屋の戸は
痰氣（たんき）のせきも障りとそなる

題しらす　貞徳
居所をまくりあけても何かせん
穴のはたのみのぞく身なれは

職人歌合の中に作花師の戀
よしたか

本歌
一枝も御意にいれかし君ならて
誰にかみせんわか造りはな

同し中に珠數曳の戀

戀や是百八煩悩そくいべら
のりのをしへを背く珠數臾

寄若僧戀　入安

うつくしき地藏のごとき若僧に
死ぬるからだは千ばかり也

寄馴戀　みとく

情しらぬ人をたくへばみぞいたち
只みめよしといふばかりなり

寄龜戀　夏虫妻

萬年もはなれはせじな石龜の
かうとやくそくかたき契りは

江尻にいたりし時本なれし若衆そこにつて戀しかれど人めをはゞかりえあはてやみぬことかたる人にかはりて　信海

余所にのみ見ほの松原はらたちや
戀にするがの江尻なれとも

屏風によひと夜物思ひたる女のつらつえつきたる所を　伊勢

本歌
夜もすからもの思ふ時のつら杖は
かひなだるさそ知れざりける

題しらす　行安

ふらい〳〵ふる妻いとし我かたへ
ほとりによせてきそん十七

本歌　安明

笠さきへもたせる人のよめりとて
白きを見ればねりぞかつける

職人歌合の中に鞘師の戀を　久清

さやしには似合たりとや鮫肌な
人をきもいる媒そ憂き

題しらす　忠精

敷銀のおほきにわろき女房を
もつや非欲の契りなるらん

職人歌合の中に佛師戀　民部少輔𣑥隆

戀をして片手に造る御ほとけを
おかむ衆生や皆まよひけん

題しらす　三哲

まだうゐの左官がよめの化粧には
唐の土をや壁塗にぬる

百首歌の中に　入安

廿三夜の月にむかへは六四九四の
ゑくぼにみゆるいもか俤

題しらす　直之

夫妻のみ入ぬる風呂はあかなくの
せなにむかひて猶もいもふき

女の顔にくさかさの出來て見ぐるしかりければ男のよめる

本歌
つら赤みくさげに見ゆる我くさを
人の笑はんことをしぞ思ふ

返し

本歌
恥敷やなとあてことの言の葉ぞ
面目なくも思ひけるかな

題しらす　未得

忍びつゝ初めさゝやくむつごとは
はらみて後のごよみとぞなる

世の中の男女のわざはひも

しもから起るものにぞ有ける
入安
はは落てをごろの髪もまつしろに
霜ふる姥にあきやはつらん

夫婦いさかひを見てよめる
成安
竹笛のなかの節くりいさかひは
りやらひやらをきゝぞ兼ぬる

女の悋氣して夫妻いさかへるを見て
正景
めかけにはめがくれ心くれ竹の
節々になる夫婦いさかひ

題しらす
未得
堂宮にのろひことしてうつ釘は
かなつち論の夫婦いさかひ

かたわなる女をむかへてさるとて女のとかくいひければよめる
讀人しらす
本歌
よびし上は科なき時やさらざらん
鼻さへそけめ目さへたゝれめ

題しらす
久清
浮石に似たりし妹か顔はせは
うしとて縁を切革屋かな

未得
たかなほす中とはなしに夫婦する
いさかひ果てよるのちぎりき

古今夷曲集巻第八

雑上付物名　廻文歌

人のもとより鯛と飯鮹を得て返事に
遠江守一政
あら玉の年のはじめにめでたいと
いひだこ送りたぶぞ嬉しき

節振舞のうた
保友
本歌
淺みどり糸より小鯛やきものゝ
串にもぬける春の振舞

同
宗恒
けふのみとはなを思へる節小袖
たつも苦にせず花染の衣

鰤の料理を見て
貞徳
料理者の毬打腕できる魚の
名も正月のぶり〳〵ぞかし

題しらす
權大僧都光宥
人間の八九七十二の年も
心はもとのてうちせゝかこ

戌年道の邊の捨子を見て
　　　　　　夏　虫
む月乍らあぢきしき無く捨られし
　こはそも何のむく犬の年
　題しらす　　　　入　安
薄泥に霞をさつと引まはす
　屏風に松をかけるすみの江
　蒔に初蕨を汁の料理にせしか
　もとにて　　　　淨　治
汁にして魚の名にあふさわらびの
　こは山海の珍物そかし
　短冊とて（一本な）や花の枝に（一本付るとて）えしれぬ
　事とも書てかけ（一本けるた）ならべたるを
　みて　　　　　　長嘯子
人毎に腰折れ歌をよみ置て
　あたら櫻を杖にこそつけ
　清水にて　　　　保　友
花見にやきよ水坂の燒餅の
　かたはらいたき歌をよむらん
　題しらす　　　　貞　徳
物くはで地主の櫻をみる人の
　目ぼしの花はちるか散ぬか
　大原野長嘯子の歌會の日とみ
　の眼病にて席につらならず兼
　題歌書てまゐらするつゐてに
お花見にめをわつらひて參らねは
　大はらたちや口をしほ山
　藏王堂の前にて小者の花を折
　ければ主なるものゝ神木なる
　をとてうちたゝきけるを見て
　　　　　　　　　淨　治
三芳野の花ををりはのでつちめを
　主そうちぬる丈六の堂
　久しくまからさりける人のも
　とにて鯛の骨ひれなと肴にて
　酒たうべつゝ人の語りければ
　よめる　　　　　一　圃
本歌 あらなりと名にこそたてれ櫻鯛
　年に稀なる人の振舞
　難波江のみをつくしに波のよ
　せかくるを見て
　　　　　　　　侍從源光尙
觀音のちかひかこれも枯てたつ
　みを木に波の花咲きぬなり
　八丈棚にて紫の絹盜まんとせ
　しを見つけて取かへしつゝ人
　の語るをきゝてよめる
　　　　　　　　　正　信
盜まんと人めをまきらかすか野の
　若むらさきのすり小袖かな
　題しらす　　　　一　圃
本歌 花見虱うつりにけりないたつらに
　我身よにない古き小袖に
　或處にて酒宴なかはにくわゐ
　としいたけを肴に出し今ひと
　つとすゝめけるをいなびけれ
　は亭主のよめる
肴には是をくわゐとたてまつり
　今一つとそ酒をしいたけ
　人のもとへ皷草にそへて

たむほゝをとたん〳〵とはやりもせで　讀人しらす
ちゝつひとこそ送るなりけれ

返し

此程はうち絶にけるたむほゝを
たまはりて喰ふ舌つゝみ哉

鼓草賣を見て　滿永

拍子あひよくいひながしねも高く
ちゝとうりぬる皷くさかな

綠といふ菓子の出ける座にて
よめる　正繼

本歌
常盤なる松のみどりも春くへば
今一しほの菓子の味はひ

杜若を坂東にて筆花といふを
きゝて　信海

筆花といふことはりをきくからに
一首はかうそかきつはた哉

三月三日に相坂邊にて鷄合け
るを見てよめる

淡路守宗増

鷄も相撲に似たり相坂の
關のかち聲あぐる勢ひ

題しらす　昌治

花よりも團子を歌の題ならば
喰ずと腹にあぢはひつべし

前大僧正尊應

本歌
山寺の春の夕食はやけれは
入相の鐘に腹ぞへりける

親しき人のもとへまかりける
に精進の麁相なる料理にてや
みぬと人の語るをきゝてよめ
る　讀人しらす

本歌
袖ぬれてあまのかりほす青海苔や
みるをさいにて止んとやする

海士　久清

手まめにし和布をも刈ぬは浦名の
かたものなりとみゆる海士人

卯月朔日魚の棚通りけるに魚
ともあまたあらふを見て

貞德

衣更の今日しもわたをぬかるゝは
魚の腹もやう月なるらん

茗荷の子を西坂より賣に出た
るを見て

本歌
あのくたら三百三文やもうくらん
我立杣でみやうがうりつゝ

狂歌點取の奥に書つけて貞德
が許へつかはしける

唯正

はじかみのくひもあはせぬ歌の口
たゞから〳〵とわらひ草哉

はやりかさ多く出けれは　讀人しらす

我がかさのみかはに多く出ぬれは
蛛手ひまなくかきつはたかな

惡敷酒をつよくしゐけれは打
笑ひて

この酒は夏のかりねの床なれや
かはうるさくてのみ憎きなり

前關白信尋公へ鯑鮨を奉るに

本歌 そへて申上ける　　言　當
魚扁に春くはゝれる鮨だにも
すきなお口にあかれやはする

人のもとより鰆の鮨をえて返
事に　　右衛門尉藤原武員
近江鮒宇治丸鮎の鮨もあれど
をされぬ味は鰆なりけり

一夏の中誹諧發句して判をこ
ふ奥に　　貞　因
夏虫にをさる心のはいかいを
あつきひけんに入るゝおかしさ

返し　　貞　室
殊勝にもよくしあんごの誹諧に
かくるをたうりてんぞとも見よ

誹諧連歌の批判の奥に
保　友
空蟬のうつゝをぬかすはいかいの
作意の程は生てはたらく

川逍遙にまかりてよめる
久　清
賀茂川の魚の料理はところがら
たゝすてあへて膾にやする

河豚汁に茄子を入れは毒をな
さぬと人のいひけれはよめる
保　友
死ぬといへと食てもしなす年寄は
ふくと汁にはなすびゆゑなり

雨乞成就しけるとて踊もよほ
せし所にて囃子物によせてよ
める　　道　明
雨ふるは不思議か笛はおひやおひ
てれ／＼／＼とならす太皷に

合羽　　常　林
白雨のふりかゝるとも早速に
うけなかすへき袖合羽かな

よべばんの鳥えさせける人の
もとへ朝に申つかはしける
藤原光廣卿
やう／＼と今朝こそ申せ遅なはる
昨日のばんの御礼なれども

ある僧のもとへ竹子を送ると
て　　保　友
新發意とおほしめされて齋非時に
おつかひあれや竹の子どもを

京の町屋に鶉のなくをきゝて
代をとはせけるに高直にいひ
けれは　　法印玄旨
立よりてきけは鶉のねぞ高き
人もよくにはふけるもの哉

山雀の籠へこま鳥を入かへた
るを見て　　ていとく
山雀の籠へ入かへかひにけり
へうたんからや出しこま鳥

本歌 題しらす　　自　曲
夕されば門の破れ戸をおとつれて
あたゝまるねにあき風ぞひく

八朔に誹諧連歌の百韻を書て
えさせよと望める人に書て遣
しける奥に　　器　音
八朔のさくいもあらぬはいかいを

もゝ書あつめまゐらするなり
仲秋廿日の頃友なふ人の宵の
程語りて歸らるゝに路次もぞ
くらき提灯をと言ふにいなや
月の出たりと申されけれはさ
ればよとてよめる
藤原定家卿
客人の歸るさ送るてうちむは
申つけねと出し月かけ
題しらす　讀人しらす
引かつくかたびらごしに月見れは
雲井をはしるやせ虱かな
八月十五夜月のもとの酒宴に
盃の數も重なりけれは九獻と
こそいへさまではいかにと人
のいふに詠める　源重通卿
月を今宵賞翫なれはくむさけの
さん五の十五ほさんとぞ思ふ
紅葉狩の山邊にて人々醉りと
いふをきゝて　春房
まつかいに醉ぬる顔は紅葉見に
林間をして酒すごすゆゑ
但馬にて有る人の庭にあひと
もに繼(つぎ)木せしか今年なり侍れ
はとて得させける返事に
澤菴和尚
あいうへて梢になりしかきくけこ
御ゐんしんこそ通したりけれ
題しらす　宗朋
あまたある中て取わけしぶかきを
むくはめきゝの下手のかは哉
言總卿のもとにて櫟の葉三寳
にもりて出けるに狂歌とおほ
せけれはよみはべりし
行風
百敷のお座にいちゐの葉こそ
公卿のうへのくらゐ物なれ
春日山にていかにかしたりけ
ん梢より猿の落けるを見てよ
める　器音
山猿もともに梢をおち椎の
車に似たるかたわとぞなる
吉田二位卿よりあるかたへ松
茸送りたまふせうそこにうへ
うへへもいまだ奉らず隱密あ
るべしとある返しに
讀人しらす
松茸のおゆるをかくす吉田どの
わたくしものと人のいはまし
題しらす　一圃
本歌 只たのめしめじひとつの取さかな
座しきに酒のあらん限りは
江戸にてはしとあしと赤き雁
を送られける人の許へ返事に
光廣卿
本語 是もまた都鳥とぞ申べき
はしとあしとの赤く見ゆれは
近江國に小堀氏なる人の許へ
茶湯にまかりて　信海
感じいるさいの數々みな口に

あふみかぶらの名ある御茶湯
法眼紹巴に途中にて行あひい
つこへと問に茶湯にまかると
いへりければよめる
法印玄旨
花香ある人は御茶にも呼なれと
こちやまた跡に殘る壺底
返し　法眼紹巴
殘るこそ猶も別儀に花があれ
うぢある人はちや／＼と呼れず
青　器音
庭の苔すき屋のたゝみそりたての
あたまも青き茶の湯なりけり
身の貧しく老けるにある人の
きようなる小袖たまひし返事
に　福安
本歌
年たけて又きようともおもひきや
命なりけりさやのお小袖
貧しきに親しく語る人のふる
き布子を染直しきていとたの
しといへりければうち笑ひて
南歌
本歌
つきやあらぬ色や自慢の色ならん
布子ひとつをむくのみにして
題しらす　久清
同
きく度にめづらしければきる物に
いつも初音の香をはとめけり
入江殿より青き綿帽子を送り
たまひける返事に
法印玄旨
えてかつくぼうしの色の青のりは
入江のあまのしわざ也けり
ある人のくろき帽子をえさせ
ける返事に　行風
かづけ給ふ帽子をみればまくろ也
色もきにあふ冬の音信
和歌學ふ人の許より俗にひと
もしといふ蒜を送れりける返
事に　牡丹花
一もしに三十文字はなど添ざるぞ
さすか其身も歌をよむとて
師走になれは町屋に燒亡强盜
の守りに自身番といふ事ひと
りのみならす二人三人より居
てするをよめる　保友
諸本詞
あひ番の宿をならべて門の前
井筒によるの火ようじはよき
題しらす　貞徳
冬の夜はなめしをいつもたび給へ
足のかはまであたゝまりけり
あぶりくふ顔もいろりの田樂に
くし／＼おもふ事そわするゝ
北野邊しはす通れは借錢を
おい松もありこうばいもあり
春丸
節分の鬼よりこはき借錢を
打はらふへき大豆板もかな
瑞南和尙へ炭三俵送けるに
言當
いろりにはをきたらじとぞ思はるゝ

四すみの物にみすみ送れは
鱈を得し返事に　長嘯子
さいまつといひてくれける雪の魚
くひたら味のきえ〳〵とせん
貧しくて春もうくべき糧なか
りけるによしありけれは定家
卿の許へ申遣し侍りける
曉月がしはすのはての空印地
年うちこさん石ひとつたべ
返し
定家がちからの程をみせんとて
石をふたつに割てこそやれ

物名

保友のぬしいにし年の暮より
音信たえて睦月望日もとはて
過にけれはそれか名をかくし
てよみて遣しける　行　風
春の禮にこざりやすとも待程に
まつの内さへ打ち過て候

かへし　保　友
松の内にまつかひなしや出なしと
述懷中のもつとものうた
行風か字懷中といへばなる
べし
北村氏季吟か息休太郎といへ
る十一歳なるがいにし歳旦の
歌よめりと睦月末に季吟方よ
り書つけてこしければ返事に
休太郎といふ名をよみて遣し
侍りし　行　風
愛らしき歌らうたしな是やこの
親の名までもあげまきよなふ
返し　季　吟
情ふかう風体もよきことの葉は
懷中させて秘藏させてん
ひらかた　久　淸
所から天の川なる水いろに
ひらかたびらを染んとぞ思ふ
ある人のもとへ柿と梨と送る
消息に　自　由
何事もなしと申さんとばかりを
只一ふでにかきおくるなり
神尾氏若狹守冬更て八幡へ登
山有て只今の有樣を狂歌によ
めと有ければよめる
信　海
頃(このごろ)の寒をいたすわか山に
のほりたまふはわかさ也けり
伯耆國かゝと言所にて釣人の
家にとまりてよめる
法印玄旨
哀れにもいまた乳をのむ蜑の子の
かゝのあたりや離れさるらん
長門國たらひと言ふ所にてか
れ飯くひ侍らんとかり宿りに
あるとき下部どもの足にまめ
といふものゝ出來てあらふに
いたきなといふを聞てよみ侍
りける

さしいれてあらへる足のまゝ多く
　馬たらひとや人の見るらん
　雨の降る日馬三疋の毛色よめ
　といふによめる
　　　　　　　　　讀人しらす
雨ふれは道はあしけに見ゆれども
　日かけのさくは驄てかはらげ
　大和國不動院頼智狂歌草こし
　ける次手に此後々も歌の道ひ
　きたのむなどこまへ／＼と申さ
　れける返事にらいちの名を
　　　　　　　　　行風
此いらいちゐんなれゝは足引の
　やまと歌もて申し通せん
　歌舞妓若衆小金といふもの小
　歌の音頭上手なりしを
　　　　　　　　　以春
音頭の歌にて人をよふこ鳥
　古今一部の大事とそきく
　町童鶴や淸兵衞といふ者歌會
　に出座せんと約して其日にな
　りてとみの事ありとて來らざ
　りけれはよみてつかはしける
　　　　　　　　　長嘯子
はり弓にかくるつるやの精兵も
　筈をちかへて星にあたらず
　雅純朝臣のもとにまかりける
　に折からの和歌二首よみたま
　ひいづれぞさだめとよあるを
　いかでさることはと辭し申け
　れどしゐて仰ければ一かたに
　申けりさまとありながら猶あ
　んじたまへれば庭田雅純の名
　をかくして
　　　　　　　　　行風
此方にはだまさず見つゝよしと言へと
　なにはかはとの歌のうたがひ
　かへし
　　　　　　　　　雅純朝臣
修行よくいつしき島の言の葉に
　かう風体を得たる人そも
　美濃國にありし衣下僧國守に
　そむきて所をのくとて
　　　　　　　　　讀人しらす
天か下ひろくはるかのゑげ笠を
　さしてみのには執心もなし
　いつれの時にか有けん町童の
　飛鳥井殿をせうしたく侍れは
　かねて申上侍る也十日廿日の
　うち御心に任させたまへと申
　けれは幸ひいとまありあすま
　かるへしとおはせける時によ
　める
　　　　　　　　　讀人しらす
今日言てあすかいこうと御意あるは
　あまりはづみて出がござらぬ

廻文

　題しらす
　　　　　　　　　みとく
ねぶりつるかゝりたき捨なみ暗く
　皆出すぎたりかゝるつりふね
　無常
又とびぬめとをと哀れぬししらじ

死ぬれは跡をとめぬひと魂
　釋教　　　　淨　治
しらるなりいまゝ清水の名ばかりか
花のつみよきまいりなるらし

古今夷曲集卷第九

雜下付哀傷

　天　　　　行　景
空色がそらのあるじの幕ならば
　月やうら紋日やおもてもん
　　　　　　　來　焉
万物のそだてらるれば月と日を
　あまのはらなる乳房とや見ん
　寛文癸卯年春三月より夏さつ
　きまで入日のまつかいなるこ
　と有けるによめる、
　　　　　　　瑞甫和尚
空腹をたつるかそれは何ことぞ
　かほをあかめていらぬ夕陽
　月　　　　　　滿　永
空の海に月の御舟の名をつけば
　三界丸とさまをすべきなり
　風　　　　　　久　清
味ひをたがなめしりてから風や
　又あま風と名つけそめけん
　大和國尼か嶽といふを見てよ
　める　　　　　　正　信
尼か嶽のかしらにおほふ白雲は
　綿ぼうしとぞいふべかりける
　有馬山にてよめる　正　直
有馬山ゆに入相のかねの音は
　諸病無病ときくそたふとき
　　　　　　讀人しらす
有馬山高きは湯女のこゑのみか
　二階住居におさかなの代
　茶臼山をよめる　やすとも
天王寺石の鳥居を切たてし
　あまりのありて茶臼山かな
　駿河國宇都山にて
　　　　　　よみ人しらす
鐵炮にうつの山邊の十團子
　ひだるき時の口藥かな
　同し處に團子うるものゝ酌子

もてかならず十つゝすくひあ
くるを見てよめる
藤原雅章卿
すくひやう其名たがはぬ十團子
酌子定木もかたは有けり
中納言藤原政宗
本歌
とをだんご十づゝ十は喰ぬとも
をさなき口にあかん物かは
富士山を見て　讀人しらす
月と日を地に落さじと半天(なかぞら)の
つゝはりにかふ富士の大だけ
澤庵和尚
風はこぶ半の雲をひき繩に
ふじの高根の墨ぞしらるゝ
道　明
本歌
風になびく富士のけぶりは西行の
口より出しいきかあやしき
讀人しらす
雲の帶かのこの小袖ゆき長に
だてをするがのふじの山かな

法橋由己
富士の根を自然枕にせん人の
足をのばさばむさしのゝ原
行　風
臺の物に山をするがの富士ならば
むさし野をこそ盃にせめ
卜　養
尾も白し頭も白しにはとりの
ひよこかふじは時しらぬ雪
みとく
のびあがる足高山もふじのねの
腰たけにさへ及ばざりけり
久　淸
酒のみてふじの高根の雪みれば
心もうきに浮島がはら
弘誓法師
足からに灸をするがの富士ならば
ひねるもぐさやたごに一はい
石見の國銀山へこえて見るに
やまぶきといふ城の在處の上

あにるを見て
法印玄旨
城の名も斷りなれやまぶよりも
ほる銀を山ぶきにして
正　成
味ひも色もそれかと三芳野の
葛につさかのわらび餅かな
不破關にて是かれ友とち曉が
たまて酒宴する折しも玉子の
肴出しければよめる
久　淸
鳥と共にうとふ酒宴の肴にと
料る玉子のふは〳〵の關
關
雄長老
ぬいめづけに雲井の雁を染たるは
たが肩衣のもじのせきもり
淡路守宗増
ことはるを今日は幾たり通せりと
書つけてをくもじの關守
玄　康
さりともと引とゞめつゝ一筆を

所望せられてかくもじの關
橋　むねます
眞中は皆朽はてゝあともなし
昔ながらの雨の橋ぐゐ
瀧　白言
寄浪のねがはにせじと津の國の
皷の瀧をしたゝむとうつ
ひさきよ
謠ひまふ袖はかへさもしら波の
うてる皷の瀧呑の酒
小濱氏嘉隆伏見へまかるとて
狐川のわたりに舟とゞめ消息
こされけるにやがて出あひて
かく申侍りける　信海
御懇書にばかされ出てきつね川
さいはい〳〵やあふて語るは
吉野川の水高かりしを渡ると
て人のころびなかれけるを見
て　永明
つまづきてうきぬ沈ぬよしの川

よしやよしなき水心だて
相撲國酒句にてよめる
德元
氷をもつきぬくばかり流れ來る
鑓のさかはの水の一筋
河　滿永
どう〳〵となるも響くも打よする
波の皷はかはのはりあひ
海邊眺望　むねます
渺々と限りもなみの海つらを
打あふのひて遠見をぞする
題しらす　雄長老
橋立の松のふぐりも入海の
波もてぬらす文殊支利かな
讃州小豆島をよめる
宗也
四國にはあはばかりぞと誰かいふ
小豆も島に有ける物を
播磨國に鍋の島酌子といふ所
あれはそこにてよめる

鹽ははやよき程なれやなべの嶋　法印玄旨
酌子を中へいれてみつれば
明石の人丸の舊跡はいつの代
にか城をとりたてらるゝとて
二の丸の外へ移され今あるは
昔の處にはあらずと人のいへ
れはよめる　讀人しらす
あかしなる人丸は今二の丸の
石かきの本となりにけるかな
いかなる事にかありけん高砂
の鐘樓より落ければよめる
本歌
高砂の尾上のかねをおとすなり　宗也
たれをとらへてしる人にせん
浦　久清
鹽竈の茶釜なりせば風爐先の
屛風かうらと見るべかりけり
題しらす　利清
姫松は神樂神子にて住の江の

岸うつ波は宜禰がつゝみか

或人涎の濱より脇指をゝこせて目利してよ銘なとも能侍らは主になるべきと消息ありし返事に　法印玄旨

脇指のしろをしとへは安吉の
なかごたゞしきめいの濱かな

或修行者つかれて醒井の邊に休らひ鼻紙より麥の粉を取いて水にうけて呑むとしけるか山風に吹ちらされけるによめる　讀人しらす

賴みつる麥粉は風にさそはれて
與さめか井の水をこそのめ

禁中　むねます

入口に一枚にてやたらざらん
ちいさき板を脇にはぎの戶

江口のわたりさらしの里にてよめる　宗也

此里は江口の君のめされたる
きやふのあまりの酒しなる覽

木搖礒梅澤里をよめる　德元

はらみぬる女の腹か子ゆるきの
いそぎひもときむめ澤の里

石畠といふ處にてよめる　近吉

作り物ぬすまれじとて番をする
行義もかたき石ばたけ哉

伊勢のあめ名物なりと人々の買ひけるを見て　弘重

をしなべてあまてる神のまいり衆
つをばひきぬる伊勢飴のあぢ

瀨戶にて　光廣卿

つくづくと見ても喰れぬ物なれや
口なし色のせとの染飯

身延のわたりうつふさといふ處にて　日蓮上人

うつぶさにさのみに人の寐られねば
月をみのぶとおきかへるかな

或貧しき僧のもたる寺を金銀をもてもらふべきとしれもののいへれどうけこはざりきと語る人にかはりてよめる　伊貞

師匠より讓られにける一寺をば
千金とてもいかでかゆへき

百首歌の中に閑居　入安

世間をひつきり竹のかくれ家に
心ゆるりの茶湯をぞする

玄康

錢かねもあるほど人にくれ竹の
世を遁れては樂なおきふし

雄長老

世を遁れかゝる淋しきめにあふを
やまいつたとや人のいふらん

題しらす　中務丞基佐

壁一重となりにだにもとはれねば
貧ほどふかき隱れがはなし

井につき際目の論有けるを扱

ひ濟しける座にて　雅珍
中汲で扱ひぬればこの井戸の
際目の論も水も澄けり

赤土をもとめ壁の上塗せし時
よめる　重賴
本歌 昨日まで余所に思ひし赤土を
今日我宿のかべと見るかな

錢湯の風呂に楊梅瘡わづらへ
るものゝさなきふりにてまぎ
れ入事たびたびなればよめる
重故
本歌 あかなくに又來て風呂に隱るゝか
かさかきのけて入ずも有なん

兼て見くるしかりし宿に新し
き疊もとめて敷ける折に
光知
本歌 疊こそ今はしくなれ是ならば
たが御座ゝとも苦しかるまじ

紀伊國にまかりけるにあひし
れる僧の是に足もとゞめよか
しとなれど心留らざりけるを
是非とてわらぶきのせはき菴
をえさせけるに何の役もなく
しばらくあるとてよめる
道明
わらぶきの室にあけ暮寐させつゝ
あるじは我を麴にやする

駿河御普請の時八木高直のと
り沙汰をきゝて
參議源忠興
富士よりも米大豆のねの高ければ
普請まかなひ何とするがや

法印玄旨公方の御普請の料に
國本よりおほくの米をとりの
ほせられければ御普請終りて
も猶米のこりけりよしありし
人なれば米百石えさすべしと
りにこし侍れと申ける返事に
宮川尼
御普請の用にもたゝぬ此尼か
百の石をばいかで引べき

普請する時親しき人の許へ申
遣しける　讀人しらず
柴柱繩なともちとくれ竹の
ふしんにことをかきも社すれ

俵十もらひに遣すとて
御無心は百足と手ほど申せとも
又此たびは俵とをたべ

名所松　宗朋
いつの代にたが彩色で住の江の
松をあをきが原にしなひた

題しらず　太閤秀吉公
筥崎の松は奉行にさも似たり
直なとみれどゆかまぬはなし

縮輪　宗珀
落葉かく親子のものゝいさかひは
ちゝりなりとぞ住吉の松

主のあふせにて木の枝おろし
にのぼるとて　よみ人しらず

本歌
あぶなく〳〵登りはすべし枝もなく
高き木のそらくるしかりけり

獸

四々ならば十六つれて行べきを
くゝにもるゝか一ツはしるは

牛を盜まれて里のおのこども尋ね出ける野を通りあひにければ此僧のぬすみにがしけるにやとあやしみけるをさるものにはあらず西行といふすり行者なりといへばさらば十二支をいれて牛ぬすまぬよしの歌よみたまへゆるしなんはやはやとせつかれてよめる

午未さるとりいぬよそちもいね
うしとらぬさへうきなたつみに　未得

腹皷うてる狸のをのづから
身にたしなみてもつや胴皮

孫よりもゑの子かへとはむば玉の
よる〳〵思ふ用心のため　道寛

よく化て嫁入をする女きつねよ
夜るの殿上にさらればしすな　道明

母にいつおくれはしけん小鼠の
あけくれちゝとなく聲のする

前關白信尋公へ淀鯉奉るにそへて　昌俊

折よくは申させたまへふたつ文字
牛の角もしたてまつる也

返し

魚の名のそれにはあらずひまの折
ちと二文字牛のつのもし

鯉を乞させける人の書札に扁を誤りて獸扁に書こしける返事に　宗吟

山の芋うなぎに化する證據もて
鯉をたぬきになす扁もあり

題しらす　致二

本歌
朝夕に吸へばこそしれ住吉の
蛤汁のしほのあんばい　雄長老

貳ほど世をへつらはぬものはなし
むさき人にはことに近づく

本語
燈　正信

戸ほそより落ねど是は常住の
ともしかゝくる油つき哉　久清

火袋も匂ひふくろのたぐひかや
丁子かしらの中に見ゆれば

蠟燭ともしけるにいたうなかれけるを見て　宗恒

本歌
ながるれば又會津もや忍ばれん
牛と見し夜の今の蠟そく

筏士　重故

芳野川瀧とびくちをあまたもて
手わうざわうにくだす筏士

海賊　久清

白波や海賊どもののる舟は

人のたからを奪ふて取揖
鼠色頭巾かつげるを　道　明
しやつきりと糊けの有を被(かぶ)れるは
ほんのねずみの頭巾なるべし

或僧に足袋を給るとて
前關白左大臣
本歌
此たびは我もとりあへず人くれつ
はかうはかじはそちのまに〳〵

御かへし
本歌
たびたびでかたじけなしと頂けば
頭上まん〳〵脚下まん〳〵

子を手習にのぼせてをきし人の革足袋えさせてほどなく又五足を贈りこされし返しに
昭　乘
たび〳〵に送りくださる忝けな
是も御息のござるゆゑかは

京の人大坂に足皮誂へおき便りにのぼせてよといぬめり出來たりし時足皮師にかばりて
行　安
本歌
便宜あらはいかで都へ告やらん
今日しら皮のたびが出來ぬと

或人よき筆をもちたるを年月所望しければえさせける時せうそこの奥に
方　救
調子よき所望なればとくれ竹の
あな〳〵嬉し秘藏せうよの

尺八稽古する人のもとへよみてつかはしける
行　風
尺八の音色は習ふ初手よりも
いきごみぞたゞ安田いしなる

少隣といふものゝ方へ皷筒目(一本の)利してよといひ遣しける消息の奥に
德　元
ちゝとちとちと見てたもれ此皷
ねはいかほどかせうりんの坊

返し
とたん〳〵たんとで無用此皷
ちゝつちとならかうてとくげん

源氏外題の歌の中に桐壺巻
淡路守宗増
若宮をもうけの君のもてなしに
よき茶たてんと口を桐壺

末摘花
たはぶれに人のかほにし紅をぬり
末摘花のさきを見よとや

紅葉賀
今日の賀の酒は五十も呑つべし
もみぢの色に顔もなるほど

花宴
南殿の花の宴にしさしうけて
呑ぬる酒のかんたちめなり

あふひ
なやみぬる葵の上のものゝけは
さぐりてもしる人の生靈

繪合
繪[illegible]の中にもあかく色ざるは
朱雀院より出しなるべし

篝火

一本ちかやかに
ちるやうにおそばへよるも爪琴を
ならはせたまふ篝火のもと

若菜

年はつむと白がも皺もなかれとて（本め）
いはふわかなの上下万民

横笛

寐てゐての夢につたふる告あらば
名をよこ笛といふはもつとも

竹川

たはふれに爭ふかけの碁なれども
たがいにからむこゝの竹かは

宇治のうち總角

かうばしき薫りを内へ入れんとて
ねやの戸口のみすをあげまき

寄生

姫君はあかしのお子であらずとや
さてはいづれの腹にやどりき

浮舟

人がらもかほるに似せて匂ふにぞ
うからかされて心うきふね

手習　雄長老

奈良油〻初瀬出さまにおとしつゝ
小野ずみにてや手習の君

夢浮橋　貞徳

道照がいだせるよりもあたらしや
うち十帖のゆめのうき橋

いづれの御時にか有けん公方の御前にて連歌のありしに天神の名號、風の吹をとしければとりてかけよとおほせられしにとりあげかくるとてよめる　順阿

菅原と今それがしが二度のかけ
それは高名これは名號

いづれの御時にかありけん床に烏丸殿の手跡かけたる處にて　讀人しらす

飛かける文字の黒く見えけるは
烏丸殿の御手かは〳〵（一本手跡かあく）

鈴木氏の人額所望しに來りける翌日書てつかはすとて消息の奥に　信海

なにぬねの馳走せぬ間立つてと
暫しも申しさしすせそかな

返し

慇懃に望の額をかきくけこ
ごおん生々世々忘れめや

題しらす　ひさきよ

礫文字うちつけ書、する時は
薄き屏風の紙や破れん

讃歌の題所にし集るは
鍋とり公家に限るべきかな

湯島の天神別當喜見院が許へまかりけるに兼て狂歌頓作聞及び侍り所望といへば　信海

我歌に作意の自由しまするを
さらば申してきけんゐんかな

かくよみければ狂歌とても自慢はいかにぞやちと卑下あり

てもよかるべしと傍なる人の
いへば又
狂歌には自慢天満大自在
天神ひばをしてもよけれど
八幡山寶藏坊より表具細工た
ぐひなき上手なりと狂歌もて
褒美せられける返しに　泉　齋
表具師はぢく軸してぞ嬉しがる
のりの道しる人のお歌を
返し　信　海
御返歌の字くはりは天下一文字
上下万民感じこそせめ
あるやんことなき御方にて御
遊のあまりに狂歌よめと仰け
ればよめる　可　悦
御意なれば三十一もじ二もじに
あまり申せばおそれなりけり
歌書てえさせよと度々申ける
人の許へ遣しける　遠江守一政
本歌
えぬ歌をまつほのうらみいふ人に
かくやもじさへ筆ふるひつゝ
勝尾寺に義空とて狂歌の上手
あり彼には及ばしと人のいへ
りければ　信　海
我歌になどてあなたがかち尾寺
のごきくぎくうさせてみせまそ
鷹筑波集の奥に　貞　徳
犬よりも物しらぬ身のあつむれば
ゐたかつくばと人ぞいふべき
此集編んことと兼て重頼に聞へ
けるに狂歌よみてこすへきと
ありしがおそなはりければか
く申つかはし侍りし　行　風
本歌
名にしおはゞいざこれとはん都衆
わが撰ぶ狂歌ありやなしやと
狂歌點取の奥に書附て貞徳が
許へ遣はしける　爲　盛
はいまはる腰折れ歌を筆にのせて
書とおくるははゞかりて候
あるもの丶歌をよみて點をこ
ひけるにそ歌やあしかりけ
ん批判はなくて奥に　曉　月
てむまでは及もなきぞみぞいたち
和歌の道にはまかげさすとも
誹諧連歌百韻點取の奥に　日能法師
書附る此はいかいはやれすのこ
たけのなけれはつゝられもせず
返し　貞　徳
たけのあるこのはいかいを書附て
やぶれずのことといふは盗人
同じ點取の奥に　玄　札
本語
はいかいの功なり名とげ給ひなば
我にもてんの道を敎へよ。
返し　ていとく
あつばれやかほど功ある誹諧の

てんの道には身退くなり

謡外題を百韻の誹諧連歌にし
點を望みける章の奥に書附け
る

喃是は如何なる仕手ぞつれはたぞ
わきにあるまい謡はいかい

同じ誹諧の點望みける發句に
東北をしてければ　卜　養

てんたうにかなふ詠吟すくなくて
東卜養を恨みたまふな

此集編侍る半に河内國定林寺
の邊りにある僧狂歌草の上つ
つみに筆結の二藏と書附てこ
し侍り其歌なべての人の口か
らにはこえて覺へければ草の
奥に作者の名は筆結の二藏と
やそれが結し筆をとりて物の
理りを書述し三藏をもはつま
しき作意ならし殊更歌の數十
七首は定林のわたり近くすゝめ
るとなれば彼憲章をもへるに
やさてかく申遣し七首をぞさ
め侍りける　行　風

憲法にあふ歌數の十七の
七首よきこそ七不思議なれ

誹諧連歌の判をこふとて貞德
が許へ申遣しける　唯　正

はいかいのまきのあら駒口こはく
はめるくつはのゆがむ躰かな

いづれの御時にや五首の勅題
下されけるをかしこまりて先
よみて奉し歌

勅として歌のおだいを下さるゝ
辱じけなしや殊にごしゆまで

題しらす　ていとく

連歌師はをんな子なりと覺へたり
さしあひもあり妊み句もあり

硯箱の蓋に漁父舟の蒔繪書た
るに狂歌よめといひければよ
める　信　海

れうし舟硯の海にこぎだすは
魚のまきゑをするにこそあれ

筆　宗　訊

鹿の毛は筆に成てもやすからず
とかくれうしのうへで果れば

德　元

むかし〳〵よみ置く歌の今の世に
のこるも筆のながき命毛

紙　未　得

鳥の子に小鷹おほたかひきあはせ
つかひあかぬは料紙也けり

人の弓をかりけるに射る毎に
かへりのみしかければ主のか
たへ弓へそへて申つかはしけ
る　讀人不知

此弓はかへりたがればかへすなり
しばしこなたに射るを給はれ

僧の還俗せしに魚くはせ大小
などえさせければよめる

本歌 今日や此僧の衣をぬぎすてゝ

君が大小さしたてまつる

碁　　ていとく

印地するわらべの智恵と互角なり
石のうへにて勝まけをいふ

雙六　　行　風

川舟をのぼすに似たり雙六は
さいつひいつに手のひまがない

本歌 題しらす　　讀人しらす

堅い砥をこなた彼方にとぎかけて
あはずは何を剃刀にせん

あるやんごとなき方より名ある壺に茶を詰てたひけるを御禮に遅くまかりければ壺はいかにとおほせけるによめる

御禮をちやくと申さん壺なれど
つまりにけりな口をはられて

題しらす　　浄　久

茄子なりの茶入の蓋の細工をば
へたにするこそ上手なりけれ

秀吉公御秘藏の井戸茶碗をめしつかはるゝ者のとり落してわりければ御氣色あしかりしを御前なる人のよめる歌

本歌 筒井つゝ五つゝにわれし井戸茶碗
とがをば我におひにけらしな

土佐燒の茶碗えさせける人の返事に　　貞　室

國の名のとさんの茶碗手にふれて
朝鮮よりも我は寵せん

題しらす　　雄長老

呉竹のふしみにもなくはる〳〵と
京まできりにのぼり竿かな

同　　みとく

手のきかぬ女子の親の折檻は
針を棒にや取なほすらん

後陽成院の御時めさるゝ事ありて内へ參りけるに殿上なる人々只上に御小刀細工あそばさるれば暫く待ちねと申されければそのほどによみ侍りける

墨壺のいともかしこき勅作は
これぞ千秋万乘の君　　法印玄旨

題しらす　　平時頼朝臣

から傘のさしたる咎はなけれども
人にはられて雨にうたるゝ

鞠　　久　清

本歌 昨日すぎ今日暮よくて飛鳥井の
なかしの曲もはじまりの塲

蓮花寺にて中酌の酒の出けるに詠る　　信　海

濁り酒の濁にしまぬお心は
中汲てこそしるき蓮花寺

奈良の酒家にて酒すゝめけるに兎角時宜しけれど後には大酒盛になりたりと人の語るを聞て　　源有純卿

本歌 なら酒やその手作りを時宜せしは
とにも角にもねち上戸かな

題しらす　行安

本歌 汲かはすさゝのおなかに満ぬれば
身をじゆくしとぞ我は酔たる

親しき方にて酒すゝめられけるに是は味なし彼はよしなどいひければさかくいひて盃の數重なる事よと笑はれけるによめる

わたくしも難波にすゝめばすゝの酒
よしやあしとてたべませいでは

これは〳〵大酒のまるゝ事よと亭主の笑へりければ　讀人しらす

あがり子の椀をおりべに擬へて
八たびのまばや酔時のあらん

返し

あがり子の椀をおりべになせり共
てうしのこりて酒や殘らん

題しらす

本歌 道すがらしどろもじずり足もとは
亂れ初にしわれなら酒に

酒宴半にめしつかふものゝ樽なる酒を有やなしやとふりて見ければ咄と笑ふかうちに客にてよめる　安繼

本歌 樽のはらふる酒きけばかすがなる
みかさものまで聽てつきかも

或酒家より一瓶をえて返事に　貞直

涌出る庭の泉の壺本は
人のなさけを請てこそしれ

奈良のわたり木津といふ處に知人あり立よりけるにもとより酒好むをしれりければ盃もて出ながら折ふし美酒侍らす水くさき酒なりといへればはやうけもちてよめる　宗丹

木津川の水くさ酒と人はいへど
宇治梅尾の茶にはましたり

題しらす　滿永

本歌 世間にたえて酒もりなかりせば
下戸のこゝろは嬉しからまし

正定

本歌 我こひ湯鹽けも見えぬをき〳〵は
人こそしらね酒の酔ひざめ

大峯の圖司のわたりにて人々誹諧連歌せしにいとせばき家なりければゆふけもる器物こしらへる酒席に聞えければよめる　李吟

大峯の圖司のあたりの近さにや
なりわたるらんごきもぜんきも

返し　貞室

五鬼前鬼なりわたれるを咎むるは
山伏山の町衆なるらん

季吟の住處山伏山の町なれば成べし

松井氏のぬしあるじまうけしけるに相客の遅かりければよ

める　　　　　　　　法印玄旨

本歌
こぬ人を松井かもとの振舞に
やく鹽鯛のみもこがしつゝ
つかれたる折しも人のほしな
めし喰ひけるを見て
　　　　　　　　　　宗　鋪

本歌
こゝにしも何匂ふらんほしなめし
人の物くひこゝろにくきに
狸汁　　　　　　　　貞　德

腹までもまだ人たらずうましとて
舌皷うつたぬき汁かな
七條前大僧正宣如より折に餅
みづから煎榧を入て折からに
めでたい事をもちゐけりみづ
からきもをいりがやにしてと
よみて給ひける返りことに
　　　　　　　　　　貞　德

自らかえ持ませねばたべたいと
存ずるをりにおきもいりかや
大佛餅　　　　　　　未　得

上もなき大佛餅の本來を
さされば米の菩薩なりけり
大佛まうでせし人の留守にを
りて　　　　　　　　近　吉

後世のみかまいりし人の土產には
大佛餅もねがひものなり
良恕法親王の御所にて蕨餅出
けるに重のふたあけざるさき
に狂歌よめと仰せ下されけれ
ばかく申あげ侍し　行　風

本歌
飢のやむは何でもかでも同じこと
宮もわらびの餅まいれたゞ
家貧しくて朝夕にみそうづを
たくによめる　　　　理　西

手とり鍋をのれは口がさしでたぞ
みそうづたくと人にかたるな
蕎麥搔餅出ける座にてよめる
　　　　　　　　　　法印玄旨

薄墨につくれる眉のそばがほを
よく〳〵見ればみかご也けり

茶と酒との論有ける座にて
　　　　　　　　　　みとく

たてゝ猶宇治茶の色も青によし
なら諸白にいかでおとらん
栂尾の僧より手作なりとて茶
を給ひける返事に
　　　　　　　　　　よみ人不知

給はりし栂尾の茶はすぐれたり
是や宇治よりそだちなるらん
たのみける人茶をたてゝたま
ひ是を題にてはや〳〵狂歌を
とあれば　　　　　　旨　治

ちやく〳〵とたてつけられて我心
そゝりし故か歌にうぢつく
淺草海苔に歌そへてえさせた
る返事によめる　　　信　海

武藏なる淺草海苔は名のみなり
お心ざしのふか川のもの
唐納豆送りこされし人の許へ
返しに　　　　　　　貞　德

手も足もまげ物にしてひさまづき
是からなつとうお禮申さう

石川氏なにがしのもとへいは
しづけをおくるにそへて　卜　養

本歌
世中の人は何ともいはしづけ
清酢にごりずかけてくふらん

或方より米三石賜ひたる返事
に　讀人しらず

日本さへ及びなき身に三ごくを
まゝにせよとの御意ぞうれ敷

親しくかたる人の好にて眞瓜
をのみくひければ衆ていさめ
けれども聞もいれずたゞくひ
にくひぬある時瓜たたりて赤
き腹煩ひければ申つかはしけ
る　卜　養

諺本語
腹中は赤地のにしきひたゝれに
くだしたまふは瓜のさねもり

腹のいたみに温石もておさへ
けるを見て　政　之

本歌
海原のそれにはあらでひへ腹に
おきの石とや是を申さん

題しらす　一　幸

同
病ぬれば今ばた〳〵となにはなる
醫を盡してもあはんとぞ思ふ

老人の身にありしなますてふ
病のいゑけるを見て　路　春

老ぬれば水もかれぬる身のかはに
ありしなまづはいづちいぬらん

足の灸のあと違ひたるをたが
おろしたると問ふに有馬山に
てと答ければ　貞　德

頰當にあらぬ物から有馬にて
おろすやいとの三里さがつた

題しらす　正　長

本歌
目の前を通るちんばや難波潟
みじかき足と是や申さん　宗　恒

本歌
津國の難波わたりの腰引は
足がなへかもえこそ見わかね　久　清

うろくづの生れかはりか海老腰や
かます顏にて鰐足の人

何はにつきあしき心もたる人
をいさめけるに露そのかたも
なかりければよめる　邦房親王

いさめても犬よりおとる人ならば
見ざるきかざる言ざるがよい

傀儡　源雅純朝臣

つら白くけはへる茶屋の出女は
いなり狐の子とやいはまし

大井川ながれをたてゝ住宿の
島田縮にし髮も遊君　保　友

うれめの人をたらすはおほ磯の
虎の威をかる狐なりけり　みとく

三　哲

うかれめのきるやちぎるや新しく
小袖もつまもかはる〲に

宗貳といふもの淺香といふ遊女に思ひ入て二世ともに打忘れたる氣色なればいさめむとてよみて遣し侍ける

可　正

足抜がならぬそうにぞ見えらるゝ
淺香の沼にはまりたまひて

非人　智　短

本歌 わけあればくるゝ物とは知ながら
猶うらめしをもらふ身の果

伊勢會山にて美目形きよらなる非人等三味線ひきをるを見て

近　吉

三味線のかはゆらしげな非人らに
あいの山程錢とらせたや

放下師　滿　永

本歌 あるはなくなきは數そふ品玉を
される手本は上手なりけり

八桴うつを見て　二　笑

橋ならぬ蛛手の曲の八ばちや
大鼓うつゝに世を渡るかな

刀を品玉にとりけるかいがゝしたりけん取落しければ囃子たる太鼓も拍子をうしなひ見る人どゝ笑ふが中によめる

一　幸

ふり上るたちつてとんと落すにぞ
耻かきくけこ太鼓うちまで

四條河原にてよめる

宗　恒

よせ太鼓日はてれつくと打いづる
波の音まで河原ものかな

女のまねして狂言舞しける源左衛門といふものを見てよめる

卜　養

又たぐひあるものでない過去未來
源ざゑもんが舞のなりふり

孔雀といふ太夫が勸進能をよめる

保　友

よせ太鼓音もたうから唐からや
わたる孔雀が能の鼠戸

未　得

囃子をばうかべ顏にてするけがは
木から落たる猿樂のげい

正　定

ほど拍子あふむ小町のうたひやう
これも師匠の口まねぞかし

小歌の上手なるを聞て

定　行

本歌 一聲に自由をこめし節なれば
きくともあかじ君が小歌は

巫　藤原光廣卿

弦音にとふ口うらをこたへけり
梓の弓のはづはあはねど

陰陽師　路　春

本歌 心あてにいはばやいはん失物を
おきまどひつゝ白波の算

源重保卿
木火土金すいりやうゆかぬ考へに
たび〳〵おのが首もなげさん

牡丹花
春日祭に田樂法師しそこなへ
るをみて
鷺足にのりはづしたる面目は
灰にまぶせる田樂の出

雅珍
座當の茶ひくとて强言のみい
ふを聞て
座當めがむづかしさうにお茶臼を
引のこくのと强まはるかな

座當の袴をき杖つきてありて
かたかくる繪を見て
如貞
座當の坊あたまは丸の杖つきの
たすきのなりの袴腰かな

みとく
番太郎をよめる
居ねぶるも奉公顏にあづさ弓
いびきの音のする夜番哉

博奕師
滿永
本歌 まけぬればくれぬ物とは知ながら
猶うか〳〵とうつばくち哉

獨友
市
本歌 杉たてる門をしるしに上戸ども
よりたかりのむ三輪の市酒

初知
米問屋
本歌 我宿の米の立直やよかるらん
思ひの外に客が來ませる

菅原在通卿
商人
賣買の利欲にまぎれ禮義まで
破れ袴の町人の躰

正成
獸のみかはをはいで見せ棚の
爰やかしこに岡崎の町

常胤法親王
紺搔
紋のみかあつらへやうの色いろに
染なす絹のいと利こんかき

光廣卿
ゐやうしてひらりと散すたびら雪
是や地白のかつぎ帷子

題しらす　前大僧正慈圓
それもいざ爪に藍しむ張物の
しいし取置く手縵姿よ

正愚法師
桶工
本歌 手をきかせ云ばそさうな桶かはの
われてもそこがあはんとぞ思ふ

鞠師
本歌 色見えてうつらふ物はうりすその
ふるき糀の花にぞありける

光廣卿
塗師
色に（一本つ）うく人の心の花うるし
跡はげやすき物とこそしれ

徳元
珠數曳
珠數曳の弟子がぶせうをする時は
だつま程にやめをみだすらん
水晶の玉さへみがく珠數曳が
心のうちやなどよくいにん

表具師
表具師がしやうふの糊は紙よりも

おのが命をつぐ爲ぞかし

大工　みとく
やすらかに軒をつたふて家つくる
木工をいはば蛛のいとなみ

夫妻石の繪を見て　信海
書ならばかうこそ有めかた〳〵と
契りも朽ぬめをと石かな

醫師の灸點違へし事よと恨み
言ける人の許にて　保友

本歌
そでないとえやは伊吹のさしも草
さしもの醫者も違ふ灸穴

題しらす　一幸

同
きくとこそ醫者は伊吹のさしも草
さしも知らじなあつひ思ひを

宗恒

同
わびぬれば今肌ぬぎて難波なる
身をつくしつゝかせぐ職人

ていとく
名人のながれをくめど末の代は
萬の道が下手のかはかな

わるさいふ子をよめる　久清

本歌
夜もあけば強(きつ)く抓らんわるさ子の
まだきに起てせなにおはるゝ

頼智

同
ぬきちらし着物ふみわけなく孫の
聲きく時ぞ婆々はかなしき

親の慈悲に前後なしといふこ
とを　末得
負子よりだく子に乳をば呑すれど
親の慈悲には前うしろなし

いとほしき子に旅させよとい
ふ事を　正長
庭訓の往來よりも道遠き
旅ならはせよいとほしき子に

貧しき人の子おほくもたるを
みて　讀人しらす
子どもをば餡にする程持たれど
いひがなければひ干にぞする

題しらす　行安
小姫子の隠れごにさへまじらぬは
もはや桂のはもじなるかよ

ある人の子を養子に遣しける
にいつしか下部につかひなつ
み水くませなどしければ本の
親のよめる

本歌
などてかく拐(おうこ)がたけとなしぬらん
水もたせんとは契らぬものを

題しらす　方救
美目のよきあしきはいかに母親の
おなじはらから生れたれども

常に作病をせし人を見て　久清
かたなりと名にこそたゝめ作病を
年經ておこす人の身上

題しらす　重宣
燒亡よふごしといへば女房の
またぐらのひも御用心あれ

雄長老
剃おとしかしら虱はなきとても

臍より下はいかにお比丘尼

疎からぬ人のいさゝかの事に遠ざかりけるによみて遣しける　頼智

挨拶のかはらでともにかたれかし
たとひ腹たつ事はありとも

双六すきなる人のさわる事ありて久しくまからぬなど消息しける返事　信海

雙六のさい〳〵ござれでつくりと
ゐすはる床をゝりはしつゝも

かたらふ事あればあすとひたまへと申遣しける人のまかるべしといひて後のあしたこみにさはる事はべりてえまからずと消息しける返事に　行風

いかにねて起る朝のへんがへぞ
昨日はこふと今日はこまひと

出雲國すさの里の百姓ら訴の事ありて京へのぼり評定所にては是非ともに事の斷りたゝしからずかれがわざよこれがわざよと味方のうちみだれあひにけるをみて　信海

壁土のすさはら出す百姓の
さがをたがひに塗合ぞする

増上寺万部の場にて所化どもいさかひし出て沙汰に及ぶべきなど取さた有ける時よめる　讀人しらす

公事にせば若もかたうか詞ろん
喧嘩の門か（一本た）僧のたゝくは

ざれたる斷にて人の機嫌なほりければ　みとく

そらさずに人の機嫌をとりけるぞ
是逸物のたかばなしかな

宇多院よりおはれてひとかたきになりける人のもとに　伊勢

のけざまに君におはれし我なれや
せなか合せに人のなるらん

題しらす　讀人しらす

父母が引木のごとくゆがみなば
茶臼となりて子よまはれかし

友知

借錢の淵ほどあるをたいらかに
なせるは金の砂子也けり

堂上と地下の人と相論の事ありしに織田氏右馬助といふもの堂上の人によしありけるにや非分なるをよくとりなしいひける事たび〳〵なりければよめる　平信長

錢轡はめられたるか右馬助
人畜生と是をいふらん

女院御所の御庭狹きとて曉月の屋敷をとりて御前の庭ひろげ給ふ時に　曉月

女院の御前のひろ〳〵なる事は

曉月坊が私地のいるゆゑ
曉月を近江國蒲生氏なる人い
たはりて寺地に田地などそへ
おかれけるにとかく我まゝの
たび重りければ處をたちのき（一本つ）
給へとこそいきける時によめる
曉　月
賫（ひよう）長鶴張博浮木達磨芦（一本つ）
曉月坊はこすきにぞのる
述懐　末　得
物毎にあらばありのみなしとても
もとめはせじな世はなり次第
休　甫
世にくへぬ氣は鈍栗のくり〳〵と
ぐりめき渡るこのみなりけり
行　風
何もいらぬ身形（なり）乍らに今日の世を
へちまの皮の團（たん）ぶくろかな
入　安
世間は拍子ちがひになり果て
舌鼓のみうつゝなの身や
題しらず　玄　室
ほめ誹る人事きかじと手をあげて
耳をふたげば結句かしまし
玄　康
中折や奉書椙原賣りきれど
貧報がみはかふ人ぞなき
世にうき事のみ重りける折か
ら同じ心なる人の許へ申遣し
ける
正　定
そちとなら油煙とも身をなし果む
思ひすゞりのすみあひた世に
題しらす　賴　智
（一本以下五首ナシ）
塵ほこり積るはうたて煩腦の
病にとしをふる疊かな
清生といふ人に米をかしける
をこひにやるとて
讀人しらす
（本歌）
貸米のくべき躰なりせいしやうの
お氣のふるまひ兼てしるしも
返し
（本歌）
侘ぬれば身にかゝり米の根をたえて
こふ人あらばいなんとぞ思ふ
ある人の取次にて鳥目かりけ
るをやがてもたせ遣はしかへ
したべといひやりければおそ
くてもくるしからずとてとり
つぎの人うちすてゝおかれけ
ればよみて遣しける
行　安
おあしをば返してたべと申やる
かひもなにはのうらみ存ずる
述懐　宗　恒
（本歌）
今こそはげ我もむかしは男よく
さかやき際もありこし（一本に）ものを
寄弓述懐　淡路守宗増
武官とてせなかにしこを老の身の
腰に梓のゆみを張りけり
夢想國師
老ぬれば腰にあづさの弓をはり

しばのいる矢にしゝぞ失ける

題しらす　満永

本歌 歩みての後くたびるゝ老が身も
昔は道を苦にせざりけり　智元

本語 長命をのぞむは耻をまつがねの
ふしさへともす徳は有けり

氣の毒なる折からかしらを撫てよめる　信海

百八のぼんのくぼまではげにけり
なごすりきりし（一本た）哀れ珠數の身

題しらす　讀人しらす

明暮の勤めにすれど珠數の緒の
まだきれがたき煩腦の道　元安

我心牛のふぐりもさだまらず
世をいとはふと言てぶら〳〵　従四位源忠次

着る物はとても角てもよごれぬる
こゝろのあかの洗濯もがな　宗祇法師

物毎にたらぬ〳〵と思ふこそ
まよふ心のつくり病ひよ

百首歌の中に懐舊　入安

力もち荷もち歩もちつよかりし
その腰肩になすよしもかな　貞徳

雀ほどちいさく老の身はなれど
うひたる人は踊わすれぬ　雄長老

祖父祖母非うば非祖父こご〳〵く
死なずに居ては何をくはせん　蓮生法師

いにしへのよろひに替る紙子さへ
風のいる矢は通さざりけり　未得

茶をのめばねられぬ老の初むかし
大むかしまで思ふ夜すから　満永

本歌 色も香も同じむかしの茶ならめど
たてふる人ぞ改りける

大磯の虎石を見て　讀人しらす

大磯の虎がかたちを殘すなる
石を見るにもおもひ物かな

和田酒盛をよめる　正成

盃を和田へとさゝば大いそに
名をとらごぜの鼻やそがどの

寐耳に水の入といふ世話を　正舍

藤川をやがて平家の落武者は
ね耳に入りし水とりの音

元暦の始八嶋の軍に沖の舟より扇をたてけるを見て義經奈須與一に仰せて射落させける時に　讀人しらす

扇をば海の水くづとなすのどの
弓の上手はよいちとぞきく

頼朝卿陸奥退治の時津久毛橋といふ所にて戰ひに利をえた

まひ降人あまたありける時に
よめる　景　高
陸奥の勢は味方に津久毛橋
渡してかけむ泰衡か首
軍に利をえたまひ武田四郎勝
頼父子の首實撿の時
平信長
勝頼と名乘武田のかひもなし
軍にまけてしなのなければ
敦盛熊谷をよめる　宗　也
敦盛とかの直實かふるまひは
日本一の谷とこそきけ
屈原　久　清
濁る水であらはぬ足のくつげんに
まさるべきらの漁父の智惠哉
貨狄
一葉のあふなき舟にのりそめし
貨狄はさても不敵なりけり
巣父　卜　養
世をうしとひつこみ思案する人は
さうふのわるき生れつきかな
孔子　雄長老
顏淵にへうたんをこそかりつらめ
海にうかばんと思ふ孔子は
俊成　行　安
なんばうの沙彌を經てかは和歌の道の
尺あみだとは成たまひけん
蟬丸　久　清
琵琶ともにひき籠ります蟬丸は
不自由なめにあふ坂の山
紀貫之が雨により田簑の島と
よめるを思ひ出て
本歌 雨により田簑の島の見物に　藤原兼定卿
笠をめさいでぬれしふらゆき
庚申　智　元
色相を見てみぬ人は惡心を
さる眼とぞいふべかりける
題しらす　雲居和尙
さいはひは願ふに來り禍は
愼む門にいらぬとぞきく

哀傷

昨日身まかりし人を壺に入て
埋みける時　信　海
きのふ死で壺に入たる亡者こそ
今日は實(まこと)のはつ昔しなれ
百首歌の中に　長雄老
死るとてゞこせぬ事をしだいたは
そもたれ人の所行無常ぞ
あひしれる僧の遷化の葬にま
かりけれどおそくてえあはざ
りければ　行　安
本歌 くわら衣きつゝなれにし僧なれば
はる〳〵きぬるだびをしぞ思ふ
猫のいたみの中に　休　甫
舟ならで棹のうたてやはりてひく
なぐさみせんの駒のかはゆき
大坂に又太夫といふ舞太夫あ
りしが臨終によみ侍るうた

來世にて又太夫ともなりぬべき
死ぬる時にもめこそまひ〳〵
臨終に碁打なりければ　算砂
碁なりせばこうを立ても生べきに
死ぬる道には手もなかりけり
誹諧師なれば臨終に　宗朋
ほつくりと死なば脇より火を付て
跡はいかいになしてたまはれ
背に癰瘡の出來て身まかる時
よめる　宗鑑
宗鑑はどちへと人のとふならば
ちとようありてあの世へと言へ
七十二歳にて終るとて　良忠
今日よりは算用いらず八間の
八く七十二にて皆濟
桶工身まかりとてよめる
よみ人不知

月日くれ身はふる桶の底ぬけぬ
わがあらばこそゆひも直さめ
題しらす　治貞
我死なば酒屋の瓶のしたにをけ
われて醂れて若しかゝるかに
五歳と當歳との子うしなひし
人の許によみて遣しける　頼智
本歌
世間は夢か現かいつゝ子も
うみおとす子も有てなければ
無常の心を　貞徳
生るゝも死ぬるも人はおなじこと
腹より出て野はらへぞ入る　未得
世中を思へばゆめかうつゝらが
八万歳もなのみなりけり
五輪を見てよめる　淡路守宗増
なくなるもまだ執心は少ばかり
殘るみるめは五輪こそあれ

市原野小町か石塔をみてよめ
る　信海
本歌
色見えてうつらふ物は石塔の
人の名がきの墨にぞ有ける
題しらす　未得
彼岸にいたらん時の帆柱や
舟岡山にたてる卒都婆木
百首歌の中に無常を　入安
たれも皆諸行無常や極上を
むくる茶湯のあはれ世の中

古今夷曲集巻第十

釋教

題しらず　聖徳太子御歌

照月のなかなる物の大弓は
あづちにたちて的にあたらず

荒鐵の土の始にと言二句此上に有也

秀吉公の御時信濃國善光寺の如來を東山に移さるべきとて本田氏善光といふもの如來を守護し上りける時に　讀人しらす

つみをきる彌陀の利劍は是なれや
粟田口より出るよしみつ

嵯峨の祇王が庵の尼留守なる時まかりて　貞徳

妓王妓女とぢたる柴のあみ戸には
佛ばかりぞおはしましたる

佛になればいかほどの長ぞと不思議する人のあれは

せいたかやこがら童子と聞く時は
佛のたけはふどう明王

芳野の花供をよめる　定行

散錢をまゐらせたればやがて又
たばるよしのゝ餅配りかな

初瀬詣に山たちにあひけるものゝよみけるうた

本歌
うかりける人は初瀬の山たちよ
はがしませとは參らぬものを

石山へまうづる道荒板の藥師堂にやすらひてよめる　貞室

石山へ行かち人は此堂に
あらいたやとて足も休むる

播磨のくにのもの世を厭ひて出るとて女の許へ申遣しける　讀人しらす

本歌
昨日まで袴のこしをはりまがた
今日はしかまのかちん十德

八十にあまりても堅固なる人の挨拶に　滿永

よはみなくかたじないしな禪門は
まだ幾年かへんとつをきん

釋迦の木像京より田舍へ移從の供養ありける座にて　雅珍

都よりくだらせ給ふ木像を
みれば教主の如來なりけり

或寺の内陣に繪かける折から狂歌所望ありければ　成安

寫し繪をみてらの内の庄嚴は
こむじやう後生緑靑のいろ

題しらす　未得

祐成の別れをなげきあまになる
日本の虎は毛をもをしまず

百首歌の中に　玄康

灯びをかゝげて夜半にする護摩の
油さゝんとつゝをふる寺
入　安

久米寺やうば塞いひのねばり有て
今も行ふ法のひとくれ

誓願寺の如來は日に一度づゝ西方極樂へ通ひ給ふと世俗言へば
讀人しらす

西方へ日々に通ふと聞からに
今もあみだの留主にてやある

光明寺張籠の御影の前にて念佛申せるをみて
器　音

くる珠數の弟子も師匠も念佛に
かねをはりこの御影堂かな

題しらず
正　好

法問を聞ほど奧のふかければ
口からうかぶ念佛申さん

淨土宗日中のせめ念佛を
宗　恒

貴賤群集法の庭とて市なせる
午のとき〳〵せめ念佛かな

蛸薬師に宿願かけゝるに利生延引にて年久しく詣てよめる
近　吉

歩みはこび珠數する事の年をへば
手足もたこになさんお薬師

京のなだやといふ者發心して大きなる鐘たゝき大笠きて京田舍ありくをみてよめる
道　仲

笠鐘もすてゝぼだいを悟れかし
生木に灘やきの毒な躰

小歌百八などすきけるものゝ俄に發心しけれども念佛も世をぬめりぶしにて殊勝にもなかりければ
正　定

尺八のあなうの世やといとひても
申す念佛はなほ小歌ぶし

題しらす
夏　虫

皆人は（一本敎こそ）しやかむにならめ西方の
みだれこゝろで申す念佛
實　久

身の塵を吸とらせんとだまし手に
琥珀の玉の珠數やつまくる

川渡の布袋の繪の賛に
澤庵和尚

にこ〳〵と笑ふ袋のをがきれて
水にうきよはてんばちのかは（一本安）

題しらす
行　好

皆人のもし成佛をするならば
地獄の鬼やかつへ死なまし

世の中は丿麻（へちま）の皮と思へと人のいへる返事に
信　海

心にはへちまの皮をたやすなよ
浮世のあかをおとさんがため

題しらす
權大僧都賴慶

海に住むたこ入道もとはゞ言ん
山のむかでが知つた生死と
淨　久

聖德の後世を願へとおしやりしを

守屋はあべとめをひろげたり

江州長命寺にてよめる　近吉

何番の札所と問へば長命寺
順禮うたの文字と數とや

題しらず　器音

邪見なる人の心の鬼迄も
やわらぎにける歌念佛かな

彼岸團子をよめる　未得

佛にも彼岸櫻の花よりは
團子と思ふたむけなるべし

流灌項をよめる　保友

本歌 行水に數かく經木はかなきが
あとは涙もながれ灌項

太西坊兩界曼荼羅の開眼たのまれけれど不屑なりとて辭退せしをしゐて申されければ供養して遣しける次でに　信海

兩界のまんだら〳〵と辭議するは
なにのかひげんなき身なればぞ

難產の時大般若轉讀によて親子ともに事故なかりければ導師の許へあしにそへて　讀人しらず

大般若はらみ女の祈禱者に
六百くわんの布施をこそやれ

圓通寺といふ僧舊忌に三日つゞけて請しける人のもとにて　昌長

一昨日もきのふも今日も齋に布施
やるは三世のゑんつうじたり

題しらず　正好

煩腦のあかによごれし花のぼし
とぎあらへかしのりの次手に

讀人しらず

恐るべし用心もせでくゆるなよ
火事に盗人さては後の世

來焉

橫に車押すとも人の法をえば
逆緣ながらゆかん極らく

寸行者の許へ佛事にそへ遣しける　正之

本歌 君ならでたれかはなめむ法味をば
あまいもすいもしる人ぞしる

圓融院の御時慈惠僧正内にまゐり給ひ女に五の障の經文いとたうとく談じたまふ折から御簾の内より或女房の申出されけるうた

有漏地ゟむろぢに通ふ釋迦だにも
羅睺羅が母は有とこそきけ

返し　僧正慈惠

いなやいなむきても見べき毬栗(いが)の
えめば一度落もこそせめ

西をあとさまになして小陽せ(一本用)られけるをある人の見て彌陀を念ずる行者の西方をけがせるはいかにぞやといへればよめる　安養尼

此尼が西方けがす科あらば

めし捕たまへ彌陀の御國へ
　蜆子繪によめる　澤庵和尙
いかばかり蝦をとり喰ふ報あらば
終には老の腰やかゞまん
　聖德太子胎内より持出たまふ
御舍利を貳歳の春手の内より
出させたまふ折しもわざとな
らず鐘七ッつきぬ其音雙調な
りとなれば他國のむかしも思
ひ合されてよめる
　和泉式部
南無佛の御舍利を出す七ッ鐘
むかしもさぞな今も雙調
　父母の子を思ふに越えて佛は
衆生を哀れみたまへど其御敎
にたがふ人のみなるをおもひ
てよめる　讀人しらす
父はうち母はいだきてにげぬるを
誠の杖と子やおもふらん
　尼ケ崎にて說法の時俄に雨降
出たり荒たる寺にて只漏りに
もりければ聽衆のものどもさ
わぐを見てよめる
　權大僧都日與
とつとその昔も今もふる雨の
もりやは法のさまたげぞかし
　末法になりて衆僧の信うすき
をおもひてよめる
　澤庵和尙
我法の花のいろはのちりぬるを
なげくに袖のゑひもせず京
　題しらす　よみ人しらす
下手の鞠今の禪宗のなまざとり
ありとはいへどあたらざり鳧
　道元和尙
千佛の出世ありともすくはじな
我と妄業このむ人の身
　發心して程なく破戒なるを見
て　源爲仲卿
髮それど直ならぬ氣はなまなりな
道心邪とや人のいふらん
　題しらす　僧正公助
あはれなり袈裟衣のみかゞやきて
まつくらやみの僧の心は
　雲居和尙
今人の因果菩提を信せぬは
破戒の比丘の仕業なりけり
惡比丘の其身のとがはさて置ぬ
人の道心やぶるうらめし
焰王の神通天眼しらずして
檀那たらせる僧の愚かさ
　十惡の歌の中に綺語
　行風
輕薄の詞に花を咲せつゝ
とれる金は何まいすぞや
　同し中に惡口
いきしちにひみゐりいとく理をも
非にいひなすや只口のしれもの
　五戒の歌の中に殺生
戒は只貝がらになし破りつゝ

躬をとりくらふ僧よ僧かは

同じ中に邪婬

色好む僧は佛の戒法を
かへり法界悋氣とや見る　知度

本歌
寺すてふ我名ははつと立にけり
大黒はようかくし置しが

同じ中に酤酒　行風

酒盛し手がはぢかみとなるならば
それをねぶりて飲んすきもの

大圓鏡智のこゝろを

むさし鐙さすがにかけて現世から
後世をもたのむ馬頭觀音

雪の降る日引導せられし時鍬の先ぬけゝるによめる　一休和尚

三界のくはぬけはてゝ今こそは
淨土の道にゆきぞかゝれる

題しらす　法然上人

口にある南無阿みだぶの味ひを
自力の人は喰ひしらぬなり

佛道にたゞ投げ入れてをけ寳
彌陀の淨土をかね倉にして　願信法師

名にしおはゞ救せたまへあみだ佛
生死の海にしづむ石龜　道明

たのもしな雜喉妄想をもらさずも
すくふあみだの誓ひある世は　末得

押並て釋迦の鑓の手つかひなば
つるぎの山のせめや遁れん

六十三歳にて終りをとる時よめる　休甫

我齡とはゞ七九の鐘木杖
かねは持たでもなむ阿彌陀佛

薦僧　みとく

祖師の名のふけといふより尺八の
竹のよをつぐ今の薦僧

題しらす　勝可

くうに有てくふて見られぬ望月の
その味ひを誰にとはまし

發心の日より行住座臥西向てのみありけり或時東へ下るとて道につかれうまにのるにうしろざまにのりながら詠る　蓮生法師

淨土にも剛の者とや沙汰すらん
西にむかひて後ろ見せねば

題しらす　葦葉

西方を目當にずゞのたまくも
念佛は樂のたねがしまなり　一圃

あひづかや佛を見るとらうそくの
たちまちはるゝ業障の闇

平等性智の心を　三哲

朝夕のお寺まゐりのはり小袖
のりのちからも有難くなる　智元

一心の水にかなけのある人は

あみだぶ〳〵とあくたれてとれ
　　　　平時賴朝臣
此世にて米のすこしも持たきは
うへたる人と寸行者のため
　　佛法修行を疊によせて
　　　　讀人しらす
慈悲おもく道の中籠智惠のへり
和歌のうらごも才覺の糸
　　疊師の後世いかにしてかたす
　　かり侍るべきと問ひける返し
　　に　　　權大僧都光宥
念佛をさしては申おかずとも
功たゝみなば西へ行くべき
　　紺搔に佛道修しえたるありと
　　聞て或人行て事の理を尋ねけ
　　れば返事に　　讀人しらす
板を鐘へらを鐘木にとりなして
かたのごとくにのり教へまし
　　釋敎魚といふことを
　　　　長　好
佛にはまだなまなりの魚の鮨
菩薩界までをしかゝりたや
　　百首の歌の中に釋敎
　　　　入　安
いもが子に限りしもせじ汁のみを
しやくしと成て救ひあげばや
　　題しらす　　讀人しらす
畫像にも木像にもよく祈る身は
病難死苦の遁れやはある
　　伊呂波歌の中に　　道元和尙
拈花(ねんげ)をば八万人にしめせども
迦葉ひとりぞ破顔微笑す
佛祖師經律論をからずして
直に覺るを禪僧といふ
はげまして自己の佛を悟らずば
六道輪廻たれか遁れむ
努力して今わがぬしを覺らずは
奈落の苦をばたれか救はん
えり嫌ふ二心ある人の身の
なすことは皆地獄てんごう
虎頭虎尾收むる時の勢ひは
金剛力もおよばざりけり
手をあぐも足をのぶるも自由にて
見聞覺知するは是たぞ
二と一の中間底に有物の
名字を何とつけて呼ぶべき
肉身をかへず佛になることは
只我家の座禪なりけり
十方の佛ぼさつとわけ置くも
皆唯識の所用なりけり
不去不來有無善惡にとゞまらぬ
人を自在の佛とは言ふ
　　題しらす　　貞淸親王
寒そうなりしんごむの行者かな
こぼれる水もあびらうんけん
　　寛永の頃聖護院道晃法親王入
　　峯の時よめる　　源重秀朝臣
本歌 山中はとても籠にはのられじと
宮もわらじをはきて峯入
入峯をよみはべりし

行　風

峰入や或は野に臥山臥の
　難行苦行やせこけの行

源俊治

笈頭巾かけ出三十六度まで
　峰に入るもぞ二世の願行

よみ人しらず

後の世の爲とおもはゞ慈悲心に
なさけをかけて他を利益せよ

雲居和尚

本來は無心無相の眞佛も
　五欲にひかれ凡夫とぞなる
戒たもち座禪念佛つとめても
　心あしきは造地獄業
何事も前世の業といふ人の
　菩提つとめぬ是ぞ猶愚痴
苦も樂も現世のことは一刹那
　迷へば未來流轉永劫
貴賤智愚僧俗男女別なれば
　菩提の修行分に應せよ

一念の慈悲眞實の種となりて
　九品の蓮華ひらきこそせめ

夢窓國師

寺を建堂をたてたる功德より
　たゞ常つねの慈悲や増しなん

藥草喩品の心を　　淨　久

自然降る雨を千百無量なる
　きゞにうくるやをのが分際

修行門の心を　　行　風

三毒に醉てふらめく病には
　釋迦の金言妙藥のよし

七世父母　　道元和尚

七世すぎ其父母をたづぬれば
　あなたは若く我は老たり

題しらず　　方　救

世に人の南無阿彌陀佛の口眞似を
　似せても似ぬは眞實の心

平時頼朝臣

角あれば物のかゝりてむづかしや
　心よこゝろまろ〳〵とせよ

隆覺禪師

をのづから角一ッあれ人ごゝろ
　あまり丸きはころび安きに

生ひては必ず死ぬる習ひとしつても知らぬや富るは色にふけり酒宴遊興にてあたら月日を暮し貧しきは朝夕むざとむさぼるのみならば來世とやらんにてたとひ兵庫のものといふとも彼焔魔王殿が御免あるまじきをおもへと童部の方へ遣し侍りし　　行　風

後の世も知でうつかりへうたんと
　なりさがるべき身を顧みよ

妙觀察智の心を　　道元和尚

圓からず又方ならず長短も
　五色にもなき我こゝろかな

題しらず　　理　西

極樂の金座敷は尻ひえん
　只行くべきは地獄釜底

道　寛
戀路よりまつすぐに入涅槃こそ
實に煩惱は即菩提なれ
雲居和尙
儒釋道みつのをしへの別ならず
善に善報惡に惡はう
名利是非貧富生死を忘れなば
僧俗ともに即心即佛
妙にして神あるものは心かな
天地にわたり微塵にも入る
變化所執の理を　澤庵和尙
一心に念に起せばさま〲に
變化のすがたうくる也けり
題しらす　弘法大師
我胸にふる盗人を持ながら
菩提の種に心ゆるすな
胎臟界の心を　行　風
我胸に法の智水をたゝへなば
瞋恚の炎もえもあがらし
經　讀人しらす
經といふ其字に五時の糸はへて
おり出す布は四教八教
佛心宗の寺にて菓子を出して
是に狂歌とある時　智　元
出來たるこのみのもとを觀ずれば
しやうじ離れし柘榴つぶ哉
煩惱即菩提生死即涅槃の心を
良恕法親王
煩なふの躰も菩提の證據には
澁柿を見よあまぼしとなる
有空不二の心を
平時賴朝臣
ありのみとなしといふ名は變れ共
くふに二ッの味ひはなし
題しらす　よみ人しらす
山里の折かけ垣のからす瓜
うむとはすれどくふ人もなし
初發心時便成正覺といふ經文
の心を　讀人しらす
須彌山に腰打かけて一天を
笠にきれども耳は隱れず
白骨の名號を書て其贊に
曉阿上人
人間のをはりを見れば白骨の
肉をはなるゝ南無阿彌陀佛
婆子燒庵の意如何といふ句の
心を　夢窓國師
娑婆でこそ男女の差別あれ
骨となりては變らざりけり
即心即佛の心を　道元和尙
一心の門開くれば法界の
草木國土ほとけなりけり
利劍にて皆截つくしみる時は
万象森羅古佛なりけり
自づから求めず捨ずさし置かず
自由自在はをのが三昧
本來意をよめる　夢窓國師
山賤が白木の合子そのまゝに
うるし附ねばはげ色もなし
弘法大師入定の年經て後或僧

高野に詣て御廟のわたりにて
よめる歌

空海は虚空の定をいざしらで
心せまくも(一本かくよみ)穴へいるかな

かゝりければ大師にや有けん
香衣の僧忽然と出きましての
返し

空海は虚空の定に入ものを
心せまくも穴と見るかな

水鑑の中に毒藥反して藥とな
れば罪の重きはかへりて佛と
やならんと書てよめる
一休和尚

作り置く罪の須彌程あるなれば
焔魔の帳につけ所なし

鎌倉追罰の勅を請て出たゝれ
ける時餞別に讀て遣しける
夢窓國師

餞別に何をがなさはおもへども
本來空の一物もなし

返し　源尊氏

一物もなきをたまはる心こそ
本來くうの法味也けれ

題しらす　讀人しらす

我戀は障子のひきて嶺の松
火灯袋にうぐひすの聲

道元和尚

湊にはけさ鉢袋猫の皮
花のさかりに大太刀の鞘

達磨の繪に　一休和尚

悟りぬるきやつめが身とて何か有
へんてつもなき豁骨(あはぼね)かな

水鏡の中に

うそをつき地獄へ落るものならば
なきこと作る釋迦いかゞせん
をのれさへあつけ拂はぬ不動めが
惡魔降伏無用なりけり

題しらす　讀人しらす

尺八の聲のあるじを尋ぬれば
地水火風の四大なりけり

夢窓國師

西向にせなかをくふと觀ずれば
東しらみに夜は明にけり

讀人しらす

あら樂や虚空を家と住なして
心にかゝる造作もなし

一休和尚

たそにたそ(たそ〱)にたそたそにたそ
たそにたそとて何も無き哉

眠れる布袋の畫の賛に　比丘一糸

手を伸てゆるりとぬるか布袋どの
袋のうちに何もなければ

題しらす　弘法大師

今ははや後世の勤めもせざりけり
阿吽の二字のあるに任せて

水鑑の中に　一休和尚

万法をみる人ごとの喉かはき
思はで水を一口にのむ

なき跡のしるしに石がなるならば

五輪の代に茶臼きれかし

いろは歌の中に　道元和尚

明々と三五夜半の一月を
あまねくわかつ千江の水

本來意を問とてよみて遣し侍りける　智蘊法師

直なるもゆかめる川も川は川
佛も堂も同じ木のきれ

返し　一休和尚

直なるもゆかめる川も川は川
佛も下駄も同じ木のきれ

題しらす　讀人しらす

座禪する衾の下のやせ虱
くふと思ふも障り也けり

雲居和尚

物毎に執着せざる心こそ
無相無念の無住也けれ

達磨の畫賛に　藤原光廣卿

西來意我だにしらぬ達磨殿
まして他人に問ふは僻こと

いろはの歌の中に

道元法師

十ぶんにいたりて見れば何もなし
佛といひて疵を附けり

題しらす

得道は有けるものを隣なる
祖父がさげた火打袋に

万法一心の心を　智元

一乘も二乘も同じのり汁の
齋と非時との替りばかりよ

有佛法有世法といふ諺の詞を題にてよめる　澤庵和尚

佛法と世法は人の身と心
一ッかけてもたゝぬ物なり

借用の地水火風返辨申今月今日といふ前書にてよめるうた

一休和尚

かりをきし五つの物を四つかへし
本來空に今ぞおもむく

成所作智の心を　空也上人

念佛は野にも山にも申しをけ
犬も鼠も喰はぬものなり

弘重

聞えてはにんにく慈悲の理りに
目に橡はぎな涙こぼるゝ

隨喜功徳品の心を　貞因

法華經と鳴鶯のこゑ迄も
耳の功徳に聞ぞたふとき

題しらす　宣相

浮世ぞと思ひきつたる尺八を
吹ならすこそ生佛なれ

智元

極樂にくふほどあれば他の物を
むさぼらぬこそ生佛なれ

法然上人

有がたや障りのおほき女人をば
彌陀ひとりこそ助けましませ

蓮如上人

南無といふ其ふた文字に花咲て
あみだ佛とみはなりにけり

布袋 讃の賛に　澤庵和尚
この袋あけて見たれば何もなし
何もなきこそ何もりけなれ

常不輕品の心をよめる
雲居和尚
比丘はたゞ万事はいらず常不輕
菩薩の行ぞ殊勝ならまし

題しらず
西方の本來空に往生し
無量壽佛とならん目出度き

無我の心をよめる　三　哲
我といふ其えせものを捨てこそ
釋迦と阿彌陀の跡もつぐなれ

題しらす
苦を樂に爲替(なしかへ)よとて釋迦によろり
世に出たまふ事ぞうれしき

持戒　行　風
六慾のあかを拂へと釋迦無二の
五かいはうこそ忝なけれ

三寶
一心に二世を思はゞ三寶の
四種を受得て五慾忘れよ

法界躰性智の心を
讀人しらす
父母にかりてぞきたる皮衣
破れて後はもとの塊(つちくれ)
空は貌月日はまなこ風は息
山野海川我身なりけり

作者之目錄

聖徳太子一首

親王

伏見殿 中務卿邦房親王一首
八條殿 式部卿智仁親王一首
伏見殿 兵部卿貞清親王三首
青蓮院殿 尊朝法親王一首
妙法院殿 常胤法親王一首
曼珠院殿 良恕法親王一首
青蓮院殿 尊純法親王一首

執柄

近衞殿 前關白左大臣信尋公二首

公卿

庭田殿 權大納言正二位源朝臣重保一首
中山殿 權大納言正二位藤原朝臣親綱一首

烏丸殿 權大納言正二位藤原朝臣光廣九首
飛鳥井殿 權大納言正二位藤原朝臣雅章一首
山科殿 大納言藤原朝臣言總一首
庭田殿 正二位權中納言源朝臣重通一首
京極 權中納言藤原朝臣定家二首
土佐一條殿 權中納言藤原朝臣兼定一首
東坊城殿 權中納言菅原朝臣脩長一首
水無瀨殿 中納言藤原朝臣氏成一首
六條殿 參議源朝臣有純一首

非參議

唐橋殿 正二位菅原在通一首
五辻殿 左兵衛佐正三位源爲仲一首

雲客

庭田殿 中將源重秀朝臣二首
同 中將源雅純朝臣三首

富小路殿 中務大丞從五位秀直一首
薄殿 左衛門佐從五位橘諸光一首
竹內殿 源俊治一首

武家

太閤秀吉公一首
贈太政大臣尊氏公一首
安土 內大臣信長公二首
安藝 中納言大江輝元一首
仙臺 中納言藤原政宗一首
長府 參議大江秀元一首
小倉 參議源忠興一首
宇和島 少將藤原秀宗一首
越前 左衛門督藤原義景一首
肥後 侍從從四位源光尚一首
姬路 從四位源忠次一首

鎌倉 正五位相模守平時賴五首

地下

猿丸大夫一首
淡路守宗增三十五首
南部氏 遠江守源經行一首
內藤氏 右衛門尉藤原武員一首
櫻井氏 中務丞基佐一首
小堀氏 遠江守一政二首
小濱氏 民部少輔嘉隆十二首
梶原氏 平次左衛門尉景高一首

女房

伊勢二首　和泉式部一首
安養尼一首　宮川尼一首
大坂 如風尼一首　和州 夏虫妻一首

僧官

細河 二位法印玄旨十五首　德善院 法印玄以一首

東山 長嘯子四首　法眼紹巴一首
朝倉 宗順法師一首　牡丹花二首
蜷川 智蘊法師一首　宗祇法師一首
天滿森 法橋由巳三首

僧天台宗

前大僧正慈圓二首　前大僧正尊應一首
僧正慈惠一首　權大僧都心敬一首
定法寺 僧正公助一首　西行上人四首
曉月四首

眞言宗

弘法大師三首　高野山 權大僧都賴慶一首
高野山 權大僧都光宥二首　同山木食 應其上人一首

念佛行者

空也上人一首　遊行 曉阿上人一首

佛心宗

天龍開山 夢窓國師六首　建長開山 隆覺大禪師一首

永平開山 道元和尚二十一首　松島開山 法心上人一首
一休和尚十一首　澤菴和尚八首
雲居和尚十七首　雄長老三十二首
永原寺 比丘一糸一首　寒山寺 瑞南和尚一首

淨土宗

法然上人三首　天性寺 白譽上人一首
蓮生法師二首　法藏院 願信法師一首
[illegible]嚴寺 正愚法師一首　遠里小野 弘誓法師一首

本願寺

蓮如上人一首

當法華宗

日蓮上人一首　權大僧都日與一首
敦賀 日能上人一首

山城京幷所々

順阿一首　本因坊 算砂一首　藪內氏 理西二首
元理一首　福安一首　長好一首

松永氏 貞德五十二首　安原氏 貞室四首　北村氏 季吟二首
松江氏 重賴三首　永明一首　泉齋一首
祇園住 春丸一首　賀茂住僧 南歌二首　伏見住栗田氏 玄康十七首
淀住三川田氏 昌俊一首　八幡山瀧本坊 昭乘一首　同上寶成坊 信海廿四首
山崎 宗鑑一首　土山氏 元行一首

大和

法隆寺 歌慶二首　[illegible]住不動院 賴智五首　同所地藏院 光知二首
同所井上氏 勝可二首　同所中川氏 正之一首　片岡住松井氏 定行二首
長樂住伊藤氏 夏虫二首　田原本住西井氏 行好一首　下田村住僧 葦葉一首

河內

菅井住僧 元安八首　通法寺 長尊一首　白木住柴田氏 古生一首
春日住田中氏 弘重七首　菅井住鹽野氏 義綱二首　同岸野氏 唯正二首
柏原住三田氏 淨久八首　弓削住眞壁氏 三政二首　同吉村氏 種好二首
松原住小野氏 宜齋一首　同所同氏 由貞一首　同暮松氏 高壽一首

和泉堺

連歌師 宗訊一首
同上 宗珀一首
千氏 宗易一首
松井氏 宗吟一首
玉手氏 貞直一首
良忠一首
少隣一首
岩井氏 敎一二六首
正法寺 成安三首
岩井氏 正長三首
大津住高橋氏 爲盛一首

攝州大坂井所々

御菓子所 山城掾貞因四首
宇野氏 淨治七首
黄檗會下 道明八首
大善寺 智短一首
淨久寺 一圖十首
桑山氏 道信一首
三宅氏 獨友一首
戸齋 休甫八首
道仲一首
ヶ庵 言當三首
赤池氏 三哲六首
自影庵 正繼二首
澤田氏 玄貞一首
平山氏 方救三首
松山氏 玖也一首
若林氏 昌長一首
樹木氏 宣相三首
杉本氏 玄室一首
加納氏 智元六首
玖也 道寛二首
白江氏 白言一首
二笑二首
伊勢村氏 次良一首
塚口 安明二首
梶山氏 保友廿四首
富永氏 燕石一首
津 如貞一首
松江氏 近吉十一首
齋藤氏 滿永廿首

伊勢村氏 重安一首
同上 正定七首
西川氏 重故三首
井上氏 宗恒十三首
平山氏 雅珍三首
同上 直之一首
松井氏 重宣一首
井上氏 宗鋪四首
深江氏 伊貞二首
中堀氏 初知一首
同上 器音八首
長瀨氏 常林二首
嶋 久淸四十一首
友以二首
政之一首
長谷氏 昌治一首
富田氏 正信八首
角田氏 路春三首
吉田氏 恒貞二首
路氏 忠昌一首
利淸二首
中嶋氏 正好二首
一根一首
氏家氏 忠精三首
立田氏 行景二首
同上 正景一首
生白庵 行風十三首
立田氏 行榮一首
朝倉氏 行順一首
高屋氏 春房四首
正木氏 可正一首
正直一首
野間氏 行安十七首
河内氏 利忠二首
八尾氏 宗俊一首
上下氏 知度二首
川副氏 親之一首
吉田氏 一類一首
前村氏 休和一首
難波住 不白一首
福嶋氏 春淸一首
又太夫一首
天王寺住西山氏 宗因一首
同川崎坊 空存一首
同所 實久一首

天王寺住 以春一首
住吉住僧 可悦一首
尼寺住僧 自由二首
池田住松井氏 宗丹一首

參州
井上氏 旨治一首

相州
小田原岩手氏 宗也七首

武州江戸住
德元十首
半井氏 卜養七首
芳賀氏 治貞一首
高嶋氏 玄札一首
未得六十三首

下總
椎名氏 安繼一首

江州海津庄
小花路住龍泉寺 來焉八首

播州姫路住
幸田氏 正舍一首
岡氏 一幸五首

防州
正成七首

長州萩住
山本氏 是念二首
穗田氏 友知三首

紀州
宗朋八首

住所不知
入安廿二首

讀人不知
八十八首

鹿島御歌一首

右内出所古書目錄

舊事本紀一首　伊勢家集二首
山家集一首　盛衰記一首
山門百首二首　東鑑一首
砂石集一首　法華直談七首
撰擇直談二首
法然五十首敎化歌二首
道元伊呂波歌十九首　夢窓法語歌九首
寶明寺百首五首　一休水鑑五首
信長記二首　餌指問答一首
雄長老百首廿六首　入安百首卅二首
由己百首三首　太閤記八首
澤庵謠詞題歌二首　竹齋雙紙三首
宗增兩度百首廿三首
同源氏卷題歌十二首
前狂歌集卅四首　仁勢物語十二首
雲居往生要歌十七首　貞德百首二十首
鷹築波集一首　玄康百首十七首

京童双紙一首　未得吾吟集六十四首
獨笑雙紙一首　黑谷上人傳一首
已上三十四部
惣歌數千五十餘首
作者數二百四十一人
此外鹿島明神御詠有

春秋の移り換るは世の常ながらはからず大内山の花をよそに見なしふりぬる高津宮の月にむかひてもむかしをしのぶ心もなくいたづらに幾年〳〵をか送りむかへしかゝるを里のわらはにもよほされて此度夷曲の品をわかち侍るに猶和歌をも書集めよとなれど難波津安積山のふた歌をさへ心ひとつにさだめやらで人のさかしをろかなるをいかがいはんといひはなつにもやまずしゐて望めれば心ざしをむなしうせじとてやつがれが綴りしをこれかれ書のべ侍りなか〳〵いはし商人のよきゝぬきたるたぐひとも千鳥の鶴の毛衣かと我さへかたはらいたき物からやんごとなきおほんかたことには道の長者なりし前内府通村公など和歌なりと感じ仰けるにぞまかせ侍る狂歌のさま

いひしれるとにはあらすとのみ

承應乙未元日
　年月をかぞふるに冬の日春に
こえ春また冬にたてる事いく
そとせなり今日たつ春のみさ
らぬにすべらぎの世をしろし
めしての春も今日ぞ始めなる
をおもひてよみはべりし
世に匂ふ日影もしるし天地の
さらにひらくる花の春かな

　金龍寺にて花のちるをみてよ
　み侍りし
入相の鐘よりさきもちりぬめり
花やあだなる世をいさむらん

　瞿麥
かぞいろをとふ人あらば朝夕の
露と答へよなでしこの花

　八月十五夜
星合のつらき別れを更におもふ
月の今夜の明方の空

大和に侍りし頃としの暮に雪
の降ければよみはべりし
榊葉に雪のしらゆふかく山の
神代おほゆる年の暮かな

　旅行
朝なゆふな露になれ行く武藏野の
秋のはてしや霜の下くさ

　戀歌のなかに
住吉のまつとはすれどあふ事の
遠里をのが身を恨みても

　寄露無常
風渡る草葉にやどす露の身の
消ずはありとも幾程の世ぞ

　維摩經に須彌入芥子中といふ
　文の心を
露のぼる稻葉の末に色とめて
秋は田面の月のゆふ暮

　高津汚道士　生白庵行風

寛文六丙午年仲夏吉日
安田十兵衞開板

後撰夷曲集巻第一

春歌

春たつ日よめる

年徳の神のゑしやにて春きぬと
世にふれなすか鶯の聲　八宮御方

立春風

一番の風の手なみに霜氷
川下さして雜亂(サラ)〱〱〱　行風

かた〱と結ぶ氷の瀧の糸を
春風の手やけふはとくらん　梵益

立春霞

青くたつ春も霞は黑色に
みる心根はおもしろき空　長廣

寛活な姿ならねどくる春は
人の目かざに立霞かな　貞富

明てけさ谷の戸口に引かくる
霞の衣をいはゞ暖簾(なうれん)　行重

春たてる霞の衣もゆつたりと
たけはゞ廣く見ゆる武藏野　満永

立春日

ほんのりとかすみ立田の庭鳥の
なき尾も永日のはじめ哉　夏蟲妻

霞をば先にたゝせてしづ〱と
きたりたまへる春の日足か　資之

立春水

嘉例をもひきつるべとて年男
桶のたがはずくめる若水　満永

立春梅

春たつといへの軒端のはなばしら
もぐるばかりに匂ふ梅が香　休甫

元日子の日なりければ

梅こよみ三百六十餘ヶ日も
子の日とひよりさく年の花　行風

元日

本歌アリ
明ぬればござる物とはしりながら
猶めでたきはけふの年徳　行重

年徳の神のおまへの鰐口に
掛鯛をこそ見るべかりけれ　貞富

めでたしとむかふ年徳のかた衣や
はかまの紐もしめの内かな　政長

としとくを祝ふ御三木の肴には
數の子どもを居ならべつゝ　重次

年徳の棚をもかりにしつらへは
宿茶に似たるけふの大ふく　之時

年徳をとり〱いはふ商人の
身に悦びやえ方なるらん　宗宣

書物にも繪に寫すにも年々に
若戎こそ不審かみなれ　永茂

むかへぬる心づからの若戎
繪空ごとゝは思はざりけり　似柳

小舞詞
めでたいをかけてぞおもふ戎棚
つつた所がおもしろいとは　元信

本歌
福の神たづねてござれ我宿は
春早々に松たてる門　浄久

毘沙門の前にしはるのしめ繩の
足は蚣(むかで)にゝたふくさわら

本歌
足引の山草の葉のしだりほの

ながながとしたかざり繩哉　知度

きのふまで心の節季候なるも
けふは万歳らくらくな春　宗鑑

古紙子しはすもくれて我宿に
春はたつよこ十文字かも　毎雄

或人へ挨拶に

硯箱のすみよかりける世の中は
とてもかくても筆始せよ

書初はあらたまつさかえ方なる
かみさままゐる年男より　貞因

起もせずねもせて趣向案じては
春の物とて出すみつ物　清信

あたらしき小袖も今年みつ物の
本歌　連歌の折にきそ始せり　正信

春たつといはふばかりに蓬莱の
山も飾りてけさは出すらん　高故

くみかはす命ながえの屠蘇酒の
甘きやみつの春のことわり　信安

三番之詞
さらば鈴を進せんかの屠蘇なれば
つゞけ三盃やあらめでたや　相宥

のむことの口あけにとて酒と茶と
たばことみつの春祝ふなり　満永

よべ迄のあはたゞしさを振り替て
今朝はゆらりと祝ふ大ふく　貞因

大ふくの茶の湯を好むしるしとて
門口にまでかざり炭かも

春のくる朝のはらはとしよりも
若きも餅や喰はじむらん　卜琴

本歌
出て見よ今は禮者も立ぬべし
春早々の門松の本　行豊

ものまうの聲とつれだちくる春は
とれとれまでも賑ひにけり　廣通

着しぬるかみしもの町門々を
折目たゞしく正月の禮　貞富

本歌
門松の下にかゞめる禮者多み
あしらひまさる人の數かも　高故

けふこそは正月なりと門へ出
とんつはね突遊ぶをさあい　貞因

世話
寶引

人多き中にとりわけわらはべの
かつたはえ万果報引かも　友信

午年元日に

くる年の馬しるしかも春風の
霞の衣を吹ぬきにして　之時

虚空より霞をしめと見よかほに
年徳神へひく馬の年　行景

酉年元日に

果報までつきの始に大ふくの
茶の羽箒もとりのとしかな　満永

めでたしなめでたしと答ふ挨拶は
たれもあふむの鳥の正月　次木

謡初る聲も長閑にたつ春の
時の調子をとりのとし哉　顯輿

戌年元日に

古びたるいろとはいへど鳴鳥の
跡追ふてきたいぬの年哉　義益

子年元日に

去年は稲荷今年はきつね祝ふてふ
盃さへもすこんこんこん　周光

丑年元日に

治りて民に病のなき御代は
太刀をもたぬ丑の年哉　顯興
ある人歳暮と年玉に納豆もて
來りけるを見てよめる
いかにねし春の朝の納豆ぞ
きのふは歳暮けふは年玉　貞因
題不知
さほひめのもし傾城をめさるなら
與太郎月や知音ならまし
新屋次郎兵衛といへるが年玉
に釣柹もてこしをみてよめる
初春のあたらしやなる年玉に
めしろ兵衛が柹をもてくる　信海
題不知
本歌 鏡餅いざ手にとりてかぶりみん
年へぬる身は齒もや弱ると　每雄
五万歳樂
昔よりありきやうかりは一興や
京の町にて京の町うる　満永
門にきてはねまひくるふ春駒の
まぐさなるらし手の内の米　行重
子日
としをへば牛引物にせん小松
けふも子日の御用木かな　本也
木ヤリ詞 年へては子日の松もえいやらや
あふやるぞへと曳もひかなん　貞富
よたれそつ子日の松をひかんとや
らむうゐのにし出る人々　一國
水祝
謠詞 水祝ひかたをならべて門のまへ
井筒によるは丸はだかなり　太極
本歌 朝風にとくる氷のみづからも
かけに出るやはるの花聟　友定
春日
春立て日足すらりとながければ
のびあがつたとおもふ靑陽　義文
霞
ゆたやかな霞の衣をそのまゝに
たちゐはできる山神さま　行重
空はらをたつるか山のかしらをば
春霞こそ陽氣なりけれ　如水
小歌詞 面白やあの山見さい此山も
いたゞきつれてたつ霞かな　心笑
狂言詞 ゑいさらの聲も賴ます山にひくは
大物ならぬ霞なりけり　言千
小舞詞 横かすみ黑一文字に引ぬるは
定紋ならむ四方山の内　知秋
しやつはりと春の霞の衣をも
けさきた山の腰つきぞよき　みつなか
河内女がてつから取ていひもりの
山のはがすみ棚引きにけり　入安
山の手にかゝりがま敷みえぬるは
やつこの比の春がすみかな　舍永
三輪にて
謠詞 末代といへど霞は杉の木の
枝にかゝれるおころもの色　元成
鶯
止事(やごと)なき竹の園生の鶯は

笛ふく琴も歌も上手ぞ　一見

謠詞
法華經となく鶯を題にして
　初陽每日歌をよむなり　夏虫
めづらしき作意なけれど春每に
　たゞきゝよきは鶯の歌　滿永

鶯のあまたよりて鳴ければ
おなじ音に鳴うぐひすの歌もたゞ
　あふむがへしと申べきなり

舟歌ときゝやなさまし鶯の
　鳴ものほゝん法華經の聲　行廣

前栽にすがたは見えず鶯の
　ごこぞときけばこゝら鳴也　及之

おとなしく恥かはしくて鳴ぬかよ
　年ひとつます去年の鶯　顯與

鶯はこゝにありとの宿札か
　軒端の梅につけし短冊　行重

鶯の子にも具足羽あるなれば
　親重代か軒の鎧梅　梵益

梅にきて鳴うぐひすの法華經や
　非情成佛の緣となるらまし　滿永

梅松柳ならひぬる庭に鶯のな
　くをきゝて
うぐひすの花の笠ぬふ糸針は
　梅にとちつく松よ柳よ　弘重

題不知
鶯の歌の題ともなれかしと
　繼木にするや難波津の梅　一見

梅
給はらんと匂はせふりの言の葉も
　恩にこそきめ梅の花笠　宣堅

北野にて
たれも見よ北野の花の兄木こそ
　右近のばゝの孫の惣領　高盛

幾筋もたゝまつすぐにすい〳〵と
　のびし氣條はすやり梅かよ　行重

百首歌の中に
ことわらでたをれば腹が立枝なり
　くれよとならばやり梅の花　貞之

題しらす
所望する一えをくれぬのみならす

このめむきつゝあべ、紅梅　正友
見ゝとめよこゝやあそこの枝々に
　ちよく〳〵開く論旨梅をば　みつなか

纖分の梅をみて
一本の臺に小梅のさき分の
　繼木は花の兄おとゝかな

白馬節會
いろかへてしろ馬の字をあを馬と
　いふこそ春の道理なりけれ　源雅純朝臣

若菜
式三番詞
けふは七日年德神に何よりも
　參らせたきは鈴菜なりけり　行豐

一文に三ばさうなる鈴菜こそ
　何よりもつて安うさふらへ　滿永

ぬすみとり見付られなばなゝ草を
　叩きはせいて叩かれぞせん　貞富

本歌
鶯菜こゑほこらすは雪消ぬ
　山里いかに春の汁の葉　毎雄

奈良にて下部のくゝたちに柳
　の枝そへもてありくを見て

なら者のはかで提ぬるくゝたちの
下緒となれる青柳の糸　具敬法親王

親月八日立春に
尉殿の髭にも似たる節分や
八日にさらり春はきにけり　壬生忠利

或方へ禮にまかりけるに數の
子肴にて酒たうべ日もくれが
たになりければよめる
數の子やにしんが鉢にあるなれば
思はず酒もつもりそろばん　方重

爆竹
空をとぶつばさにあらぬ左義長や
ほこらかすみの種となる覽　行風

東寺の前にて綱ひくをみて
東寺にて綱を引とる人はたゞ
鬼よりつよき力なりけり　一見

親月とて町々にする綱引は
ゐいや大勢の子どもある故　頁因

百首歌の中に殘雪
うす霞挽茶のいろにたつ春も
てんもく山に殘るあわ雪　貞富

殘雪
本詩アリ
窓の梅をほくそ頭巾で見るにたゞ
雪對すればたるゝ水鼻　元信

雪佛さとりの花の春なりと
消て本來空におもむく　行重

年もまだ若しらがぞと人いはん
山の頭にのこる雪をば　舍永

しらくほど是や申さんはげ山の
いたゞきにちと消のこる雪　治仕

本歌
なだれては山のいもせの中に落る
吉野の雪やとろゝとをみん　友信

猫の妻戀をよみ侍りし
同
敷島や大和にそだつから猫の
ねころび打て妻をこひつゝ　行風

柳
觀音の光をはなつ柳にも
出るさつたのちからこふ哉　貞成

百首歌の中に
本詩
そのいろも氣力なうして青柳の
糸よりほそく枝ぞやせたる　入安

同
同
老木さへ春は絲にうごきけり
柳につよき氣力出來つゝ　資之

青柳にかゝる霞の綱はなふ
かの唐人のかみつゝみかも　知秋

瀨あたりの水垢おとす用意にや
あるはへちまの川柳哉　成行

柳に月の移れるをみて
柳髮すかしてみれば半月の
影さし櫛といふべかりけり　一圃

早蕨
とめ山はゆびもさゝぬを早蕨の
にぎり拳で人なとがめそ　顯與

春雨
今迄はねいりてゐたる木の目をも
起て出よとふれる春雨　貞富

木の目をみて
魚の名の蛸にはあらぬ八手の葉

いほみ出たるつぼの内哉　滿永

春草

とりくみし陰と陽との力にて
二葉にわれの相撲草かな　貞玄

よめがはぎつみつくしたる印には
つひに杓子に掬はれぞする　一見

いとをしやまだ禿(かぶろ)なるうなゐごも
本歌 燒野に數多つばなぬく也　藤原信實朝臣

むかしみし妹が赤子の生立て
つばなをもぬく菫をもつむ　休昌

戎殿もし野に出てあそびやらば
たひ草摘て日を暮しやらん　教二

苦莚しくの文をし人とはゞ
いかに岩間の鬼あざみそも　義益

百首歌の中に

冥途ならで是も地獄の鬼莇
つみため〳〵て一口にくふ　玄康

露のたうをたてをはりての其跡に
九輪草こそ陰高くなれ　未得

小米花

作り木を利欲につきてうる人は
世話 小米花にもさくとくぞとる　滿永

咲しよりちるに間もなき小米花
ぬかよろこびをしたるぬし哉

野遊のをりから下部ともに鼓
草つませけるによめる

春の野を打見わたしてたんぽゝを
敎へひかする供はやし哉

題しらす

鼓草春のはやしに咲出るは
うぐひす笛と藝くらべかも　尙芳

蝶の舞鶯笛の絕ぬ野に
打ましりたるたんぽゝの花　貞德

花見酒にうたへば蝶もかんたんの
夢の舞まふはやせたんぽゝ　且保

蝶

あの花や又此花に飛つくは
やあらこゝろの蝶々なもの　幸昌

ふし柳楊枝にしつゝかねつけの
蝶よとまりて假粧するかも　滿永

薪能

世話 跡あかりに見るや薪ののふこれは
本歌 御秡の馬の鞍懸かそも　行風

くらかけにのぼりてみれば煙たつ
薪の能は賑ひにけり　保友

涅槃會

華嚴阿嚴方等般若法華經を
說くたびれて遂ねはんかも　安勝

御佛は常住不滅ときく時は
けふの涅槃は空死ぞかし　貞因

御弟子五人の名をよめと所望
あるかたにて

釋迦に別なんたの雨のふるならば
眼もくれん阿難迦葉も　一見

絲遊

春のきて霞の綱をすき捨し
あまりなれはや空の糸遊　行風

霞隔山花

花か雲か丁簡もなき山のはを
まぎら霞のかゝるめいわく

見花

假粧せず木なり乍らにいつみても
色つやのよき花のかほはせ　みつなか

百首歌の中に

色能はあまか紅粉をやさしつらん
口びるしるき花の貌はせ　入安

てんびんのはり口ならで櫻花
一りんだにもめにかゝる哉　数二

本歌
けふのめと人のしひざる時だにも
ゑふことやすき花見酒哉　貞宮

くふ餅も又のむ酒も讀歌も
はなの下なる口すさみ哉　友知

題不知

踊壽詞
花の木もちらり〳〵と火ともすや
こゝは山崎こま所とて　宗鑑

名所花

万年の榮耀もこれ龜山の
のめば浮木の花見酒哉　高盛

酒にうたふ木遣聲してみよしの〻
花にゑいさう醉の內かも　義益

よしの辰の尾といふところに
てよめる

花を雲とわけてのぼれと辰の尾に
くひ附てくるごう龜はなし　行安

奈良と伊駒の間ありのとわた
りといふ所にてよめる

からけぬる尻にも蟻のとわたりに
匂ふやおなら海道の花　高故

彼岸櫻

ひがんざくら咲ぬる花を目の佛
見て樂むも淨土なるべし　満永

きによつて佛の御法ときぬれば
悟やひらく彼岸櫻も　濤之

參宮道の次に吉野の花見によ
り侍り一宿もせず通り侍ると
てよめる

三吉野の花見はのりしかごとにて
まことはまぬるいせ櫻哉　貞因

兒櫻

朝夕にちゝとふりくるあま物で
そたつはたれが兒櫻の花　行重

兒さくらさぞ愛しつゝ山寺の
花の下にてあそ坊主とも　永茂

大坂東本願寺の鐘樓に立そへ
る虎の尾櫻の花さかり世にこ
えて見事なりければ

虎の尾の花の盛りはつりがねの
龍頭のおこす雲かとぞみる　貞因

普賢像

普賢像の花の先にも火ともすを
燈明と見る寺の庭かな　満永

きりかやつ

咲花を穴のあくほど見物の
人にもまるゝきりがやつ哉

烏帽子櫻

此花はゑぼしざくらときくなれば
きて見る人のをるをかまふな

姥櫻

是はよいはなしの種で候よ
若木なれども姥ざくらとは　貞富

世話　那智にてよめる
なちりそよ名にしおひたる姥櫻
八十年も祖父やあくべき　宗定

花厭風
彦七が親して風に動せざる
花もあれかし大森の木に　久清

吹風に花もやちると連歌師は
句に苦をそへて案じぬる哉　良因

落花
本歌　櫻ちる木の下陰で笠ぬけば
空にしられぬつら雪となる　是念

本詩　雪のやうにちるを悦び花をふんで
をしまぬや是少年の人　友知

盛りなる花もさく日は散ぬれば
けふは昔の姥さくらかな　満永

よし野にて
ふむな〳〵散ぬる花を三吉野の
、藏王の足もあげてござれば　毎雄

清明か瀧にて
さつ〳〵と流るゝ花を轉じかへて
梢にもどせ清明かたき　方寸

野遊
取あへず霞をくみし野遊は
すい物草を肴にぞせん　みつなか

百首歌の中に春駒
春駒のいさむ心はとこ〳〵を
駈てきたぞとせめて問ばや　貞富

同し中に歸雁
つがひ〳〵放れもやらで歸る也
然と縁をし結びかりがね　淡路守宗増

かすみそめ點つけてよむ書物にも
序正流通(ぢよしやうるつう)にかへるかりがね　頼智

長旅のくらうなゆゑかいくつらも
ごつかりやせて歸る也けり　貞富

半季居のをんどりなるか雁金も
達ずかへる出かはりのころ　本也

渡りしにたゞ一羽りも利はつかず
もとさへたらでかへる雁金　是難

めに懸て能よくみればれいてぐの（本ノマヽ、レイテングの略）
棹になりてやかへる雁金　毎雄

三文の矢をはげ弓を春の空に
雁は八百いざやいてまし　友和

天の戸の樞(くるゝ)あくるにあらねども
かぎのてなりにかへる雁金　行順

春の月弓張にかゝるかりまたは
北斗の星やめあてなるらん　満永

難波江やよるは網引足もとの
あかい時にし歸れかりがね　定章

八瀬のあたりにて田をかへす
に牛つかふをみて
一反にならぬやせなる痩田をば
痩牛かけてすかせこそすれ　友和

蛙
鶯の外に歌よむ物はあらじ
と思へば水の底にもかへる　友知

軍して深手負つゝありきえぬ
かはづが歌やそれも腰をれ　宣就

やり水につきながされて苗代へ
にげてかへるのまけ軍哉　貞富

軍にはさぞなぶへんの蛙しも

くちなは代をいかで責べき　舍永

呼子鳥

傳授せぬ身は奥山のよぶこ鳥
見ざる聞ざる言ざるにこそ　義益

百首歌の中に

呼子鳥古今の中の大事ぞと
聞たるばかり聲はえしらず　政長

おなしく

ふみまよふしどろもどろの山道に
はぐれし親を呼子鳥かも　貞富

いかのほり

おのづから霞の網にかゝりつゝ
空にふらめくいかのぼり哉　滿永

二月末つかたうぐひすのなく
をきゝて

面白く聲をも春のつゞけなきは
日も長歌をよむかうぐひす

梨花

人毎にさけとねかへる花なれば
下戸とばけ物なしの木にこそ

百首歌の中に菫

花を見て庭出えぬは爐路口の
戸にかけがねの壺すみれ哉　一圃

おなし中に杜若

筆の先そめしごとくにつぼめるは
いかなる物を杜若ぞや　法橋由已

躑躅

目には見てくはれぬ物は道ばたに
つきたてゝある餅つゝじ哉　行重

欵冬

山吹の花のこがねのまるかせを
すながねになしまくや春風　貞徳

こがね色にさく山吹をめにかけて
ほしがるもげに欲の道哉　滿永

題不知

本歌 欵冬にぬきかけし衣のぬしやたれ
問ど答へず口なはにして　俊廣卿

三月三日

同 春つくといふばかりにや草の餅
臼も青みてけさはみゆらん　舍永

草の餅花の盃とりどりに
とり合てや節會なるらん　行風

桃の酒蓬の餅でいはふこそ
上戸と下戸のとり合なれ　呂悉

をりてみよ笑ひ上戸は花の名の
もゝのこひある目もと口元　貞富

詩の韻もふみ分かたくせかれけり
盃はとくすくる曲水　忠直

曲水の酒のみこふて醉たとは
流をくみてむなもとにしる　友鷗

住吉よりのかへさ歩にて人々
草臥しをみてよめる

世話 住吉の鹽干遊びのかへるさの
かいたるひにもにしる蛤　宗方

三月三日或御方にてあさつき
鱠の相伴申ける時是につきて
一首とおほせければよめる

本歌 蒜のつれなく殘る匂ひより
あさつきばかりよき物はなし　長齋

千本念佛

いろ〳〵の狂言綺語の法事こそ
讃佛乘の焔魔堂なれ　資之

戯歌とてよめる

高雄寺あはれなりける勤かな
やすらひ花と鼓うつなり　西行上人

釋迦身拭

欲垢は絶ず浮世のさかの釋迦
お身拭にもとれる散錢　行風

藤

長さをはくらべ申さんさがり藤
ながむる我からたれ八尺　元成

ねちかへり又ねちかへり〳〵
ねちかへり見るねぢ藤の花　毎雄

ねぢふぢなふりをもいはし紫の
ゆかりの花の顏にめんじて　行風

本歌
紫の藤の花見にのむ酒は
顏の赤きをうはへとぞ思ふ　友和

松上藤

花かざる藤のかつらもゆるぎつゝ
眞琴にゝたる松風のこゑ

松にそひ千年をへんと藤こぶの
力出してよれつもつれつ　安勝

いとゝたに枝もいたまん老松の
重荷にかゝるつゞら藤哉　みつなか

藤の花のもとへ藤の花とい
ふ物を重に入て出されし挨
拶に

喰てみつ見て又〳〵ひつ首をたに
こなたかなたへねぢ藤の花　友和

暮春

よけいありと思にし花も散はてゝ
今は十方にくれの春かな　行重

伽羅よりも是はとめたき物なれや
三月じんのたつを何とそ　一見

後撰夷曲集巻第二

夏歌

百首歌の中に更衣

こまのきぬ一疋たちて殿樣は
御身かろげにめす衣がへ　貞富

本歌
花の色に染し表のをしければ
裏かへてきる初あはせかな　友和

同
春過て夏きにけらしわたぬきの
衣ほすてふあせのかきそめ　喜雲

同
侘ぬれど今裸にもなられねば
身をうら表かへて着る物　心笑

百首歌の中に

卯月一日下部の魚あらふ折か
らよめる

侘ぬれば着かへんやうも難波なる
身をつくしても袷一枚　一圃

古小袖持あはせしをわたぬきの
着もけふのえり祝かな　由貞

題不知

世話 次第〳〵暑くなりなばけふかへし
袷物もや肌はなれもの　元成

新樹

阮籍がよろこぶ眼是なれや
見るによねんも夏山の色　行貞

新樹に蛛のすがくを見て

夏山の茂るを新じゆこんじゆにも
あちらこちらへひく蜘の糸　滿永

卯花

月雪にまがひて心なぐさむに
いかなる者か卯花といふ　淡路守 宗增

枝までもさし物なればちる花も
鉋くづかよ箱根うつ木は　一圃

うしさらの風があたりて卯花を
ちらすに腹はたつみなり皃みつなか

豆腐にも似たる岡邊の卯花の
ちるやきらずの詠成らん　弘重

百首歌の中に葵

そのたけの三尺八寸候は
いかもの作りのたち葵かも　貞富

同

花を見捨立歸らんと思ひきれど
はなれがたなの葵なりけり　玄康

同

目の鞘をはつしてみれば花も葉も
きれいなりける太刀葵かな　一圃

所々露のちら〳〵ちらつくは
汗をかいたるたち葵かも　行重

深見草のあたりに撫子のさけるを見て

花の王のおそばをさらぬ撫子は
うへわらはとも申べきなり　滿永

當麻練供養を

西方は十万億土なるものを
急ぎもやらでなごねり供養　草雪

古びしもくり返しつゝ蓮の糸の
ねり供養ぞと拜みぬるかな　定次

新茶をよめる

本歌 いせものゝ赤前垂でつめる茶も
宇治のほいろに掛りける哉　元信

待郭公

郭公つひに名のらぬ老武者も
坂東聲はありとこそきけ　宣就

世話 時鳥なくとてたれかがごうせに
かませうと云者もあらじを　顯興

きかぬとて人がねたらば子規
せめて鳴貌してみせよかし　忠立

待かねてながす泪を其方も
もらひなきせよ山郭公　一圃

時鳥しゝまねしつゝなかざるは
そちも一夏の行をやはする　立靜

夏の夜は時鳥にぞくらはるゝ
蚊屋へも入で待とせし間に　貞德

めもあはずねぬ夜口をし時鳥
おのが初音をまつげ讀れて　弘重

みゝづくをみせなばせめて鳴ず共
ひよつと笑はんくつ沓手鳥　行廣

因幡堂にて

本尊をなれがやくしにかげもせで

いなばだうよくやよ時鳥　満永

卯月八日に時鳥を聞て

御佛の誕生日に時鳥（本ノマヽ）
なれもほぞんの掛ぞめやする

三輪にて

（謠詞）嬉しやな是なる杉の二またより
ひよつと一聲聞ほとゝぎす　元成

聞郭公

めづらしき冥途の鳥のなくかたに
われもむけんの地獄耳をば　一見

夏山といふ茶入を求し夜郭公
をきゝて

夏山の茶入も耳の垢までも
ほりいだしつゝきく時鳥　毎雄

（げんざう）還相の廻向といはん冥途より
本尊かけくる無常鳥かな　行重

（本歌）沓手鳥音するかたを見あぐれば
たゞ鞠ほどの月ぞのこれる　梵益

三味線半にほとゝぎすを聞て

三味線のちりてれてんを過すとも
地にさんさがりなけ時鳥　卜養

なませのわたりにて

ごつと空にかすかな聲は里の名の
なませにつうさます子規　友信

橘

吸口にいらぬ先より匂ふ哉
常柚も同じのきの橘　友和

百首歌の中に

（童口遊詞）橘はむかし辨慶鎌田殿
かうじなりとて今も申木　貞富

同

色よかよ味までそろふ橘は
目さへ鼻さへ歯さへ楽しむ　一圓

闇の夜も目利はいらじ橘の
さくはと云ば匂ふさぶらふ　一見

芥子

手向つゝ今勤行やはてぬらん
花の灯けし坊主かな　敎二

賀茂足揃に

あしぞろへかくいちはやき宮人は
帳につきげのきほひ馬かな　忠直

五月五日

さし樣に軒のおそひの石にあてゝ
菖蒲刀のはゝをれにけり　雄長老

菖蒲に蓬そへて軒毎にふける
を見てよみ侍りし

（世話）軒の妻をみればふしぎや麻ならで
あやめにつるゝ蓬むら〱　行風

軒の菖蒲に栴檀の葉をそへて
ふかんといへれど折からせん
だんの葉此わたりになきと聞
てよみ侍りし

我軒の菖蒲刀のさしぞへに
せんだんの葉もけふのきれもの

五月五日六條河原通りけるに
童のよりゐてあなたより石松
がうたるに五郎太郎礫うちか
へせといふをきゝて

礫をし打かけにける石松が
相手の名まで五郎太郎かな　満永

筝

我宿の竹の子共の行末は
杖柱ともたのもしの世や　如雲

ぬすまふと藪のまはりを闇の夜に
迷ひありくも竹の子故よ　行重

百首歌の中に五月雨

もりわぶる亭主の心思ひやる
今五月雨のふる家の内　淡路守宗増

早苗

みつは四つは五つ六田に水口を
いはひうたふて植るわか苗　弘重

早苗とる早乙女につく物はたゞ
脛の白きと脚布の白きと　友和

水鏡見つゝ植れば嫁御前の
けはひ田とは此事やらん　是誰

小ウタ
聟ならで取すましたる早苗には
三石一斗米ぞ出來なん　毎雄

螢

夕貌の軒にちらつく螢をば
賤が蚊やりの飛火とぞ見る　行順

暮るより役目に火をばともしぬる
ほたるはよるの番太郎かも　滿永

赤きいろ同じかれども猿の尻を
下目になして飛ほたるかな

百首歌の中に

不思議やな風にまたゝく灯の
きえぬとおもへば螢にて候　貞富

蟬

帆柱の上にも蟬の聲すなり
船頭かとやこれもきくべき　梵益

世話
生れつきてならはぬ經をよむ蟬は
智者のほとりの童(わらんべ)ぞかし　滿永

ぬぎ捨て又せんたくの爲ならし
雨のふるてに蟬のから衣　重靜

蚤

まつかひにおのれが色の成ぬるは
酒より外に何のみの虫　如風尼

痒けれど手の屆かねば是非もなく
にくし／＼と思ふのみなり　政長

本歌
山ならぬ腿(ふと)も風市の根いつとてか
鹿子斑にのみのくふらん　榮種

懷にはいりて人のちをすふを
よく／＼みれば木實(このみ)也けり　道明

本歌
起もせずねもせで夜の身もだへは
夏の物とて蚤蚊あるゆゑ　賴永

百首歌の中に蚊遣火

家々の軒にかやりをたてならべ
天くらふなる夕煙かな　雄長老

棒ふりもつひに稽古をしあげつゝ
今はかやりの相手にぞなる　友靜

蚊柱のたつ町なればよこ滯の
棒振虫はてこやつかはん　滿永

夏の夜のかしやくの責を遁れぬる
紙帳ものりの力成べし　梅曲

百首歌の中に

姑にふすべられぬる夏の夜は
紙帳のすみでほゆる嫁かも　貞富

吉野なるかやのおが屑ふすぶれば
かもなうなりし山かげの庵　周可

瞿麥

撫子の花の口びるうごくこそ
　風の手あてゝあはゝ也けれ　且保

百合花

姫ゆりのあしたの花の口びるに
　露をふくむやうがゆとをみん

大わうは焔魔の廳がそのまへに
　かずゞゝみゆる鬼百合の花　知秋

世話
鬼百合の花をも買て詠れば
　地獄の沙汰も錢でこそあれ　みつなか

手鞠花

人やさきかれやさきにと爭ひて
　つきのけみるは手鞠花哉

美人草

美人草りふじんに客がをりたれば
　ふていしゆ顔のみゆるぬし哉

雁緋

人の手に渡る雁緋は鳥ならで
　籠花生にいけてこそみれ　宗定

白芷

咲花のかしらになくてさかさまや
　ねにかぶとある鎧草哉　満永

宇治にて

これや是彼頼政かぬぎ捨し
　扇の芝のよろひ草かも　圓乘

賀名目花

骨をりて作るかなめの花なれば
　風にあふぎを案じこそすれ　みつなか

子姜（はじかみ）

童口遊詞
子姜をかはひ目でみてかはひとて
　ざれうりにうる子共をかしも

瓜

鹿の毛をこやしにしたる謂れにや
　瓜もちつくり筆をゆひけり　久清

眞瓜

大判や小判なりにしなりたれば
　金（こがね）まくはといふもことわり　行風

白かねでこがねまくはを買ぬるを
　両替すともいふべかりけり　満永

作りおくこがね眞瓜が太刀ならば
　銘は中ごのさねなかにこそ　玄磧

見事さと味とはいづれ金瓜の
　かはをしむくの小刀のつか　貞因

過去によき種をまくはの蔓はやら
　夏の中でのくらひ物かな　信安

本歌
名にめでゝいらふ斗の姫瓜を
　我ちぎるかと人なゝいひそ　元房

題しらす

もり山のいちごさかしく成まゝに
　さ社うはらか嬉しからまじ　法心上人

風爐數奇

垢の抜し御手前なればたつ御茶も
　ふく加減よき風爐のすき哉　貞富

熱ければふきて飲けり風爐の茶の
　時宜知ずして垢をかきゝゝ　貞成

鮨

此魚は都に馴し鮨ながら
　世にうぢ丸と人はいふなり　榮治

なまぐさくありしうなぎの味も
　日をへていさゝすしと云也　本茂

有馬へ見廻の返事に

本歌
有馬山いなの鮨をし湯見廻に
くれたる人を忘れやはする　数二

福島雀鮨を
口のうちにはおとの高く聞ゆるは
喉を飛こす雀鮨かも　惡立

百首歌合に夕立
雨の足となりもあへず此里に
走り過ぬる夕立の雲　藤原信實朝臣

夕立のつよくふれゝば大地まで
ごろ〳〵とこそ鳴神の音　信澄

南北百番歌合
賤の男が更行闇の門涼み
好もしからぬ圓居也けり　前大僧正慈圓

夏の土用にいる日俗に蒜をのみまじなふを見てよめる
今よりは愼恚の虫をしづめんと
のむやにんにく腹三粒まで　宗精

祇園會
渡りぬる橋辨慶が長刀は
むべも祇園の之物なりけり　十也

本歌　尾州にて祭の日よめる
京といへばみこし迄よき祇園會を
津島にのみとおもひける哉　高故

夏月
おひかくる猫も鼬も夏の夜に
月の鼠の足はやきなぞ　淨久

夏の夜の月を鞠にはけずれども
ありといふ間に入し山のは　行重

鵜河
謠　川なみにはつとはなせば面白や
鵜は〳〵たかる魚を取けり　貞富

吉野川のほとりにて
吉野川見所おほしといふ事は
大きな鮎を料るゆゑかも　淨次

夏衣
青花はうつりにけりな帷子に
我身汗かきいまだひぬまに　周可

炎天
池水のかはき果ぬる日でりには
自然とほせる龜の甲かな　行風

汗水のながれもはやき身のかはの
せこらへならぬ暑さ也けり　みつなか

汗
汗水の胸をくだりにながるれば
腹のかはこそ淵となるらめ　成榮

汗疹
身のがはの出來物なれば汗ぼをも
猶うき草の類と申さん　滿永

夏たけ田面に水車あるをみて
水車しかけざりせばやけぬべし
是も火宅の門田なるもの　成之

百首歌の中に荒和祓
ごろ〳〵と御手洗川の濁りしは
夏はらへするけふの人ごみ　貞富

蚊も蠅も暑さまでみなつきねとて
團に木綿をかけてはらへり　友和

後撰夷曲集巻第三

秋歌

立秋風

本歌 秋きぬと目には鞘さへ見えねども
たちぬる風にみはいりに皃　一圃

秋やたつ天子諸侯はいかならん
けふから風は身にぞ四民ぬ　宣就

殘暑

見一の聲もぞのこる暑さには
おくにおかれず扇ひら〳〵　勝方

七夕

天なれば地がみに見ゆる七夕も
今夜あふぎの銀かなめかな　一圃

天川渡り給はん七夕の
足のごひにとかすさらし布　高盛

七夕の手水の折や手向まじ
米ふみ月のけふのなぬかを　及之

百首歌の中に

たがひちがひ天のかはらけ取々に
酌たる酒やほし合のそら　政長

同

煩惱の犬かひ星は今夜のみ
そばへよらんと思はゆる哉　貞富

織女をさゝかに姫と名付しは
糸ごしらへをめさる故かも　満永

七夕は天の川にやはまるらん
その身もほしに出らるゝ也　正成

初秋月

一天にくもりもなくてすみいろの
見事なりける文月の貌　満永

影たふと一字もしらぬ愚癡無智の
尼入道も見る御文月　元成

上書もゝとよりあらぬ文月は
見る人々をあてどころかな　元信

毎月の月にかはりて文月は
かへす〴〵もながめいり候　正流

くもりける夜に

かきくもりすみいろわろき文月は
ちゞみ文字とも詠入候　満永

文月の頃よりあしき蛇の出て
かみつくなれば野山ありくに
心せよと人のいへるをきゝて
よめる

文月の夜に出て人をかむ蛇は
こはく候べく候の字なりか　武重

聖靈祭

世話 うらぼんの月夜にとぼす挑燈は
外聞のため聖靈のため　未得

なき人の今夜はこゝにくる〳〵と
くるとは珠數の玉祭かな　太極

人心たゞ丸盆のそこはかと
なきの泪のたまゝつりして　一見

聖靈をもてなすびには桃柹や
世にありのみを集め捧けよ　信安

盂蘭盆

六齋の念佛の太鼓かねの音に
うらぼんのふの夢は覺にき　蒲叙

うらぼんに佛のいつもくる〳〵と

いふも思ふも虛空法界　相宥

踊

踊子のきる帷子のうらぼんは
しつぼり汗にならざらし哉　宗玗

世話　へうたんの川ながれする帷子を
きて踊る身も浮にうきつゝ　信安

同　尾にひれのそふる小歌の一ふしを
中さば鯖のさし踊かな　種好

見るに心ひかれて胸もをどり子は
うら煩惱のきづなとぞなる　一見

本歌　盆といへばもろこし迄もさし連て
都にのみとをどりける哉　卜琴

踊歌詞　をどりもてきそん十七八人も
まじる役者は笛太鼓かね　保友

紋は巴山吹いろの帷子を
伊達にそめつゝ木曾踊かな　舍永

とりあへずのかけをごりに慇懃なる挨拶ありしかたへの返事に

草紙詞　立まはる身のふりのみが歌さへぞ
ひなびたりけるいせ踊かな　行風

叢露

草むらに露のちら〳〵ちりぬるは
風の手玉をとるかともみゆ　行重

芋葉露

踊歌詞　風ふけば芋の葉の露ふりしやりの
ふんずる如く玉ぞちりける　友和

秋茄子嫁不喰といふ世話を

本歌　ちぎり置し秋茄子をば姑が
あはれ今年も嫁にくはせず　満永

相撲

同　いざけふは在鄕祭にまじりなん
くれなはなげの勝相撲かは　忠直

思ふ手にとれど何ともとられぬは
水の中なるつきずまふかも　知秋

本歌　下くゞるそりに足こそよわからめ
結ぶ相撲の手はすぐれても　一見

手合して負たといふはなげにやる
賣物ならで相撲なりけり　之時

右よりも力おつれば今ははや
左ずまふとなりてまけぬる　満永

本歌　をちこちの勝手もしれぬこけ相撲
覺束なしや行司次第は　正勝

力すまふ手品はなくてゑいやつと
何あひさうもなげのかち哉　行重

名乘ぬるは弓取なれやかちだちの
關の相撲をうつほつけにて　且保

百首歌の中に萩

難波人よしやともいへ我目には
神も照覽いせの濱萩　雄長老

萩

すね萩の花のあるじは風の手に
こまたとられん用心をせよ　みつなか

世俗に宮城野といふ萩あるを見て爲仲のいにしへも思はれてよめる

さほ〴〵のみちのくの程思ふなら
誰かはあだにみやげのゝ萩　友和

女郎花

世話 女郎花齋へし分てをる人は
濡手で粟をつかむとぞみる　重香

百首歌の中に

一時をくねるも道理花をみな
へしをるはうき男山かな　貞富

同じ中に薄

かつて此月のさはりの物なくて
薄がはらむむさしの丶原

下女詞にて

なふござせ薄がまねく又しやも
あの様の袖は露に濡つ丶　よみ人しらす

鷹羽薄

心なき草にも位たかの羽の
薄の下にかゞむ犬蓼　一見

水邊薄

世話 をらばやの心づからに手がいれば
足も入江の尾花なりけり　毎雄

苅萱

柴かりのからぬさきより苅萱は
たがかる萱のかり名成らん　友和

百首歌の中に蘭

風の手のほころばしてや蘭
一野〳〵にわきて匂へる　貞富

紫蘭の紫を四文字にとりなし
てらんといふてにをは四つよ
み侍りける

秋の野に咲らんくわつと匂ふらん
見るらんむざと手折とる覽　友知

百首歌の中に槿

夜のうちに假粧やすらん花のまゆ
うつくしうして見ゆる朝貌　むれます

世話 子に臥て卯にむにいつも起ぬれば
槿花一日見ぬこともなし　満永

槿をさながら瑠璃のつほ〴〵と
思ふわらべは朝はなだもの　安勝

百首歌の中に

槿の花のさきをばぴつしやりと
蹈ひしやぎたる日足どう欲　貞富

葛

きてみれば山の腰より裾ばかり
はひまとへるは葛袴かも　みつなか

木芙蓉

秋風のきつくあたればちらふかと
花もふようにおもはる丶かな

鴈

山けこえふの字形(なり)してひら〳〵と
渡る雁こそいろは見るらめ　且保

月前鴈

かんがりと見えて村々月の夜に
渡るは天のはらまだらかも　正盛

鶉

本歌 鶉がり雨はふりきぬしばらくは
ぬるとも粟の中にかくれん　宣就

題不知

同 鶉をばくれんといひし山家より
番はきたり籠にいれおけ　高故

鴫

世話 はる網にか丶りし鴫のかんきんや
そも首く丶り念佛なるべし　久清

色鳥

色鳥のいろはにほあかと並びゐる
次にはちりぬるりとみえたり　満永

木兎（みゝづく）を笑ひによれる色鳥の
跡に殘るはそしりひきかも

小鳥さすを見て

ひがらめをためつけよりて刺竹の
やぶにらみとは是も申さん　行豐

百首歌の中に鹿

けんそなる秋の山田をもる庵は
鹿を心にかけ作りなり　政長

同

小歌詞 上手なる播磨の書寫の紺かきも
古本ニハ妻こふトアリ
妻こふ鹿の聲はえそめじ　賓之

遠目にて鹿見付しも逃ぬれは
すつかり人ぞ無念がりける　満永

狩人にけしかけられてくはれなば
いぬ死やせん妻こふる鹿　行廣

手をおへご猶こりもせで忘れぬは

諺 血のたる中よ鹿の妻戀　行重

ひつくはへよつびき兵と射ばやとは
思ひしかども逃てごちやら　貞富

虫を奴子詞にてよめる

爰でなけごつこへそつこへやるまいぞ
なんだ辨慶むさしの丶虫　よみ人しらす

稲子

蒔たてに作れる小田の稲子こそ
苗代そだちと申べきなれ　正明

本語 秋蝶

ひよろめきてよわる姿は秋風の
あたればこそあれ百涡の蝶　貞氏

機織虫

いとゞには糸ごしらへをさせ置て
なれははたおれ機織の虫　みつなか

轡虫

傾城につらくあたるが報ひつ丶
生れきぬらんくつわ虫とは　道明

りん／＼と鳴音いかにと駒とめて
たちぎ丶すれば轡虫かな　行重

蛩

とがりたる音をよくきけば耳の穴
もみぬく程なきり／＼す哉　一圃

わらんべの薄の中を尋ぬとて
手もした丶かに蟋蟀哉　友和

百首歌の中に松虫

あほうけに長たらしげな髭口で
きしやに鳴出す松虫のこゑ　貞富

本歌 花火

見尋／＼柳櫻をこめませて
みやこの花火二色なりけり　宗定

三日月

眞丸なる桂男のさかやきも
はんこにそりし三日の月哉　満永

踊歌詞 月

あくるまで脇目もふらじ照月の
桂男にまねがる丶とも　方寸

鳥の名の鷺のお山の阿羅漢も
うへみたまはん秋の夜の月　舎永

詠ればねふけもさ丶ずすむ月の

兎の耳の長夜なれど　資之

夜々見月

鼠の尾兎の耳をつきのべて
ながゝれ〳〵月の夜な〳〵　宣就

月の明がたによめる

見されては雲の浪路を走りゆく
月の兎のあしたにぞなる　一見

十四夜月

本語
木のもとに立て見居てみ透して見
あひやしてみる子持月哉　貞富

八月十五夜

羽のごとはやくはもらでこきのとの
月も今宵の空にすめ〳〵

是は法皇御製なりとぞ

しやこめなう三五夜中の月すめば
金銀(こん〴〵)るりの世界とぞなる　貞徳

眞丸にきんかりとして大きなる
錫のはち月十五夜の月　實秀公

公家も武家も今夜の月は町人も
あれ出て見さいこれ出て見さい　卜養

見事なることをあつた物でな
い世界の眞中といへる世話に
てよめる

あつた物でないとや人の譽そやす
月は世界の眞中のあき　次良

世話
春ならで目の正月はこよひぞと
同
向ふかゞみのもち月の影　貞因

あばらやに獨ねながらもち月を
見明す人やくはずひんらく　守昌

謠詞
くふてみねば味はしらねど比なき
名をもち月の眞丸ななり　みつなか

今宵芋の名月なればそゝろ子と
星をもさして申べきかも　幸和

本歌
つゝゐつのいつの月より丸い月の
出にけらしな芋にざるまに　幸和

あるじの留主なる宿に月見を
りてよめる

代待と是も申さん留主居して
今夜まし〳〵みつる月影　定次

八月十五夜くもりければ

本歌
怨なりと人やそしらん黒雲は
年にまれなる名月の空　乃心

百首歌の中に

同
月見にはちゝと酒こそのみたけれ
我身一つもなるにはあらねど　貞宮

山月

唐臼のさほの山邊をふむからに
しろ月を見るあきの夕暮　敎二

雲晴て青磁のやうな空に出る
月は白手のさらしなの山　重静

野月

辨慶がはだへとぞみる武藏野に
出たる月の影法師をも　定眞

原月

雲の帶に月と星との大小は
さしこなしたる唐土が原　喜雲

河月

所がらかはらけなりに出る月の
影をうつしてきた嵯峨の川　獨友

磯月
磯の波にうつる御月の貌ばせは
よせつのけつの情とやみん　行廣

綠輪月
あかい事あかず月見る綠がはに
毛氈ならでしく物もなし　毎雄

雨後月
雲はらす桂男や雨の夜の
月の輪がへの竹じざいてん　政春

月前風
月の顏にかゝれる雲を打ちらし
みするは風の手柄なりけり　滿永

題しらず
黑雲にちよろ〳〵と隱れいる
月の鼠は白ねずみかよ　宗舖

百首歌の中に月前露
露の玉はかつら男やみがくらん
月にとりわけ光りかゞやく　貞富

月前貝
海中へさしいる月の舟にそひて
折からあぐるほたて貝かな　みつなか

題不知
下としてくもりくもらぬはからふは
空おそろしき月の影ごと　行重

秋晝夜をよめる
猿猴が月をとらゆる手のやうに
長し短し秋のよるひる　義文

秋夜をよめる
ねても〳〵ね餘りてはうと秋の夜は
月のうさぎのうしろ足かも　亘玄

霧
朝日にしそのまゝ山の頭より　本ノマヽ
いきりも立てみゆる也けり　滿永

百首歌の中に秋田
獅子誦詞
けみもゆるせ神田の臺の百性の
與吉が女房植し早苗は　貞富

もみにもみわれ劣らじと賤の男が
鎌を手に〳〵田苅かゝれる　伯貞

門田さへ我物ならずともかくも
殿のおまゝに召されぬる哉　入安

擣衣
本語
聲あやをなして碪をうつばりの
塵もうごかす小歌なりけり　忠直

ほめそやしのすれば鼻も高々と
天狗拍子にしころ打せり　宣就

のりこはき洗濯木綿それとても
うてば碪の音からごろも　泰英

朝倉の山椒よりもから衣
うつ聲きけばめを覺しけり　成之

碪をしとりおく品も柏子よく
手からころりとなげ捨る槌　一圃

かだものは碪おしやり横槌を
枕にしつゝねころびぞうつ　友和

ころもうつ事を業とせる人の
もとにて
碪にて大分かねを打出せば
それも打出の小槌なりけり　みつなか

松茸

露時雨ふせぐ狐のからかさや
いなりの山にひらく松茸　行風

松茸やいつ人なれてみよしの丶
山のおくせず出からかさ物　正盛

雨ふればはら〳〵と開きけり
傘ならぬ松だけのかさ　安親

奈良より松茸えての返事に申
遣し侍りし

松茸のかさは餘所より一かさや
二かさならず三笠山かな　行風

柹紅葉

今よりは雨やはぢかん柹紅葉
しぶ紙いろに深く染つ丶　未得

落鮎

世話
みから出たさび鮎ながら川しもに
落てか丶るはあらかはゆ簗　一見

淨華院にて

葉までよく咲みだれたる作りやう
金目貫の菊一文字　八宮御方

菊

垣にする竹やは刀鍔や菊
金目貫のか丶る見事さ　一圓

三番三詞
秋風のほこりかけてし翁草
花の先までちりやたらりら　重次

菊着錦

色々につくりなさせて上様の
お手づからとぞ菊のきせ綿　行風

重陽宴

千代までも一家一門くるま座に
くるりとまはせ菊の盃　相宥

不老不死の藥ときくの酒なれば
かさね〴〵ものみまする哉　信安

或方へ九日に栗を送るにそへ
て

世話
心ざし木の葉にあらぬ木の實をば
ちくり送るもけふの祝儀ぞ　満永

十三夜

風の手よ斟酌なしにむきちらせ
まめ名月のさやのうき雲　行風

紅葉

紅葉するひえのお山は王城の
守りぶくろの錦なりけり　成之

吉野晴明瀧にて

秋風になげざんかともみつる哉
晴明か瀧に落る木の葉を　顯成

となりの庭前になりし梨もら
ひに遣しけるにたゞ一つえさ
せければ

眺むれば杖もたわ丶にありのみを
なしと答へて一つたまふか　永明

栗

落てあるもしらで木蔭へ立よれば
足に立まちびつくりのいが　正香

家集五十首の中に

手にとれば人をさすてふいか栗の
ゑみの内なる刀おそろし　權僧正公朝

柹

ならの京の時分からこそ出來つらめ
今にやまとの御所柿といふ　相宥

比丘尼寺庭前の栨を所望した
うべての挨拶に
かいまみて戀つゝ寺のあま栨を
遂にはおとし手にぞ入ぬる　且保
能書のかたへ栨おくるにそへ
て
世にすぐれ手をあそばせばお好みに
是もやありとおくる筆栨　滿永
大風吹すさびぬる朝落たる栨
をおくるとて
大風に庭の籬もらりるれろ
されども殘る此かきくけこ　空存
水菜と栨えたる返事に
たべたさの心通る五音信（本ノマヽ）
水なにぬねの又かきくけこ　倹佐
肥後八代密柑名物なれば
ひろはゝやひとふたみかん四ッ五ッ
むづかしながら七ッ八代　一見
九月盡
草木もや皆具成佛いたすらん
秋こそけふを願以此功德　資之

後撰夷曲集卷第四

冬歌

百首歌の中に初冬
大社へけふつい立てゆくといへば
跡にはどれも神無月かも　玄康
同
神無月月かしらよりさむければ
帽子ぞ冬の始なりける　貞富
題不知
秋過て冬きにけらしもみたてゝ（本歌）
紙子うるてふ阿部川の宿　宗範
頭巾
あらさむや〳〵とてけふからは
神なづきんをかつぐべき也　一圃
あふのきてみれども見えぬ頂は
かつぐ頭巾の山にぞありける
初冬時雨
神々の旅立たまふ道筋を

清めにふつてきたしぐれ哉　満永

時雨

世話
喧嘩にはあらざる時のふり物の
かゝるめいわく時雨なりけり

花の父母と言れし雨がふりをかへ
諸國修行をしぐれなるらん　貞德

ぬれじとていそげど雲の足はやに
はしりこくらをする人時雨　一見

亥子

縁日といはひそなふる亥の子餅
是とき辨財てんやものかな　貞因

童世話
けふは旅あすはいんでもゐのこ餅
おちつきつゝも祝ふべき也　みつなか

梅の紅葉せしをみて

冬がれの赤葉まじりの長枝をば
さびやり梅と申すべきかも

落葉

葉は落てすぼろ坊主の柳こそ
かみなし月の證據なりけれ　安勝

百首歌の中に

僧正が谷の嵐やつよからん
木葉天狗のちりぢりにみゆ　淡路守宗増

冬されば葉なしになりし山口も
ほねたくみかは木々の梢よ　弘重

山だちと是もやいはん風の手は
木葉衣をはきてこそみれ　満永

くものいに繫ぎとめつゝ風の手の
引廻しぬる木葉猿かな　行重

赤き地の木葉衣におく露は
たゝ水玉の小紋なりけり　行風

はたはたと妻戸たゝくを誰樣と
みれば木の葉の雨の足音　相宥

庭にわらはべのあつまりてま
さなごとするを見て

世話
さむさをもいとはで庭にちり遊ぶ
わらべも風の木の葉なりけり

口切茶

同
口切の會を催す十月は
神の留主しつ茶をひいつ也　貞因

爐の內の雪の白炭ながるれば
又ふりかくるあられ灰哉　友和

霜

雲の手もてつだいやせし空よりも
おろしたてたる霜柱かな　満永

冬はたゞどこもそろそろ算盤に
おきそふ霜もつもり物かな　行重

本語
湯の盤の銘にはあらでめいわくは
日々にきれつゝ皹(ひゞ)の痛さよ　如水

垢切

足のうらのきるゝといへるあかぎりに
霜のつるぎをふめば也けり　治住

雪やけにやけぬる足は冬川の
あつい氷もふみわたる故　宗方

冬日

まづしきがさむしといひて冬の日に
いくつきぬれどおひえ也鳬　太極

冬日牛の玉をみて

冬も猶あたらかにして牛の玉
これぞ大日如來肌なる　夏虫

百首歌の中に寒盧

難波人かれたる芦のかるわざは
鎌寶藏院そも之なるまい　貞富

すぎなひはなるはの事の中々に
芦かる業やつめたかるらん　友和

氷

朝起の手水の水にはつたりと
事をかゝする氷なりけり　貞富

きつぱりと水ぎはたつてはり者の
よきは氷のころもなりけり　みつなか

千年をへたる氷にあらねども
ふみわりぬればはり〳〵となる　宣就

川氷

はちならで舟の棹もてうつやこれ
川の氷の太皷はりゆゑ　治佳

氷にてはつたとしれぬ水底も
すかしてみつる紙屋川かな　滿壽

さゝ浪のよせぬるしはの厚氷
はりてのばせる紙屋川かな　滿永

氷はる上をわたらふわたらしの
疑心もふかき狐川かな　一風

今宮御會氷礙舟

湊出るかこの友舟ゆすれども
ひわれもやらぬ朝氷かな　源仲正

寒夜月

さえきりて出ぬる月のけんなれば
山のはものと申べきかも　滿永

冬風

世話
きるやうな寒風は物すごろくの
どうもかひなもふるふ斗ぞ　高故

百首歌の中に千鳥

はつとおりはつと飛行ありさまは
そちが心も村千鳥かよ　貞富

浦千鳥

名にしおふ備後おもてに飛ゆくを
いはゞたゝみのうら千鳥哉　行重

立むかふ屏風の浦のいそべりは
いき寫し繪の村ちどりかな　行風

海つらを打ながむれば惣なみに
ゆられてあそぶ友千鳥かな　みつなが

題不知

本歌
淡路島かよふ千鳥を肴にて
いくよね酒をすまの關守　一風

水鳥

生ながら鹽したやうに水鳥の
翅も背も霜ぞふりけり　貞德

百首歌の中に

いつまでもそふに命やをし鳥の
契りはふかき中の思ひ羽　むねます

鴛鳥の衾にかくすつるぎ羽は
磯うつなみの枕がたなか　一見

百首歌の中に

泉水のたて石ころび鳥の名の
をしに打れて死ぬる哀れさ　雄長老

同じ中に網代

閉られて動きもえせぬひをのみは
宇治の網代にかゝる迷惑　貞富

初鯨

本歌
つきあげて千々に物こそ嬉しけれ
わが身ひとりの鯨ならねど　次重

鷹狩

なれよりも大さまさり鶴までも
とりおぼえしはかしこ鳥哉　滿永

ひつくんでおつる所をつる〳〵と
走りよりてやされる鷹匠　貞富

題不知

花に酒月に芋くふ春秋も
冬にはいかで杉燒の鯛　行重

百首歌の中に霰

大空にはゞかる餅をきり置て
霰となして冬やまくらん　雄長老

雪佛をがまん珠數のたつまにし（本ノマヽ）
いれたき物は玉あられかな　滿永

雪

天人のかしらの花の雪花に
けふふりにきと御推量あれ　一見

ぼた〳〵と一こゝなりにこゝ（なりて）
ふりくるゆきや打綿のごと　貞富

小歌詞
ふみつくる帷子雪の足がたを
もとの白地になす由もがな　宣秀

山雪

本歌
たちぬはぬ木葉衣をきたうへに
帷子ゆきもかつぐ山姫　滿永

遠山のいたゞきにあれば面白く
ほんほりとみた雪のわた哉

脇指のさめざやならしふる雪の
ぱつぱをみゆる山の腰本　如水

ふる事はちとづゝなれど山のはが
かまねばたまる小米雪哉　行重

うつきりと雪に白みの地の樣子
上々吉とみるかゞみやま　信安

富士の根をぬり桶にして山姫の
[illegible]つまるゝと見ゆる白ゆき　行風

[illegible]雪をたて花と三穗の松原は
[illegible]へながしに田子や前置　政次

さつとふる帷子雪をきてみれば
うすき地白の一重山哉　滿永

浦雪

すまの浦やゆゑ有原の松がえに
雪ひら〳〵と降りぞかゝ（れる）　入安

橋雪

破れ橋年ふりつもるゆきげたを
はいて渡るはあぶなかり皃　太極

竹雪

小歌詞
いな竹やおさへた竹やねてをれて
花にましたる雪持ながら　因幡守長治

重家卿家歌合

ますらをが埴生の小屋の棟よわみ
いくへに成ぬ雪のうは葺　前大納言隆家

家集中に

北東風にけゐの床までとほりつる（本ノマヽ）
小雪はみすのふるふ也皃　源仲正

庭雪

白紙にちらし書すとみえつるは
煤はき捨るゆきの廣庭　遠江守一政

炭竈

炭やくにひまもなくして働くは
身のくらうなる仕事なり皃（みつなか）

山々にわれおとらじと賤の男が
すみかまんをも立る煙よ　宣就

本歌
浦島が箱ならなくにがまの口
あけてくやしや炭頭にて　行重

三百六十首の中に
くゆりつゝ世に炭竈のけぶたきを
吹つけもやせ冬の山風　曾根好忠

埋火

たばこのむ友と頼で冬の夜は
灰をきせるの埋火のもと　友和

釜の下に住つけたりし灰猫の
目がひかるかと見れば埋火　貞富

冬されぱさむくつめたき老が身の
夜床の伽におこし炭かな　行重

火桶

さむき夜は我だいてぬる火桶こそ
老の命もいけだずみかな　清勝

おちぶれて紙衾をかぶり敷て
ぬるとて
本歌
恐ろしやおもふ中をもさけつべし
夜の衾のかみなりの音　讀人不知

ふとん

諺詞
大和にもをる唐綿のいとなみは
今しき島のもめんぶとんよ　忠直

火用心よぶをきゝて
冬なれば火の用心とこわたかに
よぶもことわり此夜番しき　廣通

佛名

なむあみだぶつ〳〵名の聲きけば
もはやこぞしも願以此功徳　元信

餅花

大黒の棚にかざれる餅花も
猶つきてくふ白ねづみかな　相宥

節季候

きのふより足はやなれや節季候が
笠にさしたるしだい〳〵に　資之

節季候とさしもあたまに顯はせと
とまらで年のこゆる山草　知義

歳暮

古桶のみづわくむまで老やせん
ひたもの年の暮を重ねば　是誰

質ならでけふを限にながれゆく
年はくれ〳〵をしきもの哉　清孟

年浪のよるひるとなく油斷なく
うちかけ〳〵おいのくれ哉　舎永

えび腰は猶かゝみゐる身の皮や
額になみのよる年のくれ　義益

月と日は珠數くるがごと手前をも
すりきりたりし年のくれ哉　貞富

明る酉の年よりうけにいるを
おもひてよめる
あちらむけさるよ何せん冬一夜
明なば寶うけとりのとし　儀正

戊年歳暮に
いと早もいぬてふ年よくれ〳〵に
お名殘惜くおもほゆる哉　昌憲

世話
いぬ年のよるやうに只うかり〳〵
くらいた〳〵極月のけふ　貞富

歳暮

胸ぐるしけふや限に取つむる
しんしやくせんをおひの暮哉

鐵炮もそこのけ程に一年を

大晦日まで打暮しけり　兵部少輔嘉隆
尺八が今年もけふにくれ竹の
一夜斗にきりつめにけり　八宮御方

除夜

世話 除夜なれや惜みし年もけふではや
果の能には鬼の沙汰かな　毎雄
同 除夜にさす軒の柊でけがせぬば
たゞ鬼の目に見おこしやなき
節分の鬼切丸は門口の
柊の木たち家の什物　高盛
鬼はそと鬼はそとへと口まめに
手まめにはやす年男かな　貞富
ねつ起つする間にもはや節分の
まめをうつゝか夢の世の中　一圃
世話 年の數節分のまめを一口に
とつてくはふの鬼も十八　顯與
同 おそろしき名には相違や節分の
豆におそれてにぐる鬼みそ　弘誓上人

後撰夷曲集卷第五

賀付神祇

元日祝

大ふくをいはへる門にたてぬるは
千年もふらん茶筅松かな　知秋
君が代は久かたつきの御茶なれば
ふくまでもようたつ春の色　正之
本歌 一節に千代をこめたるひさくもて
くむともつきじけさの大福　永貞
秋の田の稻の出來やうかゝれとて
ほながを春にかざりわら哉　行風

夏祝

君が代はながい菖蒲を軒口に
さして變らぬ嘉例めでたし　景則
水上にすんだる御代にわき出る
智惠の泉ぞめでたかりける　友和

秋祝

君が代はほにほがなりて年々に
愛たからふよ久しからふよ　宣秀

百首歌の中に

長久に治る御代は住吉の
市から十迄めでたかりけり　政長

冬祝

年の數はよむともつきじ節分の
まめな我身を猶いはひ歌　夏虫

杉燒ある座にて

料理する魚のめでたい御代なれば
身もらく／＼と杉燒ぞくふ　一見

祝

波風もたゝぬやうにしうき世をば
わたらせたまふ君が舟かも　貞富
たれもかういはふや君がため池の
水には龜のすまん疋よと　滿永
うごきなき證據にたれも石倉の
いほりの下の文字いはふなり

武士祝

一張のいきほひに敵をたひらぐる
弓は何よりたからもの丶ふ　宣就

聟入祝

本歌 聟殿は千代にや千代と祝うつ
　礫の石に苔のむすまで　及之

君が代は何にたとへんまさかりを
　ちひさき針にとぎたつる迄　行重

本ノマヽ つてん天下めでたいことや申べき
　打をさまるき世を祝ひては　舍永

君が代は松のちゝりの種生て
　末も戸板には本ノマヽたてなるまで　杉絲

まつすぐにはびこり増る君が代は
　末までつよき竹の根がらみ　安勝

喜多院入道二品親王家五十首
祝の中

君か代は眞如くちせぬ室の浦に
　慈悲のあさ日の光さす迄　寂蓮法師

神祇

天照皇太神のあまねき御惠を
おもひてよみ侍りし

ぬかつきしきねの外なる身の塵も
　箕にてひるめの神のみ心　行風

伊勢にて

神明の御恩を何とほうせんに
　ひざまづきたる斗りなり皃　友信

宇治橋にて

欲垢や猶ないぐうの淸めとて
　手水つかへる人も宇治川

人々散錢まくをみて

本歌 散錢も所によりてかはりけり
　難波はあしをいせは鳩の目

正月十六日伊勢へ詣りける時
よめる

けふごとに神事催す獅子頭
　十六日は尤もぞかし　正信

題しらず

社頭とていせの山田をもる人は
　尤鹿をいむべかりけり　みさく

御祭によめる

御旅とて神にも宿をかすがのゝ
　馳走をしたてまつる氏人　露錢

八幡にて

魚鳥は嫌ひたまはじ石淸水
　鳩の峰なる神にまゐらば　貴之

すまふの手四十八願かけてとるや
　彌陀一躰の神の夜宮に　友知

賀茂

世話 伊勢よりも雨風の神ござりたら
　わけいかづちで庭ぞ掃べき　安勝

競馬

くらべ馬相手おとしていさめるは
　かつにのつたる禰宜の貌付　みつなか

稻荷初午

初午の轡の音やこれならん
　いなりの宮にひゞく鰐口　貞因

たび給へかくれみの笠そのこづち
　たからあはせてみつの神垣　倭佐

松尾

三木たんと參ると神の御貌の
　いろはかはらじ松の尾の宮　信安

三輪

まつすぐに杉のまさめの木心な
人こそまもれ三輪の明神　貞富

祭の日雨ふりすさびければ
雨はさつと清めにふりて雲は皆
さるの日吉の祭めでたき　満永

山王やさはらばひやせひやさんと
さる手祭のねり衣成らん　可正

住吉に繪馬かけし時
住の江に墨の繪馬をかけたれば
尤ここそ神もみるらめ　満永

座摩大明神は雨を領したまふ
を思ひてよみ侍りし
諸詞
謠ひなす千手の御手のそれならで
さまざまの神のちかひ雨山　行風

諸願とてかねの緒をかけ繪馬かけ
いのる心もさまざまの宮　政長

鹿島事觸を
事ぶれの禰宜はかしまの御使に
あるき神とや是も申さん　貞富

家集になゝのおやしろにてよ
める
いのる事なゝのお社ころころと
ことなはせよく口走る也　源俊頼朝臣

雨乞に
雨乞のいさめのための踊子は
袖をつらねてふるの明神　自嘯

吉野勝手の宮にて
神軍かつての宮の鉾のえは
よしの漆の花ぬりにして　徳元

散錢をはまのごとくにまく人や
まもる勝手の御前なるらん　法眼紹巴

子守の宮にて
童愛詞
鈴の音もころろんころろころころと
いふは子守の神々樂かな　貞富

金鳥居にて
本歌
みよしのゝかねの鳥居も春くれば
いまへしほの緑青のいろ　三省

多賀
正直のかうべにやどる御こゝろ
あら杓子には多賀の明神　近吉

筑摩
祭には鍋いたゞくを女房の
緣につくまで許してし哉　満永

北野にて
拜殿にかけし繪馬の書付も
はねたる文字の天滿天神　一圓

御影を拜てよめる
菅原やふしみあふぎみたふときは
御名も廣大自在天神　休圓

安樂寺にてよめる
鶯の羽をやとひて飛梅の
駕にはいかでのらできにけん　法印玄旨

同じ所にて
世話
飛梅の花咲ころは天神の
御ひげの塵を取てみましや　顯與

杵宮
太神にたてまつらんと餅つきし
うすめにそふる杵の宮かも　行風

唐臼によこがみあるをたぐひにて

日本にたつる杵のみやかも　延之
横槌のをれたやふなる我等まで
守らせたまふ杵のみやかも　貞富
おもひこめ願たてうすの印ありて
神の威光もつく杵のみや　信安
千早ふる神にはあらぬ宮紙を
きりて御幣とあがめぬる哉　田也
石の鳥居に書付ける
歌の文字切付るならやはらがん
神の鳥居の石のかたくと　友知
千金にかへぬ氏子と神かたい
證據にたつる石の鳥井か　信安
夏神樂
すゞしむる心をもつて我家の
子孫に惡事夏神樂かな　長丸
題しらず
辻祭けふをはれともみせさやの
さき折掛てねるやたが子ぞ　知家卿
茅輪
神道を行ふねぎも御祓に
輪をくゞる也禪のまねして　高故
本歌　住吉御祓に詣て
引よせて結ぶ祭のらちやらひ
とくれば本の竹丸太なり　永貞
題しらず
同　初尾とてぬか取あへず里人の
手向るもみも神のまに〳〵　顯與
或社にて禰宜と神子何事やら
んいさかひ神樂の具もおしや
りけるをみてよめる
すゞしめの鈴さへ投つはふりこは
神樂太鼓のばちやあたらん　弘誓上人
福祿壽戎大黒の繪を題にてよ
める
おのづから大黒天より下さる〳〵
福祿壽命戎三郎　宗定
題しらず
米をひる神子には縁のちかゞれや
神にぬかづく杵のありさま　一見
本語　參る人多きによつて手早振
神の火をます十二灯明　行重
正直な人のかうべの鉢卷や
やどらせたまふ神のしめ縄　宣秀
正直な人をばまもる印には
社〳〵につかふかんなぎ　貞富
はげしうへ蠅はすへると正直の
かうべなりせば神ぞ宿らん　顯與

後撰夷曲集巻第六

離別付羇旅

むまのはなむけに
吹風のたよりもあらばかきくれよ
筆をなげしのほこり斗も　休甫

餞別に扇遣すとて
はなむけに扇をやるはをり〳〵に
たよりをせよとあふぐ所か　貢之

百首歌の中に
死ぬるほど悲しき物はおもふ人の
遠き旅路にいき別かな　貞富

同
別ても又よりあはんあはんとの
くりこと申いとまごひかな　一圓

題しらず
本歌 伽羅衣きつゝなれにし妻の助
はる芝居する旅をしぞ思ふ　俊佐

羇旅

大井の里にて夕立のしければ
やれいそぎ用意をせよと夕立や
刀のさやにおほ井しぬめり　友信

鳥羽の車道とはにしるきをおもひてよめる
くれかゝり行やとば〳〵鳥羽道の
しるきにはうと秋の山道

狐川にて
宿の名の八幡の穢多が舟賃を
はぎてとりぬる狐川かな　高故

はまりては淺き瀬をさへ恐ひはひと
なく〳〵わたる狐川かな　貞久

題しらず
本歌 大坂の土佐堀川にほのみえて
いまやのぼらん淀の過書船　信元

大物浦にて
旅人のむかふの景を引うけて
のむ盃のたい物のうら　政長

百首歌の中に旅
旅人の口なぐさみにすまの浦
せき吹こゆるたばこ一ぷく　一圓

舟坂にて
草臥て腰もふな〳〵舟坂の
茶屋の縁にし休む旅人　友信

垂水にて
兵庫よりのりたる馬のはるびさへ
たるみの宿をきくは實か　政長

日岡峠にて
たつる茶の淡田口をもたゝきつゝ
休めばどつとたくる日の岡　珍執

石邊にて
はたごやに入立みればくき桶に
おしをかけたる石邊なり臭　一正

水口にて
本歌 水口にわれやとむらん女子さへ
軒の下には諸聲によぶ　よみ人しらず

土山にて
馬かたの足跡たづね行道も

白土山の雪のゆふぐれ　信元

湖水の舟を見て

山の名のひらばりなりな櫓を立て
おすや腫物の水海の舟　一見

蟹坂

夏の日にあなくるしやと旅人の
よこばひにして登る蟹坂　光廣卿

かにが坂はふて上りし草臥は
かうこそ有んと思ひける哉　延之

鈴鹿にて

氣づかはし伊勢路を馬にのりかけの
つゞら折〱すゞか山哉　智元

石藥師

所からおひゆく馬子の小歌さへ
上るりぶしの石藥師かな　信元

雲津川にて

雲津川あぶなきかりのほそ橋を
竿になりてぞわたる旅人　榮種

本歌　題しらず

參宮の道さまたげになる物は
みめよき茶屋の女なりけり　貞因

はじめて伊勢へ下りけるにかねて思ひしより遠くおぼえ身もつかれければよめる

伊勢道もこまれよてとは遠からじ
草臥し身のゆけばこそあれ　友久

櫛田川にて

煩惱の垢すきおとす水ぞとの
神のおつげの櫛田川かも　榮種

山田より阿漕が浦に行道にてよめる

本歌
いせ參あこぎが浦にひく足も
度重なればちが〱ぞする　廣通

鬢の澤といふ所にて

糸びんの澤とやいはんもとゆひの
はゞよりほそき里の道筋　友久

鳴海にて

精だしていそくなるみの暑さには
汗もかきつゝ行かごのもの　友信

芋川にて

足引の山のいも川ながれなば
自然生にや鰻とならん　玖也

ふた川にて

國は三河里はふた川あはすれば
いつかは登りつかん故郷　遠江守一政

かきあげて洗ひや流すかちびとの
世をうみわたるかさのふた川　澤庵和尚

人々八橋見物するに

みな人の八橋見んと八方へ
かけ廻るもぞ蜘手なりける　恒貞

しらま弓しらぬ長さは山鳥の
尾にてやはぎのほしの一筋　保友

岡崎にて

鉢袋手をさし入てさがせども
何をかざきの茶の錢もなし　澤庵和尚

鹽見坂にて

いざさらばこゝで料理の鹽見坂
荒井の海のさかな求めて　光廣卿

火打坂にて

鍋炭にちがはぬ茶屋のかゝが手は
火打坂てふ印とぞみる　友信

池田にて
音にきく池田の宿につきぬれば
湯屋を尋てせんそくぞする　一正

見付を出て空くもりければよめる
雨雲を見つけに風もふくろゐと
駒にむちうちかけかはの宿　友信

みつけにて
白雲のこなたかなたに目ぞくばる
富士をみつけのかたのいらねば　法印玄旨

かなやにて
謠 水の干て嬉しきかなやいざさらば
こさんとのぞむ人大井川　友信

宇津山にて
白玉の何ぞと不審うつのやの
團子はこれぞめされ候へ

吾妻より上るとて鞠子宿にてよめる
藤枝にかゝりとまらば鞠子宿
かへり足をものべ足にせん　雅章卿

府中にて
日高なにとまれと駒の口ひくは
忠のふちうの馳走なりけり　珍乾

江尻にて
忠節もふちうとぞなる持鎗の
えじりて主の馬を追つゝ　尋海

旅人はいつしか巴豆をのみつらん
とめてもくだる江尻なり鳧　玄札

興津にて
みても三穂の景にはあらぬ心をば
あとにおきつゝ旅はうい物　友信

春雨にあふて日高の留りには
欠をしつゝねつおきつなり　知度

由井にて
のりかけの馬の荷縄のゆるまゝを
しつかとしめてゆゐの濱道　一正

由井蒲原をよめる
里の名のかんばらはらと亂るゝや
髮をしどろにゆゐの馬かた　友信

蒲原にて
遊女には分別だての旅人も
さんかんはらりちがふ揚錢　信元

たれとしらぬ人と道づれせしに算用の事などかたられけるいとよしありければよみてつかはしける
算用もよきかんばらの人ならば
そろ〳〵ばんに語り逢べき　知友

かんばら吉原をよめる
蒲原や吉原原をかぞふれば
これぞ般若のはらみつの道　尋海

富士の山を見て
それがしもきてこそはみれ菅笠の
なりをするがのふじの頂　友信

みやこへの宮笥にしたや富士の山
片荷に田子の浦がもたれば　利安

題しらず

双六のさいの川原を打過て
ゆけばほどなく番所かな　玄札

咳氣故風冷しと扇をも
いるゝ箱根のせき〳〵ぞ行　源具起卿

坂のほどしら〳〵汗をかく馬の
駄賃もたかき箱根山かな　顯輿

伊豆のあたみの湯にまかりけるに米かみといふ所をとほるとて

賤の女のもみずり歌のこだゆるは
ほゝばるほどや米かみの里　未得

肩衝宿にて

地白なる霜のあしたはいかならん
夏ぞきてみるかたひらの里　澤庵和尚

川崎にて

川崎もつのくにむさしかはりけり
かれは舟つき是は馬次　信元

江戸へ入べき日駕籠からせけるにあくまでもさきかごなりければ

本歌
むさしかごさすがに足の痛むには
乘ぬもつらし乘るもうるさし　正見

角田川にて

きてみれば武藏の國の江戸よりは
北と東の角田川かな　信輔公

東へ下りける頃深川の八幡に詣けるにおもひがけざる人にあひての挨拶に

めぐりきてあふや御緣も深川の
弓矢八幡ゆみやはちまん　信安

東海道をへてむさしに下りつき上るべき道は木曾路をとおもひたちてよめる

めづらしう上り下りのてをかへて
我は兩道かくるむさしの　友信

板橋蕨の宿にて

わらびにてのめる煙草の不自由な
たびはかたはらいたばしの宿

本詩
蕨の宿にて

むさしのゝ蕨を通る旅人は
まづ手をにぎる浮れめの袖　信元

蕨の宿にて馬子どもの喧嘩するをみてかれが心をすなはち奴子詞にてよみ侍りし

手を出せろ折てくれべいばか面め
ごこさ蕨のしゆくの馬かた　行風

本庄倉加野里にて

本庄の道ののりよき此馬は
さくのくらがの里なれば也　友信

沓懸追分にて

旅人の馬追わけて行道に
あるはむべなり沓かけの宿　行重

世話
垂井の宿にて

長半があてのみをせし昔より
たるゐの宿の名は立にけん　友久

碓氷の坂にて

すべりては尻餅をこそつきにけれ
うすひの坂をあめにこす人　未得
古本には越路トアリ

越後におもむきけるにめしつれし者手足いたみ棒坂こえか

ぬるをみて
足も手もいたみしこしの旅人は
登りかねつゝよつばいの坂　友久

湯尾峠にて
ゐいやつと上れば茶屋に沸しぬる
くわんすの湯尾峠なりけり　珍帆

修行に出柿崎に宿を取りける
にあるじすげなうもてなしけ
るを夜に入て法問の事などか
たりきかせければ随喜しける
をおもひてよめる
柿崎にしぶ〳〵宿を取りつるを
あるじのこゝろ熟したり㒵　親鸞上人

播州逢坂にて
かちやいかに乗たる我も乗れたる
馬もうきめにあひ坂ぞかし　政長

高砂に舟がゝりして楫をあゆ
みにかけしをみて
謠詞
高砂や肥後の國よりつく舟の
楫をわたすは今も艫なり　宣就

しかまにて舟にのりおくれし
を見て
出舟にのりおくれぬる旅人は
何としかまの徒はだしにて　長行

こしほそありの浦にて
いたむともさいつさゝれよ盃を
こしほそよりもありの浦迄　よみ人しらず

旅のやどりにて風鈴のあるを
みて
謠詞
短尺をつけられたるはふしぎやと
みれば旅宿の風鈴なりけり　成之

旅の歌
駕籠にのり賃出しつゝありかずに
自由にゆくもおあしなり㒵　蒲永

本歌
東風ふかば荷覆をせよ馬の上
乘手なしとて雨なゝしれぞ　高故

海のやち旅百千鳥足
遠道を馬にものらで先たゝぬ　行重

牛にのり長旅せし時よめる
本歌
たら〳〵と又此道や遲からん
牛と見るにぞ馬は戀しき　賢隆

海路旅
同
かさゝぎへ渡せる舟のきつかりと
白きをみれば木綿帆にこそ　行風

本語
乘合の人皆ゐへり我ひとり
さめたりがほの沖の船頭　成之

そばからも身がひえまする四國舟
あはの鳴門のきびの惡さに　貞富

おもひがけぬやどりに本みし
をんなこれかれにあひてよめ
る
本歌
たのむかな亭主もしらぬ此宿に
知人えたりおまつお杉を　自喰

題しらず
旅人の氣はうかれめに腎精も
つかひへらせる腰のさげ錢　一圓

旅夕
ひだるさも哀もそふや是といひ

かれいひもなき宿の晩もこ　毎雄
田舍より京にかへりつきてよめる
度々の田舍くだりの苦勞さも
　歸路しつれば氣樂なりけり　滿永

後撰夷曲集卷第七

戀歌

題しらず
いとをしや更に心のをさなびて
　たまぎれらるゝ戀もする哉　西行上人

忍戀
我戀は靑み上戸ののみさかり
　色にも出じとりもみださず　貞德

本歌
忍れば貌もやせけり我戀は
　物やくはぬと人のとふまで　元信

見戀
一目見てふるひつきぬる俤が
　はや煩惱のおこりとぞなる　本也

百首歌の中に
取なりを見るとわしらが癖にして
　つかみつく程君ぞ戀しき　貞富
九十九夜かよひし人の足づよや
　見初てわれは腰をぬかすに　酒粕

百首歌の中に
田樂のこがれて君の戀しきは
　する山椒のみそめたるゆゑ　一圃
君が姿みるからうすのそれならで
　思ひかきいれふみやりに見　方重

未見戀
見ぬ君の諸行むしやうに戀しきは
　是生めつぱうな我おもひ哉　昌恐

見不逢戀
我戀をたとへていはゞみこのうら
　あふやうなれどあはぬ君哉　景則
蛤の玉のやうなるお姿を
　見るは目藥氣の毒にこそ　正盛

名立戀
釜の湯のわきかへる程名はたてご
　賤がこひ茶の逢ぬつらさよ　知秋

祈不逢戀
君が心いよ〳〵我にほどけぬは
　結ぶの神をいのり過たるか　貲之

誓戀

童口遊詞 ゆびきりや地獄の釜へほつたりと
おちようといふ二世の契約　安勝

謡詞 世にうたふ殺生石のそれならで
約束かたき君と我中　一圓

百首歌の中に不逢戀

世話 あはぬ夜は身をあへ物にほしみその
床もなみだにうかし汁哉　入安

戀風をひきて煩くらすこそ
藥も君もあはぬゆゑなれ　貞林

憑妹戀

君にかく腰ぬけ者となりし身の
杖とたのむは中立にこそ　知秋

變戀

吹出す喉笛よりの御情も
終にはかはるうその世の中　正勝

世話 誓ひしもらつこの皮のかはりつゝ
あちらこちらへなびく君哉　政要

契りぬる君が情のうす假粧
跡からはげしおもて恨めし　行廣

馴戀

髻(もとゆひ)を結ぶの神のちかひころ
さけて嬉敷われとありさま　安勝

夜戀

短夜も獨はねらじ寅の時
うき立戀のみをしせがめば　次木

待戀

本歌 こぬ人を待におそしと世話をたゞ
やくや勿論身もこがれつゝ　顯與

こぬ妹は手つゝかぬひし着る物の
恨みながらも幾夜まち針　行重

家集戀歌の中に

御園生のませの秋萩七くだり
たくるにつけて遅き君哉　源俊賴朝臣

逢戀

いが栗のみとせ待侘あふ夜には
にじりよりつゝ新枕せり　毎雄

百首歌の中に

蛤の貝のたま〳〵あふ時は
にじりよりての新枕かな　貞富

同 しんみりといとゞべたつく我心
味噌で豆腐に新枕かな　一圓

同

梓弓引手に筈をちかへじと
やにはに君をいて落しけり　貞富

君が今夜おちたればこそ戀死ぬる
命を我はひらひけるなれ

謡 妹と背とたまにあふ夜は紅閨に
枕をならべ口やすいてう　元成

君と我二世を契りてねたる夜は
なむあみだぶつ睦言ぞいふ　悳立

題しらず

山賤の埴生にかこふわれ竹の
よませになぞて逢見初けん　藤原光俊朝臣

逢増戀

ふりつめし心こんぱん打とけて
双六のせの戀ぞ増れる　圓琢

百首歌の中に曉別戀

君と我肌をあはせのきぬ〳〵も

ときもけかたのうき別かな　貞富

別戀

別路に思ひを鹿の春筆の
しくり〳〵とぬるゝ袖哉　毎雄妻

鳥が啼ばそなたにもなく我もなく
惣泣にする衣〳〵の袖　友和

怨切戀

むつまじや君は白歯にみづからは
ひたひ髪より契りそめてき　重次

思戀

世話
我戀は啞の夢みた如くにて
いふに言れぬ思ひなりけり　可正

百首歌の中に

君こひしこひし〳〵のかたまりか
ばんしやくと成て我思ひ哉　貞富

同し中に片思

我戀はせいたかひきの駕籠かきの
跡先あはぬかたおもひかな　一圓

同

君に我えもん好みはいたさねど
こひそめぎぬの片思ひ哉　貞富

逢不逢戀

起て詠ねてみる眼のたまさかに
逢ますする夜はかのえさる方　毎雄

被忘戀

上るり詞
上るりのふし〴〵となる中々に
さてもその後あはぬ君かな　一幸

百首歌の中に

忘れじのごわうのうらをみ熊野の
うらみてかひもなちの權現　政長

恨戀

うき人を千万〳〵恨みぬる
そではなみだのつゆも億兆　宣就

百首歌の中に

戀風のつよくふくりういふ君が
詞のくずも恨みなりけり　貞富

題しらず

すてまうさふうき名都にたつみ也
何うぢ〳〵と君をしのはん　正定

互思戀

情をばかたみにかけつかけらるゝ
戀のおも荷は持もくにせず　幸出

不逢歸戀

忍びゆく中立賣も徒に
たゞすご〳〵と戻り橋かな　貞林

しとゝめをしのび〳〵に通はせど
君にえあはで歸りくりかた　清祇

難面戀

世話
なびかざる君を申さば楠の木の
石よりかたき彦七が貌　行豐

夢戀

あさきゆめみしお姿を忘れかね
ゑひもせずけふ袖ぬらし候　元房

題不知

おのづから手枕はづしねなほれば
我おもはずと妹むつけたり　よみ人しらず

五音にてそれと知らるゝ小夜更て
門にたちつて殿ごなるらし　政次

小夜更てそろりと忍ぶ部屋の戸に

夢になりこゝ逢せてたべと君がぬる
枕かみにやきせいかけまし　みつなか

寄笠戀
きもせいて君はすげなや菅笠の
紐も結ばぬ縁ぞものうき　知秋

寄衣戀
戀衣みる茶のいろのあさ〳〵と
明ばんあはせ給はれよかし　残月

寄布戀
いかなれば戀にむさるゝたゞ布の
猶さゆみなる人の心ぞ　源仲正

永久四年百首歌の中に
汗いらはうれたくせこは思はしや
人肌ふるなまだらを衾　藤原仲實朝臣

寄肩衣戀
世話　身にあはぬ君が心は鬼もじの
肩衣をよるの物おもひかな　貞富

寄袴戀
いかにせんうき年月をふる袴
君はきもせでまちよわり候　知秋

寄糸戀
よつほごて打とけたまへ片糸の
よる〳〵くるも心しんくや　行重

寄莚戀
宵々に人待床の寝むしろは
あふみ表にしく物ぞなき　未得

寄鎖戀
世話　金をもてするとは無(なし)にしつくりと
くさりあひだる君と我中　可正

寄鬢戀
君もしれ我はさいづちあたま者
のみの先よりふかく打こむ　友松

寄毛抜戀
君とわが中はよくくふ物なれや
上手のしたる鑷(けぬき)にあらねど　延之

寄櫛戀
二十六度くごけござけず黒髪の
くし〳〵物を思ふ身ぞうき　利房

家集に
杉扮を引袖人はあまたあれど
君より外によこめやはする　藤原清輔朝臣

寄車戀
きしまする人の心はやれ車
わが儘にしも引にひかれず　未得

寄乗物戀
跡先をおもひまはせば我思ひ
乗物の棒の中やたえなん　貞富

寄行燈戀
口舌してくらき心となる中も
丸行燈のあかしあふ夜は　正信

寄十露盤戀
幾度もあはで待そろばんことに
いつはりにくの十八のきみ　瑞生

そろばんのつぶさな文を送れども
引にひかれぬ君はさん〳〵　正定

積る事そろ〳〵ばんに語ろやれ
あふた時には心おかずと　貞富

寄破子戀
我をいとふ妹が心やこま〳〵と

隔て勝なるわり〲なる覽　貞徑公

寄石磨戀

石臼のおもひをかけて廻らぬは
君を挽木のをれがきのとく　知秋

寄酒戀

[本歌]情あらばさくりと閨にねもしなん
肴物とは千話をしつゝも　正盛

付ざしは藥酒とぞ申べき
戀の病のかろくなりつゝ　知義

寄餅戀

おもひつゝ心もちをば君にさて
何かとりこにいふて契らん　正重

ちぎりなば丸くなりなん此君の
角ひしもなき御心もち　惠立

寄莨菪戀

恨みのみたばこの息もつきあへず
物思ふ身のしんきざみ哉　夏虫妻

人前をおもひの火入取よせて
たばこさふかん胸の煙よ　友信

寄膏藥戀

はれ物のかうやくなれやよき中は
離れもやらず口をすふてふ　正盛

寄根太猪戀

あひたやといふ程うむにこぬ君は
われが思ひのねぶと也けり　貞富

寄猪頭戀

[世話]たてらるゝ我れが心は猪がしら
君がよければ物も言れず　貞久

或女を我おもふと人にしるる
までほめければ

我おもふ人をかたげてほめぬるや
戀の重荷と是もいはまし　滿永

いさゝか恨むべき事もなきを
恨みてたび〳〵しなんといへ
るをんなを見て

淵へ身をなぐるといひて熱心の
ふかき女はきのごくじやぞや

ある男女あひおもひのあまり
さしちがへしぬときゝて

[世話]憎き物をいけても見よといふ事は
いとしき君とします故かも

或少人のふりごゝろなるを見
て

憎ていにふらせらるゝと退はせじ
御身にそふた影ぼふしぞや　空存

題不知

若衆の心はよそにありそ海の
はまの眞砂の數くごけ共　源通勝卿

若衆の尻つきをみてはなれえぬ
念者や桂男なるらん　貞富

寺よりもあがり子となる若衆の
かざいるゝこそ惜き貌ばせ　靜壽

うつくしきかぶき若衆の女がた
在家出家のおもひたね哉　貞因

南無妙法れんぼの道に成ぬれば
出家も俗もかはらざりけり　旅泊

尻めづかひ若衆にさへする人の
女をすくは理のまへぞかし　正晉

[本歌]昔みし人の衆道はやみにけり
小家ばかりの姿のみして　倹佐

傾のふら〳〵〳〵とふらつくは
ふらつく物のしわざ也見　信尋公
禰宜戀
おもて白き神樂女のふり袖に
きぬが鼓もうつゝぬかせり　貞富
御影堂比丘尼かたへ申遣しける
行ずともわれにあふぎの緣あらば
折々こちへ御影堂衆　行重
題不知
生れつくみめはともあれ心中の
たしなみふかき女房もがな　貞因
妹に別て後友とする人ひとりふたりなに〳〵の事侍るきもいらんなどいひこしければよみて遣しける
本歌 年たけて又女房をよぶべきや
命ぞつれなさよの中人　貞富
題しらず
同 其方を忍ぶ二階のはしごより
我たちにきと人にさたすな　行豊
或女房のふたの物風の吹きまくりしをみて
斗帳かとおもほえけらしふたの物
ちらと見ゝえしかみ樣の前　蒲叡
あるごたちのふるきふたの物あなきたなといへるをきゝてそばなるをんなにかはりてよみ侍りし
あなむざと捨てなくれぞ女房の
身には秘藏のふたの物なり　行風
題しらず
嫁取の後の朝に起て又
まどろむ人を尋ねとやいふ　貞富
しもざまの若嫁は部屋住とて三十日の內十五日里にあるを思ひてよめる
部屋住の內より出て十五日
里に隱れし姬をしぞ思ふ　相宥
或家こうしのくれかゝりて宿にかへり戶たゝきけるを主みづから戶あけけるをみてよめる
妻戶をも妻がたゝけば內よりも
おつと答へて明ていれぬる　蒲永
芋酒は精の藥なりと人々いへる座にてよめる
芋酒をのめばいもせの中よくて
零餘子(ぬかご)をうむといふは實(まこと)か　澤庵和尚
題しらず
風呂の湯女それもくぜくか口說(くどき)寄
垢はおとさで坊主おとせり　行重
寄傀儡戀
すひ付てくれし煙草はうかれめを
世話 戀の煙のたちそめにこそ　休昌
世話 すりきりを目利のみかは鼻もきく
しやらくさいとて勝ぬ浮女　正長
傾城は何にたとへん双六の
世話 さい〳〵變るふり心にて　政長
うられたるその身の親の氏よりも

そだち柄にぞ人のうかれめ　正舍
本歌 うかれめのたつ門口を行々も
隱るゝ迄にかへりみし茶屋　俊佐
うかれめを物にたとへば剃刀砥
あふ度毎にかねをすはるゝ　貧之
たはれめにたはれて金を負ぬれば
戀の重荷とこれや申さん　みつなか
思へども質のながれの君なれや
銀がなければ請出しもせず　貞林
かねはらふ跡より戀のせめくれば
傾城やこれ煩惱の犬　行風
出羽といふけいせいをよめる
稻舟のいなともいはず心よき
出羽と最上のかはゆらしやな　不得
玉藻といへるけいせいをよみ
て
假粧して出るたまもが姿こそ
買手をばかす晝狐なれ　長行
橋本の傾城に馴て
戀こがれ胸やき鼠狐川の
流れをたつるをんなさけ故　惟次
大阪佐渡島町を此頃世に越後
町といひならはせばよめる
傾城にまよへる人は親しらず
子しらずにゆく越後町哉　宜爲
大津へ通ひそめて
たきつくる柴屋町なるうかれめに
うか〳〵寄てみを焦すのみ　一忠
縣へ行女のかたみとて小袖送
りし折からよめる
身せばやな我には袖のゆきまでも
あはぬ形見の君がきるもの　満永
題しらず
我しなば火桶の土となしてたべ
冷たき君がほゝへいるかに　満永
腎水につれてなかるゝ足腰も
身もやせこけて骨とかは哉
剃刀のなまぎれいなる後家の身も
本歌 殿ほしいとはいひやかぬ覽　延壽
子をすてふ我身は若き後家なれば
人しれずして姫みしものを　安勝
女夫して搗しかちんのそれならで
契りちぎれば小餅とぞなる　貞成
惡女をよめる
本歌 むかへ見る妹が貌こそうたてけれ
へなも交りのみつちやのみして
同 みつちやづらは夜の契も絶ぬべし
明るわびしきかつぎ帷子　成之
密夫
うか〳〵とちぎりて捨ん命こそ
をじかのつのゝつかの間男　是誰
本歌 鼻の先はそがれにけりな徒に
わが間夫と長ねせしまに　貞林
世話 乞食になりし小町の間夫は
貧の歌よみ戀の盜人　正香
題不知
同 珠數臾の夫婦は常にふさ〳〵と
ないも事わりすれ〳〵の中　長丸
同 つきそふてゐれど餅屋は臼にあて

杵にあてこといふめおと哉　貞富

何事にかありけん心腹たつる
女を見て

女房はひのあるゆゑか殿にむかひ
やゝともすれば身を燃す覧　幸昌

悋氣

賤の女の悋氣に男ふすぶるは
あくたもくたに何や蚊遣火　友和

ふしぐ\ご成にし事はお歯黒の
かねぐ\深くりんきいふ故　行重

うつくしき女のりんき深きこそ
八重の錦に糞つゝむなれ　平時頼朝臣

人の女のあまりりんきの終こそ
ふたりの恥を顯しにけれ

鍋釜のふた道かくる食たきと
火花をちらす悋氣いさかひ　是政

たゝきあふ棒ちぎりきは松山に
波こす頃の悋氣いさかひ　元信

女に心かよはせりとむづかり
し若衆への返事に

世話 女ぐるひに悋氣めされど若衆の
せなかに腹はかへられぬ物　正好

題しらず

若衆をすける男の本妻が
結句念蛇と成にけるかな　本也

後妻のゆだむめさるな有間なる
谷の町衆の山のかみさま　蒲鯫

男をねたみかなわに火ともし
貴布禰の社へ丑の時詣せしな
どいふむかし物語をおもひて
よめる

いのるにもかなはぬ事に男をば
にくふ思ひの火をともす也　高啟

姑の物すとてなげきける女に
かはりてよめる

本歌 出ていなば男にくみといひやせん
うき姑を人はしらねば　利房

題しらず

陰陽の神といひしはひいき口
たゞ業平は婬欲の人　友知

在五中將東にてみよしのゝ歌
よみ給へるありさま書し屏風
に

有常が娘はいつのむかしぐ\
今は東の人になれ平　夏虫

同高安の里へ通ひたまへる所
かきたる屏風に

大和より立たひはゞきあかなくに
何の糸瓜の河内通ひぞ　夏虫妻

後撰夷曲集卷第八

雜上付名物、短歌、旋頭歌、廻文歌

題しらず

たつ春によむ歌どもを書寫す　淡路守宗増

（本歌）草紙をとづる竹の鶯

春立といふ斗めやときら〳〵

紛らかすみに老をしるらん　仍可

五十二歲の元日に

妙覺の位にあたる年ながら

けふも愚痴にて元の本阿彌　行風

花嫁の春の始のよろこびに

はやめ藥よ屠蘇よりも先　顯輿

七種をよみ侍りし

朝市にうる七種の中にまづ

（本歌）鶯菜より音をやたつらん　行風

野邊ちかき町屋にをれば鶯菜

うりくる聲も朝な〳〵きく　貞富

（本歌）初春の七日毎にし鶯菜

うりてぞかへるもとの栖に　みつなか

家職の得業によてかけまくも

かしこき詔まし〳〵御菓子所

山城大掾藤原貞因になしたま

ふその悦の俳諧一卷の奥によ

める

春毎の縣のめしのうへにても

菓子及第にしくはあらじな　貞室

むめといふ乙女を愛のあま

りによめる

梅が貌櫻いろにてほつそりと

柳腰にもあらせてしがな　本也

梅と牛のかたかける繪に

（本詩）牛は是二月の雪か梅花をば

折て頭べにさせいひやうせい　卜養

烏梅をよめる

花の兄はをんなこなれや墨染の

衣をまとひうばいとぞなる　且保

題しらず

春はたゞ花盜人の用心に

こしらへぬるか柳ぼくたうむれます

花の頃あるじまうけせし宿に

て

花見にと慕さへはれのありさまは

しき次第ある客やえむしろ　乃心

花に夷歌望れて

犬ざくらみてよむ歌はわれながら

然るびやうとも思ほへず候　毎雄

題不知

初瀨女の若き姿はよき山の

花のゑるほやうすけはひ坂　信重

人は武士柱は檜魚は鯛

きぬは紅梅花はみよしの　一休和尙

吉野人丸塚にて

うろたへて花を雲かとみよしの〳〵

吉野にのこる人丸の塚　方寸

題しらず

財寶をもしゆづりはの嶽ならば

われ花むこの山とならばや　宗也

姥への挨拶に

花筋もさし通りけり若き時は
さぞや櫻のはゝはよからふ　貞久

鐘樓を見て

鐘をいたるたゝらの風の強ければ
湯の入相に花火ちるなり　定章

話半に物いひ出る人を思ひて

面白き詞のはなしのさきをるは
風よりもうき人の心根　滿永

俳諧點取のおくに

うどんげの花の本にし參りあひ
浮木の龜かてんをうかゞふ　忠勝

かへし

うどんげな我にも點をうかゞふは
俳諧ていの龜のこうしやぞ　貞德

夷歌點取の奥に

花落てつら見ぐるしき坊主めが
うすき衣に墨付てたべ　友方

返し

案に相違墨の衣をき坊主の
詞の花のいろつやのよさ　行風

東人俳諧點うかゞへるおくに
書付侍りし

開きみる句數も百の花のいろに
點者は醉て貌あかむのみ

酒盛の座にて

（本歌）櫻鯛遠山鳥の御肴に
なが〳〵しひもあかぬ酒哉　金門

兒若衆百首の中に

山寺の春の肴にさくらのり
はさめる兒の名さへ花若　滿永

蕨料理の座にて

是や此蕨を芥子にあゆるこそ
用心ふかき料理なりけれ　友和

河内春宵が俳諧の卷のおくに

（本詩）千金にます春宵の俳諧に
なつかしくなる河内一國　貞室

俳諧點うかゝふおくに

耻を耻とおもはでしるす俳諧は
かへるのつらの水莖の跡　政長

蛙を題の夷歌のぞまれて

（世話）大海をしらぬ我身の愚さに
淺きかはづの歌をよみけり　一圓

或國の守の手づから人々に野
老給へる座にてよめる

（同）殿の直にくだされまする野老こそ
御髭の塵を取てくへやれ　舍永

ある方へ草の餅送るとて

（同）何かなとおもふにつきてちと斗
お笑ひ草の餅おくるなり　友信

金右衛門といへるか款冬いろ
の衣きしあいさつに

いろ深くそめし小袖も山吹の
花にうつろふ金ゐもん哉　顯與

池輪針をよめる

水色に萍のあるきる物を
ぬひしたつるや池の輪針　滿永

機おるをみて

はた〳〵と帷子布をおりぬるは

いと見事なる手妻なりけり　古楠

色繪をみて

美人草眞にかけどもちとも似ず
王昭君が繪そらごとかも　みつなか

いぶりなる人を見てよめる

池水のすまで心に角あるは
身のひしなりと人のしれかし

題しらず

本歌
かゆければ身にうき草のえだ迄も
沸湯のあらばたでんとや思ふ　三省

飽食の後よめる

ちよこ〳〵と踊れどへらぬ我腹は
飯の過たる雀鮨かも　梅曲

繪すける桑門の扇に繪かきた
うべける拶拶に

扇の繪手毎に人の用るは
よくかきたまふ墨染の袖　滿永

かへし

寫し繪のたど〳〵しきをよく云る
其よくの字はかの欲の字か　直雲

これかれ伴ひ扇あつらゆると
て地紙にそれ〳〵に印せしを
取ちがへをりこしける返事に

本歌
地紙には印の墨もある物を
いかにまがへておれる扇ぞ　貞久

祭の供せし者どもいさかひて
作り物などそこなひしを見て
よめる

御祓のけいごの武士のふし〳〵と
いひてそはろをみだす口輪　貞富

ふら〳〵煩へる人をみて

垣にはふ瓢簞ならで貌青く
ぶらり病となれるいとをし　重香

題しらず

攝待にたつるせんじ茶ほうじても
ほうじがたきは父母の恩　成之

山崎宗鑑か手向に

薄程もまだ目はあかでゑのころの
物にざれ句の手向草哉　卜琴

夷歌百首點取の奥に

言の葉の種と思へばまきちらす
此百色は皆わらひぐさ　友知

かへし

百色の詞の花のほめぐさを
わらひ草との卑下も一しほ　行風

さて此卷は萩衆の言の葉と也
難波によしあることぐさむか
はゞ花の都人も貌をあかめ口
をとぢて出入息のたゆべき歌
のさまなりとて又

きく人の難波によしとほめそやす
詞の花の萩衆の歌

三夕といふ傾城たちすがたい
とよしといふをきゝて

本歌
心なき身にもあはれは白拍子
門立いそぐ秋のゆふぐれ　貞因

雁の代高直にいへれば

商人の手にわたりても初雁は
空直あるやら高くきこゆる　貞富

石龜をよめる

世話
雁かとべばぢだんだをふむ石亀の
こうはつむ共羽ははへじな　元信

雁瘡をよめる
秋風のふくに付てもとばぬかな
いくとせつらき足の雁瘡　管窺

題しらず
たばこのむ煙を霧にたぐへみん
時にきせるのがん首もあり　正信

煙草すふ煙管のらうはすぐなもじ
ゆがみ文字とぞみゆる雁首　忠直

しやう〳〵の夜の飴うる片見せを
みれば平沙の落雁もあり　秀愚

最上多賀野氏次木詠草の奥に最中の月の夕つかた認めたる物のみゆるはかの鳥の翅にかけこしにやたが玉章にかと開きみるに心詞ようえびす歌なりかく花やかなりしさまはそもたがのを次木ぞやとてなむ

實生より詞の花の見事さは
何と心をよせつき木ぞも　行風

鴫の燒鳥をよめる
はねがきを賞翫したる此鴫も
今はほねみとかはる燒物　友知

題不知
本歌
すゑの鶴本のしとゝもしめられて
おくれ先だつ料理とぞなる　宗玕

淋しさに友松虫のねざけこそ
ちんちろりにて燗をするなれ　酒粕

世話
みから出たさび鮎なれば尾頭を
こふてたぶるも苦し芥子酢　其蜩

有馬山にてよめる
月清みありまでみゆる山中に
まして赤きは湯女の前垂　重次

秋風にたなびく雲のといへる歌を思ひてよめる
秋風になびきて雲間あきすけの
詠し月の歌ぞけだかき　重香

題不知
浪の上の月弓をとる獣は
よしつねならぬ猿眼かな　一見

宇治にて立花をみての挨拶に
謠詞
しんの姿枝葉のながし水ぎはや
見どころ多き床のたて花　行重

題しらず
菊盃に椹のちよく桔梗皿
みな花やかな道具ども哉　満永

面草や又はにきびの出來ぬるは
貌にもはたけ有故ぞかし　政長

鎌倉の鍛冶正宗が屋敷今は畠となれるをみて
世話
正宗が棟門朽てさびぬるは
昔の劔今の菜ばたけ　友信

奈良にて冬瓜汁ふるまへる挨拶に
草紙詞
取あへずうひかも瓜をならの京
春日の里の汁の子にして　正盛

或方へ柹と松茸送るとて
奈良柹にさしそへ送る一折は

是ぞ三かさの山の松茸　貞直

松茸十二本えし返事に
松茸をよるひるくへどその數も
二六時中にあてたまふかや　行風

燒松茸をよめる
（本歌）松茸の燒行程のかさかけは
あかぬ料理の鳥は物かは　一圓

ふと尋こし人をしめぢ一種に
てもてなしゝ挨拶に
さしも草きうの御出に世話やきて
しめぢがはらのいたき振舞　信海

或方にてしめぢたうべ過なば
たゝりて煩もやせんといひし
人への返事に
たゞたもれしめぢか腹に祟りなば
さしもぐさにてやいとすゆへし　澤庵和尚

題しらず
月見ぞとちぎりてゆでし枝まめを
人にも今夜ふるまひてよし　滿永

百首歌の中に獵師
（世話）さればくふ取ねばくはぬ獵師をば
稼ぎずきとぞいふべかり鳧　貞富

瓢簞出來なはえさすべきとか
ねて約束しもらふ折から是か
れ人よりきてうばひあふ時よ
み侍りし
約束は我がせんなりへうたんの
百の中をもえりてたまはれ　行風

人のうづくまれるかたしたる
酒瓢簞を心戒と名付てよめる
夕貌となりこそさがれ上人は
佛の種やまきそんじけん　長嘯子

秀吉公朝鮮國追討の軍卒首途
の折御前に侍りしに當座をと
仰せくだされければよめる
門出によき大將はありのみの
向ふ敵はなしとこそきけ　法印玄旨

題しらず
大酒に醉つぶるゝも柹ならで
じゆくし臭しと人はいふ也　貞林

柹得たる返事に
かきくけこをこそとのほも喜びは
過分にそんぜらりるれろ哉　卜養

柹六十五えし返事に
（謡詞）六十にあまれる柹のさねもりの
ひげこも墨に染ざるはなぞ　卜琴

夷歌點取の奥に
柹のもとの跡をしたへる歌よみよ
しふくる口をあはせ給はれ　定眞

返し
柹よりも熟して味のよき歌に
合するや是てんがうのかは　行風

俳諧點取のおくに梅盛がもと
へ申遣しける
むてんなる事の憚りかきくけこ
はひふへほんに笑ひ草かな　一薮

吉野詣のみやげとてをさあい
の栢もてこし時よめる
（童愛詞）しちに似た吉野がやをは宮笥とて

愛らしげにも配るをさあい　淨次

題しらず

百姓のめんをこばんの心根は
からぬ先より採手をぞする　宗旬

落髮の時

正月と今は引かへ身のかざり
おろしていはふ小春也けり　貞因

十月始鮒鱠出し座にてよめる

紅葉鮒も今は落葉と成ぬなり
こがらし酢にてあゆる鱠に　友和

題しらず

色もよう染し小袖や霜ふりに
朽葉鹿子をちらしぬる哉　重次

江州へ田の里にて

溝も疇もわかたぬ麥のまきやうは
名にしおひたるへたの里人　路春

鎌倉へまかりしに梶原が屋敷
に土民の麥まくを見て

其あとを尋てみればすきくわで
かぢはらが地に麥をまき㒵　友信

安田の里且保夢想開きの連歌
誂へける折から十月末つかた
なりければ懐紙の上包に書付
て遣し侍りし

荒地開き御夢想開く德ありて
はかる年貝もかつ安田なり　行風

百首の中に

難波人身をつくしつゝうりぬれば
枯たる芦がおあしにぞなる　貞德

坂本の者霜腹いたむといふを
きゝて挨拶に

山の名のひえよりおこる霜腹は
麓にさつさくだりてぞしる　貞富

刀

世話
拔をみて身のひゆるこそ道理なれ
氷のやうにさぎしかたなは　治住

貧げなる者をみて

同
ひだるさに寒さにすくむ襟つきよ
錢もちくびは名のみ也けり　一圓

鴨の汁たうべし夜よめる

本語
さむうして水にいりぬる鴨の汁
くふて我身はあたゝまる哉　貞富

いはふことありて酒盛せし座
にて四天王寺に名だゝるはせ
といふ物をこよりにつけて梅
のはなに作なし是を肴に今ひ
とつとてよめる

本歌
冬の中に作れる枝は紙ながら
かくこそはぜの花と成けれ　胡蝶女

しはすに鯛與鰤えし返事に

心にじかけてたまはる鯛のみか
かずかず是は御念ごろ鰤　元信

王餘魚と鯛とえし返事に

年毎のかれいといひてめでたいを
くるゝは過分至極月哉　滿永

年暮に俳諧して點取の奥に

おしつめて物うきくれの俳諧は
たゞ續飯(そくいひ)のへらずロかな　友久

題しらず

世話
節分のまめなやうにと名付子は

それこそ鬼に金ぼふしなれ　是誰

物名

維舟が信濃小路殿の夷歌共か
きこしける返事に
しほらしきしなのこうじの言の葉を
いしうぞかいて送り給はる　行風
季吟が歌をみてそれが名をよ
み侍りし
かいたるを見るさへもあり和歌(やまとうた)
よき吟聲にうたふきかばや
よき道にふけ行風は目にみね
とあかぬ和歌集えらぶゆかし
さと高故申こしける返しに
習ふたかもとよりしるかかく斗り
心言の葉ようえびす歌
永崎氏一見詠草のおくに
一巻をかつみるからにひく點の
ながさきたちし歌よさて／＼
行風に點うかゝへる詠草のお
くに
夷うたまづかうふうにしならはん
敎へてんたべ我等ていふに　貞富
かへし
世話のみか本歌もあちに取ていふ
かう風躰のいかでならふぞ　行風
夷歌點取のおくに
和歌の道かう風名とげ給ひぬと
きくより點に心がけけり　元信
かへし
讀歌のもとのふしんのはれたらば
てんの道をも合點あるべし　行風
詠草のおくに
釣針のまげ句／＼をなほしたべ
けうかう風を學び申さん　政長
かへし
それ／＼に心をよせて釣針の
いとまさながらなさうな歌　行風
詠草のおくに行風が字を懐中
といへば
懐の中をし賴むこの歌の
口ほどけねば譯も聞えじ　三扇女
かへし
うつくしきさまによみなす此歌を
愛さうらしと誰かみざらん　行風
移徙せし人のもとへ炭つかす
すとて
移徙(わたまし)はかねてのそめる家なれば
すみよからふと思ひこそやれ
湯谷
うらめしくしく／＼なけど御暇を
もらひかねつる心かはゆや　友信
見付
袖にさへみつけののかぬ薫物は
あらしたゝるや宿の出女
本庄
草紙詞
たはれめのしひるなさけに醉過ば
本しやうみえん事の口をし　信元
大久手細久手

めづらかな景氣おほくて慰めど
心ぼそくて旅はういもの　友信

大和箸尾にて休二といふ人灸せしがたえかぬるをみて
やいとをば挾む箸尾ですゆるより
あゝらあつやと急に拂へる　宗玕

鍛冶近江掾身まかりし時よみて遣し侍りし
あはれ〳〵行者が祈り加持しても
定業の死にあふみいとをし　行風

江戸未得身まかりし時に
住なれし穢土をはなれて極樂へ
参る人こそそのみとくなれ　貞富

短歌

春歌　滿永

大ふくの、先たつ春の、祝儀とて、茶筅松にも、めで竹を、そへつゝかざる、しめ縄に、よろこぶところ、だい〳〵と、しだいもよけに、おきならべ、ほたはらもつみ、かさねぬる、門口にしも、よりきたる、禮者は袴、かちぐりを、しみ（本ノマヽ）に着なして、物まうの、聲さくからに、請取し、年玉みれば、へぎにする、末ひろく世を、せんす箱、をさめ置つゝ、たがひにし、詞の花の、口々に、いひ出したる、蓬萊の、かはらけ取て、さしむかひ、いせえび程も、腰かゞめ、時宜をすまして、箸をとり、はさむ肴は、數々の、これを参れと、もてなして、たべつをさめに成ぬれば、春のはなしのはじまりて、きく鶯の、歌の道、歳旦歌とて、をか四季の、初ごとなれば、人々の、笑ひ草とも、よしならばなれ、

戀歌

おはる女郎、おたち姿を、みるよりも、むめよき花の、貌ばせの、うぐひす袖に、わをとめて、ひらりしやりと、さほひめや、白玉ひねを、引つれて、おはしましたる、あしたより、戀の詞を、きゝそむる、けしやう文をも、うりわたる、人にもがもな、柳ごし、手をにぎりつゝ、早蕨の、いとうるはしき、よめがはぎ、ふきのしうとめ、立ならび、花みにゆけば、やうきひの、そばもはなれぬ、姥ざくら、そだてぬるかの、兒ざくら、さがり過れば、執心を、ふつふつおもひ、きりがやつ、春もいつしか夏なれば、美人草とて、色よきを、見るに心は、卯の花の、白きふくさを、下着にし、上に地赤の、芥子鹿子、こしやくやくにも、きなしつゝ、たち葵ぞと、詠れば、ぼたんとほれて、色々と、くどきぬるまに、夏もはや、くれ果ければ、秋風の、たより求て、文月の、度かさな

りし、をんなへし、心ばせをの、よき故に、打とけぬれば、長夜も、身にしみ〴〵と、おもひつゝ、あけてたがひに、朝貌を、見るに名殘の、をしきまに、つたも紅葉も、いろかはり、もはや冬にも、なりぬれば、何としぐれと、案ずるに、花の姿も、今ははや、みな〳〵落葉と、成はてゝ、ふりにふりたる、雪をんな、つもりし年の、くれゆけば、貌のしはすの、見ぐるしく、移りかはりし、果ぞものうき、

旋頭歌

紙ふすましいてねる夜は千話なかりそ忍びつゝ君がきたともごそくさとせん　貞富

廻文歌

元日

妻戸壁かざりよそこもかしこゝ
しかも去年よりさかへ門松　惟次

吉野高瀧のほとりにてひな人への挨拶に

皆のきたかたをよきつゝ花のみの
名はつゝきよを高瀧の浪　行風

草花

村草の名ははれん哉千たび〳〵
たち眺むれば花のさくらん　卜琴

人の本より槿花に草金鈴とかきておくれる返事に

草の名はくさのこがねの鈴のねの
すゞのねか此さく花のさく　忠直

小鷹

足緒（へを）でうて雀鷂（えつさい）とると飛小猫
ふとるといざ杖てうてをへ　宜秀

猫をよめる

棟の外そこで地をみす猫なけな
小鼠おぢてこそとのきなん　宣應

後撰夷曲集巻第九

雜下附無常

我宿の菴にうたふ聲はたそ
たしかに名のれ何の種とも　敏達天皇御製

かへし

天原南にめぐるひなつ星
何のくさともよささにとへ

此歌は敏達天皇九年夏六月有ㇾ人奏曰土師連八島といふ者あり歌うたふ事世にすぐれたり夜な〳〵人ありて來りて相和して爭ひうたふ音色常にあらず八島これをあやしみておひたつぬるに住吉の濱にいたる天曉れば海に入ものと上宮太子側に侍ひ給ひて奏して曰くこれ熒惑星ならん天皇大におどろきて問給ふ太子答へて曰天に五星あり五行を主どり五色に象る歲星は色青し東を主どる木也〻惑は色赤し南を主どる火なり此星降り化て人となり童子の間に遊びて好みて謠歌を作り未然の事をうたふ蓋此星ならんか天皇大に悅給ひての御製なり返しは熒惑星の歌なりとぞ

夜這星をよめる

雲の上をあだめきありく夜這星
光る源氏の亡魂やこれ　友知

雨

雨だれのだん〳〵〳〵と落てくる
音もぞ軒の下つゝみなる　正舍

山

蓬萊の峰かとみゆる龜山に
仙人こそは住たまふらめ　尋海

男山むかふはきたのかたなれば
こやはらむとも云ん大原　みさく

その昔ざやうに作りてなら酒を
搾りしかすが山となりたか　正久

吉野飯高山にて

雲に汁といふは吉野にかぎるかよ
飯高山のあるにつけては　方寸

同姥懐にて

壺ならば吉野の葉茶をつめてまし
是に有合ふ姥がふところ　胡蝶女

富士山

あをのけに轉ばぬ程に富士もみつ
それより上はすきと白雲　未得

草も木もすきと裾野をやき筆に
駿河のふじは文にせられまじ　友信

百首歌の中にて

雲の衣羽織にきたか富士の山
腰中よりもすそのみゆるは　貞富

名にしおふ田子の輪がへを駿河なら
使ひこそせめふじの大たけ　信安

百首歌の中に關
通るべしいやとほさじと爭ひに
詞もすぢりもぢのせきもり　政長

幾人か心をこめて案じつゝ
讀出す歌をかくもぢのせき　幸昌

出雲國にまかりける時神代の
いにしへやまたのをろちの住
し所を尋ね侍りけれどまちま
ちにいひければ
蛇が住は是じや彼じやあの池じや
淵じや山田じや嘘じや實じや　定次

惡事千里といふ事を
ちつくりと蟻の穴より水もれて
惡事千里の堤くづるゝ　一イ

瀧
山姫のおるかとみえて龍門の
さやにまがひの瀧の白糸　正盛

谷水を山の奥よりもみ出しの
鼓の瀧に打ちらし候　蒲叡

有馬山いなの小篠がさゝならば
たれも鼓の瀧のみにせん　弘延

有馬山にて
本歌 有馬山湯女のわめける聲きけば
いでそよ人をいれかゆるかは　貞林

法印玄旨とづ川の湯に入給し
を見廻に遣すとて
養生の湯入の心しづかなれや
とつかはとして上給ひそ　宮川尼

血氣つよげなる者瀧にうたれ
しが間もなく逃さりければよ
める
上氣もの山の湯殿にたゝかれて
とつかはとつひ逃てごちやら　尙信

熊野三重の瀧にて
三味線の名も三重の瀧つぼは
浪ちりてんの音のみぞする　以仙

百首歌の中に川
どつと苔塵がつもりて山となり
その濁りのあくた川かも　貞宮

白川の咄きゝて
世話 夢にだに見ざる名所のはなしこそ
げにも白川夜舟なりけれ　元親

暑日下部とものの水あぶるをみ
て
水あひて樂やとおもふ心しれ
えような袖の風呂は物かは　一圃

播摩國阿古の浦によめる
小鼓の筒にしらべやあはすらん
うつ音たかしあこの浦なみ　法印玄旨

住吉にて
いにしへのふしか太鼓や殘りけん
浪もどんとゝ住吉の濱　貞因

火打石をよめる
日の本の肥後の火川の火打石
ひたもの日々にひろふ人々　一見

桔槔
鳥ならで野中にたてるはねつるべ

こな田かな田へ水をこばせり　安親

本歌
世の中に日損水損なくも哉
千代もとひらく新田のため　定次

畿内に出來るを俗に地の舍利
〳〵米といへばよみ侍りし
大かたもぼさつといへば都地の
しやり〳〵米や佛なるらん　行風

禁中
公家衆とむかへば下々は犬のごと
四つ足の門にはひぞつくばふ　梵益

江戸藪小路より虎の門へしば
しが程にゆきかへれるを見て
日のうちに行てかへれる虎の門
千里ならねど藪小路より　管窺

題しらず
世話
百姓の造作するをみてわらや
在所のこてが壁をぬるくる　貞富

閑居
獨居はひつそりとして灯の
影ぼふしのみ友とこそなれ　政長

名所松縮輪
唐崎の松のふぐりはいにしへの
あいごの若の物かあらぬか　正盛

題しらず
本歌
きりすてふ此木はうごに成りに鳧
人しれずこそくさり初しが　周可

百首歌の中に苔
蜑人の中休みにと岩の上に
登れば辷りこけむしろうや　政長

山鳥のなくをきゝて
山鳥のほろ〳〵となく音きけば
父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ　行基菩薩

曉鷄
はた〳〵と關の戸ならぬ羽を叩き
こゝあけうよと鳴か庭鳥　松綠

曉鐘
山寺のはへのしげみにねゝしたる
鳥や夜あけに追出しのかね　一長

寺に留り給ふ夜時の太鼓打そ
こなひしをきこしめして
此寺の時の太鼓は磯の浪
おき次第にぞ打といふなる　義輝公

木魅
謠詞
是も又あふむかへしの聲すなり
何ぞといへば何ぞとこたふ　成之

化生
青みどりかつぎて化し狐こそ
池の玉藻の前となりけめ　未得

牛
長門より上る間に牛の子の
親程になりつかんつの國　数二

駒
むさし鐙上總尻がひはづしつゝ
湯洗ひするは甲斐の里駒　重次

狐
本歌
ばけきぬと目には見えねど若狐
尻の出るにぞ驚かれぬる　行豊

頼朝卿見はらのゝ狩場にて狐

鳴をきゝたまひて夏野に狐鳴事いぶかし誰かある歌つかうまつれと仰せければよめる

夜ならばこう〳〵とこそ鳴べきを
あさまにはしる晝狐かな　季隆

此歌にて當座に三百丁加增給ふとなん

狐

稻荷山晝狐とてみえざれば
よるの殿とはむべもいひ梟　信元

本歌
今こんと鳴しばかりに女狐の
穴にや夜の殿を待らん　元信

狸

腹鼓うてる狸が一曲を
うたはば臍の下がゝりこそ　悪立

むなしき鳥に虫のわきしを見て

生物を好みしむくひ顯れて
虫くひ鳥が虫にくはるゝ　滿永

蜘蛛

天井を行かふ蜘の通ひ路は
いとも煤けし家とこそみれ　武重

虱

本歌
耳の根に扁なき風の通ふらし
何れの日より出來そめけん　惟次

六帖題の中に

こきまはる湊の舟の鯉はせに
ひれの騒ぎの波高くみゆ　藤原信實朝臣

鰻

世話
山の芋はぬめりにけりな徒に
うなぎになりて又ぬらり哉　義辰

江鮭

朝夕におほくとればや町々を
ふるほどうれるあめの魚哉　みつなか

若狹糸魚川糸魚を

いとい川の糸魚なれば網の糸に
寄合ひてこそかゝりたるらめ

題不知

本歌
魚の名も所によりてかはりけり
難波の江鮒伊勢でいせ鯉　成之

銚子口のいわし名物なれば

くむ酒もてうし口より出にける
生鰯こそよきさかななれ　高故

題不知

陸奥のちかゞつへして鹽屋へも
歸らずにくふ濱燒の鯛　牡丹花

本歌
あの小鱈三百三文にかふたとや
我みる傍で料理あらせ給へ　行重

鮀

西の海の浪のひらりとひかめくは
朝日にむかふ太刀魚の色　行風

ある勇士の主人より鰶與鮀拜領の時座にありてよめる

手柄には感狀のみかこのしろに
そへてたまはる銘の太刀魚　重次

題しらず

魚はゝはれ成佛をせばその人の
胸の蓮花を座とや定ん　武重

腰かゞめさら〳〵〳〵と上座から
下までひいてくるまえび哉　淨次

山をだにくづす力の落果て

たよりも浪にうけるほら貝　よみ人しらす

蛤

村雀彼海底に飛いれば
　蛤貝にかいなりにけり　一圓

是ぞ此住吉浦の蛤や
　鹽の滿干の玉のいれもの　行重

難波潟輿おもしろや足のもと
　にじらて人のにじる蛤　貞久

子安貝

身もちなる女のみたら名にめでゝ
　くひよろこばん子安貝哉　滿永

蛸

地獄網にかゝるうきめにあふ事と
　など悟りえぬ蛸の入道　未得

あかしにて

海邊の御馳走嬉しゆで色も
　赤石に名ある蛸の入道　正盛

題不知

酒ならで手なが蛸にも醉たるは
　かまで何盃のみこみしぞや　延俊

魚鳥の歌の中に若狹尺八烏賊

料理してくれ竹のあなめづらしき
　尺八烏賊ぞ口にあひたる　滿永

漁父

ほそい意趣と思ながらも釣の糸の
　若もきれたら何とすぎはひ　行安

秀吉公より呉服拜領の時よめる

下さるゝ小袖のたけの長ければ
　忝なきは身にぞ餘れる　法印玄旨

題しらず

敷島や大和にはあらぬ伽羅衣
　返す〴〵も焚しめてめせ　行安

おはしたの下にかさねし着る物は
　己が名におふいちやや紅梅　舍永

革足袋

東路の關へははかぬ白かはの
　足袋も日數にそひてよごるゝ　元成

苧をうむをみて

女房のとりあげてまくへそのをも
　うみおろしての後の事わざ　未得

或人の尺八を我もたるにかへてえさせよといひけれど度々いなひければよみて遣し侍る

かへてたべ初手よりいひし尺八を
　持たる人よぎり思へかし　高政

題しらず

關ならぬ鳥の空音は尺八の
　あな面白の鶴の巣籠り　治住

鼓の音色おもふやうならねばやめんといふ人をいさめて

小鼓はあらむづかしやならぬぞと
　捨る心も下手のかはかな　方重

百姓の子鼓うちしをきゝて

農人の大つゝみうつ音きけば
　したん〳〵の植田流なり　宗玕

題しらず

此鼓筒のつきてのしれざれば

直段安げといふもいつせつ　高故

隣に太鼓うつをきゝて
鑓ならでつく〳〵といふ音を
きけば太鼓をうつきざみ也　行風

三味線
ばちはむち糸は手綱か三味線に
小歌をのせてひく駒もあり　行重

小歌詞
浦々の闇の清水の歌のせて
今やひくらん三味線の駒　高故

題しらず
篠(しの)ためて雀弓はるをのわらは
額(ひたひ)ゑぼしのほしげなる哉　西行上人

太刀
ぬくとても我目の鞘をはづさずば
何の用にかたちの切先　未得

腕指のはがねならせど敵を恐れ
身の毛たつるや兎兵法　宜堅

鑓
本歌
節々にかねをふせたる竹なれば
つくともめげじ鑓の長えは　顕輿

神祭に六尺共の鑓もたるを見
て
一二三四五六尺にもたするは
なに七八九十文字鑓　友静

移徙せるかたへつくぼう遣す
とて
今年より福のつくぼうやりの間に
たて並べたる作事めでたし　貞知

返し
わが宿に福つくぼうを給はれば
ことぢのなると人もこそみめ　安重

めしつかふ者の大ふぐりなる
が馬にのりしをみて
のり鞍のまへわにかゝる大へのこ
金ふくりんと是もいはまし　法印玄旨

杖
朝な夕な杖にも物をくはすべし
使ふとなれば子には増れり　光悦

草履
本歌
なら草履その手際みてかふならば
とにも角にもねぢばなを哉　貞林

或方より雨夜にかへる折から
下部どものねふり居ければみ
づから下踏たづねとて縁の隈
隈見けるにたづぬるはなくて
ふる草履多きをみてよめる
本歌
ふたつ緒の杉のあしだを尋ずは
古皮草履ありとみましや　言千

源氏外題の歌の中に若紫
ひいなゝどもて遊びぬる年もまた
若紫の花の御姿　淡路守宗増

須磨
さすらふはみやこにかへる佗言の
いつまですまぬ恨みなるらん

巻柱
髭黒のうはさを作り一冊に
かくも源氏のまきばしらなり

匂宮
自(おのづ)からほの〳〵かほるしんだいを

學ばんとする御かたもあり

紅梅

奥床しゐしたる衣のうらぶれて
軒の妻より見ゆる紅梅

宇治中浮舟

浮舟やくれり〳〵の心根を
おもふも腹やたつ浪の上　唯正

仁勢物語といふ草紙をみてよめる

をかし男知よしをして歌人の
詞のはじをにせ物がたり　顕輿

犬筑波集かり禮おそなはるとてよめる

かりてみし犬つくばひに突ばひて
禮といはざる我や畜生　春宵

東道記かくとて

粟田口たゝきよみぬるたはことを
藤馬允がみんもはづかし　徳元

題しらず

歌の折句沓冠といふなれば
とかく御公家の弄びかも　みつなか

釋教にそむく心をよむ人は
歌のだいばと是も申さん　正定

尺八のふしくれ立し歌口も
我こゝろねのありたけの程　是端

盃のさらに書付侍りし

盃を題にするたる歌なれば
左をあげてかくばかりなり　行風

輿ある夷歌をきゝて

狂言によみつらねたる一首こそ
只そのまゝの猿和歌のてい　行廣

黄檗會下道明が詠草十首の内四點かけて

六道を捨ばぞ四聖(しやう)がてん〳〵
十首の歌を十界にして　行風

或僧の詠草廿五首の内八點付し奥に

廿五有の數をつらねし歌なれば
點に叶ふや八相成道

和州顕輿か詠草二十首の内十二點内長點四つの奥に書付侍りし

歌のさまたとへを引に十二てん
なかに四てんぞたけ勝れたる

高田の庄よりの詠草の奥に書付侍りし

なにはかはさ批判申もをこがまし
姿高田の歌にむかひて

行重九十三首の詠草の奥書付侍りし

ならびたる九十三首は和田殿の
一門中や寄合の歌

高故五十二首の詠草の奥に書付侍りし

五十二の歌にも位たつるなら
てんに叶ふや等覺妙覺

百首の詠草の奥に

塵の身のあくた口よりはきだめを
搔寄見することのはもじさ　貞富

よしあしを見分てんたゞ難波津の

みつ子におとる我が歌口
花の名におふもゝの言の葉姿
といひ心といひかた〳〵えび
す歌かなそふる二首猶玉をの
べ金をちりばめり與ありしち
ありから國の天年なるとかし
こきがみつ兒と八十年の老の
おけつらひもふとおもひ出ら
れてかへし

塵の身のちりをきれいに吸とらん
玉のやうなる言のはにこそ　行風

世話
難波津のみつ子といへる言のはや
なち八十の人もいかでか

此集望ある詠草の奥に

世話
お召には餓鬼も人數ときくからに
腰をれながら集を望めり　治住

かへし

卑下慢が餓鬼と仰やれど力ありて
こゝろ言の葉ようえびす歌　行風

點取度かさなりし奥に

此度も身ともか歌の病をば
直し給はれ御てんやくさま　友方

返し

てんやくも何たのまゝし達者にて
病氣のなき歌の姿は　行風

詠草のおくに

よまんとて案じわづらふ歌の病
直し給はれわれかいこくち　本ノマヽ　貞久

かへし

よき歌を猶もと案じ過せるや
欲の心の病なるらん　行風

寄合の詠草のおくに

難波津のつんとてよめる此歌の
よしあしをみて批判給はれ　梅由

かへし

難波にし靑き詞のなき歌は
いづれもよしと申すべき也　行風

詠草のおくに

引直したまはれかしな口おもき
石磨歌の作意なりとも　是政

かへし

引まはす手も力もぞ出ざりき
石磨歌のおもき修行は　行風

貞因、貞富、本也、舎永、月夯、
か寄合の詠草の奥に

どれも〳〵口つきをようえびす歌
類なしつぼの五人とやみん

かへし

冥加をば何とかせんの五人衆に
かたじけなくもおとりなしつぼ　貞富

題しらず

あくた口ははきちらせども歌連歌
する方へ箒えもしらぬなり　卜琴

俳諧點取の奥に

俳諧の道にふかんなやせずねに
灸をいたさん點付てたべ　政次

かへし

きう〳〵に點を望むは此道に

達者な人のすねごとぞかし　貞德

小袖を發句の俳諧のおくに

はり小袖したてのあしき俳諧の
古くはあり共こらへ召れよ　長廣妻

かへし

はいかいの表につくるうら衣の
新しくしてすそも長點　長廣

雉子發句はいかいの奥に

飛雉のはがゆかるべき俳諧に
てんをかけぬる人は鷹かも　高故

かへし

てんかける鷹も及ばじ此雉の
羽づよくさんだ俳諧のさく　宗因

虫藥發句はいかいのおくに

發句には藥とあれど此卷は
御らんぜらるゝおめの獨吟　盛成

かへし

世話 御發句の虫の藥もごく吟も
好物なればたゝる事なし　立圃

獨吟せし時

本歌 有明のつれなくて氣のごくぎんに
赤下手ばかりうき物はなし　治佐

點取のおくに

付心無分別なるはいかいと
合點をなされ批判してたべ　貞富

安原氏貞室がもとへ點取のおくに

安原のはいかいはよき灰汁(あく)なれや
みな人の句の垢をおとさせる　友久

破魔弓のほく五十韻點取の奥に

人まへへ出すはまやの五十句に
根もあらばこそ耳へ通らめ　高故

以一貫といふことを

万物をくゝれる繩のおもかるも
もたげてみればたゞ一貫め　正房

題しらず

草紙詞 友とする見ぬ世の人も書物には
生てはたらく文字の筆勢　行廣

無智の者ども午牛の文字の筆書とやかく爭ふをきゝて

午によく牛といふ字は似たりとも
上へつき出す角をみてしれ　是念

一山繪讃の物をみて挨拶に

のり合もさぞよかるらんかけ物の
馬の繪にかく一さんのさん　重靜

篠の繪の讃に

片かなのゝ字のなりの似た物は
篠の葉の繪の墨（古本ニハ黑トアリ）の一筆　智仁親王

さつまよりたのまれしを表具師の本へやるとて

御無心を申さつまのかみ表具
たゝのりかけん頼み存る　よみ人しらず

圍碁

打向ふ人は碁盤の目醫師より
白い黑いのまけをみわけて　受夕

長半と名のりかけ碁の勝負には
盜をするも道理せんばん　未得

奈良に住ける僧もと見しより
まづしくなりて京へのぼりし

が或かたにて象棊つゞけまけ
にけるをみてよめる
世につれて将棊も下手になら法師
京しやに負て恥をかく行（ぎやう） 源重秀朝臣
播磨にて双六をみて
双六のよき手しかまのかちたしと
め見たし肱をはりまがた哉 貞因
さい〳〵のこひめも出ぬ双六に
氣骨おりはをうつけもの哉 重勝
本歌 鞠
老ぬればえもん流しも有といへば
いよ〳〵はまくほしき鞠哉 宣堅
依鞠恨風
くれかゝり鞠のにはかに吹出る
風をうらみの葛袴かな 未得
曲しそこなひて
懸路では御ざらぬけれど我鞠の
落てうき名をながす曲なさ 行廣
鞠場
鞠の場は七間まなか四方なり

木と木のへだて二丈六尺 藤原雅康卿
唐臼
唐臼に鳥井もたてばよこがみは
杵（きね）の宮とや祝申さん 行重
封の付し箱あづけられしかた
へのかへりごとに
本歌 封をつけ結ひし箱の紐なれば
預るうちはとかじとぞ思ふ 貞林
新き鉢求めうらのそゝろすり
おとす人へのあいさつに
なりふりに迷ひ求しあら鉢の
尻をさぐりてそゝとする哉 正慶
題しらず
ちい〳〵といふ音きけば爐の内の
ふる姥口の釜の湯にこそ 友信
本歌 人はいざ心もしらずふりてのめば
花香むかしの茶に匂ひけり 孝女
七種の名園の茶たてられし挨
拶に
水色香ひきのみ手前ふくもよし

是や七種の名園の御茶 行重
或人酒は佛の戒めなれど酔の
中の歡喜あるは佛性にもちか
く覺ゆかゝる御法もあるにや
ときこえければ
御法にも上戸菩提ときく時は
下戸衆生善も酒をのめ〳〵 恩直
或人に酒しひけるに公用ある
などいひていなびければ
本歌 のみてよもあす迄去ばつらかりし
此夕暮にゑはゞゑへかし
題しらず
同 君ならで誰にすゝめん酒の
味をもかをも呑人ぞしる 元成
本歌 大かたは酒をものまじ是ぞ此
つもれば人の酔となるもの 行重
草紙詞 つれ〳〵と寄合てする酒盛に
下戸ならでよきをのこども哉
世話 くみかはしたべかさぬれば盃の 満永

朱にまじはれる貌のいろ哉　貞因

本歌
瀧のみを絶ず久しくつゞくれば
上戸の名こそ猶きこえけれ　亘因

ほこりまで算用酒は借錢の
うれへをはらふ箒なりけり　本也

本歌
むさしのはけふはな出しぞ長酒に
人もこもれり我も困れり　みつなか

同
武藏野は酒にいるべきやうもなし
下戸より出て下戸の客人　古桶

同
明樽と目にはさやかに見えねども
底のたつにぞ驚かれぬる　長廣

大酒せし曉に

大酒に宵ねせし夜の曉は
目もほつちりと覺にける哉　貞富

二日醉

二日醉起もあがらずふしみ山
衣うつなりかしらうつ也　雄長老

酒醉

くむ酒に醉てはくだをまきにけり
布をへる程あるき上戸か　定章

酒に醉橋をわたらず臥ぬるは
惠遠に増る禁足ぞかし　武重

世話
徒に醉くるひをも下部から
わざはひおこる木幡山かな　溝融

大盃をほしかねてよめる

本歌
鳥の子を十づゝ十はたふるとも
おもはぬ酒をうけふ物かは　一圓

鬼喰を

謠詞
鬼喰もたゞおのづから胴に入て
膳を見れども進まざりけり　是急

善哉餅

大納言の小豆ににたる物なれば
ぜんざい餅は公卿にてくへ　貞徳

餅

本歌
山城の木幡の里にむまさうな
しんこはあれど餅(かちん)をぞかふ　圓乘

午の刻に饅頭九つえて

まんじうの九つなるをいかにぞと
案じてくへばむまの時かな　貞徳

水纖

此葛は味もよしのゝ名物と
くはぬ先より誰もすゐせん　みつなか

索麪

二本の杉箸にこそかゝりけめ
糸よりげなる三輪の索麪　是難

田樂

昔たれ名を田樂と付つらん
豆腐の姥によりてとはゞや　貞富

香物

大かうの物とはきけどぬかみそに
打漬られてしほ〳〵となる　澤庵和尚

大根の香の物をばかみくだく
草紙詞
歯ぶしはつよき力なりけり　拙也

埋れし土大根まで時にあへば
口のはにのるかうの物かな　自是

濕飴

同
ならの京春日の里のしるあめは
いと甘めいた物にぞ有ける　行安

與米
つかみ散す龍の玉にしなりはにて　本ノマヽ
その名も雲をおこし米かな　貞因

頭痛
此程のちゝとにあらぬ雨にわが
頭つゞみぞたんとうつなる　一忍

題しらず
世中をつとひて何か安室の
うち氣にならば病おこらん　安勝

本歌
鼻の穴はつまりにけりなかみ痛し
我身よるひる咳氣せしまに　弘誓上人

同
風ひけば起つころびつしはぶきの
夜はにやきつく成増るらん　宗旬

風ひかば病おこらん腹中の
はいの臓にておほへびの臓　及之

ある者の脇わづらふに皂藥な
ればとつかはしける時
頬はたゝかくとこそきくゆゑに
藥になれとおもひやりけり　法印玄旨

便毒出ければよめる
本歌
思ひきやしゝのはし／＼かき破り
腿の付根によこね出んとは　良久

題しらず
同
なげゝとてわらべに物を思はする
がごせかほなる人よ何そは　友靜

同
遠近のたつよこ筋の町中に
迷ひ子尋ぬるをきゝて
覺束なくもよべる迷ひ子　友易

小式部内侍を御覽じて和泉式
部につかはしける
よめの子の小鼠いかゞ成ぬらん
あな美しとおもほゆる哉　忠通公

かへし
君にかくよめの事だにしらるれば
此小鼠のつみかろきかな　和泉式部

いときよらなる女のしまの衣
きしをみて人々はたちばかり
にや五六にやとさり／＼にい
ふをきゝて
着る物はしま黃金のはだへにて
年は三十二さうなよなふ　行安

世話
惡女をよめる
根問してさがなき口をあく女とて
多き詞のはなのさき智恵　夏虫妻

本歌
題不知
この程は櫛も取あへずむさければ
虱わくらしかみのまに／＼　高壽

朋友
くらがりに問音しりて火をうつは
まことなりけり金石の友　尋海
そちとわれあひ口なれば四方山を
はなし目貫の脇指にせん　高故

世話
そちとこち荷ひあふたる友なれば
棒組なりとひとやいふらむ　酒粕

題しらず
番ふ矢のかりまたよりも烈しきは
いぶりにみゆる人の心ね　未得
堪忍のせきをば腹にするかねて
わがいきどほり口へ出けり　貞富
いつはりいふを世話に鐵炮は

なすこいへば
僞とおもひながらも鐵炮の
はなしにきもを潰しぬる哉　政長

臆病者
臆病で鬼をこはがる人はもし
地獄の釜の湯の子くふたか　正香

佞人
本歌 いろみえてへつらふ物は世中の
人の詞の箔にぞありける　長次

人欲
世話 人の欲たとへんかたはなかりけり
富士の山にも頂きぞある　貞德

題しらず
何事も見ざるきかざるいはざるが
よござるとさる人の申き　貞因

家の子を我子とおもひ慈悲ふかき
親かたは親にまさりぬる哉　滿永

遠親類の財寶大分えしかたへ
よみて遣しける
世話 家屋敷財寶かけて大分の
跡をしるかのはしかたし迄　保友

題しらず
何事もけふの歡樂過ぬれば
必ずあすは苦患とぞなる　雲居和尙

樂をしてをさなそだちをする人は
老て貧苦の種としるべし　大燈國師

借錢も病もちくとあるものを
物もたぬ身と誰かいふらん　貞德

戀ならで人目しのぶの質おきは
我衣々にかねをとりのね　廣通

本歌 かねおやの心は闇にあらねども
子に迷ひつゝ損をするかな　正信

同 負事の絕てしなくばかねゆゑに
人も我身もたをれざらまじ

おち〳〵ぞとほるおひめの門々は
一文不通にやらぬ借錢　清永

貧乏は隣にあるもむづかしや
何かせかゝせ借はもらかせ　よみ人しらず

朝ねをし又晝ねをし夜あそびし
貧乏神になき名おほせん　好春

參りつごふ借錢乞は我宿の
貧乏神の氏子ならまし　一見

世話 びんぼうの神の姿か借錢の
淵にはまりて蟠まる身は　貞富

貧乏神をらでさかゆる屋の內は
しはん棒にやおぢ恐れけん　含永

盜人の用心によき道具には
かた木の棒に增るびんぼう　元淸

貧乏は賢き人につれ多し
どんな我身を誰にたとへん　貞因

世にあるをおもへば人の從者かな
上につかはれ下につかはる　無住

馴し草履取に隙出しければ別
うくやおもひけん泣を見て
年月を馴しはうらめしく〳〵と
なくは浮世の會者草履取　後佐

いはけなき時母におくれて又
の年後の母よびむかふべきや
いなやと父にとはれて返事に

繼母はしるかのはしも何かせん
父さへあれば我育つもの　長丸

題しらず

本歌
おもへども身をしわけねば繼母の
繼子に心おかるゝのよし　みつなか

こゝありて東に下り又山陰へ
さすらへける折よめる

狂言詞
西へちろり東へちろり曉の
明星やたゞ我身なるらん　澤庵和尚

述懐

世話
けふあつてあすない身とは知乍ら
あさても偖も長きたくはへ　貞富

百首歌の中に

くる年も又くる年もわくせきと
かせげどもいとならぬ口すぎ

題しらず

年ふればけかしき溝におちぶれて　本ノマヽ
ぬれしほとけぬいとほしの身や　源俊頼朝臣

六帖題の中に

水舟にうきてひれふるいけ鯉の
命待間もせはしなの世や　藤原光俊朝臣

我心くだけをちたる谷石を
ひきあぐる人のなきぞ悲しき　藤原信實朝臣

何かいとふ霜夜狐のかはころも
けむづかしとてぬぎも捨ぬに　椿僧正公朝

題不知

本歌
もろこしも吉野の町におく質の
ながれんと思ふわれが什代　次重

肩いれぬ門こそなけれつかふるは
荷をもつよりも苦しかる覽　正徹法師

あばらやのあるゝをまゝの天井は
下にゐるさへねずみ也けり　友信

世話
たてかねし竈を見たら地獄なる
鬼の目にもや泪ながさん　一興

寄暦述懐

といつまいつ同じ事をばくり返し
いひても年をふるごよみ哉　舍永

寄舟述懐

世話
いとなみに楫の取やうあしければ
かいがまはらで世を渡る哉　之時

題しらず

同
うきふしを小歌にうたひくれ竹の
よをのがれえぬ喉笛や何　友和

寄尺八述懐

尺八のわれながら世にいき過て
あな淺ましきなりに成けり　如快

家うる人をみて

弓ならで手前のあしくなるゆゑに
力及ばずやをはなしけり　高故

寄笠述懐

さりとてはさせる事なき破笠
骨ををりてぞ君に仕へし　藤原信實朝臣

寄簑述懐

かち人の野分にあへる古簑の
手をふく世こそ苦しかりけれ　藤原爲家朝臣

寄袴述懐

世話
まじらへば七重の膝を八重にをる
袴のひだのむづかしの世や　未得

寄酒述懐
世中は何にたとへん麻地酒
甘きやうにて辛きいとなみ　宣就

浪人の後大唐米といふ赤き米
に鹽汁のみて調菜もなきをお
もひてよめる
すさまじき物こそはくへ朝夕に
赤つら飯とうしおにの汁　宗鑑法師

閑居述懐
住侘て世にかくれこの身となれと
心の鬼はやはらぎもせず　正信

美女なりしが老さらはへるを
見て
ひたひにも浪のよるこそ道理なれ
目本に鹽のありし名殘に　長次

世話
老人
をさなかりし昔はごちへさるが尻
抹香くさく年ぞたけたる　一圓

よびもせぬに來れる老の土産とて
嬉しうもなきしらが頂く　季吟

年よれば何やすがたもなかりけり
目はうとうとふくとはぬけ鳥　道甘
（本ノマヽ）

世話
是や此大津馬にはあらねども
おひからしぬる姿うるさき　行重

同
雀ほどちひさく老の身はなれど
ういたる人はをどり忘れぬ　貞德

天王寺にて
うち死の人見本間が名を殘す
石の鳥居は墓印かな　貞円

往事如夢
邯鄲の枕はせねど人間の
五十年たつほどは夢なり

錢金はくれよといへどくれざるに
ひた物くるゝ月日なりけり　安親

慶賀
千年のたくはへもする老の身は
子の子を思ひつるの孫まで　貞富

本語
長生は耻多けれど孫彥を
屈む脊中におゐのさいはひ　未得

題しらず
巾着をきりの印こそ結びけめ
手もともみえずなりし盜人　是政

白浪の濁りてくろきどろばうや
すつぱのかはの流成らん　長久

本歌
津の國の難波の事がのらならぬ
遊びたはくる迄とこそきけ　俊佐

白柏子
煩惱も菩提とき丶ていにしへの
白柏子さへほとけとやいふ　喜雲

本歌
傀儡
傾城の煙いぶせきたばこにも
すゝけぬ物は貌の白粉　成之

世話
大坂瓢簞町にて
名にしおふへうたん町は川たけの
ながれをたてゝうきに浮女　正忠

關にて
旅人をとゞむる時の會釋には

地藏親するせきの出女　春房

放下師

見物に北よ南よ西東
四つ辻放下品玉のきよく　一長

芝居にて枕返しの曲をみて

本語
肱をまげ枕返しをする人の
樂みはその腕にありなん　成之

歌舞妓若衆に花さほひ出すを
みて

菩薩たち來迎さみる若衆の
かぶき芝居に花はふるなり　貞因

題しらず

四座の者集りてする能の時
出すしやうぎも猿の腰かけ　友知

かりそめもすまじきものは錢勝負
まくれば持しさいを失ふ　豐後守辰敬

商人

商人はかねの利錢の子をまうけ
嬉しがりつゝてうあひぞする　高故

賣物のきるゝといふは人たちの
ぬきん出てある商の棚　貞富

狐皮年々唐へ渡るを思ひて

八幡邊それではなしに日本より
からまでわたる狐がは哉

茶入ほり出しける人のあいさ
つに

借錢の淵をせになすほり出しは
天理にかなふ飛鳥川かな　是治

唐物棚にてかねの搭を求んと
するに代銀三十日にすこしか
ろしまけまじきよしいへれば
よめる

かねの搭の三ぢう日より上ぞとて
九りんの事を爭ひにけり　高故

米屋

下帶のさがりし米を買人は
肌ゆるさずにまはしよくせよ

茶代急にこひける返事に

銘にかく昔といひし文字にめでゝ
茶代をまてよ二十一日　行重

八百屋

かけ聲にあらぬ八百屋の鼓草
うりかふ時も手は打にけり　行廣

黑木賣

黑木うるやせ女子の牛にだに
させい〳〵と云はをかしも　是政

傘を日覆にしあめうるを見て

本歌
笠さいて出せる箱におくあめの
白きをみれば粉ぞふりにける　行家

饅頭にて富る人へのあいさつ
に

世話
饅頭のあぢな仕樣で錢をもつ
思案のあんは百貫にこそ　頼興

酒屋

本歌
よき酒ぞかひにもござれ我宿は
ならの町家に杉出せる門　久友

銀屋

同
ふいがうの吹上に見ゆる白かねは

錫か鉛からうのよするか　金門

木藥屋

本歌 磯の龜ふるきみやこの藥屋に
甲ばかりこそ昔よりあれ　元成

職人歌中に左官

田樂をあぶる左官の壁にこそ
山椒みそをも小手にぬるらめ　徳元

番匠

番匠はおさな事かも石づらの
なみよく出來て水をもり皃　高故

おもき目を宇治の醫師かろく
直しける挨拶に

謠詞 なふ上手みやこにちかき宇治の人
聞しに增る目いしやなり皃　友信

梶原氏なるが風眼治して又目
わづらへるをみて

梶原が氏そさ口をきく人の
目にさへ二度のかけ藥かな　毎雄

醫師

世話 藥人をころさずときく醫者ならば
聊爾をするな療治よくせよ　高故

持病の寸白おこり堪がたき折
から醫師のもとへ申遣しける

本歌 痛みこしすばくの虫もかた過ぎぬ
醫者ならずして誰かさくべき　眞芳

竹といふめの子のわづらふに
よめる

竹につく病はとかくじねんこに
直したまはんやぶくすし殿　舍永

掠橋の里にて世におもき虚勞
病をいやせるを見てかく申遣
し侍りける

うらめしいどうともならぬ煩か
なほれば繫ぐ馬のくらはし　友信

返し

いとほむる言の葉にさへのり馬の
くらはしわたりいで歸り足　行風

養性

膏粱の食をつゝしみ酒ひかへ
色遠ざかれ病あるまじ　贈法印道三

本歌 腹の中にうねくる虫もわきからと
音をこそなかめ灸な恨みぞ　行順

同 灸針をしめちかはらにさしも草
おこりの虫のあらん限りは　玄札

或弓取のかたへ夜噺におしか
けんといひやりけるに此頃屋
なりがしてゐられぬとかねて
の筈ちがへ申こされければよ
みて遣し侍ける

屋鳴するはいれば祉あれゐられぬと
おしやる筈ではないぞ弓取　貞富

士

侍の躰は日本ぞ增りける
身にし隨ふもろこしのもの　通寛

侍の猪武者といはるゝも
虎口に強き騎馬をもつ故　未得

軍法歌の中に

人はたゞさし出ぬこそよかりけれ

軍にだにも先をかくれば　左近將監實澄

佃軍歌の中に

小敵よよわ敵よとて油斷すな
侮る故におちをこそとれ　修理亮勝家

人は城人は石垣人は堀
情は味方あだは敵なり　大僧正信玄

吉日はみかたよければ敵もよし
たゞ肝要は方角をとれ　源義經

荊軻秦無陽

面白きことよときゝてうそねぶり
油斷をしたはあほうでん哉　友信

郭巨

親にたゞ孝行つくす徳みえて
堀出す釜は子がねなりけり　本也

屈原

我獨すました貌をなさるゝは
濁る浮世や御たいくつげん　一見

許由

あやかれよかみ浦山ぬ心をば
許由かあらふ耳の垢ほど　祖澄

三笑

三笑の名はかくれぬやのむ酒に
酔てこけいのはしはづれ迄　淸勝

題しらす

天下一のかさいられたる矢數たそ
知ずやそんじよ園右衞門殿　滿永

姨捨の能をみて

捨られて姨が仕事は所がら
更科のそをうみやしつらん　正信

鈴木

能登鯖や丹後鰤より名をえしは
くまのそだちの鈴木殿なり　教二

梶原

追風のふく嶋の下知は義經の
御氣にさかろの舟の梶原　高故

武田勝頼父子のくびを御覽じて

勝頼と名のる武田のかひやなに
軍に負てしなのなければ　信長公

辨慶

新關の戸尻にさがる强力を
さん〴〵にうつ武藏ばう哉　夏虫

義經

おひをおひひつゑを作り山伏の
しんらうくらう判官のてい

重衡

重衡の布ならぬ身も罪により
引わたされてならざらし哉　由貞

田村丸

鬼うたん事のみ夜も思案して
帶ひもとかず田村丸ねか　正信

頼朝

しづかなる舞の姿に見とれては
そろ〳〵そばへ頼朝の君　友信

卜琴とぬきて山崎宗鑑が影に夷歌望みければ彼宗鑑がかんづよき心づからかく重寶をしは垣氏よと見ぬ世をさへやかがみにけん佛をさて寫したりな繪かいたりな文字よみたり

な歌とかきて
筆とらでたれ山崎のゑせものが
えせ歌といひ繪といひ手といひ　行風

同繪に
殊勝なり此山崎のぼんさまの
腰にあづさの弓矢八幡　保友

和泉式部
今ぞおもふ涼しき歌の口よりも
涌ていづみの式部てふ名は　法橋由己

赤人
いつもたゞおかほのいろの赤人は
歌のとくりの酒や過けん　春房

無常

いつの日のいつの時にか出來る房
巡り〳〵て後はがつたり　一休和尚
うらめしや明暮草の根をかふる
月日の鼠とる猫もがな　貞之
人の身はまはり燈籠にさも似たり
火が消ぬれば息ぞとまれる　行順
初夜のかねをつく〳〵ときけば
我等迄諸行無常の心起れり　友久
借用の地水火風をそれ〳〵に
かへす無常のせつき近さよ　一圓

百首歌の中に
本詩 こつつりとうてる火打の石の火の
ちらと斗の世にもすむ哉　貞富
人間のありさまみればくるり〳〵
廻りしばいのせいつくる如　相宥
童口遊詞 我心鬼のこぬ間にせんたくせう
欲垢ありて隠期はうし　友貞
肉身のまだあるうちはきのどくろ
早く浮世をたちされかうへ　一見
ひざゝらも頭の皿もことごとく
われ離れてや我はなるらん
うつくしき花の姿をおしむとも
無常の風のやはか遁さん　鈴虫女
柴かりやよき身の果もあばらやの
かきほねとても終に殘らず　元安
のりありく蘆の葉風に達磨坊
下蕉ひえてや冬にしにけん　雄長老

辞世
親もなし子もなし跡に錢もなし
からだ斗はからりちんなり　成安

空存追善に
名ばかりをこゝにのこして本國に
かへるや地水火風空存　重信

題しらず
世話 丸はだか百貫すてふをのこ子も
死ればたつた五輪にぞなる　淨次
千金のおもひをなしゝ人だにも
わづか五りんに變る世の中　友信
人として人にのまるゝあはれさよ
みいらの昔おもへば〳〵　宣秀
なき人のはかにむかへば百八の
珠數玉ほどな涙こぼるゝ　行重
たむくるはしぶ茶なりとも明暮の
つもらば無上極樂のたね　未得

人の身はせとの島の雲佛
消て殘るはなばかりに候　宗鑑

後撰夷曲集卷第十

釋教

題不知
歌よまず後生心のなき人は
嘸な寐覺のきたなかる覽　前大僧正慈圓

東寺にし參る出立とくふかゆに
下向道まで般若はらみつ　全見

興福寺三十講の座へまかりけり水がちなる粥たうべけるとて
我さへもまだくひたらぬ水がゆの
底にもみゆる影ぼうしかな　西行上人

焔魔堂にてよめる
冥途にはいかにも地獄の主ぞと
證據にたてし焔魔堂かも　滿永

眞言の僧隱居すとてみづから垣ゆひなぞせらるゝをみて
眞言の安室とこゝにお手づから
結ぶいんきよは殊勝也けり

或安室の軒に生柴つみおきしをみて
桑門につみおく柴のいろをみて
靑道心のかるかやとおもふ　友和

子孫おほくもたる老人への挨拶に
世話
孫や子を鮨にする程もつ家の
おもしにはよきいしな禪門　滿永

題しらず
來世なる人喰鬼の姫御前は
みめよきとても二九の十八　惟次

もしわれは地獄の釜に事かくと
いもじや斗たすけおくらん　敎二

本願寺の御だうちかき住居ながらふるまはるゝこともなくよその人はかりよへるをみて
世話
楊弓のあたりはよばでよそへのみ
みだうからやる矢の使哉　高故

本願寺の旦那よりゐて西東よ

しあしあらそふをきゝてよめ
る
此世では嫌ひたまふと終にゆく
道は西をよ東門徒衆　友知
蛸買に遣しけるに使おそかり
ければ
此度はいそぐといふに長袖の
蛸の入道みちのおそきよ　一休和尚
題しらず
本歌
あのこたら三百三文に賣人も
菩提の種に五りん肩よや　顯與
同
我たのむ旦那のためにつく餅は
齋非時わかぬ茶の子なりけり
よみ人しらす
はれ物のうむをはなれぬ禪僧は
未だ身持のきたなかるらん　資之
彌陀佛の常にせつしゆに預れる
人は光明へん上戸かや　昌惠
御齋の食を手づからもりてくふ
僧はもとより釋氏なりけり　宗玕

鼻聲にて經よみけるをきゝて
よむ聲のあやもしか〴〵聞えぬは
鼻びしやもんの功徳經哉　正信
題しらず
草紙詞
唐よりも渡りてよきは木綿と
藝のある犬物しりの僧　貞因
經かたびらこしらへけるを見
て
極樂は涼しき道ときく物を
經かたびらの用意何ぞも　満永
題しらず
本歌
おりおろしにつきにけらし白木綿
衣をすてふ尼のこしらへ　行豊
落髪せざるいにしへ時ならず
おもひ出る事もあれば
同
ながらへば又新發意や忍ばれん
白髪あたまぞ今は悲しき　貞因
佛師の箔つかへる折から本尊
は何にかと問侍るに阿彌陀と
こたへし口にはくのつきたる
を見て
阿彌陀ぞと申佛師の口よりも
はや金色の光さしけり　顯與
東本願寺
謠詞
陸奥はひがし六條本願寺
こゝ鹽竈のおうらなりけり　成之
有馬にて
石像にきざみありまの湯壺より
わきぬる音も藥師ふつ〳〵　政長
朝熊金剛性寺にて釋尊の御歯
をおがみて
みがゝねば佛のはさへうるみけり
金剛性寺におはしませども　友久
摩利支天斗帳のはしよりほの
ぼのと拜みて
あり〳〵と拜みとめなでまりし天
なにの出なくかへりける哉　親之
大黒の讃に
大黒の手にもつ槌は寶より
足にふまへし米うたんとや　行風

いろ黒くせいひきけれど大黒の
福力にかつ天童もなし

三面大黒の讃に
さても此御貌を見たてまつるより
ふく〳〵〳〵となる心地して　宗因

布袋の繪に
數の子を入て盈ぬる布袋
是や生ぐさ坊主なるらん　太極

阿那律の繪に
衣をばぬひたてんとやお手づから
糸をとほせる針のあなりつ

六祖の繪に
米ふみてさとる六祖の心には
菩薩もわれが下にみつらん　貞成
おのづから臼にて米を臼むるは
是や即心食物の祖師　立圃

達磨
九年まで壁にむかへる辛勞や
達摩そんじやと人のいはまし　元成

善導の讃に
くろかりし衣のいろの黄になるは
善導大師はこやたれけん　一休和尚

題しらず
六道の辻がためをやめさるらん
錫杖ついてたてる御地藏　よみ人しらす

吉野夢違觀音
夢違ある觀音のちかひには
木枕までも花やさくらむ　毎雄

藥師をよめる
是や此佛もおやくしたまふは
よるひる二六十二しんたちみつなか

一向宗阿彌陀の脇かげに九字
十字といふことあるをよめる
むづかしく彌陀の敎の九字さたは
しうしにあひてとへ門徒宗　舍永

迷ひふかき人をみて
煩惱のはなれかたなき人はたゞ
うろ〳〵と迷ひめる哉　滿永

世話
井のはたに遊ぶるよりも危なきは
後生ねがはぬ人の身のほど　袋中和尚

吉野發心門にて
花を亭主月をば友にみよしのゝ
發心門にいつかいるべき　行安

題不知
家にありて不忠不孝の輩の
遁世修行あやしかりけり　雲居和尚

心すなほならぬ僧の御前にて
珠數つまくるを見たまひて

世話
上人はかすみの衣きりの珠數
あまりはれせぬ空念佛哉　秀吉公

末學の僧は名利のみにて佛の
御敎にたがへるをみて
遁世の遁は時代に書かへん
昔はのがる今はむさぼる　よみ人しらす

題しらず
花麗なる沙門をみては皆人の
冥加者也といふぞをかしき　雲居和尚

何やらん悪事せりとて強力を
山伏の手づからしばりしをみ

て
螺貝のかひ〳〵しくもしばりしは
あらなはふしのこはき山伏　毎雄
世話 若後家の參る御寺の坊主をば
井戸のはたなる童とぞみる　貞因
十惡の中に貪欲
後生ねがひ無欲にみえて欲ふかし
こがね佛と身をなさんとは　貞室
世話 見るからに欲のひつぱり蛸なれば
げにもなまぐさ坊主也けり　甯永
同し中に愚癡
ならへども法の敎に愚痴なれば
阿呆羅刹と師やおほすべき　行豊
三惡道をよめる
皆人の貪瞋愚癡の惡水は
三途の川のながれとぞなる　雲居和尚
惡僧おのが分限よりなにかに
つけてきようを好み佛つくる
をかごとに度々旦那に奉加す
すめなげくをみてよめる
おごり僧手前をすきとすりきれば
すゞのみも今なきことぞいふ　甯永
芋堀坊主
世話 異風にも作る氣立かかたくはで
芋堀坊主えぐりわろさよ
まことすくなき僧をみて
黑髮のゆひがひあらばそらじかし
木のはしたなく世を捨坊主　弘誓上人
貪僧
本歌 陀ぬれば今はだかなる寒垢離の
身を冷しても錢はしぞ思ふ　重玉
まよへるはまた極樂のそとばかり
五躰五りんと出家ぶりても　正成
五戒歌の中に殺生
世話 見るからに頰にくしきを好みけり
是や生ぐさ坊主なるらん　行風
我法の味をばちともなめしらて
魚くふにのみ口をあく僧
本歌 名にめでゝくへるばかりぞ蛸坊主
世話 我おちにきと人にさたすな　友信
僧や此御すきの魚の名にたゞば
あかめんぼくぞ失はるべき　甯永
同し中に偸盜
同 盜みまでしたるなまぐさ坊主をば
手長蛸とぞ申べきなる
同し中に邪婬
本歌 かたちこそすぼろ坊主の朽木なれ
心は花をやらばやらなん　圓琢
をんなぐるひ過ておこせる發心は
あこより戀のせめ念佛かも　貞林
世話 御僧のかくしおかるゝ大こくを
申さば寺のびんぼがみさま　利安
僧候かめした衣の玉ならで
玉のやうなる息子もたるは　行風
同し中に妄語
かりそめに思ひて嘘をいふならく
奈落に落ばくやしからまじ　延益
童日道氣 此世にてゆび切をせようそいはゞ

地獄の釜へおちやらふもをし　長丸

同し中に飲酒

後の世はともかくにもなら酒の
昧口からややぶる戒め　元信

三衣かけ女犯肉食酒もりは
一切經に見えぬ事とぞ　行風

六道の歌の中に地獄道

くるしみを聞につけてもうし鬼が
引てめぐれる火の車かな　昨晉

罪あるは蛛舞ならで足はうへ
かうべは下に無間地獄ぞ　一圓

題しらず

いふならくならくの底に入ぬれば
刹利(せつり)も首陀(すだ)も變らざり鬼　延喜帝御製

地獄の繪を見て

このみ見し劒の枝にのぼれとて
しもとの菱を身に立る哉　西行上人

畜生道

煩惱の犬のゑじきと成ぞせん
ぼだいそれたる罪作る身は　是政

修羅道

世話
持太刀のつかの間もなき戰ひに
火花散して修羅もやすらじ　一圓

人道

智恵淺く罪ふかげれば本分の
田地そこなふ人間の水

智恵ありと思へる智恵に障(さへ)られて
あはればだいの種を失ふ　知度

此世界くるしき海といふなれば
身にうきしづみあるは尤　滿永

彌陀の利劒なまがねなるか煩惱の
絆(きづな)をきるに思ひきられず　顯輿

不義にして集めたくはふ財寶の
積りて後は二世の身のあだ　雲居和尚

天道

天人の花をあざむく貌ばせも
終の姿は五すいりやうあれ　政吉

大聖の佛がうそをつく物か
天上の苦も五衰りやうあれ　一圓

世話　我慢

輪をおほくぬけたと自慢する人を
いはゞ山から利根なるべし　滿永

高慢

億々の佛達だに我身をば
物しり貌にせしとこそすれ　親鸞上人

大圓鏡智

花とみし御兒をいつの魔風にか
木坊主となす僧正が谷　顯輿

十月に落髮して

よべそりしかななづきんや十徳は
身どもが冬のきそはじめ哉　貞因

そるまではひれのあるなる俗躰の
頭ももはやたこの入道

狂言師の發心せしをみて

大小の狂言綺語をいろかへて
墨染になりひらゆたん哉　芦葉

我も人も花見がてらにくる珠數は
なぐさみながら後の世の爲　滿永

菩提もと植木にありとおもふにや

花見がてらの寺參衆
　發心者の體と二聲いへるをきゝて　貞因
はちく\と二度迄聲の聞ゆるは
　十六羅漢の御弟子なるかも　正之
　題しらず
拂へどもうてどもさらず食の上の
　蠅とやいはん煩惱の犬　行重
　或僧阿彌陀堂といふ釜にて茶たてられし挨拶に
此世から極樂とおもひたつる茶の
　釜の名までもあみだ堂かな　貞因
　平等性智
生死海に慈悲の釣舟出にけり
　濟行音は弱吽鑁斛（にやくうんばんこく）　明惠上人
　峰入
童口遊詞
是は二世のえんの行者と峰々に
　入そろく\山伏の道　行風
本歌
強力よまて事とはん峰入は
　いかばかりふく螺の貝ぞも　見澤

峰入に我もく\と山伏の
　かぶりつれたるときんかき哉　淨次
謠詞
かけ出や山々峰々里々を
　めぐりく\てけさの齋料　貞富
　月待
山伏の祈をかくる三日月も
　春の夜なれば朧ぼろぼん　滿永
　富士垢離
本語
ふじまうで貴しとするありすまは
　彼山たかき故かあらぬか　行風
　鉢叩
鉢たゝきちまたに古きへうたんの
　しばく\むなし中の八木　忠勝
　流灌頂
凡僧のおこなふも是水上は
　釋迦遺法の流灌頂　大極
　三觀
錢をもてかはぬ物故一心を
　三くわんもんになど定けん　行風

　題しらず
樂しのみほこる斗をよろこびて
　後生ねがはぬ人ぞかなしき　親鸞上人
　寄車尺教
因果はやうめぐり車のわれからと
　しらでも惡を作る身はうし　行順
　山城國彌陀次郎の堂にて
世に多き惡太郎等をたすけんと
　あらはれ出し彌陀二郎かも　貞富
　有馬阿彌陀堂あれはてたるを
　叡聞おましまして　後奈良院御製
堂あれて雨のもりやと成にけり
　佛の仇をいざやかせがん
　三十六反のすゝをよめる
法然は四苦を離れん願ひにや
　三十六の珠數を定し　三哲
　修行門のこゝろを
少々の事をば耳にきゝいれず
　たゞ一向にみだをたのめよ　親鸞上人
質はちをおきて朝夕すぐすとも

みだを賴むを長者とはいふ

本分の田地の上に今も猶
さとりの道を開きにぞする　貞因

罪おもき我をばすくひ取給へ
あみだ佛の力だめしに　貞富

一心に敎たふとみ賴むこそ
誠にみたのいれしやうねなれ　之時

唯心の淨土を常に建立し
己身の彌陀の安置とも哉　友和

百万反珠數くるをみて

あはれ〳〵百萬反もくるずゝの
玉のやうなる汗をかきつゝ　行風

身のまづしきを八幡山の藥師に祈て

なむ藥師あはれみたまへ世の中に
ありわづらふも病ならずや　小大進

伊勢石藥師にて

病氣にふはつく人もたのむなら
かたくまもらん石藥師哉　信安

木なりともかろしめまじき御佛を
猶おもんずる石藥師哉　尊海

題しらず

とく生れさらずはしばし休らはで
二佛の中にあふぞ悲しき　性空上人

佛光寺にて

さしむかひ東山より西方を
ねがふもあみだ佛光寺哉　満永

本願寺にて

敎をもうけたりきとて一向に
ねがふはみだの本願寺なり

宇治平等院にて

珠數をする廻向は願以此功德也
平等院とふしをがみけり　正重

三界にねがふところはみだぶつの
すぐれまします淨土也けり　親鸞上人

踊念佛

煩惱はふりすてられぬ物やらん
踊拍子で申す念佛　月券

懸念佛をよめる

後の世の為にとたゝくかねてより
ふかくたのみをかけ念佛哉　一圓

責念佛

地獄へは落しと鉦をたゝきたてゝ
こゝろの鬼を責ねぶつ哉　貞富

夜念佛

こせ〳〵とずゝをも摺て餘念なく
夜念佛をも申す道心　みつなか

本歌　足引の山にこもりてずゝのをの
なが〳〵し夜もひとり念佛　行康

勝尾寺二階堂万日にこもりゐて

奥ふかき山取たてつ鉢もしつ
よろづよるひる申念佛　海雪

釋敎歌の中に

あみだぶと申ばかりをつとめにて
淨土の莊嚴みるぞ嬉しき　法然上人

賀茂百首の中に

比叡の山堅儀や近くなりぬらん
夜半にさえたる問答の聲　前大僧正慈圓

四天王寺にまうでたまふ時百
首歌の中に
我太子四方の八町の内をだに
猶化しかぬる心くるしき
吾背後の世の事かたらはれけ
るかへりごとに
麻糸の長しみじかしむつかしや
有無の二つにいつか離れん　智蘊
題しらず
後の世に彌陀の利生をかふらずば
あなあさましの月の鼠や　眞經公
皆人のからねばならぬ四つの物
もとにてもどす分別もがな　方寸
無量義經に船師大船師
こもづなは生死の岸にときすてゝ
解脱の風にふなよそひせよ　俊成卿
修行門のこゝろを
さし出るほこさきをれよ物ごとに
おのが心をかなづちにして　昌三
賤やしづ静にずゞをくり返し
百万反もさなふみたぶつ　榮治
佛よし人も又よしわれあしゝ
なにはもいらぬみだの名號　宗長
配所にてなむあみだぶつ六首
折句の中に陀の行
誰もみな頼みをかけてたねんなき
他力の心ぞたゞ佛なる　爲家卿
修行門のこゝろを當世詞にて
よめる
法の舟ありか他力よ身はすんさ
南無阿彌陀佛に任せておけろ　宣應
淨土門のこゝろを
自力にてならぬ菩提の種なれば
みだに任する身の嬉しさよ　貞富
上盡は佛恩報謝の勤なり
下至一念もやかて往生　法然上人
大念佛宗鉦鐘をよめる
水底の龜にうかべる念佛の
徳はふかえの法明のかね　夏虫
題不知
諸々の佛をこえし誓願は
わきて法藏びくのあづかる　祇澄
なむあみだ南無阿彌陀佛なむあみだ
なむあみだ佛なむあみだ也　寶巖和尚
世の中はへちまの皮もいらぬぞと
おもふ我身に垢はありけり　元信
假名法語の中に
野心のまだやはらがぬ牛をみて
打たゆむなよまきの藤むち　大燈國師
題しらず
事たらぬ身をな恨みそかもの足
短うてこそうかむせもあれ　夢想國師
釋迦の鎗たゞ一筋に念ずるは
法にいりみのめあて也けり　友知
配所にて南無阿彌陀佛六首折
句の中に佛の行
二つなく不捨の誓願ふしぎにて
深きねかひぞ不退とはいふ　爲家卿
修行門のこゝろを

煩悩の垢をおとさは暁の
あかの水にて洗ひたらなん　是念

せは〳〵と世話燒ず共あだしみを
唯念佛にまからせたなん　重利

淨土寺にて挨拶に

敎たまふ法ねんしたる人は皆
後世も極樂淨土宗門　みつなか

優婆塞をよめる

煩悩の病をなほし心よく
うばそくさいで修行遊ばす

明觀察智

佛とて別の物にはよもあらじ
貪欲嗔恚なき人をみよ　由海上人

あきらかに心のやみめはらさずは
いかで悟りの月見いださん　正香

隔ぬる地獄極樂よくきけば
たゞ一心のしわざなりけり　親鸞上人

始から經をよまずと小新發意
先かきたまへ庭のいろはを　舍永

本願寺私宮に御一家といふ事あるをおもひてよめる

御一家のをしへにまかせ西方へ
罪もかるこにのせて行らん　友信

有馬の阿彌陀堂あれ果しに上葺出來しを見て

今こそは極樂ならめ阿彌陀堂
雨のもりやを痛く防ぎて　藤原光廣卿

阿彌陀の願をよめる

六八四十八願成就するなれば
阿彌陀も九々の算用やよき　梅曲

或僧の引導の場にてよめる

世話本分の田地をひらくぼんさまの
をつとりくわもよしや佛法　昨夢

題しらず

後の世のきづなとなれる妻子程
せめて佛の恩をたふとめ　法然上人

ふら〳〵煩ふ人へのあいさつに

たちやみにやむと後世をお願やれ
しなばころりと横にねん佛　舍永

題しらず

明暮ゝ信心ひとつになぐさみぬ
佛の恩をふかくおもへば　蓮如上人

百首歌の中に釋敎

三毒と三惡道と三界を
こえば九品の淨土にゆかん　一圓

菩提の心を

念佛を申す我身は極樂へ
參りはじめの參りをさめよ　貞富

念佛が申さるゝにて極樂へ
參るわが身としるぞ尊き

題しらず

それ佛人もやとはぬ世に出て
ときおく法はのちの煩ひ　後鳥羽院御製

死するとは迷ひの上にみゆれども
悟て見れば不滅なりけり　親鸞上人

或人の一回忌の法事せし座にて

むかはりの善をつくせる弔ひは
一ねんほつき菩提心かな　木也

普門品を

慈悲のちかひ邪見の心をれぬるを
しるや刀尋段々の文　尙芳

題しらず

煩惱のきづなをすきといやしけり
是ぞめいよの法蓮花きやう　信重

阿彌陀佛淨土に入とすゝむれば
下品なりとも叉たりぬべし　後奈良院御製

夢の世としりて後世を願ふみは
ねても覺てもなむあみだ佛　貞富

往生とぐれば百味の飮食そな
はるといへる經文のこゝろを

往生の身には百味の飮食の
具はる儘にごくらくよなふ　宣堅

菩提心をよめる

一天下二親につかへ三寶を
四民守らば五體あんなん　宣應

毎日一首中に

觀音の大慈大悲ぞむかふべき
八葉の蓮のむねにひらけて　爲家卿

彌陀の誓願をおもひて

藥ならで彌陀は五劫の思惟して
衆生を子とやあたふ一法　祖澄

あはれみもふかき濕氣の煩惱の
病をなほすみだの丸藥　貞因

煩惱のおこりをなほすまじなひは
天下一藥みだの名號　行重

情の强きこゝろの鬼もしたがへる
みだの利劔や天下一ふり　行風

身に六つの塵をすきりとはき捨る
箒をいはゞなむあみだぶつ

眞言のこゝろを

大日の種子より出てさまや形
さまや形叉尊形となる　實朝公

朝朗弱吽鑁斛とこくふねの
跡のしらなみ曳醯咖蘇婆訶　實手

疎からず伴ひし人のいかにお
もひ取けるにか六時勤るとい
ふをきゝて申遣し侍ける

一聲のうちに六じはつとめずや
いかによるひる申念佛　貞因

佛の慈悲をおもひてよめる

身を捨て人をたすくる法の師の
慈悲の心ぞたふとかりけり　親鸞上人

慈悲

當來の三會の春の花も叉
現世の慈悲ぞ種となるべき　雲居和尙

題しらず

道はたゞ世間世外の事どもに
慈悲眞實の人に尋ねよ

八卷の經の中にもなかりけり
たゞありなしの妙の一字は　道元和尙

中道實相

万民にこえてさとれる心こそ
邪正の外の境なりけれ　行風

聖一國師煩の後一眼盲し給へ
ると聞て申遣しける

本來をさとりえたらば海月殿
海老の眼は用ひざらまし　法心上人

釋教の歌の中に
極樂へつとめてとくと出たゝば
身の終にはまゐりつきなん　法然上人
世話
心をば水晶りんとみがきつゝ
珠數の玉にも念佛たえすな　幸昌
罪障の露霜ふかき身にはたゞ
座禪念佛惠日なりけり　雲居和尚
久安百首歌の中に
西方にあみだ佛のますなれば
道理(ことわり)なれやなもと唱ふる　藤原季通朝臣
題しらず
三毒のやまふの床のねがひものに
一口なりとなむあみだ佛　貞因
菩提もと植木のごとき人なれば
華は熟柿となりにける哉　満永
饅頭たうべける折から如何哉
佛法とはれて返事に
それとしもめにはみえねど頭上より
脚下にいたるまんぢうの味　元成
菩提のこゝろを
三界を火宅と見るはひがごとよ
こゝを離れていづこ極樂　行重
主人公
穢土にあらず淨土に非ず古からず
あたらしからぬ心にて候　義益
即心即佛
座禪とて外は求むな我胸に
無念無相の佛もちつゝ　權大僧都光宥
隨緣眞如
舟ならで苦海をわたる人々の
浮沈みあるや楫のとりから　三哲
依他圓成
世話
法の道尋てぞしる足もとの
くさり繩にもとり所哉　行風
阿字觀
生れずよおもへば本の阿字なるを
いつの程より不可得といふ　山海上人
性空
本の水はかりて見れば人間の
五性の物がへしやうもなし　行風
題しらず
苦をもみず樂をもしらぬ其時は
善惡ともに及ばざりけり　隆琦禪師
西東北よ南よそれはさう
天地のほかはもとの古里　弘法大師
人間に住し程こそ淨土なれ
さとりてみれば方角もなし　親鸞上人
佛より先にさとれる他力をば
釋迦も說れずみだもしらせず　法然上人
らく〳〵と思へばもとの物をたゞ
しばし佛にたぶらかされて　山海上人
佛法は鍋のさかやき石の髭
繪にかく竹のともずれの聲　一休和尚
極樂はまみけの上のつるしもの
あまり近さに見付ざりけり　道元和尚
鳥の子も塵紙も同し紙は紙
佛も鬼もかく筆はふで　義益
心とは何をいふらんふしぎさよ
墨繪にかけるまつかぜの音　夢想國師
親月とて都の町に松たてわた

ししめかさりしていはふをり
からされかうべいだきありき
給へるを或人の見てこはいか
にと申ければ返事によめる

憎げなき此されかうべあなかしこ
めでたくかしこ是よりはなし　一休和尙

大死底人

やけば灰うづめば土となる物を
何か殘りて苦をばうくべき　夢想國師

娑婆即寂光土生死即涅槃とい
ふ文のこゝろを

不可得とがてんをすれば過去未來
現世にきらりあり明の月　元信

題しらず

さし出る心の角を折るならば
無の字をかけて物は思はじ　夢想國師

おのづから虛空ひとしくなる人は
みろく出世か今日の釋迦　道徹

たてぬ的いかぬ弓にて放つ矢の
あたらす（古木にはぬ）鹿もはづさ（古木にはれ）ざり見　夢想國師

體ありて凡夫心だになかりせば
本來空の無相眞佛　雲居和尙

罪作り地獄へおつる人もまた
鬼がためには慈悲心ぞかし　貞林

空に出て空なる物を釋迦むりに
妙とくこそ妙な事なれ　行風

振舞とこゝろと口ととゝのへて
彌陀の御のりをとく僧は僧　親鸞上人

あなたからこなたを助け給はれば
釋迦彌陀はわが兩ごなり哉　貞富

墓原のほとりにて千日申僧へ
のあいさつに

打ならしかね〳〵申念佛も
一さんまいの寺の僧たち　高故

念佛往生のこゝろを

中々にほれて念佛申せかし
こざかし貌はみだに疎きぞ　兼好法師

上もなき功德ときゝし彌陀の名の
餘りの事に唱へやすさよ　僧都源信

知人もしらぬ人をもわたさるゝ
弘誓の舟のかいせみだふつ　滿永

題しらず

世をのがれ修行の道は別になし
智者愚者ともに座禪念佛　雲居和尙

常所作智

世話
往生をとげし女や氏なくて
のれるは玉のこじふさう也　一圓

惠心僧都常にこのみて彌陀の
像を書たまふよしをきゝつた
へてよめる

筆の海ふかきくどくのありさまの
御影をうつす惠心佛哉　夏虫

涅槃門のこゝろを

貪らずいからず愚痴になき人は
おもはずしらず出る三界　知友

嬉しやな尊とやとこそは言れけれ
なむあみだぶの口のひまには　蓮如上人

法界體性智

天はやね諸木は柱地はたゝみ
世界はわれが家居なりけり　貞富

題しらず

櫓もかひも我とはとらで法の道
たゞ舟主に任せてぞゆく　聖德太子御歌

作者之目錄

敏達天皇御製一首　延喜帝御製一
後鳥羽院御製一　後奈良院御製二
寛文法皇御製一　聖德太子御歌一

親王

八條殿 式部卿智仁親王一　一乘院殿 具敬法親王一
知恩院御門跡開基八宮三

三公

法性寺入道殿 攝政前關白太政大臣忠通公一
後京極殿 攝政前太政大臣良經公二
近衛殿 左大臣信輔公一
近衛殿 關白前左大臣信尋公一
轉法輪三條殿 右大臣實秀公一
室町殿 贈左大臣義輝公一

公卿

大納言正二位藤原朝臣爲家二
大納言正二位藤原朝臣爲兼二
烏丸殿 權大納言正二位藤原朝臣光廣三
飛鳥井殿 權大納言正二位藤原朝臣雅章一
小川坊城殿 權大納言藤原朝臣俊廣一
前大納言隆家一
中院殿 權中納言正三位源朝臣通勝一
飛鳥井殿 前中納言藤原朝臣雅康一
岩倉殿 參議源朝臣具起一

非參議

雲客

皇太后宮大夫俊成一　正三位知家一
正四位下大皇太后宮前大進藤原淸輔一
正四位下中宮權大進藤原仲實一
庭田殿 中將源重秀朝臣一
同 中將源雅純朝臣一
從四位上木工頭源俊賴朝臣三
藤原信實朝臣四

藤原光俊朝臣二　藤原秀通朝臣一

武家

太閤秀吉公一　鎌倉 右大臣實朝公一
安土 內大臣信長公一
正五位相模守平時頼二
從五位左衞門尉源義經一

地下

兵庫頭源仲正三
丹波掾曾禰好忠一
高倉氏古本ニハ小倉氏 左近將監源實澄一
多賀氏 淡路守宗增十四
豐後守辰敬一　柴田氏 修理亮勝家一
壬生忠利一　淺野氏 因幡守長治一
小堀氏 遠江守一政二　小濱氏 民部少輔嘉隆一
愛甲氏 三郎季隆一

女房

和泉式部一　小大進一　鈴虫女一
蜷川氏 智蘊妻一　宮川尼一　大坂 如風尼一
京 三廉女一　和州 夏虫妻四　和州 毎雄妻一
河州 長廣妻一　大坂 胡蝶女二　江州 孝女一

僧官

武田氏 大僧正信玄一　細川氏 二位法印玄旨七
牡丹花一　東山氏 長嘯子一
法眼紹巴一　黎竹庵 贈法印道三一
天滿森 法橋由己三　大友氏 宗憐法師一

三論宗

行基菩薩一

天台宗

前大僧正慈圓四　權僧正公朝二
僧都源信一　性空上人一
西行上人五　寂蓮法師一
兼好法師一

眞言宗

弘法大師一　栂尾開山 明惠上人一
權大僧都光宥一

佛心宗

天龍開山 夢想國師五　大德開山 大燈國師二
建長開山 隆覺大禪師一　永平開山 道元和尚二
松島開山 法心上人二　一休和尚六
平等寺 山海上人三　澤菴和尚七
雲居和尚十　建仁寺 雄長老七
東福寺 正徹法師一

淨土宗

法然上人五　知恩院 靈巖和尚一
袋中和尚一　遠里小野西方寺 弘誓上人四

本願寺

親鸞上人十一　蓮如上人二

山城京并所々

因幡堂僧 實乎一　同上 直雲一　高田氏 貞之十四　正齋 瑞生一
本阿彌 光悅一　松永氏 貞德十五　野々口氏 立圃二　安原氏 貞室二

北村氏 季吟二　江崎氏 幸和一　中川氏 喜雲三　無住一
齋藤氏 滿永百四十四　土山氏 盛成一　後藤氏 重靜三　井狩氏 友靜三
小谷氏 立靜一　西村氏 宗範二　村谷氏 高盛四　河島氏 安勝十
辻氏 忠勝二　同氏 忠直八　永明一　池田氏 政春一
平田氏 全兒一　今井氏 月券一　賀茂僧 露殘一　伏見 道甘一
同所栗田氏 玄康三　同所 拙也一　八幡山 信海二 古本ニハ實藏坊トソエアリ
同所 秀愚一　山崎 宗鑑二　同所柴垣氏 卜琴六
宇治田原木原氏 如快一

大和

長谷寺 恩眞二　郡山 正式一　今井僧 宗玕五　同上 草雪一
同所中澤氏 三省二　同所家長氏 周光一　同所今西氏 正盛九　同上 每雄廿
同所森岡氏 元信十五　同上 顯輿二十　同所上田氏 元成十一　同所井澤氏 義益七
同所細井氏 友和廿五　同上 次重二　同所森氏 信重一　同所 儀正一
高田 不得二　同所宮崎氏 自喩二　同上 正流一　同所小島氏 言千二
同上 心笑二　同所吉井氏 似柳一　同所 賢隆一　牧村僧 受夕一

長樂伊藤氏 夏虫八　喜屋不動院 賴賀一　下田村僧 莖葉一　片岡津川氏 重利一
多武峰 古楯二　同所 乃心二　吉野藤井氏 周可三　色村善行寺 憲立五
當麻 道徹一

河內

錦郡僧 圓乘二　臺井僧 元安一　伏山僧 如雲一　交野僧 蒲劒四
恩知僧 良玄二　臺井岸野氏 唯正一　同所 正安一　國分 行廣十
同所北村氏 一忠一　同所 政吉一　同所 貞氏二　同所 正友一
大ヶ塚 可正三　同所 正慶一　春日田中氏 弘重五　柏原三田氏 淨久三
同上 淨次五　同所小山氏 利房二　同所高島氏 久友一　弓削吉村氏 種好一
津堂前田氏 正香五　小川谷氏 正明一　植松栗山氏 長廣三　同所吉村氏 延之三
八尾木作田氏 正之二　永原宇多氏 幸昌五　松原小野氏 一藪一　同所宣齋 定眞二
同所暮松氏 高壽一　御廚屋 春宵一　安田玖生氏 且保七　足代人見氏 如水三

和泉 堺南庄

正法寺 成安一　岩井氏 發二八　池島氏 成之十二　柏原氏 正勝二
昔井氏 定次四　同氏 重次六　同氏 正長一　同氏 眞芳一

嶋野氏 正成二　多羅尾氏 宗旬二　義辰一　横山大埘氏 賴永一

攝州 堺北庄 并所々

入安六　玉手氏 貞直一　一正三　元清一
林庵 顯成一　坂井氏 成榮一　及之四　安立町坂村氏 利安二
古妻山本氏 榮治二　同上 正重二

大坂 并所々

御菓子所 山城大掾藤原貞因三十五　正賀院 相有九
曹洞派僧 昌三一　黃檗會下 道明二　應典院 泰梅七　蓮光寺 祖澄三
淨照坊 昨夢一　淨久寺 一圓三十九　常元寺 昨非一　稱念寺 昌惠五
江濱 休甫四　是政五　赤池氏 三哲二　松山氏 玖也一
堀山氏 保友六　竹田氏 圓琢二　同氏 見澤一　一長二
中西氏 宗慶一　高瀧氏 以仙一　正見一　三宅氏 獨友一
重信一　和多氏 由貞二　篠世氏 泰英一　島氏 久清五
山口氏 清勝二　富田氏 正信十　森氏 信安十二　上下氏 知度六
安田氏 治住七　長次二　正久一　伊勢村氏 正定三

井上氏宗鋪一　赤伊氏延壽一　松江氏近吉一　友易一
橋本氏政要一　生玉氏清孟一　景則二　富山氏宗方二
鑑氏永貞二　高津氏現之一　珍執三　直好一
井上氏梅曲四　天平氏伯貞一　中島氏正好一　好春一
伊丹氏通寛一　竹島氏是泊一　坂本氏重勝一　栢氏弘延一
一與一　柴田氏友方二　貞因息良因八　花實庵貞富百七
花實庵息長丸四　島田氏之時六　支竜本也八　鑑谷氏舍永十六
大塚氏清之一　同氏清祇一　同氏清永一　中西氏方重三
谷氏自是一　下村氏尙芳二　若林氏良久八　岨山氏高放廿六
武井氏友定一　梅田氏貞成四　小谷氏定章三　信澄一
舟橋氏安親三　十也一　吉田氏恒貞一　川崎氏靜壽一
伊勢村氏次良一　武野氏俊佐七　小野氏松絲二　長行二
立田氏行景二　行順五　高屋氏春房二　野間氏行安六
平野氏行重四十九　吉田氏方寸五　川副氏行貞一　香瀧氏宗精一
齋藤氏滿壽一　住友氏友信三十七　同氏友貞一　宇野氏知義三

中村氏重次一　植田氏行豐九　山村氏清信二　勝方一
廣通四　安井氏重至一　宇和嶋氏尙信一　加納氏智元一
仍可一　河內氏本茂二　永原氏永茂二　同氏休昌二
芦田氏元親一　角田氏路春一　柴田氏玄碩一　海雪一
生白堂行風十九　天滿川崎坊空存二　同所西山氏宗因二　同所平子氏政長廿一
同所橋本氏友淨一　同所小中氏貞知一　同所大町氏安重一　同所義文二
同所小野木氏正房一　伊丹僧梵益六　同所岡田氏武重四　同上酒粕三
同所鹿嶋氏貞林十　同一延俊一　同所養三一　三田重香三

伊賀

松木氏友松一

尾州

萩野氏知秋十　長齋一　川邊氏友久八　都筑氏榮種三

相州

岩手氏宗也一

武州江戸

齋藤氏德元三　高島氏玄札三　半井氏卜養四　未得廿五

旅泊一　鹽川氏管窺二　坂戸氏宗定五　一忍一

近江

龍泉寺來焉一　河龍氏宜爲一

陸奥白川

大田氏田也一

出羽最上

多賀野氏次木二

播州

國符寺政次三　友鷗一　池田氏是誰六
寺田氏正舍二　古本幸田氏岡氏一幸一　三輪氏共鯛一

備前

是端一　殘月一

備中

吉岡氏信元七

安藝

小川氏親之一

長門萩

冷泉氏友知十三　山本氏是急四　柿並氏元房二

紀州

高野山隨心院尊海五

阿波

山田氏正忠一

土佐

深江氏成行一

肥後熊本

永崎氏一見廿七　村井氏惟次四　寺田氏守昌一　荒瀨氏宣就十二
同氏宣堅五　同氏宣應三　同氏宣秀六　同氏金門二

住所不知

一イ一　溝鼬一
讀人不知十三
熒惑星歌一首

右內歌出所古書目錄

曾禰好忠三百六十首一首
後賴家集三　仲實永久百首一
仲正家集三　清輔家集一
西行家集五　慈圓賀茂百首一
同四天王寺百首一　南北百番歌合一
季通久安百首一
法然五十首教化歌四
親鸞伊呂波歌十　義經軍歌一
實朝家集一　信家百首一
公朝家集二　夢想百首四
同法語二　大燈法語一
道元伊呂波歌二　山海百首三
平時賴百首一　夫木抄十六
爲兼卿折句六首二　砂石集二
藻鹽草三　小倉實澄軍歌一
蓮如教化歌二　草根集一
黑谷上人傳一　信玄全集一
多賀豐後家訓書一　信長記一
太閤記五　佃軍歌一
雄長老百首六　由已百首三
入安百首六　古狂歌集一
宗增兩度百首九　同源氏外題歌五
曾我物語一　愚昧記五
照蒙記一　葛藤集一
可笑記一　似世物語一
擧白集一　貞德百首六
資之百首十四　往生要歌十
玄康百首三　吾吟集二十五
旨安杖一　鎌倉順禮記三
東道中名所記一　跡追草紙二
老馬物語一　一休物語六
鼻笛草紙四　貝盡草紙二
吉野獨案內七　浮世物語一

已上六十五部
總歌數千六百七十餘首
作者數三百九十一人

此外熒惑星歌有

此ちうたむほなゝそあまりえらびて十まきとせり名つけて後撰夷曲集といふ梨壺のおほせごと承ることにはあらねど狹きこゝろより題

號取出るにすべなく古今夷曲につづきぬるをさいはひと後撰の二文字寛文十一年五月三日に借用申ところ明白實正也若彼五人の衆入用とならば右後撰の二文字に拾遺後拾遺金葉三部の利をくはへさみに返し侍らんとかゝまほしけれごさえ乏しく夷歌の本さへすましかね侍る身なればたゞ永々借下されん赦されを可蒙也と爾言

寛文十二壬子歳首春吉旦（天明板本ニナシ）

寺町二條下町　西田勝兵衛板行之

此書寛文年中梓行のゝち其板いかがして絶たるにや全本世に少し其後寛延の頃書林田原氏百子堂潘山翁に乞て抜書本を發行せりしかるに此全集藏板の様といふ事を今秋求め得て即再板をうながす原本紙數多く却て捜索に便りよからずとて類題本の如く書つゞめて梓氏に命ずさしも行風師の撰びたまへるも寫したがへかんなあやまりなきにあらざれば清書のついでにこれを校正するのみにてすべて増删する事なし但其假名つかひは世に所謂定家卿のおきてを用ひられしを今はこと〳〵く契沖師の正し給へる古義にあらため侍りしなんいささか其たがひめとやいはん

天明甲辰十一月

夷歌式目錄

一夷歌名目事
一六義事
一六躰事　付折句　折句沓冠　沓冠
一歌の躰の事
一物名よみやうの事
一上下かけあはざる歌の事
一四病事
一腰折歌の事
一落題事
一假名ちがひの歌の事
一名所名物取違歌の事
一本歌にかゝはり正理失歌の事
一くびきれ歌の事
一糟糠詞の事
一ぬすみの事
一不吉歌の事
一凡俗歌を藝能又綺語と誤る事

夷歌名目事

一此歌の名目、いろ〳〵にいひならはせり、舍人親王撰日本書紀には夷曲とあり、聖徳太子傳暦平氏撰には、夷振と下の字を書かへ、えびすぶりとよませたり、古今和歌集の序には、夷歌と書り、今の世には狂歌といふ、いつの程いひ出けるとはさだかにわきまへず侍り、まづ日本書紀に、夷曲をかける意を察するに、夷の字は、ひなとも、えびすとも、たひらかなりとも訓す、曲の字は、つまびらかなりとも、くはしとも、そるとも、まがるとも訓す、中に此名目のこゝろにとりては、えびすは一筋につよきこゝろ本意なれば、訓はとまれかくまれ、文字の意につきては、つよき意、つまびらかなりといふ意歟、又ひなとは、田舍をいへば、東夷、南蠻、西戎、北狄の文字かはるといへども、大旨をとり、畿内の外をさして、ひなといへるなるべし、曲の字、歌といふにかよふにや、古今集に近江ふり、みづぐきぶりなどあり、所詮和歌を都、夷曲を田舍にたとへていへるならん歟、古今に夷歌とかけるも、異なる義あるまじきやうにおもひ侍るはいかゞ、道は本一つなりといへども、人に仁義あり、尊卑あるが如く、歌にも尊卑をたて、正風變風をわかちたるなるべし、異朝に周詩を正しゝ理是にかなふ歟、今狂歌といふ事おしはかるに夷曲の曲の字を、まぐるといふ、訓あるによりて正躰の夷の字をわすれて、曲の字をとり用ひ、古本ニハ狂歌トアリ古本正シ狂歌と誤りたるなるべし、しかるを又枉と狂と、草行にかく時、字形似たれば、世俗又あやまりて、狂歌といひならはせるにや、畢竟物ぐるひになせる、無念の事歟、但し俳諧躰八種の内に、狂言といふことあるによりていへるにや、それは俳諧躰の内の一つの名なれば、變風歌の名目には心ゆかずや侍らん、猶枉歌といはんも誤りなれば、今よりは日本書紀、古今和歌集の言によりて、夷曲又夷歌といひてしかるべからん歟、前集の序にも、古今夷曲集をいふむかしをたてる名なりけらし、と書侍る、猶秀才の達人たゞし給ふべきなり

六義事

一毛詩の序に曰、詩に六義あり、一ニ曰風、二ニ曰賦、三ニ曰比、四ニ曰興、五ニ曰雅、六ニ曰頌、此六義の中に、風雅頌をば三經と名づけ、賦比興をば三律と名づく、風雅頌は、詩

三百篇の部分なり、賦比興は、制作の躰、詩の作りやうなり、先風といふは、民庶の作口號より出來たり、次に、雅は、朝庭の樂、公宴御遊に用ひたる詩なり、是に大雅小雅あり、頌は、宗廟の樂、神明の祭禮にうたふ曲なり、これに三頌あり、此風雅頌、たとへばきぬ布などのたてのごとし、故に三經と名づく、さて賦の躰は直叙とて、思ふ事をすぐにときて、比興をからず、比は比二方於物一とて、たとへをかりていふ躰なり、たとへは花を雪にたとへ、紅葉を錦に比し、恩のあつきを、雨露にならべ、徳の明かなるを日月によそへたるがごとし、興は託二事於物一とて、鳥獸草木に興を發して、その心ざしをのぶるすがたなり、此三義は、たとへば絹布の貫のごとし、ぬきはかならずたてをとほすによりて、三律とは名づけたり、六義の次第、風賦比興雅頌とついでたれど、風の中に賦比興を具せるごとく、下の雅にも、各賦比興あるべきよし、先達これかれしるせり、あらずや味ふべし、周詩の六義かくのごとし、文選の六義これにかはれり、賦を文章の名として二京賦、三都賦、風賦、月賦などいへり、その詞の中に、賦も比も興もあるべきなり、和歌の六義又これに異なり、風はそへうた、賦はかぞへうた、比はなぞらへ歌、興はたとへ歌、雅はたゞことうた、頌はいはひうたといへり、六種ともに制作にとれるなり、證歌は古今集の序に出て、殊に紀氏自注ありとなり、公任卿をはじめて代々先達の抄物世にとゞまれり、その正理をよく〳〵さとして、六義の旨たゞしわきまへずば、歌の趣心得がたかるべし、猶夷歌も六義にはもるまじければ、師說をうけ、其境をもわきまへたまふべき事歟、

六躰事

一長歌とは、三十一文字一首なり、又古今集に、短歌とかける部のことがきにながうたとありて、かへしうた一首あるあり、反歌なきあり、是はいかほど長くいひつゞけたるも、おくの一首にて其理をつづまやかにいふなり、たとへば經の偈同事歟、此躰もながうたなるにや、師說をうくべし、短歌とは、顯輔、清輔、俊頼などの義は、たとひいかほどいひつゞけても、其こころざしを遠くのべ侍るを長歌といふ、短歌とはながくつゞくれども、三句とも、五句とも、とほして、跡をひかず、詞のつゞきを、いひき

りいひきりすれば、みじかき故に、短歌なりと申され侍りけるとかや、久安のころ崇德院の御代に、人人に歌めしけるに、短歌を一首づつくはへて奉れと仰せければ、よみて奉りける、作者俊成卿以下十餘人歟、是にも反歌侍れば、未練のものゝ心得にくき所なり、所詮短歌とは、五七五七とつゞけ、五句め七文字にて果つべきところを、五文字にいひなし、それよりはいかほども心にまかせて作り、結句は七七にてはつと心得べき歟、病とてたゞせる法も見え侍らねど、同じ事どもあまたあるは、よろしからず、よく心得て作るべきなり、かさね詞は、外の事なるべし、おくにそへる三十一文字を、反歌といふ、一首にかぎらず、二首も三首もあり、しかれども、中頃よりは大かた一首なり、其短歌の趣をよめり、詞はかはる事もあり、又反歌なきもあり、旋頭歌とは、六句によめるなり、混本歌とは四句にて、下の七文字一句なし、誹諧歌八雲御抄に曰、公任卿なども不レ知レ之、通俊何とて心得たるにかありけん、入ニ於後拾遺ニ、經信卿の曰、入ニ誹諧歌ニにて、每事のわろさも被レ知云々、誹諧躰八種ありと歟、併或師より傳へしは、誹は市尾切誹謗也、諧は胡皆切和也、合也調也、偶也、非レ道教レ道、非ニ正道ニ進ニ正道ニといふにかなふとなれば、歌のしたて直にあらず、あらぬ方に心をつけ、理に叶ふやうによめりとなり、史記に滑稽傳といふ是に似たりとは、いひ傳へたれど、さだかにわきまへがたき事にや、中頃より多くよめりとも見えす猶古今集の歌を見て思惟し、師說をうくべき事歟、廻文歌とは、上下よりよみて、同じさなへなるをいふ前集此集にも書くはへ侍り、是を見るべし、折句とは、物の名を一文字づゝ、句のかみにすゑてよむをいふなり、業平朝臣かきつばたよめるを見てこゝろうべし折句の沓冠とは、物の名にもあれ、詞にもあれ、五句の上下にすゑてよめるをいへり、たとへば此茶屋類無このちややたぐひなしといふ文字を句ごとの上下にすゑて

ことさらの
千代のはしめや
やまとうた
くり返しうたひ
猶あふくらし

是は寬文法皇御製なりとぞ、此外いにしへの作、いろ〳〵あれば、見ならふべし、又沓冠といふは、始を

はりに、その文字を定ておくなり、文字は一も二も三も、心にまかせてよむなり、右の内、混本歌は、中頃の歌仙もこのみたまはざるにや、歌あまたも見えず侍り、たゞ三十一文字の躰よくよみかなへんにはしかじとこそ、思ひたまふれ、右のおもむき、代々の抄物にありふるゝ事なれば、いさゝかも心ある人にとりあげたまへとにはあらず、未練の童蒙のためにと書付侍るなり

歌の體の事

一歌の躰よく〳〵わきまへ、一首の首尾其躰にかなふやうによみなすべき事なり、躰といふは、幽玄體、長高體、有心體、麗體、事可然體、面白體、濃體、見樣體、有一節體、拉鬼體、已上十體なり、此外に猶くはしくわかち、行雲、廻雪、高山、遠白、澄海、物哀、不明、至極、理世、撫民、存直、花麗、松、竹、秀逸、拔群、寫古、一興、景曲、強力などいひて、既に三十體におよぶといへども、そこ〳〵に屬しぬれば、大旨十體としるべし、首尾ととのはざる歌といふは、たとへば上幽玄體につゞけ、下強力體にいひながし、或は始長高體をよみ出、末寫古體などに取まじへよむをいへり、餘はなぞらへてしるべし、前にもいへるごとく、夷歌とても此體をもるべきにあらず、猶誹諧體も是にそふべければ、よくしるといふは、輙き事にあらず、作者よりより修行のうへ、代々の先達の書しるせる抄物をみて、和歌の證歌を思惟し、夷歌をもわきまふべし

物名よみやうの事

一物の名よむといふは、かくし題の事なり

五月雨をよめる　和泉式部

よの程にかりそめ人や來りけん
淀のみこものけさ亂れたる

是にて心得べし、夷歌にも、前集此集にくはへしを見るべし、又よみそこなへるといふは、こんにやくをよめる

膳の上で醉の蒟蒻のと小言いふ
兒とて親かしかりぬる哉

此歌一首はあるまじきにて侍らねど、物毎に何かとこゞとをいふを、醉のこんにやくのといふ事かなと、世話にいふを、外の事におもひてよめれど、題の蒟蒻の字其まゝに用ひたれば、かくし題のよみやうにあらず、又或人東海道戸塚といふ所を題にて

此度はかくれ笠きて通るなり

とゞかぬものとおもひたまふな
古き歌にかゝるもあれど、とつか、とづかぬ、清濁ちがへり、させる科にはあらずといへども、難なからんにはしかじ、餘はなぞらへてしるべし

上下かけあはざる歌の事

一或夷歌百首の中、年内立春といふ題にて

年の内の春てふきけば老が身の
　貌のしはすものびくとなる

此歌、上は和歌の詞にて、下貌のしはすものびくとなるといへるは、戯言なれば、上下かけあはざるなり、夷歌よむには戯言正體なれば、かくのごとく上に戯言なきは、上よわしといふべし、前集の序にいへる、盲ひ聾ひのたぐひなり、又時雨の題にて

朽葉にてそむる時雨のふり袖は
　いまひとしほの色まさりけり

これは下に戯言なし、腰曲足たゝずのたぐひなり、餘は准へてしるべし

病の事 同心病、遊風病、中飽、後悔病

一同心病

七夕のへいふうといふことわざや
　星に手向の屏風なるらむ

此歌、咸陽宮にたてられし、七尺の屏風を七夕ともたせて、下に星に手向の屏風といひたてたれどへいふうといひても屏風なれば、同じこゝろのやまひ歟、又

口をしや餅の名にある萩の花
　それさへあるにつくるみそはぎ

此歌餅とみそとを緣につゞけたりとは見え侍れど、萩の花餅にみそつけんもこゝろゆかず、此餅の名も小豆のつきて、萩の花のいろに似たれば、さいふなるべし、餅といひても萩本名なり、下鼠尾草も萩なれば、同じ心のがれがたくや、餘はなぞらへてしるべし

二遊風病　此病和歌式にいさゝか違へりたゞ隔レ句たる同字と心得べし

ふくといふ菖蒲は軒に名のみして
　ふみやぶられしけさのやねふき

此歌、上の葺と、やねふきのふきと同字なり、病なるべし又

百の物一つおもはゞ我にかく
　もゝ夜もおなじ丸ねさせめや

此歌、上百と、下もゝと、音かはりても病のがれがたし、餘はなぞらへてしるべし

三中飽病　和歌式には、三十五六字にあまりて、旋頭歌にもあらざるをいへると出たり、併よくいひかなへたるはゆるすにや、さる歌代々の撰集の内にこれかれ見ゆ、

夷歌もよくいひくだしたらんには、たとひ一句に、一文字づゝあまりたりとも、夷歌なれば猶くるしかるまじき歟、所詮口にとゞこほり、となへにくきを、きらふとしるべし、或夷歌に

千早振神代もきかず立田合羽
傘とおなじく水はぢかんとは

此歌本歌をあらぬかたに取のけ、一節なきにはあらねど、文字無理にあまりたれば病なりと申べき歟、又

神軍勝手の宮の鉾のさや
よしの漆の花ぬりにして

是又一文字あまるといへども、鉾のさやはとあしくあまりたれば難のがれがたし、又文字あまりてくるしからぬたぐひ

西へちろり東へちろり曉の
明星やたゞわか身なるらん

養生のゆいりの心しづかなれや
とつかはとしてあがりたまひそ

此二首自然と文字あまらでかなはざる歌のくだりなり、いさゝか科ならず、未練の人は、此旨味ひしるべき事歟、猶兩首ともこゝがき此集に著し侍るなり

四後悔病　貴人の御まへ、其外にても、はれの座にて題さぐりつらねんに、たとひ夷歌にてもあれ、懷紙にても短尺にても書付、文臺におきて後、こゝのつゞきかくせばや、かしこのてにをは、さ直してんと思ひもし、いひ出もするをいふなり、是は座の不義といひまして歌は神明の道なれば、より〳〵に修行をつとめ、物每の理をわきまへ、其席にても書付ざるさきに、いくかへしも心にずし、首尾とゝのひぬとおもひきはめて後、しとやかに歌出すべきなり、かゝれば失なきものなり、たとひよみそんじたりとも、直してんとおもひいふは、輪廻の業、愚痴の至りなり、失すなはち師となれば、後のいましめとすべし、猶古來和歌式に出し病、喜撰式の、四病、八病、濱成式の七病、其外代々の歌合、家々の抄にいましめたる病さま〳〵なりといへども、夷歌には、前にいへる四病を除くべき歟

腰折歌の事

一歌の五句は、木火土金水、人の形にかたどる、さるによて始の五文字を頭といひ、胸腰裾といふなれば、人には意心識ありといへども、天のあたふる性は一つなり、そのごとく歌の五句は姿にて、一物の心を正しくいひのぶるなるべし、しかるを或夷歌に

大礫打出の濱に印地して
菖蒲がたなでよするさゞなみ

雨ふれば三五夜中のしんのやみ
二千里わたるくら雁の聲

この二首さながら連歌二句いひならべたるなり 連歌體は、上下に心二つあり、前集の序にいへる、他をそこなひ、身を亡ふ、佞人にひとしかるべし、腰をれの沙汰、未練の人、とり〴〵に申侍れど、所詮歌よむとおもひて、連歌二句いひ出ぬる、右の二首の歌のたぐひと心得べき歟、かへす〴〵嫌ふ事に侍り、但し始より連歌ぞとおもひてするは、各別の事なるべし、猶こしをれ歌といふにふかきならひ侍りとなり、師説をうくべし

落題事

一或夷歌若菜の題にて
人毎にいふてつめられたゝかるゝ
これも若菜が口ゆゑぞかし

此歌題のおもむきいさゝかも見え侍らず、若菜といふ女のありつるが、こなたかなたと告口して人々にたゝかれつめらるゝとの歌の情にこそきこえ侍れ、又霰の題にて
あられ酒のむ盃の數つもり
更に座敷にたまられもせず

此歌も又畢竟酒に醉て座にたまられぬといひはてたる歌なり、題の意趣いさゝかもみえず、あられ酒とつゞけたればとて、霰にはなりがたかるべし歌つらねん人は、かかる事よく〳〵思惟あるべき歟

假名ちがひの事

一或夷歌に歘冬の題にて
山吹の花がまことのかねならば
いかにぬすみに井手の里人

ぬすみに出るはいづるなり、井手の里はかく書なれば、假名相違なり、又釋敎のうたに
我しなば弘誓の舟にのらじたゞ
彌陀の六字をかちであゆまん

彌陀の六字はしなり、地はちなれば是又相違なり、餘はなぞらへてしるべし

名所名物取違歌の事

一或夷歌に嶋月の題にて
月にひく赤石の浦の網にもれて
島かくれゆく鮒をしぞおもふ

このうた柿本の尊詠嶋かくれゆくをおもへりと見え侍れど、彼浦に名たゝる、あかめ鮹など其外にも無量の鱗あるをさしおき、あるまじき鮒とり出らるゝ事、無念なるに、猶一首も鮒を詮によみたて、題の月をわきになせるかた〴〵非なるべし、又歸雁の題にて
尻くらへ觀音とてやかへるらむ

清水山を過るかりかね

此尻くらへ觀音といふ事は、兎前足の短かければ、下り坂には、あやまちなきやうにと、觀音を賴みたてまつり、上り坂の時は、わがえてなるにまかせ、さいひてはしるよし、古來よりの世話なり、雁が身になりてさいふべき事、本說世話ともにきゝなれず、鳥獸のみならず、情なき草木にも、あらぬ事をおもはせいはせするは、作者の規模ながら、理にかなはぬをおしていふは魔道なるべし、かゝればいにしへは歌をめして、人のさかしおろかなる哉御覽じけるなるべし、猶清水山には、櫻、紙子、燒餅などこそ所にそなはりたる名物ならめ、餘はなぞらへてしるべし

本歌にかゝはり正理失ふ歌の事

一或百首夷歌に述懷題

秋の田のかりほのいをは食ねども
我衣手のなまぐさきかな

天智天皇の御製をこれりと見えたり、御製と申、秀逸比類なきを、かく正體なき物にしなせる事、もたいなしと申もさらなり魚はくはねども衣手のなまぐさきとは、いろひたるにや、意趣不正こそ、かりほの魚庵をいひかへたるをよしさなるらめど、秋の田のかりほの魚とつゞくこと葉、からやまとの歌にきゝなれず、夷歌とても、本文俗語ともに古來よりいひなれぬ詞は非にてこそ侍らめ、又戀の題にて或夷歌

盃のおながれの座へいづみ川
わきてうれしき君の付ざし

彼みかのはらわきてながるゝ泉川の歌を思へりと見えたり、座へいづと秀句にいひ、いづみ川わきてと緣にすがりてよめりときこえ侍り、倂上一人の仰せとても、盃の座へ泉川、出べきやうなし、猶御ながれといふことは、大內此殿、彼殿にある事なれば、付ざしなどいふこと、いと似合ず侍り、君といへるもいづれをさして申されたるにやおほけなき事なり、まことを失ふとは、かゝるたぐひをいふべきにこそ、愚痴の至れるなり、所詮本歌をとらんには、代々の先達の書給ひし、和歌の抄物を味ふべし、本歌とりおほせたる夷歌、前集此集にもあまたくはへ侍る、無下の未練の人は、是を見ならふべし

くびきれうたの事

一題をさぐりて歌をよむには、始の五文字にて題をあらはさず、何をいふやらんときこゆるやうにい

ひて次の七文字にて題をしらするやうの詞をつゞけ、下の五文字又は下句の上の七文字にて題を顯はし、結句をいひながすなり、たとへば郭公のうたに

五月やみくらはし山のほとゝぎす
　おぼつかなくも啼きわたるかな

是いにしへより手本にいへる歌なり五月やみといひてくらはし山とのある山なれば、時鳥といふらんうけつゞけり、くらはし山は、時鳥としらせて、時鳥とあらはし、上の五月闇にたよりて、おぼつかなくも鳴わたるとよめり、是題をさぐりてよむ上品の體なりとかや、猶邊序題曲流などいふ習ひあり、師説をうくべし、併題の歌とて、此趣一筋にもかぎるべからず、始の五文字に題いひ出る歌もあるべし、夷歌とても此旨わきまへずばあるべからず、未練の心におしてつゞくれば、くびきれ歌とて、不吉の事などいひ出るものなり、たとへば

或夷歌に、火達いまだあけざりし夜いとさむかりければよめる

ふたぎつゝ獨ぬる夜のあくる間は
　いかにひさしきこたつとかしる

此歌、ふたぎつゝといひ出て、次の句、獨ぬるといへる、上の五文字へいさゝかよりつかぬ、詞にこそ、明る間はいかに久しきといふまでも、何をふたぎたるともきこえず、戸をふたぎしにや、窓をふたぎしにや、目、耳、口をふたぎしにや、たゞしからず、末の句にてこそ、漸くこたつとしられ侍れ、かゝる體をくびきれ歌とて、大に嫌ひ侍る事なるべし、又旅の戀の題に

我もせじ留主の間をたしなめと
　いひて別し妻ぞ戀しき

この始の五文字我もせじとは何事にか、四句目までも題の心いさゝかきこえず、我もせじとは、いさかひにや、又は寳引にや、人の上にせじと制する事多かれば、不㆓分明㆒、結句のつまぞ戀しきといふにて、俗に枕ならぶるをさいへば、よそ心の事にやとおしはかられ侍り、是又前の歌のたぐひなり、作者よく〳〵思惟あるべし、かゝる歌よみ出ぬれば神明の御慮に背き奉るとぞ

糟糠詞の事

一或夷歌に鹿の題にて

ふく音をうらあふのきてきく鹿や
　いてとらるらん咽のふえたけ

此歌のこゝろは、鹿とらんとて、狩人の鹿笛といふ物をふき、かれをちかよせ、射とる趣をよめり、かれがこふる妻の音のごとくふきなせ

ば打あふのきこて、きかん事尤治定なるべし、さるところを、咽の吭射こられんとよめり、ふく笛にもかよひ、いとよろしくきこえ侍るを、竹といふ文字ぞ、糟粕に侍る、かれが咽に竹あるべき理なし、文字たらざれば、すがりて笛竹とよめる、無念なるべし、其上鹿笛は竹にてつくる物にあらず、美女のはきならしたる、あしだの木をきざみ、鹿の腹ごもりの皮、又鹿の耳の内の皮など、取漆作る物なりといへば、事もたがひたるにや、所詮歌の一首は、文字すくなき物なれば、心をこめ、三十一文字の外に、餘情あるやうによみたつるこそ、作者の規摸にて侍れ、わづかの文字の中に無用の字ある事、米のぬか、酒のかすにたとへて、いにしへより嫌ひ來る事歟、又或夷歌に

浮舟のゆくへをとへば手習の
　すりからしたる小野のすみがま

此歌もかまといふ文字ぞ、後糟粕にて侍らん、浮舟の君何がしの僧都の母のもとにこもりゐ給ひ、明暮の手習に、墨すりからし給はん事、さもこそおぼえ侍り、併炭と墨のかはり所につき、いさゝかおもはくも侍れど、夷歌なれば、小野といふにすがりて、炭を墨ともいひなすべき事ながら、すみがまとつゞきたるにて、無下の事になり侍るなるべし、歌よまん人は、かゝる境をより〳〵思惟すべき事なり

ぬすみの事

一本歌とりて歌よむはつねの事なり、詠歌大概に、四季の歌をもて、戀雑をつらね、戀雑をもて、四季の歌つらねば、難なからんと書たまへるは、未練の人への教なれば、いさゝか修行せしは同事にて、同事をよめるたぐひ多し、其趣詞をこれば、心をかへ、或は外の事をそへよめるなり、猶井蛙抄、歌林良材集にくはしければ、是を味ひしるべし、同じ詞にて、おなじ心をあしくよみなせば、ぬすみになる物なりこそ、たとへば、或人東海道にてのえびすうたに

年よりてのぼりかねたる箱根山
　俳諧道は達者なれども

此作者、よはひかたぶきたる俳諧師にこそあるらめ、一首はあきらかにきこえ侍り、されどもむかし物語に、櫻井氏基佐と宗祇法師、いかなる故にか中あしかりければ、宗祇法師、新筑波集えらへるに、基佐が發句付句、世の人の口にあるも、またなりけれども、集に一句もくはへざれば基佐落書に

足なくて登りかねたるつくば山
　和歌の道には達者なれども
と書付て、彼門にたてけりとにや、世にいひつたへ、都鄙竹馬にむちうつ身までもしらざるはなし、其あしなくてを、年よりてになし、筑波山を箱根山になし、和歌の道にはを、俳諧道といひかへたればとて、新き心いさゝかもなし、畢竟基佐が作を二度いへるにこそ　猶案じかゝる事よめるは無念なるべし、たとひ歌いひおほすとても、かかるよからぬ本文は取用ひざる、此道のならひなり

不吉歌の事

一或夷歌戀百首の中に
　百數やふるき衾をはらふにも
　　猶あまりあるほこりとなみだ
是は順徳院御製、猶あまりあるむかしなりけりとあそばされし歌の姿をおもへりと見えたり、本歌は末の世おとろへぬる王道の御述懷のおもむき、餘情かぎりなき御歌と申傳へ侍る、さて此夷歌は、先戀とはきこえがたくさながら哀傷の心詞なり、いづれぞ雲がくれありて後、御なげきのあまりの御製のやうにこそ、町童の身として、かくおほけなき意趣、たくみてはいひ出まじけれど、道の心わきまへず、口に出るに任せてよむより出來る失なり、法華經に、呪、咀、諸毒藥、所レ欲レ害レ身者、念二彼觀音力一、還著二於本人一と、されば、此作者しらずよみによみ侍るとも、上をのろひたてまつる詞より、その科をおのが身にうけ、命もほろび、凶事子孫につたふべき事明かなるが、ふるき衾をはらふにも、猶あまりあるほこりとなみだとよめる事しかなり、後三條院御位おりさせたまひてのち、住吉に御幸ありしとき
　住吉の神もあはれとおもふらん
　　むなしき舟をさしてきたれば
とよませたまふ、おりゐの帝を虚舟にたとへたる本説あればなるべし、御歌がらもよろしく、ことの情そなはりたれど、時の人むなしきふねをさしてきたればといふ御製こそ、いまいましけれと、申あひけるに、いく程なく、崩御ありしとなり、又東方朔が語に、用レ之則爲レ虎、不レ用レ之則爲レ鼠とあるを思ひて、關東將軍宗尊親王のうたに
　虎とのみ用ひられしはむかしにて
　　いまはねずみのあなう世の中
と、あそばされしを、爲家卿の判に、風躰あしく見え侍れば、御進退

もあやうくこそとかゝれけるに、果してあしかりしとかや、かゝれば身の上はさらなり、世の爲、人のためにもあしかるべくいまし〳〵しかるべき事を、かへす〴〵よむまじき事なりと、いにしへよりいひつたへ侍り、よく〳〵思惟すべき事歟

凡俗歌を藝能又綺語と誤る事

一歌に正風變風あり、夷歌は天津神の御代、下照姫より始れり、志の之ところを、ありのまゝにいひのべ、文字の數も定らざりしなり、其後二柱の神詠あり、地神の代となりて、すさのをのみこと、三十文字あまり一文字によみたまふより、和歌のよき規に定り侍るなるべし、前集の序にもいへるごとく、人の代となりても聖徳太子夷曲のさまゝすて給はざるも、心あるべき歟歌の五句即、木火土金水也句々情口傳、一首の中に、五行六義ありといへども、大旨司る心あるべし、和歌は仁を本とすなれば、君子の行跡の如くなるべし、歌の情詞、温良恭儉讓備はり、恩澤八隅の外まで至り、万民なつくごとく、何の才覺も見えず、打ぎゝやすらかに見所あり、餘情かぎりなく、しかも宮商角徵羽にかなふ、花實相對せし和歌といへり、猶公任卿九品の論義を見てさとすべし、又夷歌は五行の數は備る中に、義を司ると心得べき歟、名目の所にも書しごとく夷はつよきこゝろ本意なれば、かりにも媚諂ふ事なく、實を守り、道理至りぬれば、死をかろんずるに二念なき、是夷の業なり、そのごとく姿の凡卑、詞のこはきも不レ制、あながち花にかゝはらず、呂律を宗ともせず、是非たんてきに、直よかにいひたつるは夷歌なり、是變風なるべき歟、夷歌とて姿詞のやさしきを捨よとにはあらず、猶夷歌の中に、正風體なきにしも有まじけれど、大概をあげていふなり、毛詩にも、周南召南の二國を正風とし、自レ邶より下つかたの國國の出作を變風といふ、是禮樂にかなふと、かなはざるとの故なるべし、我神國は、儒釋道不通のいにしへ、天神地神人代まで、此道をもて國を治め、民を撫たまひしころほひは、四の海波靜かに、吹風枝をならさず世俗わかたず、民淳かりしとなり、今末代とても、諸神領じたまふ國なれば、此二歌をまねび、天地ひらけしより、三光明に、四時たがはず、千草万木、

花咲實のる理、君臣父子夫婦兄弟朋友の交りをわきまへんがため、題をさぐり、物ごとの是非をあかしゆく講、年月かさならば、神明の御慮をもさぐりしるべし、かゝる妙なる道を、愚かなるは藝能とおもひ、綺語などゝ誤るかたおほかりとかや、綺語は佛家に禁る、十惡の一ツなり、ごをいろごるとよめれば、僧俗によらず、名聞利欲のために媚諂ひ、己が心にうけぬ事をも應じ、けいはくつくるをいふべし、歌を綺語と誤るは、中々いふにたらず、歌は是神道なり、天神地神の尊詠あり、代々の帝も此道を受得おはしましてこそ、御即位も侍れ、本朝佛法の棟梁、聖德太子は、中臣加多能子大連公より、唯一の道傳授まし〳〵、たえず歌つらね給へり、行基菩薩、傳教弘法の二大

師、其外の高僧、いづれが神道によらず、歌よまざるありし、佛家にても下愚の僧は、格別なり、書經に、五子の歌あり、詩經に、思無邪とあるを、仲尼の歎美したまふをも辨へず、歌を綺語と誤るは、凡卑の白衣黑衣かいふさたなるべし、我神國開闢以來、億劫万々歳の後、釋迦化ニ彼土一、況や佛法此國にわたる事甚だ末代なり、我人王三十代、欽明聖代に、佛法初而來朝すれど、世以不ニ信用一、第三十四代、推古天皇ノ御宇ニ上宮太子密ニ奏言、吾日本ハ生ニ種子一、震旦ハ現ニ枝葉一、天竺開ク花實一、故佛敎爲ニ万法之花實一、儒敎爲ニ万法之枝葉一、神道爲ニ万法之根本一、彼二敎皆是神道之分化也、以ニ枝葉花實一顯ニ其根源一、花落歸レ根故、今此佛法東漸、吾國爲レ明ニ三國之根本一也と、叡感不レ斜これより佛法

ひろまれり、儒敎、老、莊、列、百家ノ書皆神道に屬すなれば、上天より、山河、大地、森羅、万像、彼他國の經論書章の文句までも、歌枕とし、女文字四十あまり七もじもてつらね、今日より未來永劫までの正理をえん事、誠に神明の加護ならずや、道の奧義口决を受るまでこそなくとも、歌まなびざらんはいかゝぞや、大かた神道はおもひもよらず、他國の道によるといへども修行半にもみたず、白衣黑衣によらず、假の肉身にひかれ、名聞利欲を捨えぬ心から、苦界即佛界、生死即涅槃などいふ、經の要文、直指人身見性成佛などいへる、祖師の語を口に覺えしを是とし、大悟しつ、此身すなはち佛なりと、ことに出るもあり、又淨土專念の宗には、當得往生といふは、無知の凡

夫、多くの罪を作り、地獄へおつべきを、一度彌陀を信ずれば衆罪消滅して極樂國に往生すなりといひ、或は即得往生とは、衆生往生せずは、彌陀も正覺をとらじとの大願あり、既十劫已前に成佛したまふ故、一念に助けたまへと賴奉れば五逆十惡の罪人も捨給はず、其身は娑婆にありながら光明の内に救ひとりたまひ、早往生すなれば、只今唱ふる念佛は、其佛恩を報ずといへり、さもこそあるらめ、併或智識の申されしは無量壽經に、唯除五逆誹謗正法とあり、西方は西方にかぎらず、清淨國土を云なり、念佛は清淨心なり、阿彌陀は清淨身なり、心身上、本より不二なれば、念、阿彌陀、極樂國土なり、是をさとるを往生となづく、心は虛空のごとく形なきものなれば、心の悟りを、無量壽覺ともいふ、迷へるものは十万億土、悟れるものは去此不遠也、といへり、あらずや、韋提希夫人の外、月氏震旦に、念佛の行者多かれど、事ながゝればさしおきぬ我朝には聖德太子より西方の教へあり、御父用明天皇、御母后間人穴穗部皇女ともに悟をひらき給ふ、次に妹子大臣、高麗惠慈法師、往生の本意とげられしとなり、明眼論曰理講說一乘妙典事談述西方教文と見えたり、今の代までも太子の御血脈は西方の大事なりと受得し人申されき、然れども中頃より、念佛一敎に、法然上人を祖とす、元享釋書曰源空長承二年四月七日生、年十五從延曆寺功德院皇圓剃落受戒、三期之間通受台敎、又從黑谷睿空稟密乘及大乘律、風大藏經、律、論、他宗章疏、靡不撿閱、晩見源信往生要集、乃棄所業、倡淨土專念之宗、下畧かゝれば源空上人は、あまねく學に通じ、五智の修行圓滿して、しかも下至の一念を取給ふと見えたり、法に二法なければ、此心は諸宗通達なるべき歟、さるを祖師の厚き修行はしたはず、たゞ口に唱ふる念佛のみにて、外に法なきやうにおもひ、今日の行ひ非なれば敎化する黑衣だに、科におこなはれ、或はおひうなるゝたぐひ、まのあたりにおほかり、それにも猶こえて利欲偏執を事とする身の念佛は、妄語綺語惡口兩舌いふには似まじけれど、往生とげんはいかゞぞおぼゆ、或論文曰諸佛念衆生衆生不念佛とあり、事理わきまへず、修心あしくば、佛とてもいかゞはせん、聖德太子、十種の不淨

を論じたまふ随一にも、不レ慣ニ上品清浄佛性律儀一、其身在ニ生死泥中一、故身不浄也とあり、念佛は清浄心なれば、蓮の泥に生じ、泥にそまざるごとき、身上の行ひこそ、娑婆即蓮華國とも、安樂國土ともいはめ、普く佛法には、眼耳鼻舌身意の六を、六賊とも、六天の魔王とも思ひとり、かれをしたがふるに、戒定惠のみつ、懈らず守ると歟、さる行ひ一つとしてみたざる身には、法報應の佛どもに万里を隔てたまふべし、彼佛道に其修行のほどほどをしらんがため、四十二位、或は五十二位をたつ、其中に、十地の前、四果の阿羅漢に至ぬれば、煩惱つきぬるのみならず、六通自在なりと歟、されば事として理にとゞこほる所なし、況や佛菩薩に於いてをや、彼大悟せり、往生せり、とおもふしれもの、此國に生れ、此國の飯を費しながら、歌いひしらねば、まして歌仙の高作のこゝろをもきゝえず、仁義の法にさへうときさる愚痴究りたる佛やはあるべき、但愚かなる心には、佛になるを死して後の事なり、今世(こんせ)と來世とは別なり、罪作りても、佛の名號となふれば即時消滅すと思ひあやまりて、今日の上に非をつくすにや、又は魔魁が黨なる心から、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂といふ文句、悪く心得、常見斷見に陷りてにや、聖德太子は専ら刹那生滅をぞをしへ給ふ刹那とは彈指六十五にわりその一の間をいふその間も理に違ふは、佛道ならずとなり、所詮三世は一なり、とこそ、佛說にも侍れ、抑六通などいふ事は假の方便說なりと、おして疑ふは、人の情にあらず、狐の性にこそ、甚非なるべし、神明の妙、佛菩薩はさらなり、此國にも、聖德太子弘法大師の通、不レ可ニ勝斗一、歌仙にも、住吉の御神現形したまひ、業平に贈答の神詠ありしたぐひ多し、能因法師、範國朝臣にぐして、伊豫の國にまかりしに、正月より四月までいさゝか雨ふらざりければ、苗代もえせで、雨いのるに名たゝる高僧博士、內外の行ひ日をかさぬるにも、靈驗なかりしを、能因歌よみて、一宮に奉りいのりけるに、神感ありて、大雨三日三夜降り、一國の大難遁れし、是通力ならずや、歌は世に人のしれる事なれば、書のするまでなし、近くは大納言光廣卿、勅使にて東へ赴きたまふに伊豆國三島宿にて大雨甚しく、往還の數万人、彼宿に滯いるゝに所なし、いそぎの勅使なりけれ

ば、午の一ッばかりなるに、けふ箱根山こえずはとて、即當に詠歌あり、明神へ奉りたまふ、社家へあなひありて、隨身袍衣のうへに簑笠きて、寶前に至り、ひざまづき、三返ずし、短尺內陣に納るより、御空ひかりや、はらぎ、即日箱根をこえ給ふ、御供にしたがひし隨身下部存命るあり、其里へ參りあひてしれるものも世に多かるべし、

其歌

祈るより水せきとめよ天川
　これぞ三島の神のめぐみに

この卿の秀歌世の人の口にあるあまたなり、此歌にとりて風體上品の秀逸といふはあるまじけれど、天地の神の感應は、淸淨心にあり、歌は枝葉なれば、時のよろしきにしたがふとしるべし、一に通して萬事をはる、無心にして得て鬼神服すといへる理りを、よく〳〵おもひとるべし、聖廟觀發品の尊詠にも

心だにまことの道にかなひなば
　いのらずとても神やまもらん

此歌古今淸淨心の通要なるべき歟、歌は神明の境に至るべき道なれば、詞に拘り、情を脇になしてはよしなし、南華外篇にも支離疏があくまで見にくき姿も、天年終れば賢なりとす、貴妃がめで愛せし、祿山中國の美男なりといへども、所行惡逆なれば、君子とも大人とも、今の世までもいはず、たゞ放埓無慚の罪人とこそいふなれ、或道心者の申されしは、唯識論にも、我身常に主宰より、六煩惱、二十に隨煩惱、慢、過慢 我慢、增上慢、卑慢、邪慢 七慢までおこるとなり、もとも六波羅密の行ひ、一ッかけては佛の內證に疎かるべし、世には俊秀なるざえのみならねば不立文字、敎外別傳と斗にても、得がたからんとにや、天龍夢想國師、永平道元和尚、歌をかりて、我法の理を百首、或は數十首につらね、事相のみならずとにや、法然上人、親鸞上人も、念佛の理體を數十首の內によめり、此集にもたれかれかき載侍り、猶みじかき智惠に高慢おこしおのれ大悟をゆるし、よしなき、五逆十惡をとりまじへ、いぶかしき往生ねがはんよりは、此國にそなはりたる歌まねび、本生れつきたる淸淨心にかへらんにはしかじ、我天照皇太神勅曰、六根淸淨なる時は、天地の魂と同體にして、願として無レ不ニ成就一と、又神書頌曰、入ニ元レ元元初一任ニ本レ本本心一、と、此身神の外にあらず、九万八千

五百七十二の大祖神五體に在して、如レ影隨レ形守りたまふをもしらず、我執をたつるより、喜怒哀樂の過不及をもて禍おこし、身をうしなひ、或は心君をいたましむる故、それ〳〵より病出來て、忽天命にそむく身心清淨になさんがため、歌の道に心をよすれば、二六時中に他念なく惡妄相心君によりつかず、おのづから清淨心のよすがとならずや、されば梅を植れば梅二葉に生出で、芥子をまけば芥子萠出づ、神國に生れたらん身は、歌の修行みちてこそ、神明の境をもわきまへめ、儒經老莊の要文いひきかせても、その道修行せぬものは、かつてきゝしらず、歌は一文不通の賤までも、さくに心さゞむるは、本此國の道なればなり、胡馬北風に嘶ふがごとし、佛教の釋物錄物にもきゝしりがたき段に、歌をそへて理をあかせば、聞得るにて思ふべし、只今希有の智識他國より來朝せり、是にあひて身の一大事因緣をとはんとおもふにも、言語通ぜざればかひなし、人ありて通ずといへども、いかにぞ我問答するやうならん、寄レ木求レ魚に似たり、抑此國に生れて、歌の道を餘所になすは、家の山に入り、水鳥の陸にまごふたぐひならずや、かくいへばとて、釋氏の道あらずといふにはあらず、根元不一不異の正理わきまへんに、此等の人は歌にて得る事迅かなるべければ、五句六義を事とし、元々を悟り得て、心を六合の外にあそばしめば、通力かぎりなかるべしといふなりしかるを我は歌よみえずといひ、よしなき事に心なやまし、學びてもいかゞといふ、是自暴自棄とて、三國の道に惡む氣質なるべし、學びて、だに得がたきを、自らほろぼしすつる科、おのれのみならず外の心にも移りゆけば、天下の道滅亡の罪人なるべきなり、敷島に生て敷島の道しらぬは常をうしなふなれば仁義にも背き、道を崇るに似て、佛に背く事歷然たり、猶歌を學び又は連歌を事とし、たはふれ句を近き世より俳諧と名付てもて遊ぶ輩とても、歌道の外ならねば、專六根清淨に守べき事歟前にいへる利欲偏執七慢の內はいふにたらず、いさゝか名譽求る心ありとも、天照皇太神をはじめ奉り、住吉玉津島、諸の御神の御にくまれを厚く深く蒙り、即時波旬が徒ならん事うたがひなかるべし、不淨心のすゞしむるは御神樂だに受たまは

ず、万里をへだて給ひ、舞殿たちまち魔界となれりとかや、神は正直のかうべにやどり給ひ、光を和げ塵に同じうし給ふ、御慮を常におもひとりて愼むべき事なり、併神明通達の歌仙は各別なるべし、歌とて修すべきなし、棄べきなし、天地、風雨、山野海川有情、非情、万物一體と觀じ、しかも是非邪正の境に心を任せず、自然にしたがふとしるべし、老聃も道は法自然と説き易は變易とてもはら時を行ふとかや、和歌は五行を體とし、詞を相とし、事に應ずるを用とし、情に（寄カ）音を徳とすなれば宇宙の間にありとある物、歌にもるゝはなし、歌はうたふとよめれば、人の言語勿論歌なり、併清淨心にもとづかんための道なれば、實をうしなひ、口にまかせ多くよめるを歌人とはいふ

まじ、宇治山の喜撰たゞ一首にて歌仙の名高き事、樹下石上、三衣一鉢にて、心朗かなれば、神道の外ならざる理りを思ひ得て、六根清淨ならんには、たとひ三十一文字よくせずとも、淨人なるべし、修行きびはなるは、忌穢を正し、五辛牛鹿やうの物をたち、日をかぞへ、非嫌正嫌犯さず、沐浴し、淨衣着して神社にむかふを、清淨なりと思へるもあたらず、裸形放埒なるには似ざれど、心清淨ならぬは、蜋蜣蟲を錦に包みたらんが如し、常に内清淨にして猶外の清淨正しかるべき事歟、任本本心といふを、よく／＼わきまへしるべき事なり、弘法大師も、宗源神道傳授ありて、和歌夷歌ともにつらねたまふのみならず、唯一の宗と、我密宗とならべたて給ふ、是を習合神道と

云、やつがれも其趣不思儀に受傳ふるうへ、唯一の道は、神祇長上卜部何がしより、いさゝかゆるされ侍る事、天照皇太神、春日大明神、素盞烏尊、住吉玉津島御神、并聖德太子、弘法大師の御加護ならずやと悦びにたえざれば、正理にまよへるわらはべのため、猶くはしく書しらせまほしけれど、神の道はあらはに申さぬことなれば、筆をとめ侍りぬ、此あらましも、私の智にあらず、その道／＼の達人、殊には大方ならぬ歌仙より傳へしを、略書のべ侍り、我ひが耳にて誤りがちにぞ侍らん、重代家の歌仙に近づきて、猶たづねあきらめたまふべきなり

　右の條々夷歌の掟たるやうなるもをこがましく侍れど、心あらん人にとりあげ給へよとにはあ

らず、無智の童蒙のためにと書のべ侍る故は、いにし寛文四年十月望のさきの夜より、めづらかなる星の出たりしを、聞傳へし帚星なり、いかなる世のさとしならんと、都の外までもいひわたり侍り管見ながらさは覺え侍らず、猶安國なるべきしるしにこそといへる文をしるし、十一月一日八宮御方へまうで侍りけるに、みそなはし給ひ詞といひ歌といひ、かくこそやうなる姿をいつならひけるにやと、いと興じたまひ、時にとりては、戯言もすてがたき事にこそと、仰下されしまことに此一筋、天津神代より傳り侍れど、のぼれる代には、まれ〳〵よめりと見え侍るを、中頃佛心宗の名僧、我法の旨、二三子に傳へんため、百首、或は、いろはの文字を頭にすゑて數十首をつらね、源空、親鸞も、かくのごとく念佛の正理をよめり、又平時賴、百首をつらねて男女の教訓とせり、其後天正年中にすきものども出來て、和歌百首の古題に數人よみしより、寛文の今に至る、其間に夷歌にて世に鳴もの、道の記の歌、或は諸職を題にし、又は百首よめるたぐひ、數十人に及べり、其歌ども味ひ侍るに、秀句世話のみに力をいれ、興あらんとして、いにしへより歌に嫌ひ來る事をもわきまへず、猶實を失ふたぐひ、數々見え侍り、古人の夷歌近き代にも、法印玄旨、大納言光廣卿、此さまかず〳〵つらね給へれど、稀にも失なき事は、斷にも及ばず侍り、其外高きにもあれ、賤きにもあれ、和歌わきまへし人の夷歌には、いさゝか見とがむる科侍らず、しかれば、彼夷歌を事とし、正理しらざるもの丶よめるを見て、未練の童蒙手本とまねひ侍らば、忽神明の道を失ひ侍らん事、不屑の身にさへ、悲しびたへがたく侍れば、夷曲のさまわかち見侍らばやと思ひたまふれど、代々のやむごとなき御かた〴〵の尊詠に、凡俗の名書まじへ侍らんもおふけなく、又名字顯し侍らさらば、かれ規模なしと思ひ侍らん、いかゞと申上侍りければ、此旨我心ひとつ定めがたしとのたまひ、内にまうのぼり給ひ、やがてまかで給ひ、望の趣奏し奉りぬれば、夷曲のさまあるまじきにあらず、夷歌なれば名乘の事も

おのが心にまかすべきこの　詔
ぞと仰下され侍り、かくかしこ
き　御うつくしみやつがれがめ
いぼくのみにあらず、夷歌好ま
ん者の、万代までの悦び、何事か
是にしかんや、されば明て五年
の冬、古今夷曲歌を撰びて　八
宮御方へたてまつり侍りしを備
　叡覽させ給ひ、本即　大内に
納り侍りぬ、此一巻はその集の
序に書し制めのあらましなり、
夷歌よまんものは、今より後此
旨守るべきもの歟
　高津汚道士　生白堂行風

狂言鶯蛙集

花になく鶯水にすむ蛙のこゑをきけばといひしむかしを思ふに年は八もゝちあまり八十歳に越え御代は十といひつゝ六つきになん餘れりけるしかるにこのごろ世中ゆすりてたはれごとをもてあそべるより鼠とるてふ猫飯をもるべき杓子にいたるまでいつれか歌をよまざりけるずでにその言葉を見るに大あぐらたいらなりといへども八雲出雲の文字の數を出ずうれしきをりふしにもかなしきついでにもやらずのがさずいひ出せるなるべし抑此たはれ歌はかしこくもいにしへ水無瀬和歌所に有心無心の座をわかちて柿本といひ栗のもとゝよびけるよりぞひろまりけるされば船つごふ大坂にしては貞柳木端かたぐひその名世にきこえりことなまる江戸こしては未得卜養が徒かはる〴〵此道に心をよせていひ出せる處のこと葉人の口にあること膾とあぶりものゝごとし又近來大根大支といふものあり狂歌に地すいの好士にしておのがどちかたらひつゝ手酌の銚子の口ずさびしより酒のみの家のとりもちとぞなれりける鳴呼太支なくなりにたれどます〳〵此ことさかんにしていひたきことをいひもてはやせばかの口かろき曼倩もあきれつゐぞわらはぬ褒姒もはた笑ひつべしある日したしきかぎり朱樂館につどひてひと〴〵れいのたはれ歌をよめりかたはらに古今和歌集などとりちらしてありければやがてかの六歌仙の歌ざま評したること葉をもて題とすそれよりして花になく蛙水にすむ鶯といふ心をよめなどいひもてさはげば馬塲金埒といへるがすゝみ出て

かげひたす花の錦も池のはた
をられぬまゝに蛙啼くなり

とよめりければまた鹿都部眞顔れいの口とく

啼ながら木傳ふ花はこゝにあり
と思へば水のそこにうぐひす

などいひつゝ酒いたうのみけるままにこの馬塲鹿都部の頭の文字によりて古こん馬鹿しふと名つけばやなどいふを何がしら早うより物學びたりしせをうのきゝつけ給ひて二十一代御集のはじめの古今集に擬してあらぬ題號かうぶらしむることとつみさりごころなくやとむづかりければいたくおそりてやをらかの題號をけづりて狂言鶯蛙集とかいなをすにしばらく手たゝか

ひて筆心にまかせてゆかずやうやう六歌仙題詠を始に置てそのほか四季戀くさ〴〵のをもかきそへんとてかういひのゝしるもかしがましけれどつひには耳のはた巻となれりまたく歌は寶引縄えらべるとにもあらずたゞ浮岸のあつまるにまかせてなん天明四年甲辰十二月廿日過尻より逐るゝばかりいそがしき片手にかいあつめ綴ればいにしへを忍ぶ人定めて今をわらはざらめやもといまだ口へらず漢江等があまりのことにたはるゝもいらざる事の

狂言鶯蛙集巻第一

畫女動人情　山手白人

かくあらば筆の命毛かけてもと
心時めくはなのすがた繪

武士八十氏

見るにまづねたしや人の床の間に
かくる姿のうつしゑ顔は

便々館湖鯉鮒

つくり繪の繪具に膠の交るより
ぺたりとそばへ寄添て見ん

白川與布禰

おもざしの似るより心うつし繪は
そらごとながら墨を流しつ

出諏訪耳彦

色どりをよくも繪絹のうす化粧
心うつして見ぬ人ぞなき

紺屋朝手

行水にかきもかいたる朝妻の
船に心にうごくうつし繪

屋はり棟梁

わきもこにいきうつし繪の立姿
抱きつくへの上にながめて

檜皮釘武

張置てひとりふすまのもろこし繪
李夫人ながらわか物にせん

大事三昧

筆先て髪もかたちもつくり繪を
したふはあさき千枝常則

大石小石躬景

筆は今かくて心をうごかせば
口うつし繪に物も言へかし

轉起安

思ふことかなはねばこそ浮世繪に
かくも心をうつしそめけん

北川北川

かくばかり繪そらごとなる天人に
心うきたつ雲のいろどり

棹鹿巻筆

形のみあつて匂ひはあらずとも
筆や心をうごかすみいろ
坂上米人

西川の水の流れの身もうきて
浮世えならぬ顔はなづかし
谷水音

淺妻のふかき思ひをやまと繪に
うつし心もふでのいのち毛
茶屋町末廣

もえ杭に火のつきやすき燒筆の
跡まで心うつし繪すがた
松下風

姿繪の女のこゝろうつせども
筆はもとよりすんなしにして
加保茶元成

つれ〴〵の身は浮草の浮きすぎて
とくにおもひの種を枕繪
眞悟坊

三度〳〵ふめしのさいとも思ふなり
あさゆふ肘を曲て枕繪

眞面面長

そらごとゝ思へど美女の姿繪は
心うつせし筆の命毛
蚊大分夏倦

げにかみはかつらの如き役者繪に
情をうつせし月の丸顔
梓弓八中

氣のわるさ裙にちら〳〵宮城野の
はぎもしろきを後の寫し繪
鹽屋辛人

かんばせも生寫し繪のわきも子や
わきてこゝろは仇にかけ物
平秩東作

簾よりまづ心こそうごきけれ
繪にかく宮の猫のひき綱
紀炭堅

萎花有薫香

風の手にとり殘してや萎みたる
花のかすかに匂ふはる風
野老髭面

かくてさへ匂ひはのこる物かなと

花にもはなを寄せてこそきけ
待乗空音

折とりて萎める花を坊主持
殘るにほひに花の香ぞする
銀杏滿門

萎みたる花をもをのが宿として
蝶は匂ひの有りたけぞすむ
赤土壽邊留

しぼみたる後もさくらの匂ひ來て
人のはなにもかげは有けり
秋風女房

いつ迄も匂ひをこさばとばかりに
花はしぼめどねには歸らず
身分唯飮

限りあれば萎まにやならの八重櫻
されども匂ふ花垣の店
望月滿丸

殘る香のなくに萎みしこのはなの
露のたまにも虻はとまらじ
京間内則

たゝみたるかみに匂ひはあり原と
　みるや昔のなごりをし花
　　飲口波志留

心ざし花のかほどにつくせしは
　しぼみよし野の山の家土產
　　邊地間河也

萎みても匂ひをかくしをほせぬは
　是や吉野のはなのさきぢゑ
　　福禰枝炭

しぼみたる色薄ばたにさしながら
　匂ひをとめて置床の花
　　眞志良桃實

世の中にたえて櫻はしぼむとも
　のこる匂ひは今にあり原
　　東風良近道

今もつてをり〳〵袖や匂ふらん
　しぼめる花の色はさめても
　　去万里太夫

いまにその匂ひはたかし山ざくら
　萎みて花はよしきかずとも
　　愛多子子々

いつ迄も匂ひたかさり物がたり
　しをりにいれし花は萎めど
　　赤松日出成

よしの山花の唇しぼめても
　藝古の袖や香に匂ふらん
　　石龜壽鈍人

一もじを先ほどくひし口なれや
　後まで花に香は殘りけり
　　堂伴白主

咲しより日數ふる身の櫻花
　さそふかたなに匂ひ殘りて

賈人着鮮衣
　　無錢芳志

あき人の身は耕さずをらずして
　けふよき衣も稀にきみが代
　　眞弓亢李

一腰もさすが都のあき人は
　ものやわらかな衣も君が代
　　内匠はしら

算盤のたゞまさか通ふ色ざとに
　勘定なしの伊達を盡して
　　河邊二國

算盤のたま〳〵ごとによき衣を
　着れば外目にたつの市人
　　東菊麿

あき人のかたで風きる紋がらは
　扇地紙のをりものにして
　　萬歳館十口

着かざりてあたら世帯を崩しじまの
　ものあき人のうつり心に
　　大木戸黑牛

世を渡る是もあき人あぢきなく
　花を着かざるうかれ女の袖
　　千代有員

さらばとて思ひたつ田の山紅葉
　錦まごはんころもあき人
　　山蔭靑則

あき人のよき衣着るも紅葉する
　木々の錦をゝりにこそきれ
　　白銀小波瀬

算用の外にきかざる羽二重は
あたへをまちて裏もはでなり　筵田脛長

よき衣とみしは口蝦夷みちのくを
金商人やゆききたるらん　獨寐つらき雪帶

着かざりてはかりの目立風俗に
自慢のすなも高きうり賣　手枕歌種

あや錦たちかさねては商人の
身にはよすぎの衣とぞみる　錦手小茶碗

金銀の上羽二重はそろばんの
塵はこりたる衣紋とぞしる　よるの殿守

算盤のたま〳〵きれば八丈も
しまつとよそに見切る商人　鶺柄仙高

商人のかざる衣服は身におはぬ
世渡りもの丶錦なるべし

直を高くうれば蠶にくるまりて
おのが身幅も廣きあき人　相應内所

秋月過曉雲

丸い月に襟立ころもきせんとて
ひらりとかゝる曉の雲　濱邊黒人

月は猶影さし楠にあかつきの
みねより雲のびんつらぞうき　鍋垢麿

曉の雲のかけはしあける夜は
わびしき月のかつらぎの神　鳴瀧音人

曉の雲ゐる山のはにあてゝ
くふても見たきもち月の影　籔内椿

秋寒み月の夜ごろも着ふるして
曉ちかき雲のそらいろ　千筋黒髪

月かげをおほふばかりの空色は
はや曉のくものそらいろ　牛込遲道

夜もすがらあかずみちたる月影を
くもに包てしまふあかつき　梅堀露丸

月も今雲のころもをぬきすてよ
あかつきかけて扨も見苦し　帆南西太

月影もはつか過たるかたはれを
何所にかくして曉のくも　花下長面

曉の空にも月はすみぞめの
雲の衣をきせんとやする　左　明

雲まよりもりくる月に蒲團きて
みのあかつきを厭ふ襟もと　垢染衣紋

山のはもあてずに雲のうはばみは
たゞあかつきの月を丸のみ　遍亞方岳

朝霞榮婦

雲の帶きりゝとしめてきぬ〳〵を
いそぐぞつらき月の桂男
清淨古藏

風の手にむすびてあそぶ曉の
雲のあなたに臼つきの影
本所りんてう

月かげはもうやごさしてよく深く
たゝみこんだる雲の衣手
豆柿志都喜

更る夜の月に渡れさかさゝぎの
はしのかけたる雲の通ひ路
眞黑面

曉のかつら男のかへるさを
つけてとゞむる雲の通ひ路
病婦着花粧
夕霧籬

白粉のとけてまくらにふしかねつ
日頃こゝちの例ならずして
左候某

良藥のきゝめ見えぬはうつくしき
けはひ化粧の物のけぞかし
一帖程村

戀やみのべに白粉もよは〳〵と
おはぐろ筆の痩がたちなる
婆阿證人

ものうしと人の笑はゞわらはやみ
まつ隔日の化粧けはひを
山中多都岐

向ふより病はなほり十寸鏡
紅白粧をつく〴〵と見て
月代靑

白粉の色にや花をさかせみん
柳の髮のみだれごゝろに
和卦芳人

おもひつゝぬるか病の化粧水
結びし髮も素顏とは見ず
芋堀仲間佐

ぬるや今人目のせきもこん〳〵と
なやむ女の顏のおしろい
紀伊國屋舖

戀故になやむ女のこゝろ根は
いとおしろいの色に見えけり
夢吉鷹

手弱女の顏のけはひも櫻いろ
花にいとひし風をひき眉
無事館四交

楊貴妃が牡丹のはなの化粧より
風になやめるやなぎ腰かな
節松嫁々

朝寐髮みだり心に面やせて
床へべたりとつきし白粉
切口正目

白粉の顏も冬瓜の寐てばかり
二百十日の風のこゝちに
富士澄酒

十寸鏡向ふかげさへうす化粧
氣のかたべにの色にやつれて
待兼空音

こひゆゑに煩ふ娘つねよりも
粧ひたてゝ猶あはれなり
鴫羽盛

白粉のときとりしたるわらは病
　ぞつとするほど顔は美し
　　　　　　　　　智恵内子
粧ひもあまりつくるを病ひとは
　よし典藥のかみもしらじな
　　　　　　　　　蛙面坊
岩田帶むすぶ小ばらは高けれど
　いとをしろいの顔もやせ人
　田夫息花陰　　尻焼猿人
山賤のおなかもはるの木下や
　花の吹雪に腰はひえめし
　　　　　　　　　山住猿雄
山賤がやすらふ春の夕めしに
　まじるは花のちりがてにして
　　　　　　　　　蘿保曾通
花もあかず薪もこらず木の下に
　大事の斧の柄やくたつらん
　　　　　　　　はなもとの淺香
薪こるをのがかせぎに山賤の
　命もつなぐはなのしたかげ

木の下をたつもたゝれず山賤は　　久留間長持
　花にをのれが腰をれの歌
　　　　　　　　　田町ぬかる
はる〴〵と越るは薪おいの阪
　やすらふは目とはなの下かげ
　　　　　　　　　曾廬波扱輿
辨當をつかへば花のしたかげに
　はらも木の芽もはるの杣人
　　　　　　　　　常山阿馬
山がつはまづ一ぱいのひさご酒
　やすまば花のえに掛て見ん
　　　　　　　　　强飯山盛
ゑいやつとせをふ薪にやすらへど
　花のもとではかるき山賤
　　　　　　　　　田原小槌秀民
山人も柴をまくらにかりかけて
　晝寐はながき花の下かげ
　　　　　　　　　唐衣橘洲
山水でうるほす花の下かげは

樵夫もはるにのらかはくらし　　朱樂菅江
咲花の一樹のかげに山かづの
　休むも斧のくされえなれや

狂言鶯蛙集巻第二

春歌上

春たちける日よめる

十二栗園

たてこめし霞はやまの腰障子
あけて笑へる春は來にけり

四方赤良

元日のあさ上下のふるのしめ
さつと世間をはるは來にけり

元木網

又ひとつとしはよれども玉手箱
あけて嬉しき今朝の春かな

朱樂漢江

霞さへ春さへけさはたつものを
餅はすはりの尻のおもたさ

夕霧籬

若水をむすびあげたる手のうちに
ぬるみそめてや春の車井

檜皮釘武

岩戸あけし神代もかくや猿田彦
こだかきはなの春に來にけり

茶屋町末廣

日出たさは身幅も廣くたちそめて
霞む禮者のはるのころも手

蘿保會通

けさ御禮申いれたるかざくちに
かざりの蕪の袴かちぐり

身分唯飲

天の戸を明るかたよりとし玉の
青海苔もつて春は來にけり

曾禮波扱輿

借錢のふちの氷もけさははや
さけてすませし千金の春

遲蒔千種

春きぬとつくるに耳は遠けれど
また無事て聞く鶯の聲

赤土壽邊留

たからをも身をもをさめて巾着の
緒〆のたまの春は來にけり

振出其次

あきは又けさ來る春のひづみても
つり合のよき年德のたな

葛飾蟹子丸

蓬萊の龜戸よりまづ來るはるを
しるはだい〳〵こころ柄かも

桐本鳳鳥

鳳凰も出べき御代にあふぎとて
けさしも玉の春はきり箱

大石小石躬景

春來れはふんと匂ひもさき拂ひ
跡の奴のやりうめの花

至極樂也

ひとかさね霞の衣たまはりて
格別めだつ春は來にけり

千筋黑髪

佐保姫の衣は春のくる日より
そらに霞のいそぐたちぬひ

手柄岡持

鶯も梅もかすみもつゞけとて
まつ立けりなあら玉の春
鳴瀧音人

歯固のもちゐはこゝにうまし國
年のあしたのはらも春の日
唐來参和

引かへて今朝しも春やたつか弓
あたりせわしき年の矢聲に
宿屋飯盛

懸乞の夜には重きかは財布
かつぎし肩も春は來にけり
便々館湖鯉鮒

さら〳〵と春の立にも明るにも
軋まぬ御代や今朝の天の戸
吹売圃人

天の戸を明れば光るたま手箱
津々うら嶋が太郎月かな
唐衣橘洲

山姫の山土産めきて袂から
出すは千代の初日なりけり

辰の年の春をむかへて
大門側成
天の戸を明ましてよいとばかりに
霞もたつのとし玉のはる

おなじこゝろを 無錢芳志
はるもけさ甲辰松八郎兵衛
世の操もけふぞはじまる

年玉庵相 萬歳館十口
箱のふた明ましてよい春にけさ
あらたまげたるやす扇かな

青樓初春 赤松日出成
五丁町氣をはるの日の初見世に
開きそめたる梅がかど〳〵

臥龍梅の實生の梅春立る日一
花開きければ 栗圃
四輪車のあとはわすれず臥龍梅
今朝一輪は花のさきがけ

春風春水一時來 問屋酒船
風と水と一時に來るはるぞとは
谷の氷の土封にぞしる

正月二日月の出けるを見て
むせん
いらぬうちいざ梅見んと夕まぐれ
二日の月の弓にひかれて

正月三日御かゝり火を見てよめる
おなじく
篝火に源氏のまきをつみかさね
御規式の夜の光る君かな

睦月の初め子の日はあすとて
の今夜五明樓に人々集ひてれいの狂歌よみけるに子にやあらんと思ひし頃亥日小松といふことをよめといひければ
漢江
亥日からこゝにねよとの刻限を
きくは小松を引四ッのころ

鼠百首の中子日 こりふ
おのが名の子日の野邊の小松とて
けふはちとせの種物やひく

霞 海老船守

佐保姫のお入と見えて紫の
かすみの幕をはるのやま〳〵　ひけつら

朝夕と二度まで四方に立なれば
まことに數も八重霞かな　足曳山町

山霞

春たてば霞のころもうら〳〵と
かゝるや富士の裾に白無垢　濱邊黒人

大海霞

大海を埋んと羽うつとほがすみ
ちりや千鳥のちりを撰ばず　呉竹節躬

まん〳〵と手でふせがれぬ大海に
もろこしまでも立霞かな　智恵内子

八重霞あをうな原のなるにこそ
見えねど船はくだる成べし　白川與布禰

海原をけふはあさぎにはる霞
釣する蜑も針しごとして

元船霞　きつしう

春日さすうら〳〵船の碇づな
ゑいや〳〵とひく霞かな

霞似下帯　をかもち

たちわけよ一布二布とみよし野の
いもせの山の腰の霞を

鶯　山手白人

鶯のなみだのあめのはれやらで
月日ほしとぞ今朝は鳴ぬる　もくあみ

夜も明のはるになりてはさゝ鳴に
ひとふし告よ籔のうぐひす　夜更朝寐

はる來ても月星日かず多ければ
をのが長閑けき鶯の聲　加倍仲塗

あさな〳〵そばにつけ籠の鶯は
音さへたかきに移るとぞ聞　燒酎何献粟盛

鶯のひとくと春をつぐれども
うち出て見れば木傳にこそ　臥猪苅藻

谷風のかたやはかすみ立合を
なのりあげたる鶯の聲

甲子日闇の中へ鶯とび入けれ
ば　大夢三昧

うぐひすの羽風もふくの神なれば
をりよく飛てきのへねどころ

鶯告春　みかけ

とこやみの夜もあけがたの鶯は
春をしらせの谷の戸がくし

葛飾にて

鶯のをのか葉ばたけひろ〳〵と
目籠にあまる梅のかつしか

菜畑鶯　ちたね

菜畑に月日ほしたるからかさの
油むしをも拾ふうぐひす

若菜　しろひと

雪間よりつみてその音も高ければ
鶯菜ともひとやいふらん

誰つみてそのねもたかき初若菜　黒部赤杉
鶯の餌にいちはかひとり

誰つめる春の若菜ぞしめし野に　門限面倒
いたくも雪はふり袖の尻

しらみ百首のうちに

わか菜つむ雪にしらみの布子着て　もくあみ
みかきか原をかきさがすなり

まな板の木口にはれる青紙の　あから
色もわかなに及ぶものかは

七種の音いとおかしく聞えければ　むせん

打音の下手はおぼつか七くさの
妻もわらへり我も笑へり

をなじこゝろを　手枕歌種

寐忘れてあはでしめをも摺こ木の
拍子まぬけにたゝく七くさ

かゝかゝと鳥が鳴けばとく起て　河原鬼守
はやすなづなの音はとゝとん

我庵近く住家もとめし夫婦むつまじくて有けるが今日なんとく起て七種祝ひはやすをきき侍りて　石のはらわた

からすより先七くさのかゝかゝと
起して打ばとゝやとゝとん

七種粥

管かけもまだきによねを計りつゝ
めでたくかしく七くさの粥　むせん

粥杖

粥づゑに追れてかほは緋のはかま
さしぬき足やねらひ寄るらん

殘雪　莚田脛長

どこまでも春の日足はふみ込めど
垣根がくれに雪ぞ殘れる

やはり棟梁

雪とゝもに殘りしこぞの借錢も
まだきえやらぬ懸乞の帳

平　段

兀山はいたゞき寒きはるのゆき
はつかばかりにけ殘てこそ

淡雪　こりふ

鬼の出し噂もかくやあわゆきの
ふれるばかりに跡かたもなし

餘寒　ひげつら

あづさ弓春の日和もわすらねば
さえかへりたる雪の內竹

もくあみ

草枕なにはのあしをふみ出せば
みじかき夜着に餘る寒けさ

梅　飯もり

佐保姫のちぶさに口をひらきつゝ
南枝の梅の庭にはらばふ

武士八十氏

香鋪にかすみをなして梅の花
さても匂ふやはるの日加減

脛　長

春の日のながめに花の枝さして
つぼめばひらく梅の傘
婆阿少人

ふりむきし南の枝のいち二輪
笑顔のうめの可愛らしさよ
きつしう

朝比奈が草ずりならで梅が香を
やさしと留た袖の春かせ
賀　交

春雨を凌ぐばかりにさすえだは
松のまつかさうめの花がさ
馬場金埒

たち出てみれども梅の匂はぬは
鼻に障子のあればなるらん

厠梅　紺屋朝手
風さそふ梅のかはやの窓の内に
今をはるべに匂ふこの花

雪中梅　山陰青則
木の下の雪に奴のあとつけて
おもしろ妙にふれる鈴梅

四方赤良ぬし梅見に罷りたま
ふと聞て　よふね
車の輪四方に匂ひのたかければ
其名もうめの臥龍先生

柳　なかぬり
風吹ば枝もきれいにすきあげて
いひぶんのなき青柳の髮

嫁　々
はなだにはあらぬさなだも春風に
なびく柳の腰おびのふさ

阿　馬
青柳のいとをくれてやはる風に
縫ふてふはりもつよき袖凧

引窓柳　梓弓八中
枝たれし柳のいとをよりて見よ
てうごこなたの引窓の紐

をなじこゝろを
銀杏みつかさ
さればこそ竈のうへにうち煙る
柳のいとをしたへ引まど

陌頭楊柳　こまき牛歩
陌頭の柳のかみのむすべるを
けさやさくらん櫛のはる風

水邊柳　もくあみ
雪どけの水にまかるゝ糸やなぎ
かけてはかはのはたやへる蘭

柳隨風　飲口波志留
青柳のもつれしいとも氣を長く
春かせの手にけふや解くらん

春日柳原といふ所にて　酒盛入道上閑
あを柳のいとも心も長き日に
ふらり〳〵と行つもどりつ

狂言鶯蛙集巻第三

春歌下

今年閏正月朔日やつがれが家に人々集ひければ再び春立こゝちしてをのをの其こゝろばへを詠りければ詠る

武士八十氏

正月のふたつあるてふ春なれば
いよ〳〵君が代は閏どし

濱邊黒人

花の春彌生くはゝるそれよりも
あかぬ睦月の又も來にけり

相應内所

のどかさはわきて今月あと月と
はるは來にけり春は來にけり

朝霞榮婦

ふたひろにあまる今年の懸想文
睦月も長く返すがきして

けふなん武士八十氏の家にて再び春の來れる心を人々の詠けれは序でに

朱樂漢江

武士の八十氏川にいざよへる
はるや田原の又太郎月

ことしむ月の閏なるを愛しつつ武士八十氏の家にて閏月歳旦の心を人々によませたまひけるを左候某ときこえし人弔にたうべけるを見るにげにやあたらしき春の又いたれるこゝちしてともにそのこゝろをよめる

無䇭館四交

元日はついたちながら又春の
ことばの花の閏正月

又このかきとめしを見るに先陣はげにも田原の又太郎殿とのどを鳴して

をなじく

上手かやかち栗をよく喰積て
見よほだはらの又太郎月

年禮延引

山住猿男

年禮もそちこちしては雨雪に
のびるを春の日のならひ哉

軒端に鳶凧の掛りけるを見て

紺屋朝手

さゝがにの糸くる軒へ鳶凧は
思ひがけなき風の振まひ

二月雪

窓簾待兼

香をとめしきのふの梅の花笠も
けふは雪見にきさらぎの空

二月二日雪のふりければ

便々館湖鯉鮒

十露盤につもりて見れば春も今日
てうどつき日は二二がしら雪

若草

八十氏

春駒のはやくひつくすわか草を
もえしざりたる牧野こや見ん

唐衣橘洲

生酔はねょげに見ゆる若草に
夢を結ばんことをしぞ思ふ

手を盡す野邊の緑りのきりたてを　海老網守
まはしとなせる角力取草

鳴瀧音人
敷島の道のはたにも生るゆへ
こやわか草と人のいふらん

春の野に草つむとてしどゝい
へる虫にさゝれぬれば　轉起安
春の日ののびるの玉も取えねば
しごにうらみはほれぬ摘草

窓前若草　遲蒔千種
籔醫者のしたぢ窓よりながむれば
また春あさき庭のもゝ草

土筆如筆　左候某
下もゆる春の野もせのやき筆は
繪師も心をつく〴〵しかな

春野捨火繩　出諏訪耳彦
春もはやながき火繩を捨しより
野邊はけぶりてもゆる若草

常陸阿馬
とり捨し野べに日かげもたけ火繩
もえてみじかき春の若草

ちゝのみの滿門
けぶりだに一筋道のすて火繩
いさゝか春の野をやきて見ん

野遊　山手白人
鼓ぐさ三味せん草もひかれ來る
此野遊びは春の氣ばやし

西行櫻　節松嫁々
名に高き其きさらぎのもちずきは
しぬまではなの下を忘れず

知惠内子
きさらぎの其望月の西行を
さとう兵衛といふもことわり

蕨　をとんと
佐保姫もしびれやきれて足引の
山のひたいにむらさきの雲

夕霧筂
春風もまた寒しとや早蕨の
手をさしいるゝ山のふところ　それがし

千金のその春の夜も早蕨の
にぎりつめしはしはんぼう哉

白魚篝火　をなじく
漕舟もつくだの嶋のなみの花
しら〳〵魚ぞよるの篝火

萬歳館十口
篝火もうつろふ水のそこゝに
さすや四ッ手の浪のしら魚

桂川若鮎　檜皮釘武
わか鮎は二日の月のかつら川
ちらりとかげを見たばかり也

春月　しろひと
春の夜の月の中なるしらげ米
糠たつ時やをぼろ成らん

京間内則
花ちらす鳥をどしかも咲く梅の
木の間に弓をはるの三日月

春夜酒宴　耳彦

春雨を寐て聞もよいかん徳利
ふりてをさせぬ宿ぞさびしき
　ちたね
千金のねは高くともはるの夜の
花のこのまに酒やかはまし
　嫁々
買ばやな月はおぼろに春の夜の
花もさかやのかよひたづねて
　春雨　竹杖爲輕
千金の花のうは端と見ゆるかな
小粒となりてふれる春さめ
　みつかさ
はれるまもあらきの弓の藤ばなし
おさえて弦をはるさめの空
　櫻　きつしう
麓まで雲のあしじろかけてけり
たかねへ花の咲のぼる頃
　出來秋萬作
花の雲それをはれ着と咲そめて
ゑもん櫻やきさらぎの空
　遍亞方岳
春の日はさても長柄の鑓じるし
さきつゞきたる花の行列
　白銀小波世
花のころ霞もそれとみよし野の
やま一ぱいに幕をはる風
　婆阿證人
ねがはくは四ッの時々さくら花
つねにかざして老やかくさん
　八十氏
墨染といふ名もあれば櫻ばな
とにかくちりの世はいとふなり
　朝櫻　まがき
春の夜のねぶけもさめて朝はとく
おひになれこし花の下ぶし
　吉原櫻　松千とせ
きのふ今日うつし植たる山櫻
はや里なれし花の顔ばせ
　久留間長持
見渡せば花とはなとの仲の町
なまめく袖にかよふ神風
　大事三味
咲花の仇ないろかにならひても
外のうはきは仲の町かな
　あづまのひえにて紅梅にさく
　らの咲まじりたるを見て　所詮法師
もえぎ地に梅やさくらを折ませて
上野ぞ花のにしきなりける
　上野花　四方赤良
一面のはなは碁盤のうへの山
黒門まへにかゝるしら雲
　無錢芳志
しのばずは花のかゞみの天下一
くもらぬかげや池の水かね
　酒上事也
鳥が啼くあつまのひえのさくら花
ひと重のうへの八重も又見ん
　蘿保曾通
幕の内は雲の上野のおく女中

雪にまがひの花のふり袖
大石小石躬景
あをむきて上野の櫻見る顔は
はなの下谷も長き日のあし
赤松日出成
吉野にもまさる詠めは山王の
花の上野の江戸ざくら哉
山王櫻　おきやす
山王の花も祇園の香煎は
素湯にさくらをうつしてし哉
上野山の花見にゆきけるに幕
のうちに女のすきかげあまた
見えければ　まちかね
うつくしきお山櫻や見てゆかん
まくのそこもを花道にして
彼岸櫻　あから
山寺の彼岸まゐりにくる珠數は
しだれざくらの花の長ぶさ
姥櫻　ちとせ
春さめに老をわすれし姥櫻

この下水をすがたみにして
飛鳥山櫻　千筋黒髪
吸筒もきのふさあけて飛鳥山
花も酔てか風にちら〳〵
大木花多少　野老髭面
日を追ふて山も暖氣になりて候
ます〳〵御安たい木の花
芦垣間近
立よりし花もたしやうの縁あれば
かをだにとめよ大木の風
花下客來　なかもち
立あさへ又來る客もひさもとの
さくらによれる花のゑんさき
花下客留　八十氏
花ゆゑにけふこのもとのお客なら
かへり風をば吹せずもがな
彌生のはじめ始めて山ふみし
侍りて　方岳
よし野山ものをゆふべの花ならば
わけし昔のあともとはゞや

花の枝に鞠の掛しを見て
朝手
花の枝にかゝる麁相のそれ鞠は
ちらすうらみの葛袴かな
鄙人見花　白川與布禰
せなおみやれなんちう山か白雲の
只あさくらはえら咲たげに
花盜人　三昧
すりよつて見る目にあまる白浪は
花にその名をたつた一枝
座頭花見　嫁々
木の下に杖をつく〳〵座頭の坊
花にながめはあかぬとぞ見る
病人花見　牛込遲道
病人のあしもそろ〳〵たつて見る
屏風に花の風やいとへる
庭の花の風に散かふを見て
かんこう
ちらうかと見る人案じわづらへば
花にも風は百病のちやう

一日十百首歌よみける中に手折花　鹿都部眞顔
墨染にあらぬ梢のはなをなど
手毎にをりて坊主にはする

一日十百首歌よみける中に夢花見　馬場金埒
思ひつゝぬればや夢にみよし野の
花はにしきの夜着であつたか

朱樂館に人々つどひて花見けるを日くれて行けるにはやまらうど歸れるよしきゝて
茶屋町末廣
今少しはやくは花もあるべきに
老のあゆみのをそ櫻かな

上巳　をとんど
裝束も十二ひとへに八重の桃
かさねがさねの雛のよそほひ

雛　なかもち
はつ雛もたつや彌生の二日三日
のみつゞけては足もふらそこ

夜雛　盃長丸
大内と思ひぞ夜のひな棚を
あるく鼠や鵺にたとへん

下戸曲水　あこきのひく網
下戸ならばあちらこちらへ盃を
やり水草や餅につきぬる

歸雁　加保茶元成
うす墨にかく證文と見ゆる哉
霞める空にかへる雁金

大屋裏住
羽衣の裳にとぢてゆくかりを
たぐりもどせよ靑柳のいと

ひけつら
白浪のはやたちかへる雁金は
とむれどいそぐあしのうら哉

雲雀　八十氏
春風のほどひやうしよく吹立て
舞ふやひばりの雲にいりあや

まかき
さほ姫の染し霞のころもでに
ひばりは縫と見えつかくれつ

燕　多下手同前
つばくらも何大望のあるやらん
やたらにくゞる橋のまたぐら

もくあみ
苗代の土をはこびてつばくらの
すにも子だねをおろしてぞ行

足元雉子　耳　彥
春がすみたつ足もとにありかをば
をのがしらせて雉子なくなり

春駒　こりふ
三味線のけいこをかしき春駒は
かけ出すやら先へ飛やら

遊女象かた
さもあらばあれたつ野邊の春駒は
柳の髮やよりてつながん

苗代　婆阿證人
作德をねてゐてしめの苗代は
水も人手にまかしてぞ見る

はぎなか

小山田にまくもほさつの種なれば
今より秋のみのりをぞしる

蛙合戰　耳　彦

かけ引も苗代時の聲あげて
水ぎは立し蛙がつせん

すみれ　婆　阿

むらさきのゆかりありてや此春の
江戸にすみれの花や咲らん

かきつばた　みゝひこ

筆そゝぐ水にうつりて紫の
繪具をしまず杜若かな

浪花のこぼれくちといふところ鰻や何がしが池の杜若を見てよめる　はぎなか

みてしより思ひの種やこぼれくち
心へだてぬかきつばたかな

ある遊君のもとにてやまぶきを詠る　名萬壽盛方

床花に咲せし色のやまぶきは
たばこぼんからいでの玉川

木あみ

ひと時のあたへ千金春風の
吹たて見するやま吹の色

八十氏

つかはれぬ小金の色の山吹は
みす〳〵ことをかきほにぞ咲

をさんさ

目にかゝる小金のいろの山吹を
折らんとばかり花のりんだゐ

婆阿證人

山吹の花は咲けども實はならず
實はならねども花は咲けり

藤花　しろひさ

ふら〳〵ともとより長き春の日を
咲のばしたる花の藤なみ

をさんさ

咲かゝる藤はゆかりの名にたれて
またちらほらと花もむらさき

春日詣江嶋　三　味

江の嶋の道者は桃のはなをずれ
いたくいそぐも上巳の日哉

彌生のはじめよりかごのうちに小飼のほとゝぎすをきゝて　をきやす

ほとゝぎすひなの頃より飼たてゝ
彌生のてへんかけて鳴らん

春初鰹　十　口

かくべつに直段もはるの初鰹
けさめづらしく聞ごしかな

暮春初鰹　ちたね

代金は一兩日のちがひにて
直段もはるの初鰹かな

春の歌とて　あから

酒のみつ花をながめついたづらに
すぐる月日は一日もなし

三月盡　手柄岡持

いやよひも廿日の夜食濟ぬれば
みそのかもなし花のかもなし

つむりのひかる

花散てしまひし吉野のかはつゞら

かたげて春のいとまごひ哉
みかけ
けふのみと春もつきしま山の端に
入日をまねきかへしてや見ん
三月晦日灸すゆる人のもとにて
漢江
春もけふねきりはきりの灸上戸
をしめどいつかひとひとぞ成

狂言鶯蛙集卷第四

夏歌

更衣　莚田脛長
古びたる霞の衣ぬぎすてゝ
けふより夏ときかへぬる哉
便々館湖鯉鮒
衣がへこれも舂屋の米なれや
俵をとけばみうすとぞなる
數寄原呑吉
夏ぞとてまた袷にはならねども
鰹のはらのわたはとらばや
馬士更衣　茶屋町末廣
花色の布子にけさはひきかへて
馬士も袷をきその山道
遠村新樹　手杵兼勝
いく村のさらしの布を夏たちて
仕立もしげるならの幅廣
鎌倉舟守

遠目には梅かさくらか青柳か
ねからわか葉に茂る一むら
卯花　四方赤良
春夏のちかしき中は猶さらに
垣をせよとやさける卯の花
京間内則
卯の花は黑き上着の袖なれや
綻びしより白く目だちて
時鳥　石部かねよし
卯の花のちりぬる先に一聲を
待ばいろはにほとゝぎす哉
眞乳山人
時鳥なきつる方をながむれば
只あり明の月ものこらず
無錢芳志
時鳥待つ夜の友の火入には
只あり明の炭團殘して
はぎなか
をきてゐるうちはとびこぬ時鳥
忍びねながら聞もめづらし

千代有員
九合目へてつぺんかけて登りしは
三國一のやまほとゝぎす

平左段
ほとゝぎす金づくならば何兩も
耳を揃へて今日やきかまし

唐衣橘洲
どちらとも日和さだめよ時鳥
雨と月との中空のこゑ

夕霧まがき
ほとゝぎすちとは翅を休めよと
いへどかぶりをふり出てなく

山手白人
待時鳥
辛子酢のそれ程にこそあらずとも
初音きかせよ山ほとゝぎす

武士八十氏
馬士聞時鳥
聞ほれて我も馬からすでのこと
をちかへりなく山時鳥

十二栗園
出家時鳥
名乗れ今賤がねざめの所から
夏もきそぢの山時鳥

唐來參和
橋上時鳥
そのながさ此ほとゝぎす兩國の
はしからはしを鳴渡るこゑ

うちのり
三十日時鳥
借金の山ほとゝぎすいづかたに
三十日の雲を鳴て行くらん

朝霞榮婦
闇時鳥
闇の戸を追にほぞんかけごさへ
鳴や箱根のやまほとゝぎす

初鰹くひける日時鳥をきゝて

富士澄酒
をりもをり初時鳥はつがつを
味噌にからしのきくは珍らし

白川與布禰
初かつを
むかしたれ鉛刀魚とは名づけゝん
今朝百貫の折紙もがな

鍋垢丸
橘薫枕
たち花の花こそ見えね敷妙の
まくらやみにも香やは隱るゝ

千里亭白駒
かきつけし花橘の肘まくら
かをれるかたへね返りをして

しろひと
芥子
うつくしき花の姿もときのまに
風の刺たるけし坊主かな

檜皮釘武
紫陽花
來てはなめ〳〵たる花の虻
あかぬや何の紫陽花のはな

こりふ
本所茄子早
本處とて土地も夜鷹の畠中
さてこそはやいはな落の茄子

青口齋燕河
早苗
此ごろは芋畑をも打すてゝ
田子や早苗を取て居るなり

闇杉村
小山田はしげる新樹のかげ迄も
とるや鮑の貝の玉苗
苅たるあやめうる商人よび入
れけるにあたへいたう高かり

ければ　八十氏

やすしとは人もみぬまの菖蒲草
すこしその直を引て賣かし

雨中菖蒲　こりふ

からかさを御無心申五月雨は
てうどあやめもかりてさす頃

小梅既熟　ちすし

五月雨のふりわけ髪の小梅だに
はや色つけばかたすぎもせず

朱樂漢江

黄金の色と見る迄熟したる
梅はもとより小粒なりけり

五月雨　唐衣橘洲

三ツ五ツ星のやどりは見ゆれども
五月の雨のあしはとまらず

五月雨晴　石龜壽鈍人

さみだれのふり通したる上なれば
空もかびてや星の出るらん

一丈帯武

五月雨はふるほどふりて双六の
むし〳〵あつく雲はるゝなり

五月雨ふりつゞく頃したしき友とひ來りて酒のみけるに軒の板まより雨もりければ

自分齋子璉

五月雨のふる家なれば酒もりの
もるをおさへてさし板にせん

水鷄　加茂鞭陰

さりとては氣の短夜の水鷄にて
ふすまをたゝき明るしのゝめ

うちのり

又きゝに來まし田畑を打こえて
水鷄にたゝく夜半の柴の戸

隣家水鷄　松下風

うまそうな隣の夜食ねてきけば
何をくひなの口はしの音

寐覺水鷄　野老髭面

夏の夜のぬるまもなくて覺ぬるは
のみやくひなの驚かしけん

照射　八十氏

矢を追ふて逃る鹿より射し人の
むねにや草はわけんとすらん

鵜川　こりふ

鵜づかひのわざは手鞠にあらね共
いともさかしくかゝり散せる

筍　大石小石躬景

筍は生れながらの皮具足
やぶにも功のものゝふのたね

下女盗筍　朱拙庵白壁

人の目もぬく音たかき竹の子を
それとは誰かしるのみにせん

蚊遣火　問屋酒船

拔け路地の裏めづらしく吹返す
風の蚊やりのかんなくずの葉

はきなか

そらだきにあらぬ者から杉の葉の
くゆるけぶりに蚊は立にけり

下女逐蚊　みつかと

蚊やり火のあふぐ扇の骨さへも
てうど揃はぬおはしたのへや

蚊帳破多　ひげつら
ぬふとても所詮つゞかぬ破れがや
きのみじか夜やおきて明さん

蚊屋中螢　加保茶元成
帳のうちにあそぶ螢はせめて蚊を
やくにもたゝぬ燈火のかげ

夏の歌とてよめる　をなじく
うかされて只うち〳〵と寐附ぬは
茶をのみと蚊にこまる夏の夜

蚤　うちのり
雨後に見し富士にも似たる蚤の跡
鹿子まだらにはれ上りたり

螢　婆阿
夏虫の身より出たるひもしらで
書物は棚へをこたりの窓

膝元佐久留
川上へなほもえあがる螢こそ
腐草けしても水にきえぬか

みそこしのうちに螢を入たるを見て　秋風女房
宇治なうて素性いやしき味噌漉に
玉の光の螢をぞみる

をなじこゝろを　きの高根
手づかみに取て其まゝみそこしに
いれし螢もやはりむしなり

をなじ心を　うちのり
學ぶにはたらぬ光りの螢ぞと
儒者も覗てみそこしの中

月前螢　八十氏
てる月に光りかはせる螢こそ
鳴虫よりも取にくきかな

青樓螢　河原鬼守
揚屋入ゑりもと光る大盡と
肩をならべてとぶ螢かな

みちのく雪もり
河竹の流にかげをみす紙や
つゝむ螢はやみもよしはら

螢合戰　小袖行丈
朝露をなが根城とやたのむらん
草のはむしやの螢合戰

蟬　こりふ
立もせで梢にときをうつ蟬は
しびるゝやうに聲ぞ時雨るゝ

みゝひこ
やゝしげる木のうら店の住ゐとて
其ひぐらしの聲ぞ淋しき

啞蟬　秋風ねうはう
木隱れに棲とは見れどみんとだに
なく口なしのやまの啞せみ

夏草　うちのり
鎌すてゝ寐て居るとこは童の
罪もむくひもなつ草の中

ひげつら
名にも似ずやさしき露を含めるは
鬼百合のめの泪なるらん

加倍仲ぬり
秣には今もすそのの夏草や
鎌くらどのゝ御狩場の跡

古戰場夏草　望月滿丸

されはこそ茂れる草の葉武者まで
ならひし露や星兜着て
或人の家にて夏草の心よく咲
る鉢植になして見せけるをり
から蚊のうるさくすだくを
こりふ
かくばかり手の行とゞく夏菊は
いかにも花のかこそ多けれ
水無月の萩咲初ける庭にてよ
める
むせん
早咲の光陰の矢をはぎのはな
秋を三ッ羽の垣のもと筈
蓮
大木戸黒牛
むくおきの顏も可愛ら周茂叔
みされる蓮の花の前髪
きつしう
佛でもまた君子でも蓮花
いざ船さしていけどりにせん
忍岡より不忍池のはちすを見
て
勘定外成

から人の眞似を忍ぶが岡に來て
うたふもしやらく採蓮の曲
蓮葉含露
山陰背則
蓮葉に誰がおきすてゝ小玉銀
その露ほども慾心はなし
厠閧雷
鈍奈法師
かけこみてまくりもあへぬ直垂に
雨のかわやのはらはなる神
市中夕立
もとなり
さわぎつゝあきれてたつの市人は
うるまもなつの夕立の空
船夕立
あから
船の帆のはらめる風に夕立の
雲のはやめやふり出しけん
鬪夕立
をさんと
雷にさけぬる蚊やのもじが鬪
せきにせわしき夕立の音
泉
うちのり
とく〳〵とすくふてのみし泉川
三日のはらまでしみ渡る也

氷室
かんこう
水無月の日にはしつけて松が崎
かたき岩根に冬のかたまり
納凉
きつしう
凉しさはあたらし疊ゐを簾
妻子の留守にひとりみか月
夕納凉
さん和
夏もはやたけの葉そよぐ門口に
みな立出てすゞめいろ時
山家納凉
旅人
山住はこれがましばををり敷て
谷そこゝの夕すゝみかな
男女納凉
八十氏
凉しやと男女もろとも夕暮は
蚊のさし合もちとゆるせかし
乞食納凉
みかけ
氣のはらぬ乞食は橋の下すゝみ
川風までも貰ひ物なり
家根船納凉
宿屋飯盛
橋のそりは弓をひくやとみつ股に

ひようど射て來る家根船の風　しろひと

千早振神田川より漕きいでゝ
すゞむは天津兒家根船かな　節松嫁々

隅田川納涼

涼しさはすゞのとくりのすみだ川
まだきに秋の音をきゝ酒

水無月のころ舟逍遥すとて　あをのり

水無月の船にや棹をさしもぐさ
このかはぎりのあつさ忘れて

避暑扇　和良布

柿ならば之り出しても捨べきを
手のはなされぬ繪うちはかな

うちは賣　眞間川成

いつとてもうちは留守なる團扇賣
外のたつきに骨やをるらん

暑中水賣　内匠はしら

夏の日にしばらく息をするが臺
ふじの高ねの砂糖水うり

水無月の空に荷ひの冷水は　嫁々
うりてや汗をくみ流すらん

夏の日は汗になるみのゆかた染　垢丸
きてはくみ込水賣の桶

醉後飲水　足曳山町

醉醒にひやりと飲し氷みづ
夏の夜ながらあたへ千金

大暑難凌　ひけつら

はだぬぎて見れどあつさは强弓の
いられざりけり寐ても起ても

質屋の虫干を見て

太刀かたなさすがしちやの虫干は
げにものゝふもうけつ流しつ

裏店に虫干するを見て　余旦坊

とりわけてむしあつき日に虫干の
小袖のかびも通るうら店

垣夕顔　釘武

垣にはふその夕がほのはなれ家は
五疊ばかりの住居とぞしる　嫁々

朝夕顔

元結をよりてこそ見め朝まだき
ねくたれ髮や夕顔の花

水無月鶯　北川北川

鶯も老にけらしな梅ばしの
鹽から聲もみな月の空

瞿麥　遍亞方岳

白露のおき〳〵膳にむかひても
くへぬ朝寐の床夏の花

荒和秡　石龜壽鈍人

水無月の秡錢のありたけに
ふるふちの輪や拔つくゞりつ

禊（みそぎ）するぬさにきるべき麻の葉は　はきなか
まづ蜘のゐを拂へとぞ思ふ

時は今夏とあきとの中臣に　しろひと
はらひきよむる川社かな

徐入道狭主

けふは身のあくたもくたの祓して
あすよりかけんうその河波
八十氏

今宵よりはや文月やかよふらん
夏毛の筆のつかひじまひに

六月祓　白川與布禰

盆前の拂ひは何と夕ぐれの
水無月祓するぞをかしき

狂言鶯蛙集巻第五

秋歌上

立秋　山手白人

萩の葉に案内乞はせてあみの戸の
めに見ぬ秋もけさや立らん

秋風女房

秋來ぬと風がしらすやふみ月の
封じをきりの一葉ちらして

立秋甲子　河原鬼守

三伏の夏もすゑ葉の野大根
けふ二股にあきはきのへ子

秋たつ日さる方へまかりてかへらんとするをりしも扇を出して歌かきてよといひければ

唐來參和

秋もはや立ながらかく扇とて
けふからこれはすたり物なり

風鈴告秋　婆阿

三伏　夏たけ椽に音づれて
せわしく秋をつぐる風鈴

七夕　しろひと

織姫へけふの手向とくりかへす
三輪ぞうめんのいとながき哉

天狗奴和助

七夕にひかるゝ牛も心あらば
今宵ばかりは足はやに行け

紫一もと

誰もみな露のねがひをかけ棹に
かけて小袖やほし合の空

常山阿馬

天の川空にをだまきかけてこそ
跡にいと引くよばひ星かな

問屋酒船

短冊の竹のひと夜のあけがたは
星の名殘やのこるいろがみ

山陰青則

とる筆のそのかさゝぎの走りがき
星に手向のふみ月の空

庚申七夕　望月滿丸
天の川さてあやにくのかのへ申
ねぬ夜は星のさし合の空

七夕箏　野老髭面
秋風の手さへこよひはつくしごと
七夕づめにかきならせかし

七夕草　久留間長持
秋風のふきといふのも七夕の
逢ふことのねの深き草の名

七夕鳥　唐衣橘洲
蝙蝠と人はいふとも曉の
鳥なき里やほし合のそら

しばらく酒のまざりけるに文月七日ある人天の川といふ酒を送りければ　十二栗圃
天の川酒は露ほど飲身にも
いまひと德利ほし合のそら

武士の八十氏としごろ手なれ給ひしきんのことあたへんとやくしたまひければふん月七日とりにつかはすとてせうそこのはしにかいつけ侍る
白川與布禰
われもまた七夕づめと諸ともに
七の緒琴ぞほし合の空

かへし　武士八十氏
さほどまで星なら今宵かすべきを
おくるはせひもなゝの緒琴や

吉原草市　浮草蝶々夢成
ひと朝は露の千くさの仲の町
見よ朝顔のはなれ市人

角力　鍋垢丸
花の色わくる秋野の草角力
團扇の紐も露の小むすび

算木有政
おとらじと出るや月の土俵ぎは
ちつと入日も西の大せき

節松嫁々
秋角力數の手とりもいかでかく
不慮なるまけを鴫の羽返し

文月なかば過る頃初雁空をすぐる聲しけるをいまだ雁は來らじと爭ふ人ありければ
戀和氣里
秋になりまゐらせ候の玉章を
龍田姫よりことづかりかね

西瓜裁賣　京間內則
赤き色を都の町の夜あきなひ
下たちうりの西瓜行燈

文月末によめる　赤松日出成
初秋もめでたくかしく筆とめよ
けふ文月のまき納めなら

露　しろひこ
清輔がものうかる時の白露を
ことばじちとや言べかりける

めしもり
露とちる涙の玉のきざはしや
長信宮の身にもあきくさ

桔梗　加倍仲塗

秋草の花の顔見世評判の
中に上々きちかうの色

秋日三八四人して野邊秋草見
にゆきはべりて　出諏訪耳彥
秋萩の花すり火打うちつれて
たばこ野道にあかぬ友どち

野草花　なかもち
敷つめし春の錦の花よりも
こゝろ廣野の秋の花ござ

萩　便々舘湖鯉鮒
いたづらもさかりに露や汚すらん
これぞ小萩の花ずりのそで

大石小石躬景
賤家をのぞきて見ればつき萩の
花もつゞれの錦きにけり

女郎花　疎人
粟飯をたくかたはらの女郎花
似たとや言ん煮たとや言ん

梓弓八中
名を聞けばかあひらしげな女郎花
曲りくねりしこゝろとは見ず

片袖足成
女郎花粟粒ほどもかはらねば
むせるめしとも人や言らん

薄　うちのり
ひら〳〵と草の袂に見えつるは
のこるしつけの尾花也けり

大屋裏住
糸すゝき野邊の錦にはた織の
さをなぐるまのやるせなく虫

犬百首の中に薄　檜皮釘武
可愛さも十寸ほのすゝき打しきて
なやめる犬を捨てくるす野

苅萱　秩父絹平
行暮て野中に宿をかる萱の
亂れふしごや草まくら聞

槿　めしもり
此こゝろ聖にませし朝顔の
花にをしめる今朝の寸陰

晝朝貌　朱樂菅江
はなのさきばかりあらひし手拭の
ひるまおきたる朝顔の花

八朔梅　ひけつら
白妙に咲はことさら八朔の
てうどをりよき梅がかたびら

雁　銀杏滿門
鳴ならぬ羽をばかゝしかけてくる
その玉章はかり筆にして

赤土壽邊留
みつ口の三をよせてやかぞへなん
はや何時のかりかねの聲

市中雁　袋筒長
そろばんの玉の二進か市中は
みせに空ねのかりがねの聲

日本堤にて雁の聲をきゝ侍り
て　邊地間川成
雁の聲北へ〳〵といき杖を
とばせて行やひけ四ッ手かご

鶉　うちのり
蜑が子にどこやら似たる飼鶉
砂の上にてなくと思へば

月前雁　青のり
たつた姫月に衣やほしぬらん
山のたもとを通すさほ鹿

別莊鹿　紀儘成
踊子の下駄をや笛にしたやしき
三味線の音によるの棹鹿

酒家聞虫　石龜壽鈍人
盃をはやさしたまへ松虫の
はかなき酒のちんちろりぎり

虫賣　仲ぬり
虫賣のねてくらされぬ世の中は
おのれも露のまうけにやなく

秋鰹脂多　棟上高見
傘ならぬ鰹も秋はあぶらこく
雨のふるせのさし身にぞする

夕顔如枕　八十氏
涼にし夏なら棚のゆふ顔を
てうど枕にしづがたのしみ

狂言鶯蛙集卷第六

秋歌下

月　つむり光
月見てもさらに悲しくなかりけり
我身ひとつの秋にもあらねば

山手白人
秋風に雲の衣を脱すてゝ
丸はだかなる月のさやけさ

里中道
わきざしのさやけき月のはれ出立
ちるやかつらの花のかいらぎ

三日月　檜皮釘武
光陰の八島にむかしひき切し
しころや三日の月のかげ清

四方赤良
網の目をもれ出る影はおのづから
つりばりほどに見ゆる三日月

十四夜月　所詮法師

惜いかなすこしいびつに見ゆる故
丸もち月のあすをまつ宵　銀杏滿門

十分なその顔つきの桂男も
すこしかけめはあらんとぞ思

秋の最中はあすとての宵月ま
つをりしも初て雁の音つるゝ
聲をきくにいとめづらしくて　紀炭堅

天津空あとのが先を待宵の
月にあらはれ渡るはつ雁

八月十五夜　元元網

すきとほる琥珀の玉の盃を
手にもち月のかげに塵なし　婆　阿

もろふたる芋も團子も武藏野の
はら一ぱいにみてるよの月　牛込遲道

光りそふ玉のうさぎのうすと杵
今夜三五のつきべりもなし

大事三昧

名に高き秋の空色くまもなく
わけてこんやの染つきもよし　野老髭面

てる月のみかげの石の水手鉢
みがきあげたる秋のなか庭　赤土壽邊留

そろばんの玉のやうなる此團子
かぞふる月も三五十五夜　石龜壽鈍人

あすまゝを焚べき釜はとられても
今宵名におふ月にをしまじ

連城の玉の句にすがりて

竹杖爲輕

十五夜の月しろたかき詠めには
かのあら玉の春も及ばじ

八月十五夜よひのほど曇りが
ちなれば月さへ出やらぬを人
人月をもてあそぶこと葉に光
そふ心　するに前栽の薄砌の
松もげに月待風情に見えけれ
ば　すみかた

名にしおはば月も出よと松影に
まねぎますほの薄一むら

八月十五夜雨降ければ

日本栃見事

川竹のつとめに似たる一夜とて
ふるもてらすも月の空ごと

十五夜に糸瓜の水とりて

智恵内子

垣根はふつるに葉月の半とて
糸瓜の水もすみ渡りけり

停午月　鹿都部眞顔

誰人か千兩箱とほめざらん
秋は中村なかぞらの月

月前兎

玉兎はねてなぐさめ十五夜は
おのが毛ほども月に疵なし

月前芋　常　阿馬

里芋をくはんと口をあきの夜は

ちよこ杉箸に月さして見よ
十六夜に蕎麥をたうべて
鳴羽盛

秋の夜の月は雲間をもりあげし
蕎麥のあたへも二八いざよひ
唐衣橘洲

浦月

左は須磨右はあかしへふみまたぐ
月のあしこそなみを越けれ
手枕歌種

野月

武藏野はもとより廣きはらなれば
くもなくうみし桂をのこ子
鳴瀧音人

むさし野にあふるゝ月のにげ水は
逃かくれ家もなき今夜かな
うた種

兩國橋月

今宵しも心にかゝるくもなくて
月はれわたる兩國の橋
光

三叉月

さし出てけに千斤のおもしろや
鼎の足の三ッまたの月
赤良漢江

品川月

すむ月の光はこゝの品川の
臺にのぼる大佛のまへ
大木戸黑牛

芋畑月

芋の葉の露にやどれる月影は
風にころ〱をちのひと村
於保曾禮長良

供部屋月

供部屋は主の御たちをたち待の
月にさしたる天もくの酒
京間内則

雪隱月

化物を見しとはうそのかはやにて
おのれ〱が影のもる月
節松嫁々

終夜望月

うか〱と長き夜すがら憧（あくが）れて
月に鼻毛の數やよまれん
武士八十氏

いとはずに入きたれかし秋の夜の
月も住家のかゝる手せばを
奈良花丸

商人見月

最中にて御座そろばんの分厘を
かけぬ三五の十五夜の月
くろうし

順禮見月

順禮のうつふだらくやらく〱と
寐ながら月をみくま野の宿
朱樂漢江

緇素望月

すみわたる月に虎溪のはしたなく
わらへばともに口をあきの夜
きつしう

瞽者對月

すむ影を見る目數くもせんなしと
ひとりまさぐる琵琶の半月
夕霧色

月見にはちゞに物こそ悲しけれ
我目一ッのあくにもあらねば
腹可良秋人

ある人あそびものつどひて酒
飮けるにはやうふけりにとて
おのがすみ家へ歸るを見て

美しく粧ふ今日のつきの顔
詠めあかさでぬるはをしろひ
釘武

明月如齒齡

海手からしやぼんのやうな月影を
誰がくだもてや吹上の濱
赤　良

十三夜月

清書もあがる二度めの月かげは
又一段と見事なりけり
眞　顔

やまこのみ木のみをもるや重箱の
からにはあらぬ月を見るとて
千代有員

野の末に今夜もはねる影見えて
はしる兎の耳の長つき
大石小石躬景

盃にみつればかくる酌よりも
今宵の月の入ぶんめよし
赤松日出成

月見れば雁の琴柱に雲のいと
しらべてあそぶ十三夜哉
平左股

長月の十日あまりのみかの原
わきて今宵の影はさやけき
すみかた

此月見衣はかつげと露寒み
芋のその葉に玉だれのひま
生姜一片岐

飲あかす夜は長月の酒もりに
又も名におふ菊のかつらを
白　人

十三夜月もさしでの磯きはに
ぱつかり口をあきのはまぐり

九月十日あまり四日黒髪山にまだきに雪のふりつもりたるを見るに既によはひもつもれる物からおのが白髪をつくづくなでゝよめる　所詮法師

時しらぬ今しばし待て黒髪の
峯にかゝれる秋のしら雪

秋の夜物縫しける女を見てよめる　まかき

世の中をはりの手ぎはの營みは
秋の夜を日につぎものぞうき
有　員

烏瓜藏霧

鳳凰とおもひの外のからす瓜
朝夕霧の中に見れども
秋風女房

擣衣

夜もすがら聞けばからころから衣
きぬたの音にうちもねられず
勘定疎人

そろ〳〵と睡氣きぬたの音づれに
人のはなしもうつら〳〵きく
河原鬼守

一家擣衣

二夜とはきぬたの音もせざりけり
澤邊の鴫のたつた一ッ家
春夏秋冬

鹿

狩人の目にやかゝるとさほ鹿は
聲をばかりのねをのみぞなく
卷柚菴白壁

菊

つぼのうちに猩々菊をうつし植て
さけ〳〵とのみ詠めてぞ居る
金野鳴木

咲そむる菊は山路の褚もやう

見に行く道もつまあがりにて
大菊滿笆　　遍亞方岳
月の輪にまがへるませの大菊を
露をあたりの星かとぞ見る　　山住猿雄
しら雪と見ゆる笆の大菊を
つもれば尺にあまり珍らし　　きつしう
十日菊
節すぎて見るや十日の雨障子
五日の風もしら菊の花　　節松嫁々
菊花放酒
ひたすらに藥と菊のかげ見えて
下戸もちとせやふらそこの酒
人に酒すゝむるとて笆に咲ける菊を折取侍りて　すへる
かねてより藥ときくの酒なれば
たえず千とせもあがりませ垣
ある人のもとへ消息し侍る序に菊の花をつかはすとて
愛多子子々

御やうすをいかゞと菊の一もとは
小蝶も花をたづねてぞやる　　まかき
簔虫
ちりのこるはゝその枝にとり附て
ちゝよ〳〵とねだるみの虫　　うちのり
虫聲弱
此ごろは又めづらしと菊ぞのに
鳴虫の音もをはりはつもの　　磯　嵐
秋山越
秋いたく更る山路をふみわけて
はけるわらじも紅葉しにけり　　さたむ
山紅葉
手向山神の紅葉のちりぬるを
はゞかりおほくふみてこそ行　　山東京傳
初霜のけはひやすらん龍田姫
紅葉袋にあらふ山の端　　田夫野人
名所紅葉
盃はなくてもまゝのもみぢ見は
茶碗にさけをこゝにつき橋

夜紅葉　　八十氏
秋の夜のやみはあやにく紅葉ばの
色さへ見えず香さへなくして　　邊地間河成
紅葉淺深
紅葉ばのふかい淺いを瀬にもして
渡らば錦なかやたえなん　　小牧牛歩
眞間紅葉見にまかりて
いつ迄も詠に秋はなかりけり
やはり靑葉のまゝの紅葉は
海晏寺の楓見にまかりて　　竜子嶋臺松蔭
海晏寺紅葉も酒や飮すぎて
色に出るほど見ごとなりけり　　同　月影澄遊
海晏寺むかふの海によせかへる
なみ〳〵ならず染る紅葉ば　　同　竹馬節蔭
海晏寺山にもみぢのにしきなる
紅えふすれば見ごと色かな

海晏寺にまかりけるに雅名世にひろく聞及びたる人々の我より先たちて紅葉見侍るにや枝毎に短册の附てありければ　眞弓元季

短册のつきし紅葉をみな人の
あとから錦きて見るぞよき

正燈寺の紅葉見にまかりけるにはや日のくれかゝりて茶みせの床几などとりかたづくるを見侍て　無錢芳志

入相を鐘四ッにして夕もみぢ
はや水茶屋の見せも引まへ

御所柿のいとと澁きをくひてよめる　こりふ

御所柿をしぶいといひし罰かして
きてこそ口もまがるほどなる

暮秋　しろひと

花薄ほうけし袖をふりあげて
さらば〳〵と秋はくれけり

ひけつら

どうぞしてとめたき秋の別路を
いかに尾花のあは〳〵やする

秋の夕鹿たちといふめる狆に菓子とらすとて　眞顏妹

小倉山染るもみぢの干菓子にも
鳴や時雨のちんの鹿たち

九月盡　田分耻萬里

憎からぬ我子に添ひし三九日の
茄子は嫁にくれて行秋

尻焼猿人

長月の夜も長文の封じめを
あければ通ふ神無月なり

所詮法師

貧之の秋もはてぬる神おくり
出雲の國の福やまねかん

狂言鶯蛙集巻第七

冬歌

初冬　無錢芳志

射るごとく今日より冬はたつか弓
しぐれそめ羽の矢より早き日

消明法師

木枯にちりぬるいろはふみちらし
やまけふ越て秋は來にけり

狐百首のうち初冬　京間内則

今朝ははや神無月とぞなりにける
昨夜狐にあたまそられて

時雨　手柄岡持

春雨の眞似をもしぐれ夕立の
まねをもしぐれきの定なき

寐覺時雨　唐衣橘洲

小夜時雨ふるわんぼうと成にけり
夢はやぶれてちぎれ〳〵に

市中時雨　眞弓元季

傘をさして買ふべき人も來ず
けふも時雨のふる若店かな　野老髭面

簑笠を少しもまけぬ市人は
しぐれの雨のあしもとを見て

問屋場時雨　加倍仲塗

先ぶれの過き行く跡の問屋塲に
しぐれの雲を次て出すなり

冬のはじめ桑名の驛より酒の口とりをおくりし時よめる　山手白人

桑名から時雨蛤もらふとき
とくりの酒もふりみふらずみ

落葉　久留間長持

落葉かと思ひの外にふるあめは
いつかひさしをもりの凩

落葉混雨　常産阿馬

時雨ふり落葉もりくる篠の家は
虎狼もすみやわたらん

冬のはじめ高雄にて落葉をよめる　十二栗圃

凩にちる木の葉天狗や谷川の
梢見おろす鼻高雄山

かんな月のはじめ或人のもとへ鰹をおくるとて　愛多子子子

初しぐれふるせの鰹ふるくとも
便にあげる味噌はこがらし

月照殘菊　鍋垢麿

おく露のたまさか殘る一もとに
一りんてらす月のしら菊

冬の歌とて　檜皮釘武

難波江の芦は氷の足袋の紐
とくれば岸のなみともん半

垣寒草　朱樂漢江

葉もつるもかれし垣根のはち瓢
重みにつれてかしぐ寒けさ

池寒芦　梓弓八中

寒そうなすがたの池にたつあしは
くろぶしかけて氷居にけり　銀杏滿門

水にさへゑひてやよほど亂れあし
たをれふしばのおき立もせず　遲蒔千種

池水にかれたつあしも此ごろは
氷居しよりかしこまりぬる　節松嫁々

凩さゆる汀のかれ葉しもやけに
かしけてたてる池の村あし

かんな月の頃すがたみの橋となん言ふ所に翁の立よりて休らひ居けるを見て翁にかはりてよめる　空寐待兼

我が眉におどろかれ野の霜おきて
しばし立よる姿見のはし

霜　宿屋飯盛

化粧せぬぶせう女の朝戸出に
ちと見ならへといふておく霜　一丈帶武

うち見るに下手や四五目おく霜の
白は碁ばんの目にも寒けし　鹿都部眞顔

庭霜

木々の葉をおとし話もそろ〳〵と
霜がゝりたる庭の面かな　釘武

盤銅氷

盤銅に氷れる水の手にしみて
あかぎれほどのひゞ新なり　鵜柄仙口

大河半凍

眞半分水と氷を吹きわけて
むかふの岸やきゆる川風　大事三味

諏訪氷渡

諏訪のうみや雪はこん〳〵ふる狐
わたる氷ははるかちかみち　赤松日出成

神田川氷

舟つごふ岸へと汐のさす棹も
けさは氷てかん神田川　夕霧まかき

瀧氷

瀧の糸のしりを結びてとぢつけし
氷もはりの手わざとや見ん　大屋裏住

冬月

研あげて影もするごに見ゆるかな
もろはの山をたちのぼる月　童子平次郎

行道も寒き霜夜に照るつきの
なんのくもなくうちへ歸らん　うちのり

杓子にはあらで軒端にもるかげは
飯よりこはき冬の夜の月　まかき

水鳥

池水ももらさぬをしの中なれば
いとゞ氷にとぢつきやせん　みつかど

鹽風にもまれていろの黑鴨は
そのうば玉の闇になくらん　秋風女房

池水鳥

あつさ弓をしも霜夜の池水に
ひらくともねの床ぞさびしき

霜月の頃神田川の邊をすぎけるにゆきかふ舟に驚れてむれゐる鴨のはたとたちけるがやがて舟のすぎ行あとにたちかへりて又もとのごとく水の上にあつまるを見て　紀炭堅

舟の艫に追れてちりし水鳥の
あとからともに立かへるかも　きつしう

千鳥

打て來る波のうけ太刀みつ汐の
さしこゝろえて飛千鳥かな　嫁々

曉千鳥

盃のかたぶくまゝにさゆる夜は
あしもちどりのなき上戸かな　三ふ打網

網代

網代木を夏の虫とは思はねど
ひをとるにのみかゝりてぞ居る　なかぬり

夏の夜のひをとる虫と人や見ん
かゞりたやさぬ瀨々の網代木　問屋酒舟

鷹狩

びん髭につもれる雪のふるおやぢ

別して手足のこゞへ鷹狩
　みつかさ
酒氣なきしらふの鷹をうつしても
見たき野守の鏡もちかな

冬至　　婆阿證人
冬もけふ道一筋やそへてまし
本町二丁目の青柳の糸

鰒汁恐毒　　まかき
鰒くらふ人の心ぞあさぢはら
露の命をてふにすはれて
　左候某
おそるべしかほに師走の鰒汁は
煤をはくにもくだすにもせよ

雪中煮鰒　　鴫羽盛
雪折の音に似たりし鐵炮の
たま〳〵ごとの河豚な當りそ

霙　　黒髪千筋
風のそこらこゝらを吹ちらし
居ながら空をみぞれふる屋根

霰　　しろひさ
冬來てははげしき風にまきちらす
寒さの種の玉あられかな
　靑こゝの三ふ
一しきりふると思へば玉霰
またまん丸に月も見えぬる
　ひけつら
はら〳〵と音もあられのふる桐油
たまりもあへず遠の里人

關霰　　きつしう
あれはてし不破の關守もる役も
もるに霰のたまらればこそ

茶室霰　　河原鬼守
さくら炭匂ふ圍の寒からで
音はしきりにふる霰釜

吉原初雪　　轉起安
駒下駄もおとなしやかに初雪は
ごうもたまらぬ中のてうちん

馬場雪　　きつしう
鞭打てつながぬ駒に散花は
さくらの馬場の雪の夕暮

雪中犬　　阿馬
時しらぬ山のかひ犬おのがをも
ふりつむ雪やかのこまだらげ

飛鳥山にて雪の降を見て
　仙口
きのふけふ飛鳥も富士も山つゞき
みな白砂のゆきの肌いろ

雪見に出るとて　　四方赤良
卒(いざ)さらばまろめし雪と身をなして
浮世の中をころげありかん

雪ふりける日澤邊ほたる呉竹
ふし躬とひきたりければ　　をなしく
雪の日に螢の來るもことはりや
さるおやしきの儒者も見ゆれば

淺草並木町といへる所にて朝
より酒飲けるに晝つかたより
雪の降出しければ　　眞黒面
初雪もはやふり出して袖の梅
並木に花はさけびたしかな

此日いさゝか堀出しをしければ　　福部枝炭

客とるも今日初雪の見參に
竹のこの子はよほどほり出し

簑輪といへる處に住けるおのこひとりの親をもたりけるがきはめて貧しけれども至孝なりその母酒をたしみければ　　白川與布禰

竹の子にあらで簑輪の孝行は
笠着て酒を買にゆきの夜

酒のみける時雪ふりければよめる　　戀和氣里

ちら〳〵とちらつく目には盃を
おさへて雪のつもるとも見ず

人々のつどひて酒飲ける日時雨に雪のまじりてふりければ　　壽貝高割

盃のあいをしぐれにしら雪は
つもりかねたるけふの酒盛

人々鎗劍の術を試るをりしもいと寒かりければ初雪はいつ頃ふりなんなど口々にあらそふとてをの〳〵かけものし侍りければ　　自分齋子璉

いざさらば初雪がけをしあひ口
ちらりと來てもまけと定よ

となんよみけるにほどなく雪のふり來りければ例のかけものに酒肴など調してあるじし侍るとて　　靑口齋燕河

飩酒なればお口にあふかしら雪の
ふるは少々これは壹升

雪のかけ物を鬮にふりてとりけるに四十八字といへるくじに當りて　　便々館溯鯉鮒

雪がけのだちんは四十八文字
ふつてふり出す奴四五人

人々たはふれのあまりに又乙雪のかけ物せんといへる折柄　　曉差楠

かさねては又かぢはらと笑ふべし
二度のかけにもさらに引ねば

寒夜冷酒　　蔬田脛長

さゆる夜の此一盃のひや酒は
げにのみきれぬひゞ茶碗哉

炭竈　　をかもち

内に居て見れば眞黑にたつ烟
ふじの嶺とは雪と炭がま

埋火　　足曳山町

ふき立る風も小春のさくら炭
火桶は花をちらすばかりに

藝子炬燵によれるを見て　　炭　堅

人に身をとんとまかせて置炬燵
藝子の隙もひにこそはよれ

老人炬燵によれるを見て　　嘉珍多邊安

寒けさはうすき火のけの老の身に
かしらの霜の置こたつかな

煤掃　むせん
煤はきの上着に夏をみちのくの
けふのかたびら胸あはぬ哉

煤掃客來　武士八十氏
けふすゝを取込なれど御出なら
まづあけまをせ胴になりとも

年市　むせん
時しらぬうちはも賣れる君が代を
あふぐはおろか年の市人

餅舂　橘みさへ
にえたつやこしきに米をはりま釜
しかまのかちんねるぞ愛たき

歳暮　馬場金埒
行年の尾がしらかけて鹽引の
壹尺ほどに成にけるかな

つむりの光
此者は花の春べといそぎ候
お通しなされとしの關守

根辛傳講
ふんどんの目もあてられぬ年の暮
足をはかりにかけ廻れども

燒酎何献果盛
殘り日の數もひとふし二ふしと
なりてとう／＼年はくれ竹

古家雨盛
行年の腹をかゝへて笑ふ門
袋おもたき厄はらひかな

子璉
手をつくす將棊のやうな年の暮
つまり切ては歩一ッもなし

燕河
十露盤の玉の春待つ一とせも
つもり／＼て〆かざりかな

師走の末に雁のしめとりをかへとてもて來ける人のありければひとつはこなたにとゞめて一ッはしたしき人のもとへつかはしけるにかはでかへしければ

をき安
三文の矢よりもはやき年のうちに
春をもまたずかへる雁金

山中歳暮といへる心を

吹売咽人
年越に鳥のなく音は聞ゆれど
世にあふ坂の節季候はなし

故郷へかへる年の暮に

難波鶯蓊照
をしむより猶行やらじ鳥が啼
花のあづまの年の名殘を

松前江指といふ湊にて村上氏なる人の家に旅寐し侍りて歳暮の心を詠る　平秩東作
村上をやどりにしてもよる年は
とりかへされぬ日月の旗

節分の夜色このめるをのこまめはやすをきゝて

原市
はひあるく身は節分のまめ男
そこらこゝらを摘み喰して

除夜　こりふ

桑の弓春待としのひとこぶし
鬼打まめやいるにまかせん

狂言鶯蛙集卷第八

羇旅幷離別

春日旅行　加保茶元成

はる〴〵と道をきゝすの聲きけば
我も留守する妻ぞ戀しき

物へまかりけるとてなれぬむまやに旅ねし侍りければいたうくたびれてことにはらのへりければ　武士八十氏

わらんじのひもじき人の腹ならで
足をくはるゝ旅ぞくるしき

歌合の中旅五月雨　河原鬼守

五月雨のふる借錢のふちならで
こは首だけの大井川かな

千の玄室ぬし五月雨の日古郷にかへりたまふあした　馬場金埒

雲もはやにぢり上りにあがるなり
お茶をたて場にしばし待合

師走旅行　紺屋朝手

難波がた冬の日あしもみじかくて
のびぬ師走の旅衣かな

大森といへる處にて　黑部赤杉

大森ときくや名代のなら茶飯
腹もはるはづ和中さんばい

馬入川の渡し水增りて川留りければ　をなしく

乘ることもならぬ馬入の川留に
はらのたづなやけたり刎たり

伊豆石橋といへる處はいにしへいくさありける山と聞て　をなしく

七文のつかひなすともおとすまじ
此石橋のはした錢なら

小田原にてういらうもとめて

くれかしと人の約しけれどあたへなければその言譯とて
をなしく
約束はをだはらづとの片荷ずり
ひとつゝみさへ旅はういらう

箱根山をこえて三嶋といへるむまやにはた織女のありけるをよめる
をなしく
峠から近くみしまのふともめん
たら〳〵をりてとまる旅籠や

月の輪の池にて　莚田脛長
草枕ふしみの里の夢の間に
いつか石部へつきの輪の池

不二の高根いと雲のかゝりければ
をなしく
裾野から雲の衣をあしたかに
はしをればふじの邊り迄見ゆ

何某侯の城下をすぎて
平秩東作
御城下の月見て罷通るなり
せめて枝豆丹羽左京殿

大井河川留　元成
川留にあふて居ながら狂歌よみ
よんどころなく名處をぞしる

舞坂にて　蔦細道
舞坂は三里にすゆる灸ならで
いま四五町になつてくるしき

梅澤の宿にとまりて
春夏秋冬
名にしをふ爰は繼穂の梅澤や
早くもつきてみはとまりぬる

卯月朔日ふるさとへ歸る人にむまのはなむけすとて
内匠半四郎
古郷へ錦の駄荷を先に立
身もはる〴〵と更衣かな

をなじこゝろを
万歲館十口
旅衣かへるも夏のはじめゆゑ
うのはなむけに一首しん上

したしき人の古郷へ歸る折からよめる
檜皮釘武
古さとへ歸れる人に糸つけて
いかのぼりなら引やもどさん

黒邊赤杉このみてさし物細工なんしけるに或時箱根のいでゆへ行けるをおくるとて
牛籠遲道
赤杉のゆもとをさして行先も
箱根ときけば打つけた旅

ある人江嶋へ旅立を送りてよめる
獨寐つゝき
旅衣たつた十里かそこらにて
むさしさがみとしばし別れ路

物へ旅たちける時送りの人によみてつかはすとて
唐來參和
立かへり故郷の人にあいたしこ
ふみ出す足のまゝをみやげに

片岡に旅寐せし頃つれなりけ

る人の按摩とらせければ　橘實副
心よくあんまをひねるかた岡に
あしも達磨とふせる旅人

神奈川むまやにて　身性不案人
何處迄も青いいろはに帆の數の
風にちりぬるかな川の沖

狂言鶯蛙集卷第九

賀歌

豐年貢　久留間なか持
ゆたかなる年の貢はつるかけの
升より民のみてやはからん

九十賀　節松嫁々
呉竹のよねの守はをさヽしと
かぞふる節に千代やこめつる

茶をこのめる人七十賀に　紺屋朝手
なヽそぢをへても達者なあしや釜
猶かけめぐれ千家二千家

元服賀　無錢芳志
元服をするがの不二の根ぞろへは
雪のしら髮となる迄やゆふ

新宅祝　千代有貞
ひろ〲と建たる軒は高砂の
いく万年もこヽに住の江

寄月祝　白川與布禰
あきらけく戸ざヽぬ御代と我々が
中もおそれ有明のつき

寄山祝　大木戸黑牛
君が代は我背戸裏のはきだめも
あま雲かヽる山となるまで

寄扇祝　尻焼猿人
有がたき御代にあふぎの嬉しさは
骨も折らずに榮え行くなり

寄雪祝　山手白人
源の御代はふりせで草も木も
つもればなびく雪のしら旗

寄鶴龜祝　唐衣橘洲
かぎりなき君が齡やうらやまん
鶴は千年龜はまんねん

寄鰹祝　名万壽盛方
竹の葉をかいしきにして松の魚
ひとふしごとに千代は込たり

寄德利祝　山蔭青則
君が代は神のおまへにふる鈴の

徳利のみきのくめどつきせず

寄赤飯祝　嫁々

胡麻鹽もふれや千とせの色直し
衣桁にかけし赤のめし物

大事三昧

君が代にすむ身はあかの色つけて
猶いつまでもたのしむし飯

四十の賀したまひける家にて

鹿都部眞顔

萬世をへんたらことてお賀の餅
つくともつきじ君が齢は

寄鍋祝　紀定丸

老の腰かゞまるつるも千年と
いはふときはの松の鍋ぶた

寄鏡祝　足曳山町

鏡臺にみがき立たる化粧水
影もくもらぬ千代のためぬり

寄烟草祝　遅蒔千種

小山田に稻苅る賤が竈にも
朝夕たえぬけふり草かな

寄杖祝　まかほ

つきせじな千とせの後の鳩の杖
まめてひろはせ給ふめでたさ

鈍々案山鹿

限りなくすぐにあやかれかしの杖
ふし〲にさへ千代を込れば

寄硯箱祝　田夫野人

公事沙汰もさらになし地の硯箱
かく納れる御代にすみ筆

寄瓢祝　まかほ

おめでたや君は千代の子瓢簞の
百なりなぞは數とりにして

寄文祝　白壁山人

いろ〲にかきあつめたる松葉紙
猶いくちよをふる筆のあと

寄筆祝　いつもの早秋

かくばかりめでたき君が命毛は
千代ふる筆のたまるかず〲

武士八十氏

君が代はたゞしき道のありま筆
つかへまつりに顏を出さばや

寄硯祝　古瀬勝雄

君が代のためしにするや硯石
江戸むらさきの色もこもりて

夕霧邑

やはらぎし御代は死の硯いし
されば千とせをへるぞ愛たき

御儀式日御料理頂戴しけるに鯛の三道具の有ければ鍬鎌すきといふことをたて入てよめる

酒大増長機嫌

かまはずに自然と福は來るぞすき
是れ頂戴の三道具なり

寄鳥祝　朱樂漢江

治れる御代は練めの鼓にも
こけかうとなく鳥ぞかしこき

狂言鶯蛙集卷第十

物名

ひたいはこ　　　　梓弓八中
見わたせば姫も若衆も月びたい
はごの子ぶりはいづれ芬らじ

むめぼし　　　　山中多都杖
御馳走にあつくわかせし居風呂を
むめぼしやとは言も出されず

みそこし　　　　出諏訪耳彥
たつことはならで坐りし老のみぞ
こしもふたへにかゝみ餅なる

魚名十　　　　山手白人
こ(鯉)いしさ(鯖)はいか(烏賊)にます(鱒)かさ(鰊)ふく(鰒)風の
なさけ(鮭)開たい(鯛)いな(鯔)のさゝはら(鰆)

たちのいほ　　　　黑婆千筋
千早ふる雨をこ祈る神垣は
しらゆふだちのいほさきの森

うたかるた　からすみ
田舍うたかるたのおもは賑ひて　　　鳴羽盛
隅からすみへつゝみかけ稻

かまぼこ　　　　遲蒔千種
ちりの世を出しすみかも鍋や釜
ほこりだらけの世話ぞ遁れぬ

小角豆　茄子　初茸　　　　四方赤良
年はまだ十六さゝげおはぐろを
つけなすこともけふの初茸

鳥名五　　　　白川與布禰
學びつる(鶴)ふみの中にも四十から(雀)
まよはずとき(鴇)くをし(鴛鴦)へ有けり(鳧)

五味五色　　　　便々館湖鯉鮒
青ければ苦き(甘)鹽(白)つけ(黑)こうから(赤)(辛)し
それをあまさずくろふ物ずき(酸)(黃)

狂言蛙鶯集卷第十一

戀歌一

初戀　　　　平左段
けふよりや人めの關をはかりても
まづふみそめんにはとりの跡

　　　　智惠内子
只ひとめ見しは初瀨の山おろし
まづふみそめんにはとりの跡

　　　　武士八十氏
此戀はなるかやぶるかゆくりなく
思ひたつ日よ曆だに見ず

初逢戀　　　　名方壽盛方
虎の尾をふみ見しよりも初に逢ふ
うき名やなんとせん里走らん

鼠百首の中に初逢戀　　　　使々館湖鯉鮒
抱しめて命を逢ふにかへんとは
こやくひつきのはつか鼠か

忍戀　野老髭面
わが戀はしのぶとすれどふる桶の
たがいふとなくもりや初けん

忍待戀　左候菜
しのぶれば色にも出さず空寐入
いびきをかくと人はしらずや

待戀　山手白人
物思ふあたまをさしてさがり蜘
ふらりと人を待宵ぞうき

不逢戀　こりふ
どうしてもかうしてもねの出來ざるは
あはざる戀の重荷なるべし

鳴瀧音人
我こふる人はいすかのはしたなく
口もちがふてあはざるぞうき

つむりのひかる
いぼ結ひにむすぶの神の結びてや
今に一度もとけぬ下紐

再賀
逢坂はつらき戀路の難處にて
こえずに歸るむだ足ぞうき

遇不逢戀　於保久旅人
うつり香の殘りてこしをふる小袖
今は身幅もあはできれぬる

思　羽禽堂莊夢
我胸にもゆる思ひを消さんとて
口へつぎこむ酒もすさまじ

片戀　葛屋月守
一ぱいにはりたるかたのかた思ひ
かくもめる氣を人はしらずや

鹿都部眞顔
思ひきや十府の菅ごも七ふぐり
女にまけてまろねせんとは

師走ばかり淺草わたり市たちぬる日雨のふりけるにみめよき女のかなたこなたさまよひありくを見て　紺屋朝手
容色も第市人のぬれごとは
十七八の雨のふりそで

片服なる人の戀に身をなやませるを見てよめる　をなしく
この戀はいつかあはびの片目貝
人をまつ毛ののび〳〵にして

雨もふらざりけるにかさゝして行くむすめを見てよめる　田原杉成
濡るまで日和のよいに雨がさは
照されうかと顔かくすなり

別戀　畦道
又いつとちきる別の手枕に
髮もかたちもとり亂れ鳴

飲口はしる
名殘なくすぐにかへるもうしろ髮
みだるゝ心あとにくし〳〵

顯涙戀　八十氏
忍ぶれどもりてなみだやふる土瓶
かけし思ひのあまりつよさよ

被聞寢言顯戀　唐衣橘洲
今更に夢になれどもかこたれず

もとねごとより洩し浮名は

變戀　春夏秋冬

あきやすき人の心ぞそら錠の
かけてたのみしかひもなき哉

久戀　さたん

逢ふことは今に叶はず錦木と
ともに日數のたつぞかなしき

無實戀　こりふ

忘れてもわすれても又慕はるゝ
戀の冥加ぞ身に叶ひぬる

不言戀　朱樂漢江

口外へ未だ出さねば三寸の
我舌にのみ思ふくるしさ

ひけつら

おもふことといはで月日を杉の葉の
たきつけとなりて胸のもゆ蘭

歌合の中に不見戀　白川與布禰

我戀はすべるちりけの灸なれや
こがれながらも見るよしもなき

武士戀　出諏訪耳彥

戀ゆへに名は帶刀の先生も
思ひきられぬものゝふぞかし

大原さこね

かちたちて千里の外に通ふとも
帷幕のうちにふたりねよかし

虛無僧戀　しろひと

天蓋の下にや物をおもふらん
人にしられぬれんぼながし目

思幼戀　まかほ

いはけなき七ッ小女郎思ひそめ
戀のやつことなりにける哉

老人戀　夕霧色

契るべきことの葉もなく老ぬれば
をとしめされて腰ぞ折ぬる

盲目戀　をなしく

らうたしと見る目もかれてあらざれば
せめて浮名やたてゝきかなん

下戸戀　加保茶元成

上戸なら鬼ころしともいふべきに
人ごろしなる情けなの君

農夫戀　諸見上純

朝夕にわりなき戀のかたいなか
こめん誓も二畝歩三畝歩

早乙女戀　ひかる

早乙女のさみだれ髪をとりあげて
せめてひと夜はなびき玉苗

大工戀　をとんと

みじかなるきを次の間に隙とるは
戀にひかるゝひやり番匠

疊刺戀　もとなり

たまさかに近江表のうらみもを
むねへたゝみのとこの別れ路

職人戀　於曾禮長良

忍び逢ふ夜鍋仕事に手つけうつ
かねを相圖に下細工人

瞽女好色　常産阿馬

何ごとのおはしますとも若ごぜの
まさぐりよりて袖やひくらん

銀杏滿門

色好むその目の玉のさかづきも
そこゐなまめくごせの取なり
みそかごとしける女をのが子どもとくねせつけてこれかれさかななど調じてかのことをとこに酒すゝめんといとけさうしてゐけるを見て忍びやらず口さがなうよめる
河原鬼守
忍びくる人をまつまへ數の子を
ねさせてあまの月をみるふさ
雪中戀　八十氏
戀風の吹まはしやらしら雪の
つもるも今は首だけにして
雷　宿屋飯盛
いな妻とゝもにそひねのうてう天
雲となりまた雨となる神
燒酎何献桒盛
雷のごうなるとてもなかごより
忍び〳〵に通ふいなづま

題しらず　阿古木引網
水くきのあとかたまらぬ道普請
たゝふみ附て見るも甲斐なし
飯焚女の戀のこゝろを　邊地間河成
思ふ事まゝにもならずふつ〳〵と
釜のふたりがなかの口ぐせ
憎老戀　たぬき
したふともよししは面の髭しら髪
こや老ぼれと人も憎まん
犬百首の中に　檜皮釘武
戀死なばそのまゝ狆に生れ來て
君がしとねのはしに伏なん
河邊二國
おもひそめ淺黄にあらぬふる小袖
あらはるゝとも色はかはらじ
乞食戀　耳彥
もらさじとかねて契りし袖乞の
うきなも人のめかごにぞたつ
阿馬
しのべどもよしや乞食のもらひ物
つゝむにあまる戀もする哉
水茶屋に立よりけるにわかき女のはらいとたかうして顔はことにうるはしくて有ければ
千里亭白駒
立よれば誰も横手をうつくしさ
妹がおなかのやゝ見とれけり
名立戀　馬場金埒
ふり掛しいもりの灰にあやかりて
ぱつと立たるうき名はづかし
わか戀は　かん江
我戀は下手のはりたるふすまがた
かたの如くにあふよしぞなき
わが思　きつしう
つれもなき人の心のあらくまに
せんかたつきのわが思ひ哉

狂言鶯蛙集巻第十二

戀歌二

寄羊戀　四方赤良
あかつきの鐘にちぬれる誓詞さへ
うしや羊にかへられし身は

寄牛戀　すねのけはへ
人心うしの涎のながふみに
うらみたら〳〵筆もはしらず

寄狐戀　唐來參和
玉の緒もたえるばかりにふる狐
こんといひても幾夜つりわな

寄虎戀　榎雨寄住
つれなさは風の便りにいひよれど
はりこの虎のかぶりのみして

寄泥龜戀　夕霧色
間違ひて逢夜もあらばとりよりも
猶すつぽんのときやつくらん

寄蛙戀　加保茶元成
水くさき人にせき込む此身ゆへ
蛙となりて飛つきやせん

平左段
蛙なく池の水ぐきあと見れば
飛たつばかり思ふわりなさ

寄鷄戀　堂伴白主
人しれず思ひをかけのたれをとて
落るなみだぞ玉子ほどなる

寄鶯戀　澤邊横行
わが戀は鶯の餌にあらねども
なはすり鉢の音に立けり

寄山雀戀　鍋垢丸
あさからぬえにしもあれば山雀の
かごとばかりも目でや知せん

寄水鳥戀　空寢待衆
あささきも見ぬ水鳥のうき中は
ぬれてその名を流しもち哉

寄万歳戀　節松嫁々
逢ことのたまの冠緒引しめて
いつとくわかの君が下ひも

寄芝居戀　銀杏滿門
よはらじな一夜ねずとも鼠木戶
むねの火繩の烟くらべて

寄猿引戀　物草明輔
忍ぶより戀はまさるの綱なれや
又引かさるゝ門立もうし

寄神祇戀　朱樂漢江
しるや人はなを神漏岐神漏美の
みことと夜ごとになき明すとは

寄梅戀　大石小石躬景
八重ひとへふみ玉章をやり梅の
けふ九重に匂ひさへ來ぬ

寄竹戀　藤滿丸
戀風に起ふししげく思ふとも
すてゝよそへはなびくなよ竹

所詮法師
まつすぐに心の竹をうちわりて
人に見せたきわが思ひかな

寄土筆戀　貴賤遊之
さま〴〵の心づくしも筆にては

思ひを野邊ぞふみちらし書

寄牡丹戀　竹杖爲輕

かくばかりいつしかはまる深み草
花のはつかに契りそめかし　秋風女房

相思ふふたりが中もこく牡丹
うしとはいはじいろ深み草　無錢芳志

とにかくにつらき思ひの深みぐさ
蝶になりてやよりもつかなん　渭明法師

命をば逢にまかせしよろひ草
をどしまじりに口說てや見ん

寄栗戀　見越入道化高

頬ゑむとみれどもつらきいが栗の
繰言ながらとくおちよかし

寄柚戀といふことをある遊女
にかはりてよめる　加津鹿蟹子丸

契る夜のとこゆの數のかさなりて
つゐにはすいとなれるみの果
すいといへることばはいろこ
のみの心いたれるをいふにな
ん

寄洞簫戀　問屋酒船

れんぼから起つた胸のしやく八を
おさへつゝねもよみとうた口

寄階子戀　大事三味

よをこめて深き思ひのたけはしご
かけし板屋のむねぞくるしき

寄太刀戀　遲諸千穂

振りあぐる太刀の切先に向ふとも
逢ふにかへたる身をば厭はじ

寄菖蒲刀戀　宿屋飯盛

こひ口のかたきをなんと菖蒲太刀
君ゆゑ胸もけづるばかりぞ

寄寶珠戀　元來貧候

及びなき姿をかいまみたからの
たまのあふ夜もあらば嬉しき

寄盃戀　田毎月影

お銚子のかはる心とつゆしらば
たまさかづきにあいも賴まし

寄土器戀　無大盡茂平兼

土器のかはらぬよしをあしならで
ふみかきよこす細々しさよ

寄琴戀　いつもの早秋

及なき戀はくも井の調子にて
ひとり心をつくし琴かな

寄三弦戀　早染小紋

てうしよきあいの手くだも忍び駒
思ふほどにはかたりつくさじ

一帖程村

三味線のかはをへだてし戀なれば
あはぬてうしの身社つらけれ

松千とせ

三味せんのてうしかはらぬ海老尾
たゞ手にかけて祈るかみごま

狂言鶯蛙集巻第十三

戀歌三

寄鼓戀　尻焼猿人
音に立てなをも鼓のうつゝなや
三ッ地のふみの長地短地

寄双六戀　をなしく
双六の乞目といへど來ぬ人の
涙の雨とふし出し筒

竹屋町粘吉
一筋のおもひにたえぬ双六の
ふりつけられし夜はゝ恨めし

常產阿馬
ゐいやつと結ぶちぎりは双六の
ひとめくるしき戀もするかな

寄兜戀　白川與布禰
扨もふさ我仇し名や龍がしら
しかと忍びの緒はしむれども

寄劒術戀　出諏訪耳彦
相打にとんとうち込木太刀では
きれぬ思ひのたけ具足かな

寄土圭戀　空寢待兼
待兼る心のたけの尺土圭
ひとりくるひてあはぬ夜ぞ憂

寄竈戀　節松嫁々
消ねたゞ戀のけふりにむせぶより
どうで竈のまゝならぬ身は

寄茶碗戀　山手白人
すれ〳〵の中と茶碗の名のたつも
誠はりんきりんなりの沙汰

寄屛風戀　をなしく
ひとり寢にあらぬ思ひをすゝめ形
枕屛風のうらみやりつゝ

寄筆戀　十二栗園
かくばかり命毛かけて思へども
筆のなさけのしんなしぞうき

寄曲尺戀　北川北川
戀死なば鯨となりて物ざしに
つもる思ひのたけやしらせん

寄剃刀戀　大束冬名
實に深きえんを結ぶの剃刀は
とてかくしてあはぬ日は無

寄巨燵戀　手枕歌種
忍びては人にこゝろを置巨燵
あたりとなりへきを配りぬる

寄木枕戀　大石小石躬景
夜もいたくなるまで待し木枕の
又寢がへりのかたきやくそく

寄挑灯戀　庵扇法師
燈すともくらき思ひのてうちんは
うちにこがるゝえんの苦しさ

寄錐戀　大木戸黑牛
我戀はなまくらがねの錐なれや
きばかりもんで先へ通らず

寄家具戀　與布禰
忍ぶ身ははしなき戀の山折敷
どうして人に會津椀家具

寄摺鉢戀　万歲館十口
忍べども戀すりばちの音たかく

誰水さしてうすきえにしぞ

寄洗濯戀　帒筒長

夏の夜ははなしたらいの戀衣
あかぬ別れにいかゞせんたく

寄毛毯戀　紀定丸

我こひは身より出せるさび毛毯
迚もしつくりあはぬつらさよ

寄居風呂戀　算木有政

風呂がまのひとりせなかに片思ひ
さゞかぬあかをよるぞ物うき

寄石なご戀　網破損針金

今さらに我やはぢかん石なごの
手のうらかへす人の心は

寄紙屑戀　歌　種

いのりてし其かみ屑のかごなれや
人もねだんをふみのかず〳〵

寄湯戀　みかけ

わきかへる湯玉にこがす胸のうち
思ひのたけをくみわけてたべ

寄紙戀　草原千陰

人心いはきより猶かたくとも
はりつめしみのかみ掛てせん

寄鯛戀　門限面倒

いろ香には顯れぬとも鮮鯛の
ちとござつたと見える目のうち

寄粟餅戀　垢　丸

露ほどもいつはりいはぬ口なしの
色やふかまの中のあはもち

黄金音好

つゝむより餘る思ひのたけの皮
とけて一夜もあはもちぞうき

寄醴戀　酒上不埒

あま酒のなれそめしより此味の
かはるべしとはくみも知ずに

赤松日出成

忍べども人の言葉もあまざけの
ひとよ〳〵になれて通はん

余旦坊

馴れそむる炬燵の中のあまざけは
變るまいぞとつゝみてやいふ

うらむる戀と言ふことを

面　倒

口のうちにふつ〳〵なれて醴は
只一ぱいのうらみいはゞや

寄麥粉戀　くろうし

とにかくに口もまはらぬ麥こがし
かくす涙にむせかへりぬる

寄海苔戀　秩夫絹平

生海苔のゆかりの色はかはらじな
淺草川に名をさらせども

寄眞桑瓜戀　しろひと

我ながらうしと鏡にむかはなん
瓜實顏のこひのやつれを

寄柿戀　名万壽盛方

靑かりし頃より見そめつるし柿
澁氣もぬけて色つきにけり

寄鮑戀　唐衣橘洲

思ふかひなしとはいはじ辛けれど
たまにあはびも眼の藥なり

寄赤貝戀　久留間長持

わが戀は赤貝馬のかたあぶみ
かた〳〵かけて逢ふ事もなし

寄鉋屑戀　千代有員
あとかたもながらの橋の鉋くづ
焚つけられてもゆる思ひは

寄壁戀　無錢芳志
ぬりこめてうきを蜆のかたし貝
あはでいつまで年をふる壁

寄墨壺戀　武士八十氏
つらかりし人と一處にすみつぼは
いとたへがたき物にぞ有ける

寄棟上戀　むせん
棟上のもちゐをなげの情とて
ふみつけたれど取ゐげもせず

寄漆戀　河原鬼守
身はよしやよしの漆にかぶれても
ふたり紙張にぬるよしもがな

寄烟草戀　酒盛入道常閑
一ふきの風にもなびけ烟草
口すいがらの殘りをしまへ

寄稻妻戀　京間内則
稻づまも忍ふ今宵のわが目には
門口あけゐ鍵かとぞ見る

寄雲戀　まちかね
紅つけた口で眞赤なそらごとを
又夕やけの雲もうらめし

寄山戀　眞弓元季
蓋も身もはなれぬ中の箱根山
これぞ思ひの雲のいれもの

寄嶋戀　馬場金埒
わが心あけて見せたきをり〳〵は
腹に穴ある嶋もなつかし

寄橋戀　うちのり
わがこひは二ッ一ッのまるきばし
ふみかへすやら返事するやら

寄筏戀　向陽菴虎溪
我ばかりこがれいかだの日數へば
いたづらに名は朽もこそすれ

寄初霜戀　日出成
ことの葉もさすがに戀の初霜は
とけぬ思ひの胸にみち芝

寄月戀　銀杏滿門
いつとても胸の思ひの月のうちの
うさぎのきねの休むまぞなき

寄浪戀　うちのり
假初のこひ路にとしをふる沼の
やゝ水こもりて見ゆるなりけり

寄夕月戀　あかまる
だまされた其恨みさへはれぬまに
又そら言を夕月夜かな

寄謎戀　をにもり
いひかけた謎がとけぬか一筆の
へんじも今はなきり庖丁

寄狂歌戀といふことを　朱樂漢江
言よらんえんさへ遠きたはれ歌
ごうぞ手にはの逢ふよしも哉

狂言鶯蛙集卷第十四

哀傷歌

荒川樂記が身まかりけるのち草庵にのこせし筆𥫽を見て
婆阿證人
あはれさはふき物の音も絶はてぬ今に樂器の名のみ殘れど

永井何がし身まかりてまたのとしかの家にゆきて
牛込遲道
雪に舞ひ月にうたひし俤も花もこの世に嵐ふくなり

日ごろしたしう來りし道心の侍りしが身まかりけるよしその子にて侍るが告こしければ
加津鹿盤子丸
くやみいふ百万遍のくりごとに涙は珠數のたまぞつらぬく

はつきの廿日あまり四日普栗釣方か一周忌に
四方赤良
一めぐりめぐりて見れど今は世にふりちうふくり無ぞかなしき

七十九にて身まかれる母の三七日に
空寢待兼
はからずもよねに間近き一生の齢はつきてけふぞみなぬか

物事うときこのみてからやまとの文ども見けるが水無月ばかりに身まかりければ
智惠内子
あつめつる窓の螢の影きへて涙はふみのしみとならなん

ある人の妻にをくれしを弔ふて
赤土壽邊留
ひゞ〳〵に思ひ出せしつま琴はひけどもなんの音づれもなし

何がしの一周忌に
加保茶元成
一めぐりめぐりくるまの忘られずけふやなげきを身に積はうし

某侯の墓に謁しけるをりふしはらのいたうへりければ
武士八十氏
朝飯のまゝにいで羽のおくつきををがめば腹も空うすらし

題しらず
膝元さくる
しぼみてはつる一筋のたのみにてひら〳〵みらいは翌の朝貌

大束冬名身まかりければ詠てつかはす
朱樂漢江
藺相如いまさでまたく此度もよもつ國より玉かへせかし

朱樂漢江が家にかひをける犬いたくわづらひてやがて死ければ人々ふかうなげきたまひてひとのごとくれいのさほうにとりをきものしたまふを見て
銀杏滿門

小便をしかけ〳〵てゆく道の
かぎりしられぬ死での山犬

おなじく犬のおくつきにむかひて　　かんこう

來世にてならば佛果をえのころよ
なむあみだぶち南無阿彌陀班

辭世の歌とてかねてよみ置はべる　　白川與布ね

死ぬ迄は人に御世話をかけまくも
それから先は南無あみだ佛

狂言鶯蛙集巻第十五

雜歌一

朱樂漢江狂歌集えらべるとて古今六歌仙の題詠をすゝめたまふよしふん月十日ばかりしたしき友の來りてみづからにもとそゝのかしければふといでつる歌二三首ばかり遣すとて　　無事館四交

花もがな此文月の十日あまり
一葉二葉のわらひ草にも

攝津國難波屋半兵衛か許にてかさ松を見て　　十二栗圃

青紙を春や難波津さして來て
みればのどけき日傘松

蓮田脛長

難波屋に千代をふるねの笠松は
あめが下枝のかざしとぞ見る

節松嫁々としごろかひおける山雀の籠のやぶれより逃行けるをよめる　　銀杏満門

にぐるとも籠のとにかく山がらは
かへりくるみのえにし忘るな

返し　　節松嫁々

今ははやをしむかひなき山雀の
籠にもどりはうたじとぞ思ふ

あけら館主人狂言鶯蛙集をえらべる頃白川よぶねともに書肆蔦から丸がもとへ行とて常に通ひなれたる道なればこなたなんちかしといひけるによぶねあなたこそとすまひければ　　便々館湖鯉鮒

近道といふにさら〳〵聞いれず
さすればよほど遠き耳かな

返し　　白川與布禰

近道を行くにさうとも見わけぬは
よほどならずのめくらなりけり

下戸貰酒　鍋垢丸
あんもなら餘さじ物をそれならで
下戸の貰ふはなさけなの樽

大津繪　波越芦葉
目にも見よ角はをれてもふせ鐘の
音にきこえし鬼の念ぶつ

一休和尚のゑがける烏扇のかたをうつして歌よめといひければ　四方赤良
扇面になかぬ烏の畵を見れば
生れぬ前の大德寺なり

猫に蝶のかたかきたるに　をなしく
莊周も猫に追れてうなされん
胡蝶となりし春の日の夢

武藏野のかたかきたるに　尻焼猿人
月弓のよつ引ひようとはなすゝき
名もあたりたる武藏野の原

鍬の上に一もと菊の畵に　山手白人
誰がかたへ貰はるゝやら鍬の上に
ひともと置るつゆの白菊

仙人物あらふ女を見て落るかたかきたるに　唐衣橘洲
仙人もこのむ處はひとつにて
落ればおなじ谷川の水

琴と批把をかきたる繪に　夕霧まかき
迚も繪にかきならしたる琴とびは
引くらへではくひ物ぞよき

虎を畵る扇に　俗筒長
是もまた扇の骨の竹に住む
虎の繪なれば風起すなり

白拍子の畵に　こりふ
あちこちの風をそらさぬたを柳
めの出るほどに春もせわしき

鯨の汐吹かたかきたる繪に　武士八十氏
荒海のいかれる魚もふき出す
そのしほのめをみればやさ敷

夫婦いさかひの畵に　をなじく
振あげてたゝきまはしとすり鉢は
みそか男のあるとしるけき

仲の町の櫻のもとにうかれ女の客送るかたかきたるに　宿屋飯盛
傾城と花とをあかでみる時は
入相もいやしのゝめもいや

うかれめの文もてたてる畵に　與布爾
遠近のふみのたつきにうかれ女も
むかふの人を呼子鳥かな

栗のかたかきたる繪に　赤土壽邊留
これも又あはれなる戸の船ならで
ほを一ぱいにあげてこそかけ

賤の女のはた織る畵に　久留間長持

篋とりてしたふかいこのはひ習ひ
めをはなしてはをられざりし皃
雷の蜘の巣にかゝりたるかた
かきたる大津繪に　福部枝炭
かみなりも落たらやいて桑原と
凧にして引さゝがにの糸
頼政の畫を見て　松下風
登るべきたつきばかりの足なくて
何をあてどにしゐやひろはん
よし野山のかた書たる屏風を
見侍て　幾代餅春
立ながらみるもよしのゝ山なれど
今宵屏風の花の下ふし
隣家琴　紺屋朝手
かきならす垣のあなたの琴の音を
こちふきぐみと氣迄春の日
商人の琴をしらぶるを　臥猪莿藻
引しめてあはぬも道理そろばんの
たま〳〵ことは調べても見ず
いはけなき女の琴しらべける
を見て　すへる
十三のいともやさしきつま音は
やがて雲井に名をやあげまき
船中三味線　朧朝
三味線のいと面白き波のうへに
船もこゝろも浮てながれん
ある御方の御まへにてうたう
たひけるに三味線のいとのた
たび〳〵きれければ　下手長字多
きれずともよき三味線の糸きれて
痰のきれぬはなさけながうた
江戸太夫東雅にをくり侍ると
て　無大藎茂手粂
自からひらける花の江戸ぶしは
河東なりてぞきくべかりける
傾城夢　めしもり
傾城のねる間もばから周が夢
胡蝶と呼びし昔をぞ見る
新造居眠　みつかと
川竹のながれに船をこぎ出せば
げに新造といふもことはり
あるたはれめの五色の歌よめ
といひければ　よふね
白無垢と黄むくの上に紅からの
青茶の小袖黒繻子の帶
醫師無藥箱　梓弓八中
藥箱なしもつぶてもうつたへの
あたりはづれは醫師の運づく
儒者逢雨　渭川法師
俄雨不慮に骨までくされ儒者
いがてかひたる君子とは見ん
獨身儒者　加保茶元成
たのしみもなきひとりねや我肱を
まけてまくらにしのたまはく
ある法師の博奕このめるよし
きゝて　京間內則
ばくち打ほどの智ならばこの法師

かならずさいも持やしぬらん

下手揚弓　腹可良秋人

揚弓の射手には下手も有馬山
矢とりの尻をいなのさゝはら

伽羅盗人　眞志良桃實

蘭奢待袖にかくせど夏の夜は
かもねず人もあらはれにけり

盗人晝寝　大木戸黑牛

くるゝまで松の木かげにしら浪の
よるをあてにや晝寝するらし

ある田舎人の家に盗人の來りて糸おほくとりたるときゝて

八十氏

きぬ糸をとりもていにし盗人は
もとよりおこの物にぞ有ける

盗人の入て其まゝ出ていにけるよしをきゝて　無錢芳志

ぬすまるゝものをば質にをきの石
よし白波のうちよするとも
下郎に善惡なしといふ
つねつね

百の内ぬけば中居やはした錢
みたしきゝたしさしも構はず

官女放屁　智惠内子

上臈も屁の玉だれをすかしては
はなのとぼそを抑へてぞ見る

何がし痴氣をうれへて常に放屁をするをある人いたくとがめて芦邊鶴といふを題にてたはれ歌よみてこそつみをあがなへかしといひければ

橋本蠻太郎

老を啼く鶴のせんぎの夜はなほ
ひるもあしべの處きらはす

公家の算盤にむかひたるかたかきたるに　鹿都部眞顔

そろばんの玉の冠をつらねしは
これ百寮の見一の人

網破損はり兼

そろばんの玉のうてなのみや人は
ひとけたのぼる位とぞしる

神主洞簫をふくをきゝて　五足齋

神主のさゝぐる神酒はひとよ切
其歌口をしめすばかりぞ

高麗のふき物のよしにてちやるめらといふ物をこのみてふきける人によみてをくる

こりふ

其中にちやるめらの音の高ければ
からさはざにもなるぞ笑しき

ある人名をとはれければ

ひきのつらき

面(つら)に水かゝるもまゝのかはづにて
井筒の外に音もやもらさん

坊主遊山　濱虎坊鷄子

氣も野邊の氣色に傘のかさはるを
坊主持とて雨のけもなし

雨のあした人の小袖を着て行ければ

若氣波屋留

すべるなよ雨もはれ着のかり小袖
　ゆきさへ長く思ふ道なり

　ある人に灸すえて貰ひしにま
　はしやきにし侍りければたへ
　がたく暑きを　一丈帶武
土器をほしてまはすや灸上戸
　おさへられてもいたみ諸白

　やつがれに灸すえよと人のい
　さめければ　出諏訪耳ひこ
また灸をすえたのもしき御異見は
　さて〳〵あつい思めしかな

　灸すえる人のもとに行て
　野老髭面
すゆるより病のねをば錐もぐさ
　もみ込やうによしいたむとも

　ある人澁川流の柔術出精のよ
　しきゝて　自分齋子璉
柔術にみのいる栗のしぶ川は
　手を出すさへもいたいお稽古

狂言鶯蛙集巻第十六

雜歌一

　竹馬行列　平秩東作
乳母がもち五ッだちなる行列は
　目も竹馬の伏見泊りか

　橋　銀杏滿門
あとかたもあらぬながらの橋柱
　ながく朽せぬ名ばかりにして

　竹　平左段
おきふしもむづかしけなる布袋竹
　そのねからこのいかに殖けん

　鶴　手柄岡持
芦の葉の片假名ならば眞名づるの
　聲をもわかのうらみ成べし

　龜　四方赤良
よろづ代もくむ酒がめの尾を曳ん
　酔てはどろのごとくなるとも

　富士山三十五首の中に
　豊藏坊
しら雪のふるがね店の不二香爐
　あまりたかねで買ふ人もなし

　富士　河原鬼守
赤人の苗氏の山といふ字にも
　またへの字にも見ゆる不二が根

　瀧　左　段
山手よりさつと白旗ひと流れ
　落すと見しは瀧のみなもと

　王昭君　武士八十氏
おもひきや都を遠く出ていま
　胡地の人よと言つべしとは

　越後のしらが海苔を囃て　平秩東作
とし波もよりくる濱のしらが海苔
　磯菜とや言んおきなとや言はん

　秦黒つらが家に人々つどひけ
　るにこれかれあるじし侍けれ
　ば　朱樂漢江
梓弓彌左衛門町のまどゐとて

肌をぬいだるけふのもてなし
羅保曾通か家にて朱樂漢江便
便館湖鯉鮒などゝともに酒た
うべけるに蘭陵の酒もかくや
と人々いひけるをきゝて
　　　　　　　　白川與布襴
この酒は千とせの松のもとなれや
琥珀に色の透通りぬる
　返し　　　　　羅保曾通
客人(まろうど)のこゝに琥珀もたまなれや
塵の藁屋の吸筒のさけ
　まらう人のいたく酒に醉たる
　に杖をつかすとて
　　　　　　　　牛籠遲道
足もとはよろ万代もこの杖を
つき雪花にあかぬ酒もり
　みな月廿日あまり九日の夜二
　もしとかいへるたかとのに遊
　びめして夜ひとよ酒のみける
　にさりにし世にすみける人の
　かたちにいとよう似かよひて
　見えければすゞろにむかしを
　おもひ出て　　婆阿證人
夢の中に夢をむすぶの神ますも
なつ拍手のうつゝなの世や
　月花酒友　　　再　賀
汲かはす酒の友とやみし野の
はなは手もとにあり明の月
　深更飲酒　　　内匠半四良
さゞ波のよるも雙六打をかず
志賀から酒をふけてのまなん
　手づから蕎麥を調じてあるじ
　し侍るとて　大石小石躬景
細道にあらでつたなき手ぎはかな
ふとくもそばをうつの山もり
　かへし　　　　京間内則
花よりも白き此そば手打なら
太くもよしやよしの山もり
　川上といふ處の蕎麥を人々に
　振廻ひ侍りしにみな人あまた
　たうべけるを　山手白人
音にきくひの川上の新そばは
顔をならべてをろちほど喰ふ
　信濃の新蕎麥をたうべて
　　　　　　　　銀杏滿門
花よりもしろきしなのゝ新そばは
粉にさらしなの月も及ばず
　ある人のもとにてそばをたう
　べて　　　　　鹿都部眞顔
立こともなら坂やこの手打蕎麥
ふたもりかへを発せかしは木
　新蕎麥振廻んと勝手のいとさ
　うさうしければ　北川北川
新そばをみぢんにせんと引拔て
すはや手打のこねかへしぬる
　ゆくりなきあるじまふけにそ
　ば調ぜんとていなか人のもて
　來りけるふくろものをとうで
　みるにひえの粉になんはべり
　ければ　　　　空音待兼

ひえならば三千坊とおもひしに
　とちめんぼうをふる舞のそば

　茶飯滿腹　　山住猿雄

茶めし喰ふ大師河原の戻り道
　はらはりたやのうんと立足

　　左候某

大佛の腹もおよばぬなら茶飯
　釋氏とる手もあく迄ぞ喰ふ

　なら茶に淡雪豆腐たうべて

　　足曳山町

俤はなら茶にのこるあは雪の
　豆腐も口に消やすくして

　ある人のもとにて酒のみけるにうるはしき女のわらはのうなぎのかば燒もて出ければ

　　漢江

かばやきのうなぎは妹が髪なれや
　さすくし迄も油じみぬる

　鯨てふものを人のもとへ送らんとやくして忘れけるをさいつ頃ちぎりしことはとくわすれにけるやといとむづかりていひおこせければやう〳〵かのかしらを遣すとて

　　やそうし

幾重にも御わび申てみくま野の
　濱ゆふならぬ鯨こそやれ

　ある人のもとへ生鱈を二切おくるとて

こゝろざしばかりといへど大食の
　人には鱈のたつた二切

　木倉といふ溝にて釣得し鮒を人のもとへ贈るとて

　　莚田脛長

はる〳〵と釣てきくらの魚なれば
　骨もまるたにあがれ此ふな

　鮒昆布卷　　十二栗圃

治れる世もはら卷によろこんぶ
　われら如きのものゝふなまで

　とこぶし　　算木有政

岩角の沖の海つらはりまがた
　あら男浪とてこぶしとこぶし

　蒸石餘魚　　うちのり

是もまた火鉢の火にぞ入にける
　されば其名もむしがれいとて

　茶選水　　千代有員

茶の水はあまたあれども武藏野に
　わきて汲まくほりかねの井戸

　婚儀支度とて木賊に兎の摸樣の小袖の出來たるときゝて

　　膝元佐久留

下紐をとくさの中のよい首尾は
　卯の毛で月のさはりだになき

　ある人のもとに年ごろみやつかへしけるよしといへる女の縁談を賀して　　万歲館十口

縁談の出來てはこゝにいぬはりこ
　ほうこうぶりもおよしとの故

　人の風ひきたまふを訪て

　　問屋酒船

引風の邪氣おひはらふ正氣散
只一ぷくてげんそうの夢

目をやめるにことよせて物おこたる人に　便々館湖鯉鮒
何事もうつりやすさは五六日
見えぬは物のやみめなるべし

しはぶきやみをやみて　鴨羽盛
五月雨の池のあやめにあらねども
引ぞわづらふ風のせつなさ

をさなき人のもがさやめるよし聞て親のもとへ詠て遣し侍る　こりふ
ひと夜にて山を上たる富士なれや
さゞなみもよき志賀の水うみ

ある人をこりをやみけるによみてきりの葉にそへておくる　ほくせん
わらはやみふるい落せば桐の葉の
これからかげもさゝじとぞ思ふ

鼠の大根をくひければ　十口
この家の大根くふたる鼠なら
處詮ちいども麁略にはせじ

土圭大狂　出諏訪耳彦
拍手さへ床のまぬけのかけ土圭
只てんびんのふる物にして

柳橋わたり四ッ手網をひきて　名万壽盛方
後の世も捨ておもしろやなぎ橋
引たびに魚の三ッ四ッ手網

袖か浦の茶店に休らひて　夕霧色
茶の花香にほへる袖が浦波は
みな立よりて腰打かけん

題しらず　坂上米人
太郎より次郎はこゝろたけ馬に
つかみつきげのはては嘶き

眞乳山人
とり〴〵にあゆのてしほのとり肴
まだよひながらあくる盃

大屋裏住
蜑のかる藻に住む虫の玉子やら
膳のみぎはにわれからもあり

塵取　奈良花丸
手箒ははきこむとても世の中の
人のおひげのちりはとらじな

とのゐの留主としらでたづね侍りければ　元木あみ
我も人に留守を使ふはたがいせん
ごばんとしらでたづねくろ石

返し　平生三里季安
かくとき丶何と將棊のばんの留守
みなふびやうしな後手に成金

ある人わすれ置し錢二百文をことはりなしにかりてつかひ侍るまゝさげ札して置ける　をなしく
白浪の名にはたゝねど斷も
なくて二すぢあしのかりどり

蜑のすなどりするを見侍るに網に掛れる魚の洩んとするをたまといふ物にてやがて取得るを見て　野老髭面

網の目にかゝる難儀の折ふしも
切ぬけられぬたちの魚かな

綾瀬川に釣するを見侍るに魚一ッだにつり得ざりければ　山蔭青則

釣たるゝ糸のあやせの川つらに
たえずかゝるは船のみにして

吉原の堤しつらへ侍るを見て　手枕歌種

一筋の土手をにほんの堤とは
ふしんに掛る事もことはり

馬ひけるをのこの闘論し侍るまゝにより來る人を足にてけたりけるを見てよめる　あをのり

來る人をあしげの馬の口つきは
あらそふ聲もひんのわるさよ

よしの山にわけ入てすゞのかり庵にやすらふとて　遍亞方岳

よしの山すゞの庵にすゞかけを
かけてまゐらん露のかれいひ

南江觀漁　をなじく

名にしおふ江戸紫の袖がうら
ぬふてふ針ももつや釣人

四辻の茶店に立よりて　智恵内子

櫛のはをひくほどうれる煎じ茶屋
四辻のうらのかみさまもよし

晦日月十五夜の闇と言るこゝろを　全交法師

けいせいの誠晦日の月なれや
月のくらうも十五夜のやみ

人々菊の歌詠ければ序に　山蔭青則

愛相に出せし花のきくたばこ
烟もたかくあがりませがき

しせうはじめて長持といふ名を給ひければ　久留間長持

下さるゝ其名も久留間長持の
ふたにもみにもあまる嬉しさ

唐詩のこゝろをよめる　よふね

月落る漁村に僧の旅寝して
かぞへる鐘は寒山寺かも

物秋といふ名つきたる人のもとへ詠てつかはしける　露友と地

新米の狂歌もいつかみのりしは
げに豊年のたなつものあき

ある人の乳母なりける女のもとにみそかに通ひけるをあるじいとはやうきゝつけてもとより柏木に葉もりのかみもいますなればかくてはあるまじきふるまひかなとかの家童子

もせちにいさめければ

紙屋丸彦

今さらにどういひわけもあら磯の
波うた／＼に御免あれかし

秋風女房

あらいそのなみ／＼ならぬ言譯は
よそのみるめもきの毒ぞかし

丸彦

うば玉のくらう重なるあやまちは
只いくへにも御免あれかし

秋風

烏羽玉の夜の寝の字ふさはかに
いふもさがなきいご口ぞうき

丸彦

わび言を杉のむら立たちし名も
ほど時すぎは御免あれかし

秋風

ほどゝぎす不如歸ふさゝき今更に
御免も口のすぎのむら立

丸彦

よしあしもうらより出し事なれば
なにはのことも御免あれかし

秋風

難波江のあしふみつけし恨みをば
身をつくしても言んとぞ思ふ

丸彦

狂歌師にいらぬ狂歌のわび言は
あつかはなれど御免あれかし

秋風

佗言のことの葉草の露ほども
しらぬ返しの三十字一もじ

男女の中に子まで有ければ日ごろ中むつまじからず女の出て行を見て

土師搔安

女房をさつた師の親しらず
子しらずとなる内はあらうみ

このころもはらたはれ歌を世にもてあそびてことにたはれたるひやうごこをいひのゝしるにことばはさしたるおかしきふしもいひ出ざりければいさゝかあざけりて子子孫彦がもとへよみてつかはしける

よみひとしらず

糞船のはなもちならぬ狂歌師も
葛西みやげの名はかりぞよき

返し

子子孫彦

葛西菜の賣ことのはに買ことば
くそをくらへとさらば言なん

狂言鶯蛙集巻第十七

雑歌三

ある人のもとへ杉箸おくるとて詠る　網破損はり金

ゆかしさに贈れる三輪の杉箸はたづぬるといふしるし計りぞ

閑居夢　野老髭面

さくら炭枝折くべて置こたつあたり静に夢もみよしの

静女夢　蝉衣綺洲

漆桶[illegible]木とばかり見る夢はこれ妄象といふべかりけり

加茂川の邊なる茶店に立よりて　夕霧まがき

かも川に出るみやすみ庵なら客のくるまもあらそひやせん

角通庵　千代有員

つる巻はよし京までもとゞくらん蔦はひあがるおほつ壁とて

刺鯖をよめる　山手白人

さし鯖のはなれぬ中の天にあらば。これもひよくのとり肴かも

下駄と燒味噌　藍洲

諺に下駄と燒みそとはいへどいづれはくにはへるゑんも有

狂歌書とむる物の表紙に　愛多子子

秋風に吹ちらされしことのはをかきあつめては棚に置くしも

蓼のもの丶さぐりに蟹をつけたるを見て　垣覗人真似

あい口のさぐりに蟹をつけたるは横にさし行く道理とぞ見る

題しらず　武士八十氏

かす人と金かる人と借人とよつてくだんの五徳也けり

角田川のほとり何がしが別業にて人びと歌よみけるに夕つかたすだれのうち樂奏せらるゝとに横笛の音すみ渡りて沖のかもめもこれがために舞ふにやと思ふ物からその名をとひ侍るに夕霧まがきとなんきこへ給ひければよみて遣すとて　鳴鞭蔭

その人をたちかくしぬる夕霧のまがきか嶋のまつや笛の音

かへし　夕霧笆

笛竹のあはせて譽ることのはにはいさゝ不審もはれぬ夕ぎり

甲子の夜ある人のもとへまかりて　童子鳥亭樹蔭

よいことをしろ鼠ならたからをば發らずひいてこちへきのへ子　童子竹馬夕影

大黒にそなへますゝゝめでたさや今宵ゆるりとねりま大根

童子月影澄遊

夜食をば立れぬばかりくひこみて
とかく果報は甲子てまて

したしき友の別荘の脩理し給へる宅にて奴豆腐に酒のみけるに番椒を女のわらはのわすれければ　十寸見蘭洲

豆腐から大根やつこのかけてくる
からき浮世にとうがらしも無

人々歌給りける返しに　齋馬雪

狂言を三十一筋のほめことば
ありがたひ友お嬉しい友

惡女向鏡　大木戸黒牛

まつすぐにうつる鏡をうらむるは
己がこゝろのゆがみつるかな

ある船樂すとて　やそうち

糸竹の音はすみだ川船人も
きけや曲さへ渡しものとは

あるやごとなき人のあらたに高どの經營し給て高樓臨三弦江といふことを人々に詠し給ひければ　節松嫁々

この殿に千代もすまなん玉だれの
三筋のいとの之にしひかれて

はるかにをのれより勝れし人ともしらで碁を圍みて手もなくまけゝれば　橋本鑾太郎

調布も出來ず日くろむ碁をさらし
白い黑いのたがいせんたく

烏指酒宴　羅知乃秋兼

烏さしのもちにあらねど盃を
指つおさえつねぢる酒もり

雨中酒宴　白川與布禰

淋しさにをごる平家を語らせて
酒宴なかばのあめのもり久

述懷　板屋常恒

老ぬればこしはまがりて釣ばりの
うきにつながる我いのちかな

まかき

かくてさへ此世にすめばすみ俵
底たゝきても烟り立ばや

寄屏風述懷　きつしう

世にたつはくるしかりけり腰屏風
曲りなりには折かゞめとも

寄鳥述懷　法橋吾山

山がらの餌にあらそひて落るより
老のくるみのせわしなの世や

仕立物屋述懷　畦道

とに角に人の身はゞをあはせんと
うき年月をつもるゆきたけ

寄柹述懷　はりかね

かく迄も老木となれば數ならぬ
身はしぶ柹のあちきなの世や

大石小石躬景

御處柹になりはみえても地下に今
ほたりと落し澁柹ぞうき

掛取述懷　秦玖呂面

てうちんの延つちゞみつこしの弓
張合もなき老が古かけ

古傘述懐　畦道
開くべき時節もなくて古傘の
今はかみにも見離されにき

寄搔餅述懐　吾山
老の身の今さら耻をかき餅の
かゞみに向ふむかし戀しき

寄竹述懐　ひけつら
籔に身はまだ捨きらぬ男竹
ふし〳〵有てむづかしの世や

寄山述懐　赤松日出成
借錢の山もつくばの高聲に
このもかのもの言譯ぞうき

寄壁述懐　一目關守
月と日のうつればかはる壁に影
ひたすら老のまがる腰張

寄莚述懐　まかき
我座をば人にゆづりてやれむしろ
へりくだりても世を渡らずや

寄玉述懐　朱樂漢江
はしりより夜も光りて老らくの
あたまは玉の數にこそいれ

遊女述懐　邊地閭川成
傾城にうそつかぬ身もある物を
晦日に月の出ぬことぞうき

奴述懐　河原鬼守
老込て時にあはぬも目みえとて
ふるや土圭のやつこ奉公

寄月述懐　しろひと
ぬき上た月の額はむかしにて
きんかあたまの影ぞさやけき

貧者述懐　宿屋飯盛
金を手に握りこぶしで我あだの
貧乏神のつらをはりたや

寄魚述懐　よふね
立よりてつく〳〵みればから鮭は
としへぬる身のかゞみ山かも

五兩とはいつ時代の相場なり
けん時にとりては千金の身を
も全くし侍るものを　きつしう
錦にも綾にもあらで堪忍の
ふくろはみても見事なりけり

狂言鶯蛙集巻第十八

雜躰

短歌

伊豆國熱海御湯に罷りて

加保茶元成

わきいづの、あたみの御湯に、きて見れば、まへははるけき、沖津なみ、どたりばたりと、うちよせて、うしろはたかき、あしびきの、やまひとこまる、人ばかり、何とせんきに、しやくつかへ、ひぜんがん瘡、しつふかき、おゐどあたりを、さしやなぎ、ねぶかくみゆる、ねぶ川の、せきもこんこん、こんとなく、狐の聲と、もろともに、きくはたぬきの、はらつゝみ、ちゝとさびしき、をりからは、たゞのみくひに日をおくり、あしたは門に、たちいでつ、夕は庭に、たちいでつ、そこらしよなめく、むすめらが、ひよんなしやつらを、うちみれば、眞黒鬼も、十八の、にくからざりし、すがたぞと、人みないへど、まがごとや、人のいひつる、つぬさはふ、いはに目鼻の、つきしこと、はたすさまじと、みえつるは、雲の八重たつ、山の神、あれもたれぞが、内儀かと、しばしまもれば、沖津藻を、かしらにゆひて、かるいしを、きびすになして、たちまふを、見るになぐさむ、かたぞなき、こしにさいたる、たびがたな、さびこをとりて、をどりつゝ、うしほ煮にせし、ますみ鯛、あらかん舞を、見さいなと、やう〳〵ひいふ、みめぐりの、日數すぐれば、はしり湯の、神のしるしと、うれしくも、飛たつばかり、あしばやめ、荷もちつくらひ、この宿を、うしろになして、さらばおさらば、

しなたてる草さへいくときく湯をも
水にしなして立かへるかな

借錢の山をのぞみて詠る

武士八十氏

千はやふる、神代もきかぬ、ひんくうの、神の氏子と、なりしより、ただふ自由を、するがなる、不時の物いり、やよければ、筆とることも、たび〳〵に、ことをかきたる、しやうもんは、くだんの如く、借金の、やまひとなれる、身のうへを、おもへばげにや、あしたには、おそく起つゝ、ゆふべには、早くもいねず、酒のみて、ひぢりこのごと、日をくらし、一升三百、六十の、びんぼう樽を、まくらにて、まてど果報のきたらねば、出入酒屋の、通ひ帳、まづとり出し、なかむれば、拂ひ殘せ

し、分厘の、ちりよりなれる、山は
富士ほど、
是きりでかへし歌とはたのもしや
我が借金のやまとたましゐ

折句

ほとゝぎす　山手白人
ほりへよくともの小舟に取のりて
岸漕ぎ行けば涼しかりこも

沓冠

むめ、やなぎ、もゝ、つばき　をなじく
むこと嫁やらめでたやな君よりも
ものたまはりてはなの名開

廻文

筑波根のふもと金津といへる
里の賤の男いにしへの人の色
紙あまた持たりと見せければ　をなしく
みなの河つたへつ流れつもしるし
積れかなつへたつわかのなみ
唐來參和
櫻木のとびしかをりははなのその
縄張おかし人の氣らくさ

混本歌

白人
あさづけは夕めしまでに　うせや
すき香物ぞかし
便々館湖鯉鮒
眼のちりをはらふ物からこれぞこ
のたまはゞきかも

旋頭歌

白人
きられたる髮の筋わけつけて後
行時に社知ぬ女郎に逢心地すれ
赤貝のからにいりたる米いれ
て升罠かけけるにかの貝升に
はさまりて鼠のがれければ
牛籠遲道
此いごはさためて千代やふる鼠
此赤貝の辛き命をひろひ升罠
檜皮釘武
行燈の丁子頭は秋の夜長に詠居る
徒然草の花かとぞ思ふ

狂言鶯蛙集卷第十九

釋敎歌

達摩賛　山手白人
こその葉にさとりの花も匂はねば
かく本來の面目もなし

山寺晝飲　鍋垢丸
ひだるさは猶やま寺の秋のはら
露をむすびの晝めしもなし

銀杏滿門
諸勸進出さず候がまことなら
げに山口のくちやひるめし

佛生會　千代有員
丈六とならせたまはんみたけさへ
一しやく尊の御誕生かな

大寺灌佛　庬扇法師
年毎の產湯にそゝぐ新茶より
こちやしらぬ身の逆に立釋迦

鵜柄仙口
灌佛は先大寺へまゐりそめ
末寺はよそに新茶卯の花

節松嫁々
大寺のひろきみのりの道なれば
ぼんぶさかんにほとけ生るゝ

白川與布禰
棟高き寺にちいさな灌佛と
みなくち〳〵に唯我獨尊

盂蘭盆會　遲蒔千種
さりあへず手向る蓮の撞木葉に
おくまなむあみたま棚の露

日蓮會　今混馬鹿壽
妙法ののりの手ぎはにさくら花
是や小春のよしの紙とて

御講霜　紺屋朝手
朝ぢ原きるはかた衣ばかりにて
けふも御講の霜はおくらし

飯焚の念佛するを聞て　宿屋飯盛
めしたきの向ふ火宅も退ればや
なむぶつ〳〵とにへ上る釜

魚屋佛事　望月志良夫
肴屋のけふの佛事による人は
皆なまぐさき中とこそしれ

寄玉子釋敎　四方赤良
わしの山いでにし人は世の中を
こと〳〵く我玉子とや思ふ

寄花釋敎　嫁々
よの常の花にはあらぬ花のいろを
そくいののりの敎にぞ見る

寄食釋敎　幾代餅春
ぼさつにてひだるい事を助かるは
是こそのりのちからなりけり

かつしかのさゞえ堂にて　雀　叟
つのゝある心なもちそさゞえ堂
佛の道のかいをたもたば

或尼のあらたなる庵を結びければ
尼の身のむかし束ねし髮ならで

草の庵をけふむすぶかな

としごろしたしき女の尼に成ければ　長掛鴫路

豆柿の頃よりなれしこのもとへ
身をかへてくるあまぼうし哉

或寺に護摩修行するを見て　武士八十氏

修す人の衣は汗にひたしもの
こまとは言どけしの香ぞする

古寺に年ふる猫をみて　飲口波志留

痩猫とみけなされたるをのが身は
齋にもつかず年をふるねこ

金杉永福精舍の鐘の供養に詣侍りて　素布子町

つきそめと聞てや是生めつぼうに
歌よみあぐる黑拍子かな

題しらず　咋覽坊

貪瞋のにが〳〵しくはおこれども
一すぢ道のふみも迷はず

如是力　鹿都部眼顔

漕出す渡しの船を引とむる
一文錢のちからづよさよ

如是因　をなじく

蓮葉におく九ッのしな玉も
露ばかりなる種はありけり

如是本末究竟等　朱樂漢江

雲間よりぶらりと下る鵜の尾は
尻かかしらかいかでわくべき

狂言鶯蛙集巻第二十

神祇歌

社頭梅　茶屋町末廣

鬼板の瓦のはなへ吹ためて
くさめも匂ふ神の梅が香

赤松日出成

神がきはこれみてぐらのゆふ襷
まつさきがけし鑓うめの宮

夕露色

此梅はぬさよりぞまつとりあへず
手向に咲ぬいづのまに〳〵

武士八十氏

神垣の梅なればとて咲からは
すこしもおそく塵に交はれ

初午祭　節松嫁々

はつ午や稲荷の杉の楊枝にて
くふこわめしはあけの玉垣

鍋垢丸

初午にたつやおまへの額うらは
給羽織をきさらぎの空　葛城黒髮

初午やかたぶく宮居神さびて
いく代かけたる千早ふる繪馬　內匠半四郎

赤飯もあら初午の手ならひ子
けふ方しよくにもたれてや書く　銀杏涌門

いなり坂のぼればくだります鏡
神ものぞきてみつの玉垣

この頃生れどしの七ッ目なる十二支の繪かきて身のさいはいをいのるに大黒天のみかたち繪馬にかきて初午日稻荷の御社にさゝげ奉るを見て

甲子のその七ッ目の初午に
荷ひし稻のたねも摩訶迦羅　すゑひろ

このしろのかはりに神に捧けなん
けふはこはだの里の初午　四方赤良

九郎助稻荷奉納豐年初午

豐年をうがのみたまの祭とて
田のくろ助もゆづる君が代　唐衣橘洲

下戸初午

初午のみきにや顏の色に出て
梅のき下戸も香に匂ふなり　加倍仲塗

石清水臨時祭

鈴の音のりんじ祭と成にけり
下部の口に何いはし水　大木戸黑牛

社頭花

吹く風に櫻はぬさとなるやしろ
神さへ花のちりにまじりて　きつしう

春日社花

宮守はもるとも花の春日山
人がかざゝは我もかざゝん　鵜柄仙口

社頭葉櫻

何となくしめのはりたる夏木立
色もあらたに神の葉櫻　野老髭面

住吉田植

お田植も最うおほかたは住吉の
[illegible]そりはしとりてくふやひる飯　遠山加壽美

祇園會

打ならす太鼓の音もでんがくは
是祇ぞ園のよきはやしかた　眞間川成

ゑびす講

惠びす講柏手を打ときなれや
冬へうつればあきないの神　土師掻安

あきなひに千金の利をえびす講
春とあきとの二度のかけとり　耕書堂

寶かひの千々の黃金もよみつきぬ
三十一文字の和歌ゑびす講　問屋酒船

寄挿花神祇

いけ花はしらにぎて葉は靑にぎて
四瓶五へいも床の間に〳〵　きつしう

寄月神祇

大小の神祇も見るや起請文

くだんの如くてる月のかけ

磐井八幡祭禮に　　童子磐井眞清水

十五夜の月を祭りの氏子中
すゝきのだしをいは井八まん

神前に新穀をさゝげ奉るを見て　　篠河賀美

神領の稲かりわらはたばねても
なほ行末をいのる出來秋

こたびあつまれる歌どもやかて廿卷となれりければ人々覦ひの心をよみけるついでに神祇の歌とてよめる　　淺江

ことの葉はするすみ吉ノ神がきに
かきあつめてよ松のはた卷

狂言鶯蛙集卷第二十終

夫鳴花鶯笛發谷渡之音棲水蛙囊入愚鳥之思茲自古金以至文金歲過虛言百貫時餘小判六十目茶飯月欸狂歌日盛自猫撫聲之婆様至杓子顔之飯焚皆莫不即贅口而詠夷曲者其交於人丸赤人之歌膝中不出於出雲閻雲之垣根外無喜無悲不遣不逃嗟乎盛哉抑狂歌之濫觴杳起自水無瀬之御殿具有心無心之体分栜本栗本之連自是以來其流非一浪華有貞柳木端江戸有未得卜養大底所詠膾炙人口又近有大根太木者狂歌骨髓之好也身在市中心慕雲上太木既沒狂歌益盛座上滑稽欺西王母之息子株言下大笑失周褒姒之無人相一日狂集朱樂館飲酒撰歌偶閲古今之一集更吟歌仙之六評馬場子有蛙鳴池端之什鹿都部而傳鶯在水底之篇主人摘二子之姓字名曰古今馬鹿集或難之曰抑古今集者二十一代之開山和歌三神之鎮座借踰之罪無所逃也於是主人酒力醒茶談歇改曰狂言鶯蛙集然則法々華經之聲洋々盈耳一寸二寸之足飄々離水始于六人歌仙之題終于四季戀雜之歌勒爲廿卷以傳四方固實引之繩不撰庶分銅之玉有光于時天明四年次甲辰極月幾望因九乃字之假字添眞名振之後序云爾

四方山人

こたみ朱樂館にあつまれる歌どもをやがて櫻木にいのちなかうせんとす何がしら三人よりてかうがへはかるといへども白川のながれあ

さく湖の底ふかからぬさえのほご
をはぢてあまたたびいなみ侍れど
書肆のもとめすてかたくてすでに
此ことにあつかるにぞ

校合　武士八十氏
白川與布禰
便々館湖鯉鮒

徳和歌後萬載集序

さきにゑらべる万載狂歌集は古きを拾ひ新しきをくはへてかいつけける也そのふみ世にひろこりてのち月にまし日にそひてすき人多く出きにけり鳥がなくあづま歌今やさかんに行れなれりければむしろおる翁も夷曲のさまをさぐり犬うつわらべも此鄙ぶりをもとめて蜀堯のものもよみ雉兎のものもまねぶいつちくたつちく太右衛門どのの乙娘も濱のきさごのかずまへおかしくによう／＼鳥のなかぬ日はあれどもたはれうたの噂たゆることなしかく計時めくことはさき徒士のふりにし昔もきかずされば はこやの山は指物屋のわたし細工とおもひみどりの洞とは十九文見世の箱のうちかとおほへたる久かたの糖賣あらがねの土こね千はやぶる紙屑買ぬば玉の夜蕎麥うり手枕の赤坂奴いそのかみふるがね買をいはず花のお江戸に生れとうまれ來りときたる人ごとに言葉の花木ごとに咲て終にむだの山をなし心ざしの露は草葉よりつもりて笑ひの海をなすげにや狂したるさまながらいづもやみくも八重垣のへだてあるにしもあらずかしの木の角ものきれどもいよ／＼かたく仕出しの澁うちは見かけよりいよいよ高きたぐひならん張物をはる林のはな敷のしにあきの木のはの色／＼に品かはりて興あるふしおもひすてがたしといらざる肘をはりまがたしかまのかちはだしにてひろひあつめたる數は千うたにあまれりしかはあれども蛋の藻鹽はくめども盡す切おとしの札は揚るにもれ秋のこの葉はひろへどもしげく大門の切手も燈籠の夜はあらたむるにいとまなきたぐひわきて空とぶ鳥のもくあみをもれ水にすむ魚の釣をのかれて四方にたよらず九のゝのよすがなき歌はしらざる所也かれこれゑりもとめて難波江のあしかりしふしには筆を加へ山の井の淺き心にはひいたりをやとひ四方山人ふたゝび是をかいつけて徳和歌後萬載集と名づけ予にも序せよと乞ふいなむも興なしとはゞかりの咳拂ひにはゞかりを忘れて筆をふるふも此ふみの千世かけて住よしの松眞木にふすぼるとも玉津島の波よけ杭にかゝりとゞまれとおもふことしかり

あめあきらけきよつのとしむつき

山手白人誌

すはらやのたのみごとをうけあひていかゞたはれ歌をゑらふことをとゝしのくれのせはしき比よりはじめて夏の日のながきことしにをはれりいはゆる古今後撰夷曲の集のみにあらず堀川百首になずらへてよみつらねたるためしをかしといひ馬鹿といひその名おほくきこゆれどこの比のやうにはやりて髭くひそらすこともかうまでたはれたる名をつき侍ることをなほまれなり口あひのかしこきものさかもりの席などに望て地口交りのかたことを御祝儀にのべたるなんひと通りはありけるしかるにわかきみもさかへてましんますまんざいしふをゑらびしよりこのかた二とせばかりの春秋四方の赤のみかけ山のむらがらすあけら館まるの丶字のごとくまとゐあへり落栗の落こ

ぼれをひらひはなたちばなの香をかぎ出し侍りき濱邊の肴市さらににぎはひ都下の歌角力またさかりなりたゞ遠慮會釋のむかし人すくなく會しづかによりあひしをもかげをしたふのみにあらずまた杓子定規のいま世のはやり人ぞやめきの志まつのはをしらめむためことさらにかきさらすものならし赤良さかづきの數つもりあしもとのよゝとよろけなくせのなくてやまずふたゝびのゑらびをはじめてしもの句をきゝてかみをとひかみのくをうけてしもをたづぬるやうになりてふつか酔のあとをひきずゞりぶたの殘りをあらすべきはしのひま〳〵春つばき夏はゐのきに秋ひさぎ冬ひいらきに同じき歌をはじめてはなむけたびたちくやみよゐこびれんぼれゝちの

色〳〵めつたやたらのくさ〴〵氣のよひ佛のかほをなでせつない時の神だゝきにいたるまで部をとりまきをたばねて森の木のはの數々に心のたけ箒はきあつむるよしみろく十年辰のとしきのふとたつたる春のはしめこれをひろむ名づけて德和歌御萬載集とやらかす事しかり

德和歌後萬載集卷一

春歌

ふるとしに春たちける日よめる　紀春長

初はると歲暮を祝ふ門かざり
わか松もありくれ竹もあり

立春　朱樂漢江

佐保姬のきたる霞のうちかけは
けさしも春のたちをろしなり

山手白人

につこりと山も笑ふてけさは又
きげんよし野の春は來にけり

元日　白鯉館卯雲

一夜あけて桃太郞月のごけしな
霞たなびく鬼が島山

手柄岡持

久方の空錠なれや天の戶を
あけたつ春のかぎりなければ

酒上不埒

昨日こそ煤は取しがいつのまに
葉竹そよぎて門松ぞたつ

もとの木網

又ひとつ年はよるとも玉手箱
あけてうれしき今朝のはつ春

智惠內子

通り升と岩戶の關のこなたより
春へふみ出すけさの日の足

濱邊黑人

面箱のふたあけぼのゝ鳥とび
三番叟から春はゑひ〳〵

竹杖爲輕

昨日まで年は忙しく走りしが
明て日あしものどかなる春

大屋裏住

あけそむる年の要の扇うり
よぶ一こゑに春は來にけり

腹から秋人

春來ては野らも靑土佐の初霞

ひとはけひくや山の腰はり
　宿屋飯盛
かけこひの夜明に重き革財布
かつぎし肩もはるは來にけり
　名滿壽盛方
鳥がなくあづま男の先ふれは
春たちかへる花の江戸入
　北川ほくせん
寄波に別人しどのあまならで
とりえてうれしあら玉の年
　内匠はしら
もゝとせになりても人は松の下
くぐるときはのみどり心ぞ
　から衣橘州
ふる年は拂ひ清めて手拍子を
うちとに目だつ春の神風
卯のとしのはしめに
　峯松風
うの毛にて突たる程も疵なきは
君が八千代の玉のはる哉

　花道列爾
をそろしき虎の年の尾踏こえて
光のどけき玉の卯の春
はるのはじめうつし繪の書き
ぞめすとて
　糟句齋金丹坊
新玉のとしゞゝ弟子を取集め
寳をゑしが家のかきそめ
町屋早春
　圖南女
元日はまた春霞たちこめて
ふつかに見せをあけぼのゝ空
寳引
　屋立綿純
寳引にだいゝゝ所にぎはしく
手をしめ繩は親へゆづりは
櫻飴
　山道高彦
雪とちり雲と眺むる花なれば
櫻あめともなりぬべらなり
霞
　石部金吉
一越の調子を春のうらゝかに
山のかみむもかすむ鶯鏡

　加陪仲塗
み吉野の山の葛のこのりにして
霞の衣あらひはりせり
小川町霞
　智恵内子
さほ姫の霞の衣ぬひたてに
かゝるしつけのをがはまち哉
鶯
　手から岡持
しら雪はきゑさうなるが鶯の
聲をはるべにならふ法花經
　佐倉はね炭
笹の戸をおこしに來なく鶯に
しのゝめさませ籔の一聲
山家鶯
　山手白人
そりや春か北山里の隱れ家に
御慶とつぐる鶯の聲
菜畠鶯
　梓弓八中
鶯の聲もたか菜ををろぬきて
畠をあつちこちにとびなく
鳥屋鶯
　ちゑ内子
まづ徳をとり屋のみせの鶯は

高いかひてにありつき日星

子日雪　銀杏滿門

老が身も頭の雪をふりたてゝ
孫やこまつにひかれこぞ出る

子日琴　四方赤良

この子日いづれに心引れまし
松は十八ことは十三

朝寐書起

峯の松琴のねのひにひく歌も
聲をはるべや風のふき組

油杜氏ねり方

冥加あらせ玉の緒琴を千代迄と
ひくやはつねの松のみどり子

相應内所

緑なる松をねの日にひく琴は
千代よろづ代も天下太平

むつきなぬかのよ四方赤良あけらかん江加保茶もとなり蔦から丸などとぶらひ來ませしに雪さへふり出ければ

蝶とこび千鳥となれる淡雪の

棟上高見

こよひはとまれ七くさのはに

をなし夜あすは子日なればとて亥日小松といふ題にて

朱樂漢江

亥日からもはやねよとの刻限を
きけば小松をひけよつの比

五明樓にあそべるあしたつとめてかへらんとするにあるじのけふは子日なり小松ひきてあそばんとてとゞむるに

よみ人しらず

昨日からよそにねの日の松なれば
けふはひと先うちへひかまし

七種　於保曾禮長良

七くさをはやす庖丁かな火箸
にほんの鳥のわたるまな板

若菜　手柄岡持

鐃汁のつまともなさめ山鳥の
おろぬきそむるけふの若菜は

酒上不埒

野べに又葉ものびかねし鶯菜
つめとかすかなねにこそ有けれ

門松とりたる跡を見侍りて

馬塲金埒

七草もはやすぎ立てる門ならで
しるしばかりの松のふたもと

初春大食の人をみて

加茂季鷹

初春にあがつた飯の多ければ
一座は除目をどろかしけり

はるの日麥飯をたうべて

銀杏滿門

麥飯の鉢の中さへかすむほど
くひつくしてや腹もはるの日

殘雪　やはり棟梁

雪と共に殘りし去年の借錢も
またきえやらぬかけ乞の帳

餘寒埋火　遲蒔千種

春乍らさむさに花のかじけ咲
をりて火桶にいけ田炭かな

春巨燵　山手白人

一度はたゝみし蒲團又かけて
わかれの霜の置ごたつ哉

梅　横道黒塗師 肥後木崎一見

山人のぬの子のかたに附けてさへ
匂ひにけらし梅ばちの紋

青山六道の辻といへる所にて
梅のはなのさけるを見侍りて　四方赤良

六道のやみに迷はぬ梅の花
色をも見るめかをもかぐはな

竹籔梅　峯松風

青々としげりし中にこの梅の
はなはくれなゐ籔はくれ竹

あけらかん江

ひら〳〵と籔からほづえ突出すは
竹やり梅の花にやあるらん

銀杏みつかと

籔深くおされし梅がかせ枝も
げに竹のねのはるはわすれず

辻番梅　大原久知位

辻番の梅のつぼみもつく棒は
先みんなみへさすまたの枝

はるのうたとて　能登路

青柳はたり〳〵にしだれつゝ
ちら〳〵と梅のすばえ出てゐる

柳　山手白人

しら露は柳の糸のむすび玉
風より外にとく人もなし

加陪仲塗

青柳はきりかぶろより生立て
若木の枝を長くさげ髪

檜皮釘武

青柳の緑の髪をすきをろす
櫛は銀むね三日月のかげ

はるの日内匠ばしらのもとに
て刀わきざしのもとによそへ
て春のうたよみける中に柄糸
を　あけら漢江

雨降て地迄かたなの片手まき
ほつれぬ春の柳屋の糸

軒に鳶凧のかゝりたるを見て　垢染衣紋

さゝがにの糸のよるべの風を痛み
思はぬ軒にやぶる鳶凧

若草　常產阿馬

取棄し野べに日影もたけ火繩
もえてみじかき春の若草

早蕨　栃下手丸

寒からぬ野邊の春風そよ〳〵と
吹たてられてもゆる早蕨

猫戀　常產阿馬

烏羽玉のよる〳〵己が妻ごひに
いつしか聲をからす猫哉

銀杏滿門

野ら猫の己が妻こふ聲たかく
軒端の草のしのばでやなく

初午　問屋酒船

破太皷春きさらぎの午の日の
みやは子どもがうけもちの神
初午生酔　節松嫁々
初午やしるしの杉を神垣に
まがへてをれるさかきげん哉
屋鋪初午　もとの木あみ
梓弓やしきの隅のいなりをも
まつるや初のむまや別當
橘みさえ
千早振かみやしきから初午の
口をひかせてよるのとのさま
西行忌　酒上ふらち
弔ふも他生のゑんゐ上人に
ふじの煙のそらなきはせじ
腹から秋人
道のべの柳ひと枝もちづきの
手向にせんと折てきさらぎ
菜花　もとの木網
きさらぎも杉菜混りに菜花の
さきてはくはぬ口なしの色

五十首歌よみける中に春雨
山手白人
春雨の日數重ねてふるがるた
うちつけにこそ淋しかりけれ
新宅春雨　忍岡きよろり
新宅の壁もまだひぬ長の日に
だらり〳〵とふすまはるさめ
出茂吉成
やうつりの痒い所へ手紙ども
かき集めつゝかべをはるさめ
經師屋春雨
糟句齋よたん坊
約束の日よりも紙を春雨に
へらをつかひてのばす經師屋
春雨皷　秦久呂面
とり上てうち濕りたる春雨に
今宵つゞみのねごゝろもよし
歸雁　酒上不埒
うちすてゝ年をこしぢの雁は
やよひ限りにかへすべらなり

年毎に來ては稼いで歸れるは
加保茶元成
越路にたんとかり金やある
於保久旅人
越路にはいつきさらぎと待文の
返事を今ぞもてかへる雁
雲雀　紀野暮輔
足引の山鳥の尾のながき日に
せいくらべしてたつ雲雀哉
虻　栗成笑
山蜂の姿に似たれどぶん〳〵と
なのるにつけて危なげもなし
花　から衣橘洲
山姫のねまき姿か花の香を
しめしあしたの雲の腰帶
朱樂かん江
ちらふかと皆人案じわづらへば
花にも風は百病の長
逸咀英
さく花を何にたとへん飛鳥山

きのふの雲はけふ雪とふる

飛鳥山のふもとなる人の家に
櫻のさかりなるを見侍りて　さかつき米人
七重八重こゝの家にも櫻花
かしこの山のあまり物かも

東叡山花　朝もよひ紀迪
中堂のこなたに立るひともとは
慈眼大師の御さくら花

飛鳥御殿山上野の花を一首に
よめる　から衣橘洲
花盛り飛鳥とせん手ごてん山
中に忍ぶが岡目八もく

吉原花　遊女玉つる
九重を一重さらせし八重櫻
けふこの里に匂ひぬるかな

濱邊黒人
西行のおめにかけたき普賢象
はなの中よりはでな道中

内匠はしら
身あがりの客の廓に待かねて
遅櫻なる花のねすがた

もとの木あみ
客は皆さいた櫻につながれて
ひかれくるわの春の駒下駄

鐘樓櫻　竹杖爲輕
つけばちるつかねばすまの山寺の
さくらにめでゝをそき入相

裏店花　山道高彦
わび住は物ほしげなる鉢の木を
下からのぞく花のうら店

二階見花　節松嫁々
二階からをりてかざゝん櫻花
めのしたにのみ見るは口をし

盲人見花
木の下に杖をつく〲座頭の坊
花のながめはあかぬとぞみる

啞子見花　紀躬鹿
花の香を惜みて口を動かせど
つんぼうほどもきかぬ春風

聾者見花　紀定麿
つんぼうは己れが耳の遠山に
かすめる花の香はきこへまじ

乞食見花　加保茶元成
紅と乞食も花をみるけふは
つくな〲よ入相のかね

相應内所
乞食のつゞれさすてふ袖も又
はなの錦をけふはきてみる

後家愛花　峯松風
櫻木をめづるばかりの後室の
身も花よめといはれたりしが

花下忘歸　ふしまつのかゝ
よしや又うちは野となれ山櫻
ちらずはねにも歸らざらなん

ひとり草庵の花を見侍りて　業寂僧都
罪なくて配所の月やいかならん
みやこの花を錢なくてみる

花盗人　澤邊帆足

咎むれば七重の膝を八重にをり
手をつき山の花の盗人　節藁仲貫

怪しさに花をる雫や咎めなん
そのぬす人のおさをとらへて

惜花　こはうも内子

友達もいまちと待てくれあひの
かねのなるまでみよし野の花

寄花出替　文屋安雄

お屋形の盛りみすてゝ急ぐらん
よめいるさきの聟のはな見に

遊絲　加陪仲塗

春の日は須磨も明石も蝦夷錦
うら一めんにあそぶ糸かな

曲水宴　馬屋厩輔

曲水の宴にひかれて三日月も
さもになかるゝ盃のかげ

下戸曲水　膝元さぐる

盃をながしてはくむ山川の
をもしろ酒や下戸の曲水

雛祭　遲蒔千種

花がめに桃や椿を挿ませて
都のにせのひな祭かな

桃　志月庵素庭

算盤の位違ふて三千年に
なるてふ桃の三年にさく

汐干　四方赤良

かりがねを返しもあへず櫻狩
汐干がりとてかりつくしけり

出かはりの男女の汐干がりす
るを見侍りて　浦邊干網

出代りの代りをゝきつ汐干潟
貝ふむ跡もにごさずにゆく

桂川若鮎　内匠はしら

美しさ手にもとられず若鮎の
すきとをり行びんかつら川

白魚　山手白人

春は又たれもたづぬる隅田川
しら魚に子はありやなしやと

尾久白魚　逸咀英

いつか日の長くなるとは白魚の
せたけものびてゆく春の尾久

井蛙　へつゝ東作

身を守る隱れ所はこゝこそと
ちゑを古井に蛙なくなり

苗代　柿下手丸

苗代を田毎の畔にかきあげて
作大將の水のかけひき

杜若　紀定麿

うつくしきかほやが沼の杜若
あやめの花をひしきこそすれ

欵冬　白鯉館卯雲

俊成の乗上られし身ぶるひに
馬の露そふ井出の山吹

子子孫彦

相性は金生水と思はるゝ
水にうつりし山吹のいろ

雨後藤　橘貞風

春雨にぬれて夜風や引つらん
はなより落る藤の玉水

杉の木末に藤の花のかゝれる
を見侍りて　漣　栗人
天狗でもすみなん杉の梢とて
まとひし藤のはな高くみゆ

小手鞠といへる花をいけし見
せにてあきものゝ帳くりかへ
し算用し侍るとて　腹から秋人
算盤と玉にもかへぬ帳面に
又百かした小手まりの花

暮春　鶯摺江
暮行といへばごふやらよけれども
なんにもくれずにげて行春

三月盡　柿下手丸
玉章に思ひのたけの長き日も
けふばかりとやつかひきり紙

坂上竹藪
振もぎり逃行春のこれよりは
すがらん袖もなつ衣かな

徳和歌後萬載集巻之二

夏歌

更衣　橘　鈴成
下帯をみるにつけてもをたふくの
衣がへうき尻にぞ有ける

京間内則
世中にたへて青葉のなかりせば
衣がへをや何とせんにん

馬夫更衣　佐倉はね炭
ふる布子綿はぬけども馬方の
袖にのこれる春のはな歌

青楼新樹　子子孫彦
青楼の君のかぶろの名にしおふ
若葉やみどりしげりこそすれ

卯花　坂上竹藪
夏も又若武者とこそ見へにけれ
卯花威よろふ袖がき

菊賀三味
世の人のひく袖垣に咲ながら
ちると思へばみるもうのはな

子子孫彦
月雪の見立もあまりしら〱し
しらけていはゞあれはうの花

旅路卯花　四方赤良
旅人も笠ぬぎて見よ花の名の
卯のとき雨にぬるゝ垣根を

郭公　加保茶元成
一聲の初音も高きほとゝぎす
是ぞてつへんかけねなしなる

つむりの光
一日に八千八聲うけあふて
山ほとゝぎすあはぬとぞなく

星屋光次
木鋏をほとゝぎすまし夏木立
かりすかしても聴んとぞ思ふ

菊賀三味
三さがりあひの手ひいて郭公
いま一聲の二上りをまつ

郭公多　もとの木あみ
郭公山田のはらにあきるほど
あまりたくさんすぎのむら立　智恵内子
郭公晝ともいはず夜なきする
みどりこやまのかしましき聲　馬場金埒
郭公なくねもてうど八せんの
はじめ終の空にふるほど　小川町住
船聞郭公
二聲ときかてぞ沖をはしり船
なごりをしさの山郭公　佐倉はね炭
船出せしみなとを後に郭公
帆を十分にかけてなく聲　濱邊黒人
兩國橋郭公
郭公富士とつくばの天秤に
兩國ばしをかけたかとなく　紀躬鹿
兩國の橋とはしとの郭公
今ひと聲をむさしにてなけ
みつまたの四季菴にて郭公を
きゝて　四方赤良
郭公なくやひとふたみつまたと
きくたびごとにめづらしき庵
旅宿郭公　つむりの光
夏の夜の短かき夜着に足引の
山ほとゝぎすきく旅の宿
初鰹　よみ人志禮多
われ一と眞先かけて食ぬるは
人にかつほのさしみなりけり
初鰹かふ氣はやみにあらねども　馬屋厩輔
これも子ゆへに迷ふ雉子燒
鰹走地　よしの丶葛子
地をはしる聲をからしの初鰹
うりものこらぬ足のはやさよ
夏の夜かつほを調理するを見
侍りて　むせん法師
まな箸に傳ふ雫のすゞしさや
月もさしみの夏の夜がつほ
筍出隣　銀杏滿門
よばすとも垣根をこして這出る
隣やたけの子ぼんなうなる
早苗　海老船守
日寄よく嬉し早苗をとり〴〵に
うたふ田植のおほんたからか
罌粟花　便々舘湖鯉鮒
むしけなく育ち次第のけし坊主
花のちりけに灸もすへねど
ちる花に憂世の名をばけし坊主　清水立登麿
からして叩くあたまてん〳〵
五月五日　書出田丸
けふよりは紐のあやめを解初て
きたる丹後の薄袴かな
五月五日ある菴をとひ侍しに
あるじのひるねしてゐたりけ
れば　腹から秋人
蒲團きて晝寝にころり山椒味噌

たとふ夢扶は袖游かな
峰午の日音楽師すと四方赤良
のわこのあこへはふかけさい
ユトのやくまを過侍って
ふ案にこれをしめとび職跡を　宿屋飯盛
ふきさのそくをあつく就ふ軟
入梅の日顔ふきければ
河原鳴守
ひよかにははまの江戸歌の発句こて
こつ刷山を雲にふし物
五月雨の比西あ赤良のこよふ
ひ給ひし拆から強しゐにりけ
れは　梅屋
詩歌とこす西方は淀間もなき比の
さみだれ梨で味をこゝけり
寄し　四方赤良
入梅に思えいまだいてみやを
寄よきはへでたつはこそすれ
梅干に皆こふよ事をよめこん
のいひければ　實殿齋
日はすゞしきても豊ぜ梅干に
瞬けしるとき業の暫
水鶏　藤川葉人
うら〳〵とおでに叩きて身を水鶏
たゝく戸口はわさはひのかど
曾我祭南　山手白人
曾我まつる五月の空に斗ふ又
かゝ鳩の為や雨こふもとん
夏月　恵月庵茶麗
夕立に隙なくはれし月の輪に
のどあさ過しあつきわするゝ
淺酘のこふんだ水に延したる　眞顔内則
かた〳〵の手は短夜の月
きし女
蠟燭ゝ蚊帳の中さへさよふけて
妹男のいるは無遠慮
蚊下傑す　南西千穐
音てたる思に替へていたつらの
した物数よりのすくなうし
鐘庭ゝ鐸をかけをける床の上
に百合の生をいけるをよはて
そこ　法無坊早耳
帯奉ふ鐘鼎の楽をされてや
首うしされし鉄百合の花
味噌こしといふものにはたる
をいれたるを見侍りて　宿屋めし盛
燈さる數ゝひとふたみそこしに
まつゆもいつかむすびける哉
夕顔　檜皮釘武
垣一重ゐまと夕顔の離れ家は
五藻はかりの住居なりけり
山賤が柴の扇戸のあけくれに
所かへする夕がほのはな　帆南西未
瓢紋道矢　朱樂かん江
捻にくる蚊は叩いても防ぐべし
いふせみたかの團の柄のは

夕立

夕立の晴ゆく空のひとふりは　さくらはね炭
くも切丸といふべかりける

闇夕立　川井物梁
夕立の雨に追れてにげ水の
雲を霞か闇のたび人

船夕立　四方赤良
船の帆のはらめる風に夕立の
雲のにやのやふり出しけん　大屋裏住
夕立の雲のうき浪たつと巳の
ふり日を三保のあまの釣舟　門限面倒
吉野丸てるに高尾は夕立の
胸形のせをわけてふり行　平生三里季保
夕立の雲もつゝ地は先はれて
しのをつく田にかゝる親船

蓮池夕立　山手白人
夕立の濁りにしむはいや〳〵と
蓮はかぶりをふる池の中

蟬　百足こかね
ひつたりと抱きしめつゝ鳴蟬は
日々に通へるきむすめのもと

別荘納涼　四方赤良
時ならず降来りたる涼しさは
これ水無月のしも屋敷かも

吉原納涼　山上猿成
青簾かけてあつさも仲の町
客と風とを待合の辻

屋根船納涼　山手白人
千早振神田がはより漕出て
すゝむは天津児屋根舟かな

三またの中洲四季庵を　圖南女
蚊も鳴ず暑さも夏の住よさは
すゞしき庵といふべかりける

納涼扇にかきたる市川團十郎
といへるわざおぎのゑに　橘八衢
大洋をかきの素袍の袂にも
しばらく風をやどしぬるかな　峯松風

樹陰心太
水鉢にすゞしくもりの下陰は
人の目につくところてん見せ　紀定麿

土用干
夏の日の暑さぞまさる土用干
地赤の色ももゆるばかりに

眞桑瓜　山道高彦
よい種をたんと眞桑の瓜蔓に
こがね花さき實のなる子村

まくは瓜と西瓜とひとつさら
にもりたるを見侍りて　四方赤良
砂村の名にしの瓜となるこ瓜
さもにもらさぬ水菓子の中

姫瓜　峯松風
夏くさの中にもまぎれる姫瓜は
いかなる人のをとしだれかも

御役　臍穴主

あたらしき染帷子の麻のはも
けふのみそぎと人やもるらん

山川夏秡　　唐衣橘洲
山川に風のかけ乞それならで
はらへば夏のしからみもなし

隅田川御秡　　もとの木網
中とみの秡をすだの夕こへて
まつちのわをやくゞる川風

質屋御秡　　網破損はりかね
みな月もきるゝけふとて御秡川
しちのかたしろ流れこそすれ

徳和歌後萬載集巻第三

秋歌

立秋　　大屋裏住
今朝ひとは散くる庭のかんな屑
柳の枝をけづる秋かぜ

龍宮立秋　　紀おさ丸
さす汐に木葉がれいの散くるは
秋風たつの都にやふく

秋風女房
秋きぬと風かしらすや文月の
ふうじをきりの一葉ちらして

初秋　　石部金吉
ひやゝかな風をまいらせ候と
秋のふうじめほどく文つき

腹から秋人
文月のけさや一筆しめし野に
まいらせそよと秋の初風

文月ついたち赤坂なる桐屋と
いへる家のあるじをはじめて
とひ侍りて　　朱樂かん江
秋もけふ小判のきりや一葉より
まづ落そめて藏にみつ次

風鈴告秋　　から衣橘洲
風鈴の音はりんきの告ぐちか
わがのきの妻に秋のかよふを

へつゝ東作
先秋をしりふる軒の短册も
すこしは友となる風鈴かな

四方赤良
風鈴のりんと響きし秋風は
萩の上はの一文の錢

米舂知秋　　眞竹源藪
米つきはひの出入より取杵の
臼の數にや秋をしるらん

七夕　　楚泉尾張
一夜をば百夜と契るおり姫に
なせお子達が出來はなされぬ
絲瓜皮也

七夕にねがひの糸の有たけを
くりかへしつゝかけて祈らん　湖鯉鮒

鵲の橋は雲井の調子よく
かけわたしたる琴のかよひ路　澤邊横行

今宵しも手向にせんと短冊を
かくや娘も孫もひこぼし　銀杏滿門

星もさぞ今宵一夜のあひびきを
そこはかまどや待わぶるらん　臍穴主

おり姫の年は十六さゝけはだ
たれも女房にほし合の空

青樓七夕　今出赤蒂

まれ人を今宵はとこそ星合の
空だのめなる天の川たけ

七夕絲　一升夢輔

七夕のいとロきらぬむつ言に
くだかけ鳥のくりかへしなく

七夕別　遲蒔千種

舟おさに問ばや星の別れには
楫も機嫌もとりにくきかと

七夕後朝　あけら漢江

よべかりし硯をしばし留置て
ほしやけさかく文月の空　婆阿

七夕のひこよねまきの曉を
うらみてかへすかし小袖かな　多田人成

鵲の曉かけてわたれるは
宵にひきかへにくき口ばし　小川町住

七夕のけさの別れの留られば
天のかはせにはらもかへなん

天河洗濯　根香來無器用

天のかは空色衣あらひあげ
おり姫のりをつけてほしけり　やはり棟梁

吉原草市

けふこそははあんと思ひし女郎花
人にかはれて水くさの市　峯松風

櫻からはや草市と雪の間に
うつりし秋も花の色里　蓬萊歸橋

くつわやが暗きに買し殘荷を
近所の人へうりの馬道　婆阿

數珠のたま祭るしたくの草市に
百八もんじけふやふみ月　腮垣金

盂蘭盆

うら盆にかんな掛取攻くれば
身はみそはぎの露ときへたし　山手白人

中々になき魂ならばとはかりに
かけはたらるゝ盆のくりごと　橘貞風

有やうになしても物の淋しうて
何やらたらぬ玉まつり哉　内匠半四郎

蓮のはに置にし露の玉まつり
世々の佛に水手向ばや　あけら漢江

靈棚露滋

蓮葉に手向る水は濁らねど
野もせあざむく露の玉だな　出すは耳彦

盆踊

手を出して立たり居たり忙かしく
するは給仕の盆踊かも　瓢から酒（酒上執寐改）

蓮飯

めしは青食つくしたる蓮葉に
のこれる粒や露とあざむく　山道高彦

神田川にて靈棚を舟につみお
くるを見侍りて

牛馬をやめて佛も西方の
十萬坪へのりあひの舟　おそ蒔ちたね

角力

春ならで秋の千草の花ずまふ
さそはぬ風に羽織ちりめん　加陪仲塗

荻

秋風が音頭あげたる伊勢踊
濱荻の葉はさゝらにぞなる

萩

吹巻るすその〻風に仙人も
おつるばかりの白はぎの花　五畳多他見

百草の中なる萩にみされつゝ
いくせんにんも道をうしなふ

窓下萩　もゝのふ八十氏

やがてもう彼岸も明る引窓の
下のを萩ぞあかぬ色なる

卜者見萩　秦久呂面

うらなひをおくの細道押分て
めこぎの萩の花をみやぎ野

薄　樺宗匠梅堂

御らうじろ糸薄とて絃えねど
いろはにほまで出かしおるのを

吉原女郎花　臍穴ぬし

此里にこがねの色と咲ぬるを
をみなへしおりて床花にせん

葛　二歩只取

武士のくずのはとはと合せても
臆病風やうらがへりぬる

苅萱　堂伴白主

秋の野に風吹出せは何事を
おかしかるかやねたり起たり

槿　裏場盤子丸

朝顔は誠に日々にしほるれど
又ひゞ〳〵にあらたにぞさく

さんやの里のほとりにてかき
ねに朝顔の花さけるをみて　四方赤良

たつた今別れてきたの里近く
目にちらつける朝顔の花

露　手柄岡持

ぬれぬ先こそ厭ひしがをき〳〵て
末は流るゝ質草の露　柿下手丸

百草の葉毎の上にをく露は
丸薬ほどの玉とこそ見れ

芋葉露　　書出田丸
錢金は持れぬものか芋の葉に
たまれは落る露の玉銀

虫　　白鯉館卯雲
夜なくば珍らしからず晝の野へ
虫のねごとをきゝにこそゆけ

四方赤良
秋の野の千草はやんも白露の
ふつて出たる鈴虫のこえ

鹿　　加陪仲ぬり
秋の野になく棹鹿の角なれば
さいになりてもめや戀ぬらん

千枝有竹
なく聲の細うて長く聞ゆれば
棹鹿とこそ人のいふらめ

さがみのくにの山中にしかの
聲きかんと一夜とまりて
根岸法師
瀧の音に紛れて鹿と聞へねど
もしやあれでもあらふかの聲

雁　　柿下手丸
雁のかた田にこそは落つらめ
いたく鳴ぬる夜半の聲哉

花街鴈　　浦邊千網
玉づさをかけてくるわに鴈も
おつるや多き人あしの中

陣中鴈　　海老船盛
つはものゝ氣は張弓の陣中に
しのびのつらをみだすかりがね

腹から秋人
一つらに雁は野陣をはりま潟
しかまのかちを告にきたより

霧　　忍岡きよろり
風寒く破れ障子をはりかへて
きり吹かくる秋の夕暮

月　　つむりの光
月みても更に悲しくなかりけり
世界の人の秋と思へば

蓬萊歸橋
今宵この月は世界の美人にて
素顔か雲の化粧だにせず

十五夜月　　朱樂漢江
天の原月すむ秋をまふたつに
ふりわけみればてうど仲麿

無錢法師
白露の玉を今宵の十露盤に
三五十五の月とこそおけ

其風尾張
何千里照渡るともけふの月
ながめ盡さん目のとゞくだけ

十五夜くもりければ　　銀杏滿門
大空に名高き月はありながら
ひとつ星さへみせぬ雨雲

望月の夜の空さためなければ
四方赤良
千金の名高き月の雲間より
せめて一二分もれ出よかし

をなじ夜雨はれければ
鶴のかこ女

此比のこぼれかゝりし空も又
くもなくこよひうまれ月影

十六夜月　節松嫁々

かたぶけし昨日の酒の二日醉
そらにいざよふ盃のかげ

立待月　秋風女房

望月とあひだ一夜の忽ちに
すこしかけても影のさやけさ

はつき廿一日の夜月をみ侍りて　大牟三味

算盤のそろ〳〵かけし月影を
みやさん七の二十一日

兀山月　智惠内子

てら〳〵と月の桂をさす影も
はづかしげなる老のはげ山

三股月　天地玄黃

けんをうつ上手の手から水の月
すむゆさんなの指のみつまた

芳野葛子

盃のさす手ひく手に三味線の
かはにうつれる影をみつまた　飛塵馬蹄

大工見月

手細工に窓を開るはくもなくて
月のすみうちすみよかるべし

經師見月　川井物梁

一刷毛に掛地の裏を打見れば
のりのかげんもよくつきの影

瞽者見月　から衣橘洲

澄影を見る目なげくも詮なしと
ひとりまさぐる琵琶の半月

月前雁　大石小石みかけ

雁かねの鍔もと迄も鳴つれて
落るは月のさやかとぞみる

月前琴　から衣橘洲

松の風ふき自在なる月見かな
はらふて雲はみなつくし琴

月前皷　紀定麿

小皷のねながらかしらうち擡げ
影もみつ地の月や詠ん

月前酒　から衣橘洲

さす影のあかきは酒の咎乍ら
月にゆるしの色とこそ見れ

月前枝豆

枝豆の唐もやまとも見る月に
雲はいづくへはじきやりけん

月前芋　ふし松嫁々

照月の山ばかりかは里芋の
ますのすみからすみ昇るかげ

圖南女

今宵ぞとみがく光の桂男に
いもがすがたは衣だにもきず

月前兎　常產阿馬

玉兎はねて慰め十五夜は
おのが毛ほども月にきずなし

月前駒迎　望月あきよし

逢坂や月に名高き關角力
けふの勝負は引わけの駒

九月九日　八張棟梁

此酒をのむは息災延命か
そのふる事ときくの盃

菊

我宿の菊の酒手のけふごとに　横道黒塗師
いく代つもりて借錢の淵

たが方へ貰はるゝやら鍬の上に　山手白人
ひともとをける霜の白菊

前栽の菊見んとて人の來りければ

おかしげに狂へる菊の花見んと　酒上不埒
立よれる人のはらやかゝゑん

巣鴨菊　味噌こしきぶ

盛なるうはきを菊や祖父婆々も
杖にすがもの花の見物　多田人成

水鳥のすがもに植し構
菊のさしこと見ゆるませ垣

巣鴨のさとに菊をもとめ侍りて　馬屋厩輔

すがゝきのすがもに育つ禿菊
けふつき出しのけいせいが窪

飾師愛菊　畠野あせ道

かざりしの世話燒付の菊の花
今朝はめつきと色まさりける

菊花泛酒　銀杏滿門

一輪に千歳を契る花ぶさは
よはひのぶると菊の盃

眞間の紅葉をたづねて　檜皮釘武

暮なんと氣を紅葉ばの友もあらば
ひとり殘らんあゝまゝのかは

十三夜月　あけら漠江

きく月の月見は望の月ならず
籬に花のさけや盃

どこぞへかちと置てきて影さへも　檜皮釘武
たらぬははなの下の長月

吉原十三夜　堂伴白主

くる客は月の舟やど引つれて
足も空ゆく十三やぼり

駒迎　しらぬひのつくし法師

望月の駒は月毛もひくべきを
關の清水にかげみゆるなり

擣衣　澤邊横行

洗濯のひるならで夜もいとまなみ
居ねぶりながら衣うつゝか

妾宅擣衣　峯松風

君ならで誰かきぬたの衣うつ
槌にてかけの宿の淋しさ

隣家砧　紀定麿

隣なる砧も近き壁一重
かたつち落てうちや破れたり

鮎　横道黒塗師

身より出すさび鮎乍ら川下に
落てかゝるはあなあはれやな

新蕎麥　大飯食人

新そばの時分はよしと引拔て
かたきうつこをほまれとぞ聞

秋鰹　雀酒盛

折もよき秋のたゝきの烏帽子魚

かま倉風にこしらへてみん

乞食見紅葉　何多良方士

乞食小屋かどに立田の紅葉見て
昨日もけふもあきたらぬはら

紅葉盗人といふ事を　馬屋厩輔

叱られて後白浪のたつたがは
顔も紅葉にかざす折枝

日陰紅葉　奈良花丸

あきはてし埒の日影の紅葉ばを
いつ染るぞとゝへばあさつて

落栗　渡海里花成

拾ふ數不同のあるもことはりや
毬はすなはちくりからとなる

暮秋　山手白人

花薄ほうけし袖をふりはへて
さらば〳〵と秋ぞくれ行

唐來參和

よもさらば〳〵と別れゆく秋を
まねく薄やいとま乞する

質屋九月盡　古瀨勝雄

秋更て露のたま〳〵をく質も
この月ぎりとなりにけるかな

徳和歌後萬載集巻第四

冬歌

初冬　手柄岡もち

けふ神のおたちなればや風を荒み
空さやけくも木葉みだるゝ

花街時雨　唐來參和

冬がれてくるわに通ふ神無月
しぐれも客もふりみふらずみ

問屋場時雨　子子孫彦

先ふれの時雨晴間の問屋場に
うき雲助や後にたゞよふ

落葉　置石村路

木枯に散ぬるいろは踏ちらし
やまけふこえて冬は來にけり

水茶屋落葉　よしのゝ葛子

夕暮に客も落葉と散ゆけば
木末さびしく水茶屋の床

あたりちかき人のもとよりゐのこの餅をさめぬうちとおこせたりければ　津無坊早耳

重箱のをはぎのもとに伏ゐの子
さめぬうちとて起しけるかも

夷講　書出田丸

夷講けふ商人の馳走とて
客もまうけの席につくなり

大根地をいづるといふことを　其筌琴成

たが種を莚へこぼして大根の
ちをはなれてもかくそだちけん

河豚汁　山手白人

我れ勝に爭ふてくふふくと汁
もりかへのある命ならねど

雪中河豚　帆南西太

魚の名をむざと話すなけふの雪に
身をあたゝむる種が島ぞや

醫師食饌　から衣橘洲

雪の日に千里も走るとら饌は
竹のやぶ醫もくすりとやくふ

武士食饌　山道高彥

元よりもいかものゝふの腹なれば
鐵炮汁の玉はあたらず

芝居顏見世　山手白人

評判は烈しかれとて顏みせに
みな手をうつの山おろしかな

濱邊黑人

顏みせの其人よりもそば〳〵て
とちめん棒の手うち連中

顏見世の朝の雜煮を　もとの木網

三番叟鈴菜をいれて顏見せの
雜煮の汁もたらりらゝりら

朝霜　平秩東作

日の影は小春もまじる朝の霜
どちらが冬とふみわけてみん

橋上霜　鹽屋辛人

雪ならでしろきは霜のはし杜
歸るもすごしゆくもうしみつ

普請小屋霜　堪忍成丈

寒き夜は屛風を假の普請小屋
明れば門にたつ霜ばしら

氷　臍穴主

かはつらの厚き氷と名に立て
身うごきならぬ借錢の淵

硯水　紀定麿

筆をもてうちかゝまほし墨水の
こほりて寒きはだか硯は

枝川氷　へつゝ東作

さくら川枝も氷のはるまでは
とぢてひらかぬ波のはつ花

澤水氷厚　節松嫁々

澤水にかれたつ葦のあかゞりも
なくほどいたく氷ゐにけり

寒夜月　馬屋まや輔

しん〳〵と寒き月下の門徒寺
僧のたゝくは烏のほねなり

千鳥　臍穴ぬし

行返り友呼かはし泣上戸
顔もあかしの浦千鳥足
冬の洲夜崎なる望汰欄にあそ
びけるに庭におりたちて月を
ながめ侍るとて　四方赤良
棒立になりて海邊を眺むれば
月影さむし霜の口鹽
空と海ひつたり月の中川の
ばら〳〵松にたつ千鳥かな
水鳥　手柄おか持
つるぎ羽の劔お秡を振立し
五十鈴の川のおしのふるまい
奈良朝起
朝日さす人もなければ鶸の
さほのかはらにねふる水鳥
勘定疎人
音すれば人もみつよついつとなく
池のふるひをつげにくる鴨
蓬萊歸橋
枝川に餌ひらふ鴨のあしの色は
なかれもあへぬ紅葉とやみん
冬の歌とて　膝本左懸留
冬籠る寒のうちとて霜柱
たてゝ氷のいたもはるなり
霰　勘定疎人
吹散す風も霰の音せしは
屋根をこけらのそのはづみ也
雪　馬屋まや輔
雪見とはいつの世よりの戯けぞと
嘲るはいつのよのたはけぞや
四方赤良
ひとむれの奥女中とも見ゆる哉
つもる木ごとの綿帽子ゆき
土藏雪　紀定麿
白雪の古つゞらさへなき藏は
何でもかでもつめたかりけり
猪牙舟雪　子子孫彦
苫かけて水のおもかぢとり梶と
こぎゆく猪牙の後のしら雪
堺町雪　あけらかん江
今朝みれば木毎に花の堺町
あら面白の雪のふり付
雪中鷺　銀杏滿門
ほそみぞは降つむ雪に埋れて
鷺も泥鰌やふみなやむらん
雪中酒宴　もとの木網
盃の手もとへよるの雪の酒
つもる〳〵といひながらのむ
雪をくふ人によみてつかはし
ける　平秩東作
ふみなんはおしきにもりて聞食せ
あしだの歯になかけそ初雪
鷹狩　銀杏滿かご
降雪にとこからどこがはし鷹の
目にみかり野の廣さしられず
炭竈　加陪仲塗
眞黒な熊野の山に炭燒の
手足もあらく生れつきの輪
五豊多他見
眞白に積るそばから黒煙

是こそほんの雪の炭がま　加陪仲塗

神樂

ね宜共は寒さしのぎに燗酒の
匂ひかぐらの舌つゞみうつ　鈍奈法師

煤掃

すゝはきは落葉の後に惜も又
ちりみだしたる庭の面かな　津良河厚

淺草市

勝栗をまけたと呼もことはりや
淺草市のうらは六郷　紀定麿

ふたつなき淺草市の賑ひは
まことに江戸のかざり物なり　無錢法師

はり強く直段はひかぬ觀音の
千の矢先や市のはま弓　四方赤良

隣家餅搗

垣一重こし粉をつけて賜はるは
居ながら自由自在餅かな　手柄岡持

歳暮

年波のよする額のしはみより
くるゝはいたく惜まれにけり　つむりの光

此ものは花の春へといそぎ候
お通しなされ年の關守　白鯉館卯雲

取組でまけじと思ふ角力さへ
年の關にはかなはざりけり　竹杖爲輕

光陰のあだ矢に歳はたつか弓
月日をとむるせき弦もがな　無錢法師

年の矢はさうぶ刀の束の間に
はや破魔弓と引かはりぬる　子子孫彥

たつた今年も越べきよし垣を
こそくりてまつ春のまぢかき　四方赤良

煤掃ははや杉の戸の閉たてに
はしり加減もとしのくれ椽　多田人成

限ある年さへくれて行ものを
などふるかけのとりに來れる　朱樂漢江

としはくれにき

立て見し柱暦もねころんで
よめるばかりに年はくれにき　河原鬼守

五十三になりける年のくれに

年の關越や驛路の鈴ならで
我身ふりゆく五十三次　唐衣橘洲

武家歳暮

煤とりて弓は袋におさめたり
せめくる老を何でふせがん　四方赤良

武士も臆病風やたちぬらん
大つごもりのかけとりの聲　峯松風

掛乞のたゆみもあらぬ武士は
勇氣をはるにのぶる返金

花街歳暮

鶯も必らず早く來なんしと
年のくれ〳〵待がかね言　一舛夢輔

疊屋歳暮

疊屋が差つまりたる年の暮
ふまねばならぬ床のかけぬひ　もとの木網

節分

あさくらや木の丸のみの山椒も
福茶に年を名のる節分　加陪仲塗

除夜

借錢は首たけ積る大晦日
門の雪さへはらひかねたり　紀躬鹿

門松に明日の春を橙かざり
たつた一夜のこさしなりけり
いかなりけるとしのくれにか　四方赤良

金はあり掛も拂ふて置炬燵
ところ〳〵ねいりつかん年の夜
此うたある人のいはくよみ人しらずさ

徳和歌後萬載集巻第五

離別歌

別　臍穴主

洗濯の後は給となる迄も
先ひきときの引わかれぬる

小川ほくせん浪花にまかりける時　へつゝ東作

浪花潟あしかろ〳〵といてもどれ
友よぶ鶴のおりからもよし

竹下氏の餞に　濱邊黒人

立てゆく足がらとむる關もかな
はこぶ思ひのたけの下道

もとの木あみ上つけの國にまかりける道すがら思ひやり侍りて　置石村路

行先も熊谷ざくらさきぬらし
春のながめはふかやと思へば

千玄室さみだれの比ふるさとにかへるあしたむまのはなむけすとて　馬場金埒

雨もはやにじり上りに上る也
お茶をたて場にしばし待合

いづの國あたみにゆく人を送るとて　門限面倒

紀行の狂歌に詠てきてたもれ
伊豆のお山のうたのはぐさを

かんつけの國いかほの湯あみにゆく人を送るとてはる名の山の名もあれば　秩父根努頼雄上毛

人中ではい顔すな氣を張な
きんせんとうは留湯にしなさい

友とする人わづらひて遠き旅路におもむきけるをおくりて　普栗釣方

花曇りかゝる病もはるの旅
さなわづらひそ後は快晴

なにはの旅のやどりをいづる

とてそのいゑの名によそへて
世入道へまうし
うつしゑの駒に姿のにたる哉
瓢簟屋よりいづる此身は
とみにたびたち侍りし時友ど
ちのもとへ　　酒上不埒
夢に也と知食したかけふぶじに
旅をするがへかごでなすのを

羇旅歌

旅のうたとて　　古家雨漏
古郷へ急げは廻る道のべに
いくたびとなくとくる笠紐
狂歌師旅行　　於保久旅人
旅寢して起せば夢かうつぼ猿
いそげど道は八里くりやき
盲人旅行　　峯松風
座頭の坊頼むは手引足任せ
旅の空へと思ひつく杖
奴旅行　　置石村路
鐙持のふるさともよしや草枕
甍にやどかす花の下陰
紺屋旅行　　望月まん丸
旅衣そめて幾日になるみがた
何とこんやのとまり定めん
海路　　手柄岡持
帆柱のしの字もねせて泊り船
かくてはおきにかゝる事なし
題しらず　　唐來參和
日の足の高なはへもうつきに皃
ならはぬ旅のうしのあゆみも
馬屋厩輔
足引のやまとめぐりの旅疲れ
笈もおもげに瀬田ら大橋
木曾路にて　　加倍仲ぬり
憂事をしるの匂ひも草枕
くはずにをくや露の玉味噌
川留逗留　　四方赤良
大井川鴨川よりも川越の
ちんが心にまかせざる雨
春の末さやの中山を通るとて
星屋光次
花ぬりのさやの中山さして行ば
鐺にさはる岩つゝじ哉
傾城思故郷　　濉川栗人
八朔に白むくをきる暑さには
夕がほだなの下思ひ出す
夏の末輕井澤を過侍りしにい
と寒かりければ　　二歩只取
夏衣うす井峠にきてみれば
さむさながらも身は輕井澤
百餘里のふるさとをへだてゝ
江戸の月を見侍りて
庭桃丸
諸共に憐れと思へお月様
國のなじみはおまへばかりじや
一里塚秋風　　内匠半志郎
はだかげんよい程がやの一里塚
秋風すゞしかたひらの宿
長月の末あけかたに箱根山を

こゆるとて　渡海里花也
山のはの錦をつゝむ月の玉
　いづるや箱根のふたのあけ方
旅宿爐　五足齋灌園
さすが又遠州路とてはたごやに
　爐をきり釜をかけ川のやど
旅宿巨燵　橘實副
足柄や曇れば富士の裾寒く
　旅のこたつにあたら夜の月
油とうじねり方
くたびれて炬燵へふじの腰つきり
　足高山をさし出したり
つのくにあつもりそばの店に
てかたへの人にさゝやき侍り
驪山人東阿 播州三日月
義經は食れぬそばのあつ盛を
　くまかへ給へひらに平山
江のしまにまふづるとて袖の
うらにて白髪貝をもとめて
圖南女
旅衣袖のうらかたまさしかれ
　きたるかひあるもろ白髪貝
みのゝ國にまかりし時笠松と
いふ所にたびねして　栗成笑
古鄕を遙々茲にきてみれば
　かくれみのちや笠松のやど
寄餅羇旅　檜皮釘武
むしやめはついて其まゝ破蒲團
　柏にねたるあんなかの宿
箱根にて　世人道へまうし
仙人になつたかしらぬ雲にのり
　はこね八里を歌でこすとは
大名旅行　見付内住
關の戸も明る横雲たな引て
　一時早の馬やこすらん

徳和歌後萬載集巻第六

哀傷歌

ある人をいたみて　横道黒塗師
花の根に散し姿の惜ければ
　衣かへうき御經かたびら
竹杖すがるが父の思ひにて侍
りけるときよみてつかはしけ
る　あけら漢江
申すべき言の葉もなしあしすだれ
　あのよこのよのふしの別に
父の身まかりにける時　竹杖爲輕
繰返し繰返しつゝ嘆くなり
　淚のたまの珠數の親粒
はゝの七めぐりの忌日になむ
あみだぶつのもじをかしらに
をきてよめる歌の中にあ文字

濱邊黑人
あとまでも袖の涙の乾かぬは
ぬらせし膝のむくひなるらん

物ごとうときがこのみてから
やまとの文どもよみけるがみ
な月ばかりに身まかりければ
智恵内子
集めつる窓の螢の影きえて
涙や文のしみとなるらん

普栗釣方歌角力の勸進して東
西にはしりめぐりしがそのこ
となかばにして身まかりけれ
ば
四方赤良
歌すまふ夢の團扇をあぐる間に
西の方やへ入にける哉

問屋酒船
死る迄狂歌をしての旅角力
あとに言葉の花はふりけり

わかきやもめのほとけに茶を
供するを見侍りて
柳直成上毛
後家たつるはながも薄き茶せん髮
あはれはよそにくみて社しれ

寄松無常　道具屋長持
年ふべき松も柩ぎに使はるゝ
身は四分板のはてぞはかなき

寄十露盤無常　坂上數
とりべのゝ烟とたてし算用は
涙の玉のをきやまどへる

寄酒無常　續松ひで近
のまほしと思へど酒もなき後は
しるしの杉の樽ばかりなり

寄醴無常　濱邊黑人
昨日見し人は一夜に甘酒の
餘りはかなとすゝりあげつゝ

寄鰻無常　七轉八興
立昇るつゐの烟の香に匂ふ
此身は死出の旅うなぎかも

寄屁無常　紀定麿
すかしべの消易きこそ憐れなれ
みはなき物と思ひながらも

祖父素翁のはかにまうで侍り
て　平秩東作
孫をかふよりのたとえも耻かしく
みはかにしげるゐのこ草かな

雲樂齋いもうと身まかりける
ときゝて　四方赤良
はかなしやあのよ十萬おくさまに
ならんとてしもおこし入とは

辭世　白鯉館卯雲
食へばへる眠れば覺る世中に
ちと珍らしく死ぬもなぐさみ

徳和歌後萬載集卷第七

賀歌

寄都祝　算木有政

君が代は都のまちを十返りの
松原とほりつゞく千本

寄橋祝　堂伴白主

懸渡すなりも幾代をへのじにて
やはり昔のまゝの繼橋

子子孫彦のもとにて新宅によ
する祝といふことを　朱樂かん江

水縄もひづまぬ小石瓦ぶき
いはほとなりて動なき宿　紀定麿

万代とことぶく龜のをがは町
鶴のはしらをたてし新宅　四方赤良

かんな屑盡きぬ言葉も新しく
たてし柱のかぞいろはづけ　子子孫彦

木の匠墨さしに筆すてゝ其より
けふは墨を敷島の道

内匠はしらがもとにて柱によ
する祝といふ事を　四方赤良

飛彈たくみ立し柱の數々は
よむともつきぬ三河萬歳

寄筍祝　望月章甫

筍の變らぬ御代はめでたやと
むき出して祝いふべかりけれ

寄硯祝　夕霧籬

やはらぎし御代はかはらの硯石
されば千年をへるぞめでたき

寄刀祝　節松嫁々

古の亂れやきばも白鞘に
うちをさまれる御代ぞやす國

寄琴祝　名万壽盛方

調ぶればふきじざいとぞ謠ふなる
めでたきことの組の數々

寄三線祝　門限面倒

四海波賤が伏屋も三味線の
調子くるはぬ御代にぞ有ける

寄袋祝　酒上不埒

しめくゝりよく治れる大君の
御代は千秋ばん袋かな

寄手毬祝　垢しみ衣紋

君が代の數とり〴〵にたはれ子も
袖かなぐりて手まりつくなり

寄松魚祝　名万壽盛方

竹のはをかいしきにせし松の魚
ひと節ごとに千代やこむらん

野見釿ごん墨かね馬

一節をうたふかつほの祝歌
はやしててうさよい皿にもれ

寄謠祝　紀定麿

謠ふ聲つれて此屋にみちゆきは
さてもめでたき次第なりけり

寄生酢祝　腹唐秋人

足元はよろ〳〵つよも限りなく
のぼりてゆくや老のさかゑひ

髮置祝　四方赤良

今年よりつむりにけしを置初て
千代萬代の數とりにせん

袴着祝　千里亭白駒

刀をも流石に武士の種ぞとて
かみしもつきをいはふ袴着

元服祝　無錢法師

元服を駿河の富士の根揃へに
雪のしらがの末いはふなり

婆阿五十の賀に酒によする祝
といふことを　四方赤良

又もみん榮花の夢の五十年
粟餅くはず酒をのみ〳〵

家居を二間たてつけたる人を
賀して　節藁中貫

高砂のうらを一けんせばやとて
二けんましたる家のはりまぢ

吉奈の温泉にて岩淵三度屋と
いへる家のおきなにあふて
へつゝ東作

あやかれや東方朔が九千歳
手折し桃の數も三度屋

神田祭みんとてよべより河岸
高積がもとに酒のみしにある
じあすのまらうどのまふけに
强飯をあつらへをきしがいか
がしたりけん二所よりもて來
りければ
四方赤良

蒸籠を重ね〴〵のめでたさは
いくらありてもあかの强飯

渡海里花成海の上にてはやて
にあひ舟すでにくつがへりな
んとしければ

夢のうき世今ぞいのちは月の
舟眞帆にぞ西へのりの道かな

とよみ侍りしがふしぎに風な
をりてつゝがなくかへりける
よろこびに　紀定麿

災難にかゝる辭世の歌までも
よみがへりたる君といはゝん

牛込所繁昌といふことを
遲蒔千種

牛込をうしとないひそほにほさく
早稻田おくての道しある世に

龜井戸柳島に山里もとめし人
をことぶきて　一富士二鷹

龜井戸に鶴のまふべき山里は
所からなる柳しま臺

やごとなき君のひとの家より
やしない君よびむかへ給へり
ける時松の島臺の足おれけれ
は人々いみ給ふをいはひなを
して　風來山人

あしといふ事は殘らず取すてゝ
よきことはかりのこる若松

池田氏にてむすめの子うまれ
給ふを賀して　佐倉はね炭

三番叟何より以てやす／＼と
喜びありやことにじやうさま

劒術によする祝　もとの木網

汗水を流して習ふ劒術の
役にもたゝぬ御代ぞめでたき

徳和歌後萬載集卷第八

戀歌上

初戀　銀杏滿門

こは／＼も人のみる目を拔足に
ふみそめてけり戀の道芝

寄山初戀　唐衣橘衣

苦しさもいはで心に納太刀
これやわけ入る戀のはつ山

忍戀　加陪仲塗

うき涙しのぶに心ありの穴
つゝみがきれて袖をもるやと

顯戀　加保茶元成

わくらはに身幅はあへど戀衣
二度ときもせであらはれに皃

隔壁聞戀　鶴羽重

垣のめも忍びて君が言の葉を
へだてし壁の耳にのみきく

祈戀　濱邊黑人

ひきときのうらなく思ふ心より
あはせてたべと神せがむなり

四方赤良

拍手のなるかならぬか一向に
口をむすぶの神ぞつれなき

不逢戀　佐倉はね炭

待詫て鼻をあかせる寒き夜は
はのねもあはぬ君ぞつれなき

千枝有竹

待よりも別るゝよりも悲しきは
あはでぞかへる九十くよ／＼

寄挑灯不逢戀　網破損はりかね

君にあふ手蔓も切てうき年を
ふる挑灯のはりあひもなし

待戀　棹鹿卷筆

此程に待と云たやかんざしの
しやんと疊へたつたひと言

待不來戀　加陪仲ぬり

とぎにして待夜は側に置炬燵

ひともこねこの丸寢せよとや

寄弐待戀　丹青齋

思ひつめてかくばかりなる玉章に
夜はしらみても猶またれける

逢戀　千枝有竹

稀にあふ戀としりなば曉の
鳥もからすもねわすれてくれ

深更逢戀　ちゝのみ滿門

宵の間はあたり隣も强飯の
ふけてと契る夜半の嬉しさ

茶屋逢戀　鎌倉遠則

藪入の度々茶屋とあふ戀に
のぼりつめたる箱ばしご哉

腮長馬つら

めぐり來てあふ日の首尾も葦簾張
よそからさゝぬ水茶屋の中

穴藏逢戀　手柄岡持

穴藏を綠のはしごの折々は
まゐはだふれて水ももらさず

峯松風

忍びあふ中は互にあか土の
ふかくほれたる穴ぐらのすみ

遇不逢戀　於保久旅人

移香の殘りて年をふる小袖
今は身はゞもあはできれぬる

別戀　四方赤良

おさらばと反けし顏をむき玉子
きぬ〳〵糸のきるにきられず

夜發別戀　呉竹よほけ

又こんといひし暇の別れ霜
君が顏にもまだら置けり

後朝戀　手柄岡もち

けさは猶君がときめきの移香に
百双ほどのわが思ひかな

片思　荏土方澄

契られぬ物とは今ぞしるこ餅
一本箸のかた思ひにて

九十九夜通ひしれんぼれゝつこそ
れつきとしたるかた思なれ

恨戀　手柄岡もち

情あり〳〵と思ひてはまりしは
葛のはかまのうらみなりけり

旅戀　白鯉館卯雲

不自由な旅にしあれば椎のはに
めしもりあげて樂しみぞする

鄙野中道

三味線もひかず調子も合ねども
ひとよ旅寢の岡崎の君

新妨仲人戀　四方赤良

相性もよし野の川の水をさす
いもせの山のなかうどぞうき

唐衣橘洲

相思ふ中を隔つる仲人は
なかだちと社いふべかりけれ

子子孫彦

結び置その仲人のさまたげを
きくに心のなきねいり聟

稚子戀　鷹羽番

いとけなき心に思ふまゝごとの

末は人目をかくれん坊かな　紀定麿

稚子の思ひ詰たる一つ身に
などつけ紐をとかぬ君かな　大屋裏住

早乙女戀

早乙女の思ひ懸樋の水もれて
今は歌にもうたはるゝ戀　平生三里季保

早乙女の笠の下紐打とけて
あひみん秋をたのみかけ水　袋筒長

折々に歌もとぎれて早乙女の
さゝやきあふは戀のうへつけ　秋風女房

賤のめが思ひ山田にぬれ初て
穂にあらはるゝ戀の若苗　から衣きつ洲

圍者戀

いかにせん象戯のこまと捨られて
かこはるゝ身の末もつまらず　蘿蕭丸

戀人のつげの小櫛も利休形
さすが千家のかこひ物好　蓬萊山人歸橋

世中を渡りに舟のかこはれは
なみ／＼ならぬ戀の深き瀬　武士八十氏

武士戀

武士も人をこい口束のまも
忘れがたなの身ぞすかれぬる　ふし松嫁々

武士の矢竹心のひかるゝは
いもがやなぎのまゆみ也けり　から衣橘洲

後家戀

こと人を思ひにつくるつみ髪や
なきつまぐしもさすが忘れて　雲樂齋

奴僕戀

いつとなくよい中ぬきも惡さまに
ふみつけられてうき草履取　智惠内子

卜者戀

待人に會ぬよ辛きうらなひ者
かん艮こんとふけわたる鐘　呉竹世暮氣

萬歳戀

さくわかきこまんざいしよの妻しあれば
はる／＼きぬる三河戀しき　小川町住

川越戀

約束を違へず九十五もんまで
かたひつめたる川越の戀　夕霧籬

座頭戀

らうたしと見る目も盲て非ざれば
せめて浮名をたてゝきかなん　鳥空音

互聾戀

忍びあふ中は互の耳と口
きこへませぬと恨をやいふ　望月章甫

戀病服藥

きくやいかに上の空なる風藥
まつよつもりし戀の病に　書出田丸

宵口舌

縺れたる宵の口説もみす帋を
へいでとりたる閨のむつ言

みな月廿日あまり九日のよ何
がしとかやいへる家にあそび

めしてよひとよ酒のみけるに
さりにし世すみける人の傍に
いとようかよひてみへければ
すゞろにむかしを思ひいでゝ　婆阿

夢の中に夢を結ぶの神ぞとも
みよ拍手のうつゝなのよや

あざみをゑかきし扇のうらに
かきつけて人のもとにつかは
しける　清水立登麿

情なき人の心は鬼あざみ
言のは末にもつやとげ針

淺草寺の庭にみめもあしから
ぬよしず張のなには屋てふ茶
屋の女をみて歌よめと人のい
ひければ　から衣橘洲

なにはやの女はよしと夕時雨
ふるともぬれてみたき笠松

德和歌後萬載集卷第九

戀歌下

寄雪戀　童部友竹

とけ〳〵と積る思を今宵しも
いはまの雪のふるへ聲なり

寄稻妻戀　朱樂かん江

暫くも夜床に尻をすへざるは
わか妻ならぬいな妻ぞかし

寄雷戀　吳竹世艶

稻妻のちらとみそめし君ゆへに
心もうはの空になる神

大石小石躬陰

なりさうで我妻ならぬ稻妻の
光かゞやくよそのかみなり

寄初午戀　普栗釣方

一筋に稻荷ともいへ戀の山
のぼりそめしはけふが初午

寄文月戀　子子孫彦

はや秋もきたかと思ふ戀風に
くりかへしみる君の文月　七轉八起

わが緣の暑き夏毛の筆きれて
心ばかりは通ふふみづき　袋町入隅

寄路戀

ぬかるまいと思乍らも踏込めば
足のぬけぬが戀路なるらん

寄橋戀　峯松風

其とのみ言葉の橋は懸つれど
いつかわたしが思ひはれなん

寄樋竹戀　山手白人

思ひあふ中は節なき樋竹の
ながくも軒の妻と見るべき

寄階子戀　大峯三昧

ふみ見れば今宵こいとの嬉しさに
しのびて足をはこばし子哉

寄簾戀　山手白人

簾ごし見かぢる猫に柏木の
ゑもんつくらふ前わたり哉

寄屛風戀　糟句齋余丹坊
うき涙古き屛風の蝶つがひ
はなれ〴〵になるぞ悲しき

寄襖戀　もとの木あみ
人心あさき敷居に堰れては
われから帋もあけていはれず

山手白人
打解てたれと襖かしらねども
いもがたもとのひきて多さよ

寄寶戀　四方赤良
箱入の娘の年はいくつぞと
隣の寶かぞへてや見む

鶴籠女
いつ人の手に入聟を取やらと
たれも思ひをかくる子寶

寄玉戀　峯松風
思ひあふ中は角なくまろ〳〵と
小いさかひさへたまの事なり

寄錢戀　紀定麿
一筋に思ひ重ねしみとせんと
つきつけいふはさしも耻かし

寄琴戀　腮かきかね
戀人にけふは添寝の枕糸
みをひきしむる事ぞわりなき

寄碁戀　加保茶元成
君とわが心はいづれたがひせん
はねかへされて手もなかり皃

書出田丸
繋りし中を今更きられては
二世とかけ月もだのと耻なれ

寄筆戀　望月まん丸
うき人をみそめて年をふる筆の
命毛かけてかきくどかばや

寄硯戀　銀杏滿門
いは硯海より深く思ふぞよ
かほは赤間のせきのへだてに

寄硯箱戀　吹売咽人
浮名のみ高島石のあひ難き
ねがひを神にかけ硯箱

寄弓戀　見龍
手ぐすねをひけど人目の重藤は
はなすまゆみもなきぞ苦しき

寄鐵炮戀　呉竹節躬
たまさかの音づれとても打絶て
うらみのたねが島とこそなれ

如水上毛
玉のをもたゆる思ひのたねが島
さかなき口に火ぶたなければ

紀躬鹿
塞りし胸の火蓋もきれやらで
涙の玉はうちにこもれり

寄刀戀　紀定麿
やつれては心細みの亂れ燒
獨りねたばのあはぬ夜ぞうき

書出田丸
君故に心もうはのそら鞘は
さすが人目のしのぎがたなや

寄鞘戀　吾足齋灌園
身をいれてくどけど固い後家鞘は
たゞいつまでもあふ事ぞなき

寄鎗印戀　　呉竹よつや
ちら〳〵とみしは思もますら男の
もたせぶりなる鎗じるしかも
寄具足戀　　婆阿
いつまでもいはで忍ぶの草摺に
もゆる思ひは胸のひともじ
　　腮かき金
やうやうと今宵の手管具足して
いまやと君をまちうけの筒
寄車戀　　いつも早秋
くどいても人の心やうし車
戀の重荷をつけつまはしつ
　　秋風女房
うき命しばしは淀の水車
思ひをくみてめぐりきよかし
　　やはり棟梁
小車の引手あまたの君故に
戀の重荷をはこぶ身もうし
寄傘戀　　山手白人
ろく〳〵にいらへだにせず傘の
さしもつれなき人心かな
　　四方赤良
傘のゑにしはあれな年月を
ふるぼねかひの手に渡るとも
寄笠戀　　澤邊帆足
笠の紐結ぶの神をあてなれば
とけぬ契の末かけてまつ
寄扇戀　　百足こかね
變らじと契をこめし要とて
今宵あふぎの折もたがはず
寄團扇戀　　大原さこね
疑ひし胸の團扇のはれてより
はなれはせじと思ふ姫のり
寄小皷戀　　高山笑翁
裏ばりの離れぬ戀の中なれど
あはねば心をきつゞみかな
　　山手白人
色深き思のしらべかけそめて
つゞみもつ手もしめつゆるめつ
寄三線戀　　四方赤良
色糸のねをに結ぶのかみごまを
かけてもうきは何のばちかは
寄煮物戀　　ちゝのみ満門
たき物の獨り焦るゝ戀やせに
たふれふせこそ骨ばかりなる
寄椀戀　　柿下手丸
末のかさかけて契れる中がさと
親椀たちもかねてしる椀
寄鍋戀　　忍岡虚降里
よし君がうきをつくまの鍋ならば
われとぢ蓋となりてあはなん
寄水桶戀　　山手白人
水桶の洩さぬ中も積きれて
そこらうき名を流しもとかな
寄茶碗戀　　柿下手丸
打わりて言れぬ竹の筒茶碗
あけくれ物を思ひそめつけ
寄油皿戀　　腮長馬貫
重りて嗜き思ひを下皿に
とかく油の君がまはり氣

寄灯心戀　雲樂齋
筆にさへ書立られぬ燈心の
戀にこがれて身もやせ男

寄雪踏戀　濱邊黒人
厚革に雪踏の裏のかねごとも
踏たがへてはひぞるばかりに

寄下駄戀　眞竹深藪
下駄のはも立ぬ程なり別れ路の
涙の雨のふりかゝるには

寄十露盤戀　醫者小路七影
よしさらば命にかけて算盤の
玉きはるともあはざらめやは

紀定麿
君をのみ思ひ參らせ算盤の
たまさかにあふ中ぞわりなき

猩々變生
十露盤のたま〳〵よれば彈かれて
あはぬほど猶思ひかけ算

寄赤本戀　唐衣橘洲
四天王ならねば戀の山入に
忍ぶ心の鬼はおそろし

寄羽織紐戀　野見秋足
結び置契りは細く打過て
あはぬ羽織のひもたちにけり

寄俵戀　紀みしか
君にわれ思を米のきれしより
面やせにける化粧ごもかな

寄米戀　大飯食人
諸共に米つむまでと契りてし
思ひますめのいねもやられず

寄酒戀　柳直成上毛
とつくりと談る間も夏のよに
はやさんずいのとりぞ鳴なる

寄醴戀　多田人成
醴のすゝなる程になれそめし
二人が中はかたづくりかも

寄中汲酒戀　問屋酒船
薄からず思ひ合たる中汲は
菰かぶるとも心からくち

寄茶戀　大屋裏住
憂事を談らは今かはつむかし
のちむかしまで別義あらしな

寄燒飯戀　垢染衣紋
憐れとも云人はなしあぶりこの
身はやきいひに胸ぞこがるゝ

寄冷食戀　大根古木
朝夕に契るとすれど似菩薩の
一夜へだてばすえかはるらし

寄牡丹餅戀　裏堀盤子丸
牡丹餅の味も心も變らじと
ちぎれどへだつ堺重箱

寄田樂豆腐戀　卜柳
やる文の返しもせねば田樂の
くし〳〵むねをこがす我みぞ

寄梅干戀　大原久知爲
梅干のすいはみをくふ習とて
たへぬ思ひのたねばかりなり

寄牡丹戀　秋風女房
相思ふ二人が中もこく牡丹
うしとはいはじいろ深見草

寄蓮戀　人世話成

其となく戀の糸ひく心ねを
ほりて開のもはすはなりけり

寄百合戀　丹青齋

搖起し搖起してもうつぶきて
花の顏ばせみせぬ床の間

寄薯蕷戀　手柄岡持

足曳の山に生てふ長芋の
長くもいもにあはでやまめや

寄眞桑瓜戀　四方赤良

あはまくは瓜の畠にねもしなん
とりつる履のうき名たつとも

寄藤戀　績何齋よたん坊

戀中もうす紫の藤の花
咲といふさへきにかゝりつる

寄栗戀　はし鷹身寄

澁々ないらへ乍らにうつぶくは
まだうたぐりのき娘ぞかし

寄竹戀　大井底郷

此君とひとよねふしのさゝめ言
思ひのたけもわりていはゞや

寄筍戀　よし野の葛子

人目をも幾重か包む竹のこの
ふしのまに／＼心こめつゝ

柳すくなり

思ふたけ殘る話の短夜に
ねほりはほりは深い戀中

寄武士戀　常産阿馬

弓取のゐるやくそくを引つるは
はなれてのちにあはじとや思ふ

寄鍛冶戀　皆人和良布

おさふねの並々ならぬかぢとりて
人目の關をうちもこへなん

寄大工戀　絲瓜皮也

くる／＼と卷おさめたる墨壺の
いともうれしき君が玉章

澤邊横行

墨壺のいと一筋に思へども
うらむぞ君がまがりかねなる

寄仕立屋戀　猿万里太夫

きぬ／＼も立別れぬふ目の針に
いとしき身をはさしつもれかし

寄商人戀　便々舘湖鯉鮒

思ひねに會ぬ恨を書出しの
ふみつけられて猶もこふらし

寄乞食戀　普栗釣方

日に千度門にも立んわが戀路
どうぞ叶へて下さいやしやう

寄手習戀　常産阿馬

けふよりや思ひ參らせそろ／＼と
うきみの紙に戀の手習

峯松風

咲そめし花のいろはも戀風に
ちりけもとからぞつとする墨

車井多久類

いろはより手を取初めて教れば
紅葉ちりぬるお若衆の顏

寄蹴鞠戀　朝起つらき

あふ事もありや／＼と待けるに
さら／＼とんと君のそれまり

寄踊戀　海老船守
盃〻と契るに胸も踊子の
あひみん事はけふあすばかり

寄花火戀　山道高彦
結ぶべき緣のつな火の折をえて
あふは雨夜の星くだりかも

寄馬戀　鎌倉遠則
馬にのる身にも戀路はかち跣足
とりもつ人を力草かな

寄猿戀
つれなさに思ひは猶もまさる也
ひつかきおくる言のはもがな

寄象戀　內匠半四郞
包めども女の髮に繫れて
心のたけをみんなはく象

寄鯛戀　門限面倒
色香には顯はれねどもなま鯛の
ちと御座つたと見ゆる目の中

寄子戀　和歌も少々讀安
椀箱に鼠のいりし心地して
くるしき戀はねつかれもせず

寄丑戀　藤葉奈丸
わか戀はかの老人の牛ならで
りんきの角をひけらかさるゝ

寄寅戀　榎雨露住
つれなさよ風の便に言よれど
はりこの寅のかぶりのみして

寄卯戀　三方長熨斗
つらさうさ兎の耳の長文を
かきちらしてやきるゝ命毛

寄辰戀　藤葉奈丸
今ははや浮名も辰の天上に
のぼりつめたるわが戀路かな

寄巳戀　扇折風
くちなはの二筋となき心にて
もつれあひたる戀とこそなれ

寄午戀　三方長のし
夢にさへ君が心ははなれ馬
うしを見し夜ぞ今は戀しき

寄未戀　藤葉奈丸
未にはあらねど君が玉章の
くひさき紙はくひたくもあり

寄申戀　ひまのないし
まご〳〵と虛ばつかりを云なさる
しりもむすばぬ君がことのは

寄酉戀　和歌茂小々讀安
待詫て早速はづすかけがねは
とりのそらねもいらぬ閨の戶

寄戌戀
棒ならで今宵は君にあふ夜也
ねせはしやせぬさあおきな丸

寄亥戀　園蝴蝶
ゐのしゝのふり向難き戀路哉
たとへ命を牙にかけても

寄猫戀　すは子
垣ほより姿をちらとみけ猫の
またたび〳〵に思ひみだるゝ

徳和歌後萬載集卷第十

雜歌上

いさよう空はれわたれる夕ふじのねをみやりて白扇倒懸東海天といへるからうたを思ひ出て　朱樂漢江

白扇をさかさに懸し山は今
つまこがしたる煙たつなり

日くらしの里本行寺に物見塚とてこだかき所あり筑波山人のかきたるいしぶみたてりこの寺の庭よりつくば山もよくはれわたりてみへければ　婆阿

物見塚昔尋ねてふみ見れば
右と左につくば山人

隅田川　紀定麿

一ぱいに硯の海をひき出して
すりながしたるすみ田川かな

きさらぎ十日あまり二日四方赤良あけら漢江にいざなはれてすみた川に舟逍遙しけるに折しも月おぼろに空のけしきもたゝならねば人々歌よみ興しけるついでに　銀杏滿門

船頭はなくとも舟は波の上を
どうかこうかといざり火の影

樓臨三絃江といふことを　平秩東作

玉琴におさめし國のためしをも
ひくさみせんのほりの高殿

下總のくに小金原を過るとて　今村寄樂齋

名にしおはゞ貸て呉かし小金原
末になすのゝはてはみへねど

八代にいたるとて火川といふ所にてひうち石ひらふて　横道黒塗師

ひの本の肥後の火川のひうち石
ひゞにひとふた拾ふひと〳〵

一谷　腮長馬貫

一しきりたゆみて又も敦盛の
末は露けき月のくまがへ

狐渡諏訪湖といふ事を　内匠はしら

氷てはゆきつ狐のおのづから
すはうちつれてわたる湖水ぞ

みな人は神の敎をすはこそと　常産阿馬
氷はるかにわたる水うみ

名所博奕　智惠内子

かつ事は遠つ近江の負ばくち
もとでもいなさ細江なるべし

名所生酔　堂伴白主

白波の立もよろ〳〵生酔の
顔はあかしのうら千鳥足

庭苔　夕霧籬

人とはぬ庭も我身も垢つきて

苔むしけりなものぐさの庵

苔埋古墳　七常持

年ふれば石の肌も寒さにや
苔の衣をくるみてぞ居る

辻番栽松　へつゝ東作

辻番が下座のかた手の作り松
日に十かへりもはひつははせつ

題しらず　傘楽守尾張

投てしる此かはらけの音なきに
麥のはたけの地にみつるとは

山家　石部金吉

鐵炮の隠れずみなる山里に
たまさかに人もねらひくるなり

放屁百首歌の中に　四方赤良

山里に屁ごみしつゝ入しより
うき世の事は屁とも思はず

山家獣　いつも早秋

音づるゝものは狸の腹鼓
ちつとも人のとはぬ山里

閑居燈　銀杏満門

世を捨る心と細き燈火に
物おもはする吉丁子かな

しのばずの池のほとりなる山田景富のやどりをとひ侍りしに風景いはんかたなければ　四方赤良

垣越にむかふが岡の景色をも
わが物がほとしのばずの池

述懐　手柄岡持

金なきと隙のなきとに代へてまし
病ある身と苦勞ある身を

年々に目も弱りゆきはもかくる
ふるのこぎりのひきてなき身は

加陪仲塗

われが身も三十にしてたつか弓
やたけ心にまごふたゞ中　清水立登麿

嘯月齋鶉山美濃神戸

塞翁かむまい事ならいつとても
後からうしが來ると思へや

四方赤良

世中の人には時の狂歌師と
呼るゝ名こそおかしかりけれ

老述懐　志月菴素庭

老のみとなるこの瓜の今ははや
婆々でなければ歯にあはぬなり

鐘撞述懐　眞竹深藪

一つづゝつくまにつくや溜息の
身はすてがねとかねて思へど

鎗持述懐　間屋酒船

此まゝにいつまで年をふる鎗と
わづかとり毛の身をかこつなり

寄菊述懐　山道高ひこ

行秋とあす白菊の露の身の
うきは涙にひたし物なり

寄屏風述懐　から衣橘洲

世にたつは苦しかりけり腰屏風
まがりなりには折かゞめども

寄浴衣述懐　糟句齋余丹坊

雑巾となるみざらしの古ゆかた
又しぼられてくちやはてなん

はるのはじめ何がしのもとをあるじこし侍りて　さくらはね炭

玆に一夜彼處に一夜さゝ鳴の
身はうぐひすと飛ありくなり

題しらず　引わり御膳

ふき自在ならぬ女子の身の上に
男みやうがのあらせ給へや

四十にちかきとし前齒のひとつ落はべりければ　馬屋まや輔

靑かりし頭もいつか村紅葉
ひとはちりゆく身の秋ぞうき

世のいとなみのしげきによりてこのめるあそびも遠ざかりけるに　加保茶元成

並ならぬ用事のたんと寄くれば
釣にゆくまもあらいそがしや

むかしよりわかすむところは水難の沙汰なかりしに天明三年文月の比大水出て家居もながれ侍りければ　嘯月齋鶉山

話にもきかぬ寢耳に水入て
戸口に舟のかゝるためしは

不破の月見んとやくそくせしもことしの水難にて無下になりけるがその日になりて友のさそひ來にければ

水難に沈む心もつゐ月に
浮れてふはと出かけこそすれ

武士貧乏　山手白人

貧すれば質に置のて太刀かたな
さすがは武士のうけつながしつ

炭團うるものゝまづしきを見て　大原久ちゐ

借錢をまろめかねてや炭團やが
身をけしずみの粉にはたくらん

老女懷舊　宿屋めし盛

いつのまに綠の髮も雪つみて
柳ごしさへかくかゞみぬる

紀定麿

思ひ出るよめりの時の丸綿も
今はしらがの雪とふる婆々

遣手婆々懷舊　小川町住

俤のかはりて年も積る身は
名のみやりてのはなをとる婆々

紀定麿

駒下駄に勇みし我も今ははや
遣手の婆々のらちくちもなし

まらうどのまうけにさかな調じけるとき

水すまば先赤ゑひを洗ふべし
にごらば鮒の足をあらはん

盃の蒔繪を見侍りて　人世話成

盃のうらは蒔繪の烏なれば
おさへるひともさす人もあり

菊印の酒を人のもとにおくる
とて　猿万里大夫

あくる度ごく／＼／＼と音あれど
藥ときくの酒印かな

やごとなきかたより月をゐが
きし船のかたちしたる盃をた
まはりければ　仲吉子よし

君は舟しんもろはくを引受て
のまばや水にうかぶさかづき

題しらず　風前雲助幾升見

一歳は酒にひたりて過してき
この世はさめて夢にぞありける

雀酒盛　置石村路

もとよりも雀はさゝがすきなれば
ゐさしの竿にさいつさゝれつ

久しくあはざりける山田氏に
いなだといへる肴にて酒すゝ
むるとて　武士八十氏

今もつて酒は山田のおろちなら
出す肴もいなだ姫ぞや

ぐそくびらきの日紀定麿來り
ければ　酒上不埒

五十歩も百歩も同じ足もとの
よろりよろひと醉給へかし

返し　紀定麿

むだ口は何の役にもたゝかひを
もつてたゝれぬほどに醉けり

人のもとへ酒さかなをおくる
とて　可笑

初秋の風もふくらにおね酒の
口にあはびのかひあらまほし

伊豫守何がしのもとにてはた
しろといへる魚を味噌吸物に
していだしければ　山手白人

これも又いよのゆげたの馳走とて
とをはたしろのみそになりけり

生醉音樂　もとの木あみ

ひちりきの舌も廻らず大酒に
うどのゝあしもたゝぬ生醉

何がしのとのゐ所にかつほの
さしみをおくるとて
平生三里季保

ごばん所へ打て變つた進物を
かうでかつほのさしみとも見よ

醬滓　栗成笑

山にもる醬油のみこそ悲しけれ
秋はてぬればくふ人もなし

鮎の鮓をたうべて　養父坂押躬

千金にかへじと思ふ鮎のすし
これもかはせにのぼり下れば

奈良漬　鵜柄仙口

奈良漬はならに限らず何處でも
かすがあるからならな漬といふ

米のあたえたうとき比　瓢から酒

花よりは團子ちいさく見へに皃
小米ざくらもあたへ千金

なりはひあしきとし粥の攝待

するをみ侍　て
菫菴退二 美濃
貧民の飢たる腹へほどこしの
かゆい所へ手のとゞく慈悲
棚上牡丹餅　雀酒盛
牡丹餅を棚にあけはの蝶もこん
かけしきなこは菜の花の色
むさしのくに一の宮の池より
ぬなはをとりておくられける
人に　かすく齋余丹坊
たべつけぬ生蓴菜をみたらしや
これぞむさしの一のおみやげ
詩人嗜餅　竹杖爲輕
酒一斗のみにし人も物かはと
かみこなしたる餅は太白
隣より黍團子をもらひて
丹青齋
下さるは日本一の黍團子
ひとつついたる音もいたした
智惠内子のもとへ大和柹にそ
へてよみてつかはしける
吉野葛子
讀習らふ歌の種にとへたながら
心ばかりをかきおくるなり
返し　智惠ないし
賜るは御所にも似たり言のはの
花もみもある枝がきのもと
澁柹をとりてあまぼしにしけ
るが天氣あしくて不出來なる
を人にすゝむるとて
古屋雨滴
あまぼしにすれば天氣も搔曇る
しぶ〳〵ながらあがり給へや
すみだ川のほとり牛島といふ
所に中田屋といへる酒家あり
みな人これを葛西太郎とよぶ
いけすの鯉に名あり
平秩東作
庖丁がさく牛島のあらひ鯉
かいしく声のはさへこぼれず
川風に鬢そゝけたる人ばかり
歌舞妓工 中村重助
あらふてくふは鯉のひやもの
四方赤良
ふたつもし牛の御前の向島
太郎か鯉はいけの中田屋
淺草の酒家うかむ瀨といへる
たかどのにて鮑の貝の大なる
盃にて酒すゝめければ
生醉と笑はゞ笑へ味酒の
みをすてゝこそうかむ瀨の貝
うかむ瀨のたかどのにて酒の
みけるに人々庭におりたちて
蹴鞠せしにまりのそれて川の
中に落ければ　多田人成
浮む瀨に沈める鞠も隅田川
ありやなしやと擶頭にとふ
友どちひとりふたり目黑に詣
けるにそのともひとりは上戸
ひとりは下戸になんありける

折から雨ふりければ
　泥道すべる
村雨のさめるもあれば酔もあり
これやめぐろの不動なるらん
鳶の油揚豆腐をさらひ行くを
み侍りて
鳶飛で天にいたりし油揚は
ときにとつての僧のめいわく
ほしなをみ侍りて　生儘成
徒らに我身は干菜の年をへて
むかしの若菜今はこひしき

徳和歌後萬載集巻第十一

雑歌中

九十六になりける人によみて
つかはしける　吾足齋灌園
おあしさへ達者てしかも錢百の
としにすこしも不足ござらぬ
浮腫をやめる時消息してとは
れし人にこたへ侍る　手柄岡持
わか病問給はればすら〳〵と
水もなかるゝ心地こそすれ
目をやめる人をみ侍りて　便々館湖鯉鮒
うは玉のやみ目は空にしられねど
かた〳〵はほしかた〳〵はくも
女子の疱瘡を見侍りて　飾藁中貫
はら〳〵と四乳の様な疱瘡は
かせかけるほごさてもよくなる
孫の疱瘡を見侍りて　車屋義人
疱瘡を駿河のふじの山高く
けふみづうみの初めなりけり
連歌をこのめる人痢病をやみ
けるに　紀定麿
連歌師のさり嫌なく食し物
うちこしてより痢病とやなる
人のはやり風ひけるときゝて　間屋酒船
引風の邪鬼追拂ふしやうきさん
たゞ一服でげん宗の夢
風を引て咳のいでければ　堂伴白主
水洟のちるともよしやよしの川
しがらみかけてせき留めなん
やまひののちしばらく酒をや
め侍りければ　峯松風

下戸となる我身一つを嘆くなり
ふたつみつよついつか呑たや

盲人針治　勘定疎人

世の闇をさぐり〳〵て針立の
心ほそくもうちくらすかな

癪をやめる人に針うちてやる
につれなくもなをらねば

から衣橘洲

打わびて今はせんかた筑波山
にゐばりいしのまねはすれども

灸をすゆる人をみ侍りて

澤邊帆足

捨やうと漸く思ひきりもぐさ
これがきかいで何としやうもん

積病をうれへ侍りける時

四方赤良

思ひきや我借錢のしやくならで
わき證文にこはるべしとは

夕立嫁入　阿久垂粕

夕立にあふよめ入の行列は
つき〳〵までもぬれの相伴

喜三二のなかだちにて妻をむ
かへければ

酒上不埒（戀川春町）

婚禮も作者の世話で出來ぬるは
これ草本のゑにしなるらん

ある人の嫁にはしめてあひ侍
りて　山手白人

花嫁御よくみ吉野と思ひしに
お目にかゝるはけふがを初瀬

狐嫁入　八十氏人

夜のとの嫁御はいつかこん〳〵と
まてば甘露のひでり雨哉

京間内則

かつぐ藻の花嫁の顏眺めんと
舅もそばへよるの殿さま

女房なき家はとりしまりなき
と人のいひければ

吾足齋灌園

小ぎれいな住ゐはならず女房が
なければむさいくらしなりけり

生みたまのいはひの日碁をう
つ人を見侍りて　仲吉子好

はぬる魚をさへて切てふた親を
いはふがこうのいき身たまかも

圍碁すきける人のもとにて黑
くぬりてかけごある枕を出し
てねぶりをすゝめけるに

津無坊早耳

うば玉の夜を黑石になずらへて
かけごの枕うちもこそぬれ

双陸にまけぬれば

加保茶元成

双六をうつの山べのうつゝにも
夢にもひとつかたぬなりけり

みやこに侍りし比鳥石山人の
もとにて阿野郷の御書あそば
さるゝを見奉りて

世入道へまうし

水莖の御後に恐れ夏ながら

ぞつとするほどかんじ入けり

夜業　勘定疎人

よなべかとことへど答もないぎかや
口にたまりしうむのあいさつ

川向喧嘩　一升夢輔

はてしなき水掛論の川向ひ
わたりもつかではらをたつ波

圍碁によせて喧嘩の中なをり
の心をよめる　唐衣橘洲

生死の論はむやくと打かへて
なをる中手の圍碁はむつまじ

邪許歌をきゝて　武士八十氏

力をもいれずしてまつ手近くの
つちを動すきやり歌かな

居ねふりする人をみて　野見秋足

居眠りの船漕出す海づらは
いく朝はやくをきつしら波

咄上手聞下手といふ諺を　山手白人

お上手の話すゝめもかひぞなき
身は聞下手のしかも聾

傾城無筆　銀杏満門

思はずよ世に浮れめの八文字
その駒下駄もふみかゝぬとは

傾城博奕　竹杖すかる

伏るのはよきめと思ふ壺さらを
ふりてあはざるはりの強さよ

ある人主人の命にて能の太刀
をつくりてあげしときゝて　平秩東作

御細工のしてがよければ脇にさす
太刀も一ふりある男舞

兵法者ぬす人にあふといふ事
を

兵法者己がやじりは斬れたり
とるにかひなき運のつき弓

ふとゐと河骨を生花にせんと
て轡ごめにいけかぬる人を見
侍りて　寝小辨垂高

口ごはきふとゐは綱の轡ごめ
かう骨折て居るもいけずき

米のあたへ貴き比市のほとり
を過侍りて　一本鎗主

帆をあげし米の價は高砂の
このうら店によくもすみの江

菊畑にませ垣したるかたはら
に下部のしゝするを見侍りて　紫由加理

牡丹なら名にめでし共見ゆるさめ
菊のまがきにしゝはいかにぞ

文月六日人のもとより竹をお
くらんとありしに　手柄岡持

呉竹と聞ば此方は星合の
空時宜なしにもらひ申さん

神無月の比ある人のもとへ美
濃紙をこひにつかはすとて
ふる筆の笠はあれども神無月

時雨をふせぐみのを賜はれ
何がしの大守下着にもろ人の狂歌をかゝしめて狂歌衣と名つけ給ひしにその衣のそびらに花信齋が草して猿をかきたるをみて　四方赤良
誹諧の猿の小簑もこの比は
狂歌衣をほしげなりけり
雨のあしたすて子を見侍りて
子を捨る藪しも分ぬ暗き夜に
涙の雨やしのとつき弓
雨夜百物語　出諏訪耳彦
化物の話はたつた一筋の
燈心さへもけしからぬ雨
やんごとなき方に久しうてま見へ侍りしにわが老さらぼへるさまをあはれみ給ひてまことにきりんも老ぬればとの給ひし時　白鯉館卯雲
私に騏驎の事はあらざりき

駑馬にをとるはわかいうちから
大屋うら住のやどりちかければ日ごとにとひ侍りて　腹から秋人
たはれたる和歌の裏住近ければ
あし間を見ては尋ねこそすれ
やはらの師にわぶることありてひたすらいひものすれど心とけ侍らねばいつかやはらぐべきわびうたをと人のもとめに　から衣橘洲
武士の心やはらもしらぬ身は
手もなくかゞむ腰折の歌
放蕩なる男子のもとへ　拙堂法師
福徳の寶と思へのらむすこ
いつも親父にもらふ目の玉
わが持たる簑亀を見る人多ければ　風來山人
天か下名をふる事の印には

多くの人の來てはみの亀
ひとのすぎはひといへることを　檜皮釘武
細くともかりのうき世をすぎ揚枝
おく歯に物のかゝる苦はなし
雨の夜峯松風のもとにて　讀人志禮多
源氏にはあらぬ雨夜の物語
六十帖もこの四疊半
ある人淺草海苔をほそくたちてやき酒のさかなにとていだしければ　久壽根兼満
たゞのりを短冊なりにやかれしは
むかしながらの山ざくら炭
東牛齋にて布留糸道のさみせんにあはせて誌仲といへる翁源平つはもの摘蓮生道行の段をかたりけるに橘大夫の舞ければ　四方赤良
蓮生の道行がゝり取敢ず

うたふもまふもつはもの揃

返し　橘大夫元家（上代目市村羽左衛門）

初めての連中様に蓮生の
道行がゝりさても迷惑

きさらぎの比山道高彦とぶら
ひきませしかば　澤邊あや子（芳澤菖蒲）

され歌に聞傳ふ名は高彦の
君もはじめてきさらぎの比

返し　山道高彦

諸人のひくや地藝とよし澤の
あやめにはつのげんざん位なり

題しらず　三方長のし

針ほどな事に棒つく足輕は
おもきやしきの武士の金鐵

四方赤良とゝもに日ぐらしの
里にあそび侍りてかはらけを
谷へなげて興じ侍りけるとき　一本鎗主

かはらけの落る所もかすかなる
その日ぐらしの茶屋のあきなひ

花道つらねが木場のやどりを
訪ひ侍りしに門に二もとの松
のたてるを見て　四方赤良

遙々と尋ねてき場の隠れ家は
杉にはあらぬ松たてる門

日ぐらしの里にて　日影土龍

今日はけふあすは飛鳥の山近き
その日ぐらしに遊ぶこそよき

題しらず　長々浪人

士のかゞみと人のいふなれば
我もうらやにがゞみてぞすむ

花道つらね

おほけなく柹の素袍におほふ哉
わがたつ芝居冥加あらせ給へや

徳和歌後萬載集巻第十二

雑歌下

老子　四方赤良

桃栗は三年柹は八年の
中にすももは八十とせの春

莊子

莊周も猫に追れてうなされん
蝴蝶となりし春の日の夢

列子

追風に乘ゆく時の道中の
くものあしよりはやき駕舁

唐堯

おふたりの娘にひとり聟養子
土階三尺こぬか三合

伯牙　貫夕（美濃神戸）

もうきゝて非じと思ひきりの木は
ことはりぞかし／＼　四方赤良

鍾子期に別れし時のおみくしは
琴をかついて山やすぎけん
陶淵明
世の憂を柳にやらでませかきの
聞とひさしくかへんなんいざ
褒姒
おめかけの館で風をきる比は
船のほゝゑむ花火見物
揚貴妃
空だきの沈香亭の全盛も
あはれ馬嵬が原のひとつ屁
赤壁
文月の文もや通ふ神無月
うらをかへして遊ぶ赤壁
函谷關
鷄の宵鳴とほど過し比
棒ちぎり木でせきに關守
范蠡遊五湖　河那可師古
功名を遂しもぬけの唐衣
きまゝにあそぶ五湖のつり舟

米搗　臍穴主
晝間より夜を米つきや歸らん
朧のかけを庭にのこして
車引　紀定麿
身代はまはり兼ねたる車引
つらきうき世をおし渡れども
猿引　峰松風
三本のたらぬ獸も愚かなる
われにましらの藝はもちけり
臼目切　大石小石躬陰
何してもひき臼藝のまに合は
めきり〳〵とはかどらぬなり
布袋の湯あみするゑに　友垣古文
布ぶくろ垢落さんと湯浴して
豆のから子もつかふなるべし
壽老人笛をふくかたかきたる
に　唐衣橘洲
たをやめのあしだならねど壽老人
ふくによりくる鹿笛の聲

鞴韝人のかたかきたるに
四方赤良
中華とはいへ其花は夏の夜の
ひと夜にかはる罌粟坊主かな
大刀うばひとかいへる能狂言
のさまを福王何かしかゑがき
しかたはらに　あけらかん江
束のまに太刀や奪はれ太郎冠者
さしづめをのが目釘ぬかれて
万象亭のあるじ竹杖爲輕のも
とめによりて藤花かつぎたる
女をかきたる大津繪の扇に
河齋鈍通與二兵衛
誰人のゆかりの花の姿ぞや
今も大津に年をふりそで
雨やどりの繪に
白鯉館卯雲
村雨のやがて晴るゝと知り乍ら
やどる心やひさしかるらん

よしのゝ山のゑに　驪山人東河

よしのわん雲のはし／＼懸れるは
自然と咲し花漆かも

四方赤良

昔たれかゝる狂歌の種まきて
よしのゝ花もちりになしけん

金魚をかける扇に　宗匠梅堂

きら／＼と天地に金魚きらめくは
みてもすゝしきおせんすい哉

虎をかきたる扇に　袋筒長

これも又扇の骨の竹にすむ
とらのゑなれば風やおこらん

何がし大守のもとにて江戸大夫河東が扇にかきてつかはしけるその扇のゑ竹に雀になんありける　四方赤良

汲交す銚子のさらにからまりて
酔をすゞめの時を江戸節

杜若のゑのつたなきを見侍りて　大屋裏住

盗人にゆかりの色かこんな繪を
かきつばたとはふといやつ橋

巖にうみほうづきつけたるかたかきたるに　朱樂漢江

沖津風海はうづきをふくからに
自然とあはのなることそきけ

阿那可師古わがすかたをゑがかしめて歌をこひければ　四方赤良

鏡にて見知ごしなるわが姿
お目にかゝるも久しぶりなり

四方　東菊麿

煩惱は皆みのあだと北面を
すてゝあづまの富士見西行

曉　田畑持麿（下毛栃木）

夢にのみ拾ひしうその革財布
うき世にかへす曉のかね

夜明烏　大屁股臾

押柄に人の妻戸をあけ烏
かゝあ／＼と呼わたるかな

雨ふりの日傘といふ事を　山手白人

ことはりや長柄持なら振もせめ
さりとては又ひがらかさとは

座鋪八景の中に時計晩鐘　白鯉館卯雲

黄昏れて夜食もちやんと食しまふ
腹の時計や茶はせんまい

時計大狂　銀杏みつかと

時計をば當にはせねどあんまりな
ことにもよるとひるの間違ひ

闕放馬　畠あせ道

板庇もれて月毛の放れ馬
不破の闕屋のあれにあれゆく

万載集にたゞ一首いりたる事をなげきて　加保茶元成

とく和歌をよまば集にも洩まじを
後万載とはなりにけるかな

万載集世にひろまりて後万載のもとめせちなればよろこびのあまりに　板元伊八

まんさいは我等が家の大夫殿
はらつゞみうつこく和歌の集

徳和歌後萬載集卷第十三

雜躰

短歌

ひとゝせ江府の狂言芝居市村竹之丞座に上方より秋田彦四郎といへる道外がたの下りて狂言をあてけると聞て

笹　麿

兩芝居、つむ蒸籠の、山たかき、木戸番の聲、やかましく、貴賤群集の、とり沙汰は、いづれと心、さだめなき、時雨ふりをく、あづまぢや、江戸風はいさ、しらぬひの、つくすたはけの、かほみせに、よき評判と、えてに帆を、あげてあてたる、ふきや町、市村竹の、上手ども、よりあつまれる、見物に、はめをはづして、こみ馬の、あとあしになる、やくしやまで、尻尾をふつて、はねきれば、鼻毛をのばし、とんぼうに、つられてぞゆく、いくたびか、秋田ときけど、見あかざりけり

此うた古今我集にみへたり

兩國橋のほとりにてよめる

津むり光

鎗たへぬ、兩國ばしを、いくめぐり、めぐりてみれば、ふしの根も、おもしろたへに、あは雪の、ふりに呼こむ、前だれは、たれとちぎらん、いくよ餅、いまやつくばの、山うりは、うそさへつきの、くまの膏、あぶら虫てふ、子もり子の、あまのみるめの、かるわざえ、鶴のゑひろひ、竹わたり、いく千代としをふるでくの、あやつり糸の、よるべなき、かたは車を、みせものに、する墨流し、いろ〳〵の、似顔にしき

の、川いちに、たがこはいろや、うたかたの、きえてはともす、うば玉火、しだり櫻の、よし野丸、うらやましけし、人しげき、茶屋の床机に、こしかたを、はなしうなぎや、はりがねの、みがけばひかる、玉くしげ、箱入にして、温石の、石川島も、ちかくみゆらん

反歌

見渡せば淡雪花火橋の月
あたへ千万兩國の景

冬の長うた　問屋酒船

ちはやふる、神も出雲へ、ゆく秋は、きのふとすぎの、むらしぐれ、僧や法師の、けさよりは、ころも奉加を、せん念の、心ねじやかの、十夜まへ、うしろあはせに、ゐの子とて、くばれる重の、うちは同士、うなひごもが、もちくばり、ねのこは三か、いちのさま、さま〳〵ひさぐ、魚の名の、ゑびす講には、直や高き、いやしきわざも、すみうりの、その日〳〵を、くれはどり、面しろからすも、うりありき、雪にはいとゞ、黑き指、十し天一、ひととせの、めぐり暦を、かうがへて、みかどへさゝげ、たまみその、ひなもみやこも、一陽の、ふくすふぐとの、あつものは、あたゝかみこの、きれ〳〵も、出あひがしらの、はちたゝき、世を瓢簞に、ぬらくらと、なまずましなる、茶せん髮、撫ずやありけん、たらの魚、雪は文子の、つくりごり、驚かぬよの、すゝはらひ、あけがたかけて、をく霜の、しろきはもちの、ことしろの、神田まではや、正月の、きぬくばりしつ、まつ竹も、いとなみたてて、岡見するかも

反歌

光陰のやたら早くもくる春に
心そは〳〵としのせき候

述懷　鈍奈法師

思ふこと、かなはねばこそ、うき世とは、かねて存じて、居りぬれど、やゝそろばんの、けたちがひ、二六時中に、かねほしと、まなくひまなく、ふじのねの、もへつくとはに、思へども、もつての外に、さぶろくの、ゆきや氷に、とぢられて、はたらくことも、かたをなみ、あしずりしつゝ、なにもかも、人をうらみん、さりながら、ふづまりなりし、年のくれ、たゞかけこひの、かほをみて、なきぬべらなり、後悔の、かへらぬながら、くりごとを、たゆる時なく、かくなはに、思ひみだれて、勘定の、たらぬがちなる、足引の、山した水の、にげかくれ、戸棚の中に、ひとり居て、あはれあ

はれど、なげきあまり、せんすべな
みに、よこにねにけり

反歌

八重葎多かる宿の冬枯も
などかけこひにさはらざりけん

旋頭歌

人の來たりてあないこひけれ
ども從者のきゝつけざりけれ
ば　琴流
打つけに表で人の物もうどいふ
我そこに聞で居たるは何の耳ぞも

すゝはらひを見侍りて　鈍奈法師

彼家に煤はくおのこしかな掃そ
借つゝも君がきまさん煤の上張
出立の異なるなりの煤掃を
見時に社知らぬ翁にあふ心地すれ

混本歌

ある人に酒をふるまひけるに
あたゝむるおもまたでひやに
てのみければ　穿砂
いれ上戸かんをもまたず　ひやで
のむくせのわるさよ

折句歌

かきつばたといふ五文字を句
の上にをきて　鵜柄仙口
唐までも聞へしものはつの國の
はしばの官のたかい關白

物名

はなをすり　はし鷹身寄
垣ごしに梅が香かほる春風は
はなをすりてや咲かよふらん

新吉原火ゑん玉屋の浮れ女し
づはたが月見にしとねのしき
ぞめせしときしきぞめしづは
たくはえんだまと云る文字を
たていれ侍りて　手柄岡持
折をえて錦染なすしづはたの
山にくはえん玉の光も

草名十　利茂
ひともじをあにら妹とかゝげたて
せりあふひまにふきけしなしそ

菜菓名十　山手白人
けうとくもせり立てなす歌のくは
ゆとりのないもおほね口豆

木名十　渡海里花成
過しひの君とぬるでをかぎりかや
めぐりあふちとまつかはかなし

鳥名十　錐鷹
かりの時山からつどひいづるみは
とぎしやさきのあやうからずや

鳥の名を十かくして戀の歌よ
めと人のいひければ籠の鳥に
なずらへてうかれめの心を　浮鷗
仇戀をしつるのもましこざる日は

こうしにほさん猶うかり鳧

魚名十　山手白人

戀しさはいかにますかこふく風の
なさけき丶たいいなのさ丶原

廻文

ある人の放屁しけるをかたへの人わらふあまりに廻文の歌よめといひければ　加保茶元成

へ丶丶丶丶へ丶丶丶丶丶へ丶丶丶丶
へ丶丶丶丶丶丶へ丶丶丶丶丶丶

徳和歌後萬載集巻第十四

釋教歌

子ごもりの鹽引をみ侍りて　山手白人

鹽引の一尺そんの御子には
はら丶ごら社をはしましけれ

法花の心を　横道黒塗師

此經は無にやく無さんの我等迄
佛になるは一乘の事

達摩　棟上高見

と丶せには一歳たらぬこ丶のとせ
くがいももはや來年があけ

四方赤良

庭前の柏餅にやねもしなん
あしの一葉の舟の小蒲團

高灯籠　算木有政

引上て讀誦の聲も高灯籠
よは過る比ひとりきえ佛

御講參をみて　わらへ友竹

袴をばとりて御講へ參る也
ねがひこんだる西のかたぎぬ

ある家に葡萄のよくなりたるを見にまかりしにあるじ同行のよしかたられければ　へつ丶東作

佛道に近きふどうのたなご丶ろ
あはせてたのめ珠數の一ふさ

法師のうかれて歌舞妓者の聲色をつかひしをき丶て其法師に代りてよめる　山手白人

不行儀な出家と人は咎めなよ
うたふもまふものりの聲色

僧の松をつくるをみて　馬塲金持

墨染に思はぬ罪をつくり木の
松に五かいをたもたせにけり

車力念佛　小向左武喜

明くれにつみ重ねたる車引
身をうしとてや願ふ念佛

無筆誦經　堂伴白主

つの文字もかく事ならで般若經
よむのはうはのそらおぼえなり

隣家誦經　天保川成

やねとやね谷の隣に聲はるは
うぐひすならでほゝほけ經

山寺連歌　腹から秋人

連歌して此山寺におりはしや
見わたす景のうら表よき

紫野のほとり酒うる家にやすらひて一休和尚の事など思ひ出侍りて　世入道へまうし

又六が門ごくらくと聞からに
さかむに佛のいやたうとけれ

芝青松寺にて　星屋光次

青松寺万年山の額みれば
ちとせの松や十たびうへけん

本庄押上村普賢にまうでゝ

舟も象となりて川より此寺へ
おし上村のふげんなるかも

寄早稲釋教　内匠はしら

一掴み早稲のみいれを手の内へ
佛のくどくするす引なり

寄蝨釋教　良村安世

世を厭ふ身にも蝨は墨染の
衣のたまご珠數つなぎなり

如是本末究竟等　朱樂漢江

鳴聲を鵺とはきけど尾をみては
尻かしらかいかでわくべき

徳和歌後萬載集巻第十五

神祇歌

賀茂　星屋光次

下上の賀茂はいづれがみ親ぞと
禰宜にたづねて糺べらなり

祇園會　藤滿丸

祇園會のみこしも光る玉鉾の
道しある代の祭するとき

祇園會のあくる日に　星屋光次

けふは又はきだめ山に浦鉾の
わけをすてたる祇園會の後

江戸芝浦に鹿島の社海をむかひてたてるあり海上をまもらんとの事ゆへなりときゝて　濱邊黒人

海を守る神をいさめのひと踊
かしま浦にはなんなかりける

人丸社法樂に春のうた一日百首よみて奉りけるはしめに

權宗匠梅堂

此神のぬさにもとらん筆つはなほうけぬ先にいざかきのもと

みそかに思ふ事の侍りければある神のみまへに鈴をふりてせちにいのり侍るとて

身輕折輔 北尾政演

千早振神のみすゞにすがりてもなるとならぬは音にきかまし

江戸高田寶泉寺の庭にあらたにふじのかたちをつくりて淺間の宮をあがめ侍りければ

紀有 安

出來立のふじのおほこは水無月のすばしり口にまいりてぞしる

むさしの國桶川の宿にいとふりたる社ありこの比たれいふとなく人まうでくる事のおほしとき〻て

二歩只取

此神に心のたけの誓をばたがかけそめし桶川の里

小兒の宮まいりの日に

くれ竹世艶

元よりも塵に交はる神じやとてあくたれもの〻となさせ給ふな

笠森稲荷團子 なます盛方

澤山につむかはらけの團子をばかさもりと社いふべかりけれ

津のくにすみよしの社にまふで侍りて松をみ侍りて

梅下武士

その昔きねがみうへの神の松たち臼ほどになりにける哉

加茂のあふひのはを地帋の中にすきいれたる扇に

四方赤良

此神のわけいかづちぞ難有きあふひでも猶あふぎてもなを

社頭踊 津良河厚

ひとおどりうたの音頭を鳥居前手をしめ繩のよれつもつれつ

寄花神祇 奴ら藏人

朝な夕な櫻のちりに交はりて掃除しながら花をみやつこ

寄王瓜神祇 古瀬勝雄

瑞籬にはふや熊野の烏瓜神のみまへの鈴なりにして

寄僧神祇 小菅千万里

巓にかうとゝまらせ給へとやしばらくそらぬ僧の月代

寄飯焚神祇 高羽子雄鳥

ゆふ襷かけて働く飯焚があしたの米をきよめ給へや

寄傾城神祇 竹杖爲輕

浮れ女が誠をみすのかみ心とけてあふみの客人のみや

寄夜發神祇 奈問川野等人

常闇のよし簀の岩戸ひき明て

面しろくもいづる辻君

寄生酔神祇　一節千杖

かくかゝんのんでは暮す生酔の
つみてふつみもなかさみの友

寄鮹神祇　濱邊黒人

やつ藤の御紋に似ても瑞籬の
内へはいれぬ蛸の入道

寄刀神祇　加保茶元成

やはらぐる光も年をふる刀
さげみやさびし赤いはし水

寄幟神祇　紀躬鹿

新しく染しのぼりの棹鹿を
神のみまへにふりたてゝみる

寄鍋神祇　雲楽齋

當はうそをつくまの人も正直の
かうべにかぶる鍋の數々

寄擂小木神祇　屁米人

擂鉢の目に諸々のよごれをも
このすり小木にはらひ玉みそ

寄畚屑神祇　久壽根兼満

拂ひ給ひ清めて給ふ幸に
あまくだりますかみ屑のかご

用ありともはやく起る事なかれひまありともみだりにうごくことなかれ金は戀の山にすて玉は酒のふちになぐべし

己れやれ富貴になさで置べき歟
貧乏神の勅をそむかば

これは貧くうの神人にかゝりてつげ給ひしことばならびに歌となん

石清水の放生會の事を人のかたるをきゝ侍りて　梁仲塁

岩清水みてきた様に放し鳥
數はしらねど入まんもあろ

世中百首歌の中に　荒木田守氏

天照す神の教を反かずば
人の世中富貴繁昌

千金のかはぎぬは一狐腋にあらず万載のことばは一編の集につくさずこゝに四方赤良花鳥になれて月雪にあかずされば雅筵としてむかへざるはなくはた酒樓として酔ざるもなし赤良さいつ比はじめて万載狂歌集を選ぶたま／＼選者のことにあづかりしより江戸四里四方のすさびと赤良がえらびに應ぜんとてもてあつまれる草稿五くるまにあまりかつ千箱にみてり赤良ふたゝび一帙のしふをえらぶ酔中往往狂詠にふけりて老のまさにいたらんことをしらず赤良はたしてとこわか後万ざいしふとなづく赤良がえらひをけみするに後のえらびはほとんどさきの選よりもくはしあゝ千金のかはぎぬは一狐腋にあらず萬載のことばは一編の集につくさず赤良がえらび萬載よりし

てなを百載にいたらば作者はいよいよたくみなるべく選者はますますくはしからんときに天明四年うづきのはじめあけら漢江しるす

天明五年乙巳孟春吉日

吾吟我集

吾吟我集は慶安年中江都の石田未得か著す所也近體の狂歌諸題をそなへよくよみかなへしかも句々面白きは此集に過るはなし昔時京師に板行ありけるが今絕てなしいよいよ久しきを經て亡失せんことを惜みて鏤刻するものならし

寶曆七年丁丑冬日絲竹園主人題

やま田歌は人のとるさなへをたねとして。あまたの稻のことの葉とぞなれりける。里々にある人。ことわざしげき物なれば。心におもふことを。麥つきもみするうすにつけていひ出せるなり。花に琴ひく鶯。水にあやをる蛙の聲をきけば。いきとし池のはたのみゝずいづれか歌をうたはざりける。ちからをもいれずしてあひ槌をうごかし。目の見えぬごぜ座頭をもあはれとおもはせ。おとこなれぬをんなをもやはらげ。たけきものゝふの心をもうからかすは小歌なり。此うた雨ふりのさびしき時よりやいできにけん。しかありて世にはやる事は。久方のあめがしたてる日に。まりつく姫にはじまり。あらかねのつちをこねては。壁ぬるすさのをのこの口すさむよりぞ。をこりける。ちはやふる神おごりには氏子の數さだまらずこゝろこゝろにして。ほどひやうしわきがたかりけらし。人の世をわたるとて酢酒つくるしごとよりぞ。味噌つく人もきねうたはうたひける。かくてぞ花見をして鳥をれうり霜をくみ。露をかなしむ野がけなどに。まひかなづるこゝろことばおほくさまぐ\になりにける。とをき所もかごでするあしもとのろびやうしよりうたひそめて海河をわたり。たかき山路もふもとのちりまじりなる家より。あま雲たなびく峯までも。をひのぼれる馬かたうたも旅のなぐさみなるべし。なにはのうたひはみかどのおほんはじめなり。あさか山のことばをうねめのくせまひにつくりて。このふたうたひはちゝはゝの

いさめにて。皷の手ならふ子どものはじめにぞしける。そも〳〵うたのさま〳〵むつかし。から磨の歌もかくぞあるべき。そのむさくさのひとつにはざれ歌。大榮螺のかごらしき詞をそへたるうた

なにはめの孕む子だねの冬籠り
　今は春べとつはるこのはら

ふたつには初心のかぞへうた

ますます花に思ひつく身の味氣なさ
　身の徒らになるもえしらで

このうたいかにはへるにかあらんその心えがたし

みつにはなもないうた

君にけさ添し寢巻をきていなは
　戀風に身のひえやわたらん

このうたよくかなへりとも見えず。たらちめのおやのかふ子のまゆつきはいぶせくもあるかいもがほにしてかやうなるはわろ口とやいふべからん

よつにはだうけうた

わがこうは詠とも盡じありそ海の
　濱のまさごはうちつくすとも

恭のうたかくれたる所なんなきはじめのあひてはかはれ共おなじぬしはかはらぬ恭ずきなるべし。すまぬやいとしほやくけかやうなるはやまひにやかなふべからん

いつゝにはたはことうた

僞のなきやうなれどいかゞはと
　中人口はうれしがなしき〳〵

このうたさらにおもしろからずとめあはぬ歌とやいふべからん

おる人をあくまとわれは見つるかな花
　ちらすべき風はふかぬに

むつにはいくさのいはひうた

このとのはぶへんと見けり魁けて
　みつ羽よつばのそやをはなせり

此うたいはひ歌とは見えずいのちあやふき事になん。春日野にわかなつむ下女よろつよをいはふ心はかみさまの汁これらやすこしめでたからんおほよそむさくさな心をたゞしくわけてはえよむましきことになん

今の世中色につき。人のこゝろ鼻のさき思案になりにけるより。あだなるはやりうたはかなきことのみ出くれば。だて小袖の色このみの家に。くち木の伽羅の中しれぬことくなりて。まめなるところには鼻ずゝり。をくびに出すべきことにもあらずなりにたり。その恥かく事をおもへばかゝるべくなんあらぬいにしへの世にある人。春の花見のあした。秋の月見の夜ごとにさふらひたちをめして。酒宴につけつゝ歌をうたはしめ給ふ。あるは花をそしとてたよりなき所

にまどひ。よし野はつせの花よりももみぢよりも。こひしき人は見たい物じや。あるは月をおもふさて。しるべなきやみの夜ありきにたどり。しんのやみにもまよはぬわれを。あたゞそさまのまよはしやるなどうたふを聞てさはがしをろかなりとしづめ給ひけん。しかあるのみにあらず。さゞれ石のいはほとなりて。苔のむすめ子どもりうたつを吟じ。つくば山の七ッ石にかけてひやうしをとり。よろこびは未得が十徳身にすぎ。たのしみは心のはたばりなきうたふくろにあまり。むねの煙に富士はものかはとよせて人をこひ。松むしのねのちんちろりともみえぬ人かげに野遊びの友をしのび。高砂すみの江の松の葉にさへふたり寝ばあひおもひのやうにおぼへおとこ山のむかしを思ひ出て。をみなへしのひと時をくねるも花のりん氣ぶりかとぞうたがひける。又春の朝食の比にちるを花鰹と見。秋の夕暮に落る木のみを菓子ならんかときゝ。あるは年のくれごとに鏡の餅のかげに見ゆる。しろ粉のごとくつもれるかしらの雪。ひたいのしはすもこほらぬ浪をなけきあへ物草の露せんじ茶のあはを見ておほぢむばの身をおどろき。あるはきのふ酒屋へよばれし僧の齋をうしなひ。世にわびしたしかりし旦那もうとくなり。あるは末の松山さゞなみはこすとも御身とわれとは千世ふるまでとうたひ。野中の水をくみてつるべは九ッ身はひとつ。つるべをまくらにおけをこかげにとたはふれ。秋萩の花をながめて下戸は餅に心をよせ。上戸はあかつきに數かく鴫の羽もりをおもひ。あるはくれぬ竹の子のうきふしを人にいひ。よし野の河をひきてさほのうたうたひし筏士。ひえのやまひをうらみきつるに。いまはふじの灸のけふりもたゝずなり。ながらの橋もつくるなりときく人は。もとのだいもちひきし木やりの歌にぞ心をなぐさめける。いにしへよりつたはるうちにもならの千部のきやうありし時の歌ぞひろまりにける。かのおほん齋(とき)の日。大さかづきにみつくらひ。かきのもとのじゆくしくさくして人丸ねしたるなん。うたひし歌のひじりなるべし。秋のゆふべ立田河にちりてなかるゝをば。皆人のめにはもみぢ鮒かと見たまひ。春のあしたよし野山の花の浪さはぐは。魚の名にあるさくら鯛木にの

ぼるかとなん。人まねの心にもおぼえける。又やまのての若人になにがしといふありけり。小歌にあやしくだてなりけり。人もまろもわか人がさきにたゝん事かたくわか人は人の跡にたゝん事かたく。ひぢをはりてなん行過ける。ならの千部の經のうた御門できやしやなきやふをおといたとうたふ。もみち鮒なますこぼれてなかるめり錦手の皿中やたへなん。梅づけはそれとも見えず久〳〵の雨氣にかびのなへてはえれば。ほの〳〵とあかねの浦のあさぎなる嶋のきねめす人をしぞおもふわか人。春の野にすみれつみにとこし若衆なふなつかしやひと夜ねよかし。わかのうらにしほもちくればかたもなへあしべをさしてたごなげすつる

この人々をおきて又すきたる人も。尺八竹の世々にきこえ。さみせんのいとのより〳〵にたえずぞありける。これよりさきのうたをあつめてなん。りうきうと名つけたりける。こゝにつくし琴をもうたをもしれる人。わづかに一人ふたりなりき。師はあれども。これかれ弟子のえたるところえぬ所たがひになんある。かの琴ひきそめし時より。年はいくとせあまり。世は遠くなんなりにけむ。いにしへの琴をもしやうがをも。しれる人きく人おほからず。今この事をひくに。つかさくらゐたかき人をば。たやすきやうなればいはず、そのほかにちかきあたりに、その名きこえたるはすなはちそんじやうその人。うたのまねはすれどもまことすくなし。たとへば繪にかける

おうなの琴ひくを見て。いたづらにこゝろをうごかすは。水の月をのぞめる猿のごとし

青柳の糸よりかけてしらぶればまことに似たる鶯のこゑ。はすばものれんぼにしまぬ心もて何かは露の世ぞとあだめく　坂のほとりにて馬より おちてよめり。あをりきれてをれるばかりぞもみなめし馬べたなりと人にかたるな　ありはらのなりひらは、大小の狂言のうたあまり多くて、まぬるに詞たらず、しほれる花そめきぬのいろなふて、舞臺ににほひのこれるがごとし。きぬやあらぬいろやむかしのいろならぬ身はゞもたけもとの身にして。おほかたはかぶきもめてしこれぞこのつもれば人のこひとなるもの。ねぬる夜の夢をはかなみまたかへばいやばかものさ

なりまさるかな　文者のやす筆は歌の言葉たくみにして。その墨つき紙にあはず。あき人のよききぬきてうき世くるひの小歌ずきをいはゞ。雪佛の水あそびしたらんがごとし。ふくからに草木のごとくたをるれば遊女の心あらしといふらん　深草のかはらけつくりを。ふか草にほすかはらけをとりかくせてる日のくもるけふは雨氣ぞ宇治山の貴賤くんじゆすれば。茶つみのうたかすかにして。はじめをはりたしかならず。いはゞ秋の月にありく歌念佛の。あかつき雨にあへるがごとし　わが庵はみやまの茶つみしかぞすむ世をうぢうぢさくらすいとなみ　うたおほくきこゑねば。これかれをかよはしてよくもしらず。その〻こまちおごりは。外面に姫のあつまりなりあはれなるふりにてつよからず。いはゞよきおうなよりも。腰なよ〳〵として聲つよからぬは。若衆のおんごうなればなるべし。おもひつゝぬればや若衆見えつらん夢としりせばさめざらましを。いろ見えてうつろふものはおどり子のこのみ〳〵の花ぞめの袖。あつき日は身をうきあせのながれ川さそふ水あらばあびんとぞおもふ。そとものひめのうた。わかせこがくべきよひなりさゝちまきあものふるまひかねてしをかん　大原の黒木うりはそのさまいやし。いはばたきゞおへる山路の花のかげにやすめる木こりのうたのごとし。おもひ出てほしき時にははつかりのなきてわたるを人の汁のみ。かがみもちいざ立わりて煮てくはんとしへぬる身の老のいはひに　このほかの人々。その名きこふるくま野びくに。西國順禮のありく野邊のかつらのはひひろごり。林にしげき木の葉猿まはしのことわざおほかれど。うたとのみおもひてそのわけしらぬなるべしかゝるにいま。ぬめり歌あめのしたにはやる事四ッ時九ッの眞晝になん有ける。あまたにかざりうつくしき船歌なみの音そひてやしまの外までながれ遊山してしげれ松山。つくばやまのふもとよりもしげく。よろづまつりのはやし物もろ〳〵のことぶきする千壽萬歳。かまはらへするみこの神樂の鈴。ふりにしことをもおこし出て。われが吟じわれとあつむる詞のねざしは。若竹のまだふしさだまらぬ小歌にひとしく。小歌はもとよりやまとうたなればとおほけなく心をかけま

くもかしこき古今の序をげがしつたなき詞にまねぬる事。そのをそれおもはぬにしもあらねど。いにしへのほめ草を。身のみやうがのあへ物にして。口すさびぬる今のわらひ草のたね。わか後の世のかたみにも殘れとて。慶安二年四月中旬に題なきに筆をくはへて。此書のあてどころは。むさし野の草のゆかりあるものひとりふたりのためばかりに。あづまのえびす歌みづからのをかきとゞめてなん。それが中にも。そり梅をかづくよりはじめて花軍をもよをし。卯の花をごしの袖垣に郭公の名のるをきゝ。紅葉をおりては。立田姫をべにやのむすめかとおもひ峯につむ雪をば。山姥がわたぼうしかとうたがひ。鶴の庖丁かめのみきに。君をおもひ人をもいはひ。秋はぎ夏草のかげにつまこふし、笛をならし狩をくはだて。あふ坂山にいたりてしみづに手をあらひ。せきの明神をいのり。あるは春夏秋冬にもいらぬむだこと草をも。とりあつむるえせうたかず〳〵まきまき。名つけて吾吟わがしふといふ。かく此たびかきながして硯のうみの水たえず。濱のまさごにたつ鳥のあと殘りぬれば。いまはあすか河の瀬にてひろへるさゞれいしの礫。千人びきとなるよろこびのみぞあるべき。それひぢをまげたる枕ことばは。春の花にほひなくして。むなしき寢ごとの鼻いびきのみ。秋の夜のながきにまどろまでしはぶきすれば。かつはとなりの人の耳にをそり。かつはには鳥のうたふにはぢおもへど。みどり子の立居。おきあがりこぼうしのおきふしのごとく心なきわれら。この世におなじくむまれてめでたき時にあひ。かゝるたはごとつくをなんよろこびぬる。りうたつなくなりにたれど歌の事とゞまれるかな。たとひ齋非時とさり聟よめどりの座敷かはり。たのしみかなしみゆきかふとも。小歌のふしあるをや。柳樽の酒たえず。松の葉のつくりえだちりうせずして。まさ木の臺の物ながくつたはり。とりざかなひさしくとゞまれれば。歌の吟をもしり。ざれごとの心をえたらん人は。おほそらをめぐるさかづきのひかりを見るがごとくいにしへをあふぎていまやうをこのまざらめかも

吾吟我集卷第一

春

ふるとしに春たちける日人の
子をまうけたるによみ侍る

年の内の春にむまるゝみどりこを
ひとつとや云んふたつとや云ん

ふるとしに春立ける日よめる

冬にたつ霞のきぬはさほ姫の
むまれぬさきいむ月さだめか

春のはじめのうた

わが門を一間ひらくあしたより
天下の春をしるかざり松

年ひとつこす計にや目よしのゝ
山も霞て見ゆる老らく

うしの年の春よめる

月と日を雨輪にかけてめぐり來る
ことしはうしの車よせ哉

大ふくのいはひに

大黑の袋たなをやかざるらん
今朝大ふくをいはふ茶の湯に

氷様

春に立る君民までの耳のびく
あつさうすさのひのためし哉

弓はじめの心を

春といひもとすゑ十二つき弓を
いる年の矢のはじめなりけり

毬打を見て

をのこ共春たち出てぎつちやうを
うちまたに玉もぶり〳〵

子日

老ゆかん年にひかれて是も又
ねの日のまつげながく成べし

霞

立そむる霞の衣一かさね
山のした着や雪のしろむく

夜嵐に霞の衣もまれてや
うらゝに今朝の日のしかけゝん

鶯

難波津の梅に住ぬる鶯の
はつ音のほどや歌の手ならひ

鶯も高間の寺の兒なれば
弘法僧や知音なるらん

歌の徳よたつとからねど鶯も
高位にまじる竹の園生は

若菜

春寒み雪の下なる鶯菜
ねはほそくして葉をもひろげず

殘雪

春のくる道筋ならし庭の雪に
日あしふみこむ跡ぞ見えたる

餘寒氷

いさかひにとけぬ心よさえ歸り
又河つらを春の氷は

梅

鶯とひよく連理の中ぞかし
ちれば葉と羽をかはす飛梅

初春のひのえつちのえ木のえより
さづもひらくや梅の脣は

木体よき梅の木立はほそすくに
匂ひもふかくさくを見る哉
春一季宮つかへして紅梅は
ちるや北野のかみさまのまへ

柳

さみせんのさほの河邊の糸柳
ねをあらはして浪ぞよせひく

若草

から衣すそ野の雪は地しろにて
あいにもえぎをちらす若草

早蕨

春風にあびせられてやさわらべの
てうち〳〵をするはいくたび
もえ出しわらびに雨のふる跡の
しめるやけ野やあくのたれかす

木目

春雨は父のおろせる種ならし
この目つはりになるはゝそ山

春月

雲のうへに入日はひかる君かども
朧月夜に對してぞ見る

春雨

草木にあたを時雨のふりかへて
恩をぞ見する春雨の空

遊絲

空にはる霞のきぬはふるひかや
こまかになりて落る春雨
たつとても霞の衣ぬひえぬや
尻もむすばで亂るいとゆふ

春駒

いさみぬる將棊のごとし春駒は
とらんとするに手もさゝれざる

雉子

春日野はけふはなやきそ不便げに
子を思ふきじの妻もこもれる

春鳥

鶯の歌にあはせてさへづるは
こやさみせんの駒とりの聲

歸鴈

義朝へ文のつかひにあらねども
ときはの里の歸る厂かね
去年ゟの子は添もせでいかなれば
もとをへらして歸厂かね

花

もらさじと花をたづぬる山々の
いたゞきもなきよくの道かな
嵐こそあひさうなけれ散花の
跡にぎやかす峯の白雲
一もとの花打ちらす雨風は
大勢にぶせい何にふせがん
かしらより山嵐してちる花を
いはゞげほうのくゝり坂也

櫻

佛にも彼岸櫻の花よりは
團子とおもふたむけなるべし
おく山の櫻よしなや見る人の
目と鼻にこそ色も香もあれ
熊谷の花にならふも道心の
袖の色なる墨ぞめ櫻

家櫻

よき日にや花もさくじの家櫻
庭に一木の柱だてして
ひらかせてちる迄ふれる花の雨は
かふばりつよき家櫻かな
むはさくら
峯にかけり谷にくだりて足曳の
山姥櫻たつねめぐれり
木のもとを立もえさらで姥さくら
詠る人も腰ぬけとなる
しらがともいふべき花の散跡は
びくにゝなれる姥櫻かも
犬櫻
あてられてよはりがほなる犬櫻
はなねぢりこそ山嵐のかせ
おしみ綱心にあれこいぬさくら
散ゆく花はつなぎとめえぬ
伊勢さくら
いせさくら花さく迄は雨の宮
風の神にはちるをいのらん
鷲の尾さくら
余の花の木をば上見ぬわしのをの
櫻にまさる色のなければ
鹽竈さくら
移しうへてみきりにちかの鹽竈の
櫻は誰も見てこをるなり
普賢像櫻
名のみしてさかりのほどの短きは
はなそらごとのふげんぞう哉
春草
白妙の雪とけそむる頃もきて
野は色なをしするよめがはぎ
ふきのたう立をはりてのその跡に
九輪草こそ陰たかくなれ
あまくだる太鼓のあれば打かへて
地からはやせるつゞみ草哉
春雨のうちぬるたびにうつふきて
おきあがりこぼしたんぽゝの露
咲かゝるけまんの花の色はへて
佛の座こそにぎはゝしけれ
つばな
ぬひて見てみのすくなきは春雨の
空さやかけし太刀のつばなよ
苗代
苗代の土こね返しくりかへし
むかしを今に賤が小田まき
蛙
くちなはの大手からめて取まけば
かはづ軍のにげ道もなし
櫻鯛
雁の汁菊の酒のむ秋はあれど
春の海邊にかす櫻鯛
海棠
繪にかくと筆にはつきし面白の
海棠くだり花のちる色
小梅花
折をえて小梅の花のひもとけば
後の物とはみをやいふべき
小米花
それはきね是は木のねに零れけり
小米の花の風にくだけて

沈丁花

竹垣を霞のきぬのふせごにて
匂ひをとむる沈丁花かな

すゞかけの花

今朝見れば露を結べるすゞかけの
花房かゝる庭の袖がき

もくれんげ

葉はおつる地獄をうかぶ心哉
冬へて春にあふもくれんげ

杜若

澤邊ふく風をいとひてむらさきの
ふくめんすると見るかほよ花

躑躅

さく花のかほは上戸の色なから
名は下戸のすく餅つゝじ哉

山吹

空しくもほらで歸らばこがね色に
さける寶の山吹のかぶ

藤

うり物か花をかざれる棚のうへの
藤をながめて人市をなす

歌人のこと葉の花にたぐへみむ
さく藤原の忠房のたけ

松の若みどりを

いちに先今わかみどり立初て
松のときはの木すゑひろごる

遅日

なかき日の晝寢の枕夢さめて
今朝は昨日の心ちこそすれ

暮春

すがりてもひきとゝめまし行春の
霞の袖の手にしさはらば

名殘ある暮春の雨やきぬ〴〵に
霞と雲の袖ぬらすらん

吾吟我集卷第二

夏

首夏

春過て夏の日影にわたぬきの
衣干すけふあせのかきぞめ

新樹

毛をかゆる鷲の尾なれや櫻花
ちりし跡よりはゆる若葉は

木すゑの葉さき揃ひてはゞひろに
すんののびたる夏木立かな

卯花

つくと見し挿木の花のちりぬるは
箱根うつ木の釘ばなれかも

時鳥

母かたは梅の木氏よ橘は
てゝかた名のる山ほとゝぎす

鶯のうむてふ腹はかり物よ
父にぞ聲も似るほとゝぎす

郭公なれもや彌陀を念ずらん
ほぞんかけたる一聲の內

早苗

うふるとて土を動かすなへにもや
小田やすかれといのる世なをし

葵

種をおろし待つる花のひもとくは
是ぞあふひのうへのよろこび

盧橘

ふく風に匂ひをとめてかぐ時は
はな橘のさきぞひこめく

菖蒲

類政にあらぬもけふはひきとりて
あやめを軒の妻に見る哉

五月雨

ほそかゝりし瀧の糸筋よりあはせ
大綱になす五月雨の頃

水鷄

しほらしき水鷄のたゝく音すなり
をのが身はねやなし物にする

夜もすがら月下の門をたゝきつゝ
水鷄の鳥はしゆくすともなし

鵜川

くはせつゝ魚を吐する鵜つかひは
わたにてくびをしむる心よ

照射

あゆみよる鹿は四足のものとてや
ともしをさして人のとるらん

蚊遣火

是は又袖にとめじと蚊遣火の
煙をたつる賤がたきもの

螢

水に入るひえやつもりて螢火は
をのが虫氣のやいとするらん

蟬

蟬ころもたゞ一重にてなく聲や
布施ない經にけさ落すらん

瞿麥

雨はもり露はおちきてやしなへば
上葉下葉もはゆるなでしこ

夏草

いと見事もえぎ匂ひのよろひ草
くさずりながに茂りそひつゝ
夏草のしげりて蔭のたかければ
まへきりさせて見るおどり花
夏草の色なき中にさく花は
惡女のねたむ美人草哉

ゆり

つぼめるや帽子きせたる鹿子ゆり
ひらいた花はいふにをよばす

けしのはな

つぼみぬる花の白きはさながらに
紙もてぬへるけし袋哉

紫陽草

名のみして口に食ねどあぢさいの
花を見るめに活計そある

あをむめ

みもちにてつはり頃なる青梅は
あにとはいはじ是はなのあね

瓜

ねぢつけて卒やちぎらん己れとは
まだ落さうちなき小姫瓜

なすび
をのづからなすびの色を紫の
ふくさにつゝむ茶入とぞ見る

夕顔
夕がほの花に扇をあてぬるは
たそがれ時の垣のぞきかな

蓮
妙法の蓮花ちりうく池見れば
心の水のながれだいもく

白雨
風かをり夕だつ空の涼しきは
雲に水をやあぐるりうなう

夏月
尻すゆる平砂の月に夏の夜の
霜はらをこるほどぞひえぬる

夏夜
宵なきをするかと誰もゆふつげの
鳥にとがなき短夜の空

扇
この夏も又手にふれつ命あれば
くらげのほねよあふぎなりけり

祇園會
精舎には諸行無常となる鐘の
しやぎりしきりにかはる祇園會

泉
夏の日のあつ氣をはらふ泉こそ
手に結ぶてふ水のゐんなれ

氷室
けふにあふ氷もちいのしろ粉をば
ひむろにうづむ雪とこそ見れ

納涼
天目に水一ぱいは夏の日の
あつ氣をさます氣のくすり哉

笠松の木の下風は涼しくて
空にはふらぬむら雨の音

六月祓
夏中をふるかたびらの麻の葉に
身のあかなでゝはらへ捨ぬる

びんぼうの神もなごむや借錢は
けふみな月のみそかばらへに

吾吟我集巻第三

秋

秋立ける日よめる

立あへずはや吹そむる秋風は
こらへ袋のをやさけぬらん

なぬかの日よめる

彦星のなどうしひきてかよふらん
道をねるまに夜は更ぬべし

さもこそは契ふかけれ天河
水と水とのほしのあひしやう

七夕の雲のかよひぢ雨ふらば
さしてわたさんかさゝぎのはし

玉まつりに

いろ〳〵に手向をかゆる天目は
是やしな玉まつりなるらん

うら盆の月夜にともす提灯は
外聞のため又後世のため

おどりを見て

かけられてあふむ返しに来るこそ
小町をどりの歌のさまなれ

相撲

けふにあふことりつかひは百敷の
しぎの羽返しをこそ取始むらめ

露

見事にて手にはとられず白露の
きえやすきこそ玉に疵なれ

きる物のすそ野分ればをく露の
玉むすびする下がひのつま

秋風

よはき物を歩にとるならひ秋風の
分て柳の一葉をぞふく

荻

二ほんながらいづれも風のをり所
あふぎとおぎの名はかはれ共

萩

露を厭ひもすそ繩上げ野をゆけば
すねをしがまし萩の花すり

皆人は團子まさるといふなれど
ふたつどりにははぎのはなかな

女郎花

もとのめに中人なしや男山
又この秋もさくをみなへし

薄

をのが袖のやぶれをしらで秋風の
悪事をまねくはつ尾花哉

薄かる人を見て

野べにたつ尾花の袖のふりあはせ
これも草かる百性のえん

蘭

秋の風山のこしより吹おろし
すそ野をまくるふぢばかま哉

あさがほ

あだなりと人のそしれば朝がほの
花やひるまの色はくつさめ

秋草

かれ木さへ花さく誓ひあるなれば
観音草の秋は尤

秋風に葉たゝきをしてうなづくは

とさかぐひする鷄頭花哉

木槿

うつくしきむくげの花に較べては
下々さや見まし色もなき草

なたまめ

からまるを見れば是こそ氣の毒よ
庭のなま木になたまめのつる

茸

何をかも汁のみにせん高砂の
松だけがりの友さへなくて

菓

けあげたる鞠の如くにふらめきて
庭の梢にありやありの實

秋田

山田もる僧都は秋の露霜に
ぬれてぼさつの行やつとむる

稻妻

よひ〳〵に出あひ遲しと月の内の
かつら男をまねく稻つま

野分

野分して屛風草をも吹まくり
花むらさきのうへあらはなり

霧

山里のあひのへきりのふりへだて
となりしらずの秋の夕暮

虫

古筆の化してなりたかきり〴〵す
硯させてふ箱のなければ

くび玉よゐのころ草にしら露の
ふりてむすべば鈴むしのこゑ

はたをりのあしにからまる絲薄
まねきつくるやのべつかゞめつ

鴈

御狩にもあはぬさきより一さほに
つらなりてくる天津鴈がね

秋風に先かりがねの聲するは
誰借狀をかけてきつらん

鶉

しのばやとさる野の鶉聲よくて
なれさへ藝は身をたすけぬる

鴫

羽ねがきの數を所作にやむば鴫の
かんきんをする曉の聲

秋鳥

おとされて料理にあふな四十から
身をやくまへの秋とつゝしめ

秋風のふくにわたれる火たき鳥
をのがけやきの用心をせよ

山ぶしの袈裟の名におふましこ鳥
秋やかけ出の峯わたるらん

秋かけて鳴渡りぬるれんじやくの
羽がひの露やおも荷なるらん

月

行さきも雲のかまひに笠をきる
月や天竺浪人のはて

曇りなき月の鏡にむかひては
とぎほしきともおもほえぬ哉

是ぞこのほうろく千につちひとつ
月にをさるゝほしのひかりは

まばらなる軒のあなより影見れば

月の鼠も桁はしるなり

見る人にあひをせらるゝ久かたの
月のうさぎは果報耳哉

雪水をはらひのけぬる風の手は
月のみふねのあかやかゆらん

出る月の船に心を打のせて
秋は虚空にこがれこそゆけ

美しさほめあげられて山のはに
木がくれするや月のわにかほ

八月十五夜

常よりもまろくて白く見ゆればや
今宵の月をもちといふらん

飲くひてながめにあかぬ今宵こそ
大食上戸もち月の空

照月のかつら男にむかれじと
こよひや芋がきぬかつぐらん

九月十三夜

伯母すての月は十五夜十三夜
いさこほど顔の似たるめい月

廿日月

眺むれば廿日ねずみのをのづから
今夜の月のなりぞちいさき

鹿

かいらうさなきて妻こふ小男鹿の
よりあふ山のほらや同穴

つまごひにかよへる山の下もみぢ
鹿のたてたる錦木やこれ

駒迎

しなのより木曾踊りしてひく駒の
まきぬる髪もちやせんやこのさ

擣衣

うつつちやをもきかうべのさ夜衣
着れうの外のつまなかさねそ

菊を根びきにしてもて行を見
て

ほりて行こがねぬきの菊の花
いづくの家のたが根なるらん

菊に蝶のとまりたるを見て

庭にとぶ蝶花がたに口よせて
菊のながえの酒やすふらん

蔦

姫松の腰にまとふはさげ帯の
べに染と見るつたかつらかな。

紅葉

六位より五位にやのぼるくらゐ山
木々のみどりのあかくなる秋

山口に先・木ある紅葉ばや
おく山ひめのべにそめの見世

霜のたて露のぬきもており〳〵に
もみ色ふかし木々のはぶたへ

杜紅葉

秋かけて錦のけさと見るまでに
もみぢしてけり衣手の森

林紅葉

林間に酒あたゝめてのむからに
もみぢはかほの色にいでけり

柿紅葉

いまよりの雨をやはぢく柿もみぢ
しぶ紙いろにふかくそめつゝ

漆紅葉

やよ時雨猶うはぬりをたのむぞや
また色うすきうるし紅葉に

暮秋

くれて行秋のかたみの心ざしや
木の葉につゝむ露のしら玉

九月盡

長月もつまり〳〵て一寸の
光陰おしきけふのつもごり

吾吟我集卷第四

冬

初冬

小春とて今朝あらたまる山口に
ちりぬる跡や木々の葉がため

時雨

空ぐもりはやをもくなるかみな月
なづきはりしる初時雨哉
夢覺す板屋の時雨もらね共
寢耳に水の入心ちする

落葉

木ずゑをやすりこぎにして木枯の
あへ物となる森の落葉は
吹風の手にやはゝきをつかふらん
山を木の葉のちり塚にして
をのづから木の葉吹たて塵にのみ
まじはる風の神無月哉

霜

降かゝる霜のつるぎにあてられて
しのぐ木立の葉はこぼれけり

殘菊

つぼのうちに一もと殘る菊の露
冬はみぞれの酒になるかも

寒草

山人は冬ぞひもじさまさりける
あへ物草もかれぬとおもへば

寒蘆

人ならば脚氣といはん霜がれに
をれふすあしのふしもかなはず

氷

河つらのしはゝ氷にのびぬれど
冬ごとによるわが老のなみ
かけわたす氷の橋に谷あひの
ひろさのほどやつもる雪げた

千鳥

立浪のあやは小袖にぬはねども
浦づたひして行ちどりかけ
さすはごにかゝらぬもあり善惡は

友によるてふ磯千鳥哉

水鳥

打かゝる浪うけながし拂ふにぞ
水もたまらぬをしのつるぎ羽
うつなみの鼓にのりて舞立は
こや鈴鴨の神樂なるらん

網代

河の名のうぢある人の風情にて
網代にのれる氷魚のゆゝしさ

冬月

さゆる夜の月の鏡のかたわれは
ふる霜おれと見えもこそすれ

霰

うき雲の衣をかけて丸しぬる
あられや人をひやす寒藥

雪

おほかたは雪をもめでし是も又
つもれば人のひえとなるもの
ふる雪に大日のひかりくもれども
かれたる木にも花は咲けり
名にしおはゞ夏の空にし降せたや
かたびら雪にあつさしのがん
板間よりしぶく霙のさかもりの
後段やつぎてふれる餅雪
寒き夜にふるは小麥の粉雪かや
ふるひ〳〵もふすまもとむる
ふらずんば空だのめとや恨むべき
雪こん〳〵と人にまたせて

鷹狩

一目見て思ひかけたるよめ鳥に
木居する鷹をあはせてし哉
名のみして膌にはすへぬ箸鷹の
とりえぬるよりはやつかみぐひ

炭竈

都人茶の湯を出せば小野山の
すみやくかまも下火つくろふ

火桶

抱て寢て寒さをふせぐ火をけこそ
かさねぬ夜着の妻とぞふらめ

衾

寒き夜はふすまの下にめもあはで
座禪の床の心ちこそすれ

神樂

夜神樂に眠けはさゝじ名におひて
くふ山椒の朝倉の聲

佛名

來迎をおがむもおなじかず〳〵の
佛を名のる雲の上人

冬梅

雪のうち先ぬけ出て咲花は
梅の木立やさやばしるらん

歳暮

年暮ていなばの山の峯におふる
松かざりせば春歸りこん
大海を手でせくごとしながれ行
年月なみをおしむ心は

老後歳暮

人質を置てながれぬ年ならば
老ぬるものゝ身をおしまめや
老の身にすゑの月日をかぞふるや

春をとなりのたからなるらん

節分に

節分の夜半にまきぬるいりまめも
花咲春の種とこそなれ

除夜

行年の矢だねつくればけふよりも
いる事あらぬ古ごよみ哉

吾吟我集巻第五

賀

寄日祝

人心ゆるりとをりて日のもとの
君のひかりにあたらぬはなし

寄月祝

代を久にたもつは天下一ちやうの
弓はり月よ君の御いせい

寄海祝

よつの海八島をめぐむ君は舟
臣はみづから浪をしづむる

寄巖祝

くみてしる玉のみぎりのさゞれ石
いはほとなりておん手水鉢

寄松祝

いまよりの代の數とりに千年の
種を實うへの松の若ばへ

寄竹祝

ふし／＼もおさまる代とて國々の
大名竹の枝をならさぬ

寄鶴祝

千年のよはひをたもつ身所を
君にゆつるのれうりならまし

寄龜祝

龜のこゑすぼんとはやす小皷に
万歳樂といはふ君が代

寄民祝

活計に腹のふくるゝ世にあへば
天下たいへを國土萬民

吾吟我集巻第六

戀

初戀
おもひそめていつかたつかん戀衣
ほす日よりなき袖の時雨に

忍戀
思ひあまり外の人めもつゝむこそ
戀のおも荷にこづけ成けれ

聞戀
音にのみ聞ばかりにてつてもなし
えんのうすさやわが耳のびく

見戀
小座頭のはれぬ思ひやましならん
見るに目の欲をこるぼんなう

契戀
ちぎりをく詞質をや流すらん
あふうけごひの日きりのばすは

待戀
まつよひの更行からす聲きけば
鳥は物かはかは〳〵となく

逢戀
だきつきて今宵は我をしめころせ
あふにかへんといひし命ぞ

別戀
今なるは七ツの鐘ぞむつごとも
まだつきせぬにわかれいそぐな

後朝戀
わかれこし跡にひかるゝうしろ髪
今朝くし〳〵とおもひみだるゝ

馴戀
かはるべき後はしらねどすし桶の
なるゝ心にあかぬわが中

恨戀
かた口に恨はいはじわが中へ
水さす人のよるもしらねば

片思
君がふくほうづきなりの提灯に
身をつりがねのかた思ひ哉

近戀
わが中は離れもやらずあひもせで
いすかのはしのねをのみぞなく

遠戀
思ひやる中ははるけき道ながら
かよふ心ぞはや飛脚なる

寄月戀
忍ぶとてとはぬ夜すがら照月の
かつらをとこは君のよこ目か

寄星戀
塲はれたるほしのよばひは羨まし
我はしのべどあはぬよひ〳〵

寄風戀
えりうすき身には殊更戀風の
ひきやすくして胸ぞせかるゝ

寄雲戀
たのめしは雲につけたる目印の
たへて跡なきうはのそらごと

寄煙戀
我を人あくたくわらの煙にて

ふすべがほこそいぶせかりけれ

寄雨戀

から笠のえもりならねど厭はるゝ
身をしる雨に袖はぬれけり

寄氷戀

底ごゝろとけずつめたき人はたゞ
あつかはつらの氷なりけり

寄山戀

いつまでかせんなき戀を信濃なる
あさま夕さまもゆる思ひぞ

寄野戀

繁きことどちかまさらん武藏野に
わが戀草をかりてくらべは

寄井戀

車井戸のつるべの繩の一すぢに
かけておもへばめぐりあはなん

寄瀧戀

うきことを聞ては耳をあらひけり
枕にながすたきつ涙に

寄川戀

いつかさてあひそめ川の渡りして
心づくしの念をはるけん

寄淵戀

うき戀の淵にはまりてたえばやな
いきたればとてあふせなき身は

寄巖戀

こなたには戀し〳〵と思へども
人やうごかぬいはほなるらん

寄橋戀

思ひ川へだてゝこねばしきなみに
人はしかけて戀わたりぬる

寄里戀

みちのくのあひづの程も過ぬるは
人目しのぶの里や出がたき

寄戸戀

あはゞやと今宵賴みをかけがねも
をるゝ妻戸のさしあひやある

寄障子戀

閨の内にひきてなくしてたゞ一人
ふすま障子ぞうきへだてなる

寄床戀

よひ〳〵に人まつ床の寢むしろは
あふみおもてにしく物ぞなき

寄垣戀

かた〳〵といふかひもなき賴み哉
かきやぶりなる人の心に

寄松戀

住吉のきしませぶりにねばふして
やにこき人はまつに氣のどく

寄竹戀

逢とてもまだしつくりとせぬ中や
木につぎたりし竹のそひぶし

寄花戀

うき人のみめかたちこそ花ならめ
なんぞ心のあだにうつろふ

寄菓戀

人心じゆんじゆくせねばしぶ柿の
なるにつけても氣味のわろさよ

寄鶯戀

かたえにもます花ありて鶯の

飛のくごこしうつり氣の人

寄鷹戀

うき戀に身はとりもえぬつかれ鷹
飛たつばかり思ひやるのみ

寄鳥戀

そひはてぬわかれをなげく曉に
やもめがらすのなくもいまはし

寄鷄戀

曉のわかれなつげそ鷄の
をのれもつがひとやにねながら

寄鶴戀

老鶴の羽がひの下に年をかさね
君しらずなるおもひくるしさ

寄獸戀

一かたに靡きもはてずあだなるは
らつこの皮のなでつけにして

寄馬戀

口こはくひくにひかれぬうき人の
心の駒の手繩しらばや

寄牛戀

いそげども人の心はすねうしの
くるまもをそく待ぞわびぬる

寄鼠戀

忍ぶ夜はねずなきをして穴がちに
人の心をひいてこそみれ

寄鼬戀

情しらぬ人をたゞへばみぞいたち
たゞみめよしといふ計なり

寄猿戀

戀事は見ざるきかざるいはざるよ
かほあかめ合ふ恨せんなし

寄狐戀

君こむといひし夜ごとに過ぬるは
たのまぬ狐身をやばかせる

寄狸戀

うはなりはたぬきの鼓おもふさま
うつて後にや腹のいるらん

寄蛙戀

つれなきは蛙のつらにかくるてふ
水ぐき一度あひさつもなし

寄蠅戀

ひる寢する君かあたりの蠅ならば
はひかゝりてや我もせゝらん

寄虱戀

そふとても肌ゆるされぬきぬ虱
うつりやすげな人の心に

寄蜘戀

待よひの吉凶あしきさゝがにの
くもでにあがき物をこそおもへ

寄蟻戀

ゆがみゆく君の心をくゞり見て
たえず恨はありごをし哉

寄蜂戀

口くせにうそつく人とみつ蜂の
さしてたのめる我ぞはかなき

寄蚯蚓戀

目をもたぬ虫の如くに音をぞなく
見えずしらざる人をこふとて

寄龜戀

どう龜のよはひもがもな長らへば

君のうき氣にあふ事もあり

寄貝戀

あふ中も今ははなれてはまぐりの
むきみより猶うき身成けり

寄鯉戀

我戀のさしみならねどからし酢の
目はなとをりて涙こぼるゝ

寄玉戀

一度二度いふてならずとすて置し
卞和が玉もあればあふ世に

寄錢戀

よみをくる歌に靡かでつれなくは
おあしの文字の數をつらねよ

寄箱戀

人の氣やひづむなま木の箱のふた
身にはあはずも成にける哉

寄葛籠戀

是にあひかれにあひぬる人はたゞ
一荷つゞらのふた心かな

寄枕戀

おもふこと寐言にいへば敷妙の
枕やかくす戀をしるらん

寄文戀

文ならで逢ていはゞやおゆかしく
おもひまいらせそろと計を

寄玉章戀

契りおく今の玉章とりおきて
かはらば後の證文にせん

寄繪戀

うつし繪に向ふが如くつれなきは
我に物をもいはずわらはず

寄硯戀

しゆびん石の硯ならねど筆そめて
かくや泪の露の玉づさ

寄筆戀

秋山に妻こひかぬる鹿の毛の
筆はいまはんくごきやる文

寄剃刀戀

人こゝろ荒砥にあつるかみそりの
あふ事かたくぬるゝ袖哉

寄衣戀

から衣うらみて袖をひきさくや
おもふが中のつくりいさかひ

寄袴戀

君きての後のあひだも長袴
まちごをなりと思ひしらずや

寄帶戀

あふ時の袖のなみだはかはらぎて
とく下帶にぬれぞかはれる

寄袋戀

うき思ひ内にふくるゝ小袋の
つゝみかねては口に出けり

寄布戀

布ならぬわが名を白くいひさらす
あくたれものゝ口のさがなさ

寄紙戀

鳥の子を十重つゝとへは重ぬとも
おもふことのは文につきめや

寄屏風戀

餘所めをし忍ぶ心のをくのまに

勝手屏風をひくよしもかな

寄扇戀

秋きてはそよとの風のつてもなし
人にあふぎのわかれせしより

寄笛戀

わがいきの通へるほどはふく笛の
なるをかぎりに君をしたはん

寄琴戀

しのび〳〵胸にしらぶるうき事の
しやうがをいつか共にうたはん

寄皷戀

いつまでかかく打すてゝおき皷
なるとならずと音づれよ君

寄太皷戀

音にきく人を太皷のうちつけに
かはよくなるは何のばちぞや

寄碁戀

案じほれて死るばかりよ我よりも
つよきあひてを戀のみだれ碁

寄双六戀

よきめをとこひねがへども双六の
さいはひなくてあはぬひとりね

寄相撲戀

下帯にまだとりつかぬわが中は
ちからをよばぬあらすまふ哉

寄鞠戀

下手の鞠よあてどもしれず庭中に
おとし文する戀のはかなさ

寄矢戀

番ふ矢のかりまたよりも烈しきは
いぶりに見ゆる人の心ね

寄鐵炮戀

鐵炮のたま〳〵きてもはなさぬは
結句おもひのたねが嶋哉

寄脇差戀

君とわれあひ口ならばわきざしの
つかのまもたゞはなれざらまし

寄刀戀

思ひ泌(しみ)て思ひきるにもきられぬは
身より出せるさび刀かも

寄長刀戀

ある時はやりごめにしつある時は
つらきなぎなたあひしらひ哉

寄甲戀

うちかぶといまは忍の緒をときて
降参しつゝ思ひはらさん

寄香戀

むねにたく思ひの煙きやらならば
香をしるべにもとはれん物を

寄藥戀

ともすればいけつ殺しつ氣の毒も
きの藥もや君のはいざい

寄膏藥戀

物の氣につく程ならばうちまたの
かうやくのごとく我もはなれじ

寄酒戀

思ひみだれ色に出にけり我戀は
酒にえふかと人のとふまで

寄餠戀

あふて後猶おもひつくきたう餠

ちぎるにつけてあぢのよければ

寄饅頭戀

包めども外にもるゝはまんぢうの
あんに相違のわが契り哉

寄米戀

うすなさけ契をこめのつきはこゝ
こぬか〱と待ほどぞうき

寄味噌戀

一夜ねし納豆みそのなまなかに
なれてくやしき物思ひする

寄鹽戀

こぼれぬる目もとの鹽はなめぬ共
からくも人に思ひしみつゝ

寄薪戀

明暮のもゆる思ひにくゝべてだに
たきもつくさぬわがなげき哉

寄釜戀

人をわれすき心にてかまの湯の
わきかへりつゝ物をこそ思へ

寄鍋戀

あだ人のつくま祭にかつぐてふ
なべての數に入われぞうき

寄茶筅戀

うきふしよ茶筅の竹のほいなくも
あはでふられて心きえ〱

寄柄杓戀

し水よりつめたき人の心中は
ひさくなければくみてしらるゝ

寄桶戀

中ごとはたがゆひさくるやぶれ桶
水もらさじとおもふそこいを

寄壺戀

いはぬ間は口をとぢをく葉茶壺の
思ひつめたるほどもしらじな

寄盃戀

戀衣つまむかへにし盃に
えふてはかほも色なをしする

寄皿戀

色ふかく人をば思ひそめつけの
さらに忘れぬわがこゝろ哉

寄折敷戀

いひ出す人にかいしゆの色見えて
もれんわが名のおしき成けり

寄火戀

うき戀のやまひを治する灸ならで
むねをやく火ぞくるしかりけり

寄灯戀

今こんとゆふべにともす油つぎの
ありあけまでにかゝげそへつゝ

寄蠟燭戀

こぬ人をまつ夜にともす蠟燭の
おもひこがるゝしんのくるしさ

寄提灯戀

戀闇に骨かはとなるちやうちんの
内のおもひの外にほのめく

寄簑笠戀

忍びあまる涙の雨にかくれみの
かくれ笠こそきまくほしけれ

寄履戀

君がかたへかよふ心の道をふまば

かねのあしだのはもたまるまじ
寄槌戀
堂宮にのゑひ事してうつ釘は
かなづち論のりんきいさかひ
寄棒戀
引くらべになはゞ棒もをれぬへし
なびかぬ人の戀のおも荷さ
寄車戀
きしまする人の心はやれ車
わがまゝにしもひくにひかれず
寄船戀
おもひにしこがれて沈むわが戀は
小舟に過た荷物なりけり
寄綱戀
だいもちのひく手あまたの人心
誰によるともしれぬさきづな
寄網戀
つゝめどもそなたに心ひくあみの
めもとに戀のあらはれやせん
寄神戀
願かけてむすぶみしめをきぶね川
よるべさだむるともづなとせん
寄佛戀
極樂もいまの心によもまさじ
如來はだなる君とねるほど
寄珠數戀
道心もをこるおもひの玉をくりて
こぬ夜の數を身のしよさにする
寄聖戀
所からひじりの中の契とて
老をいとはぬ高野六十
寄山伏戀
待かねて獨りねにふしとらにおき
我こそ戀の山伏の行
寄若衆戀
若衆にかいなをひくもあづさ弓
はずちかへじのやくそくのため
寄遊女戀
舩遊びうかれをんなのさほの歌
きけばよふしもなべておもしろ
寄醫師戀
人しれぬ戀のやまひに我しなば
いづれの醫者になき名おはせん
寄武士戀
敵を待武者の心もわが戀も
あふに命はおしまじとこそ
寄占士戀
君とわが中こそへたのうらやさん
たのみおけどもあふ事もなし
寄番匠戀
かざらしき人の堅氣のうきふしを
まろくけづらん番匠もがな
寄鍛冶戀
くろがねも人の鍛へばやはらぐに
などねれあはぬ君のいつてつ
寄紺搔戀
つれもなき人は紺屋のあすあさて
あひそめん日をのび〳〵にいふ

寄蜑戀
よくつゝめ蜑の刈ほす見るめもや
しほじむ中はしたゝるきもの

寄樵夫戀
おもひものに氣を盡しても懲果ぬ
身はおとろへてやせの山人

寄杣人戀
心なき杣のなげきの音にさへ
あの山彦のあどうつをきけ

寄商人戀
あき人のそらせいもんのたぐひ哉
まだねもせざる君がかねごと

寄唐人戀
君はなど聞分ざらん唐人も
なかだちあれば通す言葉を

寄盗人戀
盗人の名にやたゝまし夜もすがら
忍びありきし後のひるねは

戀雜
誰なをす中とはなしにめをとする
いさかひはてゝ夜るのちぎりき

吾吟我集巻第七

世話

老のさいはひといふことをよめる
ながいきは恥おほけれど孫彦を
かゞむせなかにおひの幸

氏よりそだちといふことをよめる
油斷なくこやし掛ればよきえんの
茶もや宇治よりそだちなるらん

はじめのさゝやき後のごよみといふ事を
忍びつゝはじめさゝやくむつ事は
はらみて後のごよみとぞなる

人しれずころびてつきしむかふ疵
いへぬる跡やけがの高名

孫よりもゑの子かへとはむば玉の
よる〳〵思ふ用心のため

前かたをそさうにゆひし垣ねもや
　はやくやぶれて後ぐいとなる

支證(ししやう)なき手がらをはなす音をこそ
　から鐡砲と人のきくらめ

げすの知恵跡に附ぬるはかなさよ
　身こそは主の供をするとも

代かへてめいをつぎぬる腰刀
　けにも寶は身のさしあはせ

料理してふるまはるれば追從に
　鹿をむまやと今もいひけり

軒にふく瓦をとめてさす釘や
　手づよく見ゆる鬼にかなばう

ゐねぶりも奉公がほに梓弓
　いびきの音のする夜番哉

痒きかたへ手の屆かざる事よりも
　物をえかゝぬ人の不自由さ

よろひつれて同じさねなる剛の者
　瓜を二ッにわるたぐひかな

侍の猪武者といはるゝも
　虎口につよき騎馬をもつゆへ

手かいれば足も入けりおさなひの
　親のゆがけをたびになをして

にくまれ子世に出るてふたぐひ哉
　藪よりそとにそだつ若竹

立よらば大木のかげとをち椎の
　數をひろへる猿のかしこさ

人の物をちゝと引とるかし金や
　子に子かさなる鼠算用

猫のはにかみのこされてとぶ蚤も
　虎の尾をふむ心なるらし

世間こそはり物なれと月の夜に
　ちやうちんともす人もありけり

家なれぬほどはあひらし今まいり
　廿日鼠ものちはあれぬる

囃子をもうかべ顔にてするけがは
　木から落たる猿樂の藝

おふ子よりだく子に乳を吞すれど
　親の慈悲には前うしろなし

手のきかぬ女子の親のせつかんは
　針を棒にや取なをすらん

觀音や天神まいりする日こそ
　牛はうしづれ馬はむまづれ

すけなりの別れをなげき尼になる
　日本の虎は毛をもおします

身をつみて人の痛さを尻のあたり
　さはる男や手くせなるらん

化粧にて人をまよはすたはれ女は
　狐ならねど是もつらじろ

やき鳥にへをとはいへど我はたゞ
　猫につなでをつけんとぞ思ふ

かまはじな是もさはるに煩惱の
　犬ははげしく人にかみつく

强きかたに助言いひぬる將棊こそ
　かける馬にもむちとしらるれ

手こうより目こう成けり亂れ碁の
　あやまりは猶そばで見へぬる

双六のならひはじめはさいの目の
　いちをもつてぞしるばんのうへ

上を學ぶ下とやいはんそめなすも
　をなじ色なる袴かたざぬ

落武者やうしろに負るはろみその
　夕立にあふ風情なるらん
鷺のこぶみ山鳥の聲するを
　にがわらひとや是をいはまし
暮ごとに鷺も鳥らとまれるは
　一樹のかけのあひやどり哉
みゝづくで多くとりぬ　小鳥こそ
　わらふ所へ福きたるなれ
墨がれに見ゆる熊野の牛王こそ
　鳥のかしらしら紙としれ
中々にやめようさぎのなま兵法
　いぬにかまるゝきずのもとひぞ
きく人もなしとてきりし琴のをや
　かくるもひくも折によるらん
口の中に唱ふる阿彌陀ぶつめかし
　手にもつ珠數も老のくりごと
酒にゑひくだまく人は何事も
　いざしらいとのみだれごゝろよ
わが影の一河の水にうつろひて
　おなじながれをくむ風情なる

つき山の石燈籠の夜目遠目
　笠の内こそおくふかく見れ
見る事の目にはとまらず聞事も
　籠耳にしてみな忘れ水
口ぶりをいかにとさへど唐物を
　えしらぬ人や故桝まるのみ
出るより入事はやき光陰の
　矢さきや人のいのちせめけん
死する身の骨も光らじやれはつる
　金の扇を見るにつけても
酒やにも命をまたふもつかめは
　正月ごとの蓬萊にあふ
山人の聲にこたふる谷あひの
　こだまをきけば岩も物いふ
世中の男をんなのわざはひも
　しもからおこる物にこそあれ

吾吟我集巻第八

旅

　大磯の宿にありける猫を見て
なれも又ひく人あればおほいその
　虎げをなでゝかほけはふらん
　おなしところにて
うかれ女の人をたらすは大磯の
　とらのいをかる狐なりけり
　まりこ川をわたるとて
馬のあし四本がゝりによる浪の
　くつ音たかくこすまりこ川
　箱根ふたご山のあひより雲の
　たつを見て
明はなれ見るに箱根のふたご山
　うちぐもりにて中をはりけり
　富士山をながめて
ふもとをば雲の包みてちうぶらり
　天からつッた富士の山哉

富士山の腰よりうへはしろたへに
　雲の衣をぬきさけと見る
あふのけに轉ばぬ程は富士もみつ
　それよりうへはいざやしら雲
　あしたか山に畑やく煙のたつ
をみて
煙たつふじのすそへもをしさげて
　三里をやくやあしたかの山
のびあがる足高山も富士のねの
　腰たけにさへをよばざりけり
　吹上の六本松といふを遠目に
見る折しも風はげしくてほこ
りのたちければ
むかふ風に濱のまさごを吹あげの
　六本まつげめをふさぎけり
　田子のうらにて
をよびなき煙くらべをするがなる
　ふじのたかねと田子の鹽屋と
　清見がたより三保の松原を見
やりて
輿ありと見ほの松こそ人とむる
　清見が關の木戸柱なれ
　まりこのしゆくをいでゝ
まりこより野邊にかゝりて行人の
　けつまづきてやひざをするらん
　宇津の山をこゆるとて
乘かけのつゝらをりして疲れたる
　馬には沓をうつの山ごえ
　さやの中山にて
旅人の命なりけりたのもしく
　させる刀のさやの中山
　はしもとにて
入しほに濱名ばかりはくちもせで
　年ふるくいも見えぬ橋もと
　三河よりをはり路にかゝりて
春の花ちりふを過て夏の日の
　あつ田のまへに梅はなるみか
　なるみかた喚續の濱なさを見
て行に
聲たてゝ鳴海を出るはや飛脚
　行さき〱によびつぎの濱
　笠寺のくわんをんにまゐりて
天井も法のちからにはりぬれば
　から笠寺とさしていはなん
　伊勢の國に舊友の住つきてあ
りけるをたづねあひて夜ひと
よ酒のみ物がたりして
此國のいせ物がたりはじめけり
　むかしをとこの友をあひ見て
　伊豆のあたみへ湯治するとて
米かみといふ所をとをりける
に
賤の女のもみすり歌のとだゆるは
　ほうばるほどや米かみの里
　むさしの國熊谷寺にて蓮生法
師の木像を見て
先陣の苦をまぬがれて内陣の
　はたがしらこそゆかしくまがへ
　筑波の山水落ゆくするゑにみの
わだといひて鯉のおほくある

淵をみて
つくばねの水も落くるみのわだの
鯉ぞつもりて淵と成ぬる

名所山
男山むかふは北の方なれば
是やはらむといはんおほはら
大江山いく野の道のこはければ
鬼が城とてまだふみも見ず
峰の巣をおほくかけぬる故にこそ
熊野をみつの山といふらめ

名所坂
すべりては尻餅をこそつきにけれ
うすひの坂を雨にこす人

野
詠やるすゑの草葉に雲たちて
天地和合やむさし野の原
むさし野より富士をながめて
盃の名に流れたる武藏野に
富士をたぐへば蓬萊の花
をみなへしさける野がみの草枕
ありし花子とぬる心ちする

瀧
山のこしに風一聲のきこえきて
鼓の瀧のおつにかんあり
淸水の舞臺のうへにひゞきけり
ながす音羽の瀧の鼓は
山姫のをごけ成らし谷底に
たぐりためたる瀧のしら糸

關
やぶれずと文字にかけとも板廂
いたづらにすむ不破の關守
とまれとて人を導くたはれめの
ゑみこそ關の地藏がほなれ
關寺の門前みれば今とても
わら屋を立て小町ありけり

川
けだ物の名にながれたる熊野川
水にも影のうつる月の輪

江
朝霧の隙より見ればろくしやうの
うすざいしきの墨の江の松

浦
名にたてる屛風の浦のむら千鳥
とぶを繪やうに見る雀形
船出して松浦の沖につる魚も
ひれふりにけり浪のわかれに

濱
あだ浪もたかしの濱の千鳥わな
かけしや袖のぬれもこそすれ

崎
から崎の松は一ぽんだちながら
名をば日本にいひぞひろむる

嶋
景よしと見る人ごとにゆひ立て
まがきが島の名はくちもせず

橋
心かけし佐野の舟橋とりはなし
いたく\〵敷ぞ思ひやらるゝ
扇の芝を
賴政のほねははかなくくつれども

扇の芝に名は殘りぬる

里

山城のこはたの里に馬はかせど
駄ちんなき身はかちにてぞゆく

河内女のをれるもめんの好あしに
ねをやわかてる高安の里

市

たづねきて誰もしるしの杉の門
三輪の市屋の酒ばやしさは

吾吟我集卷第九

雜

天

あきらけき月日ふたつは天のめの
まもる下界の人見なりけり

雲

横雲は天のさぼそのくはんの木よ
ひくさみしより月明にけり

風

めに見えぬ物とはいはじ草木の
うごくは風のかたちならずや

虹

棚曳くを虹とはいかでいふやらん
たゞ一筆のへの字とも見る

松

木をんなと是や岩ねの姫小松
すね〳〵しくも見ゆるそだちは

竹

不孝なる人に見せばや若竹の
すぐな心のふしのあひだを

苔

びろうどの蒲團とみえて萌黄なる
苔を莚と誰かいひけん

鳥

ことの音に峯のうそ鳥かよふらし
をのが尾よりやしらべそめけん

仕合のあしのはつきてなく鴫や
沓てをなさぬむくいなるらん

有無のことゝへどこたへぬ都鳥
口はづかしき田舍とや思ふ

くび筋に珠數かけて行く堂鳩の
年よりこひと友やよぶらん

村鳥のわらひよりつゝなく聲を
かしがましとやきけるみゝづく

梟の聲よりほほんほんのりと
月の桂の木ずゑ明ゆく

木々の葉の落ては陰や寒からん
びんぼうゆるぎの森の白鷺

釋迦のたけ阿彌陀が峯を飛行して
　佛法僧と名をとりの聲
をく山の苔むす木陰しづかにて
　身をおごろかずなくかんこ鳥
石がれい石もちなどをかさねつゝ
　みさごのすしのをもしにやする
ゑびじやうの羽ねたゝきして鷄の
　聲より關の戸は明にけり
たつ時に長くのべぬるおほくびは
　身に應じたる鶴の毛衣

獸

武藏鐙さすがにかけてのる馬は
　さばぬもつらし飛もうるさし
名のみして口にねぶらぬあめ牛の
　いかでかたえぬよだれ成らん
青みどりかつぎてばけし狐こそ
　池の玉藻のまへとなるらめ
はらつゞみうてる狸のをのづから
　身にたしなみてもつや胴皮
糸つけし手飼の猫はしやみせんの
　かはにかけても人にひかるゝ
獅子ふじん虎亂入をやまねぬらん
　おなじたぐひのうさぎ兵法
猿猴の手まつさへぎる山水に
　ながるゝ谷のさかづきのかげ
毛をいたむ虎のためには是ぞこの
　惡事千里を行野べの風

虫

ひと聞〱糸を配りてさゝかにの
　蜘の家にやこまいかくらん
地かたぶきて廻れぬ難や是ならん
　岸ねにこけて行かたつぶり
しげれるはむづかしとてや草村を
　かりのけがほに分るかまぎり
くちなはの己が針めのほころびを
　誰にぬへとてぬけるきぬぞも
濱見れば眞砂に蟹のかうたてゝ
　はさみきる手をあんじがほなる

貝

津の國の難波のみつのはまぐりを
　ふむにもあしのうらにしらるゝ
さししほの海のそこひになる時ぞ
　めぐすり貝をひろひ取ぬる
蜑少女ともなひきつゝ海ぎはに
　とりあげ見れば子安貝哉

魚

たち魚のこじり咎めにかひらぎの
　鮫もやひれをひからかすらん
地ごく網にかゝる憂目をみる事と
　などさとりえぬたこの入道

鬼

めに見えぬ鬼はくひつく事もなし
　無理いふ人の一口ぞうき

金

いかばかりこがねはをもき寶にて
　ちからわざにももたれざるらん

錢

津の國のなにはの事もかなへばや
　つかふ錢をもあしといふらん

秤

人の科をもきかろきは目にかゝり
我身のほどのはかりしられぬ

鏡

人を見て人は人をもたしなめば
人こそ人の人のかゞみよ

硯

筆の毛のうさぎも水をはしりつゝ
硯の海に入窓の月

紙

鳥の子に大鷹こたかひきあはせ
つかひあかぬは料紙なりけり

弓懸

鹿の皮はゆがけになるも安からず
又狩人の手にぞあひぬる

沓

名をつけて牡丹と云るくゝりこそ
げにもなりけりしゝのかはぐつ

箒

塵をよく取ぬる德をいふならば
是もこはくの玉はゝきかな

酒

住わぶる世のうきふしも忘れけり
のみし寢さゝのよひのまぎれに

餅

うへもなき大佛餅の本來を
さとれば米の菩薩なりけり

饅頭

あまからであぢのよきこそ武者心
砂糖のいらぬたゞのまんぢう

笛

くりあへる竹のあながち其ならで
ふきぬる人ののどぶえの音

尺八

祖師の名のふけといふより尺八の
竹の世をつぐ今のこも僧

琴

きゝ分る四季の調子は聲々に
伯牙がしらべこども高上

鞠

暮かゝり鞠のにはかに吹出る
風をうらみのくずばかま哉

太刀

ぬくとても我目の鞘をはづさずば
何の用にか太刀のきつさき

鐵炮

氣の藥思ひこめたる鐵炮は
的にはづれぬわがこゝろ玉

職人

鎌鍛冶もあなづりにくし草なぎの
つるぎにおなじわざをなせれば
やすらかに軒をつたふて家つくる
大工をいはゞ蜘のいとなみ
あつらへの數を疊のさことはに
さすが上手はいとまなげなり
檜物師のまぐるをもみよ人心
しなへてこそは中まろくなれ
一まいを万枚になすはくやこそ
金を打出のこづちなりけれ
世のわざを心にしめてうつ碪に
身のあせをさへしぼるあぶらや

棚ばたををれる糸屋の職女こそ
天乙女にもをとるまじけれ

山がら籠をぬけていにけるに

かしこくも籠をぬけつゝ足曳の
山から山へもどりうちけり

人の鷹をそらしけるに

せう／＼の罪には非じひざうせし
鷹の見えぬは大それたこと

をかしき咄にて人の機嫌のなをりければ

そらさずに人の機嫌をとりとるは
是逸物のたかばなし哉

おさなひのえにしむすぶことぶきに

尉となりむばとなる迄しら雪も
ふり分髪のゆひなづけ哉

碁うつ人先手のあらそひにごれ事しけるを見て

丁半と名のりかけ碁の勝負には
ぬすみをするも道理せんばん

ある人餅のほねをたてたりしといふをきゝて

咽すぢに骨のかけたるしがらみは
のみこみあへぬ紅葉餅哉

くるみをわる人を見て

おにぐるみ割損ひて手のかはを
むくりこくりと身はなりにけり

かはらやのあれたるを見て

葎おひて荒たるやねのうるさきは
風にもくだく鬼がはら哉

しらかべをあか土にてぬりかへたるを見て

田樂のみそにはあらでしらかべの
うへをぬりたる色もしほらし

伊勢衆の鹿をいむといふ物がたりのついでに

社領とていせの山田を守る人は
尤しかをいむべかりけり

子とり姥のつでにて乳もちをよびけるに

お乳こちいたつきも知ぬ山家より
おぼつかなくもよぶ子とりむば

ある人いさゝか成事につきて子ある中をわかれけるに

數々の子にはなるゝもやすおけの
ゆひぶんわろきわが心から

をゝうむを見て

女房のとりあげてまくへそのをも
うみおろしての後のことわざ

ちゃみのかたびらをきて

ちゃみつゝ胸あひ難きかたびらや
きのふにかはるけふのせば布

手むさく茶たつるを見て

ふきもせでたつる茶人の大海は
塵をえらばぬことはりにこそ

茶と酒との論をしけるに

たてゝ猶宇治茶の色も青によし
なら諸白にいかでをとらん

路地の飛石をつたふとて

水うてばすべらん事もえぞしらぬ

道の苦なれや坪の石ぶみ
　鯛に鹽するを見て
櫻鯛けふだにもかく匂へるを
　あなたのみがたあすの料理は
　　魚やくを見て
芦の屋のなだの鹽魚火にくべて
　竹のをぐしもさゝずやきけり
　　をごる人のうへを思ひやりて
をごりぬる人の榮花はあだ花の
　おちぶれて後身のならめやは
　　いたづら者とがにをこなはれ
　　けるに
きりはたり丁々とうつがんどうの
　音あらはれてはた物となる
ぬすみより外の事をばしら浪の
　あはれあぶなく渡る世中
　　藥事きかでわづらふ人をみる
　　にかなしくて
病をもなをさぬ竹の藪醫者は
　人の命のじねん期や待つ

　はうかするをみて
しな玉か何そと人のとひし時
　露とこたへんきへてなければ
　　子のむまれてみとせばかり腰
　　のたゝざりければ
足たゝで三とせの間しとはこを
　ひる子は神のまもらざらめや
　　やいとするとて
藻にすまぬ腹の虫氣も我からと
　音をこそなかめ灸はうらみじ
　　腰をいたむ人ふしに度々灸す
　　るを見て
時しらぬ病ふじのねいつゝむつ
　鹿子まだらに灸をする跡
　　世をのがれて鎌倉にすむ人の
　　もとへよみてやりける
世のうさに汗かくわれを招けかし
　扇がやつの風のたよりに
　　老人を
せをかゞめ腰をもげなる人はたゞ

　高野ひじりのおひやしぬらん
年寄ばおほちにつれてむばたまの
　くろきもかはるもろしらが哉
　　年よりは見ぐるしなどいひて
　　笠きたる人と道を行つれて
笠きてもこびんのはしにをく霜の
　しろきは人の世ぞ更にける
　　老たる人のわづらひよくなり
　　ての又のとしに
春よりも行歩自由になりたりし
　老は將棊のこまがへり哉
　　比丘尼を
年わかきびくには髪をすり衣
　墨にそめても心みだれん
　　順禮を
くばりつゝ札をうちきる順禮や
　かぞへがるたの遊び成らん
　　鐘
つくかねの龍頭の角をうごかして
　じやもまふとなる聲のすごさよ

山家

山居せば奥より奥にかくれんぼう
跡とも人のたづねこぬほど
[illegible]こそ隠家ものとてあなづらめ
[illegible]の巣はなに都人

人の野をくりして歸るあかつ
きに
ながき世の別となりてなきわめく
人も八聲の鳥べ野の道

葬禮の墓を見るにも布引の
瀧ほご落るわがなみだ哉

あだし野は塵のうき世の掃だめの
おさめ所よ灰になす跡

楠の木のなにがしといふ人の
墓所にて
名を殘す跡の五輪はくすの木の
石となりたるしるしなりけり

寺の庭に水出て卒都婆ながれ
けるに
爰も又それといわうが嶋なれや

數のそとばを波にながせば

宇治にすみゐる僧のもとへ文
つかはす人にかはりて
庵しめて世を宇治山に墨染の
衣をやりてきせん法師に

たうとき僧にあひて
姿こそあらくましけれ老僧の
むねのあひだはきよき月の輪

述懷

まじらへば七重の膝をやへにをる
袴のひだのむづかしの世や

物毎にあらばありのみなしとても
もとめはせじな世はなり次第

懷舊

茶をのゐばねられぬ老の初むかし
大むかしまで思ふ夜すがら

無常

世中をおもへば夢ぞうつゝらが
八万歲も名のみのこれり

山もゝのえりくびなれや年をそし

誰が身ひとつ世に殘るべき

亭主とて跡にとゞまる人は誰そ
この世をかりの宿といへるに

神祇

お[illegible]の宵をはりぬる神わざに
そくいをおしのひまもなげなり

野の宮の森の鳥の羽いろまで
おなじ黑木の鳥井なりけり

歸るさもいざしら山や神主の
馳走ぶりよき客人の宮

世々をへて額にたゝむさゞ浪や
志賀の清年の白髭の神

人の世のからきをくみて紀の海の
鷲尾の神や慈悲をたれけん

あふぎよる鹿嶋の神のかなめ石
かたきはぬけぬしるしなりけり

千早ふる社頭を見るにゆふしでの
紙より外の神ぞなかりき

三熱ののどのかはきやさまらまし
御湯まいらする神のまに〳〵

釋敎

敎へおく釋迦のやりの手使ひなば
　つるぎの山のせめやのがれん
御手の數おほき千手のちかひにも
　蛸やくしこそをとらざるらめ
たゞたのめ罪おもくとも石山に
　觀音力のあらんかぎりは
清水にまいりの人は觀音の
　堂といふより馬とゞめかな
彼岸にいたらん時の帆柱や
　舟岡山にたてる卒都婆木
後世しらで罪をもき身は三途川の
　石をいだきて淵にしづまん

人の追善に

たむくるはしぶ茶なりとも明暮の
　つもらば無上極樂のたね
まふてぬる寺にかぎらず人ごとの
　胴に佛はそなはるぞかし
極樂は涼しき道ときくからに
　經かたびらをきてや行らん

吾吟我集卷第十

廻文歌

春

身の留守にきてはおりとる此花は
　のこる鳥をば敵にするのみ
しら雪は今朝野の草の葉にもつも
　庭のさくらのさけはきゆらし

夏

田植歌てうしはやみつつてんてん
　手鼓はやしうて田うへうた

秋

草くきの葉にふる霜に見やるなる
　闇にもしるふ庭の菊さく

冬

月のもときよしといへば冬の夜の
　夕ばへいとしよき友のきつ

戀

情なきを門にまつまひかつてこて

使まつ間にとがをきなれつ
君のためとひよりたふく門の戸の
さかくあたりよ人めたのみき
へがたしと年月事を望むらん
その男きつしと丶したがへ

雜

ねぶりつる鐸たきすて浪くらく
皆出過たりか丶る釣舟
港川とまのぞきつ丶まはりけり
濱つゞきその窓は門なみ

廻文百句俳諧をつかふまつりて貞徳といふおきなに見せにやるとて噂申せばそなたに鼻ひさせたまはん時にはこなたをもおもひ給へなどことばをかきて

むせうつり高鼻ひかん貞徳と
出むかひなばかたりつうせむ

述懐

しろ髮は毎日見るぞうかるなる
かうそる道に今は身かろし

哀傷

又飛ぬ女とおとあはれぬししらじ
死ぬれば跡をとめぬ人玉

神祇

冬らしき氣しきおもしろ岩の木の
葉いろ霜をきしげきしらゆふ

賀

ながき代は君民の躰たうとしと
うたいてのみたみきはよきかな

安永五丙申年八月從東都求板
浪華　柏原屋佐兵衛

鳥がなくあづま人の石田未得か家の集の吾吟我集と名つけたるをあしがちるなにはのふみあき人泉本翁が家につたへてあら玉の百とせあまりになりたるを朝もよひ木にえりてうつせみの世にひろうせんとてしりへにひとことをそへよと聞ふるまに〱かたはしよりみもてゆけばいにしへ後鳥羽院のおほんとき無心座にさだめられし狂歌といふものを彼ちうたはたまきのおほけなきふみになずらへてみづからのよめるかぎりをあつめたるになんありけるさればやつがれがもとよりこのめるすぢにて今の世にめでの丶しるつたなきすがたをはなれいひしらぬみやびをつくしてしかもくすしからずたかきもいやしきもありとある人のこ丶ろの種をうへし苗代の水のひくかたに

まかせてにごれる水莖の跡をとゞむになん

寛政八年初夏

棚元見行（花押）

浪華書坊　河内屋八兵衛梓

卜養狂歌集

春の部

一元日にある人のもとへ行ける
にくいつみを出してしうぎの
べてのちこれを題にしてめで
たくうたよめと侍りければ
大だいにほん俵をはおこし米
かきとるかやに我ぞよろこぶ
といひければぬしかんじてい
まだくいつみとゑびとところ
とかちぐりのこりければこ
のものごものうらみ侍らん今
一首うたよめとありければ
くいつみてところと蝦の髭くらべ
まけかちぐりとあらそひやせん
一ある人のもとへ正月七日に行
けるに七草のうたよめとあり
ければ主をいわひて
うさいわう喜びありや悦びあれ
あとの太夫にすゞなまいらしよ
一ある人初春に景物香してその
のちめでたくうたよめと有け
れば
ひさしかれ久し嘉例とこぎり置
これ改年の御慶ふつかう
といふてさけなどのみて今一
首よめと所望ありければ
さけのみて目出度いはふ十炷香の
客もてい主もきやら〳〵笑ひ
一ある人花入に鑓梅をさがしに
生てはもとぬきくつろげて
木立ふりよき梅をひかへにい
けて此花にうたよめと侍け
れば
やり梅をこだちの梅うけとめて
花のいのちは生てこそ見れ
一梅のさかりの折ふし山の手へ
行けるにある人の庭に千重の
むめのはなさきけるを家づと
にせんと手折てければかたは
らにありし少人むりに手をね
ぢてとらんといふいなといへ
ば歌よみたらばやり侍らんと
いふいなびかたくて
家づとにせんよといひて枝おれば
山の手のべてむりにうばい花
一ある人うしのかしらに梅花を
さしたる所をゑにかきてこれ
にうた書付よとありければ
うしも又二月の雪かばい花をば
折てかうべにさせいひやうせい
一ある人の下やしきへ梅花を見
に行けるにあるじのたまひけ
るは此梅三十三本うゑけるが
二本かれたりといふ折ふしう
ぐひすなきければこれによそ
へてうたよめとありければ
法花経の鳥のやどれる梅の木は

廿八ほんさくぞめうなる
一ある人椿の花を垣につくりいろいろつばきをあつめうへその中のつばきの名を題にしてうたよめとありければ十種のなを入て

千よ萬よ待し玄もくになりひらが
すげなさ丶らんにくの開山

一ある人馬場にさくらをうゑて花のころうたよめといふて所望ありければ

白妙に綿ぼうし着る花のかほ
年もふるきのば丶ざくらかな

一はなの比與をもよほし花を見にまかりけるが花もいまだひらかざるその木のもとにてさけのみなどして

花ざかり下戸も上戸ものみたべて
ひらかぬさきにさけ〳〵といふ

一ある人目黒の下屋敷に四方にさくらをうへて花のときまねきうけられて行けるにさまざまちそうせられてのちうたよめとありければ

西ひがしきたみなみさい花ざかり
あれよ是よと目ぐろうぞする

一よしのへまかりしときこもりかつての花を折侍る人を見てうたをよみ侍る

よしやよしの右往ざわうに折花を
かつてこもりのもらぬこのもと

一ある人の元へつ丶じ見に行けるに皆人さけのみしてその比世にはやりしこうたとてひりんりんずのく丶り枕のいろかはる初心なぼんさまといふ事をうたふ我は（本ノマヽスニアラズ）本より下戸なればさけのむしべもしらずしてもとより小うたはしらぬ身の何をかいわでのいわつ丶じといへば色には出しさけをのませよといふさもなくはうたよめと侍ければ

花の色はひりんりんずといわ躑躅
初心なぼんに狂歌よめとは

一ぼたんの花の下にねこのねむりて居るところてうのとまりて侍れる所繪にかきてこれにうたよめといふ

目さますなこてうの夢のふかみ草
なれそならいそね丶子ね子の子

ある人のもとへしたしき少人をともなひ行侍るにぬし口口口手づからきじを料理しけるに少人のたまわくきじのかたもゝたかのじきといへばくわいぶんになるといふそのことばなにとやらんやさしく聞えければぬしわれにくわいぶんうたよめとせめられて

きしれうる今やきみのみ其ともと
のぞみのみきやまいゑうれしき

一ある大名歸國の時分國にもとらせ給ふときくすりを約束し侍りけるに忘もなくたまはり折ふし鷹野にて取とてがんかもきじうづらをそへてこの五いろにうたよみておこせとありければ

かりぎぬの色かもふかくすり衣
にほひうづらはきじものとせん

一春のころ鷹のがんをおほくさほにかけとをるを見てこれにうたよめとありければ

がんかりやうつかりがねと鷂に
とられて後もさほになれ〳〵

一ある人へいさらばさらをもらいけるにもてこし給ふ次でにとうらいしけるとて雁をそへて給はりけるがうたよみておこせと侍りければ

關東の雁や越路にかへるべい
さらば〳〵のいとまごひして

一ある人のもとへ行けるにぬしひそうせしかげのこまありみな人見んと所望しければ我に歌よみ引出せよと皆の給ひければ

雨にけふ道もあしげにあらばこそ
とく引出せ月かげのこま

一ある人のもとへ行けるにくわして長きあめを出しねつ起つしてみな人たべければこれをだいにしてうたよめと云ければ

起もせずねもせで菓子を荒しては
春のものとてながあめくらいつ

夏の部

一ある人の許へ行けるに少人まじりに三味線など引人ありその折ふしほとゝぎすまぢかくなきければ少人など所望にてこゝろあるほとゝぎすなればその心を前書してうたよめとせめられてうきにうきたる人のやどにはへうたんからこまをかけ出るさみせんのいとおもしろき手くだり妙なる音をきくも心そらにうちやうてんとなるものをまして折もおり時もときの鳥のこゑめづらかになきわたればいとゞ耳にもみづのおと二つともなきこよひのともあそびかなと興をもよほし侍るに聞ほどもはや夏の夜の雲井のよそになきすてゝのきのたちばなにもやどらず侍りければすだれつり心には思ひけるにその座に

有し少人のこの心をうたによめとたわふれければ
三味線のちりてれてんを過すとも地にさんさがりなけほとゝぎす
一ある人はつねといふきやらは僧正のうたにて付たる名なり此きやらたゞはやらじうたよみたらは少くれ侍らんとありければよみける
聞たびに珍らしければほとゝぎすたゞとる山のはつねならまし
一ゆりによるこひといふ事を當世のはやり言葉にてうたよめとあれば
難面さの君がこゝろは鬼ゆりの一口にかみころせん〳〵
一いづみのさかいにありし時南宗寺といふたくあんおしやうの寺ありそのてらのしゆつけ新寺を立ててらびらきによびけるにていせんにてうしゆんのさきけるをぬしこの花につけて新寺の目出度うたよみくれよと有ければまづしうげんに高砂をよみ侍らんとて
てうしゆんのとくを具へて南宗花はじめてひらく寺もはんじやう
一なつのころ人のもとへきくを見にまいりけるにまがきすいがきませがきいろ〳〵ゆひてきくのはなのみゝはおどろかさでめをおどろかす花のみこそといふ中にも大はんにやといふきくの花誠に大なればみな人目口けるに其中なる人我にうたよめさだめてひさしきやくそくの花見なればはらみ句や侍らんそれはおもしろからずなににてもたうざのうたよめとたわぶれければその言葉をかりてよめる
大盤若はらみ句ありときしの花そのすいがきはおかしませがき
一ある人池水に白蓮のさきけるにつねのうたはおもしろからずはすのとんだるうたよめと所望ありければ
かやうには見事な者は又もあらし弓八あたご白蓮のはな
一ある人はすを畫にかきてだてなるまへ書してうたよみてくれといふもとよりだては白はすのまことにかたき古文眞寶を蓮は淤泥の中より出て泥にそまらず花の君子なりと茂叔がひとゐなきかたると心をとりたるもにくや〳〵つらにくやわれはそのいきすかぬ枝もなくすらり〳〵ともぎあげて水のたるやうなるよそほひた

とへていはゞわかき衆のよき
とりなりを作りたてたるにに
たりこひ侍ければそのきをよ
みて書付る

枝もなくすらり〳〵ともぎ上て
なりもはすはに花をやり候

一ある人川のほとりに凉み居け
るに鵜のうををとりてしらす
なのうへにおきてまたとりに
行ければだいにしてこれにた
うざの興にうたよめとありけ
れば

己が名のゑばみもやらで嶋つとり
うき世のらくをしらすなのうへ

ある人白地のあふぎにだてな
るうたをよめとありければ

御所望にあひに扇をかきよごす
元のしらぢがやあましぢやもの

一かきつばたを極釋色にかきた
るあふぎに

みかはにはあらぬ膠をにた〳〵と
ゑのぐにねりてかきつばたかな

一ある人のもとへちんきやくと
なりて行けるにおりふし大あ
めたう〳〵たらりとふりには
のはなもちりやたらりと減け
るに庭に三番さるがくどもも
來てめでたくうたひなんどす
るぬしのいひけるはわれに一
首にわのはなにつけてよめと
いふせんざいを見れば葵緋百
合翁ぐさつゞみ草などゝさき
て有ければよめる

せんざいに翁草こそ立あふひ
はやせとつぱいひゆりたつぽゝ

秋の部

一ある人のもとへ七夕に行ける
に牽牛のうたよめとありけれ
ば

こよひ引牛のまなこのたま〳〵の
ぎんがり二つほしあひの空

一七夕にげんそうとやうきひと
さゝめことし給ひける所を繪
にかきてうたよめとありけれ
ば

玄宗ときひと今宵のさゞめごと
ほし〳〵〳〵とほしあひの空

一盆にある人とともなひてしば
のたかなわてをとほりけるに
ぼんともいはであみを引せつ
しやうする人ありある人それ
を見て今日せつしやうをする
はのちの世の罪をしらぬかと
いひければ我あみ引にかわり
てうたよめとたわむれて

じやうごえごの習と芝のうら盆に
後世を大事と引はなむあみ

一てつぽうずにて月を見てける
に世のはやりことはにて歌よ

めと云そのころなににてもほむることばをせかいのてつぽうずといひ侍れば其ことはによそへてうたよみける

うち出る月は世界のてつぽうず
たまのやうにて雲をつんぬく

一八月十五夜月しよくし給へばよめる

しらふなる月の鼠のしよくたゝり
ひそうひにそう天ときのごく

一月の夜月くまなくはれければ人みなさけのみなどして輿のあまりにやかゞみとぎといふはやし事をしてまひけるに月のはれけるによそへうたよめとあれば

酒のみて舞ふつ謡ひつほめはやせ
かゞみといふを見さいなの月

一名月の夜ある人の云けるはむさしのゝ月とおばすての月とはいつれをかおとりまさらんその心をうたによめといひ侍りければ

更科やおばすてのおばと武藏野の
はらひとつより出し名月

一三五といふ人のやどにて月見し侍りけるに新五兵衛といふ人たはふれに月の繪をかきてこれにこひのうたかきつけよといひければ

月の歌かくもあるじの名にめでゝ
三五夜中の新五兵衛に

一名月の夜その比世にはやりし小歌にさせさせよござんしよてんとよござんしよといふうたをうたひてあそびけるにうたよめとしよ望ありしかば

金つばに似たるこよひの月のかげ
させ〳〵よござんしよ
てんとよござんしよ

一われかみがたよりくだりしときみちのいそぎければ田子のうらにて月を見てよみける

月の輪のたごの丸さのゆふかげに
くみてこそ知れしほがこぼるゝ

一八月十五夜月くもりて出ざりければ

久方のあまのじやくではなけれ共
さしてよ〳〵秋のよの月

一夜ふけてのち月はれければ又よみ侍る

空おほれ今よひはたまをくれの月
はつきりはれて目にものみせん

一むさしのゝ月くもりければうたよめといふ

色くろき今よひの月やすます坊
べい（んニアラズいナリ）景（けい）もなきむさしのゝ月

一八月十五夜の月をみつまたのなみにふねをうかべてさけのみうたひあそぶその比世には

やる唐人うたとてのんせんふ
らんらんつゆのなさけなやさ
いふ事をうたひけるにおりふ
し月くもりければ
謠ひなは雨やのんせんふらんらせ
くもれば露のなさけなの月
また世の人も酒もりをすだれ
舟などにて小倉おどりといふ
事をうたうそい比うたにさす
やうでさん〳〵さゝぬはしの
ぶよの一まどおたまこがれて
あきこがれつゝといふを聞て
これにてうたよめとありけれ
ば
さすやうでさん〳〵さゝぬ月の影
あきこがれつ　にくのあまよや
このうたをその座にありしわ
やくもの今一つよみなをせに
くのあまよといへば十八夜に
て侍るといふわれこたへてど
れほどのさんようじやがさや
うのあやまりをのたまふさん
さんさゞんは十五にてはなき
かといへばなもつとも〳〵と
わらひぬ
一むさしのゝ月を繪にかきて月
の中より一本すゝき出たる所
をうたによめといひければ
月の舟一本すゝきほにあげて
尾ばながなみをはしるむさしの
一弓に名をゑし人のもとにて九
月十三夜の月を見てうたよめ
とあれば
かつら男よつぴきはりし月弓の
うちとの竹のふしのよの秋
その夜世にはやりし秋田ぶし
といふ小うたうたふそのうた
に今に秋田はてんとおとし水
さんころしえいとうたふ又う
たよめとありければ
こよひ後の秋田節をば天とうたへ
十三ころしゑい月のかけ
一ある人ぶだうをりすがくふ所
をゑにかきてこれに書付よと
云
己が名をひつくり返しすりと云ば
人のぶだうをぬすみくらはじ
一ある人のもとへきくの花を見
にまかりけるにさけのみして
そのころはやりし小うたとて
君がねあせにしほとぬれたや
といふそれをみな人うたひて
我にはきくのなによそへうた
よめといひければよめる
宮古(みやこ)わすれ玄宗や酒をすいやうひ（しにとよれたたトアルベキカ）
君かねあせに
一もみぢ見にまかりてうたよめ
とありければ
さねもりが着たる錦かもみちばゝ
見る人ごとに長いせられて

一ある人のもとより柿を給はるとて

澁口にをくりかよへる五ゐんしんことばのはぢをかきくけこかな

とてうたかきおこせ給へば返事に

かきくけこおこそとのほも喜びは
過分至極におしやらりるれろ

一ある人のあふぎに鹿の六つとを山に居る所を繪にかきてうたよめとありければ

しゝと云ご數へて見れば六ぞある
いづくの山へとをのきぬらん

一秋のころあるてらへ行けるにすいものにはすのねとのりとこんにやくとむめぼしとを入て出しけるがこれにうたよめとありければ

梅ぼうしのりにいり蒟蒻がじやう
佛道なれやはすのうてなに

といひける後さかなにたうふしいたけこんにやくふにしめて出これにてとてもの事にうたよめとしよもうしければ

こんやくふ肴にさけをしいたけや
なにぞと人のたうふ成らん

冬の部

一ある人のもとよりゆきの日ほつこくより到來とて一しほの鱈を給はりてゆきのうたよみておこせとありければ

我やどへけふきた國のおさかなは
ひとしほ雪のうをとながむる

すいせん花を□□□てこれにうたよめとありければ

うつくしき花の下葉を見るからに
くちすいせんと人やいふらん

一へうのふりて内にもふり入ければこれに一しゆよめといふ人あり

雨霰せんのやさきの如くなれば
よつぴきへうとふりつるぞかし

一ある人のもとよりかもをたまはりてうたよみておこせるうたに

料理してまいり給はゞうれしけん
あしがもと云ばあじはよからじ

といひておこされければ返しに

此とりはもとより水にいるま川
あしがもと云ばあじやよからん

一冬のころ金地院へ行けるにくわしにみつかんとかんとかきとすあまとあめを出しこれにうたよめとありおりふしあめもふり庭の池水もこほりければ

すあまにもほりぬる池の水かんし
かんずる窓にかきくらすあめ

一ある人てんとりのはいかいして我かたへおこせけるが水鳥のほつくなれば奥にうたよみてやる

水鳥のひえこほりてやはたらかぬ

ふさくにてんのあらんものかは

とありその巻を見ればことばには似ざりけりあまりさく過てとびたる句ばかりなればあへててんもなし後學のためにと返しに

水とりのことの羽づかひとび過て

てんのあみにももるゝ成けり

一ある人紫雪を給はりてうたよみておこせとありければ

嬉しさに見るより早くふた〳〵と

あせをばうばふ雪のみくすり

一ゆきふりける日かぢばしの土手やしきへ雪見に侍りけるにはしの上にはだかの行人雪にふられて居けるを見てあれが身はかねにてあらんなどゝいふ此ものを題にして雪のうたよめとありければかの身のかねをきたいてよみけるとたはふれて

立ぎやうや打眺めいとはだか身に

ゆきひら〳〵とふれるかぢばし

一冬の比たびたちける人さむくやあらんとかなしみ給ふよく聞ば與茂八三木の助久米の助數間といふ少人どもにつれ侍るといふ事を人のかたればよみてつかはしける

さむき世も八まんしらじ旅のやど

みきをくめとてかずまいりなば

一ゆきのうちにある人のもとへ行けるに庭の梅さかりにて少人あまりおほくながめて侍りけるその名をたて入て雪の梅をよめと侍りければ いなさもいひがたくて万作かもんもとめたみやと いふ名をよみける

雪のうちに八まんさくや色もかも

むめのはつはなもとめたみやれ

一ある人かみがたよりくだり侍るがみちゆく心にて狂歌ともよみたりとて見せけるにみなふるき句のみなればほめられもせずまた流石しかられもせず大かたにほめけるをある人きゝてなにとほめたるぞとたづねければうたにて申侍る

道行のかきつもりぬる古句をば

こゝろ〳〵にかんじこそすれ

一ある人あふぎの繪にいわのうへにゆきの松を書みさごのゆきを詠居る所ありうたかきつけとあれば

岩かねによりくるうをゝ松がもと
　ゆきをみさごのあたりわすれて
一きんのあふぎにゆきのさぎを
　かきてうたよめと有ければ
きら〳〵と煌めく上にしら〳〵と
　しらけはてたるゆきのしらさぎ
一あふぎにゆきの柳にしらさぎ
　書たるにうたよめとあれば
白むくと見るしのさぎの毛衣を
　ぬふ青柳の雪のしらいと
一三十三さいのとしのくれによ
　みける
としの矢のかずは三十三間の
　堂してもはやく過る光陰
　老が身のまづしきとしのうれ
　なげきてよめるなり
借錢をせなかにせたら老が身は
　年〳〵れずとものくれよかし
一あるかたへ行けるに鬼が尻を
　まくしふんする所を繪に書

これによそへうたよめと有
　れば
ふくはうち鬼はそとへとうつ豆の
　はらにあたりてあらくさやふん
一あるかたへふるまひに行ける
　にざしきになをりとこをみれ
　ばからす丸みつひろのたんざ
　くを表具してかけられたり
　ぬし是に狂歌よめと所望なれ
　ば
床のうちに何やら黒く見えけるは
　からす丸どのゝ手跡かあ〳〵
一ほていの袋によりかゝる所を
　かきうたよめと有ければ
おのが名にもたれかゝるは布袋
　くらいこへたは又はらぶくろ
一四季の富士を一ふくに一つか
　きて春の山には花をいろどり
　秋の山にはもみぢを色どりて
　うたよめとありければ

すみゐかと見れば誠に春秋の
　花ともみぢをさい四季のふじ
一ふじの山をなりひらのながむ
　る所をかきてうたよめといふ
ときしらぬ雪とながめし人の名の
　なりひらめけるふじの山かな
一ふじの山を唐人のながむる所
　をかきてうたよめといふその
　ころたう人うたとてせねんて
　ふし〳〵ふばいしよといふ事
　はやりければうたよみける
から人も小謡ぶしでや眺むらん
　せねむてふふじ〳〵
　ふじとあしたか山とをゐにか
　きてこれにうたよめとあれば
ふじは〳〵世に勝れたる大たけの
　ねもとに生ふるあしたかな山
一あるまいすぼうずくわんおん
　のゐを愚人におがませてこれ
　はせんだいより出たり秀平が

まぼりぼとけとなんいふをみればきのふけふ作りたるほとけなりあまりの事に一しゆ
大事だい僻事をいふくわんせをん
これぞせんだいくせ事ぞかし
一ある人ほうさい念佛をゑにかきてうたよめといふ
人はみなさいほうとこそ願ひしに
さかさま事ぞほうさい念佛
一いせかぐらきよく大皷うつ所をゑにかきてうたよめといふ
いせ大鼓かしらをちはや古だいこ（本ノマヽつらつきノアヤマリカ）
つでんらんなるつらきぞかし
一たけににわとりを書ひよこのいかにもちいさきをかきてうたよめとありければ
おやは〳〵竹のはやしの庭鳥の
子は竹林じやちんちくりんじや
一にわとりをつがひかきてそのそばにひよこを三つ書て是にうたよめといふ
にわとりといふもことはり親二つ
此子の名をばお三ッとやいはん
一ある人のゑにかほは人にてまへがみありそのほかは天人のかたちにかきたりいかにととへば求馬（もとめ）といふ小人のかたち人にて天人になりたる所よといふこれにうたかきつけよとあれば
天人の天は二人とかくからに
乙女とやみむもとめとやみん
一ある人あふぎのゑに三人してまりける所を書たりうたよめといふ
ける鞠の相手をよそへかしわぎの
女三といへどおとこ三人
一ある人やつこしばがきをうつ所を繪にかきてうたよめと有は
奴衆の名もさな名もさしば垣と
ゆいたてられてうつゝなのみや
一ある人ひやうたんなりのすゝり箱のうへに駒をかきてうたをまきゑにせんとのぞみければ
ひやうたんの硯箱から駒が出た
げにするすみと人のいはまし
一さねもりがかみを染る所をゑにかきてけるがしらひげ半分くろく書ければ
さねもりも非にて髭をやうち染ぬ
半分はくろ半分はしろ
一ある人下手の繪師に所望しければだるまのあしのはにのりたる所を書なるほどふできなりければ紙をすてたるとてはら立ければうたをかきける
あたら紙に書せてだるま損じや者
よしとはいはじあしきあしのは

一たけのはやしより虎の出る所をゑにかきてうたよめといふ

よをこめて竹のふしごや出つらん
我と時しるとらの一天

一名を右衛門と云若人ふろふく事上手なればこれにはなやか成うたよめとありければよめる

吹風呂のてんと其いきそれすいた
せかいの圖じやと名を右衛門殿

一ある人ふろをあたらしく立て入ぞめしけるに目出度うたよめとありければよめる

入ふろをいはふて三度長いきに
吹とく〳〵ふくとくとふ〳〵

一ある人日光へ御社参し侍りて歸りけるがふろに入て無事に歸りける祝儀のうたよめとありければ

同じ名のふろのかまどの日の光
めでたく〳〵歸宅木をたく

一ある人のもとへさびたるもの出入しけるがある時ふとたづねられ侍りければ俄の事なれば彼さびもの我さとの名物とてならちやといふものをしてふたちやわんに入出しけるがさても手むさきものかなとてせかせ侍りてたゞにはくわれず一しゆにわかによみたらばそれをきやうにしてやくいはつらんと有ければかのさびもののわれをたのむうたよみてくれよといひければよめる

ならちやかやこの手寒げな蓋茶椀
とにもかくにもげびた人かな

一ある人と出家さかい町をとほりけるに門をくゞるとて野郎に行あたり詞からかひしてやらうめなどゝしかりてとらへてはつたるなどゝ聞てよみてつかはしける

僧はたゝくけんくわの門の口論に
もしもかとうか言葉やらうめ

一ある人女をむかへてあまがさきだなといふ所へむこ入するといふ事を聞てよみてつかはしける

おいつへいつ御新造にも打乘て
むこ入するやあまがさきたな

一ある人とうしごみの御ほりのあたりをとをりけるにくるまにざいもくをつみ侍るとてことのほかにごみをたてければうたよめと云

材木をほりばた〳〵と我まゝに
つみて車のうしごみぞうつ

一ある人のもとよりかうせんのおこしけるに中にさちを入ておこしそのゝちさちを返して

たべといひければかへすとて
よみ侍りける
返さぢを又二たびにとり返す
げにかうせんのほんとゐはまし
一あるひとのもとへ夜はなしに人々ともなひて行けるに夜もふけざるに八つの時計をうたせければぬしはらを立てとけいぼうずをいましめむといふしばらくまち給へ一しゆよみ侍らんそののちはぬしのはらの居るほどはなし侍らんといへばみな〳〵もつともといひければよめる
まだよひの更行かねのこゑするは
にくひやつめのとけい坊主よ
そののちぬし悦びてさけのみして隼人（はやと）新五佐源次といふわかきものども出して中のみなどしけるこれをだいにしてうたよめといふ三人の名をたて入てのみしさけむじんなりと
もつけさしのもはやとるをは
しんぞめんなれといひしのちていしゆひそうの友彌左助といふ人出てさけのみけるにこれには今一しゆよめことさら友彌にはさそとか殿とかよの人にはかわり侍るぞとたはぶれいふ人ありければつねのうたにはめづらしからずとて折句をなんよみける
年よりし者は身をはぢやさがたの
ともゝあひせずのまぬおなさけ
一ある人のもとへ行けるに五次郎といふらう人にあひ侍りけるにこの人十歳なり能筆にて侍る末牢人にて身上かせぎ侍るありつきやうにうたよみてやり侍れとあるじのいひければよみける追付知行にてありつきけると悦び侍りける
もしほ草かく宅みればすみよかれ
身のありつきのまだしらう人
一ある人のもとへ行けるにみな人將棊をさしてそのゝちさけのみなどしうたよめといふ
金銀もさけにはしかじとにかくに
ひしやとつぶると一つうけゐは
一ある人のもとへ行けるにおさこの子をまふけて七夜のいわひにとて人などよびいわゐけるにいかゞし侍りけるぬしのかいけるちんいぬうぶぎにそばへ引やぶりければぬしけしきあしく見へ侍りければ目出度事よといひてうたよみけるぬしよろこび侍りける
犬の子の目なかけそ又氣にかけそ
やれ〳〵うぶぎちんてう〳〵

といひければ目出度とてみな
さけのみしける中に大上戸瀧
のみせんとてさかづきより直
にのみことの外きげんにてよ
だれながしねふりければうた
よめといふ古歌を引て

瀧のみはたへて久しくゑひぬるに
よだれながれてなをねぶりける

一ある人とふなあそびに行ける
にさけのみしてのちかぢをま
くらにしていびきかきていけ
ればこれをだいにしてよめと
云

いびきをばかくの舟にや通ふらん
なれししほぢのかぢ枕して

また三つまたのうたよめとい
ふ

山もあり又ふねもあり川もあり
かずはひとふた三つまたの景

一ある人きよゆうそふふの繪を
とり出し前書してうたよめと
所望ありければ賢なるかな
きよゆうそふふ貧なるかなき
よゆうそふふ大堯天下をゆづ
りたまはんとのたまひけるに
いなかしかましとてみゝをあ
らふその水けがらはしとてう
しをあらはぬこころのうちさ
ぞきよくやあらんしかあれど
我おもふ
さてものこりおほきしんだい
くづしかなとかくむまれつき
の貧乏神かきうちわのへたげ
な事をいふかほのへうたんさ
へすてゝ世をひつこむきりに
はあらぬかなづちのかたきこ
ころはひだのたくみがつくり
なをしてもなをらじとおもふ
なりけり

世中をうしとひつこみじあんこそ
そふふのわろき生れつきなり

又一しゆきよゆうどのへもつ
てまいるとて

天下をば堯に嫌とやゐんきよゆう
あらひしみゝのびくのうすさよ

一ある人身上おとろへ世を捨坊
主となりて南無あみがさを引
かぶり世にすみぞめのころも
を着ほつしんしもくとかねた
たき我所へたづねきたりしゆ
せうなるものがたりなどし侍
りけるまゝあまりしゆせうに
もおもひ侍らずといへばその
身のすきたるみちなれば一し
ゆよみ侍らんとて此うたよみ
たればもつとも〳〵とて後に
そのみも大わらひし侍りける
なり

鉦叩きかねがなければかねたゝく
かねさへあればかねはたゝかじ

一ある人ちぎやう所よりせつしやうの鳥とてうぐひすとすゞめともずとしとゝとつゞみと氷礼をたまはりこれにうたよみておこせとあらば重ても

鶯のうたすゝめてもすゝぬ身はしとゝと口をつぐみ居てけり

一ある人のもとへ出入する馬喰(ばくろう)其人の事をかげにてあしくいひたるとて出入をとめけるにめいわくして我に申わけしてくれよとたのみ侍るまゝさしたる事もなしゆるし給へといへばうたよみたらばゆるし侍らんとたはぶれければ

かけ事をあしげにいひて鼻つきげばくらう口ぞとかくゆるさめ

一あるひとのもとへゆきけるにかぶろを出しゝやくなどとらせけるにおりふし我も風を引ければづきんをかぶりて居侍るちかづきなどさしけるがづきんゆるさせといへばみな人大事のかぶろどのにちやうのりよぐわいゆるし侍らずそのかはりにうたよめさなくばさけのめとせめければ

老が身のさむきしらがの霜はらひゆるさせづきんひつかぶろどの

一ある人あふぎにあふひのうへをゑにかきてうたよめといふ

さしつたる葵の上の御ものゝけもつてのほかに御座候とは

一らんさいといふおどけものありまへにどうらんを緒ながにさげてだてをするといふてうれしがりければみな人うつけものに歌よみてやり侍りければ

前下りふらんさいよとさげられたうつけのかはやごんごうらん

一ある人きやくをよびけるにさけなどのみ過しきげんよすぎぬしの庭の松木の枝おろし侍らんといふぬしもていしゆぶりにて二つ三つはえだおろさせ侍けるがまたきり侍らんといふぬしくたびれたるきやくかなとうちへひきこもりとりあはず侍ければぬしのかたへよみてたはぶれける

松の木のやにをばいひし倦みものしんきや／＼木きりきのごく

一笹井右京といふ少人ある人にさかづきさしけるにたべゑひたりとてのまず侍りければひらさらのみ給へといへばうたよみたらばのみ侍らんといふなにとやらん興もさめければ

御意なら　盃さゝいうきやう〳〵
たとへ我身はむげになるとも

一ある人ひろき下屋敷あり我やしきいまだせばきとて色々もらい侍らんといふそれをきく人よくにはいたゞきがなしあれほどのひろき屋敷もちながら少の屋敷をほしがりせばきといふ事よとしかり侍りければ我いひけるはさのみしかり給ひそむかしもひろき所せばきといふためしありといへばみな人これはあたらしき事をいふなにに　かあると尋ければ

うたひにもかの高砂のうらをさへ
一間せばやとおもひ候

一ある人のもとへしばざかなを十種やり侍るとて十色の名をたて入てよめるいか。にし。みる。あぢ。こち。いな。めばる。かに。さす。もうを

いかにしてみるにあちこち稲妻の
よそめはるかにきすぐ雲井を

とよみてやりけるまたのとしその人にあひ侍りければかのかれいのさかなはくれ侍らずや十種のうたなきものにて侍らんといへばよめる

かれいにしこちおこせいなさはいか（本ノマヽ落字アラン）
もうをあちはいこれ十種なり

彼いにしこちへおこせと御意なさは
いかにもうをのあちは一ばい

一ある人すりばちにせきれいのとまりてねぶり居る所をゑにかきてうたよめとありければ

摺鉢になぜにねぶりにきせきれい
みそさゞいかと人のいはまし

一せきれいの岩にとまりたる所をゑにかきてうたよめとありそのころ世によしはらたゝきといふ女郎の名を立入て小うたにうたひければ其心をよめる

當世の吉原たゝきちよろたゝき
このとりむばも岩たゝきかな

一ある人しろきあふぎにうた書付よとあれば

久かたのあまの岩戸にあらねども
ひらけばしろ〳〵と見ゆ

一うゐらうこんといふものきよくまりをける人なりある人の所にて興行ありしに色々きよくをつくし侍りければうたまりといへばうたにもきよくよみと所望せられて

楊貴妃のときにはじまりける物は
そよやげいしやううゐらうの曲

一ある人のもとへ行けるにぬし

いひけるはみな人のちそうに
めいよのけだものを見せんと
いふ何ぞとおもひ侍ければよう
わひげつりひげ天神ひげかい
らぎの大小さしたる人むくつ
けたるなりにて罷出すいさん
しけるいづくの人ぞとゝへば
奴にするがのしばかきをうつ
のやのものとこゝろにくさげか
にいふさてや上手ならんとみ
な人所望しければ天下一のぶ
ひやうしものりあまりおかし
さにひそかにうたよみぬしの
もとへ遣す

しば垣をうつの山邊のうつけもの
ゆめにも一つあわぬ手びやうし

一或人のもとへ大みねかけ出の
山ぶしとておびたゞ敷なりに
てきたうし侍る大あせかきて
いのるそばへよりて聞侍るに
ひゝをたべるにやにほひはな
はだしく侍ればぬしの方へよ
みてやる

にんにくのけさをかけての山伏は
なまぐさあせくさ又はひるくさ

一ある人さるのもゝのさねをか
みわりたがるていをゑにかき
てうたよめといふなればよみ
ける

手にもちてくいのやち度もゝの核
つらをあかめてかめどわれざる

一ある人こんくわいのきやうげ
んをゑにかきてうたよめとい
ふ

こんくわいの涙の雨のふるぎつね
かゝりてわなにおち坊主かな

一ある人とらによるこひといふ
事をよめとありければ

思あらば虎ふす野邊にねもしなん
ひつしき者にはかわをしつゝし

一ある人少人のちやの小袖にこ
いかきの上下きたる所をゑに
かきてうたよめといふ

茶と見つる小袖の色にこいかきの
かみしもなれてよきすがたかな

一ある人くらかもん留井といふ
少人花ともみぢのえだをかざ
しおどる所をゑにかきてうた
よめといふ

花はよしの紅葉は龍田おぐらかも
むるひに見しは君のおもかげ

一ある人なんばうのけぬきをた
まはり氣に入たらばうたよみ
ておこせとありければ

よきと云て類ひもいざや白ひげを
これで南方ぬくせかいの圖

一ある人くじらのみとかわをた
まはりてうたを兩度よみて返
歌せよと有ければ

たび〳〵に言葉の花を見くちらや

返歌はへたのかわくぢらかな
一ある人ぢうばこにもちとこわ飯を入てさけをもすゝめければ
下戸なれば餅こそよけれ酒のめと
おしやればまこと強いこはゐゝ
一ある人下屋敷へ行けるにひろにはにてあそびいぬまもちといふものを出しけるにしろきくろき色々のもちなりこれを題にしてにわのけいをよめと言ければ
べう〳〵と廣き庭にてくいつくは
白黑まだらいぬまもちかな
とよみて後あら木ざけといふさけを取出てみな人のみけるにその中に侍りける武士にさけすゝめけれどのみ侍らずぬししやくとりしわかきものにのませてちかづきさゝせ侍りければたれもすゝめ侍らざるにたぶたぶとうけてのみければこれにもうたよめとみな人もよほしければ
ものゝふの荒きも酒に柔らぐは
うたのほかなるわかしゆのみち
一ある人女をむかへて中よくすごろくをうつといふ事を聞てよみてつかはしける
人よせず我かのさまにすごろくを
よび〳〵ごとにうちもねぬらし
一岡山八兵衛といふ人わづらひて大かた本ぶくし侍りければもはや藥をやすめ侍らんやといふ心をうたによみておこせければ返しによみ侍る
八びやうを二病なをせはむ病なり
なにをかやまんくすりなくとも
とよみける後湯治してかへりけるがみやげとて木地の三つぐみのぢうばこをたまはりかたぢに申付たりぬりてつかへとてこれもうたよみおこせければ當世はやり言葉にてよめる
たまはりし木地三つぐみの塗物は
うるしい〳〵かたぢうけない
一ある人しやく八をすきてことさら小うたにのせて吹事すき侍りけるがしやく八にうたよみて書付よと所望しければよめる
くれ竹のよの一ふしをうたくちに
うたひていざやあてばんもまた
一いつさいといふなる人はこほりごのゝちやしやくけづりなりさしも寄侍りければもはやさいくも成がたしかたみさてちやしやくをけづりてくれ竹の殊さら見事に侍りければ末

の世にもまたてうほうならんとおもひ我もかたみに一首かきつけてつゝうへにかくなん

くれ竹の末の世までものこし置

一さい衆生のためちやしやく哉

一いま一本ありわれうたよみておりぎぬと名をつけてけるたけのうらおもてともによくはべればたけのよきしやくうらおもてよしといふことをよみいれて

おりきぬはいとゞ美したけのよき

しやくがよければ裏おもてよし

一あるひとつりざほをわれに見せたまひけるがながさ九しやくばかりのうちにたけのふし三十六ありふしあひだながみじかなくめづらしきたけかなといへばこれなんうらしま太郎がもちたるさほとて人のくれける名竹なればうたよみて書付よとあれば

うら嶋がつりのさほとてくれ竹の

のびずちゞますふしはろく〳〵

一かいのくにより所のめいぶつとてしるあめをたまはりてうたよみておこせとありければ

名物のそのかいありてあらむまや

なめぬるあぢはしたぞしるあめ

とよみてやりけるまたのとし例のあめをやるとてふみは來てあめはまいらず侍りければ

甲州とまでとまはらぬ御ゐんしん

あめねぶらせてだまし給ふか

一たかさきのだてたばこをのみけるにあるたはこのまぬ人いかゞおもひけんめづらしく侍ればのみて見むとてすいけるにきつくむせて目をなんまはす心地しければはらを立てとがもなきたばこをしかりければこれにうたよめといふ

けふにむせてせきぬる聲は高崎や

我とはらをばたてたばこ哉

一ある人能書の人三十六番のかせんを書て給はりけるが返しにきやうかよみておこせとも侍らずば我かきし水ぐきのおかのくずのはのうらみ侍らんなとゝいひければよみける

三十字餘りむくいを書て給はりし

おれいに一しゆいざきやう歌仙

一ある人大海のちや入ほり出し侍るそのひらきに一ぷくちやをたてんとてまねき侍りけるにいかゞし侍りけるにやかのちや入の中にちりありけれ

ば主はらをたて茶道（さだう）を曲事に
おこなひ侍らんとしかりけれ
ばゆるし給へとてよみ侍りけ
る

名人は人をしからず大海は
ちりをえらばずおゆるしあれの
一いつみのさかいにありしとき
極樂寺といふてらの門前に町
人どもちりをすてければ寺の
しゆつけ出てさん〳〵しかり
惡口し侍りければよみてつか
はしける

極樂の門にやちりをすてばこそ
そとはなにかはくるしかるべき
一ある人のもとへ行けるに少人
まじり下手まりをける我にも
けよといふいなといへば少人
などむりにわきざしをとり是
非けよといふをいなとてわき
ざしをすてゝかへりければあ

とよりもたせおこしけるつか
いによみてつかはしける

わきざしを捨ておきても心やすや
下手のまりばにすりのなければ
さかいにありしとき大神宮の
とび給ふとて矢をたてゝ置色
々まれなる事をいひければよ
める

この神はいともとひけり輕わざの
みつは四つはのそや立にけり
一そのころ世に大坂やきのむさ
うもちといふくわしはやりけ
ればある人それをふるまひて
これにうたよめと有ければ

名にしおふ大坂燒のむさうもち
人にしいられて喰よしもがな
一ある人ちやぐわしにみつかん
と杏仁とところまめと出してう
たよめとありければ

題はみつかんにたへたる御所望の

うたをあんずるみはくらふまめ
一あるともだちのもとへとしへ
て行けるに今は世をのがれて
いつかたへも出ず埋火を友と
して消やらで侍るといひけれ
ば

きえやらで今にいきとしいけだすみ
かしらもしろくぜうとなるまで
一ある人うどんを手づからうち
てふるまひけるがあるじのち
そうの返しに歌よめとみな人
いひ侍りければ

御馳走に偶々あふはうどんげの
はらまちへたるこゝちこそすれ
一ある人のもとへ行けるに若き
かうぐやまいり色々のかうぐ
を出しけるにたき物に仙人粜（せんにんこく）
方若草（はうわかくさ）といふなりきやく衆に
とり給へといへばいなと云わ
かいものゝめいぼく成にせひ

さり給へといへばうたよみたらば取侍らんとありければせんにんわかくさこくはうをたて入て

仙人のいく千世わかくさかへぬるかみもまつくろはう〳〵として

とよみければあるじにかうぐめせといふいかにも心得侍るうたよみしだいにとり侍らんとたはぶれけるのこりけるかうぐはとこへばきやらたが袖花の露にほひぶくろなんありといひければよみける少人のかほよきをあひして四色のなをたち入てよめる

梅の木はみめの木やらん花の露たか袖風のにほひぶくろう

一ある人のもとへ例年のしうぎとてちやをひきざかなそへて持參し侍る人あり我にもまいり侍れといへばまかりけるに今日はめでたく祝儀のうたよめといふあわびたいこいを持參しければよめる

こひといひて袖を引茶の亭主ぶりめでたいことにけふあわびかい

一てうちんをかりて返し給ふてければよみてやる

てうちんをかへすによつて申也さてもちんてうさてもちんてう

一べんざいてんへまふでする道にててんかんやみあわをふきけるをみてよみける

詣でする道にてあわをふくの神是ぞまことのべんざいてんかん

一ある人のかたへ行給ひけるにていしゆ坊主にそくいひをおさせければおしやうあしきとてごくつぶしなど丶しかり侍ればよみける

この竹を削りてごくを押つぶすこれぞまことのそくいべらぼう

一卯月八日にある人のかたへ行給ひけるにおりふしほと丶ぎす一こゑなきて過ければ一しゆ所望せられて

ほと丶きす卯月八日の一こゑはほぞんかけたかうぶゆかけたか

一ふどうゐんへある御かたの相伴に行給ひけるがきやくのおそきとてていしゆせかれけるおりふしくりより火事出さんとしければよめる

不動院くりからくわゑん出にけり客のこんからていしゆせいたか

一御きり米はいりやうして祝儀に

ことしよりきりまいねんに戴くははちぼくやうがめうがなりけり

一なつのころふうふともなひて

ふなあそびに行給ふおりふし
ほとゝきすおとづれければ發
句
のんき丶よかかんかもきく時鳥
門に玉わき枝はさんはもしけるなつ山
一ある人のかたへ行給ひてけれ
ばちそうにごまもちを出しけ
れば
黑ごまのかけて出たる餅なれば
くふ人ごとにあらむまといふ
一ある人のかたへ行給ひけるに
しばのかきをりやうりしてこ
せうをふりて出しければ
小唄ならば料理にはよき芝垣の
こせうふり袖ちらさみそめた
一するがだいへ行給ひければほ
り出しのちやわんを見せ給ひ
けるにひたすらのぞみ給へば
きよう歌よみてこしなばやり
候はんとあれば

くれんとの約束堅くするがだい
ふじはゝ山ぞほり出しちやわん
一ある人はいかい百ゐんにてん
をとのぞみ給へば奥にうたよ
みて
よき句のみかぞへてみれば六十四
はつばとほめててんをかけける
一あるかたに行給ひけるにかた
手屛風にきし松へ鶴のまひさ
かるゑありこれにうたよめと
所望なれば
千年とは限りつるとのそりやかたひ
いつがいつまでもいきの松ばら
一たけのはやしにきじのなく所
をゑにかきてよみ給ひける
世をのがれ竹の林にすむきじの
聲もけん〳〵賢人となく
一梅の古木にからすのとまり居
る繪にうたよみける
花ちりし跡にも梅のみのならば

寸から寸からんすからすとなく
一柳にからすのゑに
色黑く見なりはふさの鳥なれど
ほそきこゝろは青柳のいと
なにゆへにみを黑染の山がらす
柳にやらせあたらうき世に
一つばきに水仙と梅の立花に
つばき〳〵盃なりにひらいたら
さけをすいせん梅のはなのみ
一しゆてんどうじといふつばき
をたち入て
ちご若衆てんどうしろの戀しきに
つら〳〵つばきつく〳〵と見る
一りうきうつゝじによるといふ
事をよめとあれば
花のかほ色もうつくしりうきうの
つゝじと人のおもひしろかな
一初春のゆきのあしたある人の
もとへ行給ひけるにつねのう
ためづらしからず廻文うたよ

めとありければ
白雪はふけもつやらんやはさむき
はやむらや野もけふはきゆらじ
一あふぎに夕がほの繪に
忍びてもそれとや白きさし扇
これみつらめとゆふがほのはな
一笹におみなへしかるかやおば
なはぎに小とり書たる繪に
此鳥もさゝの一夜をかるかやと
まねくおばなのはぎおみなへし
一竹にすゝめの繪に
ちやせんやこりや笹に留れる雀殿
百になんどもおどりわすれす
一なすなりのちや入によみ給ひ
しとなり
なれ茄子なれ〳〵なすび茶入にも
ならずばこれのかけものとなれ
一びじん草しらん芍藥によめる
音にきく誰ともしらんびじんさう
花めづらしやさけのしやくやく

一むばらをゑにかきてうたよめ
とありければ
若き時こひをむばらとおぼしめせ
うばふは今も花をやり候
一芝のみたといふ所にてよみける
見たよ〳〵あらみたよ見たさぎ鳥
おもしろひぞのおもくろいぞの
一八月十五夜の月をなるほど大
きによめとあれば
雲を帯風のふくろをきんちやくに
月の三五のたまをおさめに
一月夜をよめる
かつら男はなや引らん世の人の
名たてがましき月のかけごと
一さ月ころよりうちつゞきあめ
ふりて八月十四夜までふりけ
るが十五夜に至り雨はれければ
雨こよひふらぬ一夜のなさけゆへ
月を池生の圓座かと見る

一ふじをたてによめとあれば
雲の帯かの子のこそでゆきながに
たてをするがのふじの山かは
尾もしろしかしらもしろし鷄の
ひよこがふじは時しらぬ山
一九月十三夜の月に琴引ける人
のもとにてよめる
ねにたてゝひくことのをの十三夜
月もてれてんてとんてんてと
一女とみればおとこなりけりな
らひらのおもかげはむかしお
とこなれば今みることはさら
になし當世はやりし源左衛門
おもしろのかいだうくだりや
なにとかたるとつきせじとお
もへばうたによみてかきつけ
ける
又と世に有ものでない過去未來
源左衛門がまいのなりふり

一大こくとほていのくび引する
所の繪に
大こくとほていのくびのちから引
ふんはぢかつて見せんみまひな・
一かみなりの繪に
おのがうつ太皷のばちや當りけん
づてんどうともおちてなるかみ
一いぬのたがそでをくわへける
所ゑにかきうたよめとあれば
かほりぬるにほひも深したが袖と
ひけども君にいぬのつらにく
一うしを野にはなちねむれる所
をゑにかきて
くるはずと涎をたれてねにふせよ
うしみつすぐるよのふけぬまに
一猩々のゑに
つの國の難波入江のみだれあしの
よの一ふしをうたふさかもり
一ある人にふようをやくそくし
けるにわすれてとりにつかは
し侍らざりければあなたより
もたせてまいらするそのかわ
りにうたよみておこせよとあ
りければせつなふおかしふて
かくなむ
第一の名も分明の使者のみる
芙蓉殿上中間そへて
一ある人ふようを繪に書て薬な
ごるり色にさいしきて歌かき
てくれよとありければ
おばら木や小歌に似たる花の名ぞ
あらよひふようるりやうふよう
一ある人さうしあらひを繪にか
きて歌よめといひければ
人の歌とすみ黒ぬしにかきなせど
水に小町やはぢすゝぐらん
一ある人竹を繪にかきてすゞめ
のくいあふ所を繪にうつして
うたよめとあり
うへしたのくらい爭ふすゞめ子は
竹のふしくれいさかいぞする
一ある人照君の馬上にてびわを
引所をみな人わかれをおしみ
てなくていを繪にかきてうた
よめといふ
びわのおとはらりとおつる涙かな
馬じやといひてとうもとゞめよ
一ある人かさをとられた川風に
といふ小歌をゑにかきて前書
してうたよめとありければ石
川のこまうごに帯をとられた
と云催馬樂のうたなり數珠け
さぶくろを女良にとられたさ
云山ざきくだりのうたなりこ
れはそれにはあらでこよひ三
條の橋にねてかさをとられた
川風にといふこゝろをゑにか
きてうたよめとありければ
川風にかさをとられた一條か
二條かまこと三條のはし

一ある人竹林に七賢を繪にかきてその竹にすゞめのとまりたる所をうたよめとありければ

かしこきがすみぬる竹の林をばはかにすゞめがなか〳〵となく

一ある人つぼの口をきりたるなり極詰にて侍るまゝのみてみよとて給はり歌によみておこせかしと侍りければ

給はりし口切つぼの極詰に案のはゞきやうどの重上

一ある人こゝろやすきものかるたにすきてなぐさみにうちけるをとかくばくちわざはなぐさみにもいらぬことゝたわふれ事にもしかりければことゝもせずしてかへつてわれにつくし人にしる人有みけかるたを所望してくれよといひおこせければさたのかぎりを申侍るとてたわむれにもしかりてよみてつかはしける

ばくち業うつけたりげに又ほうけみけかるたとはこれを申さむ

一ある人宗阿彌かけるゆいまこじを見せ侍りければ高直成とて返し給ふが歌よみておこせ侍ける

寫し繪は見事にもあらずその代のそうはすまじき物にぞありける

かへし

わたくしもそうは見事に思はねどさきよりねをばたかくゆいます

一やくしだうのうらに新道いできにけるをみて

本道も外科も療治はなりやるまいやくしのしりにてうのできたは

さる人のもとにてついふのかうばこを所望して侍りけるをうたよめと引とゞめければ

かうばこのふた〳〵歸る人を止てつい一しゆのうたをよみける

一おばらき九郎右衞門と申ものわづらひて死にければ

をはらきや九郎右か詑や果られたてうりやうふりよに兵粮をとる

一そうでんといへるさとう去方にてきんちやくをおとしけるをていしゆひろいて卜養にうたよゑするよまずばかへすまじとあればそうでんひたすらたのみける

巾着をおとすなといふはやりことそうではないか宗傳ではないか

一珍客をうけてさんぼうにさかづきすへてもち出ければ客方御はじめあれとていしゆよりもさま〳〵じきのありけるをわきよりうたよみたらば客に

御はじめあれといはれて
盃のさすてひくてに歌よめと
これぞまことにむたいさんぼう
一ある方にてたばこのはいをこ
ぼしければくわたいにうたよ
めといはれて
お座敷をこ灰になせしくわたいさて
たゝみつけたる歌の御所望
一久保どのかたへおの〳〵より
合けるに新左衞門とめつまの
すけといへる小人もありける
に新左衞門しら地のあふぎに
うたよみ給へといひければい
なびしけるをむりにしよもう
しられて
いちやならて咎をあふぎの骨を折
そのよな事はおれはしらじな
とよみけるを新左衞門あふぎ
にかきけるをみて
この君の筆にツばじ久保どの丶
おいへりうさへもんていとなる
とてもの事に三人の少人をた
ていれよめといわれて
雲をもとめ空をしかくる龍さへも
むすぶちぎりのつまはありなむ
一大雪のふりけるあした
ふりなりは花にもまさるお雪さま
とけな心はてんとつめたや
一だるまの絵に
口の端(はた)にむさくさ〳〵とけが生(はへ)て
そゝぼだいとやこれをいふべき
一いせおどりのはやりければ
我君をこゝで松崎いせおどり
そこらでしめろまかせはら帶

發句

似てにぬは綸にかくふじの雪と墨
一正月の二つありける年に
玉くじけふた正月やあけの春
一かんざんじつとくの絵に
かん寒ししつとくゝめるあした哉
一すいせんの花に
きんさんやきんだいの酒を水仙花
一梅とつばきをいけたるを
やり梅をこたちの椿(本ノマヽ崇出)うけとめて
花の命をいけてこそみめ

狂歌鳩杖集序

先師由縁翁嘗撰其師玉雲翁所著之鳩杖集々中題貴介公子之名者多矣故有所諱而難上木乃藏諸帳中久矣翁之晩年使予校焉予不才淺陋加以疎懶雖承師命不果者二十年于玆也今年甲戌夏丙申予喪男情之所鍾慟哭泣血殆將絕矣聊欲遣悲而校此集除其貴介公子之名而代以或字不數月校成矣是悲之所以致也成則予喜甚喜則向之所悲俛仰之間以爲陣迹矣附錄二卷亦師命也其一二所取捨者因予好尙己寶曆四年甲戌秋八月望於先師像前謹撰

秋園齋米都紀豐

序

韓子の古意の詩張氏か遊僊の文ともに狂なるものなめりこゝに秋園のあるじ難波の由縁齋を師とし狂歌を學び近國に名あり故をもてかの翁在世の時選集のかたらひ人となして草稿をあたへられぬ其稿を見るに由縁齋の師男山玉雲翁の狂歌一百五十首及由縁齋の詠當時の歌ともに梓にちりはめんとす其校合の趣を閲するに親に孝師に敬子に愛友に信くはしくそなはれりもとも風致はさらなり予忘年の交あるにより筆をそへよかしとせちにそゝのかされさそふ水にいなふねのいなみかたくてかひ〳〵しからぬ棹の雫を楮上にそゝぐとしかいふ

甲戌居諸

尾濃吾友堂反愚序

四海波静に風枝をならさぬ時なれや四十あまりの男山厄神参りとて難波の里をあしとく立いて葛葉橋本を越て石清水八幡宮を拜し奉り蘇民將來の守をいたゝき小弓も袋に治る御代とて貴賤群集の袖を連ね祈る壽命は五百八十年七曲を下りて暮に及へは麓の里に舎りもとめて宿のあるしにあたりの名所まてたつね問ふに女郎花の一時をくねるといふより歌はなしになりて那智八十高野六十八幡にはけふ四十三我らしろやくとよみたまふこの山の法印も今はむかしまつかうと笑を催し旅のつかれをわすれ齢のふる心地すれば猶も覺しほとの狂歌を語れといふて物に書付一冊となし老を慰む便あれば鳩の杖と名付ることにこそ

干時享保十四年つちのとのとりむつき十日あまり九のかの日

永田山城掾言因序

米都云此集あめる時は言因とも良因ともいふて由緣齋の號有べからず然れども此集老後までも板に行はれずして八十ばかりの年予にあたへられたれば由緣齋撰とし侍る事難なかるべきか

狂歌鳩杖集

由緣齋撰
門人 秋園米都校
豐藏坊信海法印述

放生會の供奉あまた有けるを見て

お供には罷出たるものおほく
放生會こそ八幡大名

御朱印頂戴し奉りて

土器のさしもかはらぬ御朱印を
いたゞき祝ふよろ萬代々

御暇拜領のとき

むさし野の月に名殘のをしかなく
山へかへろふ嬉しさも何

兩國橋の波に横をれるやうに見えければ

空晴て雲あらざるになんの扨
兩國ばしの波に寝すがた

すみた川にて
おもふ人なくても戀し都鳥
われらもむかし男山僧
東叡山を拜して
人間の種ならぬ花の盛りには
雪のうへ野のこゝちこそすれ
なごて扨雲のうへ野の御目見えを
眞如平等の臺ならずば
鳩の目にれうそく錚ご拜かな
しくわんの座主ご聞につけては
醍醐僧正より南天たまはりし
御禮に
移し植て見るぞ嬉しき醍醐より
南天竺のみのり得てきて
雁の繪に
昔〳〵蘇もしが文をことづかり
かりの使の名にやたつらん
太公望の釣する繪に
いとながくみさをを守る太公望
魚つるよして文様ぞつる

子をあまた愛する麝香の爲に
子をあまた持た麝香の母をこそ
匂ひぶくろといふにやあるらん
歌舞妓子の女がたする繪に
女郎花の花かご見ればさはなくて
是やうらゝの男お山じや
六十の春
手習の道にかなへご我こゝし
筆こゝろむる六十のはる
歯のいたみぬる頃
いつ花の咲こともなき木坊主は
春のさむさにはをいたむかな
歸雁
雁かへる常世の國子いかならん
花はいづこもおなじはるの日
上巳
我むねはけふはなやきぞ若草の
餅もこもれり酒もこもれり
三月盡
あすよりは襟薄くなるしあはせや

今宵つきたる金綾のはる
端午
美しきあやめのまへの小袖より
眞菰かぶつた粽目につく
東寺の瓜を貰ひて
くふかひの有し東寺の眞桑瓜
ひみつのやうな法の味ひ
初秋
慰に今朝ひろけたるふみ月は
見ぬ世の人の來る盆の前
七夕
わかきよりとしに一度の星合は
養生ふかきあまの川かな
名月に雨ふりければ
空にたつ名のみはかりの月見にて
あさなきものは重箱のいも
俄に客を得てしめち一種にて
もてなすごて
さしも草きふのお出に世話やきて
しめちかはらのいたき振まひ

日待の夜平家にきゝあきて
我こゝろ壽永の比のむかしにて
かたる平家にあきかせぞ立

重陽
千代ませやちよませ垣の菊の酒を
いはひいはふてむいたくり言

洪水の後九月十三夜に
水損にあふそらまめの月なれば
かはかこはいと人はいふなり

埋火
人とはぬ道は落葉に埋火の
あたりほとりの冬ぞさびしき

歳暮
何としてかしこ過たる我身ぞや
とめるはまれな年々のくれ

玉井慶把盆山を秘藏して歌よめとありければ
盆山を秘藏したまひけるほどに
けいはくなからほめ申なり

阿州ちいさかた傳内在山の時海松とこぶのりをおくるとて
無事なりと聞てよろこぶのりなればみるとそのまゝ奉りぬるとよみこしけるかへし
在所よりはるばるはこぶのりを扨
こゝろみるこそ珍らしやのふ

雲州松江へ例年霜月春傳といふ使僧つかはすとて
旦那衆にしゆんて春傳しゆんてきた
梅漬に使僧出雲下りそ

東寺羅生門の茶屋の平左衞門狂歌望しに
羅生門の門わきにすむ茶屋の名を
平左衞門といふはことわり

北村季吟新玉津嶋の屋敷へうつりしといひこされしに
みがきあてゝ光りましたる玉津嶋
あしかないやらこゝへとひ來す

季吟返し
たまつしま女神にてましませば
男やまへは耻てまゐらぬ

明石人丸の緣起に火災をのかるゝとありときゝて
よその煙かきのもとまで立添と
ひとまるなればそれはさもそふ

又風波の難をのかるゝとあれば
船をしぞおもふとよみし神なれば
そこなひまさし和歌の浦かせ

去御方にてもろこし團子たまはりて八幡山にもあるかと御たづね有しに有候へども齒きれかやうにはと申上て
男山にもろこしはさせと寺領にて
とのめを見ねばはきれいたさぬ

櫻田ある御方より歌にまはりければ
やまとうた言葉の花のさくら田に
人のこゝろの種やしけらむ

また祈念にて歌の腰折直せと

ありければ
加持力て釘のこし折直せとも
大和ことばはつちて御座候
去方登山の時一首とありけれ
ば
石清水いのち長柄のひしやくにて
汲てふしるき神のめくみは
土器町にて人々酒宴ありて歌
よめと有ければ
とりたまふかはらけ町のお客様へ
采女ならねど申たはむれ
ある御方狐川に船かゝりして
文の奥にこゝへこんといひし
もたゞる狐川秘密の宗に能化
あればそと云返し
御懇書にはかされ出てきつね川
さいはひわひや逢てかたらむ
またかさねて迎に船をのぼす
へし大阪へ下れとあるに
大阪へやがてこいとの地黄煎
あまいことばにちよいとのる船
去方へ葡萄と梨子二籠進上申
とて
神佛ふたつのかごのまし〳〵て
ふだうの冥加ありのみの貴美
ある御方の屋敷にて書院のあ
たりに見馴ざる手水鉢に瓢箪
を付られけるに花葉の間より
水をとり出ける有さま目ざま
しう見えければ
洗ふ度にねめり者とやなりひさご
花のつゆ、そふ井出の玉水
猿戸をあけて馬場ありければ
此馬場はあつぱれお馬場候よ
掃除以下までさるとてはさて
其馬場を行て九折なる道あり
そこをのぼるに花も盛と見え
て鞍馬の心地して清少納言が
筆の跡おもひ出られて
馬にくらくらまの山やかくあらん
つゝら折なる坂の花見は
辻堂の一やどり有
ねがはくばこの辻堂に一やどり
二やどりせんはなの下ふし
峰にあかるに花盛と見えて白
砂匂ふありさま大和なる三よ
し野もかくやあらんとおぼえ
ていはむかたなし
むさし野にありとは聞どけふ初に
目のまへにさてみよしのゝ花
以憇亭十景之内
直下庭景
廣庭の景を直下に見わたせば
そのまゝ花をいけい亭かな
隔海遠山
數々のかづさの山はいつの世に
いつれの神のうみへなるらん
往來方梁
往來いきゝものなれや橋のうへ
あまたの人のふみつくしかな

市井民屋
見わたせば民のかまどは賑ひて
天下いちとや是をいふらむ
臨江浮月
此茶屋のかざりものかと望みれば
こやほり出しのかたつきの影
遠寺鐘聲
景にみとれ暮るも知らぬ耳の底に
ふつと入相の寺々のかね
團扇涼風
暑き日にあふぎはすんとさし置て
ひかぬ用心したる涼風
名岳班雪
ともし火にするがの國の富士の雪
書をみる事はまとほなれども
聚遠亭十二景狂歌
高田のほとりによしある山莊
ありけり立よりてみればいと
興あり抹香にふすほりかへり
し法師出合たり問へばある方
の公用のいとまある折から浩
然の惡氣をやしなひ眞如ころ
りと觀座したまふ所と語るこ
のところに十二景有何事ぞ申
せといふによほといなみけれ
ど袖をひかへて麻の衣のあさ
からずすゝむればえも得しれ
ぬ狂歌をしるし置侍る
露伴曰惡氣ハ根氣ノ誤カ
高田神廟
きればかたしあふけば高田神廟は
そこつな口でほめられもせず
擔間士嶺
ふじの山爰をさること遠からず
そつとのき端のはなのさきかな
鶉野孤松
くは〳〵くはひと廣き鶉の類なき
ながめにふけるひとつ松かな
白根積雪
降積つて山姥となれると白根なる雪は
ほしか〳〵綿ぼうしかも
板橋行客
板ばしに駒の音していたる客
ちりうく梅の香をとめてこそ
千里青田
千里續くと小田の原のおだやかで
麒麟もとらもすみぬへらなり
萬戶炊烟
大賑ひめでたく〳〵しゆふ煙
なにはの景に立まさりけり
關口飛泉
此流水鷄の性や關口を
窄ねながらにとひいづみかな
長谷晩鐘
聞人をすくはんとてや大和より
爰に入相のはせの觀〳〵
前池白鷺
目の前に般若のむかし浮む哉
此白鷺池のなみのうへには
東山秋月

大千の世界の雲はひがし山
出た月影のいつかい者じやのふ

西岡紅樹

にし岡は秋の時得てわかかたさ
いろもましたる木々の紅葉ば

江戸着の日吉方より野郎をた
まはりしに

此ところ一見せばやとぞんじつゝ
下りつゞみの僧にてさふらふ

江戸を立に此ほどの名殘惜き
といふに

おともせていつそいはしや水鳥の
おもひ羽〳〵名殘をし〳〵

江戸を立にうちつゝきいそか
しく駕籠にてつよくねぶりて

寢ていひきかきくらしたる乘物の
ゆりわかとのもとの身やわれ

鈴の森八幡宮を拜して

鈴の森ふりさけみれば鷹を化し
たまひ　神のあとぞありける

鎌倉の道も草ふかく見えけれ
ば

硎人もなきかまくらはさび果て
草のみふかき里とあれぬる

小田原にて外郎くれける人歌
よめと有に

口中を匂はせた歌は世の中を
ういろう僧のなくさみやこれ

坂の上を乘物にて行とて

歌人とはのりものかきも思ひしれ
坂の上まで駕籠にこれのり

さいの河原といふところにて

堂もありさいの河原に石もあり
なき人やうつ淨土双六

さつた山の下親しらずといふ
所より海上を見て

うみの儘に妻を去たのやまめかも
親しらずなるなかのこゝろは

三保の松原に雨降を見て

天人の雲いうちよりあまくだり
まするとみほの松の羽ごろも

富士

行へしらぬ時しらぬとて白雪を
ひつかふりふるふじのいたゝき

三國の山の中でも富士は伽羅じや
あの空燒の煙見るにも

ゆき折のふじの大たけ筒にして
殘らずいけてみよしのゝ花

ふじはこれ雪の白ゆふかけまくも
ふとしきたつた天のみはしら

年を經て詠するかの富士の雪
きえすやきえぬ命なりけり

君が徳の篤きに歸して不盡の根の
ゆきも打とけてはるをしるかな

うつくしきふじのお山にほの字哉
ゆきの肌のしほしりの形

いつの世に染色の山となりやせん
もとのしら地かまし富士の雪

うごかねば實も君子のとく〳〵し
くりに黑まぬ雪のふじの根

なりて扨見たや空吹風の手に
なでゝよふじのふきのはだへを
先それじや富士の高根は帆を上て
雲の浪ゆく天のつりふね
不二の山それしら雪の鹽瀬にて
日本第一の土饅頭かな
日あたりの暹き故にやふじの根は
ときわにゆきの不老門前
霞ひくふじのたかねはあふみより
爰にはぬつとてするほうかな
谷の神あれにますかと白雪の
不老不思議の不二の山かな
花の盛りくまなきは空ごとで
眞白妙なはふじとしら雪
地からいつうみたりけりと白雪の
おすにおされぬふじのねぶとは
春霞ひきやるはよいかふじかくす
くもと雲とのやれ手をとるな
宇津の山にて
つた楓いとゞしけるはむかしにて
百騎二百騎うつのやまみち
夫婦石を見て
斯ならばかう祉あらめかたくと
契りも朽ぬ女夫石かな
佐やの中山にて烏帽子餅かふ
人を見て
見るからにとんで馬より左りをり
買ふてかぶつたゑぼしあめ哉
東海道の名物を神祇釋教戀無
常述懐祝言によせて狂歌よめ
と有に
ひだるさよの中山にかぶるゑぼし飴
其味ひはあまつこやねぎ
灌頂をうつの山邊の十團子
みな水晶の珠數とこそ見れ
いろふかく思ひ染飯そめかねて
戀の淵瀬のさわぎたつなみ
もとするゑの草津の露と消た身は
三途川原の姥がもちくち
生れ性のあしきや世話をやき米の
身は糠俵いひがひもなし
この里はいつも正月にしさかな
雑煮と祝ふわらびもちかな
袋井て春雨にあふて
桐油合羽ひつぱる雨の駕籠の内は
はん袋井のこゝちこそすれ
篠原といふ所にて同宿の合羽
破れければ
風にさて篠原の合羽破れしかば
手づからとつてみつもりにせよ
かぶりの里にて
馬の沓あたらしきとてかつぐなよ
こゝはかふりの里のわたりぞ
舞坂を通るとて
あめのふることはあらゐの空晴て
ふねにのるにもよい仕舞さか
吉田といふところにて京の人
に逢て
のりものゝよしだ通れば窓よりも
顔つん出して逢てうれしや

岡崎へ越んといふにみな疲れ
けれは
今宵さてこえぬることは岡崎や
まげてひち川に枕さだめん
桑名に着ければ
むづかしき山川海をこえて來て
もはや桑名ややがてみやこ路
鈴鹿にて
さつ〳〵とふる村雨の音きけば
是ぞ神樂のすゞか山なる
梅の木の茶屋にて
寒苦を經はるにあふみの清香を
發する梅の木の藥うり
粟津が原にて義仲の舊跡を見
て
馬上より落こちの土となりたやら
ふか田の畦に生るよしなか
走井にて
わづらふものめばその儘達者にて
尻をからげてはしりゐの水

常盤美豆野にて
五月雨のときはひとつに浪よせて
なべて水野といふべかりけり
我住山を見て嬉しさに
道遠く羽ね弱き身はとぶに倦んて
やう〳〵歸る鳩の峯哉
かへりみれば花はちりめん長羽織
かせの手をふる伊達男山
道中八日に歸山して
ひげまんをするとはなしに男山
七日いそいて八日にすらり
一とせに三度下向の折に
東路を機へるやうに往來して
いつか錦をきて歸らまし
御祈禱の御札納めて如律令
いはふて三度急々の急
ある御方山庄に通夜有ければ
萩の花餅上るとて
折を見て奉りぬるはぎの花
めし上られよこもち月夜に

松にとまる鳩の繪に
松たかき枝にとまれる鳩の繪も
かみにあゆみをはこふ筆かな
芹に盤の繪の讃に
人は知らず御幸もしらず芹川の
せりぞむかしの盤に逢けり
琴の音に峰のまつかせ通ふら
しといふうたのこゝろをかき
しるゐに
ことの音に松風かよふうつし繪は
おとも香もなきいたり物かな
仙人の瓢簞より手を出す繪に
仙人の道せばからぬ大ふくべ
うしの車のわがものにして
小蝶牡丹猫のゑに
とぶ蝶をねらふこゝろのふかみ草
ねこかとみればそら寢いりかな
竹に雀の繪に
笛竹のさかりはにゐるむら雀
みれば踊つはねをならしつ

鹽竈をゑがきたる扇に
河原ならで扇の地にもうつす哉
ひらけば手にもちかの鹽がま
四十から紅葉にとまりたるゑ
に
四十からもみぢの露にぬれそめて
世にいろどりの名にや立らん
片岡の森の繪に
ほとゝぎすなくかた岡の森でさて
聲するほどにうつす寫し繪
寄碁盤戀
逢事はかたき碁いしの戀ゆゑに
目をしろ黑としてうちもねず
寄硯箱戀
あふことは終に梨子地の硯箱の
ふたりが中に水やさしけむ
寄門戀
ねやまてはおもひもよらず門口に
うき名とゝもに立くらすかな
玉章形の莨宕入に戀の歌よめ
と有ければ
戀しさをかく玉章のたばこ入
むねのけぶりをつゝむなりけり
牡丹と丸柿とを贈りて歌をそ
へければ
花やかなその言のはのふかみ草
ひとまる柿のもとのみやぎみ
水入の米のつけばくだくると
聞て
水をいたみ米うつ杵の己れのみ
くだけて物をおもふころかな
名月曇
くらきより黑きくもにぞ入にける
つゆほどてらせ芋の葉のつき
氷川明神へまゐりけるに別當
煎茶をくれて狂歌せよといふ
に
所から咽びかはつく苦しみは
のまずんばさて何とせんじ茶
かはらけ町金地院にて花は散
過ぬつゝし松が枝に狂歌奉れ
と有ければ
花の錦まいてもつゝし松がえの
みどりのいろは紺地印金
氣の毒なる折から頭を撫て
百八のぼんの窪まで兀にけり
なごすり切しあはれ珠數のみ
へちまの皮のだん袋と人のい
ひしを聞て
心にはへちまの皮をたやすなよ
うき世の垢をおとさんがため
風呂よりあがりて心よしとい
ふ人に
身の垢をおとしたれとも心よしと
強くおもへばしうちやくろふゑ
三教一致堂建し人歌よめと有
に
三つの教ひとつのむねに落かねて
のどにつまつた釋李孔かな
戊辰九月俄にわづらひて心地

死べかりければ
やがて〳〵香の花のとくうしられ
さてかのきしへいたりものかも

護摩堂より比叡をながめて
此春ははたちばかりも若くなる
ふじの高ねと日枝をながめて

長日の御祈禱勤るとて
われはたゞ八幡こはうの太煮にて
朝夕こまにあへられぞする
何事もまんろくしてふ護摩なれば
四海にさはる浪かせもなし

史稱優栴之滑稽合於大道者秦皇之暴不可以正諫惟滑稽戲謔却感主則史稱合於大道者其不然乎狂歌者和歌者流之滑稽戲謔者也然世人不知其風辭有法則惟戲謔鄙俚以爲狂歌亦妄哉米都刻信海集欲令人知其法則者也苟無法則者豈有感人乎和歌者流之滑稽戲謔豈無有風諫其若得世妄者哉有焉若然則彼滑稽合於大道者亦惟在此集乎米都刻此集不亦善乎

丁丑秋七月　　閑弘題

附言

此集編る事予かことき才なき身に應せぬ業ながら先師由緣齋の遺命あればなりそのおもむき序文にことわり侍れども猶先師直筆の來書を寫し跋に置て證となし侍る

此集の歌の中にあるひは文字のちかひ又はてにをはのかはりもいささか有て作者の意にたがふ事もあらむか是は人傳にもきゝまたは傳寫のまゝに書のせ侍ればなりもしその事あらはゆるしたまふへし愚詠のつたなきも年ごろのすきものなれは見ゆるしたまはれとしかいふ

秋園米都於松竹齋謹識

追啓爰元は本屋に仲間候て諸事板行申儀あなたこなた斷申つらし事六ヶ敷候て此鳩杖板行數年延引に罷成候何とぞ其元にて板行被遊ましく候哉左候て鳩杖一冊に被成今一冊其元御連中御歌にわれらなと被書加板行被成候はゞ可爲本望候

正月十七日　由緣齋

信乘

鈴木金左樣

御机下

此鳩杖集は由緣齋貞柳翁世にいまそかりし時門人多か中に國を隔し予か父へ梓にしてよと文添ておくらるされど自序にいへるごとく集中に憚る事の多くて心ならず四十年餘を經ぬさても師の命重ければ十とせこのかた梓にせん事を起臥に忘るゝ事なく今この歌を校合するに七そちの齡ことに中風をうれひ氣力薄うしてはか行す辛して安永九つのとし子の文月に十のもの九つは事なりぬとよろこひしにまたも病に染て一日〳〵にたのみすくなく成ぬ今はの際に此書寫の事を一紙にしたゝめ取分親き門人へ付しいさゝかかけたるは及すなから予におきなふべきよし遺言して終に黃泉の客と成ぬかゝれば集中にたかへる事ともの有は予があやまりと見ん人ゆるし給へまた今年貞柳翁の五十回なれば其追福ともなるべければ苔の下の父もさぞよろこびぬらんと予が嬉しさいはん方なしよりてくた〳〵しきことわりを拙き筆してかい付る事になん

天明三つのとし

かのとの卯葉つきのもちの日

靑菓舍都眞

家つと

男山のむかしを思ひ出て油煙齋貞柳一たび玉雲翁信海の門に入言葉をつゞりの袖の字内（ホノマヽ）をおほふはたはり折にふれてかつおかし好める所の姿かん代の夷歌といふにもあらず亦俳諧にもことなり彼ならの葉の名におふ集に酒壺になり見てしかなといひ拾遺におゐては我ぞ淨土のあるじとよめるたぐひにして狂歌は大歌のこゝろ即南華老人狂言といふ此類ひなり狂は大也大は俳のこゝろにかよふ物掟を守らず我心を逍遙し錫を飛して風塵を出るいきおひならん油煙齋此道にふかくして行風の口すさみのあともしごろなると保友が根なし艸のかろ〴〵しきともに吟じ味ひしりてたゞ玉雲の風に任せて其さまの似し事をいはゞ寒食の家に折得たる躑躅もつゐにそのわかちを見るべし誰梅の花散りまがふ里の淡雪のわくともわかぬさまくらふの山はなもみぢいづれに勝劣ありとも見えずさあれども自ら忘れて物にあらそふ事なし見るもの聞ものにつきて浦の汐貝拾ひ集めし玉の數々を露ばかり水莖に書流し外へは出さじと思ひいれし作者の心ばへなれば家づとと名付て斷を加はふる事しかり

淵田不戚序

家土産

油煙齋貞柳

歳旦

蜜柑かうじ摘にけらしも蓬萊の
山のかいより見ゆるさかづき

百人一首にどうありても元日の
あかつきばかりよきものはなし

三十一になりける歳

みそじ餘り一つの春になりに鬼
まもらせたまへいつも八重垣

春たつといふばかりにや茶臼山
今朝はかすみのひきまはしけり

甲子の歳

門に立る松の木の枝に吹風は
あらおもしろの琴のねのとし

丙午の歳

年の名も神にねかひの繪馬なれば
たれも皆令滿足（かいりやうまんぞく）のはる

酉の歳
禮に來て御慶といへば御慶と答ふ
さては鸚鵡のとりのとしかな
大ふくや一富士釜に鷹のつめ
三に茄子の茶入めでたや
ごさくさとこゝろ節季の蓬生も
あくるあさとて民もすぐなる
蜜柑かうじだい〳〵所の名主ぞと
ひげくひそらしちといせいゑび
享保十二
享保も十二の手箱かけぬれば
蒔繪に見ゆるかごの松竹
明るよりめでたき物のかほり來て
手前よくなるやどの大ふく
歯朶の葉は波かあらぬか橘の
梢によする海老のそほふね
瑠璃壺の百首とやらんに梅の
湯のすきものならば花も見ん
菓の種をわりてすつるな此歌
により茶人は陰陽暦とて元朝
大ふくに祝ふと聞て
あつうして水をば梅の色よ香よ
陰陽湯としるひとぞしる
甲午のとし
今年より馬にくらまの御利生にて
老木の枝に花もみもなる
八幡瀧本坊に賜はりし午房を
ひげをとりてにるとて
初はるは目出たき本のごう様
おひげのちりをとりもこそすれ
十日戎參りの人を見て
商人の欲にこゝろや亂るらん
戎まゐりの笹かたけゆく
梅
はつせ山小池の寺中より貫之
の梅三枝給り歌をとありけれ
ば
梅はいかゞ思ふもしらず御懇意は
初瀬山々香ににほひけり
八間梅さても其のち石薬師
淨瑠璃世界の花かとぞ見る
梅か枝におきぬる露の玉造
瑠璃光によつと枝ぞのびぬる
鶯
冬もよし春きくもよしうぐひすの
ほうほけきやうは勝劣ぞなき
佛の別れに
涅槃會の時をかんじて餅花も
なみだの玉のあられとぞなる
花
西方に淨土の春はありといへど
花見て千代もこちやひがし山
賢きもかしこからぬも花に來て
ほしがるものは酒よ肴よ
住吉にて
音にきゝ車返しの花の下は
こゝろにのりて行ぞわづらふ
住吉や車返しの花見とて
そで引つれも人ぞとゞろく
天王寺にて

酒もつよくかほいあかさも公平は
　四天王寺の花の下かげ
　春雨
つく〴〵と春の眺めにあくびしつ
　となりもあられ煎る音ぞしる
　上巳
節供ぞと川瀬にながす盃を
　かたじけなしやさはる岩間は
節供とて祝ふ言葉もとり〴〵の
　もゝさえづりや花にやなぎに
　歸雁
そもじさまと書く玉章に見ゆる哉
　朱雀のの空を歸るかりかね
　藤
松は千代まさいらくとや白藤は
　ねちゑんかうん風にうなづく
　牡丹
傾城と詩には作りし花なれど
　とかくぼたんははくにきはまる
　郭公
昔々きゝに北野のほとゝぎす
　ほぞんかけたか繪馬かけたか
　山崎宗鑑のむかしを思ひ出て
かしましや此里過よほとゝぎす
　とおもふほどに一度きゝたや
　端午
相かはらず軒にあやめをふき自在
　天のめぐみと節供祝ふた
蘆の葉にのりの道こそ悟り得ねど
　拂子に似たるちまきくう〳〵
　新麥を振舞の座にて
麥秋のいつくれそめてこがらしや
　むせぶばかりのひや汁の味
　六月七日大雨ふりければ
祇園會やはやしのかねの七日とて
　しやぎりしきりに雨ぞふりける
　又
通り町川となるほどふるあめの
　こゑを帆にあげて歸る船鉾(ふなほこ)
　住吉御秡
借錢も殘らず夏の拂して
　かねと剋せぬ世には住よし
　はにふの小家に紙帳を釣ける
　を見て
夕立の雨のふる夜もふらぬ夜も
　かみなりさわぐ紙帳わびしき
　七夕
秋立て幾日あらねど朝さむござる（本ノマヽ）
　小袖かさばや七夕の空
歌のさまふつゝかなれば織女に
　手向んことも梶のはもじや
男七夕天海原(あまうなばら)に牛はあれど
　かぢよりぞ行くなみのぬれもの
七夕のすまふとる夜と下帯を
　むかしのすいが手向こそすれ
星さまへ着ならし衣慮外なれど
　しきしのあれば手向もやせん
　大坂の踊りに
三味線のこまをはやむる踊り子は
　松坂越てやつさくるわへ

紅口きやうきて見よかしの踊子は
手拍子もよくあはせびんかな

萩

にしきぞと都の柳さくらには
露もはぢざるみやぎの丶萩

八月十五夜

千金にかへぬ今宵の一輪は
月のかつらの實はへならん

男山にて

さればこそ生るを放つよはなれば
蟻のはふまで見ゆる月かげ

放生川にて

うろくずも浮み出るやにごり江を
いとはですめる月の今宵は

鳳潭和尚由緒ありければ松尾
華嚴寺に一宿し侍りて

月はみついもは揚技にさすが叉
ゆびをまよひと捨られもせず

紅葉　西山にて

歌よまむ身に應せずと商人も
よきゝぬかきの山のよみぢに
紅葉々の名こそ高雄はこさはりや
文覺さまももとはいろから

菊

蔦はふてはいりの門で見る菊は
よばいぼしかとあやまたれぬる

重陽

きのふこそ祇園のほこの菊水を
節句は千代のためしにぞひく

九月十三夜

雨さへふりてかみなり騷く名月は
豆一口にくふばかりかな

禪寺の垣のしりへにて

いかなるか是隱元豆も花のいろは
抹香くさふもこさんせぬのふ

霜月初の頃かみなり雨さへ
降ければ

かみなりも太鼓を打てまはりけり
あめやあらしの顔見せの宵

雪のあした御堂へ參りて

うち出て御堂の家根の雪は富士
まことに田子の御うらさまかな

かみ子の袖ながら得ならぬに
ほひのしければ

千早振紙子の小袖もみうらの
伽羅くれなゐに臭くゝるとは

風はげしき夜雨にぬれて夜番
の町中を廻るをねざめにきゝ
て

火用心の聲あはれなりさよしぐれ
ぬれて夜番のひとり行らん

除夜

獨ねをせぬ夜なりとて鬼は外へ
氣を通してや出て行らん

歳暮

大晦日更行かねを腰につけて
うたふて歸るかけとりの聲
年はごちへ暮行空となかむれば
こよみばかりに月ぞのこれる
わがこゝろなぐさめかねつ大節季

酒の通ひにのる月を見て
借錢をあふのうらなし節季とて
なるもならずもこゝろいそがし
拂ひにもならぬ物からせはしなや
大晦日の入相のかね
瀧本坊より歳暮に午房を下されければ
慮外ながら午房の髭をくひそらし
御禮申このをとこやま

神祇

柹本大明神千年におよぶ御時正一位にならせたまふときゝて
歌の道とくとじゆくしの柹の本
正一位とはむまいせんさく
筑前綱輪の天神の御影津村樂師堂にて開帳の時
菅原やふしみあふきみ心ひく
つなはの御影またいつかさて
神だにも心づくしの旅なれや
ひしきものには綱を輪にして
忌部伊記神書講釋の座にて
ちはやふる紙子の火打いしがねの
傳受をしたやいきのよければ
人丸の社千句連歌の座にて餅出ければ
小豆餅それとも見えず久かたの
あまぎるゆきと見ゆるさとうに
子祭みせし人の許にて大黑の繪に讃の歌をとあるに
一に俵似合ぬ狂歌讃にかく
大黑どのゝのふおかしかろ
住吉にて
詠入てこゝに日ぐらし硯かな
筆すみよしの海づらの景
濱松の音はざゞんざ住よしの
岸より遠のあわち嶋臺
朝夕に見ればこそあれあれ〳〵が
しやむのお歌のあわぢしま山
濱邊にて
住吉やむかふ景色はあく期なし
おもひきれとの阿波戸はるかに
汐干に參りて
にじるのは浦の見るめも苦しけれ
おあしを出してかいもどらばや
吉田にて外宮内宮を拜して
名に高き吉田の里は杖つきの
のゝさまもありお日さまもあり
人丸の繪を拜して
ほの〳〵とあかしや御衣の袖口は
むかしを今にうつし繪かさて

釋教

□□□周忌追善に夏九十日狂歌をよみける
世の中は電光石火に吸付て
たばこのむまの煙とぞなる
法華經を一部はちまきするからは
地獄の鬼もなんだ辨慶

南無おみや豆腐〳〵の聲たてゝ
　みな彼岸へ夜船なりけり
本來の面目か又めんるいか
　小僧が棒をくふを見るにも
あんずれば此世は夢のかりまくら
　草葉の露じや玉でないもの
いろ〳〵の善をもなさば盃前に
　焰魔の帳をけしてたまはれ

　東六條にて
のりの道長く傳えて今こゝに
　御堂さまさて御はんじやうかな

　法然上人說法の座に津戶三郎
　を書たる繪を見て
とくのりにたけき心の鬼もはや
　折たつのどのためしさふらふ

戀

　初戀
こひの道十五六より手習の
　小野のおくへは次第にぞ入る

　宮川町あたりに一宿して
建仁寺祇園あたりを起わかれ
　泪だらにのかねはうらめし

　嵐三郎四郎其外白人など來て
　亂酒になりければ其座をぬけ
　て歸るとて
よしの山峯吹あらしさぶければ
　花を見捨てゝ歸りこそすれ

　寄碓戀
から碓にさとりし人もあるものを
　ふみみて猶もおもひまひらせ候

　寄湯女戀
楊貴妃はさもあらばあれ二ッ月の
　瓜ざねがほの湯女にぬればや

　寄儒者戀
袖の涙ひたる君子となりもせで
　あはぬつらさは日々に新に

　豫州平重郎といへる美少年に
いよすだれ笹の一よのおなさけを
かけてぞたのむひらにひらさま

　寄雙六戀
双六の賽をふり袖めかれずも
　うち見てしのにものおもふ哉

　藤田吉三郎宅にて
ぬれかけてしいておりつる藤の花
　またも類ひはあらじとぞおもふ

　嶋之助といふ美少年に
賤の男のかこさならねどみな人の
　戀の重荷をしまといひけり

　寄紙子戀
手を採ごあべとおしやらは目前で
　死のか紙子のやぶれかぶれに

　薄雲といふ太夫南のほりにて
　白人となりて名をば房といひ
　ければ
春がすみ薄雲の客引かへて
　秋は南に雁のとぶさぞ

　寄刀戀
腰本に手をかくるかとつかの間も
　いもがこゝろにつるぎたへせぬ

寄相撲戀
お屋敷へかゝへられぬる京の色は
ふんどしかゝぬすまふとりかな

忍戀
戀せしといのりても又どうやらは
むかし男もいまのをとこも

無常

無常
世の中の仇なる事をかなていほ（本ノマヽいハウナリ）
いろはにほへとちりぬるをみや

寄双六
双六の財ありとてもつかはすに
死ぬるはむしにあふこゝろかな

哀傷

先師信海法印の石塔を拜して
なきあとの印の石をきればかたし
あふげばいよ〳〵ぬるゝ袖かな

娘を先立て悲ひのあまりかし
らをおろして
花と見し梢を風にさそはれて
ずぼろぼうずになるや木男

法橋昌海追善
月花の定座をあげて待たまへ
ひとつ連歌にわれも生れん

住宅の南隣に朋友死去の時
となりまできたる無常の旅衣
よいつれなれどまづ用が御ざる

慈父二十五周忌に
雁とゝもに別れし春をしたふにも
二十五絃はことさらにこそ

誓願寺のあたり池西言水の石
塔ありと
たづね來て手向に歌をかきつばた
あやめで言水かの此の塚は扨

傳光寺の住持頓死を聞て
さればこそ電光石火ついきえた
朝露に似たる長老はかなや

一家の女中ゆりはつさななを
みん過しむかしをおもひ出て
百合花ちり行秋のはつ風に
さながら夢の世とぞなをみん

狂言師へ追善
極樂へいま參りぞとおもふかな
狂言綺語の上手なる身は
人間のしだい〳〵におとろひて
年賦にかへす五ッのかりもの

先妻母の十三回忌
いろ〳〵の膳部をなして弔はん
はるやむかしの露のしうとめ

いたち堀筒井氏追善
いたち堀に又も出來まい人なりと
おもへば〳〵おしいこと〳〵

娘の十三回忌
さゞれ石の千代に八千代と育しに
卒都婆にこけの娘はかなや

叔父貞富遠忌に
年ふれどいますか如くおちおそれ
腰をかゞむる我は老の身

桑名屋甚兵衛俳名を景寫竹馬より水魚の交あさからざりしに此秋の末獨り西の空に雲と消にし事をしたひて

儒も少し禪をも常に聞た甚(ちん)しなぬ先より萬苦(よろづく)はなや

一子左助を幼少より學問をさするとの樣子を聞て

幼少より學問をさすけふしひは（本ノマヽ）父の道しる人と見えたり

竹淵村何がしの息疱瘡にて五才の夏身まかりしをいたみて

いもの葉のつゆの命は短夜の是は夢かや五つかやさて

近松門左衛門一周忌

さつするに今は安樂國姓爺さてもそのゝち便宜なければ

賀

走帆といふ人有卦に入りの祝儀

戀せしといふにてはなし福德をいのるぞ神もうけはめでたや

松屋といへるかみやへ

岩國のかみのめぐみのかたければ枝葉榮るまつやひさしき

古林杏節老六十の賀

昔たれもゝの種をやうへまちに年ふる林千世もさかへん

述懷

述懷

世の中よ何としやうぎの困りものはるもよしなやすてゝつまらず

稀年の齡になりて

祖父(ぢい)は山へしばしが程に身は老てむかし〳〵の咄戀しき

金銀はあるも猶よしなしとても人間萬　宗桂がこま

相將棊の本にて

將棊にて暮らすはあたら隙の駒つまりはてたる老い命を

耳は遠く死るは近くなりにけり夢さませとやあかつきのかね

商人の心のやみはあかつきのかねがなければ夜があけぬかな

老ぬれば腰にあづさの弓ははれど人ぞよりこぬばんにやしんさや

羇旅

奈良の町墨や數多棟榮ふるを見て

春の日の恵か民のすりきらで奈良はすみよきところとぞしる

淸水にて

ちら〳〵と音羽の櫻ちりつんつてんと三すぢの瀧のしらいと

わかき時より每年放生會に參詣申ければ瀧本坊へいつも御見舞申て

年々にたへずさふたりたへずさふ
瀧本坊の御ねんごろゆへ
鞍馬山開帳に詣けるに九折（つゞらおり）に
て百足を拾ひて
鞍馬山をあちらむかでぞ給ひけり
これぞ毘沙門天のあたへか
箕面（みのお）山に詣し時
瀧の音は一二三（ひいふうみ）のおさん〳〵さん
手まりのやうな玉ぞちりける
箕面山久圓坊むかしより由緒
有ければ類入て父が受領せし
事をおもひ出て
辨天のあたへはありかたいやかな
名にしおふたるみのを山しろ
神無月十日あまり箕面山の紅
葉見にまかりて辨天の御祠へ
まゐりてうしろの山の景色を
ながめて
箕面山さらに錦と見えぬるは
天女いんきんに織たまふかや

岩本法印に一宿し侍りて
起出てまくらの山を今朝見れば
紅錦繡をひつかぶりねた
箕面山鳥井の前栃の木の下に
休て
みのをまゐり草臥ぬれば足引の
栃の本にてやすみこそすれ
勝尾寺へ参詣して
馬はあれどのらで勝尾の寺まゐり
佛をたのむ身じやとおもへば
寺中東坊は由緒ありて幼少の
時度々登山しけるに中絶しけ
れば
老ぬれば西のみねかふ心から
東の坊に遠ざかりぬる
尾崎濱田氏へ師走のすへに行
て
書出しをくばると人やみるめうき
節季に來たる大もつの浦
南部に行とてくらかり峠にて

駕籠かきの心くらがり峠にて
天目酒にまよひぬるかな
歸るさに
日盛はあつき峠のくるしさに
ひるにさがりて風を松坂
八幡山にて逗留し侍りけるに
山本加兵衛歌をと有ければ
なるゝほどあかぬは花の香兵とて
尋まいつたをとこやまもと
有馬にて
有馬山いなといへどもさゝひとつ
あがれ〳〵と湯女が一ふし
上京の折に
夜船にて笘よりのぞく男山
月のおかほのちよつとほの字で

雜

女院御所へ玉露霜と云御菓子
さゝげ奉りし時山城の大掾は
八幡豐後坊門弟にて狂歌よみ

けるよし一首よめと土方隼人
正仰せありければ
万歳と君をいわゐて奉る
菓子もちはこの玉の露霜
土方殿返し
奉るちはこの玉の露しもは
代々にきえせぬ菓子の名物
御堂輪番所へ柚の砂糖漬を進
しければ長安寺新つくり酒に
はあらで砂とうつけ工夫より
出る柚酢の醍醐味となんよみ
て給りければ
内五味(だいごみ)の味ひしらぬ菓子やでは
砂糖のちからたのむ一筋
享保十巳十月なにはの御堂へ
東御門跡御下向の時里村昌築
取次にて奉りける狂歌一首幷
前書のうつし
おほけなき御事を心にかへり
みもわかずかくなんよみて奉
りける
足引の山より高き御恩かな
お痛ながら衆生濟渡に
御前よろしきやうにと昌築へ
申入とて
鱗(うろくず)ももれぬちかひの網なれば
ちよつと御前へまかり出たいや
御盃を項戴して
物の名も所によりて土器(かわらけ)の
御盃ともいひ油づきとも
里村昌築より刻昆布を賜けれ
ば
おたすけをよろこぶ身とて給るや
今度お下向なさるきざみに
黒田月洞軒より嶋絹下さると
て
つの國のなにはの春のはなやかに
伊達をしまぎぬ着てあそべかし
返し
商人によき嶋絹を給りて
歌よみたてをするもはづかし
又ある御文のおくに
たづねきてひろき武藏の野で
つぽうはなして見やれたまり
やせまいにとよみて下されし
返し
鐵炮のたま〳〵江戸に參るとも
いかではなさん町人の身は
知足といふ桑門梅月堂宣阿翁
招請して吉野に花見に行れし
に雨打つゞきふりければ
咲かぬ花にちそくはよしやよし
芳野の花にあめはせんなや
我身七十に及ぶまで何の功も
なくいたづらにあかしくらし
なにはの事もいざしら浪の船
あそびに行て
范蠡とさかさまなれや鯊(はせ)釣に
小船こぎ出て喰ふはれいはん

和州よりたばこをもらひて禮
狀の奥に
かほりさへよし野たばこの夕煙
はなのあたりを立のぼるかな
富士見西行の繪を見て
西行の首にかけたるひらゆだん
富士の煙をつゝみてぞゆく
津守兵部少輔へ御目見へ申時
住吉やおまへの沖にまかり出で
年ふるあまも皺をのしこぶ
ある草庵にて連歌などし侍る
にとなり座敷碁會なりけれ
ば
隣りにて碁をうつせみの聲きゝて
ぬけてもどるは女子らしやな
雲の帶鹿の子の小袖ゆきなが
にとよみし古人の狂歌をおも
ひ出て
年ふればかしらに雪の積りけり
伊達をするがの富士のお山も

香聞に可京より尋ね來りしに
しばしとて袖をひかへて留伽羅の
道をならはで別りやうかとて
清水春流といふ儒者大坂に數
年ありて故郷尾張へ歸るとあ
りて
名殘をしや沅湘日夜咄したに
けふがおはりとしばらくもせず
春流を清水といふは名のみにて
又あふ坂はいつの事やら
服部周雪大坂に逗留中むつま
しく語りけるに江戸へ歸る置
土産とて箔の扇を給りしを捨
ても置れず取出て
觀世殿はあづま路なるを心亂れ
南をはるかにあふぎこそすれ
甲州の人胡鬼の子を持參あり
て歌をとあるに
音にのみ聞胡鬼の子をつく〳〵と
めの正月をけふこそはすれ

ある人の歌に世の中はかりの
世なればかるもよしとよめりけ
りかゝる心ばへを一首よめと
ありければ
世の中は假の世なれどかりにくし
夢の世なれどそうもねられず
南都松井和泉といへる油煙所
の大形の墨上つかたにも御上
覽のよし風聞ありければ
月ならで雲のうへまですみのぼる
これはいかなるゆゑんなるらん
是はいかなるゆゑんなるらん
とよめるうたを京童の風聞さ
まざまあると聞て
わが歌の聞ゑあけぬるゆゑんこそ
墨よしさまのめぐみなるらん
油煙齋と世に謠はるゝころもきぬ
こゝろをすみにそめまほしさよ
七十にあまりて後の油煙齋

彌陀の淨土をすみところとて
南都表具師久しく行さるをう
らみ越しをおもひ出て
表具師をかけて思へど得ゆかぬは
上下の道のりのこはさに
草庵のしつらひ客宿の躰なる
柔門を見て
輕く見て世を捨ばうず柴の戸の
内にはくきのおもしをぞおく
生玉にて曲手まりを見て
鞠はよし若衆ぶりは又わろし
枕は出せどねる事はいや
里村昌築宅へ見廻申ければ折
ふし煤拂なりければ
すゝはきと見請ぬるより口上を
たゝみかさねて申おきぬる
住吉の御社務へ御菓子奉る時
御病氣で年をつもりや住よしの
松のみどりはいく藥菓子
圓成といふ出家の平家を聞て
そうじやその脩々圓成ときく時は
平家も琵琶もたゞ法のこゑ
池西言水南都へ隱居して茶を
たのしむといひこされしに
紹鷗の風をこひ茶の青によし
奈良へ隱居はよい御物ずき
いづもの掾淨留利芝居を見て
梓弓ひくではないが此しばゐ
めつたまとりにあたりこそすれ
儒者のもとへ水菜を籠に入て
おくるとて
まじはりは醴よりも水菜ぞと
まゐらせかごのかごとがましや
田中友安我が狂歌をたれ〳〵
譽ると噂あれば
おもひあふた中なればこそ我歌を
御贔負耳によいとゆうあん
茶湯の相客に眞言宗の僧禪宗
の僧と板やの何がしとまゐるり
あひて
茶や禪や詩や眞言も外ならず
はらはりいたやあいに相客
醫者隱居せしに
身をすてゝよしやみかんのかわ衣
六君子にも交らはぬかも
大坂はなにはいなかにて名所
なしとこゝろなき人のわらひ
ければ
四ツ橋に杜若こそあらずとも
人にみせばやほりの菖蒲を
天王寺下向に岩おこしやに休
て
賴光が岩おこしやに腰をかけ
娘はあれど鬼は見へざる
口口やといへる材木やにて
杣山や筑波の友に庄三どの
きゝおよびたる歌の良材
享保十午の四月牡丹花夢菴居
士二百年忌大仙寺に於て井上
昌覺連歌千句興行の時三愛の

むかしを思ひ出て先師信海法
印の言葉の花を折て手向ると
て我も色香なき言草を加へ侍
る

花

咲しより二十日草とやはつかにも
見ざるむかしの人に手向る

伽羅

聞度に珍しければ二百年の
後も初音の伽羅をこそたけ

酒

都とてしばし池田にすみ酒の
にごらぬ人をたれもくみしる

岡村道有去御方より生鯛を下
されしとて友とする人一人ふ
たりを振舞の座にて

下さるゝ鯛ぞとしるを相伴も
あゝうまあんまはらをなでけり

なだやといふ人の能書にて其
きこへあれば

繪を以て鳴るや響のなだや殿
なだらかにしてよいふでの海

惠南といふ世捨人へふみの奥
に

尋來て御意を得なんと思へども
老のやなぎのいとまもそなき

鷲尾北村氏にて歸るさに

詠捨て名殘そ惜しき庭の雪
つもる鬱氣を春さんしましよ

享保十巳六月十六日去御方に
て御菓子持參申けるに臺を失
念いたしけるにあなたより臺
を賜りて

幾千世といひのべにけり祝ひ歌
臺をたまはる折を得てさて

御輪番所より對類をかりに參
るに付

たいるいは肴のやうな名のみにて
御用だつ身の鮨のなきかな

山形主水といふ醫師の方より
三毛の猫をもらひけるが

ちらと見け戀の山形柏木の
衞もんどのよりもらひこそすれ

可喜一鉢納豆一器歌そへて被
下し折に返歌と申にはあら
で

納豆にかきそへたまふ歌を見て
お禮に口もたゝきこそすれ

鍼師壽かん宅へ口切の茶の湯
に行けるに花生に白玉と寒菊
を生ければ

白玉のたまのお出と花生て
ていしゆは直にさけの寒さく

奈良崎やより献上のすそとて
みぞれ酒たまはりしに

うへうへに上りし富士のみぞれ酒
すそのみてさへ風味よし原

山本氏みずから鮒を燒給りし
に

數々の御禮を申つくされず

ひとつ〳〵に世話をやきふな
竹田千前矢斧にての歌を見て
釜風呂のふかく案してよむ歌は
病もあらず腰をれもなし
鷹が峯より寒菊を得し人の所
望に付
寒菊に淵が心をうつしかへ
古郷へもちて歸去來
寒菊の花も世になる鷹が峯
こかねの鈴とかけておもはん
寒中見舞に玉子を送られし人
の許へ
飲からに冬のさむさもわすられて
春のこゝろをあら玉子酒
夫婦丸に
大坂町中を夫婦つれにてあ
りく賣藥ありよんでめうと
丸といふ
匂ふてふ丁子麝香はいらねとも
したゝるさゝる夫婦丸かな

踞尾村北村氏へ文のおくに
音もつは毎度あちより北村や
つくなふ事もなくてはづかし
高麗橋さめや多介より貝の盃
に名をつけ歌を讀とたのまれ
下戸ならぬこそ拾ふかひある
さかづきを見て
此貝にたぐひあらしなくみてしる
酒も滿干の玉の盃
上林殿北野の神前にて扇をひ
ろひたまふよしその繪に松梅
のありと聞て
あふぎ見れば松梅匂ふ朝日山
次第〳〵に光をぞ增
臥龍竹
音にきく雨とおもひてちと水に
ぬるとも竹を見にいかふめい
見せ物にあまたの象も及ざる
手柄をしぬる臥龍竹かな
漫作

長恨歌日本の白が書ならば
その文月のもん日たのまん
繪にかける愛宕まゐりの女を見て
こゝろひかれた袖をひかれた
象眞行草の吟
享保十四四月長崎より大象
大坂に來る
眞
おしあふは象無類なる見物と
なれもしるにや鼻であしらふ
又や見ん交野をとほる大象の
はなの水ちるなつの明ほの
行
珍らしとはなのあたりに立よるは
夏にさくらのふけんぞうかな
優曇華とおもふ斗に大象の
はな待えたることし嬉しや
草
齒ぬきならで他の國より象ぶ□□
めんよう〳〵鼻でまんぢう

大象の來るは目出度こさしかな
　三十二十四孝みるにも
さてもならまひさつ牝象引つれて
江口の花をのらせてしかな
　酉の夏三條あたりに逗留して
音羽山音も涼しき河水や
波の皷のほん〱さ町
　つくの尾北村氏膈を京にて養
　生して本服の賀に
かくばかり死病さ見ゆる世の中に
本服したは果報つくの尾
　祇園町にて節分をごりを見て
うら盆に節分をごり歡喜して
つさめの鬼も外へありや〱
　題しらず
身躰にかへて樂する人もあり
命にかへて金もつもあり
つゐに行道さはかねてなりひらの
なりひらのさてけもふくらしつ
　書象讃
細い目でふりさけ見ればふる里の
象山さやらに出し月かも

此家土産者浪花油煙齊貞柳翁之所詠也蓋翁之歌也鳩峰玉雲翁之流而壯麗工緻最合于事情者也故適書其吟詠則人擧無不賞翫之焉然其詠章時出一二首而未見簡帙之全備者豈不遺憾乎余素爲之熟友常交接知其編之在因强求之更使金雨軒魚板撰擇之附以古梅園之大墨圖綏繡梓以備好士之高覽云

萬笈堂桑魚誌

于時享保十四巳酉歳蘭月朔

大阪雛屋町

撰者　堺屋四良兵衛

狂歌醉竹集

言ばの海ふかくしてそこひきはまりなきをばたくなはのちひろなはうちはへてよくかづきする人のみぞしるべきたとひこゝらのとし月をつみてあびきしつりするひともこゝろざしふかゝらずばちひさきいろくづをのみとりえて海のさちありとやいふべからんいかでちひろのそこのあこやたまみづから手にとりて見ることをえむしかはあれどさるうなばらに舟うけて網にまれ釣にまれてづからとりいとなみつゝあさりせん人はいとありがたしやいまやうはたゞとほきうらわにたゝずみをり貝やひろはんなのりそやつまんなどいふめりさるはおきつかせみにしむとだにしらずいそうつなみそでにだにかけざればうましをばまのめでたきさかひもいたづらに見てすぎぬるなるべし此巻や小島橋洲大人のふですさみなりけりかのうしなん龍のあぎとの玉いさなの魚もたはやすくとりうべきちからはおはしけるさればあことゝのふるよび聲は大宮のうちにきこえそのながれをくめる人々はいさごの數よりもさはなりかゝればかきつむたまも光うづもれなんことをおもひ濱ちどり跡をだにむなしくせじとて人々たばかりてこたび木にゑりてみをつくし朽せぬ世々につたへんことをねがへ沖つ波しらべのたかゝらんことはそはすみの江の神こそしらせおはすらめといふ

六樹園のあるじ

石川雅望識

筑波山の下風吹傳へて戯歌よまむものゝかぎり常世物此橋のうまし名を慕ひて醉竹先生の此道に富給へるじちに江凌千樹の橘千戸侯とひとしう才は世にぬけいでゝ照潭無底橋洲浮ぶといへるたぐひなるるをしらぬやあるべきうべ橘は菓の長にして人のこのめる所翁は戯歌の聖にして世のあふぐ處なればなりけりされば薫り高きみはしのもとよりはじめてこの石に留る樹もなく色あせぬ兒島の渡りを越てこの翁のさきにたつ人もまたなくなんおはしけるかゝればかの若葉を手づから栽初給ひしより苔むすまでに久しうつもれる言の葉かきつめばてれる長屋の棟にもみちぬべきをもとよりみ心の梢高き人にて霜おかぬ木の實は誰が口にかうましとせんとて王丞相帳下にた

くはふることを笑ひ栗栖野のかきとむるわざをうるさがりてたなだくみのおほたき祭る蜜柑めいてなげやりにのみ過し給ふがまれまれに落ちろぼへるを味ふ人の猶ゆかしがりて渇けるもの丶津をひくがごとくいかで枝をりに得てしがなといふめりさるからこの木蔭ふみて八街にうたへるをしへ子どもが此中の樂しみ何の山の何の戯れにもをさらざなるを餘りに帶をかためて見せじとし給ふはなぞかへりては愚かなるやうになごおのかじ丶の名聞にくらべて戯歌は物ともし給はぬ翁のおもむきをばえしらざりけり春の比よりみ心地そこなひて筆とることもをさ〳〵し給はねばいとゞ花散里とならんことをしがり香をだに袖にとどめまほしうて昔しの人もせしことぞとて家の御集つくるべきことを猶こりずまにそ丶のかしきこゆれどおぼへぬものをと墨染よりげにすげなければ誰もしわびたるに軒端にちかき山文丸家とかや常に唐衣の右ひだりの袖とまつはし給へる人たちの玉にぬき宇受にさすべき料にもとて何がしが野人にわかつにたへずといひけんやうに珍重してかねてものしおけるをともに盒よりとり出つ猶伊勢尾張にもしる人のたより音信て四五百首に成ぬるを玉の林の片枝ながらとてもて出て見せ參らすれば董氏がまぼろしの傳にとりよせけむよりも今少しふ思儀なるわざかなといたづきの枕もたげて試に摘ていまだ酸しなどうち誦しながらことしの霜を待つけぬべき身のたのもしさにもあらねばとてしかすがにみ心よはきかたもまじりて後のかたみともおぼしゆるしけむとし頃の書贊の和歌俳諧詩諺歌といへるものをさへくはへんとし給ふなりけりこはやごとなきおまへより古き諺どもを題にて和歌參らすべきよしおほせごと有けるに參られ給ければめづらしうあかずおぼゆるとてまた五十の諺うためしけるにこのたびは霧のやどりのおぼつかなきほどながらかしこきおほせごとをひかりにとてその夕つかたより夜なかゞほどによみはて丶奉れ給へりとかか丶ることはいみじき歌仙といふともいとかたかべいわざなるをげに此かたの達者にはおはしけりかれこれ四種をふたまきとしてすなはち醉竹集と名づく此集や洞庭の春色うまく釀しつれば實さへ花さへその俳諧さへましてし

もざまにさしひろごれる戯歌の小枝をさへに常葉の調べよくとゝのひて世の苦桃うくるしれ人には中中かたぶかれもしつべくなんかうめでたき集の出來ることを返〱よろこび申けるついでさおもはゞこれが序かきてよとあるに寒き國にうつしうゑけん物そこなひにこそとわびぬればいなもとめにつきては紀の國ならぬも味諌軒と名づけしこちけいの叟は有けるぞかしさざれごとし給ひしも時鳥のさつきまつ頃にてや侍りけん例のまたせそと掟けれどおのれもあやめの枕露おもきほどにて心にはかけながらいとゞ長き根の引しらふうちに井にうつせるみ藥のしるしもなく此初夜の星散て非時の香ぐはしき名のみをとゞめ給ひぬときくにあさましとはおほかたのことにて常世邊にいきし使の期におくれて歸り來けむ悔しさぞまづ思ひやらるゝさはれうけがひつることをだゞにやはとて筆とるにも八竿八蔓のくりことのみ荷ひ出られてつつまやかにも書とられぬやみぼけは何のやくなしや

狂歌堂　四方眞顔しるす

醉竹集目錄

狂歌

四季　二百三十一首

戀　四十六首

雜　百三十二首

附錄

諺和歌　百首

誹諧躰擬歌　三十五首

畵讃和歌　十五首

狂歌醉竹集上

春の部

試筆

春ぎぬとけさはよめたり窓の梅
　はじめてひらく雪の封〆

名所立春

春やまづたつ武藏野の八百里
　千里の駒が原もかすみて

元日

やまの山つとめきて袂より
　いだすは千代の初日なりけり

百人一首のふるきもてあらた
　まのはるのことくさとして

けふ春になりひらあそん千早振
　神代のまねをしめかざりして

先ひらく伊勢の太夫が初暦
　けふ九重も花の吾妻も

春從東來

朝日かげさすがに春のあづまぶり
　うたふてきたり鶯の聲

三十九の春

年されば三十九じやもの花の春
　花はやらずとみは持ぬべし

萬載

萬載の杜立あり春といふ
　花の宿りの手斧はじめに

子日

子日にもあとへはひかぬ男山
　小松ながらも力業とて

幾千代か霞ひくらんそのむかし
　子日にもれし高砂の松

若菜

野邊ごとに若菜の上下うちむれて
　摘こそ春の青表紙なれ

つみはやすわかなは雪の白拍子
　名にふる島のせんざいのもの

霞

花もゑみ山もわらひて人のきを
　そゝな霞ぞ空に浮たつ

湖上霞

いかばかりたちてゆたけき春霞
　袖につゝめる近江八景

海邊霞

朝日さすうら〳〵船の碇綱
　えいや〳〵とひく霞かな

鶯

鶯の一拳ある歌よりや
　深谷のこほりうちくだくらん

春といへば岩間の氷かどとれて
　いかにもまろき鶯の聲

谷ふかき雪もけぬべし
　暮に數あるうぐひすの聲

青柳の長點かけし鶯の
　歌は優美におもしろく候

竹裏鶯

おもしろや塒の竹にねをいれて
　けふ鶯のすごもりに鳴

春興

鶯の歌に力はいれねども
　このごろうごく花のくちびる

春氷

水鳥の夜床もよほどひろまりぬ
　たゝみかさねし氷とけては

梅

風にのりて天津空とぶ梅が香は
　仙人臭き花にぞ有ける

朝比奈がくさずりならで梅が香を
　やらじとゞめた袖の春風

中あしき友も問こよ宿の梅
　花の折えて指切をせん

儒官何某の許にて梅を見て

花もまた時なるかなやこの梅は
　三たび嗅でもたちうかりけり

難波の梅

難波づの一花ひらけて天が下
　花の位もさだまりにけり

和泉式部のきばの梅

もらさんも耻かしからぬ薫りかな
　和泉式部がたしなみの梅

梅屋敷にて

八陣はしらねど花の臥龍梅
　みだれてかへる方角はなし

臥龍梅

松風の琴の音おろす楼に
　臥たる龍の梅かほるなり

柳

あをやぎも小町が歌か春風に
　つよからずして腰折はなし

春風に池の蛙の歌袋
　さそひてほどく春柳の糸

かたよりに西へ〳〵となみだれ髮
　くせのついたる風の青柳

青柳の糸がらくりに花鳥の
　春の色音や引出すらん

垂柳誰家

なつさびて問ばや主はたれかれの
　門にざれたるゐのころ柳

初午

初午の神酒にや花の色に出て
　梅のき下戸も香に匂ふなり

籏色は源平桃の花軍
　みよやいなりの杉を小だてに

桃

いかばかり花に醉てか牛飼の
　ねぶり落たるはるの桃山

若草

生醉はねよげにみゆる若草に
　夢を結ばんことをしぞ思ふ

早蕨

うみ遠き山にも渦を巻たるは
　いまが出汐のわらびなりけり

涅槃會の時をかんじて鷲の山
　いづる蕨も釋迦頭なり

春月

かすみてはときめく花の王にさへ
　笠をぬがざる春夜月

春雨

まどゐしてあけなば庭の春雨に

咲たつ花の品定せん

歸雁

清盛のむかしに似たり故郷の
常盤をしたふ春の雁かね

歸雁離々

返事やらかすむ夕に難波づの
はなち書なる雁の玉章

歸雁成字

都をばゑりゝに行雁の
かしくとみゆる夕暮の空

春駒

冬ごもる安達が原もゆきげして
あらはれ出し鬼鹿毛の駒

山邊雉子

雲にいるひばりの下にたゝんこと
かた山のべのきゞす鳴聲

垣下蛙

天までもきこえあげんと鳴蛙
ならぶや歌をかきのもとにて

春深花漸開

待ほどに涅槃もすぎぬいまよりの
春や花みる果報ならまし

花

見たところ瓜をふたつにさくら花
よう庭の雪みねの白雲

遠乘もいでし飛間の花ざかり
つなぐひばり毛なぐるかはらげ

麓より雲のあしゝろかけてけり
たかねへ花の咲のぼる比

まかり出てみき進めよや烏帽子魚
いまぞ時得し花の大君

山姫の寐おき姿か花の香を
しめしあしたの雲の腰帶

さくら狩くれなば花の下臥と
たかをすへたる春の山ぶみ

花滿山

雪折はないかと松をみねごえや
あまりのことに花を忘て

遠山花開

一摑ほどは霞のたえまより
にほへる花や鷲の尾の山

夕花

うちむかふ花なき花の夕榮に
弓引ものは月ばかりなり

西行庵にて櫻を

文覺がこぼしの花は色もなし
西行櫻ゑみをふくめば

花有遲速

さくら花の祇園ばやしに囃しても
拍子にのらぬ北山櫻

櫻狩

かりゆくやさく花の山人の山
花みる人を花のしをりに

花盗人

歌でせめ酒でしばるも面白や
花盗人をいげどりにして

山花

みかみ山今もむかでのあとひきて
春はまとへる花の白雲

里花

鯨よる浦見渡せばみくまのゝ
花ににぎはふ七里の春

鬼子母神へ奉納の櫻を

一花も外へちらさでをく露の
そだて上たる數の兒櫻

落花

山風のつらくあたればあたる程
花の落めもよそにみられず

寄花出替

散花のなごりおしうの暇とりて
風の宿やへねにかへるらし

遲日

暮かぬるもの花の枝春の日と
わぶるひる寢の枕草紙に

苗代菫

苗代の水かけ論はすみれぐさ
はなに蛙も畔をゆづりて

躑躅

たつたひめ秋の錦やかしまうら
波のうねをる山のつゝじは

橋邊蛙

水の月のかげすみどころ求とて
なりひら橋に蛙鳴なり

欵冬

山吹はあふぎの芝をよそにみて
みのなる果のあはれげもなし

菊水のはたのながれも山吹の
きにかへしたる春の玉川

藤

かりそめにみぎはの松の店かりて
池のおもやへかゝる藤波

牡丹

楊貴妃のゆあがりならし白牡丹
うまくふとりて露を含は

若鮎

一寸の鮎にも五分の玉川や
ちりうく花の波にきそふは

海棠

行春をしばしとゞめてねむらせよ
はたごやもなき海棠の花

三月盡

花もみつ松魚もくひつ時鳥
なくばかりなる春の別路

夏部

首夏藤

うづたかく夏の頭にさがれるは
瓔珞ならじ花の藤が之

更衣

布子から賤はひとへのころもせみ
夏きにけりと飛移りして

餘花

なごりなく春はいぬきか雀の子
はなれてさける北山櫻

ほとゝぎす枕の山にうながせど
ねに歸らぬおそさくら花

山新樹

蟒のすむてふ山のやま風に
うごく鱗は若葉なりけり
たつた山花の錦をはぎとりて

夏はみどりの林とぞなる

卯花

やみの夜になかぬ鳥や聲たてん
月の生れぬさきの卯の花

みそかにも月はいでけり卯の花の
垣にうき世のやみをへだてゝ

時鳥のう／＼御宿まいらせう
わびしけれども卯の花の雪

葵

栴檀もやはか二葉のあふひぐさ
加茂の祭に其名かくはし

人傳郭公

けさの初音まだきかずやの返答は
何といはくら山ほとゝぎす

郭公

郭公須磨の海士ではなけれども
なれを松風むらさめの空

ほとゝぎすなれも卯月のゥの香か
きゝはづさじと人のきそふは

どちらとも日和定めよほとゝぎす
雨と月との中空の聲

眞乳山時鳥

眞乳山まてば甘露のほとゝぎす
あまけづく日の夕こえて鳴

山時鳥

さが親の法花をきらふほとゝぎす
音も唯一の神山になく

古戰塲郭公

敦盛のむかしのあとに聲かけて
鳴やうしろの山時鳥

名所時鳥

鶯のすだのわたりのほとゝぎす
鳴てゆくゑやさがちゝぶ山

初松魚

はつ松魚これ十目のみどころを
十手のさしみにるものはなし

初がつをこれもあづまの花なれや
江戸むらさきをつくり身にして

おとこ氣の東そだちの初松魚
一本づかいはだか百貫

山家初鰹

山ざとはいま五月雨のふるがつを
時なるかなと雉子燒にして

時鳥松魚の優劣を人の問侍りしに

いづれまけいづれかつをと時鳥
ともにはつねのたかうきこゆる

早苗

まきてしは秋の種とてさをとめの
笠のうね／＼植る小町田

端午

白妙になびくのぼりの時つ風
世界をみれば源氏雲なり

盧橘

枝かはす花たちばなに匂ふめり
むかし噺の桃太郎まで

筍

夜のほどに土をうがてる竹の子は
むぐらの宿のあるじまうけか

五月雨

さしもぐさしも幾日ぞ五月雨の
久しぶりにてみる山もなし

さみだれて月はみえねど牒のいる
袂に星のふたつ三つ四つ

水鷄

魚もまたをどりいづへし夏川の
月のこほりをたゝく水鷄に

夏月

涼しさはあたらしだゝみ青すだれ
つま子のるすに獨みる月

百合

心にも笠きてくらすさみだれに
露も上みぬひめゆりの花

瞿麥

こゝろせよそだちしだいの撫子に
雨と風とのしつけかたをば

夏草

やせ牛も夏はうづみて大原の
くさにもつのゝありて行みゆ

草刈の鎌きりもありやゝ秋に
むかふ夏野の花の小車

あひらしの花の撫子はゝこぐさ
まゝしきはらに生交れども

鵜川

大井河魚のためにもあらし山
うぶねのかゞり花とみだれて

照射

よる鹿は百年目をやあはすらん
いのちともしのみねのほぐしに

螢

うきふねの波にこがれて飛螢
ひかりを花の山吹の瀨に

浦螢

すまのうらはみるめ涼しや夏虫の
尻のあかしも手に取ばかり

蚊遣火

木屑たいて荒たる宿のいぶせきは
蚊と言鬼のすめばなりけり

蛇田てふ名にたつむらも相應の
雲おこすなり賤がかやり火

蓮

ほとけでもよし君子でも蓮の花
いざ舟よせていけ取にせん

夕立

鬼やらふ豆のごとくにすゞしさを
龍のまきたる夕立の雨

はれてのち蚊の聲もなき涼しさや
蛇の出し山の夕立の空

古方家にかゝりたまふか天のはら
きみよくくだる夕だちの雨

夏山

箱根山あしの下にて鳴かみの
上に落つく關のたび人

松上蟬

童の伯良もありゆだんすな
松にかけたるせみの羽衣

但有泉聲洗我心

あらふべき心のちりもなかりけり
あくまですめる眞淸水の音

納涼

さんくとさゆふだつ波の涼しさは
沖より秋やをし送り船

あてられて死ぬ斗りなる暑き日に
活をいれたる夏の夕風

はらくと四ッ手の網に露ちりて
月もたまらぬ風の涼しさ

川納涼

足駄には足ず下駄にはたぶくと
淺澤水のこえて涼しき

芥川ゆふべすゞしくなりひらや
女ならねどせなに追風

市中納涼

いちくらに入てあつさを忘れけり
なまぐさけれど夕河岸の風

竹夫人

肉屏は皆おしやりて竹夫人
風もへたてぬ中ぞ涼しき

川夏祓

そめわけてすゞし御祓の衣川
なつと秋とをかた身がはりに

はらふより螢かゞやくかみ迄も
あくがれ出し玉川の水

秋部

立秋

暑氣はらひまだ三伏のうちながら
風こゝろよき秋はきにけり

風鈴告秋

風りんの音はりんきの告口か
我のきの妻に秋の通ふを

閨秋風

みどり子の裾吹まくるすゞしさや
波もあら井の閨の秋風

殘暑

秋風の吹さましても帷子の
べに花ぞめかのこる暑は

七夕

二道はかけぬちぎりのいかなれば
紅葉の橋にかさゝぎの橋

おもかげのかはらでしかも天の川
あふせに年のよる波はなし

一滴も水はもらさぬ天の川
いかにちぎりのそこをかためて

七夕後期

別れこしけさしも星のふたつ文字
牛の角文字書かはすらむ

七夕筆

織姫にかさばやついのかむろ筆
こよひ御げんの文使にて

七夕鳥

蝙蝠と人はいふとも曉の
鳥なきさとやほし合の空

萩

小夜衣重ねど鹿の角たてん
臥猪の床の萩が花妻

葛西萩

まいらせよ鯉は葛西の太郎冠者
萩大名の花のむしろに

古寺女郎花

罪ふかき名にはたてれど女郎花

女人堂をも踏こえて咲

薄

花すゝきほにこそいづれ秋風の
手孕村の昔がたりも

野草花

大江山いくのゝ秋は草かりの
童子に交る鬼のしこ草

槿

大氣なるもの朝貌の花衣
さいてはすつる其日〳〵に

露

かゝる露玉とあざむく君子あれば
又質に置連歌師もあり

虫

遍照が落馬のあとの轡虫
口もさが野に名立がましや

寝覺鴫

後の世をたのむの雁は音もせで
寝ざめにきけば鴫のかんきむ

秋夕

菜もなき膳にあはれはしられけり
鴫焼茄子の秋の夕暮

初雁

秋の日をたゝみながらの蛹の夜着
こよひはきたる初かりの聲

雁

山こえてよわたる雁は天の戸を
かぎになりてやあけぼのゝ空

初鮭

ふる松魚いま初鮭の一尺に
七尺さつてふまんねもなし

葡萄

うまき色はちぎらまほしや西施乳
呉王ならねど我もひとふさ

月

雲の足（波のアヤマリカ）にぬき手をきつて天津風
さゝげ出たる明月の珠

雲の波（足のアヤマリカ）さつぱりたゝぬ夜もがなと
月にひるこの神やいのらん

椋の葉にみがきあげしか秋の月
こよひかつらの花あふらして

すみだ川月のひかりを花川戸
あれ都鳥あれ都鳥

遠浦月

二千里の外が濱まで照月を
つがる合浦の珠とこそみれ

十五夜月

けふばかり妹もとがむな新月の
色に千里の外ごゝろあり

天の川橋は引てもすみわたる
影や名におふ望月の駒

姨捨山月

世々かけてたれが見すてん姨捨や
おばにゆかりの明月のかげ

人家玩月

てる月を美濃とあふみの境にも
こよひは起てものがたるらし

武家看月

雲の足さはらば切てきりひらけ
我領分の月の下風

十六夜月

宵の間はすこしの闇の黒木賣
　やせめのみゆる十六夜月

十三夜月

新造の紅葉に對の禿菊
　つれて名とりの月の全盛

吉原十三夜

乘つけてみよやつゞみの日本晴
　名にあふ月の十三夜かご

擣衣

子を抱ていもはきぬたのかた手打
　ねん〳〵ころりからりころ〳〵

旅宿擣衣

いくたびか旅の寢覺をしでうつや
　からり衣の里の夜寒に

近擣衣

から臼の音うちやめば小夜砧
　耳についたる夕貌の宿

遠擣衣

覺束なたが里の子のうつならん
　きぬたも風のかどわかしもの

鮫津の海晏寺にて擣衣を

小夜ふかく夢はさめづの右ひだり
　名にし紅葉の衣をや打

菊

きくの花酒のゆかりにこれもまた
　憂をはらふ箒木づくりか

貧家菊

わびたれど色にいでその時をえて
　咲や常世が庭のやせ菊

谷菊

耳あらふながれを花の枕にて
　寢ごゝろいかにたにの白菊

菊角力

菊角力勸進元のうしろだて
　なゝもゝとせの年寄もあり

茸狩

いその名をかりて入ばや鹽の山
　松茸もまたさし出物なり

薄紅葉

人をもていはでの山の薄もみぢ
　天に口なし色もまたよし

紅葉

見わたせば皆もみぢする山ひめに
　あかの他人は松ばかりなり

松の葉の針に時雨の糸つけて
　ぬふやもみぢの衣手の杜

たちぬはぬもみぢ衣をむらしぐれ
　たがはれぎとかさらす山姫

かた枝さすもみぢも窓の光かや
　勸學院の雀いろとき

峯紅葉

わけいれば山の奥よりいろつきて
　花とは逆のみねのもみぢば

海晏寺の紅葉見にまかりしにまだしきほどにて山の中夢にも人にあはねばいとさうざうしくて

ひとり見て相手ほしさの紅葉狩
　鬼ともくまん林間の酒

高雄紅葉

荒くれし法師の山に出來たるは
鳶がたかをの紅葉なりけり

九月盡

なごり酒の覺しぐさにねぶる目も
あけ六ツまではまだ秋の空

冬部

初冬時雨

冬もけさ車がゝりかはつ時雨
のきばの山を山めぐりして

谷初冬

秋くれていまや小春の櫻谷
しぐれの雲も行かへりばな

山時雨

天狗風さそふしぐれの雨降山
このまにすごき月をのこして

時雨

びつしよりと時雨にぬれて返り花
花の名にふる山吹の里

夕日かげ赤ばね橋はさしながら
かけて時雨やしば〳〵の浦

大井川こす河越のかたしぐれ
ぬるゝかたせは雨のあがり場

小夜しぐれふるわんぼうと成に皃
夢はやぶれてちぎれ〳〵に

淺艸時雨

こなたにははるゝ小春の花川戸
いまこまかたのかた時雨して

落葉

榎までほうしとなりぬ僧正の
門にするごき風のかみそり

きれ〳〵の錦ながるゝよしの川
木のは衣やさく〳〵の水

橋落葉

風にちる木の葉にふしん立てみる
ながらの橋の鉋屑かと

野霜

見し秋ののべの錦をはぎとるは
名にふる霜の袴だれかも

庭霜

霜ばしら冬のしるしとみぎりには
つもる紅葉のいろはつけあり

寒艸

今もなほさむさにまけぬ撫子の
けさ愛らしや霜の袴着

冬月

かみそりのはわたる月の鋭さや
遠山松の霜にきたへて

おく霜のきらはみがけど冬の月
この葉は落て翁さびたり

はれにけり氣色ばかりの小夜時雨
はら〳〵思ふ月にかゝらで

鷹狩

狩人も野守のかゞみこほる日は
影みぬ鷹に時やうつさん

氷初結

けさはまたはるも障子のかみや川
そこも見えすく水の薄氷

池水半氷

われ〳〵に池のこゝろの中われて
　はる氷ありうつ波もあり

千鳥

打てくる波のうけ太刀みつしほの
　さしごゝろにて飛千鳥かな

濱ちどりあさゆふ波のしつけから
　はつと立居の見事なりけり

浦千鳥

隨緣のなみ風さえて室のうらに
　冬は千鳥のたゝぬ日もなし

會式紅葉

一本に時を會式の庭もみぢ
　雨と月とは不受不施にせよ

水鳥

もみぢ葉の錦の床に川なみの
　うちかけもよき鴛鴦の毛衣

はかなしやさらでも旨きあぢ鴨の
　せりをうきねの下草にして

髪置

つくばねのつまむばかりに置初て
　やがてけづらん黒髪の山

帯解

下ひもはたれにかゆるす小娘の
　先うち神に帯解をして

霰

はら〳〵とうつ瓦やはさもなくて
　きよき霰の玉ぞくだくる

關霰

荒はてし不破の關守もる人も
　もるにあられのたまゝればこそ

雪

ふみこんであとのつかぬぞ面白き
　こたつながらの雪のあけぼの

日蓮とふりかはりけり降まゝに
　雪の達磨もわたぼうしきて

馬場雪

鞭打てつながぬこまにちる花は
　櫻の馬場の雪の夕暮

はや冬枯の宿のいとわびしき
に質に置べきものかしてよと
いひおこせし人になきよしい
ふとて

我だにも秋はてし宿の冬がれは
　霜の置べきしち草もなし

雪の日友人の許よりふぐ汁た
べにこよとあれば

いのちこそ鵝毛に似たれ何のその
　いざ鰒喰にゆきの振舞

歳暮

かけとりの問はぬもつらし武藏鐙
　かゝらぬさきの年の暮をば

武家歳暮

煤取て弓は袋におさめたり
　せめくる老を何でふせがん

百人一首によそへて歳暮のこ
ころを

この暮はいつの歳よりうかりける
　古借錢の山おろしゝて

戀部

戀

わが戀は旅のゆくての長縄手
只はてもなくまつばかりなり

寄山初戀

くるしともいはで心におさめ太刀
これやわけいる戀の初山

忍戀

ひきずりとよばるゝ程のきの重さ
しのぶの衣たけにあまりて

盗人にみとがめられてはづかしや
しのびてはこぶ戀の重荷を

見戀

思ふかひなし共いはじつらけれど
たまに鮑も目のくすりなり

待戀

寝もやらでいだく待夜の首の骨
かくやちぎりも引ちがへけん

きみまつとつくり病に寝し床へ
脉のきれたることわりぞうき

不待戀

我せこがくべき〱のいつはりも
さうはたべまい蜘のふるまひ

逢戀

今ぞしるそばには玉子身は味に
あふがいのちのつなぎなりとは

夢ならばさめなとかはす手枕に
獏よりうしの時つくる聲

いらひこし床の塵もてまじなはん
枕にかした腕のしびりを

うち拂ふ枕のちりの目にいりて
あきもあかれぬ中ぞわりなき

期變約戀

今さらに雲の下帶引しめて
月のさはりの空ごとぞうき

等思兩人戀

わりなしや思ふ二人はすゝ明石
並ぶ夜床をはひわたるみは

逢無實戀

思ひきやおもひ〱し戀のふち
あひそめ川のせをたかんとは

老人戀

うき人におもひつかれぬ鳩の杖
年よりこひといつかよばれん

厭はれて悔しさにかむ歯ぎしりを
老をかむとや人のみるらん

佛師戀

人目にはほとけつくれど魂は
けさいれてこじきぬ〱の袖

茶摘戀

あひがたみ茶にも浮身を摘て知れ
戀しがらきのからき思ひは

小倉百首の初五文字をさぐりて戀のこゝろを、花のいろは

花の色はそれとはいはねど女郎花
おもひにはやるあはれとは見よ

おなじく、わが庵は

我庵はなど住うきと問てまし
うかれ出たる戀のやつこに

後朝戀

ぬけがらとなりし別れに我たまの

あらばひろはん道芝の露

恨戀

しかりとて伊賀刀目にも卿れず
眉毛よまれし中の恨は

出替戀

つれなしやなごりをかりの空泣に
あと白山と歸る腰元

後家戀

こと人を思ふにつくゐつみ髪や
なきつま櫛もさすが忘れて

歌比丘尼

歌比丘尼くどけばさすか落髪の
なごりゆかしきびんざゝらかな

題後悔戀

雷におさへし臍をかむばかり
うき名はたつの雲にのぼりて
今更にゆめになれどもかこたれず
もと寢言よりもれし浮名は

法師戀

なげきつゝひとり思ひにやせ法師
非時にあはんの契たがふな

晝戀

かくばかりうき身は戀の手習子
せめてなみだの晝休せよ

寄狂歌戀

二世迄とたのふだ人にこのごろは
あるかやいとも問れぬぞうき

寄花火戀

物思へば何の花火も我身より
ぽんと出たる玉やとぞ見る

寄山伏戀

せめかけてとう／＼祈り伏にけり
いざ下紐をときんすゞかけ

寄羅蔔戀

うきたびに袖しぼり汁からうして
しのぶ心をねりま大根

寄赤本戀

四天王ならぬは戀の山いりに
しのぶ心の鬼はおそろし

寄螢戀

あくがるゝ玉章よとてやる螢
よめかしもじのかごとばかりも

寄餓鬼戀

身はやせて骨と變りし契りより
もゆる思ひに物も喰れず

寄修羅戀

疑ひをはらふつるぎぞうけとめよ
我ときる指我と切髪

寄天人戀

羽衣のうらみかけてもなびくごと
かなふまじとてたちのくぞうき

寄氷餅戀

とにかくにむすぶ心のこほりもち
くづし出てやかきくどかまし

寄雷戀

さゝめ言はやきかぬ氣になる神か
耳をふさぎつ臍をかくしつ

寄書戀

畫にかける遠き人にやいくとせか
目鼻もつかぬ戀もするかな

寄糸戀

むつごともとかくひねりて柄糸の
つい角菱のたつ中ぞうき

寄机戀

毛氈をかけてぞちぎる唐机
たがひの足も四にならべて

寄風戀

よし今はかぜの神にやいのらまし
おなじ枕に二人ねぬべく

寄八景戀

問ひきてもあはで矢走の歸る帆や
人のこゝろのひゑおろしより

狂歌醉竹集下

雜部

富士

降つゝの雪におされておほかたの
不二みる歌は皆ひしげたり

淺間

淺間山ふき出す石の輕井澤
かぜはけむりを追分にして

山家

はひかゞむ松はあれども世中の
人にはこしをらぬ山ざと

山家松

門にたつ松も根生の山ざとに
すめるこゝろやいつも正月

山家連歌

山寺の夕の花の定座には
ちらんなごりの恨こそあれ

風

いなさから吹返したる富士おろし
すばしり口やあけぼのゝそら

松風

鳳凰の聲に似かよふ松風も
夕ぎりにすむ物にぞありける

海眺望

追風にみなといでゝは親船も
この葉なりけりやがてちり〳〵

夕眺望

夕汐のさしそふなみにてら〳〵と
白魚船の篝いくちよぼ

海村煙幽

ほす網のめにほかゝれど夕けむり
立るも海士がほそきいとなみ

辛崎雨

辛崎の雨にぬれこしたもとよさ
はれに見せばや故郷のまつ

名所瀧

名にひゞく日光責にせめつけて
なほあまりあるそうめんの瀧

松
さびしさも一ふしありて面白や
松の太夫がゆふぐれの聲

竹
虎になれ賢人になれ呉竹の
よにおもしろき風の友ずれ

鶴
不斷着のまゝの川邊にいく千代か
たちてはぢざる鶴の毛衣
あしべまで皺のよる波かたよりに
たゝみよせたるつるの毛衣

龜
萬年の龜のこうなり名とげぬと
長き尾やひく蓬萊の山
蓬萊の島わたりせば龜の齢
ちとせくだされ御供申さん

鳥
ぬく〳〵と只落し餌に落ついて
信天翁の身こそやすけれ

鐘
湯ともなるものとてきけば煩惱の
よごれをあらふ曉のかね

秤
かろ〳〵も業のはかりめ恐るべし
浮世三分五りん五たいは

甘露
天に口なし人をもてなめしむる
めぐみの露は雨にまされり

酒
とかく世はよろこび烏酒のんで
夜が明たかあ日がくれたかあ
さかづきに向へば變るからくりや
いとを引たりあとを引たり
禁酒しはべりしとき人のやぶ
れとせちに責しに
黑がねの門よりかたきわが禁酒
ならば手がらにやぶれ朝比奈

梅の花貝
海中に鶯さそへむらすゞめ
ねをそへてみん梅の花貝

黄金不多交不深
懷の秋ぞわびしき問れしも
桐の一葉のちりのこるうち

隱士出山
鳳凰も孔雀も時にあふむまで
いでゝすみこしあとは山がら

述懷
いたづらにざれ歌よみと成にけり
身にはおかしきふしもなくして

老後述懷
口おしや身は老といふ出者に
頭をさげつ腰をかゞめつ

寄屏風述懷
世にたつはくるしかりけり腰屏風
まがりなりには折かゞめども

寄筆述懷
飢鷹の手前もはぢずたけの子の
ほをつむ年の老ぞくやしき

懷舊
思出もなきうき身にも戀しきは

昔やはゝの乳房なるらん

寄笠懐舊

みな月の照日のうさもたらちねを
笠にきたりし昔戀しき

寄杖懐舊

ありし世の諫めの杖をさながらに
今は親ともたのむ老が身

旅宿

居風呂にかゝりゆもなき宿とりて
むさやくさつの里の夕暮

旅行友

いせ人のひがごともまた面白し
うそさびしかるたびのつれには

旅泊夢

とまりぶねゆられてねたる浦波に
ゆりおこさるゝ曉のゆめ

旅泊嵐

船出せん日和あらしにとん〳〵と
なる尾の浦の波枕して

羇旅

濱庇久しくあはぬ故郷の
いもや兒島もわれを待らむ

春羇旅

聞なれぬ鳥わけなれぬ深山路に
咲花ばかり見知ごしなり

夏羇旅

なつごろもきそのかけはし命がけ
わたりて汗を福島の關

秋羇旅

玉章もたえじ都の妻こひし
秋にいり湯の雁風呂にして

冬羇旅

越佗ぬたびに日をつむ雪のたけ
よこをれふせる小夜中山

何某侯の難波の御守におもむきたまふを

芦の葉も君がかたはになびくめり
大名風のわたる難波江

南畝子が難波の役におもむくをほぎて

世の人のいかに〳〵と見つめ錐
袋出たる難波江のあし

狂歌堂が駿河におもむく馬のはなむけすとて

きみいなば富士の煙をためしにて
ゆくゑと歌の風になびけよ

尾陽いぬ山松丸あづまにくだりて予が家を主とし江都の名所をたづね又諸名流に應接し故郷におもむくとてつとめてたびの宿りよりいひこせしかへし

老の涙せけばなごりのおしとなり
いとま乞さへいはでやみにき

富士の川澄より木綿に歌そへて越ければ

進物のもめんにそへし歌までも
節たゝずまたたけありてよし

圖南女よりちゞみをもらひて

たま物のちゞみはことに薄くして

厚き心ざみえすきにける
越後松山かゝみより縮をもらひて
逢みては地をも縮にしてほしや
越とは遠き君がかたびら
芝三田へまかりけるときつれにはぐれければ
綱坂のつれにはぐれていばらきに
腕をとられし心地こそすれ
大黑のかたに
只善をたからとつまば福德は
あんのうち手の小槌成べし
布袋
布ふくろ中は本來空にして
子煩惱こそ即菩提なれ
布袋川わたりのかたに
山のみかほていの影をうつしては
水さへ笑ふ春の川つら
福祿壽のかたに
つく〳〵と見るほど長きあたま哉

いく千代かけてかくはのびけん
壽老人笛を吹かたに
手弱女の足駄ならねど壽老人
ふくによりくる鹿笛の聲
達磨
西來意この東來の春いかん
柳はみどり花はくれなゐ
傾城を達磨にかけるかたに
芦のはのながれの身にも床の海の
第一義をばむざともらさず
寒山拾得
夢の世をさとりてみれば寒山子
へんてつもなくじとくもなし
蜆子
ゑびとつて食ふ風味はそもいかん
あしの花さく水の流洲
久米の僊人
仙人もこのむところはひとつにて
落ればおなじ谷川のみづ
圓位上人

行水に移る一樹のかげぼうし
これも他生の圓位上人
猩々
蘆の葉のみだれにけりなくむ酒に
猩々もよくものいはぬ迄
六歌仙のかたに
誰かたになびくや小野の女郎花
ならぶかたへはみな男山
千なり瓢簞のかたに
そだてがらつい我儘になりひさご
性はせんなりとは申せども
美人のかたに
魂をうばひ取たる齒者の
すがたは卿貌はかいどう
寒垢離のかたに
紅蓮大ぐれんのこりをとる身にも
また春といふ極樂は有
蓮に鷺のかたに
泥鰌ふむ底のこゝろは白さぎの
うはべは花の君子つきあひ

鴛鴦のかたに
行末をいはほのこけとちぎるらん
ついてはなれぬおしのつがひは
葡萄にりすのかた
文道はよし知らずともぶどふには
りすも勝利を枝うつりして
月に狸のかた
腹鼓うてるや月のかつらむき
狸もふりし秋の野の宮
鯉の畫に
龍となるいきほひみえて出世鯉
をどれば空の波をおこせり
六藏のかたに
萬年のたからを甲におさめしは
うまれながらのかくれみのがめ
すはしりのかたに
うきせをも臍に收めてしつかりと
出世をはらむ腹ぶとの魚
師走餅搗かたに
やき玉子四角もあれば行どしの
みそかにもちのつきやあたらじ
花子のかた
ものいはぬ坐禪衾に角ありと
さとらぬうちが花子なりけり
鬼木に鐘馗のかた
一本木名にしじやうきの劍菱に
やははむかはん鬼ころし酒
妓女對鏡
海棠の雨かゝみにうかれ女の
はら／＼がみのかゝるなみだは
嵯峨のゝ萩すきいれたるあふ
ぎに
これもまた女なりけり萩の花
ぼうずおとしの名にはたゝねど
善魂惡たまてふものゝまはり
燈籠に
善もまた惡のうらぼんうらおもて
いづれむくひは廻り燈籠
三平二滿のかた
雨ほうの山たかくしてたにのはな
さそふ嵐のきづかひはなし
鹽ふきのかたに
何事をきいても空を吹風の
音もなくまた花の香もなし
醜女のかたに
無鹽が厚顔齊王いつくしみ孟
光が素貌伯鸞悦ぶ眉目にはよ
らじ人は心をと古歌にもはべ
るをや
み目よりも心によるの契あれな
情は人にかつらぎの神
蘆に雁のかた
玉章はいづれ難波のあしでかき
よめぬ眞砂に落るかりかね
大原女のかたに
かへるさは月をいたゞく大原女の
重荷をおろす花の下かげ
嵐山の花をすきいれしあふぎ
に
嵐山さすがあらしのなさけにて

さゞめし春の餘波おし花
　猿つりのかたに
尾をみする人にや舌をはく藏主
　色と酒との燒鼠には
　　東方朔桃盜むかたに
西王母桃のゆくゑをうらとはゞ
　これ東方にありとこそいはめ
　三平二滿の机によりて外面を
　ながめ出せるかたに
頬二つはならびのおかめ女郎
　待人ありや閨のつれ〴〵
　業平醜女負ふかたに
貌みてはさぞあくた川かつらぎの
　神代のことも思ひいづらめ
　最明寺夜宴のかたに
紙蠋さしてほりもとめしは上代の
　風味たうときみそかざかもり
　子持て親の恩知るといふことを
しぶかりしおやの意見も枝柿の
　こを持てこそうまみをばしれ
　肖像贊
　青雲の志は花鳥にうばゝれ
白雲の情は風月にいざなは
れてあけてはくみくれては
のみ只醉鄕に身をはふらし
壺中の天地を睥睨に見てつ
い白髮の年とはなりぬ
いたづらに只の親子となりひさご
　身の能とては酒のいれもの
　頭巾氣の書生にしめす
天地の庭籠のうちに生たちて
　外みぬ鳥ぞあはれなりける
　小石川十景のうち、牛込行人
おのがじゝ行かふ橋や船河原
　馬は馬づれうしは牛込
　八十賀
梓弓やその齡を引はりて
　はなしのたねに千代もつかへよ
八十八賀
みちとせの春に咏へ八十あまり
　やがて王母が桃もちぎりて
　奥野氏七十賀
春ごまにのりこえてゆけちとせ山
　これよりおくの花も見るべく
　伊豫の國の人の七十の年滿に
きこしめせ松山うどんなが〳〵と
　なをもちとせをもりかへにして
　菅江の落髮せしをほきて
うら山しきみはかしらの雪解して
　心の花のときを得ぬらん
　木あみか黑田川にて落髪しはべりし時
中々に梅若やぎてみゆるなり
　きみは柳のかみをおろして
　人の子の出世をほきて
いなだ迄なり上りたるわかな子の
　出世は見えた御奉公鰤
　玉涌六十賀
ひもかけて耳に從ふ目がねより

めざす所の千代はへぬべし

こゝちそこなひて死出の山の
麓見てかへりければ

ぬらくらと世をへん死出の山の芋
むなぎとなりて活かへる身は

何某の許にて玉川のそばたふ
べて

ことにまた君が手作りさら〳〵と
たべてきづなき玉川のそば

尾州しのゝ玉涌かおもざし予
に似たりと人ごとにいひもの
しはべれば玉涌の許へよみて
おくる

君とわれいかに似たるか瓜を二つ
われても末にあはんとぞおもふ

とよみしも得あはでなき人の
數に入ければ

われに似し人と思へばますかゞみ
我かげながら我となつかし

雁奴か一周忌追福嵩松亭にて
寄拍餅懐舊といふことを

こぞのけふ君は佛にならざかや
この手合てなつかしはもち

狂言師何某をいたみて

やるまいぞやるまい物を誰かある
とらへてくれよ死出の山人

松の下臥をいたみて

むらさきの雲のはやめは極樂に
うまれよとてやまへの下臥

やことなき夫人の七年の忌に

幻しのつてもなゝとせほとゝぎす
しるや五月の玉のありかを

平秩東作身まかりて七日の日
おきつきにぬかつきて

般若智の水をたむけん花ゆへに

年ごろ山をこのみたる仁（本ノマヽ脱字アラン）
桑楊庵の名をつく人あるつふ
りの光か七回忌に

桑やなぎしげるにつけて夏虫の
尻のひかるをみても戀しき

菅江をいたみて

ざれ歌も今はばら〳〵あふぎなり
かた親骨のもろくくだけて

黒人か七回忌に

なきあとのしるしをみれば黒人も
あはれみどりの苔衣きて

橘里館卜翁ことし八十八のこ
とほぎせむあらましもちかき
夜身まかりぬときゝて寄花無
常といふことを

はからずもさそひて惜き夜半の風
ことぶくよねの小米櫻を

應無所住而生其心

法の船こゝぞとまりとさだめなば
いつか彼岸の花を見るべき

維摩

さま〳〵にとく不二門も山吹の
いはぬ色にはことのはもなし

古寺

わけ入てなつむ高野の初登山

かずもいろはの四十八谷
風流は和をもとゝす雅席の諸
君胡越をなすことなかれ
春風のやはらぐ中に難波がた
つのぐむものはあしとさだめん
芝浦の春日のやしろの椽側に
腰うちかけ海面を眺望しはべ
りしに社僧心ありてたばこ盆
出しければ
たばこぼん出してかすがの宮柱
ふとまいりしもえんのはしゐか
牛天神奉納の額大原女黒木に
梅花折そへたるかた
大原女のあづまくだりはさく梅の
花さす手をばかみやひきけん
上州瀧の不動奉納
明王の利劔するどき御利生は
よその國までひゞくたきつ瀬
寄花神祇人丸影供
花はさくら歌は人丸神と花

みをあはせたる春のたむけか
寄月神祇
神もさぞ見そなはすらん起請文
くだんのごとくてる月のかげ
若菜契遐年
七そぢはまだ若菜なりことしより
めつたにつめやちとせ萬代
越後上村ぬし阿佳田丸こたび
新田開發し上村てふむら名ま
でゆるしかうぶりしときゝ
て
千早振かみむらとこそ仰ぐらめ
早苗の末葉風になびきて
寄化物祝
瞎とひらく大のまなこに君が代の
ちよのさかへや見越入道
臺所祝
臺所どんごとなるはたきの水
出いる客もたえずとふたり
寄鶴龜祝

かぎりなき人の齢やうらやまん
つるは千年龜は萬年
寄雨祝
濱松の音はざゝんざさんざ降
めぐみを笠にきみが代の雨

醉竹集附錄

太田持賓ぬしの詠に短慮功をなさずといふことをいそがずはぬれざらましをたび人のあとよりはるゝ野路の村雨てふためしあれば諺和歌よみてよとさるやごとなき御かたより仰ごとありければ五十首よみてたてまつれるになをあかずとまた五十の諺題かいつけてたまへるその夜酉の終より子のはじめまでによみはて奉りはべるにいといみじう興ぜさせたまひけるとなんさはれこちたき逵磨歌にし侍れば和歌の浦人のみるめもおもなきわざにこそ　　橘洲

諺百首和歌

一は萬物のはじまり

天となり地とわかれて出る日の
ひと日や千代のはじめなるらん

好事不出門

人のうへをあしの葉風の吹けちて
なにはのことかよしとつたへむ

悪事千里

憂名をばまちとる風の吹そへて
ちさとの外になどもらすらん

蛙の面へ水

はれにけりそめてつれなき山松に
はてはしぐれの音をのこして

猪見て矢をはぐ

花の下月のむしろの折ごとや
なごことのはをならはざりけん

鰯のかしらも信心がら

悪みある露のまことのあらはれて
かれにし枝に花やさくらん

鮑はくひたし命は惜し

さく花に心なき身をかへりみて
折もやられずをらで過うし

酒買てしりきらるゝ

今しはと露のなさけの醉ごゝろ
みだれて花のあらしとぞなる

隣のぢんだ味噌

わが宿にさけるものから手折こし
人の心の花ぞえならぬ

下司の智恵は跡から

ともすればくゆる煙よたきさして
うきを眞柴のこりぬおもひに

術なき時の神たのみ

おもなくもねぎ事すらし兼てより
身のおこたりはみづがきのもと

かる時の地藏貌なす時の閻魔貌

心なやうちゑむ花のときすぎて
こちのかへしの山のあらしは

七尺去てふまぬ師の影

たちさりてふまじや春の朝みどり
露のめぐみの靑柳のかげ

遠の親類よりちかくの他人

みよしのゝ春も思はじあしがきの
まぢかくなれし花の一本
ちかしき中に垣をゆへ
朝貌の露のへだてもこゝろあれや
かれず思ふが中垣にして
椽下の力持
もらさじと何にそめけんむら時雨
人もすさめぬ谷の紅葉は
上手の手から水
九折やすくもこえてたまほこの
つちにつまづくためしこそあれ
千丈の堤も蟻の穴よりくづる
る
くづし出てたがものしけむ袖の露
さしもかためし人目づゝみを
恩を仇にて報ず
手折ゆく心ぞつらきしぐれには
かげとたのめし山のもみぢば
仇を恩にて報す
手折つゝかへる籠のゆふ月に
梅がかおくるみねのはるかぜ
馬鹿待夫
ちぎりしも雲ゐの雁のいくかへり
かけてあだなるよその玉章
雨降て地かたまる
假初の露のかごとをえにしにて
今はへだてぬ中の衣手
出る杭うたるゝ
よそにみて過うき宿のたち枝より
折こそやつせ梅の一本
七度たづねて人をうたがへ
くみもみぬ己がこゝろのあさか山
人にうらみの山の井の水
燈臺下暗
月いづるかた山かげはたどる夜に
行衞たどらぬ遠のひとむら
一文おしみの百損
うき思ひ露もらさじとつゝまずば
かばかり袖の色に出めや
川向喧嘩
さしわたす小舟もがなや思へども
人はへだてし中川の水
贔負の引たをし
引方のありてなか／＼もつれつゝ
ことしげいとのいとゞくるしき
負ふた子より抱た子
目にちかき櫻に風のはふりして
よその梢をいかゞとぞ思ふ
百貫のかたに笠
此頃はさそひつくして山ざくら
ちりにしあとにのこる松風
犬骨折て鷹に取るゝ
たのめこしたよりの風に靡きけり
おもふあたりの青柳のいと
杓子定規
いかにせしならひなりけん春秋の
花にはあらし月にむらくも
鬼に鐵棒
心ゆく春にもあるかなこのゆふべ
花に風なく月に雲なし

藪から棒
船人は帆づゝしめなわいかゞする
はやちふくなりむこの海ばら

船頭おほくて船が山
中〳〵にたのむゆかりの多ければ
もるやといもが心置らん

牛の角を蜂
よしやふけまた露ばかりさく梅の
花のあたりの笛たけの聲

年よりの冷水
花にうつる心ありとも志賀寺の
ふりにしあとの色にいづなよ

さむらひ不食高楊枝
詫しとて色にいでめやうへぬれど
穂つまぬ鷹のためしこそあれ

飴て餅
傘てより思ひけりとはよそながら
みきとてとくる閨の下紐

長者萬燈貧女一燈
わたつうみにみちくる汐は溢る共
しかめや人の露の情に

竿頭に鈴
おもふとて川瀬の浪にちる紅葉
うきたる色になびくべしやは

皿に桃
楫とりよこゝろしてさせたび人の
むれつゝわたる波の小ぶねに

こうばりつよくて家を倒す
さらぬだに重荷にたへぬやれ車
ひきなたすけそよその諸人

瓜をふたつに割ずと其儘
いづれをかわきて眺めん花ざかり
みよしのゝ雲をはつせの雪

はしる馬に鞭
おこたらず楫ふりたてよ沖つ船
直帆の追風こゝろゆくとも

花より團子
さきにほふ花はいろなし手弱女が
木のもとすぐる袖の追風

みつ子に習て淺瀬
かしこきもたどる深山を白雪の
みちしるこまにまかせてぞゆく

重荷に小づけ
山人のたきゞにそへし花にまた
折もすごさぬ岡のさはらび

大事の前の小事
よしさはる雲はありとも月のふね
行衛にはらふ沖つしほ風

いそがばまはれ瀬田の橋
わたらじな木曾のかけ橋九折
くるまをかへす人もこそあれ

上をまなぶ下
爭ひもきよくすみれの花さきぬ
くろをゆづりし小田の春日に

慈悲は上から
かへす田を客にまかせて民の戸も
うるふ時しる春雨のころ

咽もと通れば暑さわするゝ
花の木もちりすぎぬとや折くべて
賤よ烟といかでなすらん

角直すとて牛をころす
さく花のすがたつくると枝をりて
あたら櫻ぞやつれはてぬる

氏なくて玉の輿
道の邊に桑つむ賤もときをえて
玉の臺にのぼるかしこさ

蓼くふ虫もすき〴〵
すみうしと人めかれにし谷の庵に
かくて出じとおもふわりなさ

かせぐに追つく貧乏なし
おこたらず磨もてゆけば鎌をさへ
針にもつくるためしこそあれ

正法に奇特なし
とくのりの道をしきけば何もなし
只ありの實の只ありにして

我寺の佛尊し
ときめける花のむしろも慕はじな
たゞ我宿の朧夜の月

一寸の虫に五分の魂
はつかなる斧ふりたてゝ山路ゆく
車にむかふ虫ぞはかなき

人くひ馬にも逢口
交のねぢけ人にもうらなきは
つゐにはいかに奈良の葉がしは

性は道によつてかしこし
雨風をまだきにふせぐかしこさや
穴にすむ虫枝にすむ鳥

馬子にも衣裳
名もしらぬ花咲にけりさもなくば
只みやま木とみてや過まし

百貫の鷹はなさねばしれず
身におはぬ鶴とる鷹もあるものを
何におこたる心なるらん

萬能一心
咲にほふ花の千種もはかなしや
あらき野分の風のこゝろに

人の一寸おのが一尺
くまとなるよその梢をめにかけて
しげるもしらぬ蓬生の月

たちよらば大木のかげ
藏のうちにすめる鼠もあるものを
人はこゝろのたちとなりけり

寺に勝た太鼓
身におはぬ人のみけしの移香を
しめてよそめやいかにはぢけん

朝寝の宵まどひ
夏の夜にむすびしゆめの朝寝がみ
みだれてくるし宵すぐるまも

我身つめりて人のいたさ
と斗りも人になかけそうきぬなは
うきぬの池のこゝろくらべて

馬の耳に風
うき人の心の駒のつれなさは
いひよることもよそにふくかせ

ぬれぬさきこそ露をもいとへ
とてもかくつゝむにあまる袖の露
もらんうき名よ今はいとはじ

盗人の晝寝
くれなばと人にちぎりて夏の夜の
ひるねの夢や日かげわぶらん

くぼい所へ水たまる
五月雨にまさる水かさの和泉川
うきはながれの末のさと人
鬼の目にもなみだ
ながめこし露のことばに守人の
さすがにゆるす花の一枝
貧僧のかさね齋
おもふ人なくても經しを新枕
いかにかはさんかなたこなたに
好物に祟なし
くるすのゝくるゝちむさも白雪に
鳥立たづねてあかぬ鷹人
膝とも談合
みどり子に習ふ淺瀬もあるものを
なに思川おもひしづめる
人の痴氣を頭痛
心から人のうきせを身にかへて
おもひ朽ぶねくちやはてなん
隣のたからをかぞふ
己が身にありともしらでなれ衣
うらなるよその玉やうらやむ
石をいだきて淵
白波のたつたの山としりながら
などてこゆらん夜半のたび人
もつけ重寶
ちりうきし花の流れにたどらずば
おくある山の花をみまじや
勸學院のすゞめ
高野山ふかき御法に鳥すらも
佛法僧と音にぞなきぬる
牛にひかれて善光寺
古寺やさそひし人のゆかりもて
のりにあふちの花をこそ見れ
勘定あふて錢たらず
なす業の世のことはりはそれ乍ら
うきをばひとり身にやおふべき
亭主のすきの赤烏帽子
おもはずも麓の道にまよふなり
水帰きよき心ひかれて
地藏の貌も三度
灘船のいかりはいかにしづむとも
つゐにはあらき波風ぞふく
闇夜の礫
此頃はしのぶに餘るうきことの
とはずがたりをたれか聞べき
足に疵もてはさゝはら
忍ぶみはなべての人の世がたりも
いかで心にかけてくるしき
土佛の水あそび
老が身のあすしらぬ世と知ながら
わすれてかはす小夜の手枕
習ふよりなれろ
總角もさすがに人をみなれ棹
なれて漕よるおきの友船
おもふ中の小いさかひ
ともすれば思ふが中のおもひより
あらぬかごともかけてわぶらし
嫁が姑
いつの間に頭の雪とふりにけん
きのふかめでし花のかゞみに

瓜のつるに茄子
みよしのゝゆかりにゝほふ嵐山
さすがに花のたねぞことなる

立板に水
かびらへに富婁那がとける法の聲
せつりもすだもあはれとぞ聞

鳥なきさとの蝙蝠
さのみなどひとり上みぬ鷲の山
かたへに鷹のみねもこそあれ

内股膏薬
吹かはる風のこゝろにひかれつゝ
かたもさだめぬ青柳のいと

人を呪ば穴ふたつ
世の報ひ身にそふ影としらねばや
うけひて人をあだになすらん

慾にいたゞきなし
みる世もと待もはかなし老が身に
子の子の末のさかゆかん日を

堪忍五両
をのづからこがね花さく山もあり
うきをしのぶのさとのあなたに

誹諧躰擬歌

朝鶯
鶯のひとくとつぐる聲なくば
花にあさいの名をやたてまし

若草
若草のつまばねたしや女郎花
まじりて春もなまめける野に

山中夕花
ましらなく山の櫻に狩くれぬ
なれがいはほに宿やからまし

郭公
ほとゝぎす鳴一聲に早乙女の
小がさかたよる小田の夕暮

夕立
菅簑も夕たつ雨にとりあへて
さむしろかつぎ行はたが子ぞ

擣衣
いぬる子の添乳ながらにうつ衣
うつゝかゆめかなかぞらの聲

月
世々の人のめでこしあとの藻鹽草
かくては月のいかゞ見るらん

紅葉
よききぬと人などがめそ老人の
かざすつゞれのそでのもみぢば

雪
風ありときくもさむけし小夜深み
さとこぼれたる雪の松が枝

歳暮
流れゆく年のはやぶねいかなれば
うきぬしづみぬ人のわぶらん

契戀
いかにせんちぎりてわたる後瀬川
のちのあふせにふねなかりせば

後朝戀
朝露のなごりの袖のうつり香を
とめてやきつる人のおもかげ

述懐

いかにせむ翁さびたる奈良がたな
にぶしと人にふるさるゝ身は

祝
きみが代は蝦夷が千島にひく魚の
數のことのはよみもつきせじ

神道者
人のうへは天の八重雲はらへども
いかにしなとのかぜの薄衣

卜者
人の上はなにはの事もみつしほに
みをしらなみの根こそあれ

山伏
みよしのやすゞふく風に山伏の
ほらのねたかき曙の空

竈拂
小柴さすあすはの神もなびくめり
うたふ乙女が袖の追風

醫師
手のやつこあしの乗物かくてよに
ふるくすしこそあはれなりけれ

按摩
もみくだしうつ諸人のかたせ川
なみのつゞみのおともまじへて

針醫
たかせ舟海はらにさすはりまぢや
やりてひゞきの灘も越なん

穩婆
取あげてみがくかた手にもろ人の
袖の上なる玉や見すらん

鑄物師
山寺の麓のさとのあけくれに
おのがつくりしかねやきくらん

縫物師
色いとを手にまかせたる梅さくら
ぬふてふ鳥もねたしとや鳴

伊勢參
神風やいせしまごろもふりにけり
内外ぬかづく氏のもろ人

鉢法師
哀れ身は飯にうへつゝはちの子に
いのちかけたる墨ぞめの袖

輕業師
世を渡るならひもかくや垂髪子が
命のつなにあからめもせず

放下師
まぼろしのする業ならじ右ひだり
とるや手玉の行衛しられず

鉢敲
優婆塞がゆくゑも遠くなりひさご
かれずやたゝく月の門〱

狙公
かしこきをおのが咎にてうき業に
あはれましらの身をつくすらし

傀儡師
目に見えぬ鬼の姿にみどり子の
心なぐさむわざぞことなる

厄拂
いかばかり鬼やらふ風に世の人の
うき雲はらふ西のうなばら

紙屑拾

木の葉かと落散る紙をひろひえて
かへるも人のくづの松原

節季
盡せじなゆく年のせきこゆるぎの
いそぎてうたふ門々の聲

萬歳
鶯もまだしきさとにいく代々か
せんずまざいの春を告らむ

畫讃和歌

河津脱野相撲のかた
百艸はのべふす風の小薄に
かけてしがらむ秋はぎの花

忠度只澄のかた
うつ波のみぎはのかた枝吹をれて
やがてちりしく花の夕風

佐々木梶原先陣のかた
秋風にいづれかさきと宇治川の
ゆふなみかけてわたる雁かね

義經八艘飛のかた
追かせのふけばなびきて飛千鳥
小ぶねこえゆく浪の遠かた

梶原逆櫓のかた
君が代は海邊をわたるかりがねも
なみにさかろのあらそひはなし

藤戸のかた
駒をもてうみわたしけん古への
あさせやふかきうらみなるらん

與市扇の的のかた
手弱女がまねくあふぎに梓弓
いり日やなみの上に落らむ

備後三郎のかた
きみがための櫻にとめしことのはの
心の花やいかにこめけむ

景清箕谷のかた
さす汐のひくかと見しも兜貝
くだけてのこるなみのみぎはに

維茂紅葉狩のかた
色にそむ露のなさけの夢たらで
嵐にきほふ山のもみぢば

忠盛祇園火燒のかた
みづがきのもとに怪しき火影よと
見しは手に取螢なりけり

辨慶安宅關のかた
うつもまためぐみの雨の兒ざくら
花のあたかの關のゆく手に

關羽千里獨行のかた
照る月にさはる一葉のくまもなく
千里をはらふ木枯のかせ

孔明
時えては深谷がくれにふす龍も
空にゆふたつ雲おこすなり

楠正成
末の世もくみてかぐはしさく花の
名にながれたる菊の下水

やつがれはやくよりざれ歌をたしみて古今の狂歌集けみせざるはなしそがなかに難波の行風が古今後撰より諸家の家集言葉のはやししげいとのしげきが中ぬけ出たる歌あまたなきにあらざれどもこれを沙しこれを汰すれば瓦石にまじるこがねなるべしかの何某が楓落呉江冷なりの外見るところきくところにおよばざるの歎なきにあらずひと日吾妻の風の便りに我師酔竹集をこし玉へるを見るに春の林に入が如く見る所みな花をなし秋の山をわくるがごとくゆくところみな錦をはるは古今いまだ見ずさるを翁はなを雜肋のみおほければと秘し玉へるを丸家山文眞柴の三人書肆何がしとはかりせちに師にこひて梓にゑり翁の言葉の海のひろきかつはざれ歌のみにあらず和歌のうらにいく年波かこゝろよせたまへるらうをも人にしめさんと常の和歌もこと〳〵しくやとこの頃やごとなき人のもとめによて口ずさみたまひし諺和歌百首に書讃和歌誹諧の擬歌をくはへて巻の末にそふるになんこれまたいまのなま和歌者流の新題林を枕ごとゝし雜木三玉を手まさぐりてやうやくに一首をになひいだせる輩のくはだて及ぶべきにはあらざるべし予師の門に遊ぶことこゝにはたとせあまりいまは世のなりはひものがれてつたなくも此國にてはざれ歌の師とおさるゝもひとへに師の賜なれば此巻の跋かの丸家眞柴のさそひなくともわれをおきてそれたぞやと壇賀聖の先駈にならひぬべきとしごろのちなみなれば巻の殿につたなき詞をそふるを世人にくみたまふなとしかいふ

壬戌の仲夏　芦邊田鶴丸跋

六樹園家集

春の部

歳旦

初鷄かあけの鴉かしのゝめに
聲をかけたは何やつだエゝ

天明六午の春を迎へて

けさは皆とくおきて開け午の春
あれ明六ッの太鼓うつのを

立春

懸乞の夜あけにおもき革財布
かつぎし肩もはるは來にけり

吉原初春

打はやす唐土のとりを聞ながら
ひよくと契るさとの七草

春の山

年のよる春をめでたい／＼と
祝ふおろかを山もわらふか

春のはじめに或人年玉の扇箱いだしてこれに歌かけと云ひければ

鳳凰いすむてふ桐のあふぎ箱
にほんは長く／＼をさまれる國

紳緡家松飾

松飾り立てたる歌のお家には
ちと不遠慮な海老の腰をれ

若水

山の井を手習ふ子等の書ぞめに
汲むや古今のわか水の音

武家の若餅

若餅をなまくら武士はよけて搗く
大將軍のふさがりのかた

萬歳

四の海しづけき御代は萬歳の
つゞみにのみぞ波の聲する

若夷講

あき人のよき衣着たる姿みつ
けふぞ古今のわかえびす講

子日

人の野に子日をすれば引てゆく
松の思はんことも耻かし

子日に杣人の松きりてをるを見て

のこぎりの目出たき春の子日とて
大松をひく杣もありけり

若菜

我持てるかだまも人に春日野の
なをとらんよりとくやつまゝし

姑がうち見るたびにほめちぎる
雪間のわかなありがたき物

野若菜

から薺若菜かたみに打まぜて
つみにきた野の菅家萬葉

去歳より雪たび／＼降りて春になりて菜の價高かりければ

百で買ふ一把のあを菜何ならん
にはの若草二分三分出る

春たちける日茄子を夢みて

春たちて見しはつ夢の初なすび

嫁はともあれ獏に食はせじ

鶯

うぐひすが春の序品になきしより
一天四海みな歸妙法

鶯の誦經の布施かさほひめの
かつがせてやるやなぎ紅梅

歌よみのこわ音まねぶか古今集の
序にいでました春の鶯

谷鶯

くはやくは堀出し物よ谷かげの
霞にうづむうぐひすの聲

梅樹に鶯の啼くを聞きて

百人一首によみ殘されし鶯の
楚辭に入らざる梅に來て啼く

春の歌とて

鶯と蛙がうたふ聲きけば
ひるの長うた夜のみじか歌

蕨を人に遣はすとて

おもたさにかつぎし肩も紫の
ちりが積りし山づとぞこれ

隅田川のほとりにて茅花つむ
人を見て

堤なる茅花をつとに隅田川
かへさは舟にめしてこえませ

春の野

兼好がすみしあべ野の春の色
賣物ならばむしろかひてん

春駒

ぽん〳〵と玉江横野にへをこくは
あさるに腹やはるの若駒

梅

わざはひも三年ばかりふる壁の
ねずみ穴よりにほふ梅が香

鶯にあらぬものから持て囃す
たましひ飛んで梅に木づたふ

さほ姫の乳ぶさに口を開きつゝ
南枝の梅の庭にはらばふ

名木の江南所無は世にたぐひ
なにはの浦に指をりの梅

筑紫なる神のみかきの梅の花
さかりに家の風な吹かしそ

按摩よりよほど捻りて取りてげり
長者がために枝をりの梅

狂言師善次郎と共に藥研堀に
て鉢植の梅を見はべりて

冠者が名の太郎月とてよびつきの
枝はねんなう早咲きの梅

市中の花

早咲きの花ははかりか市人の
二りん三りんあらそうて見る

橋邊の柳

橋づめの床の柳のみだれ髮
雨が來てもむ風が來てそる

春雨

櫻がり傘に袖のかをれるは
ふつてわいたるさいはひの雨

芝居見の留守する下女の泣く樣に
おともせずして降れる春雨

二日灸

如月の二日醉にやかさねたる

灸上戸めがかはらけの數
灸すゑてあつや／＼は如月の
　ふつかが丁度めぐりきよ盛

　　初午祭
はつ午の太皷も小鍛冶宗近が
　ためしとうつや鉾杉のもと

　　傾城初午
傾城のわらふ笑くぼを野狐の
　ひとつ穴からのぞく初午

　　歸雁
氏なくて玉のこし路へゆく雁を
　人もあふぎて見る北の方

　　醫師曲水
さかきづの流れての世は曲水に
　やぶ醫者も出る茂林脩竹

　　三月三日なにがしの寮にて
　　紙雛のもとにて酒のみて
渾沌のたま子もまじる重詰に
　ひらき始めや女男のかみ雛

　　猫の戀
ふきおとす物干棹に梅のみか
　猫のさかりも散らす春風

　　西行忌
釋尊の涅槃ののちの西行忌
　これも猫をば捨てたりし人

　　櫻草の花壇の風鈴の歌に
草の名も櫻といふぞ風りんも
　こゝろして鳴れ入相のころ

　　東作入道と山ぶみしけるに花
　　もまだ咲かざりければ
春風のふくめん頭巾めは出せど
　はなをば見せぬきさらぎの山

　　花（櫻）
人は武士花はよし野の山までも
　腰にはしやんとさいてこそ有れ
仙人も天狗も雲と見たがへて
　こずゑを踏むな三吉野の山
ふみみても知れ唐土にたぐひなき
　花のよし野のやまと魂
咲く花にこゝろとまるは鳥ならで
　さへづりちらす詩人歌びと
とばり帳たてゝも風をふせぎてん
　むこ山ざくら花のおほ君

　　山の花
山をぬく力もあらばさしながら
　庭にうつしてみよし野の花
老僧のおほかる山のしら雲は
　詩人もしらぬをはつ瀬の花

　　花滿山河
山川のわけ隔てなく咲けばとて
　智者も仁者も花をたのしむ

　　吉原の花
風といふけんどん箱や配りけん
　大路に花の敷ぞめをして

　　志賀山越
わが物にしがの山路のさくら花
　ひと枝たをる近江ごろ坊

　　隅田川の花を
隅田川さけばむさしと下總の
　中にいと大きなるかはあり

武士觀花

山さくら刀におぢん物ならば
散る花ごとにぬきて留めん

赤良ぬしの庭の櫻さかりに開きけるを終日ゑひ暮して花の歌よみける中に

三兩の質におきなば質屋めも
三たびやかゞん花の香の袖

庭の櫻のさかりなるを人々來て賞しける折から風吹きてやゝ散りかゝりければ

塗つけてなりと留めはや散かゝる
はな見の客は膠漆の友

落花

兒櫻いたづら風の手をあげて
かごめ〳〵にさそはずもがな

散かゝる隣の花に春の夜の
あたひせんきを頭痛にぞやむ

雉子

春山をめでゆするなる人來ぬと
知りてや雉子の鳴く聲のする

さく頃は花の王位のいちじるく
霞の神にきゞすさへ立つ

筍

竹の子を掘らんとするを秋までに
延ばして杖に切るも孝行

白魚

吸物になりてもすみし川の名の
淺草海苔をかつぐしら魚

石清水臨時祭

舞人のかざしの櫻なゝへ八重
ころものつまをかさね盃

春日祭

鹿島よりうつりし神の御祭りは
あられふるてふ賽錢の數

蛙

もとの名のお玉杓子を忘れずや
蛙はいひをもろ水にすむ

あまがへる雨になきつゝ歌よみと
なのる田中の道綱の母

山吹

みなしとな云ひそ昔も簑かりて
はなしの種となりし山吹

藤

むらさきの色に染つゝ松が枝に
つるもはひさす花の藤浪

暮春

撞木とる法師も知るや汝が手に
春つきぬなり入あひの鐘

夏の部

當麻練供養

練くやう樂屋はもとの凡夫にて
ゑま黄金もくろがねの色

灌佛會

御誕生以來の懇意卯の花と
ほとゝぎすとは釋迦むにの中

賀茂祭

もろかつら棧敷にさへも懸るなり
はな毛氈のかものみまつり

待時鳥

汝が里は許多ありともよそ〳〵は
はぶきてこゝに鳴け郭公

時鳥

郭公くるとは耳にかゝりけり
いつもはつ音の僧正の珠數

鳴わたるしこ時鳥いかなれば
夜のみこゝにくめの岩橋

ほとゝきす二四八代の歌よみの
雲井に高きなのりきゝきや

ほとゝぎす十王經のなか空に
初音をかくの如くわれ聞く

雨後早苗

さほ姫のなみだの雨に苗代の
みかさますなる袖田おくび田

蘆橘

橘はへひりくそまる老ぼけの
むかしの人の袖の香に似ず

五月五日

染幟ふたおもてにて總領の
このて柏のもちひをぞ搗く

端午の日普栗釣方が四方赤良
のわこのもとへ腹掛といふも
の贈るを見侍りて

みくすりに是をしめしが腹掛と
よもぎのせくをあつく祝ふか

初幟

あとゝりの幟はこれとみせ先の
はなにあらはす嫁の定紋

兜人形

人形に兵衛のすけをかざりたる
さつきのせくの餅もかしは木

菖蒲

昔よりすさめぬといふあやめ草
なごて端午のうまにしも引く

初鰹

初鰹さしみは毒と子を思ふ
親のこゝろはのべの雉子燒

職人初鰹

初がつをかたみはいづれ一本を
きつてするがの竹細工人

梅漬

やくといふ下女か手際の梅漬の
おもしも尻のあかき七輪

毛虫

蚊遣火もたかぬうちから扇もて
けむしとはらふ葉櫻のもと

浪宅五月雨

五月雨のふる家のもりを浪人の
盥ひとつにうけつ流しつ

螢

刑鞭の蒲より生ひし螢とて
けして諫鼓のねはたてぬなり

味噌こしに螢を入れたるを見
て

螢とる數はひとふたみそこしに
よつゆもいつかむすびける哉

夏草

きのふまで雀がくれと見し草の
わがつるはぎにとゞく夏草

夕顔
から臼の音よりましてお寝間には
茶臼もひゞく夕がほの宿

夕立
雨乞の有心の歌に無心なる
雲が感涙ながすゆふだち

夏月
蚊をいとひ蚤をいとひて寝る床に
うれしくもさす夏の夜の月

扇
鼠めがくひし扇に時ならぬ
氷柱のさまを見する涼しさ

團扇
あふぐにもあまる團扇のすゞ風は
かみの力かのりのたすけか

氷室
蕎麥の粉か饂飩かなぞとがた〳〵と
ふるふ氷室の番人に問ふ

泉
むすびたる色もなつかし涌かへる
水は岩もる中將がふみ

納涼
酒かはん左のきゝし人々は
みな肩ぬけとゆふすゞみ臺
しつた同士涼しとすゞむ縁先に
知音〳〵と風鈴の鳴る
越後をもぬぎ越中もぬぎすてゝ
すゞむ夜風にちゞむ越前

河邊納涼
春秋を何あらそはん世の中は
柳の下のゆふすゞみ舟
釣りながらすゞむ川邊の捨筏
ふむ足もとにむなぎ何本

屋根舟納涼
橋のそりは弓をひくやと三股に
ひやうと射て來るやね舟の風

役者虫干
虫干にしみてふ虫もさる若の
銀杏もみゆるふみの中村
雛人形のむし干すとて雛段に
ならべたるを見て
今もなほ暦のはかせなつの日に
たつる相馬のふる内裏雛

夏狩
ふる狸宵のつゞみがなごりにて
腹をうたれて死ぬる夏山

夏祓
もち月のかげかとばかり御祓する
川邊や秋のこゝちすがぬき

夕夏祓
水無月のなごしの祓へすがぬきを
我よりさきへくゞる夕風

秋の部

七夕
天にあらばとばかり契れ棚機の
もし地にあらば三保の羽衣
南鐐の銀河をわたる七夕の
あふ夜は年にたつた一ぺん
星にさへ誰がぬれ衣をかし小袖

すそのはりたる名を取らせけん

萩

短かきもながきも切れば涙ほど
露ちる鴫と鶴のはぎはら

水邊萩

秋萩は蝦夷にしきかも龍の手に
とる玉川のせもわたりもの

朝顔

朝顔は朝めし前に咲きいでゝ
盛りひもじき花にぞ有ける

此ごろの聖のまけし朝顔の
花にをしめる今朝の寸陰

女郎花

心なきこそうれしけれ女郎花
黄金いろの外面如菩薩

盆踊

秋風につれて踊りの手拍子も
いくたびかへす葛のうら盆

儒者靈祭

白圭のたま祭りさへ貧しくて
ことのかけたる儒者のうら盆

露

露とちる涙の玉のきざはしや
長信宮の身にもあき草

掛乞の盆の通ひはさもあらばあれ
拂ふなけすな庭のしら露

曉雁

火打箱蓋あけがたに鳴つれて
鴻雁なんぞほくちより來る

秋夕

蛤にはしをしつかと挾まれて
鴫たちかぬる秋のゆふ暮

秋里

深草はうづらに鴫に雁のこゑ
とり集めたる秋のあはれさ

月

月の中に霓裳雨衣やまふならん
望む窓にも影のひとさし

いかでわれ項羽か力もちの夜に
月のかくるゝ山を拔かまし

照る月にわれ物まをす晦日にも
出てかけ乞をねめて給はれ

天の原月の出臍をながむれば
今宵ぞ秋のおなかなりける

小便をたれて雨戸をくりてゐる
つらを見てやれ月の光りに

名所月

月を見る名どころ多きその中に
おやの親なるおばすての山

さらしなや月のてる夜は村雲に
すきまあらせよ風のはふりこ

ふる事の勝母の車おし出して
こゝにはひくな姨すての山

海邊月

濱邊には寢てゐる蜑もあら海の
あじかの目さへさゆる夜の月

都の月

夜を晝にとりかへたりと京人が
小便たごのそばに見る月

品川の月

うし町の牛いかならん月見つゝ
酒にあかしてあへぐ品川

古寺の月

あか桶の手もぬらさずて山寺に
月の桂のはなたてまつる

十三夜月

月夜よしよもよし原の十三夜
かねはこゝのつ拍子木は四つ

田夫十三夜

手作りの團子もめだつ荷もちこぶ
かた月見をばせしとゆふ暮

霧

人麿かまた篁かほの〴〵と
わかぬあかしの浦のあさ霧

擣衣

槌ひとつ七つの鐘にやすめぬは
よその砧にまけじだましひ

里擣衣

いとなみにひるは人形夜は砧
つちのはなれぬ深草の里

中川夜網

秋の水ひかれて鯉もよるの舟
ひらりと光る網のなか川

菊

つみとりて鱠のけんに仙人の
八人まへもながいきの菊

壽老人ほどにつむりの白菊は
星とよばれて杖をこそつけ

重陽の菊をちとせと玉だれの
すにつけ酒につけて祝ひつ

庭菊

折らせじと守をつけておく庭の
菊に鱠のけんなんもなし

杖たてゝ腰はをらせじ五斗米の
いろにかよへる庭のしら菊

紅葉

もみぢ葉は花にもますの魚なれや
さらに赤きが見どころにして

龍田姫のかつけ物かももみぢ葉の
錦を秋のやまのこしさし

鹿

尋ねきし山に啼かねば我聲を
鹿にきかせてかへろとぞいふ

神田祭

將門もおごろかん田に引出す
まつり家臺の七ばけの所作

盲人新酒

はつ物と盲法師もひきかけて
咽をならすや琵琶のことし酒

馬士新酒

ねだりたる不義の錢にてことし酒
くむやうかべる雲助がわざ

栃

堀川の御所栃ひとつうま〳〵と
してやるところ澁や土佐坊

落栗

五日めに風ふく代にも栗ばかり
落たるをなど拾はざるべき

暮秋

けふ秋のゆくへ知らずと成ぬるは

まよはし神やつれて立けん

冬の部

初冬

貧乏の神が出雲へ立つとはや
よねも黄金もふゆとこそなれ

落葉

おく山の紅葉ちりぬる梢には
杣が斧よりほかにははなし

はき寄せし木の葉積りて山寺の
箒のさきも坊主とぞなる

霜

化粧せぬ不性をんなの朝戸出に
ちと見ならへというておく霜

乞食髮置

米もらふかたゐか兒のもとゝりも
ひと掴みには足らぬかみ置

法師玄猪

ゐのごとく天窓のなりに圓めたる
餅もきな粉のころも着る寺

神樂

榊葉の霜ををかしとみやつこの
猶おけ〳〵とうたふ夜神樂

野行幸

世にひゞく行幸なりとは狩場野の
鷹のをふさに知る鈴の奏

氷

こふりゐし池は殺生禁斷の
塲とて手出しもならぬ寒けさ

千鳥

鼠よりわるさをすまの浦千鳥
なく音にさよのかべを破りつ

雪

ふる雪を鵝毛のごとくながめしに
たゝずむ我もいつか鳥はだ

ふる雪に風鶴璧の毛をふいて
疵をもとめし庭のあし跡

あたゝまる人の五躰は河豚ながら
佛をつくるなか庭の雪

寒念佛なか〳〵罪をつくりたり
大事のけさの雪をはたきて

名所雪

隅田川雪に棹さす船頭の
足のあがきをけさみやこ鳥

深川雪

鼠うしとらも兎もつくるなり
江戸のたつみの廓にふる雪

野雪

白雪に名をば埋まで旅人の
はぎのあとさへ宮城野の原

行路雪

嬉しさを何につゝまん宿かりし
坊主合羽の雪のゆふぐれ

市中雪

商人の見世はげん銀世界にて
誰もはらうて行く袖の雪

衾

夜を寒み氷とともにはる物は
紙の衾のかざざきの穴

顔見世の日五代目團十郎がも

とへ申遣はす
周の春こゝにみますの顔見世は
およそ役者の王の正月

白猿森田座をつとむる時　烏亭
焉馬がもとへ申遣はす
白猿のあたりを聞て江戸中の
ひいきの鼻もたかい顔見世

社家煤拂
十日餘りみかさの山に千木立てゝ
あまつこやねもはらふ煤取

節季候
わらの沓紙のかんむりよね賜へ
錢もほしさてありく節季候

歳暮
人心さわぐ師走にさわがぬは
曲馬のうまにさる曳の猿
掛乞に拂うた錢とゆく年と
どちらが先にをしまれぬらん
寒餅の仕まひの臼の一杵と
共にことしの歳もつきにき

市歳暮
よしあしは市の中にも生にけり
拂ふもかるもあながまの世や

日本橋歳暮
日の本の橋のあたりも煤はきの
ちりにこさふく蝦夷のほし魚

老人歳暮
老らくを入れしとさせし掛がねの
そのせんもなし年のくるゝ戸

大つごもりの夜狐火を見るとて王子へゆく人あるを見て
掛取にしり尾をだにも出さじとや
逃げて王子の狐火を見る

除夜
衣くばりさや縮緬とみそかけに
かけてみそかの闇にあやあり

富家除夜
千兩の箱にそなふる晦日蕎麥
のびてうれしさをがむ年の夜

戀の部

戀
松となりても生出んあだ人の
かり寝の夢の臍のあたりは
露ほどに思うてくれぬあた人に
など愛敬のこぼれかゝれる
仲立のとりあげ婆々に思ふこと
いはでふくるゝ腹を見せばや

戀のこゝろを
山科のこはだの里の馬ほどに
太皷をぞうつ君をおもへば

忍戀
忍ぶれば紅粉おしろいの外にまた
つれなし顔もつくるわりなさ
我命あふにかふべきしるしには
忍ぶ戸口に息をころせり
しのぶ夜は刀のはのねふるはれて
ぬき足もしつさし足もしつ

見戀

なよ竹のいもに見されし尻目さへ
藪にらみさて嫌はれにけり

手びき網とりもち竿もほしくこそ
妹がすがたは沈魚落雁

顯戀

逢ふ事ははや世にもれてから樽の
さしこむせんもなき痞かな

戀すとは枕にだにも知らさぬを
ついふんどしに洩らしつるかな

逢戀

出雲なる神にいのりて逢ふ夜半は
日本國がひとつにぞ寄る

再逢戀

逢ふまでとかたみにゆひし下紐を
うさん臭いとくはどうよく

會不逢戀

つめられし股の痣のみかたみにて
以來ふつゝり逢ふこともなし

無返書戀

返事だに渾沌王の音もなく
今にめはなのつかぬ色ごと

別戀

なとてかく別れの足のおもたきや
首は自由にふりかへれども

後朝戀

一夜寐し妹がかたみと思ふには
うつり虱もつぶされもせず

名立戀

見初めてし時より腰はぬけたれど
浮名ばかりは立ちてける哉

ひともじもくらはで神に祈る身を
戀すと名さへ立たせぬる哉

まてしばしふみかく窓のあかり先
たつてくれるな戀すてふ名の

祈戀

うき戀を搭にいのれどしるしだに
なくてやさかの歎きをぞ見る

戀やせて影となりぬと初瀬寺の
みあかしふみにかきたてゝ見ん

隔一夜戀

あふこそと人をかづきてよべ一夜
どちらに君はかたたがへせし

契來世戀

佛をばたのむな妹が後の世に
ひよつと變生男子ではいや

戀病

戀病のおもるを何とせん藥の
あふはかたしと親さへもいふ

思ひきやくすしの膝に寄そひて
戀やせし手をにぎらせんとは

老人戀

おろかにも戀そめにけり百の口
三十ばかり足らぬ年とて

田舍の戀

水牛の櫛になまりの簪を
もらうてにせとちぎる麥畑

寄雷戀

いなずまと共に添寐のうちやう天
雲となりまた雨となるかみ

寄河童戀

かつぱにも身はあらなくに涙川
沈みて人をめかけこそすれ

寄鳥戀

したに待つ信天翁の身としらば
落てくれかしてやらん物

寄芋戀

長芋のいもがたやすくをれたるは
戀の山路のほりいだしもの

寄蕎麥戀

現なく見そめつるべのそば近く
袖ひきぬきもはづかしのもり

寄菖蒲刀戀

こい口のかたき女と菖蒲太刀
君ゆゑ胸もけづるばかりぞ

雜の部

住吉松

ふりにける松物いはゞ化たかと
人やびつくりすみの江の松

竹

生しげる竹はみどりの林にて
かぐや姫てふぬす人も出ぬ

鶴

鶴のはねしら柏子ほど舞ふめるは
是やよもぎの島のせんざい

犬

參宮のみやにさくらの花よりも
しろこと呼びて團子をぞやる

猿芝居

猿丸のおそめが三たび啼く聲に
皆はらわたをたちて笑ひぬ

農家調度

黑木うる聲さへふとくその尻の
大きさ牛をかくす大原女

工人調度

手斧頸のみとりまなこ鋸齒
こやきりものと見ゆる棟梁

商家調度

足なくてはしり翅もなくて飛ぶ
旅のさかての馬駕籠の錢

武具

貝鉦をならさてよする夜討にも
馬の太鼓は軍令の外

酒

世の中に酒といふもの無かりせば
何に左の手をつかぶべき

げに酒は愁をはらふはゝきとて
たはこともはく靑反吐もはく

淵明か頭巾うらなき交はりは
酒にこしたる物やあるべき

屁

すかし屁の主は誰とも知らねども
ふるうてくれなしたがひのつま

孔子

德孤ならずとのたまひし隣にて
など東家の丘としものる

六歌仙

歌よみのかしらと頭うちつけし
音はこきんの序にきこえけり

遊女

うたひ舞ふ君をはじめて見る時は
涎もながく千代もへぬべし

傾城の夢

傾城のねるまもかはら周か夢
胡蝶とよびしむかしをぞ見る

夢拾金

春の宵のおのが價ひをとりにしや
夢にひろひし金の見えぬは

遊里

川竹の生しげるてふよし原は
うき世の人の子を捨つる藪
よし原を夜あけぬ内にいそぐのは
きのふむかへに來しみいら取

幽居

のがれても猶うき事はやまと猿の
獨りこのみに飽くばかりなり

訪幽栖

たる事を知りたるごちの言の葉は
此狭いでもうら山しけれ

醜女の賛

ほれられた例無ければ名も立たず
これやその身にそなはれる福

吉野山の櫻の畫に

みよし野はさくらも櫻歌人の
ことばの花も山をなす山

旅人の花の枝折とるかた

わが物にしがの山路のさくら花
ひと枝たをる近江ごろぼう

仲の町の櫻のもとにうかれ女の客をおくるかた

傾城と花とをあかで見る時は
入相もいや東雲もいや

屏風の畫に逢坂山の月見る處

鳥の啼くあふ坂山に月見んと
ゆふづけてこそ人も來ぬらし

陶淵明の菊を見る繪に

杖たてゝ腰はをらせじ五斗米を
しらげし色にはもせの菊

名所の花紅葉をあつめてすき入れたる扇に物かけと人のいひければ

歌よみにゐながら見よと花紅葉
扇にはると秋の名どころ

烏の畫に

孝行は二十四孝の一倍の
からすは四十八鷹のうち

蕨に兎のかた

蕨の手兎の耳にくらべても
まだ〳〵長し春の日のあし

赤人の富士の山を見るかた

たけ高きさまは劣らじ不二のねに
ならぶ山邊の赤人のうた

業平朝臣のうつし繪に

業平の歌をわれらが讃むるにも
意あまりて言葉たらはず

虎溪三笑の繪に

もろこしの人が三人寄あひて
から〳〵〳〵と笑ひてぞをる

周茂叔の繪に

蓮葉はかぶりを振りていひけらく

茂叔は人の君子なるもの
蛤の傾城を吹出したる畫に
蛤のなかの町よりいでし君
いかなる粹がかゝるみを食ふ
あそびの起請かく畫に
傾城の牛王の起請かくたびに
烏もかねになる熊野山
惣嫁の畫に
くれ六つと四つの間に客とりて
そもなにごとを四六二十四
柳原向がもとにて尾上松助が
玉藻の前に出たちたる姿を俊
滿がゑがけるを見て
なか〳〵に人は狐と化けにけり
こやこゝのつの尾上松助
諫皷のかたかける繪に
戸をあけて寢る太平の樂しさは
目にだにかごをたつる人なし
ある年の大小なりとて十二ヶ
月の文をつゞりて蜀山人のも
とに送りたるにいかにしけん
七月分のことばを書おとした
りしを蜀山人のもとより「五
のしるし六樹の園はありなが
らなど七兵衛といはぬ大小」
といひおこしける返し
耻らいて名のりもかゝぬ文月は
君にとられしことば七兵衛
ある年新宿のあたりに家居つ
くりて住けるに道遠ければこ
て盂蘭盆になりても棚經よむ
べき僧の來らざりければよみ
て遣しける
山里の盆は法師もとはざるを
なき人いかで淨土より來る
久しくその中うとかりし四方
歌垣眞顔と堺町中村座の芝居
見物のとき和解の盃すとてよ
める
今年までだんまりの幕引返し
氣もあひ駕籠のもとの棒組
尾張宮の宿なる綱屋が櫻の間
の座敷開きによみて遣しける
とふ人はうしほのわくが如くなり
名ある綱屋が家ざくらとて
牛込の北牛天神のもとなる馬
蘭亭の狂歌會によみて遣しけ
る
玆ぞとて牛はうしづれ集ふなり
ふもとに歌人山に天神
有罫に入りたる人に送るとて
ふ文字七ッよみいれたる歌
ふた股のふとき大根をふろふきに
煮るすみ釜のふたもふく〳〵
平秩東作本郷のほとりに住所
もとめて俄にまめたちて論語
の講釋よと聞きてとぶらひけ
るに留主なりければ
聖堂のうしろに儒者の香のするは
孔子のひつたへづゝ東作

新宿といふ處にすまひけるに
吳竹の世暮氣衣服花やかに出
たちて立寄りぬたゞにはあら
じ此わたりのあそびがり行く
にやといへば宿をいづる時誰
にもしかいひきと笑ひければ

沓冠うたがふはむべ此あたり
　鳴子の瓜に桃園のもゝ

千首樓のあるじ久しく訪ひこ
ざれば文やる序にをさな子の
もとへ豆太鼓といふもの遣は
すとて

紙太鼓ならう事ならふりはへて
　まめであるかの音づれもがな

朱樂菅江の家に狂歌の會あり
兼題はつくしなり平秩東作と
共にゆきけるにあるじはをと
つひより外に出ていまだ歸り
來らずかゝることは常の事な
りと節松嫁々ぞいふなるすさ
ましければ歸りなんとてさう
じのはしつかたに書つけゝ
る

今日もまたながし物にや菅江の
　つくしとばかり題をのこして

市村家橘堺町中村座をつとめ
たる時

猿若にしばし遷座のありがたや
　ゆゐ市村の所作の氏神

芝居役割のうち蓮生法師を

花道をゆく蓮生がいかなれば
　西の棧敷にうしろ見せけん

吉原につとめけるあそびのい
かなる故にか又新宿にて勤せ
んとて來りけるをこゝの女ど
も寄集まりてそも吉原はいか
なる處ぞ客をばいかにあつか
ひたまひしなど問ふにうひう
ひ〳〵しくやいらへもせであ
りければかの女に代りて

折ふしは間夫とねん〳〵二三月
　初會は桃李一片の春

唐丸にいざなはれて陰間もと
めにゆきて床に入りけるに此
若衆俄に痔のいたみ堪へがた
しとてうめきければ

さしあたり何とせん湯のはひり口
　釜破損に付今日休み

人にをしへられて松つくると
て

山住は水に疎食の手づくりの
　松のひぢさへ曲げて樂しむ

奥まりたる所にすまひける時
はひりの柱に書つけゝる

あな侘しちく〳〵さして人ぞ來る
　我ありとだに見せぬ住家を

文政三年あらたに草庵を靈岸
島につくりいとなみて

たてそめし家居にうつる古翁
　あるじ顏こそあたらしといへ

ある尼のあらたなる庵をむす
びければ
尼の身のむかし束ねし髪ならで
草のいほりをけふ結ぶかな
曹司ヶ谷のわたりに宿坂の關
といふあり古き名どころなり
など人のいひければ
古跡ぞと聞きてしかけし小便を
とむるもつらし宿坂の關
日本橋
日本ばしもし唐人が渡りこば
見せん繁華のこのとほり町
品川
品川へ旅送りしてけいせいの
こしの柳をよぢて別れぬ
蜀山翁の府中の宿りにあるを
訪ひ侍りて
君もまめわれらもまめは豆ながら
ふちうに在りて泣く草鞋くひ
或る年の十月尚左堂のかしま
立を送るとて
ざれ歌の神にしませば旅立ちて
十月をしも留守にしたまふ
ある年の秋東夷庵古渡の旅立
すと聞きて
わがすがる袖をはじめて出女の
いくたび引かん旅の夕ぐれ
名をなのる鳥さへ來るをかり／＼と
かみつゝいぬる旅のかれ飯
砧音成か故郷にゆくを送りて
あはぬ間は短かき旅もうらみつゝ
かゝもろ共に指をこそ折れ
述懷
歌よみは下手こそよけれ天地の
うごき出してたまる物かは
世わたりの道にふたつの追分や
たからの山に借錢のやま
ぬれ衣を見わくる人のあらざれば
水かけ論のひる時ぞなき
貧者述懷
金を手ににぎり拳でわが仇の
貧乏神のつらをはらばや
陰間述懷
つゝがなく守りてたまへ痔の神よ
あはれとしりの穴のあたりは
女形懷舊
光陰のやらう帽子もうるさくて
戀しきもとのおもかげま哉
老女懷舊
いつの間にみどりの髮も雪つみて
柳ごしさへかくかゞみぬる
神祇
みたらしにむきて心をおこし米
鯉のみてこそ手をも打つなれ
通ふ神といへる意を
吉原にこれもふさんの通ふ神
あしたには猪牙ゆふべには駕籠
南無阿彌陀の五文字を句のか
しらにおきて手向のこゝろを
なき人の昔をくればあはれ世に

みじかき珠數のたまのをやこれ
桑楊庵光翁をいたみて
なきがらと成にし人ぞ忍ばるゝ
濱のまさごを見るにつけても
千代徳若をいたみて
涙をばそゝぎ盡しぬ極樂へ
けふ誕生のにひ佛には
上書此主がむすめくにといへ
るがみまかりぬと聞きて
きのふまで舞うたひしを思ひきや
佛御前のたむけせんとは
橘洲ぬしの七回忌に
野送りの秋もかゝりき高燈籠
天蓋けまんはださむき風
朱樂菅江を悼みて
世に鳴りし人を思へど音づれも
ふつに聞かせぬみゝらしの島
飾松嫁々をいたみて
家の風高くふかせしふし松の
おひきなされし琴ぞ戀しき

文政八年むつき十日四世藤間
勘左衞門のみまかりしをいた
みて
三味線の糸によるものならなくに
心ぼそしやわかれ三重
或人をいたみて
鶴龜にたぐへし君を思ひきや
蠟燭立てゝをがむべしとは
萬徳成か父のみまかりしを悼
みて
ふじの雪ときえにし人をみな月の
その夜よりふるわが涙かな
鐵眞法師の碑を橘樹園早苗が
いとなみたつる時其裏にゑる
べき文かきて與へたる末に
限りなく長き世照らすことわりの
ちかいは空にありあけの月
千秋庵三陀羅の賀宴によみて
送れる歌
三陀羅の君がわかなを祝ひつゝ
ちよつと一葉とけふもつむなり
ある人の年賀に申遣しける
蓬萊の山わけ衣すそたかく
かゝげてのぼれ千代の鶴脛
ある人の六十の賀に
食傷と腎虚をなせそよい年を
してと子供や孫が笑はん
賀
鼻の下一寸ありてべらばうに
長いきをする君ぞめでたき

六樹園家集終

朱樂館家集

春

立春

棹姫の笑ひかけつゝ山のはを
　あらはす方に春や立つらん

さる程に睦月たつよりけさはまた
　生れかはりし心地もぞする

あし原やけさは麒麟もまかり出て
　おのが角くむ春にあへかし

佐保姫のきたる霞のうちかけは
　けさしも春のたちおろしなり

あら玉のとしさへみがき上たれば
　卞和の玉も春や立つらん

年内立春

年の内にも春はくれども掛取の
　せがむかぎりはあらしとぞ思ふ

鶯の聲はやきゝて山里は
　けさやまことの春と思はん

元日

土器の土性ならばとその酒
　ひとつは返せやまと魂

鏡餅

霞さへ春さへけさは立つものを
　餅はすわりの尻の重たき

年禮

年禮の門の柳の糸車
　廻り道して客やくるらん

初春

あふみのや鎧の山といふつらの
　春にうつらん翁さびても

子日

けふはまた引手あまたの姫小松
　たれとねの日の春ののべ紙

いまだ夜は深き小松の寐いりばな
　はり起してもさらば引かなん

亥日小松（こゝに）

亥の日からもはやねよとの刻限を
　きけば小松もひけよつの頃

雪中若菜

いかさまにしても若菜や包みてん
　己が頭の雪間たづねて

春の野の鶯菜とてもろ人の
　けふは雪間にはうちてぞつむ

鶯

なべて世に春つぐるとて九萬里の
　つばさはまさかからぬ鶯

梅

誂へたやうに下萠の一寸戸
　これより匂ふ庭の梅が香

杉田の梅

春風もよい程ケ谷のこなたより
　横へ杉田の里の梅が香

ある人の許に梅の花見にまかりけるが鰻を手づから燒きて酒すゝめければ

目の前で手づからさくやこの花に
　匂ふ鰻の梅がかば燒

若草

あつさ弓春 ながめに若葉さへ
矢はずに ゆる垣の檬

如月のはじめ雪ふりける日豆腐に山の芋すりかけたるを喰侍るとて

山かけにつもる豆腐の泡雪も
春のものとて腹にたまらず

春の日内匠はしらかもとにて刀脇差のものによそへて春の歌よみける中に柄絲を

雨ふりて地まで刀の片手卷
ほぐれぬ春の柳屋の絲

早蕨

もえしその蕨のあくはもえしその
蕨のあくをかけてこそぬけ

春駒

淀からはみづの御牧の程近く
手にとるやうに見ゆる春駒

春興

長閑なる春のひらめのかたみをも
若菜 交てつみ入にせん

野遊

松をひき若菜をつみて丸に日を
二日つぶせし春ののらもの

春の野はやくともやかて侍れかし
子を思ふひばり妻慕ふ雉子

初午近

初午はむつきのうちにやゝ近し
最早幟のちをつけてみん

初午

武隈のまつにほどなくきさらぎや
いなりの酒はみきといはまし

稲荷の御社に豆腐捧げたるをみて

此神の聞召てやさゝげたる
豆腐も八の御耳はあり

遅日

夕暮にまた訪へば花の主曰く
きのふはいつもながら早々

曲水宴

盃も肴も水に流るゝは
ほろ〲ゑい和九年母のかは

彌生の半洲崎なる望汰欄にまかりける時人々庭より海つらの汐の干潟に下り立て貝拾はんとていざといひけれど腹いたう減りければ

やれ〳〵と汐のひる飯急ぐなり
青海はらのへるに任せて

朝花

山櫻一重羽織もしつとりと
身に添ふ花の朝濕りかな

吉原花

手の届くほどに禿を抱上げて
折らばや花と花の吉原

田夫息花蔭

咲花の一樹のかげに山がつの
休むも花のくされえなれや

花下酒宴

此節はなんぼ櫻のき下戸でも

肴あらしよ花にいさはん
花のもとに香煎をのみて
香餅によし花の香はまがふとも
さのみは風の薬湯にちらすな

落花
散らふかと皆人案じ煩へば
花にも風は百病の長

隣なる寺の櫻を折らんとてゐ
せ法師木に上けるをみて
花の木に上る坊主の憎ければ
落て手ふさに怪我してよかし

餘花
君が代の春にあまんの花し見れば
みにつく粟も布も物かは

菫
紫の初元結のゆかり顏に
きしの額ゝすみいれぞさく

ある人籠の内に飼置ける時鳥
の彌ゝ始より鳴くをきゝて
鳥春をかけてか鶯の
卯のうちに飼はれてぞなく

燕
己が巣に土をぬる夜の明けぬ間は
つばくらやみに羽をやうつばり

對花惜春
いやましぬ花は一輪〳〵に
へれども春を惜む心は

三月盡
春もけふねきりはきりの灸上戸
惜めどいつかひとひとぞなる

夏

更衣
花にねる蝶の夢の間蝶よりも
手になつきたる蟬の羽衣

卯花如月
卯花は中々月のある夜より
月なき夜半にみよ月の如し

郭公
時鳥みそかに鳴て過る夜は
あとに殘れる月影もなし

鰹
時鳥けふ世にもらす聲よりも
ゝ別て鰹のねこそ高けれ

柏餅
すだちせぬ雛鳥なれや柏餅
これも並へてはにくゝむなり

筍
とにかくに曲りくねりて生るのも
又南山の竹の子ぞかし

江五月雨
ときたまへ磨き玉江の五月雨に
水にますみの鏡鑄させて

撫子
朝露の色のちくさにかがやきて
日の出る國や大和撫子
通辭だにあらばいかにも譽てまし
から撫子に大和撫子
琥珀とはちがひて露の白玉は
ちりだにすゑぬ床夏の花

小梅既熟
黄金の色となるまで熟したる
　梅はもとより小粒なりけり
照射
しか／＼の用事と松をふり立て
　急ぐ五月のやみのますら男
水雞
はつれたる門のかけがね掛合に
　たゝくは水雞松の夜嵐
夏月
夏の夜の月をあまりにさゝせんと
　わざと格子はさゝぬ涼しさ
蚊遣火
まれにくる蚊は叩いても防ぐべし
　いぶせ安宅の算の杉の葉
氷室
夜のめをも寢ずに守らん氷室守
　此丹誠を水になさじと
水無月の日にほしつけて松ヶ崎
　かたき岩根に冬のかたまり

樹陰汲酒
茂り合ふ木影に月はさゞずとも
　のめならの葉のひろい盃
山夕立
つくば山つゞくあのみねこの峰と
　くづれてきほふ夕立の雲
水無月晦日掛乞の來て改め侍りければ
貯もみなつき果てゝ一文も
　けふはなこしのはらへだにせず

秋

文月つい日赤坂なる桐屋といへる家のあるじを始めて訪ひ侍りて
秋もけふこばんの桐屋一葉より
　まづ落そめて藏にみつ次
七夕扇
七夕もさながらとしに一度の
　扇はいまだすてぬ初秋

七夕後朝
よべかりし硯をしばしとめ置て
　ほしやけさかく文月の空
文月十三日掛乞の來て切に攻侍りければ
鹽鯖のからき浮世の攻太皷
　うつやてん／＼舞の一さし
葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて
よせぎれとみゆるお寺の錦かな
　どこもかしこもはぎたらけにて
秋野
狼籍に花をもふみにふまざれば
　秋の野守のとひやうそなき
靈棚露滋
蓮葉に手向る水は濁らねど
　野面あざむくつゆの玉棚
吉原草市
靈祭る草葉にけさはうかれ女の
　その朝顏も添てかはまし
鹿

秋草のはなの先より聲立て
おどろかすがの野邊の棹鹿

山鹿

棹鹿の角は紅葉の木の間より
枯たる枝とみえて淋しき

菓の庭の八朔梅ひらきけるを
みにゆきけるに折から雨ふり
出ければ

一枝を折しも雨はふり出ぬ
けふをたのみや梅の花笠

槿

夜嵐に垣根はねても寐ながらに
めをさましたる朝顔の花

晝朝顔

はなのさき斗洗ひし手拭の
ひるま置たる朝かほの露

野分

柴の戸は野分の朝もかけかねの
ひぢを枕にねて起ぬなり

里の子に追かけられていか栗の
地をかけ廻る風のはけしさ

秋夕

黄昏のそらめに白きふと股を
みて肌寒き秋の夕暮

題しらず

はせを葉の二百十日に一枚も
破れぬ御代の秋ぞしづけき

十三夜月

そめ出來ぬこんやの月を眺れば
秋の最中はたしかあさつて

きく月の月見はもちの月ならず
籬に花のさけや盃

十五夜月

天の原月すむ秋をまふたつに
ふりわけみればてうど仲まろ

十七夜月

ぬきはなす雲間の影は武士の
こしにさしたるたち待の月

待月

月をまつ月をまつとて待夜半の
その僞は影でうれしき

緇素望月

すみ渡る月に虎溪のはしたなく
笑へばともに口を秋の夜

旅人對月

この間都を立て鹿ぞすむ
きせん泊りの旅籠屋の月

山月聞鐘

月をみる口は一つぞはつ瀬山
かねきく耳は二つあれども

擣衣

邪魔いたす男や槌て追ぬらん
妹がきぬたの間のひ間つまり

紫苑

けさははや鬼のしこ草をのが目も
露もつばかり秋はかなしき

鴫

萩すゝきなへてふしみの秋ふかみ
鴫より外に立ものもなし

赤蜻蛉

忍ぶより聲こそ立ね赤蜻蛉
をのがおもひに痩ひこけても

秋田

秋の田にかゝしに苫のむさすして
鳥おどろかす弓そめてたき

菊

人はみな秋をかなしといふ中に
かゝるかのある菊ぞめでたき

籬菊

不得手なる人も籬の露ほどは
なめて千代へよ菊の盃

九月九日

山里はけふ節日ときくさへも
淋しき茱萸のふくろくの聲

紅葉

梅櫻卯木と花にみつかれし
目にもさはらぬ秋の紅葉ば
楓葉は千しほ百しほしほしみて
から錦とや人の見るらん

栗

いが栗の笑はふくめど秋風の
ふけばあたまの上にあぶなし

暮秋雨

長月もやゝふりぬれば枕にと
まげて短き肱かさの雨

浦時雨

不慮にふる時雨じやとても濡るには
馴し雄島の蜑の袖笠

殘菊

病葉に冬の色も人や訪ふと
ちとしほたれてみゆる白菊

落葉

山里はちりし紅葉の錦をも
木綿ほどには思はざりけり

冬

初雪

集ても今は老　の學文に
ちと不足なる庭の初雪

青樓雪

降雪もよしや夜見世のすがかきを
ひく絲道のあとはうづまじ

堺町雪

けさみれば木毎に花のさかい町
あら面白の雪のふり付

雪中鷺

これにだに目鼻がありて固めたる
雪のうごくと見しは白鷺

水鳥

折立てさても短き足かなと
我みくらべて鴨やなくらん

網代

網代守る人も手足のこゞえては
只ひをほしいとのみいふらん

垣寒草

葉もつるも枯し垣根のはちふくべ
重みにつれてかしぐ寒けさ

池寒芦

麻裃ひださへ折て池水に
たゝめるばかりみゆる枯芦

河豚汁
我命あふにはよしやかへずとも
河豚にしかへはさもあらばあれ

衾
十分に足をつゝめば手にたらで
手に餘りたる麻手小衾

歳暮
借金も今は包むにつゝまれず
やぶれかぶれのふんどしの暮
立てみし柱暦も寢轉んで
よめるばかりに年はくれにき
十二月けふとはなりぬ九月盡
三月盡を二つかさねて
思ひきや三百五十日あまり
けふかあすかに年くれんとは
年波のよりそふはてや越ぬべき
社暦も末の松山
物ないひそ暮る今年はたけなはに
なればなるとて引もどさなん
師走の末に雁の鳥をかへとて人のもて來りけるをかはで返すとて
かり金ときくさへぞつと師走しま
いやよなしても八百の鳥

離別

三井長年が都へかへる馬の餞すとて
旅衣きさまの店はふるさとに
かへる錦も仕入いくむら

旅
一里ぞと聞し山路を一里きて
猶一里ある旅ぞはてなき
難波へゆく人を送りて
ゆく先は勿論あしの名所とて
大坂たびのふみだしのよき

祝賀

八十賀
彌が上になほいやそちのその餘計
たんとならすは千年でも經よ

祝
君が代は天津乙女の撫へらす
巖もさゝれ石となる迄

寄枕壽祝
床もはやをさまりてよい君が代は
もういく千代と祝ふ枕書

寄新宅祝
水繩もひづまぬ小石かはら葺
いはほとなりて動なき宿

寄酒祝
まつくんで南の山の壽に
酒の相手もかけすくづれず

寄袋祝
口にいまあまる千年を袋より
きりのもぬけて長い御壽命

寄角力
君が代に角力の關と關の戶は
いづれ左も右もさゝせず

寄鳥祝

治れる御代か諫のつゝみにも
こけかうとなく鳥ぞかしこき

君かへん齡いくらと數ふれば
十貫文にあまる錢龜

倉部行燈が改名せるを祝ひて
改めし其なの花はせんざいに
のこす詞のたねやさるらん

戀

逢戀
かへしたる夜の衣やたゝみざん
近江表にあらはさねども

これまでに絞りし袖やあさくみん
うれし涙を今宵こほせば

夢中逢戀
思ひにてかほと五臟のつかれずば
夢にも稀にいかであふべき

不逢戀
戀衣ぬへどゆきたけあはぬなり
上總木綿にけふの細布

そろばんの掛て逢ぬもわりなしや
たへず涙の玉ちがひして

通書不逢戀
かきそへて封じ直せど封じ目の
あはぬもつらし文はやれども

未言出戀
口の外へ未出さねば三寸の
我舌にのみ思ふ苦しさ

我戀
我戀は下手のはりたるふすまがた
かたの如くに逢ふよしぞなき

纔見戀
さ斗りのかひはあれ共ありそ海の
いそのみるくひみの少なさよ

待戀
こぬ人をまつ前昆布の鹽ならで
袖こそしめれみづからぞうき

後朝戀
衣々に絞りし袖をかた敷は
かたつらしめるけさのうたゝ寝

老戀
往かけの駄賃と人のにくまずは
老が命もあふにかへなん

戀のこゝろをよめる
ものたねと人はいへどもあふ事に
かへぬ命のありかひぞなき

寄神戀
知るや人はなをかみろき神ろみの
みこと夜ごとになき明すとは

寄書戀
くる／＼とだまして横にそふけるに
紅毛もしのよめぬ心根

寄稻妻戀
暫くも夜毎に尻をすへざるは
わが妻ならぬいな妻ぞかし

寄大根戀
戀死なばこのみもとの土大根
うしや中々いけてをかれて

古かね買の戀
袖の上に涙は雨とふるかねを

高くかふてはあはぬ夜ぞうき

寄狂歌戀

言よらんゑんさへ遠きたはれ歌
どうぞ手にはの逢ふよしもがな

寄海月戀

知るや人所詮いひよる筋のなき
くらげも骨にあふ夜ありとは

竹枝爲輕の父の思ひにて侍りける時よみて遣しける

申べき言の葉もなしあしすだれ
あのよこのよのふしの別に

大東冬名身まかりければよみて遣す

藺相如いまさはまたく此度も
よもつ國より玉かへせかし

同じく犬のをきつきにむかひて

來世にてならば佛果をえのころよ
なむあみだぶち〱

無常

養生も相叶はずといふ文をそのまゝ顏に押あてゝなく

雜

天

愚案にはすめぬものからすめる物
昇りて天津空となりけん

不二山

白扇を逆さにかけし山は今
つまこかしたる烟たつなり

川

高野山たが毒ありとをしへけん
はてのみこめぬ玉川の水

人々六玉川をわかちて歌よみけるにわれ高野の玉川をよむべき定なりけれどいたく酒に醉ひてよみ出ざりけるをいかにいかにと人のせめければ

酒ゆゑによし忘れても珊瑚珠の
われにはゆるせ玉川の水

隅田川

名に負はぬ東のはての都鳥
白きは雪とすみ田川かな

淺茅原

露をけさかれは淺茅がはら〱と
ちるや鏡が池の水かね

山家

里の子は猿といふとも山かきの
もとに住つゝ身こそ安けれ

山里はいまだ朝茶も出來ぬ間に
烟りふくめる軒の松か枝

庵

灯火はいつも嵐にふきけして
さてくらしよき松の下庵

古寺鐘

なく鹿の園の別れはさらぬだに
悲しき秋を鐘ひゞくなり

岩に海ほうつきつけたるかたかれたるに

沖つ風うみほうづきを吹からに

自然とあはのなるとこそきけ

童舟をこぐ
さうだそだちがらこそ賢けれ
浪も高瀬の船頭の子は

竹色不改
其色はかへるきでなし草でなし
竹のふしぎに世々をふれども

鶴
浦浪のよせてもすそはぬらさじと
まくりあげたる鶴の毛衣

扇に鶴を畫きたるに骨鶴の目を貫きたるを世人めでたきためしに云ならはすめりある人この目さしの扇にうたよめと乞ければ
千代をふる御了簡なら常着には
これを召させよつるの毛衣

文月十二日の朝あけ方に雪級主の田町の別莊にふと逢見にまかりけるにゆくりなきあるじもうけにれいの醉侍りて
もてなしは露をたまちの水うまや
濁にしまぬさらさ蓬莱

秦黒つらが家に人々つどひけるに彼此あるじゝ侍りければ
梓弓彌左衛門町のまとゐとて
はたを抜たるけふのもてなし

ある人のもとにて酒のみけるに美はしき女の童のうなぎのかばやきもて出ぬれば
かばやきのうなぎは妹が髪なれや
さすくし迄も油じみぬる

燒物の盃に酒をもれば自ら盃中に星のかげうかむとて重寶にしける人のもとにて
一口は下戸でも千葉のすけよかし
家の秘藏の盃にほし

酒
足もともよろ萬代の末迄も
のめ猩々のすきな酒なら

東方朔
三千歳になるてふ桃の盗人を
みればよはひも手も長くして

鍾馗鬼を挫ぐ
其昔みしは夢野のしかばかり
霜にやいたむ鬼のしこ草

大原女
黒髪の油うつりてもえ安し
安うはめせよめせよ大原木

遊女
年のあく月日はいつとかぞふべき
指さへ切し仇し身ぞうき

唐琴といへる遊女うらちといへる禿にをしへて杜若をゑがかせければ
うつし畫のかきつばたなら唐琴の
うらちに膠ちとひけよかし

うかれ女の浴したるかたかきたるに
打かけの裾よりわきてわきも子が

風呂には湯をや長くひくらん
けふなん武士八十氏の家にて
ふたゝび春の來れる心を人々
のよみければ序に
武士の八十氏川にいざよへる
春や田原の又太郎月
谷風梶の助淺草藏前八幡の社
内にて角力興行の折小野川榮
藏にはじめて敗れたる時
手練せし手をとうろうがをの川や
かつさ車のわつといふ聲
智惠内侍のよみ歌にかへし
四方山のことばつもらは梓弓
引絞りても矢ははなすべき
平秩東作が商ふ烟草をほめて
きせるもてこちだに吹は春日野の
春のひざらに草はもえなん
世の中しはふきやみいたう流
行けるにその頃世に双ひなき
角力に谷風梶の助といふあり

この頃の風つよければとて皆
人谷風と云ければ
水はなの誰かはせきをせかざらん
關はもとよりつよき谷風
詞書略
見し月は蘇子てすめるや曇れるや
ひとりは死客ひとりは痔客
狂言太刀奪
束のまに太刀や奪はれ太郎冠者
さしつめ己が目釘ぬかれて
柳に蹴鞠書きたるかたに
夕雲雀それにはあらで沓音も
高くあがるや一羽庭まり
貝の畫に
取ためて　ふ汐干のかたはあれど
千種の貝につくる世はなし
菊を書きたる扇に
秋きてもどうぞすてずに此扇
お手にならさしませの白菊
物名りうたん

こと草はかるたさみれど小六月
七八九十とりうたんかも
楠成石
搖せどうごかぬ石とけしほども
中ぶんなきくすの君かな
人壽百歳七十稀 一分衰老一
分癡中心二十餘年 事幾 多歡
樂幾多悲
やゝくしとはへ揃ひたる齒も落て
うまく物くふ程ぞ少なき
懷舊
いつみてもさてお若いと口々に
ほめそやさるゝ年ぞくやしき
述懷
世の中をあかでうきとはうその川
ながれわたりの果のたのしさ
寄玉述懷
はけしより夜も光りて老らくの
あたまは玉の數にこそ入れ
如是本末究竟等

たゞく聲をぬえとは聞ど尾をみては
尻か頭かいかでわくべき
智恵内侍かしらをおろしける
後尋ね行て
髮のありし昔かたらんあまそゝぎ
まやのあまりの久しぶりにて

釋教

先住のあとをつがんと新發意は
日毎にのりをときてまします
眞乳山歡喜天に詣侍りて
わに口をならせばまつち山彦に
こたへてひゞくくはん〳〵き天
大津繪の鬼を見て
なむあ彌陀ぶつと悟りし發心に
鬼も早速滅無量罪
大津繪鬼の念佛
佛名もうろ覺えにて鬼の目に
涙〳〵と唱へてやゆく
小さくひきゞ家に神棚のあり
けるにともすれば人の頭うつ
に心つけんと此うたをかきて
出し置ける
千早ふる神にも店をかすなれば
大やしろとぞ人のいふなる
この頃生れとしの七ッ目なる
十二支の繪かきて身の幸を祈
るに大黑天のみかたち繪馬に
かきて初午日稻荷の御社にさ
さげ奉るをみて
甲子のその七ッ目のはつ午に
荷ひし稻のたねも摩訶迦羅
故混馬鹿集の歌ともやがて廿
巻となれりければ人々祝の心
をよみけるついでに神祇の歌
とてよめる
ことの葉はする住吉の神がきに
かきあつめてよ松のはた巻

辭世

執着の心や娑婆にのこるらん
よしのゝ櫻更科の月

滄洲樓家集

はしがき

一滄洲樓馬塲金埒の家集として上梓せしものあるを知らず只余の見たる所にては文政六年版の追善集『あど佛』に同翁自筆の狂歌百首を掲げたるものあるのみ故に玆には各撰集より同翁の詠を拾ひあつめて四季戀雜の順序にかいつけやがて滄洲樓家集と名づけ置きつ

一馬塲金埒は通稱大坂屋甚兵衛初號物事明輔又錢屋と號す後ち蜀山翁より滄洲樓の號を讓らるつぶり光宿屋飯盛鹿津部眞顏等と共に實に狂歌四天王の一人なりき文化四年十二月十日歿す

滄洲樓家集

春の部

年内立春

春たてる年の内田の一徳利
古酒とやいはん新酒とやいはん

右の歌『あど佛』には「年の内に春は菊屋が一徳利古酒とやいはんことし酒とや」とあり

春のはじめの歌

花咲かばこよと諸國の年始狀
一目づゝでもおよそ千本

早春

春きぬと行かふ袖も花なれや
六位はみどり五位は紅

仝

百鳥の中に一きはあら玉の
としのあしたの蘆田鶴の聲

試筆

かぞいろはめこも奴もまづ笑へ
筆試むる春のざれ歌

門松とりたる跡を見はべりて

七くさもはやすぎ立てる門ならで
しるしばかりの松の二もと

霞

神路山なほ分いればなにもなく
たゞ春霞たゝせ玉へり

鶯

山里はまだ白雪の不老門
おそき月日の鶯のこゑ

柳間鶯

青柳をいと枠にかけて鶯の
いとくり〳〵とくりとぞ鳴く

梅

もろ人に香をば讓りてとめじとや
袖なし羽織きたる梅守

仝

立いでゝ見れども梅のにほはぬは
鼻に障子のあればなるらん

柳
野わたしのさをの片手のさし柳
させば其まゝ横さまにつく
行路柳
よりさはる袖に袂にうち靡く
柳は道のものにぞ有ける
梅柳交枝
春來ぬと花屋の柳うち靡き
梅のはつ荷もひもを解けり
若菜
門過る流れをすぐにながし元
水菜も芹もことのたるほど
雪中若菜
佛の座〳〵とて尋ぬれど
蓮臺野にも見えぬしら雪
春雨
春雨はいとにふる根の萩薄
思ひ出顏にむすぶ白露
春夜
春の夜の曾我物語よむ中へ
またどこからか出るげぢ〳〵
遊糸
春日影高觀音にかゞやきて
御手のいとからつゞく遊糸
呼子鳥
むかしより猿にしておく呼子鳥
ないても見まい見てもいふまい
花
入相の鐘にちりけはこたへても
嵐はよほど花にけんぺき
化物百首歌の中に櫻を
花の雲天狗櫻とあらはれて
空からどつと笑ふやま風
志賀山越
雪ならばいくら酒代をねだられん
花のふゞきの志賀の山駕
湖邊花
塗笠の墨もまだひぬ大津繪に
花ちりかゝる志賀の山風
古寺花
花の雪瓦の松にふりつみて
いとゞ曲りし志賀の古寺
夢見花
思ひつゝぬればや夢にみよし野の
花は錦の夜著で有たか
橋下落花
ながれゆく櫻を渦に卷よせて
花をもねたむ宇治の橋姫
花に鳴く蛙といへることを
影ひたす花の錦も池のはた
をられぬまゝに蛙鳴くなり
遲日
櫻咲ゝ遠山寺の一里鐘
つく〳〵おそき日あしなりけれ
暮春
我庵はちりもほこりもみな櫻
此月ばかり三十日掃すな

夏の部

首夏

花はみなおろし大根となりぬらし
　鰹に似たるけさの横雲
　　化物百首の中に更衣を
今朝ははや夏もきつねが藻の花を
　かぶつて化のかは衣がへ
　　餘花
有あまる金の御嶽の櫻花
　日ごとばつぱと散らしたれども
　　郭公
月の輪の渡をこえて時鳥
　しのぶその音も亂れそめにし
　　仝
時鳥あたら初音に聲そへて
　耳にかしまの蜑のさへづり
　　仝
郭公なくねもてうど八せんの
　はじめ終の空にふるほど
　　都時鳥
時鳥西八條に啼くといへど
　までの小路のまてど甲斐なし

　　螢
玉水や井出のほたるは山吹に
　みのひとつづゝ有るかとぞ見る
　　夏月
夢なれや浪花のあしの短夜に
　かりし太夫とふし待の月
　　初鰹
烏帽子とも松ともいへば初鰹
　かたみは須磨の鹽燒もよし
　　杜戸八景みにまかりけるに心
　　無村といふ濱邊にて初鰹をも
　　てなされて
石皿へ山にもりとの初鰹
　煑ることはあまり心なし村
　　扇
折扇をり／＼鳥の聲に似て
　たゝめば竹の雪をれの音
　　都白雨
うち日さす都大路は土くれも
　よき匂ひなる夕立の雨

　　納涼
夕月の出汐を松の下すゞみ
　舟にはあまり風はやの浦

秋の部

　　虫
きのふ頃鈴菜すゞしろつみし野に
　ふりにけるかなすゞ虫の聲
　　朝顔
葉末からこぼるゝ露ををしむらん
　花に包みてしぼむ朝顔
　　江邊曉荻
みろく寺の曉つぐる鐘の音に
　猿江の荻の聲叫ぶなり
　　鹿
譬喩品の聲さへ霜にうづもれて
　よしあし門に鹿ぞ啼なる
　　木曾路にて鹿をきゝて
つまごなる妻や戀ふらんさを鹿の
　聲は細くて長くての原

紅葉

山寺に月まつほどの紅葉狩
はんにや湯でもちと出よかし

仝

暮るゝかと雨ふり山をこえ行けば
日なた薬師の峯のもみぢ葉

化物百首の中に菊を

見るうちにふり袖垣をうちこえて
七八尺の大かぶろ菊

月

西の國百方石もさるならば
月の入るべき山はあらせじ

仝

夕暮の浦の苫屋を見なほせし
月の桂の花もみぢかな

仝

夜もすがら月に袂をしぼるさは
へちまのやうな我心かな

待月

小舟して月まつ宵の侍従川
ふけゆく鐘も鶏ものかは

夢後見月

夢に見し三保松島もよくみれば
今見る月の中にこそあれ

名所月

ひとつ〳〵田毎の影をかぞふれば
十八前のさらしなの月

暮秋

ながれ行く月日も秋の水鳴子
がつたり落のけさの寒けさ

冬の部

旅宿霰

霰ふるかしまの宿の板庇
よもやぬけしと寐てはゐれども

雪

弟雪の丈は俄に高くらや
姉が小路もかたづかぬまに

仝

宿かれば簀子もいつか雪をれて
枕もすべる竹の下道

残雁

雪霜にふりこめられて残りけむ
白とまだらの雁ふたつみつ

爐火

埋火の炭も角文字ふたつ文字
すぐにいの字この文字とこそ見れ

早梅

一とせにひと日乙子の朔に
あになからんや梅のはつ花

歳暮

行く年の尾頭かけて鹽引の
一尺ほどになりにけるかな

戀の部

初尋縁戀

はつせ山祈らばなどか見し人の
又縁日に詣で來ざらむ

尋不逢戀

耻かしや百舌のくさぐき尋わび

きうくさこしてかへもうしの手

聞二夜雁

隔たりし花瀬もてうご親指こ
人さし指の折ゆわさきよ

名立戀

ふりかけし宮守の衣やあやかゝし
ばつこ立たる今の浮名は

忍戀

深川しのぶの里は我にありこ
つれなき戀の逢瀬内せむ

新雪

新らばや美は以戀の山路にも
手ある足ある泊瀬の觀音

閑戀

ふるこゝにひかふる稚の後新
かげことひなたへ別れ路の空

全

きぬ〳〵にのこる嬉しの美羽袖
かへりのうきる指にこそふれ

寄色戀

凱心あけて見せたき折々は
胸に穴ある鳴るれがはじ

寄角力戀

腕こひさ手にてどこらず臼井宙
あやまふ程に逢ふよしもがな

寄琴盤戀

急弄琴ひく手あまたに眞ぬれば
身をいくつにや割てあふべき

職人づくし戀の歌

うき人に何をまま中の壁塗師
落ちずば恥の上ぬりやせん

雑の部

羇旅

奥の國へ下りける時

陸奥の十符の菅菰あまけれど
七つこ三つの孫ぞ戀しき

全

鶴島やどこ〳〵のあきたある中を
いつゝこむつのつこゝいにまし

三十大堂の龍頭は美女の面にし
て左右の黒髪のわだかまりた
るをもて晝の雲のごとくに釣
たりいかなる故にや

夏るまで來ぬさる人を惜しさの
鐘に喰つく文ありしか

二十三夜

鳥だにもちはやこゝろりの鳥山
など黒羽に小休もなき

木曽川なるしばの奥野に逢候
會のありこて作山のあたりよ
り女こを逢をさりかへす

つゝじ咲く山路も野路も西東
きつれ川までつゞくもろ人

直野殿が渚にといへる處を過
ぐ

草臥しあし野のあしの曲らぬに
又逢ひの野る蟹が渚かな

當山大仰寺の書院より再び鶴
島を望みて

千松島みな我物とみちのくの
長者も富に倦ず詠めん

白河關の明神
かけて祈る老が眼鏡の玉津島
ふたつ並びてくもりなかれと

熱海のゆあみにまかりける頃
米かみに石ばしかませ玉ふなよ
歯もこゆるぎのいそぢ越えては

藤澤にて
車田の縄手のかたのゐざり松
これも小栗の古跡なるべし

軍神の森にて駿河の友に別る
るとて
立かへり又ゝ見かへる後面
狐がさきに杖をとゞめて

高砂浦
觀世水寶生雲とみるまでに
長閑なりけり高砂の浦

ことのまゝの社を尋ねて
富貴自在とくありといざ祈らばや

ことのまゝなる宮にまうでゝ
跡たれし髪長姫にすべらぎの
御代長かけとかけて祈らむ

俵山といへるが剃髪して旅に
いでたつを
一夜ふた夜かさね茶碗の旅簞笥
樂の一閑人と名のりて

江の島にて
江の島のむかふに見ゆる烏帽子岩
鎌倉殿のあたまあぶなし

隅田川にて
貴妃櫻小町ざくらの鐘が淵
うつくしからぬ女人禁制

隅田川の向島にて蜀山先生の
舟遊したまふにまゐりあひ
てふところ紙に書て參らせけ
る
二つ文字牛の角文字二つ文字
ゆがみ文字にてひとつ飲まばや

千玄堂さみだれの頃ふる里に
かへるあしたうまのはなむけ
すとて
雨もはやにじり上りにあがるなり
お茶をたて場にしばし待合

菊川の菜飯茶屋に脇差を忘れ
侍りて掛川よりとつてかへす
とて
一日に二度こゆべしと思ひきや
命から〳〵小夜の中山

旅宿をよめる
此宿のくゞつをさぞとしる椀の
手にとるからにゆらぐ玉味噌

神祇

神風やいしやも茶道も附髪に
さわりあらじとはらふ大ぬさ

言の葉の玉津島根によるならば
へたのわかめもいつかあがらむ

いなり山祈るしるしの杉形に
つむや二月の玉おちの米

花また村の神事の鄙ぶりたる
を
芋頭まだ生ゆでは味むらの
さわぎきほへる酉の市人
かしまをどりのうたに
寛くともよもや抜けじな古烏帽子
かしらにかみのあらん限りは

哀傷

八十隣翁身まかりける時
鶴によせ龜によせたる俤を
蠟燭立に見るぞかなしき
有政一周忌
をかしうて涙こぼせしざれ歌は
涙ながらに見てもをかしき
菅江三周忌
忘れじなあふむの丁馬つく〳〵と
鳩の杖して道を行くにも
泡成みまかりける時
へんがへて置けば能のに先の世の

約束事もことにこそよれ
幼きもの丶身まかりしにしと
き調じて手向るとて
手向ばや彼岸櫻の花よりも
一重二重いし〳〵のかず
冬のはじめより膈といふ病に
てこのめる酒ものまれず湯水
だに見いれずうち臥をるに京
傳子のもとより酒おくりこし
たりこゝろえず門たがへにや
と思ひしもしるくやがてかの
使のをのこ立かへり來て今の
樽は狂歌堂へ參らすべきをあ
やまりて侍りかへしたまはり
なんとわびければさればよと
枕べの硯引よせ書つけて樽
にゆひそへさせてつかはしけ
る
膈やみの兼てかくとは知りつゝも
酒をかへすは苦しかりけり

釋教

題しらず
あなたふと壁も障子も見やぶりて
有か無かにすめる燈し火
僧の松つくるを見て
墨染におもはぬ罪をつくり木の
松に五かいを保たせにけり

畫賛

鬼の念佛
大津繪の鬼も十八本願の
光明丹にいつそまりけん
狼の衣きたる
極樂はこゝをさること遠吼の
あみだが峯のこだまにもしれ
つくま祭の畫に
をかしくばお釜の前で笑うべし
よくかさねたるつくま江の鍋
遊女の文かくところ

はかごらい筆のあゆみも八文字
誰が天神のふみとなるべき

婆々が河に物あらふかたゐが
きたるに

昔々あつた土佐繪を其まゝに
洗濯したる水繪の具哉

大傘を風の吹とりたる畫に

世の中は破からかさの骨ばなれ
本來空にかへす木がらし

假名のふもじいくつも書つらねて雁の飛たるに見せ霞のあたりにはみ文字あまたして遠くゆくさまに思はせたり

ふしのねのふもとはふみのふの字にて
こほはこの字とこゆる雁がね

祝賀

冬祝

はやく寐て遲く起よといひ傳ふ
冬にぞしるき御代の豐かさ

題しらず

平らけき御代を見眞似に竹のよも
月もたひらに滿る十五夜

三世羅か父ぬしの七十の賀にかしらおろしけるをことほぎて

祝ふべし親の光はなゝひかり
又ひと光りひかる剃立

寄袋祝

巣ごもりの鶴のよはひを吹いるゝ
竹の袋のいはひ歌口

○

瀧

酒の香はたえて久しくなりぬれど
山に醉たる養老の瀧

花間鐘

紅井の花の錦の木の間より
萌黃純子とおもへば此鐘

百物語の中に鬼を

あばら家に生てふ鬼のしこ草は
そのたけ五丈ばかりなりけり

おなじく山鳥を

山鳥のおろかな人を化してや
ひとり寐る夜の伽にかもする

何がしの別莊をたづねて

かりそめの住居も夏をむねとして
みぞおちほどの池もある哉

狂歌酒百首序

藤原定家卿にゆかりありける曉月房商珍といへるは雲井を出て雲水のゆくゑをさだめず常に酒と狂歌を樂しみとし世をおかしうおもひくらしたまひし人になん有けらしその頃ある人此僧にむかへて定家卿のごとくに和歌を詠したまはゝそのほまれ聞えあらんになどいひけることはの下に曉月に毛かむくむくとはへよかしさるものゝ子と人にいはれんかくこたへたまひしかば一座うち笑て興じけるとなんまたある年の末に定家卿のもとへ春もうくべき種なかりければ米一石たへとて曉月かしはすのはての虚印地としうちこさんいしひとつたへと讀てをくりしかば卿の返しさた家が力のほどを見せんとて石をふたつに割てこそやれとて米五斗をゝくりたまひしとなり誠におかしく興あることにこそ侍れ曉月坊の狂歌とて物のはしに殘りける中にも酒の百首ありつれ〳〵なるふしにこの百首を見侍ればそのすがた艶にしていやしからずされば由緣齋の翁も此風躰をよみ習ふべきよしいひ置ぬ予近來の狂歌を見るにすべてそのさまつたなく或はむづかしく又はやすらかによまんとてしれたることのみいひつらねてなんの曲もなくよめるもありおもふに和歌連歌狂歌俳諧各そのおもむきあなればとにかく狂歌は狂歌をよむべし時世にしたがひて風躰やゝたがひ侍るといへども一首に曲あることはを眼としてすなほにおかしくたれかれもきこえやすきやうによみ出るはいにしへ今なんそけじめあらんや星霜をふること五百餘年のむかしを遠くしたひて此卷を久しくひめをき侍りしがなには江の藻に埋れんことのほゐなくくちせぬことはのたまかしはこたひ世にあらはし予か門にあそぶひと〳〵または初心のをしへにもなれかしとおもふのみ時に寶暦八の年戊寅初春日

くり返し誰も見るらん酒百首
管てはないがおもしろい〳〵

浪花　一本亭芙蓉花

百酒狂歌序

亡師齋珍詠百酒狂歌自號醉吟藁生計嗜酒樂醉中吟花嘯月忘晝夜寔悠然方得者哉陶寫心胸有古賢風發越標致不耻先輩覽此歌者於狂句之外宜着眼于時文和四年三月盡

江湖散人　季鞠

狂歌醉吟稿百首

曉月房作

春十五首

けふといへばまた珍しき味酒の
　みは醉ながらはるは來にけり

いろ香をも知る人かたきむゝ酒は
　すきものならでたれかのむべき

霞たつなにはわたりのゐなかざけ
　たが梅壺にいれてのむらむ

三日の日の酒にうかべる花の名の
　もしたひけふはのむべかりけり

のむ酒のかすみのひかりあけ暮て
　花にゑひぬる名をもたつらむ

春ふかきかめ山とののみやこざけ
　はなたてまつる人やのむらん

木のもとにさけひつれたる酒醉は
　猿のはなみる心地こそすれ

春はたゞ柳のいとのなが〳〵と
　くりことしても酒をのむかな

うぐひすの巢立のさけの一銚子
　ひと〳〵と急ぎてぞのむ

雲雀毛のむまからざりし酒なれど
　のみあかりてや上戸なるらむ

おもひきや朧月夜のゑひごゝち
　すまのうらみにならん物とは

春の日のながさかもりに成ぬれば
　我には人のくれかたきかな

春雨にその民寺（本ノマヽ）をうり酒は
　まいらぬ人もあらじとぞおもふ

水口もなをせはければ春の田の
　なはしろさけを日影にぞのむ

醉てのち物もいはれぬくちなしの
　やまぶきいろのさけやのむらむ

夏十首

春くれしきのふの酒のさめかしら
　けふはうつきに成にけるかな

のますともこゝをせにせん郭公

きゝてさかやをすきのむら立
五月待たち花いろをのむときは
むかしの人の酒の香ぞしる
年ごとにけふやあやめのくすり酒
またはさつきのいつかのむべき
さみだれのなをふる酒のさかて川
しちもろともになかれてぞ行
なく蟬のこはたかにこそ酔にけれ
日ぐらしざけの森の木がくれ
これ迄も酒をもちきてうりはたけ
ゑひぬる人ぞまろふとは見る
村雲をうへに留たる夏ざけを
のむやいかづち上戸なるらむ
夏の身はまだゑひ乍らさめぬるは
はらのいづくに酒やどるらむ
さりとてはけふまた質にやれ蚊帳
酒にぞわれはくらはれにける

秋十五首 一首不足

まれにあふはじめの秋の七日ざけ
けふ七夕に手向てぞのむ
秋風のふくら（木ノマヽ）に入てのむ酒を
みにしむばかり酔にけるかな
盃はめぐりてゆくをきり／＼す
たれにさせとか鳴あかすらん
盃もかたぶきながらあきの夜の
なが／＼しくものむ上戸かな
酒にうかぶ月影ながらのみいるゝ
上戸のはらぞ山ばかりなる
十五夜の月のかつらのおとこ酒
さかなのいもやちぎりなるらん
秋の田のかり庵つくるおばなさけ
ともをまねきて誰かのむらん
をしねかる田つらに殘る草の名の
秋ほこりして酒をのむかな
いとまをは秋ふたけてや酒にゑひ
しゝのすくるもしらす飲らむ
いかにしてしぼる程には酔ぬらん
つゆなしにこそ酒はのみぬれ
酒もりの下草かけてうつろふや
しはゐの露のそむる成蘭
飲人のいのちもいさゝなが月の
こゝのかことに匂ふ菊ざけ
折枝のもみぢをたきてあたゝむる
さけこそかほもうつろひにけれ
酒のみてみなもみぢするその中に
ひとりさめぬる松もはづかし

冬十首

すみあらす上戸のやどの板びさし
さかもりがちにふるしぐれかな
霜の葉にたとふるかほも酒にゑひ
さめての後はまた草のいろ
さら／＼と霰ふる夜は竹の葉の
名におふさゝにゑひはじめけり
玉すだれ上たるさけを飲てこそ
つれ／＼もなく雪をふかむれ
浦なみのよるになるまでのむ酒に
ゑひてたゞよふちどりあしかな
池水のすみわたりたることゝちする

さけのなごりををしめさかづき
水鳥のをしあけがたになるまでも
のみつるさけやふすまなるらん
けたものゝすみのおき火に温めて
そのかはぎぬのけ酒をぞのむ
冬の夜は身をあたゝめてわかし酒
さむる時なくゑひにける哉
庭火たく其ほうづきのあか〳〵と
ゑひて酒ふく神樂笛かな

雜五十首 二首不足

殿もりの朝きよめせでのむ酒の
ゑひてのゝちははくとこそきけ
歌よみのゑひをすゝむる酒にこそ
そのかほつきも赤人になれ
酒手をばこはれずとても梨壺の
五人十人せめぬ日ぞなき
神酒の春日の氏子いかなれば
わうとうないに成くだるらん
西の宮ひることもなくのむ酒は
あしたゝぬまでゑひにける哉
打ならすあづさの眞弓つるかけて
くちをよするは酒のみの神
千早振そのみこのみの醉くるひ
たゝさか神のつくかとぞみる
飮酒をへだてぬ中のおもひざし
かたなゝきまでゑひにける哉
さるがくの前に置たる大鼓つゝ
さけもとう〳〵たらりとぞのむ
ゑひぬれば飮ども酒のむかひ講
ほとけと共に目こそ舞けれ
おもくこそいましむべきに石佛
さけをばいかでうりたまふらん
寒き夜の酒にゑひたる道心は
わかしさましに成にける哉
濁酒すみがたき世にながらへて
いつまでとてか身をしぼるらん
いまはかく思ひきるともあま酒の
ならんはてこそゆかしかりけれ
數ならぬ身にさへいかで醉ぬらん
さけは人をもきらはざりけり
何をして身のいたづらに醉ぬらん
さけのおもはむ事も耻かし
老そひて酒の重荷のくるしきに
ながもちしたるゑせ上戸かな
二日醉けふ三日の原あかすなを
さかてにやらん衣かせやま
たゞたのめさしも心をつくし酒
冬瓜の名のあらんかぎりは
見るからにやがて上戸のほし病
のみてはなをるくすり酒かな
下戸はなど鬼のごとくに醉ぬらむ
たゞ一口にさけはのみけり
あなみにく酒には思ひますかゞみ
底なるかげはさるにかも似る
醉てのち太刀ぬく人は酒のいる
たいへい樂を舞かとぞみる
村雲の劔をとりしむかしより
かゝる酒にぞ人もゑひぬる
おそろしや猪武者のいかばかり

さかつらにこそのみゑひにけれ

おちかぬる上戸のたちへ押寄て
さかはらまきをきぬ人もなし

盃をはやむる酒のかすけむま
はなをかへして猶ものまはや

むさし鐙さすがにかけて飲酒は
よはぬもつらし酔もうるさし

笠かけをいさけのかけのはれ引目
やがて上戸になりにける哉

むかはきのほしかり上戸酒のめば
大まだらにぞ貌も成ぬる

しちにおくひとつ小袖のあはせ酒
わたぬきするぞうけて覺ゆる

幾たびかさかてのしちの酒なかれ
つまりてのちやのまれざるらん

我身をもうしなふほどに酔ぬれば
さけにのまるゝ人とこそみれ

あかざりし酒の中にやいりぬらむ
ゑひての後はたましひもなし

いろをみて心にかけてあく酒の
さしたることはなけれどものめ

浦しまかはこひのみたる酒なれば
あけてくやしき二日ゑひかな

玉すだれこかめをいるゝ升人や
おきにいでゝも酒をのむらん

酒手のみおふかうらふね漕いでゝ
いそへなよせそをきのりにせよ

櫻麻のおふとはすれどなす事の
かた枝のなしのさかてなりけり

さかづきに酒は殘りてこゆるぎの
いそぎてのむや上戸なるらむ

わきすぎて立およぎする酒なれば
ゑひぬる人の身こそうきぬれ

たぐひなき大さかづきの酒をこそ
上戸の淵といふべかりけれ

酒にゑひうそふくほどに成にけり
これやひえとり上戸なるらむ

山がらの口をあきたるくるみさけ
へうたんなりのつぼに入ばや

よりあひてけふも礫をうちこしの
さかいんちするゑひくるひ哉

かけあひて上戸の中へいりすまふ
大さかてにぞおひまけにける

飲たらで酒をはなをもつき瓶子
はらのほどこそおもひやらるれ

時のまも身をはなたぬは守りつゝ
さかづきまでもかけてのまばや

本書明應六年丁巳二月十八日庚寅
鞍馬寺杉本坊舜慶依所望書之
内藏頭親部宿禰種長

官許　寶暦八年戊寅三月
發行　明和八年辛卯三月

めでた百首夷歌序

そも／＼このめでたいと申は天竺にてもはじまらず大唐にてもはじまらずわが
日の本の夷三郎めでたいつりの絲より鯛このめでたいをつり上しよりめでたい事のかゞみ鯛末の代までも引出す延喜の御代のひたい箱もふたあけて見ぬ京ものがたり今や四つの海波しづかにして沖釣のめでたいかゝらぬ日なく十日の雨風さはりなくして一升のつちくれ金一升の富にうるほへりされば弓は袋棚の上にすゝけお太刀はさやがたの小袖にまとはれよろひかぶとは笑道具となり鐵砲は藥ぐひのたねがしまとなり酒は酒屋にもちはもち屋にたけき親分も太平樂をならべあやしの百姓萬歳樂をとなへてまことにめでたう候ひけるとは今この時をや申べきかゝるめでたき御代なればかのもろこしの何がしが何でもかでもよし／＼といひし道をふむとはなくてよるもひるもめでたい／＼といふ事をくちせにしてめでた男と名たゝるひとありわれも亦めでたい事をほり川の流のまゝによみ出せしめでた百首のたはれ歌をめでた男にしめさんとて覺えずひとり笑ふ門に今福といふ書林の來りて春まつ花の櫻鯛あまだいのあまねくつたへたいいしのいはほともなるとばねのなみなみならぬめでたい中のたいのあらを三つ道具のすきものとどもにせんといふにまづ手をうつておきつだいいく千代かけしかけだいの尾めでたいとも見玉へかし

天明三のとし三ッ朝うらゝかなる

四方赤良書

めでた百首夷歌

立春

改年の御慶めでたく天の戸を
明ましてよい春は來にけり

子日

門松に子日の小松この比は
引つゝいてのおめでたい事

霞

めでたき日霞の衣たちそめん
暦の下段山の中段

鶯

うぐひすのはつねのけふの小謡は
ひとく〳〵にめでたかりけり

若菜

七種の若菜にめでた〳〵やと
手をうちつれてつめをこそされ

殘雪

豐年のみつぎ物にておめでたき
この獻上の殘雪をみよ

梅

飛梅のさんだめでたい事づくし
こちかせ富貴自在天神

柳

しばしとて立止るまにめでたいを
つり出したるいと柳かな

早蕨

早蕨のにぎりこぶしもあてられず
めでたく笑ふ山のかほには

櫻

花をめでしことばもよゝの櫻木に
いのちながきぞめでたかりける

歸雁

幸若のお禮めでたくしまひつゝ
ともにこしぢへかへる雁金

春雨

春雨に火の見のたいこ苔むして
人おどろかぬ御代ぞめでたき

春駒

あら玉の春のはじめの春駒は
ゆめに見てさへめでたかりけり

喚子鳥

三鳥の傳授のすみし目出たさは
おぼつかなくもなきよぶこ鳥

苗代

なはしろのたねは一粒萬倍と
めでたくさんになりはひの道

菫

いつまでもめでたき御代に菫草
色よき花の江戸の紫

杜若

かきつばたむかしはいせの物語
今はめでたくひらく三河記

藤花

萬代の池の龜の尾めでたけれ
長々しくもさがる藤波

欵冬

山吹のはなかみ袋ぬしやたれ
ひらふこがねの數のめでたさ

三月盡

荒神の松にめでたき花の香を
　わけておかまもけふ拂ふなり

更衣

けふは又めでたしなみの衣かへ
　あれのこれのとゑり祝ひせん

卯花

時ならぬ雪をめでたき折ふしに
　何かはことをかきの卯の花

葵

いたゝいて肩にかけたるお小袖も
　めでたき時に葵から草

郭公

ほとゝきす待設けたるみぎりより
　ひだりの耳できくぞめでたき

菖蒲

目出たさはかぎりも長き町つゞき
　ふく／＼しくもふくあやめ草

早苗

早苗よりひいでゝ稔るいきほひは
　千町萬町やめで田植歌

照射

鹿をおひともしからざる世渡りに
　山をみずともめでたかりうど

五月雨

五月雨のふる屋の軒のやね板も
　あつきめぐみにもれぬめでたさ

橘

橘はみさへ花さへめでたさは
　やはりむかしのときは木のまゝ

螢

ほたる火も弓も袋におさまりて
　文をみぎりの御代ぞめでたき

蚊遣火

にぎはへる民のかまどの蚊遣火は
　めでたき事のためしかやの木

蓮

はちす葉はごふやら佛くさけれど
　花の君子ときけはめでたき

氷室

水無月のひむろに金をたくはへて
　へらずきえずにつかふ目出たさ

泉

金銀はいづみのごとくわき出て
　めでたく人にくれてやり水

荒和祓

罪とがもあらにこ祓へにこ／＼と
　わらひきよむるけふのめでたさ

立秋

黄金の桐の一葉もおめでたく
　つもれば千々の秋やたつらん

七夕

をたなばためで七夕と祝ふらん
　あまのかはらぬお出合の空

荻

秋風のふき來るこそめでたけれ
　荻のうは葉の數もいく千代

萩

長びつにいれてめでたく御歸宅の
　このおみやげをみやぎのゝ萩

女郎花
をみなへし馬から落た僧正に
おけがのないぞめでたかりける

薄
花すゝきほゝゑみたてる秋の野に
めでたい事をまねくとぞみる

苅萱
千日にかるともつきぬかるかやは
めでたかるかやめでたかるかや

蘭
草かうや東の門のおやしきは
花をめでたいひとのなる蘭

雁
かうがひをとりて雁々みつ口の
跡のが先へすゝむめでたさ

鹿
神の威をひけら春日のめでたさは
おしかのつのゝつかまへてなし

露
草の上に思ひもよらぬめでたさは
めぐみの露のこぼれ幸

霧
市をなす門のとびらを朝もよひ
きり／＼／＼と明るめでたさ

槿
よはにいね朝起しつゝ朝がほの
花を見るこそめでたかりけれ

駒迎
勘定もあふ坂山にうり主は
めでたく金をもち月の駒

月
かく斗りめでたく見ゆる世の中を
うらやましくやのぞく月影

擣衣
遠國のたよりもゆかしさよ砧
めでたくかへる衣うつなり

蟲
身上もめてたき家の壁の中に
財布をつゞりさせとなく蟲

菊
むかしから花にめでたい人の名は
これ御そくさいゑんめいときく

紅葉
林間にもみぢの錦おり敷て
めでたく酒をあたゝむるかな

九月盡
けふまでにわれあきはてし貧乏の
神なし月を待ぞめでたき

初冬
びんぼうの神無月こそめでたけれ
あらし木からしふく／＼として

時雨
世の中はしぐれのやどり宗祇でも
めでたい事のふり來れかし

霜
顔見世のしら／＼明ぞめでたけれ
かしらに霜の翁わたして

霰
冬籠りめでたく無事にまめいりを
いれとや數のあられふるらし

雪
目出たさの源左衛門はうづもれず
いでその時の鉢の木の雪

寒蘆
つの國のなにはの春のちかよれば
あしのかれはもやがてめでたき

千鳥
鹽の山ひかぬもめでたさよ千鳥
いつもさし出のいそ〳〵として

水鳥
水鳥のおしあはせよく鴛鴦の
衾をかはすにはのめでたさ

氷
足もとの明らけき世のめでたさは
うすき氷をふまぬ世渡り

網代
門出はみなひをゑらみおめでたく
網籠のあじろにかゝりぬる哉

神樂
神樂笛ひうやらやんらめでたいこ
うつやてんしやう大神の前

鷹狩
わけてけふめでたかり場のお物數
ありとや祝ふやかた尾の鷹

炭竈
くもりなき世にすみかまの夕烟
めでたくのぼる位山ひと

埋火
うづみ火の灰の中からかきおこし
うせたる物の出るぞめでたき

除夜
大歳やことしはわけて去年より
めでたき年の暮のおしまひ

初戀
鶺鴒の鳥のめでたき目つかひに
尾を見つけたる色の道哉

忍戀
忍びてもきゝつけられん包みおく
めでたき物の袖にあまらば

不遇戀
あふことを命づなにてながらへば
うけひかぬこそめでたかりけれ

後朝戀
うかれめの宵の口舌もあけがたに
中なほりしてかへるめでたさ

初逢戀
ひろからずまたせばからず香箱の
ふたりしつくりあふそめでたき

遇不逢戀
あふて又あはさる物のめでたきは
女郎のはだと道の辻風

旅戀
世はなさけ旅は道づれ出女も
おじやれと云ば來るぞめでたき

思
忍ぶれど色にいづるを見のがして
物や思ふとはぬめでたさ

片思
相ぼれはかへりてあきのかた思ひ
みむまのあひそめでたかりける

根

ゆく末をめでたく契る心より
かはひ〳〵のうらみもぞする

暁

よきことを思ひ出せばあかつきに
ねられぬ老もめでたかりけり

松

千歳ふる松はめでたくいつとても
十八公のわかざかりかな

竹

竹の子のまた竹の子の竹の子の
子の子の末もしげるめでたき

苔

公事訴訟絶たる御代のめでたさや
しらすの石の苔のむすまで

山

山の名のふじにめでたく突あてゝ
三國一の富をこそされ

河

千年にたつた一度の黄河より
めでたくふだんすみ田川哉

鶴

千年のつるの玉子をときはなる
松の十かへりかへすめでたさ

野

名にしおふお膝本ゆゑむさしのゝ
草はみながらめでたしとみん

關

開た口とざゝぬ御代のめでたさを
おほめ申もはゞかりの關

橋

すご六のさいの目出たき振出しの
やりは一本にほんばしかな

海路

桑名から七里のわたしつゝがなく
宮へつき〳〵祝ふめでたさ

旅

先ぶれのいたらぬ里はなかりけり
めでたき御代の問屋宿次

別

あふものは別るゝものときく時は
わかるゝものはあふぞめでたさ

山家

商山のよぼくれおやぢよろ〳〵と
道ある御代に出るめでたさ

田家

百姓の家の寶にすきと鎌
くはめでたいの三つ道具かも

懷舊

老らくのめでたき今にくらぶれは
むかしは物のたらぬがちなり

夢

粟めしを喰てはこしておめでたく
榮花の夢をみる五百年

無常

世の中の諸行無常をやめにして
是生滅法界のめでたさ

述懷

いかにせん心のこまのすゝみつゝ
めでたい事におはれぬる身を

祝

おめでたく又おめで度おめでたく
かへす〳〵もめでたかりけり

めでた百首夷歌終

めでた百首の跋

春は御慶目出度申いれしより日々めでたさやるせもなし二月になりても御内儀の年禮こよなうのどかに又めでたしそれよりひらく花の色も爰へるや上戸の上巳の節句夏は門てふ門ごとにのぼりかぶとを立ならべし竿の先にもめで鯛あり下卑た嘉祥は二八のひや麥秋は七夕生みたる八朔重陽二度の月冬は亥のこに袴着帶とき煤掃もちつき歳暮の御祝儀懸は婚禮並身請雜は朔日十五日廿八日役替新宅元服おきやあ〳〵おきやがれこぶしは尺教なるべしさしづめ無常は百年忌神祇にとりては夷講杖も盡せぬ賀のよろこび四十五十をはじめとして八十八のよねのまもり九十百首のめでた組題なにさま見まく堀川のながれたえせずくみにし硯の水をしき筆とめたり〳〵めでたく

あけら菅江かいふ

仙臺百首序

それたはれうたのたはれたるが中に天然の興才おはすなるはひとり吾孔方兄錢屋金埒にして趣向を湯水のごとくつかひてしかももとの趣向を吐かすかつてきけることあり神錢はあしなくして遠きをわたり歌人は居ながら名所をしるとさらは見ぬ京ものがたりもなつかしく此叟の秋の寢さめおとろし侍る折から友かきあまたとひ來てたゝにやはと題を探りてよみいでたる歌百にみてりいつれもつら杖かひなだるくやそこにつみたる杉形の錢をもてよりかゝり所とす主人おかしきふしなりとして仙臺百首とかうぶらすこれ文錢の塔をつみ青砥左エ門か一もんをしみにならふとにはあらねどもはした錢とゝもに錢筥に納んはいと本意なくとみに擲錢して梓に行ふものなり

京街堂のあるし
戀川好町

同盟の首長狂歌堂のあるじ遠く中國に杖を曳る日頭菴および都講らとりノヽにるすの戸の興をつくすひとひすき町ぬしはかりて錢百首をよましむ幸に日頭菴主のたゝらにかけてその功なれりそもノヽ鑄錢のひろく通寶なるや見ぬもろこしの鳥目に桐の葉わけのきはめもいらすしらぬみこしの雁首もみなひとさしにつらなりて翅なくして鵞鳶のものをやとひあしなくして駕で飛するなんどすべてゑびす歌の自在には似たりけりされば日頭庵主の世わたるたつきあしたにゆふべに交易して我ものに之たる所なればさりともまちがひはおはせしをはからざりきよみ撰にして長百ならんとは是いはゆる我ともからの狂歌にめのなきはしめなりけらし

吾友軒のあるし
酒月米人しるす

仙臺百首

立春　白水眞人
昨日まであしを空なるせにもはや
居り相塲のはるはきにけり

子日　戀川好町
子日する錢中將の名にめでゝ
よくにひかるゝ松もあらなん

霞　紫鹿子
錢塔の錢もかすみにうづもれて
二三重ほどみゆる夕ぐれ

鶯　小持末廣
うぐひすは三光錢に似たれども
下卑たる聲はなかぬなりけり

若菜　秋田萬作
君がため春の野に出てはしたもの
三文ほどが若菜つむらん

殘雪　雙六齋珠山
よひ越の錢はもたねど我やどに
去年のゝこりの雪は澤山

梅　柏木葉守
さきいづるいろにめでゝは百貫の
かたにもほしきうめの花がさ

柳　淀塲只則
門口のはいりの柳たづねみん
つばめのくれし錢もあるやと

早蕨　口裏茶丸
紫のちり打はらふ錢藍の
さしかさみゆる野邊のさわらび

櫻　對案堂雪面
さくらさく野山の乞食心あらば
よしねたるとも花からといへ

歸雁　大湊舍升女
木ちん宿たつや彌生のかりがねは
ぜゝのわたりを二三十ゆく

春雨　大湊舍舟積
天目の茶に文錢をひたしてや
かすむこのめをあらふはるさめ

春駒　海原沖風

はるの野の二才駒にはおよばじな
　錢のくるひのあしのはやきも

呼子鳥　大垣甘法師
猿さいふうそ八百もむかしから
　よに通用のよぶ子鳥かな

苗代　白銀いさご
さしかゝる苗代ごきのせわしさも
　苦は永樂の種おろしなり

菫　白銀黑人
開元のせにのかた野にすみれつむ
　玉妃（本ノマヽ）かつめのあともあれかし

杜若　川井惣梁
紫の江戸はえぬきのかきつはた
　錢ひらよりもきよきはなひら

藤　小倉百人
木すゑから二筋三筋山ふちの
　はなはさながら錢かけの松

山吹　糸ごち女
唐土の人に見せばやふきたての
　眞鍮錢のやまぶきのはな

三月盡　森羅亭
一文錢をしめる人もゆく春は
　百をさしたる心地なるらん

更衣　峰高丸
花染の袖も、重にかへぬべし
　一足さびの錢の景氣に

卯花　那須不二鷹
沼津垣うの花かきに落かゝる
　千貫樋の水のしろたえ

葵　岩戸明方
貫さしのそれにはあらで錢あふひ
　ゆきかふ人の襟にかゝれり

郭公　學志亭公面
ほとゝぎす名のつて通る一聲は
　千里川行のせにもおよばし

菖蒲　川瀬兼成
にぎはへる錢座の軒のあやめ草
　猶ふく〳〵とみゆる門なみ

早苗　戀川好町
さみだれに袖もたもとも子母錢の
　めぐりあふてははこぶ玉苗

照射　山東京傳
爪に火をともしの鹿の數よりも
　ころしてつかふ錢のあはれさ

五月雨　潮五十三次
九十川錢の相場はあがれども
　あがりかねたるさみだれの空

橘　東雲明行
たち花のはなちる里やこれならん
　むかしを今にいせのまき錢

螢　根歩きさ子
夏虫の身をともすよりわびしきは
　ぜにをあつむるやどの夕ぐれ

蚊遣火　吾友軒
はつ〳〵と拂ひ出せども廻り來る
　蚊を子錢とはたのめざりしを

蓮　大円玉丸
池水のいろも青磁かおもかげや
　ごろの中より出し錢蓮

氷室　常盤松門

穴藏にかこひしせにはくされども
つみたるまゝの室のしら雪

泉　古今亭音人
つゝゐづゝ泉より猶いさぎよく
遣ふあとからせにもわきもの

御祓　年竹庵其童
みな月の名こしの秡するからに
心がゝりはきながでもなし

立秋　山手赤蒂
秋來ぬと目にはみえねど風鈴の
せにの音にぞおどろかれぬる

七夕　桃栗山人
小袖までおかし申せと七夕に
せにをばなにとかさゝきのはし

荻　祝義家足
ざら錢の音やしてまし荻のはに
そよとの風もさはり三百（酒盛改）

萩　条若水
ちはやふるやそうぢ人も山ぶきの
せにかへてみよはぎのはら中

女郎花　桃本雛丸
をみなへしこがねの色も口をしや
三文花にたちまじりては

薄　保井賣方
夕露に薄のたもとうちかさね
せにの相場やたつる道のべ

苅萱　川淀双鯉
すがれゆくそが殿原はいまもつて
わづかの錢も人にかるかや

蘭　算木有正
ふぢばかま寝覺の床にかほれども
むすびし夢の阿堵物もなし

雁　紀彌壽丸
四文せに波間をさしてとこよから
にほんへわたるかりも八百

鹿　寶倉光
百の口よほどぬけても妻こふる
しかをば馬ときゝはたがへじ

露　芝庵光交
放下師の錢ならなくに風の手を
ひらけばきゆる露も品玉

霧　野邊春道
百貫のかたのごとくに月かげも
かさきてのぞく垣の夕ぎり

槿　仲秋長清
錢塔の錢もまばらにすげ笠の
かゞしにからむ朝顏のはな

駒迎　芝庵光交
あふ坂のせきの清水に鹿毛月毛
連錢あしけいまやひくらん

月　戀川好町
秋の夜の月の兎の耳しろを
つなぎてほしきものにこそあれ

擣衣　堀川舟人
まじなひの鈴にはあらで袂せに
からりころりと衣うつなり

虫　竹　溪
あき草の水引かけて二十疋
三十疋のむしのもろこゑ

菊　物毎秋輔

もろこしの彭祖かめてし菊なれど
七百余とはたかいはちうゑ

紅葉　庵崎眞槌
大佛のうしろの山の紅葉ばは
せにのたゝらもおもひ出らん

九月盡　軒子雀
ゆきがけの駄ちんなるらん轡虫
秋の名殘の夜もすがらなく

初冬　我形丸喜
いつはりのなき世なりけり神無月
賽錢はこのおもさかるさも

時雨　吾友軒
幾度かしぐるゝ雲の早序
くるひ相場のあしも定めず

霜　山陽堂
しろかねに見まがふ霜の四辻に
錢の相場もたちやわづらふ

霰　山手赤蕎
棟上の錢かあらぬかあらしふく
ふはの板屋のあられふる音

雪　森羅亭
それ雪は鵞目に似たるものなれや
翅なくして飛んで散亂

寒芦　南陸亭繁樹
巾着のひだの細江も干あがりて
あしのほまちの錢もかれ〳〵

千鳥　古川亭青蛈
月かげの景氣あがりの錢相場
友よびかはす村ちどりなれ

氷　小倉百人
あなたうとあみだが池のうす氷
錢ほどひかる月の下風

水鳥　櫻川舊家
五羽十羽むれゐる鴨は河岸揚に
とりちらしたる錢かとぞ見る

網代　獨活大木
伊せ者は皆氷魚よりもめでぬらん
う治のあじろにかゝるまき錢

神樂　悠々舘永喜
遍照もあまつをとめにおひねりを
うちつけていふまやなかりけん

鷹狩　大垣甘法師
ならの京かすがの里のしるよしへ
かりにいにけり百貫のたか

炭竈　都築藏持
をのゝえのをのゝ山本をのづから
一文なしの人もすみがま

埋火　古今亭
あかゞねの錢の丸さに光りしも
ひたとなりたる夜半の埋火

除夜　清涼亭
けふぞしる錢と師走のかくばかり
大と小とのちがひありとは

初戀　おなじく
いな舟のいなにはあらで角とれぬ
妹がこたつはみちのくの錢

忍戀　一帖大鷹
今はたゞ忍ぶにあまるばかりなり
戀の重荷とふところのせに

不逢戀　柏木葉守

逢ふ事もなきはらす眼の苦しきに
一もんせにのましなひもがな

後朝　松遠亭數成
添寢せしその移りがをなつかしみ
せにくひに着て歸るあかつき

初逢戀　算木有正
待〳〵て今宵ぞ折をえびす錢
あへばうつゝもこしもぬかしつ

逢不遇戀　常事也
算用のあひしちきりはむかしにて
せにたらすてふ戀もするかな

旅戀　是売酒成
ゆき〳〵て二百の戀もするが路や
百の馬よりくるしかりける

思　大眼玉宰
岩本の神にちかひを日がけ錢
おもひのたけのつゝに一ぱい

片思　森羅亭
なま爪をはなす心のくるしさを
一文錢さたにもおもはし

根　山笑亭この女
はした錢はした無れど夜かれせし
うらみの數をならべたて膝

曉　祝義家足
にはとりも孔方兄とうたふなり
今を日の出のとめる身代

松　陽鳴亭鶴成
錢にさへ君のくらゐのあるなれば
松に大夫はまだ不足なり

竹　白銀いさ子
千代までもかはらぬ竹は百づゝの
ふしをこめたる靑ざしの錢

苔　勘定濟方
つみ上し五〆からげはいはほにて
こけにまがへる靑さびのせに

山　新玉宰長
見おろせばふもとの里ぞ遠かりき
我借錢の山にのぼりて

川　戀川好町
流れ川ながれわたりの路用とも
棹とも見ゆるつなき錢かな

鶴　湖五十三次
ちとせへし錢の齢にくらぶれば
つるも長命富貴なるもの

野　常盤松門
勘定のちとあはつ野に風だちて
せゝには舟のくりまはしよき

里　尋幽亭
貯へもさのみなけれどあし火たく
あし屋のさとはぬくとかりけり

橋　雙六齋珠山
萬年ののちもかくこそあるべけれ
せに亀ばしのわたりやすさは

海路　軒子雀
海原やよくまん〳〵とこぎいづる
ふねのあしにはあしやつむらん

旅　大湊舎舟積
近江路やせたの宿屋に百の錢
をくもむかでのかたはたこなり

別　大殿若持

糸による青柳ならでわかれ路に
　わかねて襟にかくる貫さし
　　山家　　　　　　　　寸善舍
しづかさは峰のまつ風谷の水
　さらにおあしの音などはなし
　　田家　　　　　　　　寶倉光
種ものゝかしかりよりも八束穗の
　ほまちの錢ぞわびしかりける
　　懷舊　　　　　　　　鳥口眞似
つかひてし錢のむかしを思ひねの
　あかつきつぐる鳥の目もうし
　　夢　　　　　　　　　物每秋輔
うりものにせばやまづしき我夢に
　みし富士ほども錢をつみなば
　　無常　　　　　　　　五常道守
定なき世はさま〳〵にかはり錢
　あるは念佛あるはだいもく
　　述懷　　　　　　　　山陽堂映沙
錢ごまとゝもにはだして逃れども
　びんぼう神に追つかれたり

　　祝　　　　　　　　　萬龜亭江戸住
末ひろき地紙の形につく錢の
　つくともつきじ君がよはひは

夫有心躰の和歌はたかしらべにしてたゞはゞ小判にひとしくきよくみやびかなれどもその意深遠にしてみなもとうかゞひかたしわが輩の口すさむわづかに百の無心躰は一錢に宇治の假橋をわたり三文にさつまいもを買ふその益とする所黃口の嬰兒も智のつくはじめに先これをしるこれおのれが常に初心にしめす錢の目のつけ所なりさるをことし寛政七年ながり月はつか餘りひとひ狂歌堂の留主の戸たゝける人々らつどひ來りて我業ならぬ市をなす事のかしかましく堀川御題をわかちあたえて暫時の口ふさげとせさせたるにかたはらに居よりて終に仙臺百首なれり是しかしながら例の一國通用にしてひろくしらしめんとにはあらず見ん人つ

たなきをそしる事なかれ

日頭庵金埒

狂歌百鬼夜狂序

あやしきを見てあやしまざれば左傳の化物ばなしもうそ怪きを見て怪めば六部の地獄のさたもまことならん今の學者のおし事と坊主のふしぎずきよりあやしきをあやしまずかへりてあやしからざるをあやしむそれ月日の眼風のいき雲のびんづら雨のあし海山かけてよくみればあめつちの間もまたひとつのばけ物やしきならずやうば玉のやみの夜に百のあやしき事をかたればかならずそのしるしありといへるふることに本づきて此頃たはれたるうたの友どち鬼神をもとりひしぎつべき躰にくるへる水をうしろだてとし富が岡のきた深川のひがし青きともし火の油ぼりのほとり鬼一口にわんぐらとかいへる何がしのみさうにして物語を狂歌にかへその數百にみてりもとより箱根よりこなたに野父とばけ物なしないものはくひたくこはい物はみたしよりてならのさくら木にちりばめ子どもだましのがごせにかませぬよむものこはきやはたおかしきや

天明五のとし冬の日

四方山人かきつ

百ものがたりの記

へつゝ東作しるす

これはむかし物語にはあらずむげにちかきことなり四方大人の門に遊びてたはれ歌よむ人になにがしといふ人おほ河のべによき高どのもたりければうしもおはしよのひとも時々ゆきて遊びけり頃はかんな月の三日ばかりれいのごとゆきて酒たうべよしなし事いひしろひて樓のさうじあげさせ箱根山ちゝぶのたけ遠きみねつゞきながめやるほど日くれぬ月はそなたの木末に落けると思ふに川を隔たる森のしげみよりまりのおほきさなる光物こずえをのぼりて空にあがるにこなたにもたる盃の繪も見ゆるばかりてりかゝやきていづちへか飛うせぬあやし花火といふものとば

すべき頃にもあらず人だまといふものにやといふにそは青くてちいさしかねだまこそかくはあれゆきてほらましなどいふに青鷺といふものこそ人をばかすなれといふ蔦のから丸といふひとすゝみ出てけふなんまのあたりあやしき事みつ人のかたるをきけば百物語といふことをすればきはめてあやしみをみるといふめれとそれは事ながくてうるさしこゝに土師搔安といふ人の友別業ありて常は人けなく木立ものふりて面しろき所なりときけりこの家にて化ものを題にてざれ歌百首をよまばやかの見越入道などいふものゝいで來ば興あるわざならんなといふ酒にはゑひつそれよかるべし來る十まり四日さはりなしとてそのごと行ふべきになりぬその日は空うちしぐれて申の時ばかりより雨つよくふりいで風さへ吹そひてかゝるわざせんにはこよなきそらのけしきなりなどいひていさみありくもおかしたそかれより家をいでゝ搔安がりゆくにあるじはとくよりこのはなれたる家にゆきぬとてやつこをあないにてせまき道をいざなひゆくその家のさまいかにもあれたる家のいとひろくつくりなせるにつぼせんざいには木高き松椎柴かしなと植て山ざとめきたるに砌は草いと高くしけり南おもての雨戸はさゝず外はみなたてこめて燈はこの一間なる所とくりやとにのみともしてけりさうじをあけてはるかに見わたすにそなたさまにむきて風の吹をくるたびに木のは白うひるかへりてふすまなどのきし〳〵となりひびくもいとものすごからぬかは搔安出てこの所はなにがし院といへる寺の墓所なりしをはたとせほど前に土を引ならしてかく家居になれり今も土などほりおこしぬればされたるほねなどいづる事の侍りかくあやしくいまはしき所をかりうる事たやすからず侍るを唐丸ぬしのせちにものし給ればからうじてもとめ出ぬとはなのほとおほめきてよき事しつと思へるやうにほこりかにいふかくまではいかにもとめ出けるかなふるきはか原ならでもあるべきをうたてもあるかなと思へどかしこくぞはかりたまへりとみなおそろしながらもいふかたはらの壁に今宵の式をかきてかけたり

百物語戯歌の式

一歌員百首出座の人數にわかつた

とへうたおほくよみ得たる人ありとも一度一首をしるし序をまもりて順行すべき事

一北の屋のすみに燈臺をまうく青紙の口（覆カ）をかくべし大きなるさらに燈心百すぢをいれ一首をしるし一筋をへらすべき事

一文臺ひとつ燈の左におく硯料紙かたはらに鉦鼓ひとつをおく歌をしるし終てのちかねをうつべき事

一居間より北の屋へかよふ道に燈を置べからずあるひは物のかげにかくれて人をおどしあやしきかたちなどつくりおく事禁制たるべき事

一居間にて雜談高聲すべからず酒肴をまうくといへども重盃すべからざる事

一百首にあたりたる人は燈をけちはてゝのちさうじふすまをつきゆるかしてばけ物殿にげんざう申さうよといふて踊るべき事

一妖怪は日出てのちかくるゝ理なりよりて卯のとき前に退散すべし夜あけば披講は後日たるべき事

右七箇條の趣かたく守るべし若違背の人は過怠として酒一升連中へ出すべきもの也

天明五年乙巳十月十四日

催主　蔦唐丸

大人は定まろを伴ひて舟にておはすべきを雨風のつよければ陸をやおはすこずやなりたまふなどいぶかりいふよあるじ飯盛ぬしはいかゞしておはせずやと問ふれいがん寺を過るまでは人にさきだちておはしき橋をわたる頃より見へずなりぬ此わたりの事はくはしく知たる人なりよもまどひたまはじなどいふうち飯盛來てなさけなく物したまへりとてうらむ事かぎりなし有政金埒なども此あそびをゆかしがりつるがさてやまで門うちたたきて來れり今は大人と定まろとおはせぬのみなりといふ題は土佐が百鬼夜行の圖または近頃鳥山叟などがかきたるばけものゝ名をわかちてよむあるじかき安さかづきもていでゝすゝむさむければ各二三盃をかたふけ柱により壁にそむきて得たる題を案じ入けるほどしばしは靜なるやうなりつるがから丸有政などえたえずして例の高聲になりぬるを飯盛あながまと手かきてはしりめぐりけるがいつしかこれもしのびあへずして笑ふかくて夜もふけぬ庭の方に梟の鳴こえするをあれ聞たまへ松桂にすむ烏

こそ所得がほに聲す光源氏の夕顔の上をいておはしけん河原の院のさまもかくこそなどいひ出る人あるにあはれもの丶けといふもの丶とくいでよかしなどをとらじとののしり出るに中々らうがはしさもまさりつはてはどよみになりて梟いたづらになりにけりあはれ興ある夜のさまかな大人定まろかけずは思ふことあらじなど人ことにいふほど奥の方よりわざと一聲おめきてはしり出るものあり定麿なりいかにうしはおはしつやか丶るわざにはかの庾大尉がちごだにはかられざりきつたなきおどしよなといひてわらふに定まろもおもなくていであから大人おはせよといへばげにしれたるまらうどたちかなといふ〳〵うしもいできたまへりかき安いで丶けふ申の終におはしけるを日ごろねがひつる詩歌など心のどかにかきてたかどのにかりいねしたまひぬあまりに人々の心剛にてすぐよかにものし給へば出べき期もうせぬせんすべなくやおめおめいでたまひけりといふにまた盃をあらためてくみかはすさらにおそろしげもうせてれいのまどひのごとなりぬあるじはみさかなてうじたるをわすれにけりとてをのが家にゆくやどもりの翁も今宵は人おほうつどゐたまへり油ほりのわたりにちぎりおきつる事あり宵のほどゆきてまゐらんとてみのかさうちきていで丶行ぬ唐丸光は燈臺のまうけなにやかやと立さはく北の屋ははるかにて渡殿をつたひてゆく居間より燈のあるかたまでふたまをおけり疊をば引あけてここかしこにかさねおきつればあゆみくるしくてや丶もすればつまづきたふれぬ雨はをやみなく風つよくなりて吹過るに雨戸どものひまなく鳴はためく四鼓過る頃はまことに鬼などもいづべきけしきにてた丶ひとつ所へこそりあつまりて盃をのみごとくすれどもおそろしさにゑひ心地さへいで來ず歌數なかばも過ぬる頃にこの奥のかたにから〳〵と鈴のなる音す人々耳をそばだて丶聞にまさしく二間なる所なりなにものぞやゆきて見よかしといへどおそれてゆく者もなしや丶音ちかづきて物の飛めぐる樣なるにやをらへだてのふすまを開て奥のかたをみればこがねの鈴の樣なるものふたつちうを飛めぐるがから〳〵となるなりけりあなおそろしと人々をよびあつめつ丶入てみればこなたへむきてはしり來

るよく〳〵みればあるじのかひける猫のはじめはくりやに有けるがぬしをたづねてありきけるなり皆人むね落ゐて世中のばけものはみなかゝるたぐひなるべしあたらきもをつぶしけるかなと笑ふ子ひとつばかりになりける頃から丸ゆきてみめぐり來りけるがおどろけるさまにて來りてあやしき事こそあなれ歌は六十にあまりぬ燈心三十あまりものこるべきを六十すぢほどありむかしよりへんぐゑはともし火のかずをかくして人をまどはす事ありといへりうたがはしくはとて金埒眞顔參和など一つれになりてゆきてみる唐丸がいふにたがはずうら住はさりかたき事ありてかるへ金埒はふかくおそれて今は此會やめんといふをめし盛部屋住などいかでさることのあるべき恐しさにへらすべき燈火をへらさではしり歸る人ありけるなるべしとて驚かず有政は家にわすれたる事あり舟をとゞめおきつればのりてかへりなん題の數ほどはうたよみてまがほぬしにあつらへ置つるとて金埒とつれてかへりぬかゝりければ燈心のけちたがへやあるひとりにてはとてそれをかこつけてふたりみたりつれてゆくにうしみつばかりになりぬへんくゑの出る時こそとて猶更におそれあひてから丸へや住定丸三人してゆきけるがいきもつきあへずはしり歸ておそろし〳〵とて歯のねもあはずまことに色も青みてまさしく事にあひぬるけしきいとしるければまづ酒などあたへていかにとゝふに部屋住わなゝく〳〵机の上にかゝるものこそ有けりとてうるまいもの紙につゝみたるを十ばかりいだしぬ飯盛はゆづけをくひて居たりけるがそのいもをくひたらん人はまことにひとこのかみなるべしこゝろみにたそくひたまへといへどくはんといふものなし飯もりさらばわれくはんとて取てくふをあからうしかゝるものをくふ事はせぬものなりとて引はなちたまへれどなでうことかあらんとておほきなるをみつまでくひて此いもは宵に橋のもとなる家にありつるを懐にし來りぬ人々のさびしくおはせんとて机の上におきつるなり世に剛なる人はなかりけりとうざみ笑ふにぞ宵にしばし見えざりつるは此いもをもとめけるにこそとてのこりをば唐丸とりてくひ人にもくはせけりかくてまた歌數八十あまりにもなりなんとする頃さんわまたあは

てたる様にてかへり來るを此たびは芋にてはあらじ饅頭なとにやと問へばさればこそさだめのごと歌をかきつけてかねをならし立歸らんとせしが燈心をわすれぬれば二間なる所より立もどらんとするに物のはたとたふるゝ音したりあやしくて手をやりてさぐりみるに牛の尾などのごとく長き毛をさぐりあてたりおそろしくて走來ぬといふ東作がいふさきにやつかれがゆきける時わた殿のまがりめに物のたちてふつにゆかれず力にまかせておしければたふれたりさて火を燈來て見れば竹のふるき簀戸なり我をおどさんとて諸君のはかりおきたまひけるなめりよびとよまんもおくしたるけなりとくち惜くて簀戸をとりて床の間によせかけておきつるなりその外にあやしき事はなかりつるといふとまれかくまれゆきてみんとてふたりみたり紙燭をともして行きてみるに倒れつるはかの簀戸なるがその傍にかけおきつる拂子のひゞきにつれてその上へ落けるなりおくしたる人ならば音に驚きてさぐるにおよばで逃歸るべきをとて參和がけなげなるふるまひを人みなほむ簀戸のことあやしけれどとく百首にみてんとていそぎければとがむる人もなしかはる〳〵うたをしるしてかねうちならして燈心をけすにはかにくらくなりたる樣なりけるが上のかたより雫のはら〳〵と落來て人々の顏にさとふりけるほどにはては燈きへにけりこはいかにとてはしり出るに積たる疊につまづきてこけたふれつゝからうじてかけもどりぬその後はゆかんといふものなくて光とから丸ゆきて燈臺をこなたの間へうつしそのかたはらにまどゐして酒などのみてよみたる歌どもかきしるすほどにやがてものゝ數にみちにけり此たびは鳥もはなやかにしばなきて座敷のひまひましらみゆくまゝあるじゆづけを出すさもあれかの簀戸たれかいましめをやぶりけるといふに人みなちかごとをたてゝしたるといふもの更になし此簀戸はこの家の隣なる別莊のさかいにたてたる簀戸なり雨風はつよし道の程ははるかなりたれかはゆきて取來らんおそろしき事なりかまへて沙汰ばししたまふなと搔安が口かためしてさもおそろしとおもへるけしきにていふにそ扨はあるじにもあらずとて人みなあやしみおそれけりかゝるゐせわざはあなかしこすまじ

き事にこそとてうしもかたくいましめ人々もおそれ思へりけりかくて夜も明なんとすればみな〳〵おのがやどりにかへり侍りけるとなんかたりつたへたる

夷歌百鬼夜狂

見越入道　へつゝ東作

さかさまに月も睨むとみゆる哉
野寺の松のみこし入道

雪女　紀定麿

白粉にまさりてしろき雪女
いづれけしやうの者とこそみれ

人魂　唐來參和

はれやらぬ忘執の雲いまよひより
うき世にあとをひける人たま

女の首　四方赤良

首ばかり出す女の髪の毛に
よればつめたき象のさしぐし

離魂病　宿屋めし盛

目の前に二ツの姿あらはすは
水にも月のかげのわづらひ

うしろ髪　山東京傳

うつくしき顏にみだせしうしろ髪
ながきためしにひかれてぞ行

山男　算木有正

こしぬけてたつきもしらぬ山男
さては我名をよぶことりかと

切禿　今田部屋住

ふりむけば廊下にたちし切禿
ひそ〳〵聲のしにんすといふ

長髪　つむり光

長髪の女の姿は川柳
どろ〳〵〳〵に裾や引ずる

鬼　馬場金埒

あばらやに生てふ鬼のしこ草は
その丈五丈ばかりなりけり

山姥　大屋裏住

金平が母とはたれもしら雪の
山また山をめぐる足から

逆柱　鹿津部眞顏

むかしたれさかさ柱をたて置て
きもをひつくりかへさせにけん

毛女郎　土師掻安

夜ふけてはすごき縄手の長雨も
ふりむく顔の毛女郎かな
楠亡霊　問屋酒船
楠もけもの丶聲のもうねんは
七ッかしらのうしみつのころ
小袖の手　高利刈主
小袖からまたも手の出る虫干は
りをうらみたる質の文売
魔風　東作
こがらしの吹とばしたる軒瓦
鬼もかなはぬ天狗風かな
せうけら　定麿
せうけらは冥途におちよ半兵衛と
宵庚申にゆり起すかも
殺生石　ひかる
ばけのかはの玉藻を狐いたゞいて
櫛笄となすの原かも
さとり　参和
その顔は三六さつて猿眼
これや四さうをさとりなるらん
鬼女　赤良
内心の如夜叉の思ひあらはれて
あやしきもの丶げめんにぼさつ
油なめ　めしもり
行燈のあぶらなめてふ化物の
はつときえたるも丶んかはらけ
三目入道　京傳
日月にたとふ眼のみつあれば
いとつは星のいりしなるべし
片輪車　東作
とをくなきまたちかくなく引汐の
かたわ車もこはさよちとり
古寺　うら住
燈明のきへかゝる夜は玉の緒の
たゆる間もなくあめのふるでら
天井の手　まがほ
三浦屋の格天井と名にたかく
こんだ手を出すこはいけいせい
船幽霊　有正
面色も青海原にうかみしは
ふなゆうれいをいひに出しか
壁坐頭　掻安
借錢は化物よりもおそろしき
強催促の壁坐頭かな
大魔が時　部屋住
物すごき大魔が時をうつしみる
障子にせいのたかい夕月
おいてけ堀　東作
すさまじき月に老女のけはひして
しはすの霜をおいていけ堀
だかれ小僧　定麿
たらちねに先立ゆきしおさな子の
罪の重さはいだきてぞしる
むじな　京傳
うしみつに吹くる風の音づれは
ねいりむじなの目やさますらん
姥が火　眞顔
姥が火におそれて年やよりにけん
はのねもあはず腰もたゝぬは
牛鬼　参和

もう〳〵とくらき闇路を牛鬼の
よごとにかよひくるまおそろし

肉吸　光

傘のあばら骨のみ殘けり
あらにくすひの夜の嵐や

龍燈　赤良

淺草のいほかあらぬか龍燈の
かげもすみだの川にぼんぼり

牡丹燈籠　有正

通ひくるぼたん燈籠にたはれ男は
よな〳〵ことに落るしゝあひ

川獺　部屋住

雨の夜の案山子とみゆる姿には
身の毛もぞつとよたつ川獺

札へがし　うら住

子おろしの女房と見えて辻門の
この世の札をへがしぬるかな

木たま　めし盛

山々はみな落葉するその中に
こたまの聲はまたかれもせず

髪切　さかふね

ゑりもとにぞつと夜かぜの雪隱は
こはいと手からおとしかみ切

帯取が池　かき安

利上げせし質物なるかいつまでも
ながれもやらぬ帯とりが池

おさかべ　東作

おさかべは幾歳へたるかうろ峰
簾をあぐる雪のふる城

山鳥　金埒

山鳥のおろかな人をばかしてや
ひとりぬるよの伽にかもする

ひゝ　定麿

足にまで物をつかめる獲の身は
わるい手くせやいまにやまざる

死ね〳〵榎　參和

行人をしねとすゝむる古榎
これやめいどの一里塚かも

猪熊　光

草摺をくはへて空へいかのぼり
いと目もすごくみゆる猪熊

戸がくし山　飯盛

これもちの色は鬼より紅葉より
あかきや酒のとがくしの山

もどり橋　東作

たほやかな柳の裏のいつゝぎぬ
ばかさるゝとも立もどり橋

古戰場　京傳

いせ武者のおもひか宇治の古戰場
血烟たちてみゆるひをどし

土蜘　眞顏

ある時は女郎ともなりて土蜘の
いとしと人をかけにける哉

安達原　搔安

妖怪とこれもやいはん鬼ゆりの
あだちが原にたてる姿は

猫また　酒船

ねこまたの姿とみしはまよひから
こちらのむねのおごるなりけり

海坊主　赤良

湯錢こはいへども深い海坊主
成佛してやうかみいづらん

ものゝけ　参和
ものゝけは葵の上のわざならん
加茂の車のあらそひの後

骸骨　東作
しやれ髑髏のほぢくる跡みれば
何事をいても南無あみだぶつ

羅生門　定麿
井戸がへをなせる計にいばら木も
渡邊の綱を引いたり〳〵

一ッ目小僧　ひかる
雨ふりてふり出したる一ッ目の
小僧はろくろ首のうら目歟

化物やしき　裏住
これもちの身では猶更ころさるゝ
化しやうやしき歟大門の内

うぶめ　さんわ
子とみせて石を抱するうぶ女こそ
たがめをかけしおもひものなる

寳方雀　京傳
うらめしきむねのほむらに燒鳥は
寳方すゞめものゝけを引

大あたま　めし盛
大あたまこれはかさごの魚なれや
いづればさつとなまぐさき風

火車　眞顔
遙足を追くる火車にさられじと
をのれ飛ても股をさくらん

一寸法師　かき安
ばけものゝ一寸法師は狩人か
うちしはなしのたねが嶋かも

生靈　酒船
おぼえある胸には釘をうたれしと
おもふきゆへかいたむふし〳〵

死靈　搔安
いつまでもかきねが根みきぬ川の
水にうかべるながれ灌頂

大入道　ひかる
すむ穴も大黒袖の入道か
名にはおはざんなまぐさき風

四隅小僧　めしもり
碁にふけし月のよすみのばけ小僧
どうかぞへてもあはぬもくさん

元興寺　東作
童さへ今はかしこくなら坂や
この手でいかぬ顏のがごうじ

化地藏　定麿
あやしみをみする地藏は六道の
能化の文字をあらはせしかも

枕返し　参和
しん〳〵と物凄き夜のともし火も
消てまくらをかへさるゝなり

迷ひの金　赤良
みな人の迷ひのたねとなりいでし
こがねのつるのあなうたてさよ

光物　京傳
なまぐさき風の吹くるやみのよに
光物すは魚のこけかも

轆轤首　眞顔

窓の戸のすきと信せぬろくろ首
ぬけ出るうそをたがつたへけん

犬神　酒ふね
祭られて位つきにし犬神は
いたくも人をなやませやする

のつぺらぼう　めし盛
武藏野ののつぺらぼうは捕まへて
はなしにさへもならぬにげ水

蜃氣樓　東作
はまぐりの柱やよせてたてぬらん
工手間をみるもあゝしんき樓

幽靈　定麿
年もまたなかばにはてし幽靈歟
腰より下のみえぬすがたは

青女房　播安
物すごき風ふく原の古御所に
生たつ草の青女房かな

青鷺　京傳
いろかへぬ松にたぐへん青鷺の
さもものすごく塀をみこすは

越中立山　ひかる
魂返す藥の出る國なれば
なき人にあふ越のたて山

狸　參和
冬がれて荒たる野べのはらつゝみ
これや狸の化のかは音

蛇兒　眞顏
長くなり短くなりてみこまれし
兒を蛇ともしらで待らん

逆幽靈　酒船
幽靈もしての山路のさかだちは
娑婆へひつくりかへりたしかや

鵺　東作
さる程に尾はくちなはの長ばなし
ぬえも變化も出るとらの時

八幡しらず　參和
このあたり所さだかにしらま弓
八幡の森へいりてなければ

皿屋敷　光
ひと二つ三つよもふけて七ッ八つ
九つわつとよぶ皿の數

古椿　定麿
風ふけばをのれと首をふる椿
はさへまだらにみへておそろし

雨降小僧　めし盛
さげてゆくおかべの雨のふり返り
にらむ眼は丸盆のごと

なめ女　まがほ
大かたのおそろしなとは甘口に
きへかへらするなめ女かな

あやかし　光
ぬいてかすそこきみ惡き柄杓さへ
あぶなき玉か舟のあやかし

しら兒　東作
をさなしと思ふまに身は化にけり
かしらの雪もわれはしら兒

天狗　播安
どつと笑ふ嵐の聲にくらま山
木のは天狗のみなちりにける

文福茶釜　酒ふね

文福の茶釜にばけのはへたるは
上手の手から水のもりん寺

生贄　眞顔
これやこの臆病神のみたらしか
いけにゑよりもいろの青きは

芭蕉の精　定麿
物すごき形をみするばせをはも
霜にはきへてうせぬべらなり

大座頭　ひかる
身のたけも高き利足の座頭の坊
金のたゝりのおそろしき臺

新ぼろ　眞顔
立よりてうてばひらりと新ぼろ
あやしく肝をけづるもの哉

古井戸　赤良
筒井つゝゐづゝの中にあらがねの
土の羊やおひにけらしも

高砂松　酒ふね
狸にはあらぬふぐりの廣がりて
まつの夫婦は化さうなとし

金だま　へや住
ばけ物の置みやげかや金だまを
千両つめし箱根やまほど

跋

雀海中に入て蛤と化鷹化して鳩とばけきむすめ藝子とばけ花嫁姑と化るは常の化ものにして南瓜唐茄子と化さつまいも笛吹と化るもごつとむかしの化物なりこの頃諸人はいふもさらにて詩人文人歌人までひとしく狂歌師と化て舌は電光のごとく鼻は天狗のごとくこは此化ものに出合は孟賁か勇氣もくじけ晏嬰が智もなまぬるく四角なる貌かへつて丸く角めだつ頭の角ぽつきとをれよく臍をしてくつかへらしむるはげに太平の化に腹つゝみうちうたふ箱根よりこなたの目出たき化物ならずやひと日夕顔のきみとりかくせし何がしの院にはあらぬあれたる家居の木だちものふり人くさきけもなき所にれいの

化ものよりつどひて終夜狂歌の百物語し侍りしをかきつめて一冊となしこれが末に寄化物祝といふことをよめどかの化ものゝ首領四方に名たかきだいだぼちよりいひこしければ

くはつと開く大の眼にかゝる世の
千代のさかへやみこし入道
唐衣橘洲

飲食狂歌合序

ひとつなべなる物くふどち飲食によせたるざれ歌の一巻をもてきてこれが鹽梅こゝろみよと翁かまへにぜんをすゑついでやつぢうりのてんぷら禪でらのふちやにまじへがたしたてばのとぶろく新川のくらに積べからずはんぺいにこのしろをたゝきいしなげをもて鯛とあざむくたぐひ二八のそばのうどんくさきふは〳〵の豆腐がちなるいひもてゆけば四六やたいのすゞりぶたとりどころなき判者なるべしまして熊掌猩唇のもろこし料理美物上下の四條流などは嗅で見たことだになければたやすくはしはとりがたしと辭すれどきかぬ日光ぜめにいなともいかでいひ櫃のくちから出しだいおしつけへしつけかはらいたき詞どもをもつてもつてもりつけ勝もまくるも杓子果報とはこのめしもりが判をいふべくや

六樹園

評判飲食狂歌合

左勝　酒　臥龍園梅麿

桃の酒一杯ほしておもひざし
手まづさへぎる妹こゝろなや

右　栗餅　三州岡崎　六兎園長雄

わかれなばまたいつの夜か栗餅の
きになるほどにつく明の鐘

左桃李の道ある妹に見されて涯のながれに盃をうかべたる醉ごゝちも常ならぬ作意とはしられて侍り右もつくといふ詞よくひゞきたる鐘の音に侍りされどおほおほしき目には勝負もしかとわきがたく侍れど無理酒のしひて申さば永和の九年酒雫ばかりつよくや

左持　霰酒　甲府　西山堂常雪

返事だになくてあるにもあられ酒
なき上戸とはなりしこのごろ

右　柏餅　熊谷　涼風亭岩守

待わびて一つふとんのかしはもち

むねのみさするよはぞくるしき

左右泣上戸　癪もちひとつ枕なるべくや

左勝　酒　攝州原田曉深寢父

打とけて君と寢酒はこれまでの
戀のやまひに百藥の長

右　栗餅　羽州山形六階園門盛

栗もちのあはぬ恨みもいはずして
きできをくひてゐるぞくるしき

左あふひならではと申すは後拾遺集の素人ぐすり百藥の長なりとは本草行國が娘につけたる良劑にて一ぷくにて驗を見しことも匙よりまはれる作者の口つきお上手なりと稱すべし右うらみだにいはぬとは本性夕がほのあたりにちかき隣畑の餅栗のあはれなるありさまあぢはひふかし此目黑村の百性よき爲なしながら玄關つきはくずしの方少々まさりぬべし

左　玉子酒　甲府井口常水

うはべにはかたく見えでも玉子酒
つひにはきみのとけてうれしき

右勝　草餅　奥州八丁メ文笹林星影

つくといふことを厭へば草のもち
ひしとこたふるきぬ〴〵のかね

左たまご酒の鍋うすきにあらねど右の草もち打聞にさへかごあれば十軒店の正札附まくべきさまにあらず

左持　玉子酒　不盡亭貢俊

戀風のくすりにもとてのめば猶
なみだの水をます玉子酒

右　草餅　千代德若

草もの青くなりたる戀病を
ひしがくしする身こそつらけれ

左右ともわづらひに枕ならべたるさまはやり風の呉服屋が二階もおもひやられて意詞たかく聞え侍れば代脈の判者その症をわきかねて侍りよりて樣躰の輕重を申さず持參の持の字をつけて侍り

左勝　濁酒　談洲樓焉馬

その時はさうと詞のにごり酒
ひとつうけたる君が手づくり

右　鶯餅　有竹千枝成

あはざるはうぐひす餅よ此もまた
首尾の月日をほしとなくのみ

左くみかはすにごり酒一杯まゐつたいもが手作りうまからぬにはあらず右首尾すべて鶯のねにのみ心をしめて餅をわすれられしは黃鳥一聲酒一杯の上戸口にやかつぎやたいのにごりさけ貫目ありげなり

左　酒　文の屋折形

媒へのませし酒のかひもなく
水になりたるあいさつぞうき

右勝　幾世餅　羽州山形長月庵坂都樹

いく代餅いくたびとなくやる文を
つきかへしたる人のつれなさ

左こなから棒にふりたるはかひなかるべし右つきかへしたるの詞よき案と申すべし水になりたるふるめいたれば橋から右のいくよもちしてやつたやうなり

左持　酒　婦美多餘理

かりそめのことからうき名立酒の
五しやくの身だに置どころなき

右　栗餅　呑直寝

栗もちの手品になげし玉章に
　ころりと落てきなことぞおもふ

左湯豆腐の四文と出かけて紅葉おろしのからきめを見たる狀ところせき居酒のたちのみよくおもひよせられたり右御めごほり心のつきうり柏子にかゝつてきなことりおもひのたけの皮つゝみ評判〳〵ともよばふべくや此兩みせうり高ひとしかるべし

左　酒　紫茸園かつら

すき腹のさけより妹があいさつに
　ひつくりかへるほどのうれしさ

右勝　椿餅　濱政子

諸共にあかぬことばのはしそへて
　八千代ちぎらん玉つばきもち

左うけひきぬる妹が前にて蜻蛉がへりしたらんにはかくし所もあらはれておもはぬ汗やかくべ獅子いろけなしとやきらはれなん右つばいもちひは若菜の上菓子高足の鞠いとたかくあがりたり

左勝　諸白　甲府半襟賀計女

呑口の口ばしりてやもらしけん
　うき名にむねもいたみもろ白

右　鏡餅　仙臺錦纜堂浦人

戀やせの顏をうつせるかゞみもち
　かさなりあうてねるよをぞまつ

左きいたこといはでこらへぬむくいにやとは雄長老の狂歌にみへたりこれはわれとしやべりちらしてみづから罪をつくり酒屋口は禍の又六が門といふ事か右鏡餅かさなりあうてねると申されしはかされたる餅を又ねるといふやうに聞えて前後相違にみへたるはいそがしまぎれの極月の作なればなるべし左の呑口よくはしりて見ゆ

左　にごり酒　奥州白川六逸園竹盛

妹が返事にごり酒にてとにかくに
　われに頭痛をやますのもうし

右勝　きり餅　尾州一ノミヤ酒龜丸

今さらにおもひきれとかきり餅の
　かごある君があいさつぞうき

左人の痂氣ではなくて人やりならぬ頭痛のやまひ此はちまきは過しころとは助六の浄瑠璃にて白酒に似たにごり酒戀の道には苦らうさけ〳〵右五人ぎりの小万がやうに急にぴんしやんとみせんのかはつた心の五大力此作者なみ〳〵の人ではなへはへカチ〳〵

左勝　酒　尾州秤中雄

林間の酒ほど床もあたゝめて
　顏にもみぢをたけるそひぶし

右　きなこ餅　桑名蛤丁櫻馬伎

神かけてもちのきなこに鹽砂糖
　あはせてたべといのりてぞすれ

左白氏文集の堅みをすてゝむしぶすまにあつくなれる風情一しほのいろ紅葉とや申さん右かけてはきなこの縁なるべけれご御馳走ぶりほどほゆきさゝかす見ゆ林間の紅葉てりつよくや

左　霞酒　奥フクシマ橘香和義

わが心くむ氣はさらにあられざけ
　さてのみこまぬ妹が氣づよさ

右勝　餅　紀州若山紀　靜

蒸籠のふけゆくまゝに身ひとつを
　もちについたる待よはの床

左四の句ばにがい丸薬のこゝちす右ひやうしの手よくそろひたり勝とはつく男の名なる歟

左　玉子酒　　同胴膽太紀

好物の玉子酒たつ法もあれ
君が夜床にぬくめられてん

右勝　白玉餅　　フクシマ山中麗住

いでやまづ鬼一口にねぶりてん
しらたまもちに似しいもが顔

右在五が物語の伊勢町にとなれる瀬戸物町のしら玉が何ぞと人のいひよりて神鳴るさわぎにだきつきしさますべて闕疑抄のかけめもみへず侍り左すもりをいとへるたまご酒ふさんかけるとよびたるなどくだかけのくだけたる所もみへずされど右の方人の申て侍るは玉子にても此下句かなひぬべし酒といふ文字いたづらなりと雛鳥の毛をふきて申めれば瀬戸物町の方をさして堀江町のうちはをばあげて侍り

左勝　酒　　オク瀬上三秋堂歌文

よそへゆくことをばしらで待酒の
かはつたごとくおもふくるしさ

右　からみ餅　　千水垣

足つよくかよへど君はからみもち
とかくねばりて契らせぬうさ

左疊さんのめを見せし人のためにながい夜すがられもやらぬとはさりとはおきながたらし媛のむかしを今の人まち酒感氣侍り右笑るとはこん世にははれをならべんといひ又はいつ／＼の御げんのふしをしのふすまをかさぬべしなどゝいひやくそくをする事なるをちん／＼鴨のことなりとするはとりちがへたる麁相にや侍らん左のまち酒燗出來たるやうなり

左持　玉子酒　　クハナ南松亭音澄

こぬ人をかこつ涙のたまござけ
あてのちがうたよはぞかなしき

右　からみ餅　　琴松舍冬住

いひやれど妹がことばのからみ餅
おろしつけたる返事うたてき

左とまりの船の帆づゝしめなはいたづらなるものなるべし右十把一からげの大根といはれてイヨ役者となぶられしをはらだちたる趣なるべし左右甲乙なくや

左勝　酒　　出雲酒落栁

いひよれば一口酒のよくきゝて
はらの中までをどるうれしさ

右　雜煮餅　　篠林堂糸織

あふよはゝむつまし月の雜煮もち
露澤山ないもぞうれしき

左初戀の下戸口あながらにやつてのけたるさまきゝ所なり右むつまし月のざふにもちいもとさへつゞけられしをかしさは左にまさりぬれど居風呂桶にて牛房あらひて雜煮の中にまぜられしなどちと荒凉に聞ゆめれば下がゝりなる下屋の方に床をさらせて侍りせんかたなみぞ床なかになるとはかゝることをや申すべき

左持　燒酎　　酒藏人

いひたさもいはでのみこむ燒酎の
しやくを押へてしのぶくるしさ

右　粟餅　　桑名南陽堂岡住

戀いのる目黒の道にその名さへ
きにかゝりたるあはもちのいろ

左右こなたにしのべばかなたにいのる癪
に酌をくらぶれば優に負をなぞらふ心づ
かひさもにひさしくや

左勝 酒　尾州歌窓弘器

五百世もちぎりて妹とかため酒
つぐに手のある銚子うれしき

右 汁粉餅　甲府佐屋裏襟

縄すだれかくとも人はしるこ餅
われのみむねをこがすくるしさ

左みつものゝ盃綱をばとり置てこれは手
のある果報ものねてまつ床のかため酒め
でたく聞ゆ右人はしらじといふ意なれば
しるとばかりにてはうまくはかゝらずさ
逢筋三枚橋わたりふらつける折助などや
申べからん左の説法きゝ所ありげに侍り

左勝 酒　似顔悦氣

嬉しさはふたり寐酒のつけざしや
互の口を吸ものにして

右 ちまき餅　桂家風

今更に心もせくのちまきもち
つゝむにあまるむねのくるしさ

左二人ねざけの吸物あんばい八百善も遠
くにげぬべし右しのぶ戀の意なるを何を
見かけてこゝろのせくにや左のつけざし
をありがたしとすべし

左勝 酒　鴻照庵流雪

まつよはの胸にこたふる時酒は
ほしてもそでのぬるゝかなしさ

右 草餅　仙臺糸唐麿

草もちのくさ〴〵胸につきつめて
いろ青ざめし戀病のかほ

左桐火桶のねぢいさまではないがほして
も袖のなどいへらんあたり優に聞え侍り
右よごのゝ母子もちよろし但戀の歌はみ
づから戀する人になりてよむがならひな
るを戀やみの顔などいひては隣の窓から
のぞきてみるやうに聞ゆべくや左まさり
て侍らん

左 酒　松梅亭魚人

くりことはつきぬわかれの泣上戸
酒のあとひくきぬ〴〵の袖

右勝 鶯餅　高砂松成

かきおくる文の返事にきなこさの
うぐひすもちのはつねうれしき

左孟東野が古別離の作を延壽太夫にかた
らせてきくこゝちす但泣上戸といふ詞俄
なるやうなり右うぐひすもちひき菓子の
中にはまじへがたけれど三文ばかりの勝
なるべし

左勝 直し酒　祭和樽

今宵あふしらせにいろもなほし酒
ひのいるまでをまつぞひさしき

右 雑煮餅　質亭文斗

あみの目をいとうて忍ぶ雑煮もち
つらやこれにもまた耳がある

左しらせの文の一本ぎに心さへゑひしれ
て落かゝる日の足どりをさへ心もとなく
見たるさまいひしらずこまかにめでたし
此直し酒池田伊丹にもくらぶべき物なき
名酒とや申さん右きり餅の耳するごけれ
ど勝は左の西日をこそさすべけれ

左 酒　尾州鎚丸

君まさばふたり寢酒と用意せし
ちろりにさへもはかまぬがせつ

右勝 看板餅　オク保原假堂似瓢

ちぎるとは唯見せ先にふるされて
看板もちのわれのみぞうき

左ふたりねざけの一ちろり鼻息もふいご火鉢とやいふべからん袴といふ文字赤貝のよみそめし以來今は七つ時分になりにて侍れば折角のまち酒がひなくおぼへ侍り右かたき契りもわれ〳〵となりてうらすかはずの看板もちてらされてゐるをなげきたるさまよろし勝にたがはじ

左　にごり酒　上州青晴園南湖

うき人はとかく心のにごりざけ
くみ直してもすまぬあいさつ

右勝　いか餅　同古氣成

附まはしくどけといかないか餅の
一向ねれぬあいさつぞうき

左くみなほすとは伴たちのあつかふ意歟右いかもちなつかしかられどめし粒ほどはよろしくや

左　老松　狂蝶子文應

老松のとしにもはぢず酒樽の
むしろやぶりに妹ぞこひしき

右勝　山椒餅　梅麿

妹とねてかへる朝くら山椒もち
うまく人目のせきはこえてき

右關はあさくらのためにかまへられたるおごそかにみゆうまくの詞にて餅たしかに聞えたりようせずは山椒によする戀にやなりなましおはれ作者のなのりこそきかまほしけれ左六百番にみへたる老戀をよまれしぼけたる判者耳いたく侍りむしろやぶりなどみづはくみたる人の心にはふさひで侍らず虎一が強勢丸のかなづゑの力をさへみせてしたゝかにたゝきすゑんとさへ思ひたまふれば此歌をはまけと定めて侍り

左　酒　千枝成

宵の間にひかへられたる酒よりも
あとをひいたるけさのわかれぢ

右勝　鏡餅　金亭正直

かへり見ればかげにぞしるき鏡餅
ひくわれながらくだくこゝろを

左曉の明星が東へちろりのねざけをさへおくびに出すきぬ〴〵の空あはれふかし右われながらやつれたりとは蓬萊の鳴物語にまさりて鏡餅のかたくなにくだいたる心いと〳〵こまかなりしるこ雜煮のなべてのもちひいかで此そなへのめでたきにおよぶべからん左も名酒の味ながらかた餅の方がち〳〵と音して侍り

左勝　酒　部内元住

聞酒のきゝだにいれず中々に
はき出すやうな妹があいさつ

右　かき餅　尾州歌泉堂眞澄

これ見よと恨みのたけをかき餅に
やきかゝりたる妹がたまづさ

左きゝ酒あま口なる妹にはあらぬなるべし右かきもちあぶりこのめざましけれど問屋のとしむかひにはさびしきこゝちし侍り

左勝　酒　知宗盛砂

ひや酒のひしても燗をつけられて
出來たと人にゆびをさゝれつ

右　あづき餅　貢　俊

いふ事をきかぬさたうの小豆もち
妹は耳をやつぶしあんなる

左指なきゝれつといふ所か山口三浦か惣
銅壷つッこんでよくよまれたりとや中さ
ん右くひかげんよしと聞めれどつぶしあ
んちとばかりへされぬるにや

左　　劒菱　　　　尾州桃源亭園丸

戀中をさけときくさへむねいたや
うきさが口にふくむけんびし

右勝　餅　　　　　石川淸澄

戀しぬるばかり苦しといひよれど
つれなや君は耳ふたぎもち

左酒と裂の秀句よろしけれどこゝはさく
さいはまほし但さけと下知しつるにやさ
ては此酒一杯にたらはぬこゝちして侍り
右しぬとぞたゞにいふべかりけるとしつ
ふか養父が歌をとりてさうは虎屋が餅一
重菓にしたるさまおかしくや勝たるべし

左勝　酒　　　　　甲府可鷄多理雄

物くはでいのれば神もきゝ酒や
ひと口うまき君があいさつ

右　ひし餅　　　　尾州三五屋影住

言の葉もとかくかとたつひし餅の
つらやひそりてわれ〳〵の中

左右の餅酒はらにあぢはふるにともにす
てがたしよし酒に泥の名をよはれのし餅
の棒にうたれて泥ぼう〳〵とのゝしると
も盜人上戸の怠狀かきて持と定むるこそ
如件

左勝　酒　　　　　桑名順風舍積業

のみすぎし二日醉よりやる文を
つきもどさるゝむねのくるしさ

右　腹ふと餅　　　郡內籬元住

あづきほど包めど人やさとるらん
身ごもる妹が腹ぶとのもち

左おくれる玉づさのこま〴〵しきよりこ
ま物みせのむなぐるしきふぜいはきく〳〵
とせし趣向なり右見つけさんしてこれお
そめと門づけのそばの大ふくもちかうば
しき匂ひながら左の駒よせによりかゝり
たるゲロゲロの音いさゝかたかくや

左　直し酒　　　　尾州一見亭紫丸

そこねたる妹がきげんをなほし酒
あまきことばにつきてくどかん

右勝　のし餅　　　瀧濤舍堅住

のしもちののしかゝられて手枕に
つくむしろめを人にかくさん

左本の句はおもふが中の小いさかひと聞
ゆるを末の句にくどくといはれしは初對
面のやうなり但きゝ酒のきゝたがへかも
しらず右のしかゝられてといふ詞荒凉な
がらたまくらのむしろめよく心づかれた
れば勝とす

左　忍冬酒　　　　同六志園益盛

くどけども妹は氣づよく忍冬酒
あまきことばもなきぞくるしき

右勝　かしは餅　　一寸法師

かしは餅みそか男はつゝむ葉の
うら見よとてかまつにきまさぬ

左き文字あまたかさなりたるはいかにも
きづよき酒とは聞しられつ右柏の葉のう
らおもてをさへいひてみそか男とつゞけ
られし重箇のすみからすみまでおめでた
んごの心くばりゆきいたらざる所なしあ
すのひなりのかちたるべくや

左持　酒　　　　　尾州犬山松俊古

あふよはの閨にふたりがくむ酒は

ちぎるひよくのとりざかなにて

右　そなへ餅　花園彦麟馬

このやうに二つ重なるおそなへを
あげてむすぶの神せがむなり

左ひよくのとりざかな右かさなるそなへ餅上戸と下戸のとべちとだめかれて侍り

左持　酒　同一ノ宮　舁高成

なる口かならぬ口かとなかだちに
たのみし妹がべんじ聞酒

右　のし餅　狂語園江戸振

のし餅のたちわかれよとつき出す
鐘きくみゝやまづ落してん

左きゝ酒としたろなんくせも侍らず右よくねりたろ上春の餅と見ゆたゞし耳をおとすと申されしこと餅にはさもいふべし人の耳をおとすといはんこと聞なれずフギヤ〳〵とうめく人ならば鼻がおちたともいふべけれど耳にはつきなく聞ゆ此結句きりもすてゝんなどあらば勝べきつがひなるを落のへ字にて持とは定めて侍り

左　醴　山形　坂都樹

あまざけの口にうまみを含ませて
一夜にかはる人ぞつれなき

右勝　大福餅　濱邊庵朝風

うき人は皆いふことをつぶしあん
大ふく餅のこがれゐれども

左すゝりはてたるあまざけとみろに一夜にかはろとは手のこしをして置たろにや右大ふくもちのあたゝかにうまい返事はせぬとにや左右かつぎあきなひながら大ふくの方うりかちたるべし

左持　治聾酒　栃澁丸

返事だに今になければ治聾酒を
きこえぬ君にまゐらせやせん

右　草餅　桑名　松々亭千枝丸

見られじと心もせくのくさもちの
ひしてぞおくる戀の玉章

左返事のない文とかけて治聾酒とゝくこころは聞えぬ人にあげたい右いろ文とかけて草餅の重箱ととくこゝろはひしながらおくる

此二首淺草の謎坊主ふたゝび目をあくとも甲乙をはわけえがたからん

左勝　男山　尾州　紀有文

戀に身はあとへとひかぬ男山
なるとひとくちへんじきかせよ

右　餅　焉馬

蒸籠のしまひ仕事の引ずりは
自由自在にならふ女房

左なるといふ詞に酒と戀とをやらずのがさず男山とかやきもかゝアたばれのいさみすがたとはしらろ右里なまりのされぬ年あきのきたすき女房情なしにて戀のこころうすくや但女は夫に従ふならひなれば男山にかたさりぬとも耻にはあらじ

左持　玉子酒　桑名　岡佳

玉子酒たまのあふ夜は打わりて
おもひを君にとくかたらなん

右　そなへ餅　犬山　影佳

妹と二人ねるやうにとてそなへ餅
きぬとうすめの神にいのりつ

左たまごにうちわりてなどふるしとてか

きたて箸にめをつけていふ人も侍り右粢るはぬるとこそいはまほしけれどつきおどろかす人も侍れば雙方まろく引わけて玉子とそなへのあらそひをとゞめて侍り

左　醴　糸織

三國に一なる妹にあまざけの
一夜ねかしてくれとたのまん

右勝　餠　甲府裏襟

こゝろなく妹は返事を引ずりの
もちと〳〵にのばすくるしさ

左あまざけ屋が障子の文字ふとくたくましき体ともいはまじされど一といふ文字ふたつありとてあつい茶椀をふいて疵をいふものもありぬべし右ひきずりもちのかまはぬをなげきたるさま松まきのけぶりたちのぼれるほどには侍られとカチンと定め申すべくや

左持　諸白髪　クリハシ王の屋

諸白のもろしらがまで年ふとも
こもたる中の中はかはらじ

右　さたう餠　伊勢濱荻

忍ぶれど色に出しまの砂糖もち
ちぎりもやらでむねをこがしつ

左孤樽よくならべられたり右砂糖もちかたちをかしくまろまりぬ左右同等歟

左勝　酒　文暦

時酒の時をすごしてこぬ人に
かさねてといひし契りくやしや

右　小枕餠　風流雪

かくあれといのる會式の祖師の前
こまくら餠をふたつならべて

左時酒鐘とともにすみわたりて聞ゆ右會式の小まくらもちはかぎりもなくあまたならべて此ごろはやりの石疊たつやうにはかざるめりしかるをたゞふたつと申されしは二人ぬる枕にはさもいふべし左の時酒のむに難なくや侍らん

左勝　酒　京水月

酒粕のしめてあふ夜におもひきや
なみだにそでをしぼるべしとは

右　いく世餠　歌林堂糸道

言の葉にあまみをみせていくよ餠
いくよもちぎる中となりてき

左おもふまゝにはならづけのしほ〳〵としたるさまお茶づけのさら〳〵と聞えたり右のいくよまづしとにはあられど出來合の風味なりつけものゝ方おもしよくきき侍り

左　男山　栃木通路亭曲成

ゐにめでゝ寢酒になしゝ男山
ひとりのみぬる床ぞわびしき

右勝　餠花　麥飯高盛

目黒山いのるしるしに木に餠の
はなさきてなる返事きかせよ

左男といふ名にめでたるなみれば女の歌と聞ゆしかるに粢酒をしもひッかけんとするはいろけのうすき方なるべし右粟もちのあはと見そめて飴の袋のきり〳〵と返事白銀めぐる花とは近き世の童謠にやあはれ一の富のみとへ花さへよいけんとくの夢ではないかとうれしがらせてくれたまへと目黒を祈る戀の歌駕をつらせてかちとは見えつ

左　忍冬酒　六十軒一長

戀病のくすりにならで忍冬酒

とかくに妹のにがい顔する

右勝 いく代餅 酒喜々丸

日ごとやく思ひのたけの皮づゝみ
いく夜もちこすふところの文

左忍冬酒よろしけれど一首のつくり方させる功能もなくや右妹にこがるゝいくよふところにおしこめておけるあつき心さしらる勝なるべし

左 酒 甲府 藤田峽の屋一飛

たへかねしわが聞酒にわきむいて
舌打をするいもはうらめし

右勝 水餅 歌工成

おくるべき折もなければ水もちの
もちくさらせし文ぞくるしき

左きゝ酒の舌打きゝなれず右手をいれたがる水餅おはぐろくさくなりたれど物置の隅にはおきがたし可爲勝

左勝 醴 尾州 益盛

あま酒のなれてうれしと思ふ間に
あぢのかはりし妹があいさつ

右 粟餅 上州桐生 一陽亭長持

うき契りまつ夜はあはであは餅の
君があだなる口のまづさよ

左なれてうれしさは三國一の盃もすみぬろにや下句にくさみのつひたるをなげかれしさもあるべし右粟餅の黄なるをさへ申されしよくもこゝろのつき加減され音たかしされど粟もちを一すぢにまつきものゝ部にかぞへられしは清少納言もきのつかぬところなるべしよりてつきだまりの一つぶばかりいさゝかのひけとはさだめつ

左持 酒 一寸法師

こぬよはゝ名酒の樽のせんもなや
くる〳〵まきの帶もとかずて

右 うゐらう餅 岐阜詩館歌笑

あはぬ身はうゐらう餅の皮づゝみ
しめたる帶をとくよしもがな

左涙の瀧水右うきたる舟橋屋いづれもおとらぬ名家と聞ゆ

左持 酒 氣若女

たま〳〵にあうてわかれの時酒に
またかさねてといふぞくるしき

右 牡丹餅 德若

わが戀は今出來たてのぼたもちの
やはらかな手をにぎるうれしさ

左盃手にとりたる時に鐘の聲するを時酒といふとある時はかされてのむならひなりと老たる新造こそ申て侍りしがさるをおさらばのきぬ〴〵にとりあはせられしみな春をたゝきて感じ侍り右できたてのぼたもち越後屋が風味ありてかの黑砂糖にしあげたるくふも御難のたぐひには侍らず此つがひ又持とや申べからむ

左 山々 曉庵御代住

今はたゞ戀ふるうらみの山々に
むねのいたみのたゆる間ぞなき

右勝 水餅 清澄

戀やみてのどへとほらぬ水もちの
あしさへよわくなりてくるしき

左むねのいたみおかしげなりしかれども山々は池田の山城屋が酒にて伊丹にあらずと人申て侍り右なよ〳〵としたるさまは桐壷の更衣にや扇屋の夕霧にやいづれ臙清も年季をくれつべきさまなるべし左

の山々灘ならば直段おさるべくや

持左　山々　上州高濱菊萬世成

なさけなや戀の山々くどけども
しるしの菰のかぶりのみふる

右　のし餅　此邊赤下手

すがごもに一夜ねしよりのし餅の
耳だつものはうき名なりけり

左戀の山々のしるしかひなく新川新堀の水にながしたるをうらめるこゝろふかくや右ののし餅一口ものに頰をやきてほゝやれほうさはやされたるおかし左右さしになひて一荷さすべし

左　酒　一風流貫也

詩も歌もしらず五升だくさ
一斗の酒にくごく百返

勝右　牡丹餅　甲府裏襟

文は棚へあげて見もせずぼた餅の
けがにも落ぬ妹はうらめし

左唐やまさ共に艶書にまきこめてやるは詩歌なるをこれらもすつきりぞんじませぬさには庄屋のべく兵衛がなどりの唱歌めけごさつなる様にはながむより外のわざなからんか五升をあはせて一斗の勘定より下句は謫仙人の寢言をさへやらかされし長安の酒家もあきれつべし右運は天にありぼたもちは棚にありさはいづれの代の聯句ならんうち見にはやはくさみゆれどさすがに重箱のかごをみせて鼠穴のひき入たるをうらめるさまおかし左生さ升のかなもむづかしければ棚のぼたもちをあふぎて見つべく侍り

勝左　千日酒　みつあさ

しねしなんの誓ひにのみし千日酒
ほつてもさめぬ戀のかねごさ

右　粟餅　河州野暮齋高行

くひつかんうらみも今はあは餅の
いはぬいろなる戀やみのやせ

左偕老同穴のあなうましをさめにあひぬのさゞめごさこいつは日本さいふ所をこさへぐから國にさりなし千日酒のあさをひかれしめづらしくうけたまはりぬ右うらみをだにいひえず顔色の變りたるさまよし此戀やみもしやぶ醫にみせましかばようせずば茴陳湯をやもるべからん此病人もすてがたけれど猶左の劉玄石ほり出しものゝこゝちしてめでたく覺へ侍り

勝左　酒　赤貫改　上州在江戸桐雅雄

こゝろねの赤さも顔にあらはれぬ
ふたり寢酒につもるむつごさ

右　粟餅　阿州河の上白翁

たまさかにふかしてこよひ粟餅の
つきてうれしき君がうつり香

左緋繻子緋ざやのよるの物に朱盃に九年酒をつぎたらんはいかであかゝらざらん右のうつりがたかしさいへご酒の匂ひには少々けをされたらんかし

左　酒　武州カネコ便利庵商人

きゝわけぬ君が心のなだものや
頭痛にばかりやますくるしさ

勝右　粟餅　仙臺東雲舍明鎰

うすなさけ手を盞せどもあは餅に
つきまはすさは曲もなや君

左われはにせささへおもひたるを薄々の酒のお茶湯にもならずさうらみたるよろし右あは餅のうすなさけやはくさわれ

につきれさのわびごさ大きに曲あり勝べくや

左勝　酒　　みつあさ

いざさらばこひしき時は酒のんで
泣上戸ぞさ人にいはれん

右　草餅　　阿州針業有大甚

おもふこさ心にむして今ははや
胸ももえぎのいろの草もち

左こひしき時のおもがくしには醉泣するに猶しかすけりさは大伴卿も御存ない口つきほむるに舌もまはらず侍り右心にむしゝ草もち藍より青きこゝちすされご左の竹葉をみごりふかしさ申すべくや

左勝　酒　　オク會津水莖園升成

みな酒がいはすさばかり疑うて
妹はさかうのいらへだにせず

右　餅　　三州加納紅園右蝶

わが胸は上からみえぬあぶりもち
人目のあみの下はもゆれご

左わろい酒よさあはめられては何を以て憂をさかん憂思忘れがたしさやらかしても魏の武帝も氣のふてへさいふ地口のやうに聞なされてはては無言のうしろむきしゝまのかれのたばこ盆けぶたい妹をうらめる一ふしさかう詞にのべがたし右生漿油に胸をやくせつなき戀のあぶりもちあふぐべし〳〵されご左杜康さいふ大だてものをさへ出されてだんまりの幕はえあれば勝べし

左勝　白酒　　上州高崎黄金釜成

君はたゞかまくら河岸のしろ酒か
もうきれたさはつれなかりける

右　柏餅　　山形千桑庵眞弓

猶も葉守の神をいのりて
なき名のみたつをつゝまん柏餅

左内裏ひゝなの夫婦ぐらしさあらましこさのかひもなく戀の山川中たえて中ウさしま屋にこさわられたるよしをつゞけたるよろし右もちの名より神の名にさへおよぼされしかひ〴〵しく聞ゆ本歌のしらでぞをりしさいへるは後撰にはならのはさあり今は大和物語にてよまれしなるべし但なき名さは戀せぬ人の詞なるべければいかゞに聞ゆあだにたつ名をやつゝまんなごありたく思ふもいらぬ佐平二なるべし此つがひ重兵衞殿を勝さす

左勝　酒　　上州イカホ擧白園桝芳

待よはのうさをはらしにのむ酒さ
さもにうらみをかさねこそすれ

左　笹粽　　瓠形天馬

笹ちまきむすびかはしてその中は
青きころよりおもひそめてき

左やけ酒の青ッきりにひさげの水のにえ燗のわきかへるうらみをのべられしすごいほごによまれて侍り右六帖におく山のかきほにかゝるならのはのあをかりしより思ひそめてきさいふ歌あり和泉式部がいなり山はこれから出たるはなしなるをふたゝびむすぶさゝちまきさしておいしくも見へず左の獨酌こゝちよくおぼゆ

左持　玉子酒　　イカホ一樹園久澄

夜着をふは〳〵させてはらはん
玉子酒つもるまくらのちりも今

右　燒餅　　高サキ泉源樓壽女

よりそへば心がはりかやきもちか
ぷいさふくるゝ人のつれなさ

左右の方人の申て侍るに玉子酒といひてふは〳〵とはいかに此ふたつ同物ならずまた下句もいぎたなき人の屁こきたらんやうなりと申すあり右も左方人の申せるはぶいとの詞不庶幾と申す判者申て云難をとりたてゝ申さんには楊貴妃が狐腋小町の穴なし吉祥天女を法けつきたりとは昔の人も申て侍りされば人の口には戸がたてられずすりこ木をもて定木の説はとるにたらずとや申すべからん此二首ともに狂言をおかしくとりなされたれば焼もち鶏卵をひとつかみにしてともにわれとやさだむべからん

左　鮎　　梅麿

枕繪によくにしを鮎おし鮎の口すふと人のかけごとぞうき

右勝　冬瓜　　風流雪

百ひとつなれとぞいのる神の名のかもうりをさへたち物にして

左口やをさへうはとされしは身にとりては貫之のみかはやすのりがむすめのおちやツぴいなどさへかな棒をひかんとおもへばおしあゆの顔のつぶるゝとのなげき

御尤〳〵感心いたしてござる右わきもこは唐茄子かぼちやのたぐひならず島の中におしろいした冬瓜の花の顔すがたどうぞ一たび青首の鴨のおへにかもうりをたちうりすとはしるか葛煮かといふ心なるべし此一番土佐の海ふかくみあれ出たかしされど持の名きをいとふまゝにしひて判斷をくはへ見るに鮎の口より冬瓜のしりすこし大きなることゝちす

左　石かれひ　　上州吉井　逍遙園行康

いろ〳〵に料理て見れど兎に角にいもがこゝろの石がれひなる

右勝　山葵　　桂家風

いひよれど口を塞いでわさびより鼻をあかして君ぞつれなき

左かれひの料理かた秘事口傳あることをきかず右わさび格別の風味なられどきかぬには侍らず

左勝　蛸　　尾州　有文

たこのあし八つと七つの鐘きゝていもとぬる夜は身もとけにけり

右　菜　　壽保亭堅人

うらめしや今さらたれた小便にかへてうきなをふれありくとは

左むかし〳〵此所にまだこの章魚といふ者あり章魚がはたけに芋をほるとき鍋の中にかくれしを八足にてからみつけば蛸はたちまち湯と成て候なんぼうなかしき狂歌にて候右小便とはふるされたるをいふにや此京菜名物と見ゆされど小便たごをまたいだる足は二本なり八本のかたをまさると申すべくや

左勝　あかめ鯛　　花源樓菊成

戀すやとゝはれて顔をあかめだひをひれをつくることのはぞうき

右　豆もやし　　望月詠女

きます夜はどこか心もまめもやしならぶまくらの二葉うれしき

右心もまめもやしと申されし聞わきがたし左のあかめ神代紀にて見た顔なればこれがかたをひこほゝでみと申てさく

左持　飯　　江都振

鰒程にあたゝまる夜はほりものゝ
命なけ出す君がしき腕

右　からし　　山門　形盛

きぬ〴〵の鳥まで聲をからしの粉
きけばなみだの出るわかれぢ

左なみたいていのことかひなに命といふ字はたがかいた白むくぬいて二世三世と契りかたらふ女夫の中おかし右四の句のきけばと申す詞げに根性悪のかいたる芥子ほどによくきゝて侍り一首はしたひもをゆふつげ鳥といへる古歌もおもひ出られて興あり但わかれぢと申す路の字いさゝかこゝろゆかぬやうにおぼゆ左も名歌ながら鰒がうはさのやうになりて侍ればひとつふとんにひつくるめてともに持と定めて侍り

左持　鰯　　會津　外成

つゝめども鰯のあぶらこい中と
人がめざして名をふれにけん

右　紫蘇　　多餘理

手をもんでをがむばかりか梅漬の
いろよきへんじねがふしその葉

左節分のかべに耳ありとのなげきなるべし右つけ梅のおしをおもくごかるゝさまいづれもおひろまんまのおめぐりにてこれもまた甲乙なきなるべし

左　こち　　夢廼屋賤麿

魚の名のこちの人よとよびてたべ
あたまがちなとよしやいふとも

右勝　からし菜　　甲府　裏襟

むせかへる涙もくるしからし菜の
からきこゝろの人をこふとて

左魚賣の關七ふとくたくましき躰なるべし右からしなのからびたる躰ながら八百屋の久兵衛人がらはまさりぬべくや

左　かつを　　武州引又　紀安丸

約束のたよりをこゝにまつの魚
千とせかはらぬ妹があいさつ

右勝　大根　　濱　荻

君をいつだいてねりまの土大根
千六本もふみつけて見ん

左松魚はかつをにあらず鱸なりとある本艸家は申て侍れどこゝにいふべき論にあらねばうち置ぬちとせかはらぬも松の縁語にて魚のかたうすくや右ちよきく〳〵ときざまれたる庖丁のはおとひやうしおかしく聞え侍りされば此まないたのおとろい「左方人」かちく〳〵といふことかふるいふ「判者」イヤ〳〵かつた〳〵と申すことなり「左方人」つき米屋ではあんめへし

左勝　さより　　麟　馬

抱きあふ其きぬ〴〵はほねもなく
あはせざよりのわかれかねつゝ

右　つる菜　　悦　氣

せんざいのつる菜の畑の二世三世
いもが夜床をはひわたりたや

右千歳の鶴菜むづかし左のあはせざより少々てぎはみへて侍り

左持　するめいか　　仙臺　唐　麿

わかれ路は涙に目をぞするめいか
からす飛出すあかつきのそら

右　わらび　　盛　砂

戀やせしさわらび程の手をとりて

根をほりて問ふくすしうるさや

左大通焼のかうばしきことのはいかさま上手の作なるべし膽を烏は子どものよび名又海上にうかむとき烏きたつてついばむを足にてとる故に烏賊とこそはなづけたれヤツアイヨイホン〱イヤア右かなひばしといふ所をさわらびとしやれたるは氣むづかしき病人には口輕き所見ところありて文字二つかさなれるは病人の手と醫者の手と診脈のていでもあらうかそこらは大目に御覽のとほり烏賊と醫家とのにらめくらふき出すまでは預りにさだめ侍り

左　魚　仙臺錦春亭永記

緣むすぶ神にちかひをかけ肴
ふたり一所にならぶうれしさ

右勝　菜　岡崎六玉園古則

妹がこよひあをなといひし約束を
又小便のへんがへぞうき

左かけ肴山家にはきゝなれ侍らず右靑菜むづかしけれど小便しこゝろよし可勝

左勝　鯖　クリハシ玉の屋川曾丸

なま中にいきぐされなる鯖のいを
さばぞと妹にわかれつるより

右　蓴菜　家風

戀瘦て身はじゆんさいの箸にだに
かゝらぬていとなりしくるしさ

左二の句に此頃のふさぎをしらせて四の句にわかれし情をのべられたる魚へんに靑き作者とはみえず此魚ことにあたらしければ直段をもしますかひとりて惣菜の料となすべくおぼえ侍り右れぬなはのぬらくらやまひよろし但例の方人の詞に此歌初の戀といふ字をのぞきては森田屋の頭巾にとむとをふせぐ人のごとしと申すめりいでやさがなきしやべりはとりおきて戀する人の心には何も後生とおぼしめしともいはざらめやはされど周防の名產たふとげに見えて侍れば左を勝の座にはすゑ侍りつ

左持　鰹　栃木櫻露堂玉成

やう〱といひよる戀の初がつを
ねもせぬうちにたつ名くるしき

右　ぬなは　源氏樓春影

つれなさは今宵も獨りねぬなはの
ぬらくらとして君はきまさぬ

左初がつをねもせぬなどあたらしん場か小田原町日本橋のまん中にちらと一本見えたばかり前後にみへぬ初がつをこゝが賞翫といふところ歟右蓴菜のずる〱べつたりながくこぬ人をうらめるさま左右ひとしかるべし

左勝　から鮭　イカホ久澄

すぎし頃君を見そめてからさけの
にくは次第に落し戀病

右　からし菜　雲林堂虎雄

からし菜のからりとかはる挨拶に
むせるほど出るなみだくるしき

左また一夜だにあはだ口のからさけいかなる女御更衣をか見そめたりけん右金かす人の證文にのぞんでへんがへしたらんもかくぞあるべき左の東大寺の聖寶ありがたしありがたし

左　むなき　白川芦原雄風

いささかん妹はむなぎのあな恰や

筋のわからぬけさの玉章

右 勝　茄子　イカホ 深樹園安麿

種茄子のほごにみをいれやる文を
皮だにむかでかへすつれなさ

左せつかくかいて北浦のやはらかい妹が文をさきすてゝしまふとは旅よりこはい人の心や右はたけの中に鐵漿つけてゐるをみそめてから聖靈棚のうしや今かゝるしぎ焼になつたかいやいさ胡麻汁のすゝり泣おかし勿論葛飾く

左 持　撞木鮫　文麿

かへる氣はまた荒海のしゆもく鮫
さめよとおこす鐘ぞつれなき

右　花袖　歌橋庵千里唐

なかだちに鹽梅させて花袖ほど
そとかほゝらせておくる玉づさ

右あんばいの花袖一首のにほひふかし左鐘の聲高くひゞきたりされど結句は撞木にのみかゝりて鮫の縁うすきは遺恨ながら一首のたくみ大かたならねば勝負は料理番にあづけてはべり

左　鰺　松成

つれなさはあぢにことばをまぜ肴
たがひちがひにぬるぞうたてき

右 勝　長芋　越後 シラネ 松彌佐守

あうて後今はいのちも長芋や
むなぎなどゝはかはるなよ君

左まぜものさかな臺おことおほひに何よりの品とや申さん右あふにしかへばの命もあひ見ての後はれがはくは彭祖が八百屋の縁のした長芋あればみじかいもとはつるかで五位をもてなしゝ利仁の馳走ぶりよりめづらしく承りぬ小ざかなよりかばやきの方ちと氣があり

左　鰺　寶升成

約束もせんごするかと夕鰺の
あぢにこゝろをつけつまはしつ

右 勝　茄子　折形

人の口にかゝれる戀の初なすび
はしりものなるうき名はづかし

左あぢなこゝろに信濃屋よりはその隣國の駿河なすびはつ物のかた價大にたかし

夢にみてさへよいとや申さん

左 勝　にしん　高盛

かきくどく數のことばも聞わかで
われをにしんとうたがふぞうき

右　芋から　下野 氏家 塵塚文車

それぞとはさして言れぬ芋がらの
さかるゝほどにとはるゝもうし

左かずのことはと申されしむつきの重詰めでたし右いもがらで足をつくためしなしまけなるべし

左 勝　鮒　尾州 釋寸法

あふ事はかたゞの鮒のすしならで
おしつけてやる文は何本

右　大根　甲府 鵜飼川成

抱ついて投出すあしはふたまたの
大根としろき妹がふとも、

左いにしへはいともかしこしかたゞふなつゝみやきなる中の玉づさは衣笠内大臣の御詠なりとやうのやんごとなき故事ともしらですし屋の娘がはれられりよかとひたすらならずかしこくもよまれたり

右ふたまた大根をあしの見たてはたれもいふことにてめづらしからず左源五郎さままゐるさゝより右その文をとる所を見事にとつてなげこむ湖水ひやうし幕のひやうしきゝて見物のシヽ〳〵大方ならず大評判〳〵

左 勝 海老　書万陀伎

とりとめたことだになきを南海の
えびほどにいふ戀のあだし名

右 わらび　赤下手

わが胸のもゆる思ひにさわらびの
にぎりこぶしは癪にあてゝん

左南海の海老蔵しばらくとりとめたるところ大きくみゆ右山のかたつら春風のなごりながらあだしなりたやをば座がしらにおくべくや

左 鯨　紀上宿成

床の海寝てはくじらの沖中に
とかくせばかりみくまのゝうら

右 勝 もみ大根　四季志歌工成

待ごこぬよはゝきをのみもみ大根
しやくにさはりしあかつきの鐘

左床の海未勘の名所なりとか此歌にてはくまのゝ海の名と聞ゆ一首の趣意うきめをみくまのゝうらみのさまとは涙の音にしらる右かれのうらみがかず〳〵ござるとをどり出したろかん癪に京がのこのしごきももみ大根とは聞てあきれぬ人もなしあたり〳〵

左 勝 鮒　和橙

たよりなきわだちの鮒の戀やせに
ほしきは君が水ぐきのあと

右 生姜　甲府水明楼喜代記

戀病の薬にいれししやうがより
からき涙にそでしぼり汁

左いろこのむ人の鮒へ〳〵といふをきけば高師直が艶書とおもひの外西江の水莖をねがひて活かへらんことをたのむ一首の疑かの監河侯の三百金本蔵が進物よりも光りある詞と申すべし右本末にはじかみをすてざるは孔夫子の臺所にはあらぬこちらのしちりんの薬鍋煎じやう常のごとし左の寓言をおもしろしと稱すべくや

左 持 あかえひ　亀占正

軟かきいらへのみしてあかえひの
いきはりのなき人はうらめし

右 蓮根　桑名酒上平樹

うき人をこひぢにふかき蓮の根の
穴のあくほど見ほれてぞをる

左あかえひのはりあひなきを山椒醤油のからしとわびたる右うきといひこひぢといひたる蓮の根掘の骨をりは見へつともにひとつごんぶりなるべし

左 むなぎ　秋初風

夏やせの薬むなぎをくふたびに
おもひはふとる戀病の床

右 勝 蓴菜　甲府多理雄

頼まずよ仇し心はじゆんさいの
うはすべりする水くさき人

左かたいこゝろの石まろにわれ物申すことだにならぬ戀の病のくひ物とのみやかもちくてならぬとはわるい地口なるべし

右蕣菜のうまからぬ中をなげかれし精進
口には舌うちしてカチ〳〵と齒をやなら
すべからむ

左勝　鰒　　一寸法師

ふぐ汁のうまい中よと名をたつる
人の口にぞ毒はありける

右　茄子　　桑名音　澄

なすほどにいつまで妹の契らぬは
われに病のたねにせよとか

左はなしの中へ鐵炮をまぜて木鐸を長屋
にならす人口は四ッ切に路次もたてられ
ぬなるべし右おもひのたねなすび畑のな
かのぶら〳〵やまひ元伯老のお見廻もう
ろさかるべし此茄子よき家づとながら鰒
汁の毒はまはりやすし

左持　鹽鰹　　みつあさ

いひよらん何をことばの鹽がつを
人のこゝろのいはきならねば

右　竹の子　　廼露窓塵六

くどきよる君に思ひのたけのこも
日ましにかたくなるぞうたてき

東西の角力かたやは磐木のごとくかたや
は晴天十日ますく〳〵かたしよつて勝負は
あづかりと定めて侍り

左　鯰　　攝州池田朝時寢顔

ぬらくらとまことなまづの君故に
なみだのふちにしづむばかりぞ

右勝　十六さゝげ　　澁　丸

十六になるてふ君をかいまみの
かこつけ草にさゝげつむなり

左ためにしづみし戀の淵鯰にはかぎろべ
からず右垣ごしにしゝするおとの聞ゆる
はこそむかしの名歌なりこゝはゐなかの
柴垣にらうたけなる人のさぢられたるお
もはえずふるさとにはしたなくてありけ
ればこゝちまごひぬるもさぞ侍らん鯰の
髭よりは十六のかた毛の數大にまさり
たり

左勝　ひらめ　　奈良葉々廣

若死ばひらめとならんそれぞとは
親もにらみし戀のわづらひ

右　獨活　　桑名燕子樓由刈

わが胸のもやしのうどの香より猶
きづよくあはぬ君はうらめし

左李笠翁の比目魚の正本もおもひ出られ
て興あり周の諺に親をにらめばひらめに
なると云々これは親ににらまれたるひつ
くりかへるほどをかしく侍り右のもやし
うごめづらしけれど親の目かどをかしこ
むべくや

左勝　鹽まくろ　　徳　若

しのび寢を誰かすきみの鹽まぐろ
にく〳〵もうき名たち賣にして

右　ちさ　　カナ川切瑳琢磨

玉章におもひのたけをちさの葉の
かきとりかぬる身をいかにせん

左きはだ直段たかし
右ちさのはまけてあげますと申すべし

左　いわし　　清　澄

思ひきやいわしのかしら祈れども
うき名の門にかくたゝんとは

右勝　もみ大根　　醉樂亭一徳

夜ごと〳〵まちて心をもみ大根
うろぬいてこぬ人はにくらし

左神佛をさし置て鯛のかしらを祈らんこともはずなり右もみ大根土物店のいちといひて二なきこゝちす可爲勝

左　勝　鰹　　一寸法師

きぬ〳〵に我を泣するからし酢や
かつをの腹の横雲のそら

右　筍　　止々堂犬馬

此君につくすこゝろのたけのこは
身の皮をむくこともいとはず

左曉ばかりうきものは中の町のわかれ酒ようざんすとや申すべからむ右此君さんといふ表徳の客人大方二階はとめられさうなことなりひつぱりくらならば横雲とんがかつをく

左　勝　鱈　　桑名　岡住

かく文字の雪とはとけじあだ人の
よき口鹽のたらし詞に

右　わらび　　千枝麿

早蕨の手づかのなきをかなしみて
身は伯夷ほど戀やせにけり

左正月詞のおしきせ料理めつたにかゝれはいたしやせんと鱈といふ字にみせつけたるこんな名歌がたらにもあろか時に右の方人のいへらくたらの正字は口大魚なり鱈といふ字は字書にもあろかと云々右首陽の斷食はなのしたさびしければ大口の魚に箸をとるべくおほゆ

左　勝　魚　　尾州　月花庵雪丸

うけひかぬ妹がこゝろはあら海の
いかれる魚がはねかへすふみ

右　枝豆　　桑名　養老舍玉人

おもひきや人のことばの枝豆に
うき名は垣をこえんものとは

右藤豆ならば垣をもこゆべし枝豆にはいかゞもしゆでたての枝豆を長屋の窓からかふことにやと左の方人は申て侍り左馬のかみが物語を夢樂がをかしみにとりなしうまくおとしてわらはせたる聞上手の人こそきゝしるらめ四つのうちだしカチカチとひゞきわたりぬ

左　持　鰒　　阿州　鼻垂攷紀拔足

雪の日の西施乳よりいのちにも
かへてすひたき君がくちびる

右　長芋　　松風調

ぬらくらと鰻になるかならぬとも
とかく返事の長芋ぞうき

左呉王夫差右八百屋半兵衛いづれもせつなる戀の心和漢おなしかるべし

左　海老　　有大甚

ゆでえびの色をば顔にあらはしぬ
ぴんとはねたる君がへんじに

右　勝　大根　　正直

大根のふとき心とおぼすらん
こひのよくゆにするていのるを

左鍋のしたもえけぶりおほかれど浴油の釜いさゝかたぎりたるやうなり

左　持　鯉　　犬山　庭柏淵

瀧津瀬にきそうて登る魚もあるを
こひをしこひはあはざらめやは

右　糸瓜　　二階棟高

何年もへちまの蔭とひなたなく
かゝとするまでかはらじな君

左下の句は古今集の紋きりがた上の句は三升がぬぎはえありて見ゆ右脊門に乾た

ろへちまのつるの長き契りなたのみたる
寶なきにあらず此一番牛角なるべし

左　魚　　正直

命綱かけてひかるゝ網の魚も
するはひとつによるとこそきけ

右勝　へちま　　桑名晨秀丸

へちまとも思はぬ妹をくどきては
心づくしも水になりけり

左かなはぬ戀をあみの魚にくらべてざこもさゝまじりならんことをれがふ心あたらし右もちの夜のへちまのきり口徳利さよく聞へたり左にすこしまさりぬべし

左持　白魚　　上州ヌマタ柳樹園道輔

しら魚のしらみし床のきぬ〴〵に
落るなみだの二ちよぼ三ちよぼ

右　茄子　　上州五明樓清風

あふよはゝ初なすびより閨の戸を
ちひさくなりて忍ぶわびしさ

左右宵と曉鐘の聲言語同斷なるべし

左勝　むなき　　尾州影住

鰻ならぬ君をつり出するさにもと
みゝずがきしておくる玉章

右　大根　　仙臺一曲庵糸道

こひしさの涙に目をばすり大根
しのぶ人目にそでしぼり汁

左みゝずのゑ半切神田川の淺ぎぼうしよう筋おかしくや右目をするも袖しぼるも同心なるべしそのうへ上下の句にめ文字をならべられしは眼病不愈をいのる奉納の額のやうにてめゝしきやうなりされば十日の見るところにて八つ目むなぎのめうつしにはめにとまらぬこゝちして侍り

左　鯖　　上州高崎門松人

さばかりの情もかけずさばの魚
いきぐされとておひ出されけり

右勝　大根　　同萩ハラ寶有舎槌丸

大根の今度はおろしをつよくして
手づから文をつけものにせん

左いきぐされ秀句おかし但右の方人の申されしは此歌尻おもき下女を宿へ下るやうなりと云々右つけものゝ鹽かげんよろしお暇にくらぶれば年季ながきなるべし

左　海老　　上州ヨコテ常持樓末廣

えびよりもはねたる君へ詫してと
こしをかゞめてたのむなかだち

右勝　茄子　　高崎呉竹茂葉

契りたや見そめし戀のはつなすび
ならうことならちよつと一口

左よまれたりやナカヨウ〳〵ナカヤなツかなか〳〵なかだちに腰をかゞめられしはうち出しのはれをとられたる市川の海老十郎でござい右茶漬のさいよ女房よと初夢漬の一口に見てし畑のはつなすび直段たかし〳〵

右持　鯉　　萩ハラ八木亭升員

鯉よりもきりて手際を見せばやと
戀に小指の生料理しつ

右　ひる　　高崎岩間龜水

臭い中とかぎつけられし戀ぞうき
ひる玉ほどのなみだこぼせば

左鯉の庖丁向島で者（しや）をくごく人もかくやあらん妙でごぜへすとも申すべし右こくれちの草藥藤式部も鼻をつまみて感すべ

くや隅田の堤の右ひだりどちらもけしき
よしとほめて置侍らん

左持 相良茶 桑名 酒上平樹

相良茶のさがなき人の水さして
契りもうすくなるぞわびしき

右 たはこ 山田 予馴駒主

わが魂を妹がたばこの火となさば
けぶりにそよそのみこみやせん

左さがら茶名産の名むなしからずきびしやうの手も口もはたらきて聞ゆ右君なおもひなまくし身をやく時はけふりおほかる物にぞ有ける乃大和物語の歌にもかなひてきせるのたまのうかれたる風情感あり左右あの姉さんはよい姉さんと茶たばこをひつくるめて杯にかけて十匁のよき持とは稱し侍りつ

左勝 薄茶 桑名 蛤丁樓馬伎

いひよれどなさけ薄茶の小服にて
たゞ一口にきゝいれぬ妹

右 たはこ 家 風

すひつけて別れに出すたばこより
むせかへりぬるきぬ〴〵の床

左そんなことはしりやせんけふ遠州かいづれひねつたたぼなるべし
右涙の玉たばこかもなく不可もなし左の茶臼をひくべきにこそ

左持 薄茶 攝州池田 朝時寢顔

誓ひしも君はうす茶のあわにして
たつばかりなるうきなくるしき

右 煙草 桑名 七里和多志

こふれ共こぬ夜は胸をくゆらせて
まつ葉たばこのひとり寢ぞうき

左こゝろをこらす茶の手まへ勝手に風呂さき屏風のたちにたつあだしなつめをわびられしお流義ゆかしくこそ右梨もつぶてもうつとりさたばこのんでもきせるの雁首こがれてあつくなれるさまさほらぬにはあらず左右茶杓をきせるながさひさしくや

左勝 薄茶 影千澄

引かへて妹がこゝろのうす茶とは
水をさしたる人のあるにや

右 龍王 奥福島 隈川網代木

龍王のけぶりやむねの雲おこす
なみだのあめをさそふわかれぢ

右曾我まつりのナンダ龍王あれにあれたるひさまくり下の句の大雨にたばこ屋も戸をたてたるにやあだに見えず左みなれたるてつゞきながら釜いさゝかたぎりて見ゆ

左勝 初昔 桑名 波羅密庵容諦

思ひにはいのち薄茶のはつむかし
いまに口きりせぬぞわびしき

右 たはこ 阿波 心底思和丸

こぬ人をまつばたばこの煙より
むねをくゆらすうきおもひせり

右松葉たばこのわらはしきよりは茶の先生物ずきまされり勝たるべし

左 甘茶 山形 陽明門盛

あだ人へいひよる我は釋迦ならで
あたまから茶にさるゝうき戀

右勝 たはこ 盛 砂

いひよれど妹が心のやすたばこ
とにかくわれにつきのわるさよ

左そもく當山に安置する所は佛もと

は凡夫心より卯月八日は吉日とたのみて摩耶夫人のやうなうつくしい人の右の脇にたちよれるを忽に聲をはなつてむさやアがれ／＼とのたまひて七歩さつてあかんべいをしたまひしよりこれをばれの釋迦十とは申奉るなりチイン／＼右やすたばこのやすからぬおもひにかゝアたばこのあらまし事もやにこしさいとはれたるのみ心よし左うき戀とことわられし所いとゝか花御堂の細工過て侍れば橋本町をまけとは定めつ

左　茶　洒落栃

氣の強き妹がしん茶にうかされて夜の目もあはずまちしあけぼの

右勝　館　甲府三澤喜代記

きぬ／＼の袖引とむるたばこにもたてといふ名のあるぞくるしき

左結句に銘をさへたちいれられしいもが新茶慥に受取申候右かみつけのかみなき名葉けぶりはたかくたてばやしの茶釜よりは匂ひまさると申べくや

左持　煎茶　桑名由刈

忍ぶれど胸のにえ湯にせんじ茶のいろに出しといはるゝぞうき

右　たばこ　馬使

火のつかぬしめりたばこか我胸のもゆるごとさへしらぬうき人

左右あこやが詞に雪のあしたのたばこの火さむいにせめてお茶一ぷくと云々いづれ愛相に前後のさべつはあらし

左勝　煎茶　桑名四半法師

せんじ茶の出過し我ときらひてかくごけと妹はのみこまぬなり

右　たばこ　甲州西野不斷亭中丸

きぬ／＼の涙にしめるたばことへついむねの火にけぶりくゆらす

左いもを杜若とみつ扇おのれがおちやッぴいをさへくやみたる大出來といふべし右あきけのあさま山たつとはいかゞさしあひもあるべし芝居の茶うりよしか／＼といふべし

左持　茶　春路亭柳馬

茶筌はごふりつけられて今更にあはでうき名のたつもはづかし

右　うす色　出羽江又旭陽園千霞

貰はれし煙草の火からこがれけり妹がけはひのうす色を見て

左うき名のたつはいとはれどゝはお七の道行なり右茶屋が床机に吸つけさせてとは桂川の文句にて左右つれびきのさみせん調子ひさしくや時に一人のでんぼう出ていへらく泡のかなは記紀ともに阿和とかけり判者の告めいはざるは念なしと眼を大つぶになしてのゝしる時に判者答へていへらく泡を淡にかよはしよめること拾遺雑春に貫之の歌ありそれより後の人々の詠あまた例あればゆるしつべし但貫之をしもあやまれりとせんや返答してサア／＼なんとだ「でんぼう」そんならいゝわへ

左　甘茶　桑名音澄

こは／＼にくどく度には甘茶ほどあたまからして流す大汗

右勝　いく坂　尾州園丸

きえやらで身は生坂のこがれつゝ

おもひをむねにのむけぶりぐさ

左戀の病はさし置て此發汗にては市松風も全快さしらる右相思若煙草といふ句もおもひ出されてこれがためによだりはらうたつたひて流れて侍り左の大汗にまさりぬべし

左勝　煎茶　邊田數寄成

山吹のいろのうす茶もくみて知れ
われのみあつくなりしおもひを

右　たばこ　仙臺麻中園直輔

ふきがらのもぬけの床に獨りのみ
まつ葉たばこのまつよはぞうき

「頭取」左本名木曾の山吹なれども茶屋女のおくみと名のりてぬれごとのしうち茶椀に茶をくみてなぞ〳〵にかけられたる所あつくなるといふせりふあたりました右小山田太郎が女房松の葉にて吹売をさし付てしひてうつせみのもぬけなりといひつのりふさんをかぶりながらのみに心をつけらるゝ所こまかい〳〵されど狂言は左の山吹どのがよいと申す評でござる

左　煎茶　甲府賀計女

胸の火はもせども君はなまぬるき
口茶ばかりのあいさつにして

右勝　たばこ　栃木曲成

戀やみてひとり寝汗の玉たばこ
われのみぞしるむねのくるしさ

左胸の火性右は寢汗の水性たがひに相性のあはざる戀なり左薬罐茶釜に縁あり右たばこ五六斤ありされど女につきて苦勞あり四の句大によし歌に「すり火打うちあはせつこみぎびたりたばこのかたがカツンカチ〳〵

左持　煎茶　清澄

なかだちの今出來ますと煎じ茶の
口をいれたるあいさつもよし

右　たばこ　仙府唐麿

あやまちし煙草の火より膝の上に
なみだはおちて身をこがしぬる

左右の茶たばこ御休所に尻をかくる人にて貴賤の論なし但身をこがしぬるといひては上にそやのかゝえなければいかゞなりと左の方人は申されどぬるつるするの類古歌にかゝへなくてつゞけたる例あまた侍ればゐなか詞の玉の緒のやにはいひツこなしとさだめつ

左勝　茶　南木亭千榮多

茶の目より人目多さにはなしだに
つまんでかたる首尾とてもなし

右　葉たばこ　甲州大八田錦裏芳

べにかねをふくみし妹が口さきの
霧ほどかゝれことの葉たばこ

左茶つみ女のまへだれのあからさまに物だにいへぬをあな宇治の里とながめたるあはれなり左口さきの霧は万葉のおもかげありてゆかしくや此たばこやの娘口つき愛らしけれど猶茶つみ女の目つきには及ぶべうも侍らず

左持　煎茶　奥二本松東川亭爲清

眠らずに語りあふ夜はせんじ茶に
君がはたへの雪もとかせん

右　玉たばこ　葉々廣

たばこふくけふりときえん半斤の
たまぎるばかり戀やせし身は

左はだへの雪とけうれしなみだの川水も

ましぬべし右半斤のきもだまたが脇わけしてしりたるならん此つがひ左は雪右は玉どちらも其いろをわかちがたし

左 持　煎茶　西山樓下住

長居せば人の口茶にかゝるやと
ちよつと摘んではなすかねごと

右　たばこ　千枝成

待わびて首もたばこもひねりつゝ
ふかせどこぬはわすれ草にや

左右つゞきの二けん茶辨當にたばこ盆内格子のたかき作意なり見功者の評判結搆と申すべし

左　煎茶　短冊三折

新まくら見あはすかほのうす紅葉
うらみもこよひ水にせんじ茶

右 勝　薄舞　朝風

待どこぬ君はなさけのうすまひこ
こよひもひとりのみふかせとや

左枕紙のほうぐをみれば時のかれにてみなく〳〵はひろト頭取出て淨瑠璃名題薄紅葉水にせんじ茶シカ〳〵口上すむトうしろの黒幕をきつて落す見付柱よりぶたいをかけて一面にうすもみぢのつくり物常磐木の松の太夫連中ならびゐて一林間に水あたゝめてせんじ茶のそのき枕にまくらがみかけてむすべるにひ枕

トにぎやかなるなり物にてせりあげる

右にある一枚は橋供養の琴の段あくるにまなき夏の夜もはやふけよかしかれもなれ　これは六くだりのぬき本うすまひのお箱の一段正本よりは文句まさりたり

左 勝　晩茶　皎月庵梅房

挨拶もしぶ〳〵なりとしてやらん
あすの晩茶とせんじつめては

右　たばこ　多餘理

煙草もて吸つけよれときせるまで
あちら向たる雁首ぞうき

右あふに命をとッかへべいの雁首此はながつぶれたとのなげきおつな趣向をみッけたらしよさいふべし左茶袋の咽をしめたる仲だちのこじつけをとんだ茶釜さわびたるさまよろしこゝに隣長屋の方人殿が申さるゝは此歌は戀でなしかけすて無盡の同狀をよんでぼやきたる躰なりとやかましくやくわんかぶりて申されたり判者かしらをうちふつて大さにおせアお茶でもあがれといらへして少々茶釜のしりをもちてやッぱり左を勝となしつ

左 持　煎茶　尾州 中雄

つゝめども今は何とかせんじ茶の
うす〳〵いろに出し戀中

右　たばこ　甲府 常雪

わすれ草わすれたやとて數すへば
むねのけぶりのおきどころなき

左右よろしく聞ゆされど色に出しも胸のけぶりも判者の耳にたこが入て侍れば相場をたてず預りて侍り

左 勝　八重垣　万陀伎

はづかしや君が出す茶の八重垣に
むねのけぶりの八雲たつなり

右　葉たばこ　大阪 三壺庵丸雄

葉煙草のはゞかりなどゝ言よれど
くづのごとくにすてられてうき

左此歌はすさのをのみことの御ふろことなり女にすみなんとていつものとほり見えつくりしてやへ垣のもとに尻かけたる

に茶椀のけぶり胸にみちてやみくもにたつをみてよみたまへるなるべし右おそれながらお手を握りますさこさわりしは慇懃なるけさう人なるべし下の句は覺英僧都の松原の辭世の句にて南無三往生さあきらめたるにや左の八重垣たけありて見ゆ

左　煎茶　調賀亭閑秋

せんじ茶の鷹の爪ほどあいさつを
つまんではなす戀のなかだち

右勝　玉たばこ　上州七日市　文章人

うつり氣をうらむ涙のたまたばこ
手前きりぞとなどすかしけん

左モシ〱此なかだちは淺草の濱藏ぢやアれへかネ右猿河原の奥州か火鉢から出たうらみの數々うきてたゞよふ玉たばこおそろかんしんさいふ所なり勝に論なし

左勝　挽茶　貢　俊

思へども臼のめかどのおほくして
袖をひき茶のいさまだになし

右　きざみ煙草　梅　房

返事まできざみ煙草にきざまれて
火うつりはやくもゆるわが胸

「右」八幡大名でござる太郎冠者あるか「左」ハア御まへに「右」これに茶さたばこがあるそち茶をひく間に戀の歌一首よめ身どもゝたばこのみながらよむであらうもしそちがつてもあらうならば此銀のきせるをやらう「左」さらば茶を挽ながらあんじませうヤズル〱〱「右」ヤイヤイ冠者歌はでけたか「左」なか〱よみはてました御らうじませい「右」おもへども臼のめかさのおほくして一段さでかしたつた身どもが歌を見い「左」きざみたはこにきざまれて下の句は火の用心がわるいほどに秋葉の札でもはらせられい此きせるは受納いたすそれにゆるりさござりませい「右」おのれみどもをきざみたばこにきざみをつたヤイ〱勝にげをしをるさてひざらさすひ口さりちがへてよくまはる其口べたやくまいぞ〱

左　煎茶　オク湯野　清泉亭眞元

うらみだにいはぬ色なる宵の茶の
けさはしぶ〱わかるゝぞうき

右勝　葉たばこ　江都振

葉たばこの離れ難きはなみだにて
しめりかへりしきぬ〱の袖

左あたらあふ夜を無言であかすさは天井をかぞふるふり新かいづれ手のない人なるべし右ふるき童謠にいはゆる煙草一葉の價千兩問屋のしきりたかし〱

左　挽茶　桝　芳

妹が袖ひき茶にせんさおもふより
身をこにくだくほどのくるしさ

右勝　たばこ　尾州　弘　器

吾妹子が笑顔を見んさまつ閨の
たばこのけぶりのろしほどたつ

左ちよさ袖のはしをひかんばかりに粉骨碎身せんこさおごろ〱しきぬれ事しの心にもある哉右まだれなんせんかチヤチヤばから周の世のはなしではありませぬかねしのやにさがりで目がおかれませんわつちを狸ださおもひなんすさうささしり目でにつこりなにさぬしが狸ぢやアれへおれも猿のくそだはけ日のまはるほどたばこであかしたのふし〱こさげすん

でくんなさんなさはごうかしやれ本にありそうなことなれば略しつ此つがひ本文と引たがへて幽王の方が勝軍なり

左勝　濃茶　甲府　刈穂園守常

妹とわが中はこい茶となりにけり
その初むかしかたるたのしさ

右　きざみ煙草　攝州岡山　四辻廣孝

一筋にきざみたばこのこふれども
けぶりのよこへそれるうき人

左あひそめしその日からこんなえにしが唐大和ひとつによるのさゝめごとこいちやアうらやましい右小野の炭燒あまのもしほ火今戸にやける瓦がまふじとあさまのけぶりにやたゞしはしんぼうだいじなんでよこへそれたへとは御山にもたちたるたばこのけぶりかな左のこい茶數奇させんか

左勝　煎茶　折形

せんじ茶のつゝむ思ひもかく袋
かみにしるしのあれといのりつ

右　たばこ　尾州　龜丸

すひつけてくれしたばこの煙まで
なびくこゝろをみするうれしさ

左茶袋のかくとばかり橋姫の神ないのらんとする戀の重荷の寶茶翁姿いやしからず右ひやかしのたちのみ路次番にしかられつべけれどかはゆい男の聲がすりや蝶蝶のかんざし質屋へもとぶべし左右いづれとわきがたき中に左のおとしだまよい物をと吹聽すべくや

左勝　福茶　桑名　臥龍岡住

節分のせつなる文に福茶はご
こゝろのまめを君にくません

右　丁子入　寶倉積

丁子いりことばばかりを匂はせて
あふ夜を君はわすれ草にや

左ヤアラ日那の御やく申さば水の出ばなのあつい心と口にはいかでいわしの頭さしておくれる玉づさもしのぶこゝろの鬼うち豆福は内外のおもはくをつゝんでひねる十二銅せつなる文ともろともに此厄はらひがかいつかんでぬしの内へさらり

右のたばこ入匂ひ袋ともあやまたるされど節分をおめでたしと申すべし

左　煎茶　紀素直

くみかはすその戀中のもれなさて
口をむすんでいるゝ茶ぶくろ

右勝　たばこ　濱荻

折わるくかへすたばこの咳ばらひ
痰にあたりをしのぶくるしさ

左くみかはすと申されし此茶椀ちと酒くさいやうにおぼゆ右ことの外おせきなさるおれりやくでもあがりませといふは心しらぬ人なるべしさるは日もはや人のさつまの名産箱入のあたらしき趣向珍重珍重

左持　煎茶　尾州　眞澄

古されて今さらなにとせんじ茶の
身は出しがらとすてらるゝうさ

右　葉たばこ　同犬山　清泉亭直澄

誓ひてし契りもやれて葉たばこの
骨ばかりとぞなりし戀病

左右ともに絶戀なるべしいで女郎のふろいはやりてとなり治郎のあげくは役者ともなりぬべしたゞいかにともはきばのなきは長信宮の幕一本うきよのさがの妓王がかくれがきくもなみだの玉のことのは兩行ひさしかるべくや

左 持　茶　　糸繊

いのりしも昔となりてわすられつ
二十一日茶だちさへして

右　舘　　梅麿

時も八つはん魂香のおもかげに
たてのたばこもまつよはの伽

左三七日のおこなひに昔といふ文字の故實をさへつゞけられし初後の句ともにかほりふかし右其來ること遲きとは武帝の御作とか丑の中刻ならばお化も出るころなるべし此歌淺間嶽のあさくはあらず左右ともに上葉とほめてん

左　折鷹　　松成

戀やせてあはずばいかに煎じ茶の
よき折鷹をまつぞひさしき

右 勝　留葉 ・ 文麿

包めども時にたばことこぼれぬる
なみだの玉はとめはだになし

左あはずにいんでは此胸がすまやあかしのまんまろ月のはれてあふ夜もあれかしとや右つらぬきとめぬ玉たばこつゝめどもと申す詞にて戀ともたばことも聞に聞へてたれも心をとめ葉の上もの進物の印籠質上の段に置つべし

左 勝　煎茶　　一長

いひたきは口につまりし鐵瓶の
むねは茶がらのいつぱいとなる

右　たばこ　　本歌裏行

朝なゆふなおもひに胸のけぶり草
ひいてのみ見る妹がこゝろを

左戀しらぬ人にみせましかばおほし(瘖瘂)のけんくわとやおもはましされど鐵瓶あたらしくていさゝかのさびだに見へ侍らず右むれの煙あきたくおぼゆれどひいてと申詞四の句よし(これはしごくよしといふ地口なりよほど考へたる秀句なり人々なわらひ給ひそ)勝負は鐵瓶の方おもかるべし

左　濃茶　　犬山 影住

嬉しさよ今宵こい茶となかだちの
しらせにくれを待合にして

右 勝　舘　　百々庵虎千

人もしるほどに浮名をたてたばこ
きつてくれとはなさけなの君

左おもひなます本のわかい者に芝の水茶屋であひたるこゝちす右ともにうき名をたてたばこ人もしつたるふたりが中を今さらきつてくれろとは情ないことをいつてくれたなアト本歌をなまのあうむ石勝といふ字を聲にしてしようだく

左　挽茶　　攝州 深寢父

あけくれに心ひき茶の目につきて
臼よりおもくなりし戀やみ

右 勝　葉たばこ　　桑名 竹籬軒鶴蒔

あはぬ夜はうきを重ねて葉煙草の
骨をさかるゝほどのくるしさ

左の臼かろきにあらず右骨をさくといひかさぬと申されしなどきざみいとこまかなり左の二の句心ひくとはおのれが心のひかるゝにや又あなたの心をひき見るに

や只ひく〳〵とするばかりなるはおもゆも通らぬ戀病なるべし葉たばこの方逢者だけいさゝか勝べし

左持　煎茶　泉州キシノワタ　調音美

いひかけて今さら何とせんじ茶の
せんし書だに見せよあだ人

右　たばこ　日和見分

いひよれど人の心のあら切りに
袖はなみだのいづみしんでん

左代筆の候べく候はせんじ茶のせんもなけれどそれをだに花香にせんとはあぢきなき心やりなるべし右和泉新田のやはらかなる本性には黄で氣をやむもことわりになん此茶たばこを兩手にされば高下なまむぎのしがらきにいこふことちしつ

左持　新茶　甲州鰍澤　紀花咲

新茶より見てもかはゆき妹が手を
・つめるは戀の初むかしなり

右　菊たばこ　桑名　秀丸

戀病のくすりとなるはうき人の
たよりをきくのたばこなりけり

右老せぬやく〳〵藥と名をもきくたばこ雁首もうかひ出てともにのむぞうれしき左新茶たちよりこちや〳〵茶たちよとつめる所が趣向ながら勝のしたなる實方の歌にもちひはくはしわつらはしと千年さきの初むかし後拾遺集に揭焉たり此二首ふるきを温てあたらしき趣意ともにめさむるばかりなればよき持とは申すべからむ

左勝　後昔　郡内　元佳

くるしさの今をあうての後むかし
茶のみ話となすよしもがな

右　舘　上州吉井　行康

色よしと思ふすぎりのたてたばこ
いつかませ葉のあるもうらめし

左今のつらさをむかしがたりよろこんでたも梅がえとは女夫の中の盛衰記一段ときゝ事なり右ませ葉とは外心あるをいへるにやさだかならず地火爐ついでの饗應をよしといはんか

左勝　煎茶　藏人

のみ過しせんじ茶よりもこぬ人に
うかされてまつよはゝつらしな

右　たばこ　イカホ　野立庵浪風

わすれ草わすれぬ妹がふじびたひ
けふりはむねにたえぬくるしさ

左まつ夜はつらい長まくらにかたちも似たる一斤袋あくるまで來ぬ人をうらめるれたさはさぞとおしはかりぬ右御所存のほどはたれもきゝわけて侍りされどふじびたひと申す詞實にふるとしまのれんあきにて深川品川新宿さくらがへしてゆくへもしらぬ風になびきたればこたびの判人も安くふみてかひがねのうしろをむきて侍り人をまつとてつまだてし足高山を勝とや申さん

左　內津　豐年出來秋

此やうにあふのは夢かうつゝ茶や
こちらのおもふつぼに入りきて

右勝　たばこ　正直

思ひ餘りよりて煙草の火はかれど
けさうとはまだしらぬ道づれ

左れてかさめてかさばかりの使の伊勢物語それにとなれる尾張茶のうつゝないぞやこれナゥ男とはげにも無上の佳味なる

べくや右驛路の馬の鈴が森ごこの馬の骨かしられごゆき合せたが他生の緣かならずたづれてムりませかげぜんするて松本錦升座がしらこはこれなめり

左　煎茶　德若

あだ人の袖ににばなの香もうれしおよばぬ戀の山茶ながらも

右勝　玉たばこ　折形

厭はじな妹にあふ夜のたまたばこしたにあたれるかひなだるさは

左戀のおも荷をおふなく〱おもひはすべしなぞへなくたかい山から谷そこのおまんまへの茶の出花いろかうすきにあらず右結句は伊勢がつらつゑもおもひ出られぬ四の句の舌のまはれるは齊の七十城をもくだしつべし此右のかひな忠度ごの武勇あり勝べくや

左勝　饅頭　仙府唐麿

孔明が智をかりてなごまんぢうの首たけおもふ妹にたよらん

右　梨　文麿

あたらしきやもめの肌を水菓子のこがなしときけばましして床しや

左饅頭屋の元祖をさり出られて計畧をまかせられん事上案ゝゝたれも食指をうごかして侍り但此先生黃頭黑色を承知せし仁なればなかだちにせんはあぶないものならんか右あたらしきやもめこは臨卭のあたりで見申たやうなおかほつきなりこがなしの秀句美にして艷なり此一番持さ申たけれご左右の方人のしひごこにまかせて餘儀なく判斷をくはへて大象の鼻さき思案にまんぢうをさりてかみざまへのぼせつ

左　かみなりおこし　德若

なかだちのくごき落さん企みかもかみなりおこし妹にくはせて

右勝　蜜柑　焉馬

やる文の數もみかんのふくろにや猿とく丶つてへんじせぬ人

左たもとにごろつくかみなりおこしこれにて臍をさらんとはさもしき仲立がしわざなりけり右文の數は千疋猿のごとくつづけやりたるならしさるを大伴卿の下戸をさらへたやうにやすくするとはさるさはく〱のほよほ〱く〱こんな名歌があろかいな

左勝　十團子　六十軒一長

人心あなうつのやの十團子戶をさしてなごはしたなくする

右　雨ほし柹　飫坂山田高安

熟せざる戀のしぶさに身をけづりあまぼうしにもならんとぞ思ふ

左むかし男ありけり夜ふけて女のもとへゆきけるにまらうごの入りたるきりみせのやうに戶をさぢていれざりければこそうつの山をこえける時すゞろなるめを見しことをおもひ出て歌をよみけり此下の句おかしとてきく人十團子のうへによだりたらしてほとびにけり右柹本氏系圖といふふみに云ひたすらうまれかはりたるこゝちして見る人これをあまぼうしとてもてはやしける外には胎藏界色の相をあらはしかきの衣のゆかりおもへば頭巾に似たるへたあり内には金剛の正躰をふく

んでかめごもわれぬされあり云々としろ
せりされぱあま法師めづらしからず十團
子を名物と稱すべくこそ

左勝　煎餅　東海園蓬山

いひよれど齒もたちかねて煎餅の
をれぬこゝろのかたまきぞうき

右　梨　濱荻

くどけども情もなしのあわ雪の
あはできへなん身こそつらけれ

左蒔繪のたかつき右錦手のどんぶりたか
つきのかたあしいさゝかたかし

左勝　飴　會津　外成

飴賣のあふこもあらばいのちにも
とりかへべいとおもふばかりぞ

右　橘　尾州　有文

ちぎりてし昔の袖のかごとにも
などわがねぬることよたづねぬ

左なにぞは露のあだものをとは命なりけ
り中山のあめよりのびし心の誓言やはら
かで齒につかぬ口つきなり右たしま守が
旅宿をさへとり出られしこまかなり但左
方人のいへらく筆にかごとゝつゞけしは
例あり袖のかごとめづらしと申さるされ
どこれはかの鋏具にはあらでたゞ香との
みいひかけられたれば此難はひがごとな
るべし但橘の名をもらされし念なきやう
なれば飴屋のおぢいが次にはならべつ

左勝　粟おこし　犬山　影住

通へども風がかはりてあはおこし
あはで砂糖のかへる身ぞうき

右　胡桃　白川　橘其葉

木鼠のやうに枝道しのびつゝ
かよひくるみと妹はしらずや

左あはでかへらんかなしさは十郎兵衛が
娘の順禮にもまさりぬべし右古今集の物
名を下に思ひてせつかくきたのにりすた
つかふをうらみたるにや砂糖がちなるあ
はおこし風味まさるべくや

左勝　おこし米　薗竹盛

雨の夜はいとゞ思ひをおこしごめ
くだけん君がこゝろをぞまつ

右　熟柿　甲府　鏡常丸

漸々と今はおもひもじゆくしがき
こゝろかけしは八とせこのかた

右の熟し柿まんざらぢやアないが左のゐ
なかおこし先ほうばつて見たくこそ

左勝　煎餅　越後　彌佐平

やはらかくなるぞ嬉しき妹が氣の
さすがかたまき煎餅なりとも

右　梨　郡山　同庵眞似保

見そめては落さんものと石梨の
うちつけてやる戀のたまづさ

左のせんべいをよし原とさだめて石梨の
弘法さまをはしりの方におくべくや

左持　きんさん　浪花　幽谷響山彦

まつよはの寅や過にし菓子の名の
きみとんとこであくるわひしさ

右　柹　犬山　益盛

くどくべき種だにあらぬ澁柹に
口をとぢぬる戀ぞくるしき

左きみさんのみ文字よみくせ口傳ありと
築地禪閣の御説なり右澁柹明恵上人もし
らせたまはぬ戀のこゝろ勝負わかちがた
し

左 勝　最中の月　　ホクフクシマ 隈川綱代木

むねの雲はれてあはれぬ戀病は
最中の月ものごへとほらず

右　栗　　桑名 瀧壺玉人

いが栗の笑をもみせてはりつよく
けがにも落ぬあだ人ぞうき

左二階をとめられなんしてからこがれにこがれし巻せんべいうすッぺらな心から茶屋までもきなんすかと宵からあけら甘露梅すがつて格子にまつてゐたわたしが心のたけ村をよくさつしておくんなんしといふこと歟右道命といふくり〳〵坊主の歌もおもひ出られつ最中の月くひたらす侍れどゆで栗にはまさりて侍らん歟

左 勝　雛菓子　　犬山 直澄

雛菓子の見すかされては名や立ん
硝子壺の口はつゝめど

右　栗　　桑名 倉積

くだものゝくりかへしやる玉章も
いがのはりにてこらぬあだびと

左妹脊山のひな鳥がはいせん十にあまりぬる人はゆだんのならぬひゝなあそびふらすこの尻やわれんとの心づかひおもしろ酒と申すべし右みなせの栗本論に及ばず

左　岩おこし　　尾州 葉丸

くどけども我には栗のいはおこし
かたくも人とちぎりしや君

右 勝　西瓜　　長州萩 藤の英

西瓜ほど戀になれねばおよびして
おぼつかなくもたゝく閨の戸

左右なんだはらがいたいへおまへおこしと西瓜をいちどきにくひなつたから食傷をしたものだなにひたひをおさへろサアサア咽へゆびをいれておもいれ吐なせへチヤ〳〵でへぶはきなすつたおまへ西瓜はちつとくつたといひなはつたが見なさへ西瓜の方がかつてゐるによ

左 勝　すゝり團子　　甲州 藤田駒一飛

溱をのみすゝり團子となりにけり
くしけづりつゝまちしかひなく

右　栗　　雲州 多餘理

いが栗の口をほつくりあけ方は
にくやわかれのかねぞつきぬる

左串と櫛の秀句くし〳〵と夜をあかして女髪結に百の損をくやみたるあたらし右おもへば此かれうらめしやとて手水に出かけて寝まきの小ぶさんひきかついてぞいれにけるゴン〳〵〳〵勝負はすゝり團子をかげ勝と申すべし

左 勝　下り飴　　徳若

くだり飴くだらぬことを思ひつゝ
命をけづる戀病のとこ

右　胡桃　　ホク 保原 一鳳亭八桐

通へどもあはでくるみの切なさも
われからなりとおもひくださつ

左ざやうせんの岩よりかたくてつくかたなきをかこちたるさまおじやうさんおなきなさんなさもいさむべくや右藻にすむ虫ではなしに木にすむむしのくひからしみもからになりし心とはしらる但せつなさと申す詞工面のわるい大晦日のやうに聞ゆれば戀病の床のあたゝかき方を勝と

す

左持　饅頭　栗橋日曾九

なりよくもとりもてたべと媒介に
折入てたのむ腰高饅頭

右　落栗　員俊

身をいれてくどけばさすが落栗の
ひろひものなるわが命かな

左なりいりてなどよくたくまれたり但例のわる口には豪家のけいしににぎくをさすこゝちすとやいはまし右くりことのかずくをならべたばかりしられぬよろこびは袂にもあまりぬべし但ひろひ物と申詞きゝなれたれば勝負の沙汰に及ばず

左持　最中の月　山形深山堂闘鬼雄

人の目を深くつゝみし菓子の名の
最中の月もうらむ忍び寢

右　柹　松永歲

あだし名に顏もあからむ枝柹の
枝葉をつけていふ人のうさ

左俄の泥坊のしうちのやうに顏をかくしてひけ過にあがるは大方せかれた客人なるべし右いろつきそめし枝柹のはづかしさに人ごとをきざはしと見たる此左右秋の夜のもちと申すべくや

左勝　煎餅　桑折天津房御空

せんべいのこがれしぬべき戀病に
まきつくほどの文ぞうれしき

右　桑　藏人

戀病に今はものをもくはの實の
くはで月日をすぐすはかなさ

左右やまひにかゝれる戀の奴われがおれかおれがわれかどちらがはやくよかんべい右の名はめしもくへ内左の名は朝がほせん平たちならんでみたところがにさいやらうの三さいやらうのしさいらしいやらうが勝なり

左持　麥こがし　白川御代住

麥こがしこがした胸はさもなくて
叉もなみだにむせかへるなり

右　桃　家風

くどかばや桃のみとせが其うちは
ならざる戀とおもひながらも

左三の句ちと砂糖のたらぬこゝちす右推非たばの御年季のあくなちぎりたるにやさらずは福德の三年目をまつこゝろ歟左右とも勝劣をわかたず

左勝　飴　數寄成

やはらかにみせて心のかたあめか
ひつついてねることのならぬは

右　栗　仙臺莚輔

いが栗のいかにくどかん戀人の
ゑまぬかぎりはおちぬと思へば

左あふことのかた飴ざうしがやにやいのりなまし右狂言の栗燒これも道命が二の舞にてめづらしからねば左よりは落栗とさだめつ

左勝　飴　山形門盛

うたがひの心とけよとあめならで
ぶつきつてやるゆびの一本

右　梨　犬馬

君よしれ虫がついたかつかぬかは
きつて見せたる梨のしんじつ

左今川橋の渦巻な小指のさきのすぢに見せておしつゝんでやる一袋一本の文字よくむすばれたり右四の句のきるさ申す文字指歟髮にかゝりたらば今すこし眞實も見ゆべくや三間梁たけながくおぼゆ

左　岩おこし　八王子　千金丸主

あふこさの猶かたけれど岩おこし
妹が手をだににぎりたくおもふ

右勝　水梨　桝芳

水梨の水ももらさぬ中をだに
わらんとしたる人のつれなさ

左矢さきさほらぬ岩おこし齒牙にだにかけて龜屋さおもふはこりこりずまの戀ならし右しんばうひさつ此なかをあわ雪のけちなんさはなさけ梨さうらみたるさくさくさわかりて侍り菓珍二李柰一さいへばまくろきづかひはなしく

左勝　煎餠　清澄

わが思ふ壺へいれんさせんべいの
かたまきにしておくる玉章

右　桃　阿州　拔足

西王母の桃よりもわが戀病の
いのちをのぶる君がふさもゝ

左御文に御そへ遊ばしかた卷せんべい御おくり下されめづらしき御品にて御うれしく存上候思召の御つぼのみならずみなゑつぼに入まゐらせ候右かざり置ましたる西王母の人形かたへは三千させの桃でござりまする此ふたつ當世風の男女にさりなしまする男の人形ナ女ゆもじをまくりまする女の人形兩足をかゝげましてそりかへりまするテンカラくくテンカラテンくすなはち毛もゝのかたちでござりまする「見物」ぜんまいのギリギリもいゝがせんべいのガリくの方がいいさ申やす

左勝　團子　万陀伎

なき魂はさまれこよひはこひ人を
むかへ團子の丸寢してまつ

右　栜　上州山子田　山中里遠

わがおもふたけのさゞかば枝栜の
しぶくながらおちよわきもこ

左盃まへのかきだしさおもひの外こよひこんさのしらせの文地獄の釜のあいた口へもちにはあらぬむかへだんごころく

してよろごべるさま一夜を千代さ松阪おんご胸さへよほどをごりつべし右おもひのたけのさきにかけてめつたにいぢりまはしたるあの客はよく栜をくふ客がまけなり

左勝　肉饅頭　尾州　弘器

ふさもゝの肉まんぢうは毒なれや
しびれてたてぬきぬくの床

右　西瓜　久隆

西瓜より出來た返事の君が文
おさして肝をひやす井戸水

左邊寫了一首詞把二裙帶底下東西一譬喩説二十字坡頭好大饅頭一調和滋味難レ得難レ得會得的喝一聲來望レ後撲地便倒二、就與下喫二蒙汗藥一的上一般了妙哉々々

右井の中の西瓜手がさゞかぬだけおまけおまけ

左持　きぬたまき　柳馬

卷送るきぬたのあんに相違して
すべてもどりし玉章ぞうき

右　桃　鹿佳

三千年に一度なるてふ桃よりも
首尾のならざる妹ぬすみてん

左わが文ながらすてもおかれずとは紙くづ籠の見るめさへめんぼくもなき心なるべし右花さく春にあはんとてかの仙桃のふたつとない命をかけてぬすみせんとはいもが屋尻をきらんとにやきぬた卷のうす紅東方朔がもゝいろとその光いづれならんわきがたし

左勝　あるへい　秋初風

なげの情あるへい糖といつはりて
うまくも飴をくはすつれなさ

右　柑子　盛砂

なりもせで涙の瀧の水玉の
小かうじかと落るかなしさ

右の小柑子は伊勢物語よりとられたれど猶なげのあはれの六帖をたふとむべくや

左勝　かる燒　郡内元住

假枕ついかり〳〵とかるやきの
くだけてこよひわれと寝よ妹

右　青梅　栗々法師

青梅のすいたすがたと見てしより
目もとのしほにつくる玉章

左ひぞりし人にあながちにわれてあはんの誓願寺まへ茗荷屋の一袋むれいつぱいの戀とはしらゐ右うめづけのすきものおしはきゝつれどかるやきにはかへがたくや

左持　金米糖　尾州龜丸

君こよひこんぺいたうと契りしを
外へもらすなふり出しの口

右　すもゝ　盛砂

あだ人は李下に冠とよりつかで
われにあたまをかゝすつれなさ

左箱入のきむすめふり出しのふり袖姿うまいさかりと申すべし右としもことしが十九首の六臣注の理窟づめ四角なところがとりどころならし左右よき持とや申すべからむ

左持　麥こがし　桑名馬伎

鹽なくてさたうのきかぬ麥こがし
むねのにえ茶にかきくどけども

右　ころ柹　鱗馬

ころ柹のかきくどくべき種もがな
しやくりなきする戀病の床

左右ともにかきくどくと申されし中に左は麥こがしをにえ茶にいれたる右はころ柹のたれをしやくりの藥に用ひたるさゆも茶もあつい心とはおもはる持にて侍りなん

左勝　飴　折形

とても戀の盜みなりせば飴をもて
君が心の錠やあけてん

右　樽柹　朝風

かくばかりおもひつめても樽柹の
くどきおとさんたねのすくなき

左もろこしの盜跖が秘術をつたへて堀の内の額にふがきし帶におろした錠まへを淀橋の水あめを以てこじはなさんずるわがたくみ大願成就かたじけない「おやかたしゆびは「米がたかいとは此秋ざりのしやれなるべし右樽柹少々澁のぬけぬこちす盜人の手なが點なり

左持　煎餅　月下梅照

見られしといかてゆだんは煎餅の

かたまきにする戀の玉章

右　青梅　桑名　由刈

たち物にしてはいのれど青うめを
このむ時節といつかならなん

左右こなたかたまき山こなた八百屋川チヤチヤ四つにくんだどちらも稽古のある角力さみへてつよさうだのひさりはせんべいやの番頭こちらは八百屋の亭主ださか此氷川の祭禮角力では關さりだよせんべいやは耳の出た男だの八百やもきくらげのやうな耳だぜアレ〳〵八百屋が靑梅の漬こんでくるぜ所なせんべいやがゆだんはしれへ見なさへふんごしもかたまきにしてゐやすサア〳〵大みだれ八百やが肩にかけやうとするせんべいやがめつたにひつくりかへすアリヤ〳〵〳〵〳〵東西双方くんでころびましたれば勝負はおつておめにかけます

左持　煎餅　尾州　水迺眞澄

羽衣のせんべいよりも得てしがな
天にあらばの起請一まい

右　梅　上州タカセ　豊秋住

うめの實のこぼれ情もあれよかし
なみだの雨の長ぶりのころ

左かの羽衣の舞ならで此歌に打見ほれて米澤町のよれんなき頃例の方人中ノ字を出していへらく天にあらばは明皇と貴妃のさゝめごとにて羽衣にはあづからずさ申されど神女のすみ所なればさり出られし難とせんはいはれぬ事なり一枚の文字もよくきゝて侍り右さみだれになろうれひとは紫式部が筆のあと梅にみのいるさつきやみとは左交が文句涙も升にてはかりつべし此つがひ方人の詞もつぶしがたければ持さす

左　煎餅　江都振

玉章のまきせんべいをうちつけて
粉にくだく身とおもひしらせん

右勝　ゆつ　桑名　音澄

くどく度胸はにゆれど柚味噌の
とつてもつかぬ君はうらめし

左マア先から見てあげませうカウト一体色事につけて短氣は損氣の噐爲風がお持まへぢやがしかし腹がたつみのぶちこわして見れば何のせんべいもない事ぢやからマア〳〵此節内場にしてゐさつしやろがようござらう右ハヽアおまへのもくどいても〳〵承知せぬ道理七ツ屋の離の卦にあたつてまがひ八丈の一向つかぬしろ物御疱瘡が重くてゆづのやうぢやとやすくふまれるかたちぢやが勿論むかふが中女の中どしまだけに心を攪交させて見ますれば朱唇のなめ物といふ縁もあるからわしが判斷ではゆづ味噌どのゝ方が出來たやうにおもはれまする

左勝　甘露糖　東風亭舍

打つけにあかさぬ中のかんろたう
心のたけをわつて見せたき

右　栗　糸織

文つけしへんじもなくていが栗の
われにしく〳〵なきあかせども

左右月の八日はかやば町大師まゐりや不動様縁日のうり物とのみなつかしかられど甘露糖の方たけありてみゆ

左　松風　江南梅村

種しあれば岩おこしやにまつ風も

うるてふものをこはぬつれなさ

右勝　椎　　塵　六

ふみ見なば落てよ筆もしひの實の
ひろひがきなる戀の山みち

左古今集の本まつりさして岩に松のだし一本ばかばやしの人を茶にしたるさま目にたつみ屋の親仁が撥音たかし〳〵右お師匠様のおつしやッた手習は坂に車ゆだんのならぬ娘の子はづかしひのみ三文の筆にみせたる戀の手ならひ一段と見事に候可爲勝

左勝　干菓子　　檜原亭操丸

あだ人に胸の干菓子の折もあらば
うらみのかずをならべたてばや

右　西瓜　　桑名積　業

人目をばそれと西瓜のあからさま
わつていはれぬわがむねのうち

左右こゝろのあつき土用見廻お心くばりのほどはひとしけれどおもしろいつけた干菓子宮いろけのあるだけかつべくや

左　あめ　　桑名南盃樓是好

くごきたる口はす飴となりぬらん
引のばしたる味ぞつれなき

右勝　眞桑瓜　　梅　房

人しれずうき名の種をまくばかり
今は附木の札つきとなる

左口のすあめ舌たるきこゝちす右の山瓜人の口歯にかゝるこそ名産のしるしなれ勝たるべし

左　胡麻胴亂　　賤　丸

魂はいつかぬけ出て菓子の名の
ごまどうらんとなりし身ぞうき

右勝　眞桑瓜　　上州吉井行　康

ならべたる枕のなりも眞くわ瓜
うまくなりたる中ぞうれしき

右にひ枕に帶といてほぞちを出したまくは瓜うまからぬかは左うかれたゞよふたましひの西のうへをさんだ趣向ごまどうらんとは番太郎菓子にや隣の瓜には歯がたゝぬべし

左持　煎餅　　升　成

幾度かまきせんべいよやる文も
十にひとつはかみわけてたべ

右　椎　　花筵亭檠樹

椎の實のはねつ逸(そら)れしくやしさに
今はたむねもこがしぬる哉

左右せなアかつてくれさッせへ〳〵「おんにすべいさッて市にさへ出るとにしヤアかひたがらアみされ推のみはげへにむしがくつてゐらアせんべいは鹽ッからいばッかりから砂糖とッちやアれへそんげへにくひたかアごうすべいかつてやらうコレ〳〵おんぢいどのこゝへしひのみのせんべいを三文づゝがくれさッせへ「せなアこりやどッちらがうめへ「べらぼうめおらアしられへてばアレ〳〵かつてやつたらむこくにはしりやアがる小僧ヤイまてヤイせんべいとしひのみをおさすなしつかりと兩手に持ッだぞ〳〵

左　饅頭　　仙ダイ明　益

音になきてまづ丑寅やまんぢうの
あんじすごして夜をふかしつゝ

右勝　椎　　花實亭常磐

うき涙はら〳〵おちてつひに目の
しひとなるみをひろひてよ妹

左かれは上野か淺草かそばやあんまの聲ばかり右近の司のとのゐまうしうし〳〵との泣おとし夜のながきをしろといへる古詩の詞もおもひやられつ右じたいわれらは都のうまれ色にそやされこんななりになられたとは安達原の袖萩よりもちつとあはれな俄めくら杖の方が勝なるべし

左持　みめより　花色絹糸

みめよりもうまき心のたけの皮つれなき人にあけてみせたき

右　梨　上州高サキ　周左堂本炭

梨たちて祈りし甲斐もありがたやはづれてうれしねやの戸がくし

左うちみよりは馬道の新製よく思ひよせられたり右下の句は神代紀のいはやごともおもひ出られぬともにひとしくや

左持　達摩糖　高サキ　松影法師

うき人はわれを達摩の菓子にしていく夜もひとりころがしておく

右　栃　山井壽女

ことの葉をかきやる文も山栃やとかくへんじのしぶきうき人

左怎麼買來達摩糖　乳母能止小兒啼　右おもひはいかで山づとの枝栃木なりにゆかぬこそ戀ならめ左右勝劣なし

左　豆　越後白根　みさを

青豆のあをくなりつゝくどけとも白いくろいの返事せぬ妹

右勝　干海苔　影住

干海苔の色なかはりそ二世かけて豆腐のつまと契りにし人

左氣をいるばかりくどくとははらきり勝負のまめ男はねられたるさまは聞えたり右いろといひかけてといひつまとさへつゞけられたる品川の海そこふかくもたくまれつるかなたれも雷門の臍をよりて侍れば龜屋が豆腐のあんにたがはず勝にては侍るべし

左勝　粥　麟馬

妹しるや見そめつるがの五位が事かゆだにくへぬ身とはなりぬと

右　椎茸　フクシマ　假堂似瓢

しひたけの強ても出來ぬ戀ぞうきたゞにきをのみくさらかしつゝ

左今はむかしいみじき色好みありけり女をこひそめて月ころになりにければいたくおとろへて物だにくはずなりにたりおもひわびて妹しるやとかいておくりけりそれは利仁將軍の五位をいざなひていも粥にあかせんとてつるがにゐておはしけるふることをおもひていへるなりけり此五文字あさましうおかしとてきく人ほころびて興に入りぬいみじきすきものは時にのぞみてはかゝるおかしきことをいひ出けりとなんかたりつたへたる右しひたけつくりよろしく聞ゆされど勝は鼻たかの五位をとこころえたりとすべくや

左勝　米　アハ　猿人

米よりもつく度ごとにへりのたつ鐘の數うききぬ〴〵の床

右　かち栗　尾州　葉丸

やはらかにくどけどとかく勝栗のかたきことばにはもたゝぬ君

左右にきく物からうすのおと男とふしたるにまだ何ごともかたらはぬに曉のかれのなりたるこゝろこはき女かちぐりくふ

口つき我歌をよしといはぬ判者のつらうちむかひなばしやつらはりゆがめんとさへぞおぼゆるされど猶くちびるひゞらかしつゝ左まされりなどいふありいとにくしともにくし

左持　米　　　濱　荻

見るよりも君に心をこめだはら
こめたるおもひますのかず〳〵

右　きくらけ　　　尾州眞　澄

なかだちに色よき返しきくらげの
たゞ耳たぶをひねりてぞまつ

左右あの水茶屋にやすんでゐるはたしかに見あひだ子「さやう〳〵あれはとほり町の米やのむすこよ見なさへ米だはらの口はむんでゐるけれどはらにおもひの升のかずたらうまたこちらのよめにならうといふはあれは乾物やの娘だはナそばにゐるはなかうどの景庵といふ醫者どのよかゝ樣がいゝ所へやらうとおもつてめつたに耳たぶをひねつてゐやすおまへあの聟と嫁とではどちらがよいとおもひなさる「さればのうなんだか鼠の嫁入の赤本のやうだからなかをとつて兩方ながらちうく〳〵と定めて置やせう

左勝　けし　　　仙臺明　岙

花ならば涙もろにもおちなんを
けし粒ほどのなさけだになし

右　豆腐　　　攝州池田寢　顔

袖をのみしぼり豆腐よやる文の
封もきらずにかへすつれなさ

左須彌山ばかりのおもひなばけしつぶほどもきかぬとは顔のはたけをいとふのかチヤけしかられへとの述懷けしきあり右戀をする身は濱邊の千鳥あとつけてやる水ぐきのかへりごとだになきをうらめる豆腐やの三ぶどのやはらかによくこしらへられたりされど左のけし坊主下總あたりで子をうんだるためしもありてめづらしければ勝べし

左勝　蕎麥　　　仙臺フ唐　麿

ことのはの花卷そばの嬉しさに
のりかゝりたる君が口さき

右　かふち　　　山カタ山門　盛

一筋にくどけど妹は麴うり
きではなこくゐる返事つれなき

左そばきりをくはせて和尙さていひとこ川柳点にぬきし通り勸化帳を出して本堂修覆の口びらきの折から左の檀方はのりかゝつてつけられた右にゐる麴やの亭主はいくら世話やきがくどいても味噌やにたふされたの米がたかいの妹が麴うりのやうだのせつないことばかりならべられるどうでも左の檀那が法の功德のよい施主と見えます

左持　米　　　越後白根六書園純筆

もらさじと深く心にこめつぶを
いかで俵のくちはしりけん

右　納豆　　　攝州岡山山　彥

なかだちに糸をひかせて納豆の
しるのみそかにあふぞうれしき

左うき名はもれて北濱の惣塲のくろふ人の口いつぱいがたのさがりなくひたゐえらひぞ〳〵とさやいはまし右なかだちの口のたゝきかげんすゝりなきするよはのむつごと匂ひわろからず左右おや椀に汁椀ひとつ膳におくべし

左 持　米　文麿

玉章は戀の重荷のこめだはら
たゞいたゞきにさゝげてぞ見る

右　千海苔　ギフ 歌笑

横雲のこきむらさきのその色は
君とわかれしあさ草ののり

左石山の觀音も辨のおもともひさからげにしつる昔のむかしもおもはる右あさといふ文字意あり左右御藏まへから雷門をかけて目をおごろかすさり〴〵の趣向よき持とはこれをや申べからむ

左 持　温飩　岡山 廣孝

暖簾のひまより見てし二八ほどの
君が落なはうどんげの花

右　納豆　尾州 寸法

室ほどに床あたゝめてねかせよと
妹がせなかをたゝき納豆

左うんどんをうどんげの秀句轉輪王の出世よりめづらし右らくるゐかんさんび舞まうてねぐらに入るさまおかし納豆賣もうどんゝのかつぎもさもに天秤棒の持にて侍りぬべし

左　米　員俊

忘られて意地きたなくもなま米を
かみやほとけををがみづきしつ

右 勝　麹　桑名 四半法師

君とふたりむろの麹のあたゝかに
はなつけあうてぬるぞうれしき

左二の句八里半を雪隠でくらふ長松がさまもおもひやらる右本郷の穴ばひりこれうどんげのはなとはなたかいもひくいもいろの道とは此事敷勝にたがはす

左 勝　麥飯　清澄

むぎめしの麥ほど我をきらひては
ゐますことなき戀病の顔

右　荒布

ひじき藻にかへて送らん語りあふ
をりもあらめを文にそへつゝ

右錢の出ぬ物を戀人におくることはひがことの伊勢物語煤はきの中へ御師の來たこちす左麥飯はすく人もある中にひたすらのきらひとは蟲のせいでもあらうか道理でわらうて損したやうな顔つきなりされど四の句のあんばい進上のあらめにまさるこそさほし

左 勝　米　尾州 中雄

身にあまる戀の重荷は五斗米の
こしをりてまづくどくわりなき

右　かち栗　清澄

くどかなん我歯にあはぬかち栗の
しわのよりたる婆々をたのみて

左およれさんこれだ〳〵とうつぶしに腰ををるは郷里小兒のためにはあらで膝下の小僧がためなるべし初五文字のみにあまるなど米の縁にてあぢはひあり右かち栗に似たる嫗ならばつらのしわはもさよりにてこやつ黄疸をやみてゐるなるべし無絃の琴をひくべきにこそ

左 持　荏　フクシマ 御空

油荏もおもひの種となりにけり
しめて寢ぬべきよはぞまたるゝ

右　油揚　クリハシ 玉清丸

油あげに口すべりなばいかにせん
いはぬ色にとかねてしのべど

左右の作意いづれも油じたて如才はなにはのひがしぼりきいてきもんのかどある趣向一門なかの山の宿のまそつこさきの聖天のにごりならんことをおもへるこころはともにかはらばし油一升こぼしたを太郎どのゝ犬と次郎どのゝ犬とみなめて同位なり

左 持 米　家風

兎や角とする間によはもふけ米のくだけてものもいはぬつれなさ

右 味噌　白川泉和久成

つゝめどもいろに出ぬる赤味噌の四方にうき名のたつぞくるしき

左此くだけては重之朝臣のくだけて物をさよみたるにはあらで由良之助がいはゆるかたみをやめてくだけたれのくだけなるべし右赤味噌のまめかほをつくれどはやく秤のめにかゝりてせんかたなみだのいづみ町左の伊勢町にくらぶれば古券の高ひさしさ巾さん

左 そは　山カタ枝折

うまみある妹がことばは新そばのきれぬといふも三寸の舌

右 勝 豆腐　桑名馬伎

口の外つかはれぞするうき戀の奴豆腐となりし身なれば

左蕎麦は仁明の御時勅して諸國に植させたまふ「右」豆腐は淮南鴻烈解ゐざけのかんの代よりはじまる「左」はじめをいへば新そばのきつてきられぬ一ッ家のはしてもくはれ子へゐなか豆腐のかたいぢに「右」いさこにならば燒どうふにてもやい虎と見て石やきごうふ小弓に小矢「左」そこがやッぱり正直そばいつゝや三つの二八そばたゞきでくつてゐやいのう「右」いいやからみをみせてゆ豆腐のはら八はいもつき出しごうふたゞ一つかみにつかみごうふ「左」コレぶれいはやめにしなのなるれどめにだにもわすれぬはおやの御おんの山かけそばたむけにたをる花まきもみのりのためのねぶつそば「右」木魚のおさのなんぜんじなむあみ豆腐のしやうじんぐち「左」もうよいかげんに翁そば「右」つい筆耕も小半丁むだにせりふののび過た「左」そばと「右」豆腐の「左」たいめんさ「左右」ホヽうやまつて申ス「見物」五郎は新車がこゝだかへもんの紅葉あたりあたり

左 飯　アハ米露庵咲穗

日に三たび戀こがれたる米のめしあはで命のつゞくものかは

右 勝 梅漬　蓬山

梅づけの色よきへんじきかせよと口のすくなるほどにくどきつ

左上の句は此世ながらの餓鬼の苦患かた岡山の飯にうゑてふしたるおこゝろおばれ宿なしさやいふべからん右口さきのまめ男咽から血の出るほどしやべりしは梅づけのすき人ならし左の空腹にくらぶればゆたかにきこゆ

左 勝 米　アハ拔足

六祖にはあらねど心さされとておもひをこめのふみもおくりつ

右 木耳　桑名窑諦

くどけ共聞いれもせずきくらげの返事もはぎれせざるわびしさ

左かはゆがつたり〳〵と身はからうすのやるせなく長座不臥の戀のやまひさされとおくりおこせたる以心傳心の文一本たふとげなり右きくらげの返事とはつゞけがらうまからぬこゝちす鼓舂大師こしつよくや

左勝　米　員俊

床しさの体む期なきは子路が負ふ
米より戀の重荷なりけり

右　納豆　フクシマ香和義

納豆の糸の手づるのきれはてゝ
君が起請もいまはねせもの

左いもと茵(しとね)を累(かさね)て坐しいもと鼎を列(つらね)て食はんことをねがへども豈可レ得乎(ンヤ)のなげきあはれなり右誓文の起請にさへ納豆のくさみがつきしとの述懐さることとながら左の色事に孝行なる人には勝べからず

左　粟　桑名藤原長房

穀物のあはでおもひのますをもて
すこしは君よおしはかれかし

右勝　梅漬　千枝成

梅づけのおしつゝめども色に出ん
しやくのたねなる妹があいさつ

左穀物とはかたくやらかされたり右癪のたねならば此女の名はおぬひとやいふべからん梅漬のあから顔人にすかるゝ方なるべし

左　けし　上州七日市庫人

あふよはゝ閨のあかりもけし粒の
ちひさなこゝろではなすうれしさ

右勝　納豆　栃木玉成

世の人やしるとおもへば納豆の
たゝきもされぬ妹がねやの戸

左はひそ〳〵右はほと〳〵いづれも耳に聞へて侍れどしろとおもへばと申されしだけが納豆のかたこまかなれば勝にや

左勝　小麥　水垣

くる〳〵と臼の目さへもあはて待
よはゝ小麥のふすまだになし

右　豆腐　盛砂

戀に身をくづしどうふよ聞いれぬ
いもが耳にもつかみつかばや

左ひとり胸のみやきなべにこがれ〳〵てゐる顔はよもみめよりの看板のやうにはあらじかし右耳につかみつかんとするは座頭どし喧嘩のやうなりさるは戀に目のない故なるべし此つがひわづかに豆腐の耳ばかり右の方のひけならんか

右　米　數寄成

臼ほどにころりとさせて又うそを
ついてこぬかとおもふくろごめ

右勝　菜漬　仙臺千歌林山路

君が目のしほを頼みにつけそめん
菜漬のおしのつよき千話文

左右むかうの人々菜づけを十二文がくんなんしチヤ〳〵此つきやごんはわるくしやれる人だよなんだへこぬか〳〵とそんなふろい事はしりイせんこつちはおいらんのいゝとおつせへしたなづけがだいじでありますヨウ

左　米　抜(ハア)足

うき人におもひをふかく米の字の
八十八たびほどおくるたまづさ

右勝　山椒　朝風

からうじてあふ夜につらし山椒の
朝くらきからなくとりのこゑ

左戀する人の胸よりも文づかひ足こそいたむべけれ右からうしての五文字ピリピリとひゞきて侍り米粒にくらぶれば山椒少々粒大きく見ゆ

左　豆　　賀計女

やる文はまめでもどれど戀やみの
いろさへ靑くやせてくるしき

右勝　きくらげ　　アハ抜　足

ついもれて人きくらげと忍ぶ身は
朽木にはえし耳もおそろし

左は靑くてくるしく右はくろくておそろしその中木耳の文字をさへとり出られたる耳にきゝたちて侍れば忍ぶ戀を果報耳とさだめて侍り

左　稻　　桑名三重河近

こがるれど君には秋のいろみえて
つゝめど稻のほに出にけり

右勝　味噌　　平道義

手を換ていつぞはくどき落し味噌
露ほどにごるへんじだにせば

左は百姓右は料理茶屋もしは王子のえび屋扇屋かさらずばむかう嶋のむさしやか大黒やならん秋作のとりいれよりは庖丁のかた錢になるやうすなり

左勝　蕎麥　　仙府唐　麿

廿日そばみそかに出てあはゞやと
たゞうちかたのよき首尾をまつ

右　茶漬　　桑名音　澄

口さきはさつぱりしても茶漬はご
歯にはさまりしあいさつぞうき

左年季やらうが風鈴をよぶやうなりとは例のわろ口なればとらず内方と申されしは宮づかへ人などの戀にや右此作者わかき人としらる判者がごとく老さらぼひては飯も粥も歯にはさまりて侍ればなづけにのみは限らぬやうに覺て侍り隣のくゞりの買ぐらひ口つきまされるにや

左　そば　　呑　吉

温かく此身に夜着をぶつかけの
そばをはなれぬねやぞうれしき

右勝　燒鹽　　上州タカセ秋　住

妹が肌のしら粥もがな胸の火に
やきしほほどに癪のかたまり

左やくみきやうばく御見舞イヤアだいぶひッかぶつてござるのナニ風ひいた故二八をくつて汗をとるとる上策でござるしかし十六文で風を直されては愚老なども醫者をやめてそばやのかつぎにでもならねばならぬてさて右の御病人まづ〳〵お脈をフゥなるほど癪がやきしほほどござる粥をくひたがらしやるがこれには赤飯の方がよくござるやき鹽ほどの癪では粥もくへぬはずぢやまだ〳〵此しやくが土瓶ほどになるとさゆも茶ものめぬぢやてしかしそばくひどのゝかるはづみよりはおもいやうでも貴公のしやくは見所がござるよし〳〵

左　米　　雲州多餘理

外心出來しか鼻につき米の
こちへはきねのおとづれぞなき

右勝　豆腐　　尾州彰　住

うき人に豆腐のからとすてられて
もとのまめにはならぬ戀病

左鼻につき米とは鼠米のくさきをいへるにやごほ〳〵とひゞくから臼の夜床にちかく聞へざるはひとり寝の枕にはもつけのさいはひならんか右まめにしづみし戀の淵あなうの花のお屋敷詞をひきてしぼりて作られし淮南王のあんじたるさま戀の山屋の名物にて南禪寺のなんずべき所なし祇園に名あるおかち〳〵

左持　小米　柳馬

打付に身もふるはせてくごくなり
こゞめの數のおもひあまりて

右　豆腐　猿人

しのぶ身に豆ひく臼に目もありて
おかべに耳のあるもうたてし

左土藏の倭のむれにつみし癪をばいかにせんごくごほしいまは思案につき米やが足のふみども覺へぬとは箕といふ文字の秀句にてしられぬ扨右隣の豆腐やの娘間持の手のあるのみかひき臼の臺の足もありてへッつひの口をたゝきて大釜の尻やこんとあんじたるさまおかし此二軒ひとつ地主ならんか

左勝　蕎麥　千澄

甘みある妹が生そばをつながばや
みじかくきれんことをいとへば

右　玉味噌　桑名四半法師

おもひきやかへりし文を玉みその
まろめてこゝにかちつけんとは

左右木曾の產たる中に玉みそはまろめたばかりにてとり所なしねざめ少々うちかたに心を用ひたるやうなれば勝べし

左持　そば　獨笑園沸々丸

別れての後のあしたのねざめにも
そばははなれぬ妹がおもかげ

右　酢　盛砂

きかぬふりするかわざ〳〵北風の
すもどりさせてあはぬつれなさ

左二八の新そば一口喰てわすられぬこゝろ名產のかほり詞のつなぎにしられて侍り右北風のふけば酢の水になることもあるか物類相感志にも見たことなければ不審しつるに北風は酢桶のしるしなりと隣の徵生高がいふにて初めてしりぬ持にて侍るべし

左持　米　道義

よな〳〵にかこつを人はしらげ米
たはらころげのひとりねぞうき

右　ほしわかめ　和琢舍綾丸

色のよき返事をきかぬほしわかめ
灰にまぶすなおのが面目

左悠哉々々輾轉反側白米一升升コト二百とはひとりもの小買をいふなるべし右下の句はけんどんぢゝいの赤本にや此一番上下なし

左勝　小豆　部內元住

小豆より猶大つぶななみだにも
あかきこゝろのほどはしれかし

右　三しまのり　六法園穴住

打たえてあはねど夢にみしまのり
さらにはなれぬ君がおもかげ

左下和以來の血のなみだ一つぶえりのよみ歌遍昭も肝をつぶしつべし右さらにはなれぬの秀句庖丁のてぎは見へて侍りき

れど勝負はほろり〳〵とおなきやろ方あはれなれば勝べし

左持　米　升成

くるしくも人の口はにつき米はいつからたちしうき名なるらん

右　冷麥　高サキ　壽女

ひやむぎの長かれとさへ契れるをなどやつめたくうつてかはりし

左右つき米やは起る事はやくけんどんやは寢る事おそしかつざ家にゐる事なく米ふみ外へ出ることなしされど足をつかふことはともにひとしければ此つがひ五十歩百歩とさだめてよき持とや申すべからむ

左勝　豆　高サキ　茂葉

ちかひてし君と連理の枝豆は味噌になりてもかはらじと思ふ

右　からし漬　尾州ツシマ　多田常人

かきくどく涙にころもからしづけきくのはうれしきかぬのはうし

左長生殿のふるきためしはゆゝしくてはれなかはさんとはひきかへて味噌桶の香をぞかぎたまふゆびさきの御ひとなめいさみそごし右こゝろは聞へ侍り但七ツ半過の絹の羽をりを出してつくまいけれど一分かして下さへと伊勢治の番頭をせびるもかくやあらん左の枝豆實いりよければ勝べし

左　米　甲府　多理雄

うき人の米つぶほどもなびきなばいのちつなぎとなりぬべきかな

右勝　納豆　上州ヨコテ　末廣

わが中をうさん臭いのなめたのと世の人口をたゝきなつとう

「右」ひきずりかゝアのべらぼうかゝアへろすになるどうさんくさい身ぶりばかりしやアがらア腎虚やみのねりやくのやうになめ過た女めだ出てうしやアがれ〳〵「左」米つぶほども情のないやらうだこんな内で命がつながれるものかへこつちから出てゆくはへ「大屋」コレ〳〵どうした物だな貴樣たちが中がわるいから鍋やすりばちまでわれ〳〵になつてゐるはナマアヽ〳〵しづまらッせへこれがみさま御ていしゆもぞんざいに口をたゝく人だがぬしやア女のことだうさんだのなめたのといふともやッぱりいはせておくがいゝぬしのいゝ事は大屋が承知だらッとばかりまけてゐなさへよしか承知かだまつてゐるから承知と見へたヤレ〳〵咽がいたくならア大屋と判者にはなるめへものだ

左勝　心太　甲州鹽郡　千代友鶴

懸られてからしと思ふかけがねを心ふとくもはづしてぞまつ

右　蒟蒻　上州沼田　猩梅亭霞也

こんにやくの鹽梅よしと云よれどぷり〳〵されて味噌をつけたり

左上の句おかし四の句は職人盡歌合の心太賣におもひよりぬる心ふとさよとあれは今は二杯めなり右拾遺集の物名よりとり出られし歟但五ッ雁金の紺屋の幕よりおもひよられしか結句はおなじなかまのつらをよごすと申歌はやくより聞なれて侍れば味噌はあぐべからず隣のかけがねよくかゝりたれば勝べし

左　罌粟　　美織綾廣

けし程も覺えなき名をとうつむくに
なみだも花のもろきふりそで

右　勝　豆腐　　桑名　倉　積

あた戀の奴豆腐と身をなせど
歯ごたへのなき君のあいさつ

左右コレけしのかてめへはけしからねへものだおれも三十餘年判人をするがまだみせへも出ねへ内から大きくして判人をよびつけさせるさいふことがあるものか相手はだれだいへ〳〵ナニ相手は奴だ名があらう名をいへヱヽはごたへのねへ女だイヤやりて衆内證へさう申してくんなせへけしのがは涙さはなさを一時にたらしてうつむいてばかりゐやすどうでも右の奴にしめられたそうだよ

左　持　米　　枡　芳

こぬ人をまてば目さきにつく米の
しらむもうしやしのゝめのそら

右　味噌　　文毛舍高根

しのびたる文を袖よりおとし味噌
それからにゆるむねのくるしさ

左右米屋に味噌屋談藻のかきだしをよむさまづ贈がつぶれましたどちらへもおこさわり申すいづれも勝負は松すぎ〳〵

左　持　そば　　裏　行

足とあしからみかけつゝ新そばの
つなぎのいもとぬるぞうれしき

右　三しまのり　　下毛氏家　文　車

中々にあだなるいろをみしま海苔
など酢のものゝ相手にはせぬ

左ふさんふらわりぶつかけそばかたみに汗をしぼりしる命さもいふべくや右のぞきからくりの道具にのみつかはれて口のはたへもよせられぬをうらみたるにや左右ねざめにみしま木曾さ東海道との差別あれど名物に高下なからんか

左　黍　　藏　人

團子にもまろめてなりと送らなん
日本一のきみにやる文

右　勝　納豆　　甲府　多理雄

折よくは太鼓をたゝき納豆の
にほはせてよとたのむなかだち

左返された文ならばまろめもすべしおくる文をまろめて見ることは手まはしにすぎたり右太鼓をたゝくと申詞金陵六院の市語にて庶幾せざれど桃太郎よりは當世だけが勝なり

左　勝　米　　郡内　壽眞久

米ならで急ぎつくよのことのはは
人のこぬかもふるひごゝろしつ

右　梅はし　　イカホ　久　澄

君にのみ心をつけてその梅の
しわのよる〳〵かよふうれしさ

いづれも說法聽聞さて御參詣御きごくでござる殊に御飾米御施入回向いたすでござらうイヤ米と申せば因果の道理はのがれぬ物此頃ある米やの男がふさ戀慕の心おこり女のもとへ參つた所が人はみぬかへつたさ申す米やなれば常にふるひをつかふそのふるひの因緣にてぶろ〳〵ぶろ〳〵さふるへてござる寺の碓をもちゆき米をついたるもの米つき虫となるさ釋迦如來のお說なされたこわいろをつかへば鶍鵡となり屁をひればへひり虫となる

されば布施が第一の功德でござる畜生一闡提に施しても百千倍の報ありまして持戒の出家に施す時は万倍無量の報を得るとお說なされた今日の佛餉袋のくどく天厨おのつから至り五福德を得て壽命長遠なる事釋迦如來が證人でござれば身の皮を剝でもきしんをなされ右にござる梅ぼしのしわくちや老人たち寺へかよふがうれしいなどゝ申さるれど袋も持參めされぬは說法塲のでんぼうと申すものぢやふろへ聲でも念佛してくわんけのひしやくにいそぎつくが殊勝と申すものぢやなむあみだ佛〳〵

左勝　黑豆　攝州原田　深寢父

戀人の腹黑豆はわがむねを
やくどく消すといふよしもなし

右　梅漬　花長女

梅づけのおしかくせとも戀病の
いろに出たることぞくるしき

右の梅づけお茶づけのさら〳〵とはすれごあるべがゝりでくひたらぬこゝちす左の黑豆湯やくどくの句讀むづかしけれどのみこむ人もあるべし少々まさるべくや

左　小米　白川雄　風

から臼のふみつけんとて小米ほど
くだくこゝろを妹はしれかし

右勝　みつから　家　風

やる文は昆布なみだはつぶ山椒
いまはみづからくどきてや見ん

左上白のいろむすめにつき米屋が足なつけんとて糠に釘となげくなるべし右かのこんくわいの狂言ならで昆布は山椒茶ばかりと茶にする人にげざんせんとかみづからの文字よくはたらきたり勝と申さん歟

左　豆　上州萩ハラ　槌　丸

やる文のまめで戻りしくやしさに
いまはころつく戀病のとこ

右勝　燒鹽　ギフ　兀多羅駄鹿

あふ事のたえて胸のみやきしほの
つぼをかぶりし中となりにき

左氣をいり豆のほうろくのあつしきにわびたるさまよろし右やきしほのからきめを見てゐらいつぼとはなには女の戀にやいさゝかまさりげなり

左持　粟　初　風

あはで唯うそをつきやのから臼の
文だにも見ぬ妹はうらめし

右　淺漬　万陀伎

おくびにも出さしとすれど後朝の
あさ漬匂ふそでのうつり香

左つきやのから臼に粟をつくことは江戸にては見なれ侍らず右下の句はきんざんじ賣が湯へはひるやうなり持とすべくや

左　米　桑名　千伎丸

あけ告る鳥にむねをつき米の
うすめにしらむきぬ〳〵のそら

右勝　玉味噌　風流雪

玉みそのたまにいらへも無はわが
文をまろめてたなにおきけん

左夕顔の卷の道具だてよろししらむなどつき米の緣あり但うすめと申されしはあけぐれのくらやみまぎれにはひき臼ととりちがへもすべくや右木曾の山賤鐵炮の玉みそくゝりつけんのくまのゐのおしうりにが〳〵しき戀なるべし左うすめのめ文字めざはりなれば此一俵玉みそのした

に置つべし

左　洗米　尾州 弘器

かはらけの變らじと祈る神の供御
せんまいばかりかよはする文

右勝　みしまのり　梅村

三しまのりませし鱠のなま中に
けしきばかりのいろはたのまし

左かけまくもかしこき一万度の御はらひの御まへに德利に十二銅の酒をたゝへ土器にあらひよれたてまつりてあらひよれのつくさいふこさなく德利の酒のかはらざるごさく女夫のものゝゆく末をまもりたまへさきはへたまへさおそれみおそれみて申す右うはきで文をおくり膳の汁もおひらもつめたい心さおしはかりてたやすく口をあかさぬなるべし此献立むづかしげなければお坪のかちぐりさだむべし

左持　米　清澄

はした女のおこせし文も憎からず
米をかしくの水ぐきのあさ

右　味噌　桑名 枡金鶴

仲立のいかにかすらん味氣なや
なみだばかりをふくさみそにて

一此文さ申女生國は相摸國鵠張村助兵衛娘にてさそふ水あらば田舍者の所存髄ならず候へ共米をかしくの水仕奉公に出し候所實正也當亥時より明ル卯時迄夜這の數は何人にても請人人主不相構衹をはづしてれんき奉公御家の御作法には少々そむき候宗旨は代々放蕩宗寺は隨德寺地中しりくらい觀音院旦那に紛無之候　此あさはよむにおよばずサアサア判をさつしやれ時にあぢきなやの御亭主貴樣さ文さは兄弟だのならんでゐる所がたれに見せてもひさつはたけだ

左持　そば　郡内 元住

我にちさあきかきそばや切たがる
いもがこゝろをいかにつながん

右　醬油　東西南北

生醬油の割なく祈るしるしあらば
露ばかりきけ戀の山十

道行露の生醬參

御いたはしやそば御前木會のなんじよをふみわけて山路に秋の新そばさ名にたてられて麪棒を杖に手うちのだい所儀を出てゝ小袋にみをみそめつゝひきぬきの臼のひく手にまねかれて粉にはたかれつふろばれつこれられつしてやう〳〵さのしいたさして オクリ「ゆくさく、さむらがる人をおしわけていでやうたんさ玉だすきまへだれりゝしく出たちしは此屋にいつもゐさふらふ藝なし猿も庚申の客をもてなす料理人つなぎはいれずさいふまゝに庖丁さつてチョキ〳〵〳〵見ごさにうつてなべの中ざつぶりいはすさうくわつちごくたさるゆ玉はぐわら〳〵〳〵かきまはす箸すくふ笊おそろしなごも 三重「おろかなり 合 これもおもひは山十の擂にゆられてそこはかさみりんかつをの中〳〵に露さいふ字に名をかへてうき世のさがをしろつぎの口から出て見あはすかほヤアそなたはそば御ぜん山十さまかさこりついてわつさばかりになくなみだ水をきるさてあげ笊をふりまはしたるごさくなりよそに上手のあざれ歎 三下リ「戀の山中つゆばかりなさけかけよさいのれごも秋がきそばやされたがるほんにへうたふこゑご

ゑいづれともにやんやと客人のほめつゝ
あきし大口ののどの穴こそわれ〱がつ
ひのすみかとうちつれてぞろ〱として
入りにけり

勝左　米　　梅　村

新米のうまいなかての出來しこて
よそに惣場のたつ名はづかし

右　青海苔　（ミノ カナフ）右　蝶

にひ暦見そめし日より戀病の
顏にもそへしいろの靑のり

左口から年貢の出ればとてこめ倉のかべ
にさへおよれ八十八と書てある是もやッ
ぱりやき米のすぢか右御師のくる頃の戀
のわづらひ餠につくとは是なるべし豊作
の方めでたしと申さんか

持左　粥　（高サ キ）本　炭

なかだちもなき戀病の力とも
なれるは米のかゆばかりなり

右　澤庵漬　　歌筵亭繁樹

うたがひはおけやおけなる澤庵の
年をこえてもなどかはるべき

左右十五日のもち粥のぜんだていはうて
勝負のあらそひなく柳の杖をもちとして
此草子のしりのあたりうちもせいシャン
シャンもひとつせいシャン〱めでた
めでたし

新群書類從第十終

明治四十一年九月十日印刷
明治四十一年九月十五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
編輯兼發行者　國書刊行會代表者　市島謙吉

東京市神田區蠟燭町八番地
印刷者　武木信賢

東京市神田區三河町三丁目四番地
印刷所　武木印刷所

大、十四、二

書代香樓

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02977 5186